



# 大阪府神社名鑑



大阪府神道青年会 創立七十周年実行委員会

# 凡例

一、掲載されている神社は大阪府に御鎮座している神社本庁包括下神社のみです。

一、神社の掲載順は、大阪府北部から南部の順です。

一、本文の掲載事項は、社頭写真、社名、鎮座地（連絡先等）、御祭神、御神徳、例祭日、御朱印、神社のおすすめ、由緒です。

一、本文中の由緒は各社提出資料の原稿を尊重する意味より、全般の文章統一は行われていません。

一、本文の掲載事項は、令和三年五月時点のものです。



# 目次

素 淺 鳴 尊 神 社 : : : 33	止 々 呂 美 神 社 : : : 32	龍 王 神 社 : : : 31	八 幡 太 神 社 : : : 30	春 日 神 社 (小野原西) : : : 29	八 幡 大 神 宮 : : : 28	天 兒 屋 根 命 神 社 : : : 27	阿 比 太 神 社 : : : 26	為 那 都 比 古 神 社 : : : 25	箕 面 市 : : : 24	住 吉 神 社 (服部南町) : : : 23	住 吉 神 社 (若竹町) : : : 22	天 神 社 : : : 21	春 日 神 社 : : : 20	八 坂 神 社 : : : 19	棕 橋 總 神 社 : : : 18	稻 荷 神 社 : : : 17	庄 内 神 社 : : : 16	服 部 天 神 宮 : : : 15	豐 中 市 : : : 14	大 阪 府 : : : 13	池 田 市 : : : 36	吳 服 神 社 : : : 37	住 吉 神 社 : : : 38	八 坂 神 社 : : : 39	天 滿 神 宮 : : : 40	十 二 神 社 : : : 41	豐 能 郡 能 勢 町 : : : 42	野 間 神 社 : : : 43	岐 尼 神 社 : : : 44	山 辺 神 社 : : : 45	倉 垣 天 滿 神 宮 : : : 46	歌 垣 神 社 : : : 47	久 佐 々 神 社 : : : 48	原 林 神 社 : : : 49	高 皇 產 靈 神 社 : : : 50	豐 能 郡 豐 能 町 : : : 51	走 落 神 社 : : : 52	八 幡 神 社 : : : 53	太 歲 神 社 : : : 54	大 歲 神 社 : : : 55	吹 田 市 : : : 56	伊 射 奈 岐 神 社 (山田東) : : : 57	泉 殿 宮 : : : 58	春 日 神 社 : : : 59	素 盞 鳴 尊 神 社 : : : 60	素 盞 烏 尊 神 社 : : : 61	稻 荷 神 社 : : : 62	伊 射 奈 岐 神 社 (佐井寺) : : : 63	愛 宕 神 社 (佐井寺) : : : 64	愛 宕 神 社 (出口町) : : : 65	春 日 神 社 : : : 66	茨 木 市 : : : 67	茨 木 神 社 : : : 68	磯 良 神 社 : : : 69	井 於 神 社 : : : 70	郡 神 社 : : : 71	春 日 神 社 (庄) : : : 72	皇 大 神 宮 : : : 73	佐 奈 部 神 社 : : : 74	天 滿 神 宮 (田中町) : : : 75	春 日 神 社 (春日) : : : 76	春 日 神 宮 : : : 77	春 日 神 社 (中穂積) : : : 78	春 日 神 社 (下穂積) : : : 79	春 日 神 社 (豊川) : : : 80	春 日 神 社 (西穂積町) : : : 81	佐 和 良 義 神 社 (山田東) : : : 82	須 賀 神 社 : : : 83
---	---	---------------------------------------	--	---	--	--	--	--	----------------------------------	---	--	----------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--	---------------------------------------	---------------------------------------	--	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---	---------------------------------------	--	---------------------------------------	---	---	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------	--	----------------------------------	---------------------------------------	---	---	---------------------------------------	--	--	--	---------------------------------------	----------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------	--	---------------------------------------	--	--	---	---------------------------------------	--	--	---	---	--	---------------------------------------

八	女	藤	八	八	新	道	道	天	天	諏	諏	素	素	素	素	須	皇	春	大	飯	牟	八	新	太
阪	九	代	幡	幡	屋	祖	祖			訪	訪	盞	盞	盞	盞	久	大	日	歳	原	礼	幡	屋	田
神	神	神	大	神	座	神	神	満	満	神	神	尊	尊	尊	尊	神	神	神	神	神	神	天	神	
社	社	社	宮	社	天	社	社	宮	宮	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	宮	社	
(東	:	:	:	(大	:	(高	(豊	(大	(大	(大	(大	(大	(大	(大	:	:	(清	:	:	:	:	:	:	:
太	:	:	:	字	:	浜	川	字	字	字	字	字	字	字	:	水	:	:	:	:	:	:	:	
田	:	:	:	大	:	町	)	千	上	生	生	泉	泉	泉	:	)	:	:	:	:	:	:	:	
)	:	:	:	岩	:	)		提	音	保	原	原	原	原	:		:	:	:	:	:	:	:	
				)				寺	羽	)	)	)	)	)										
108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84

筑	春	檜	稻	稻	藤	素	八	八	素	鬪	諏	素	春	高	須	味	藤	撰	素	猿	稻	稻	八	八
紫	日	船	荷	荷	井	盞	幡	幡	盞	鷄	訪	盞	日	槻	佐	舌	森	津	盞	田	荷	荷	所	阪
津	神	神	神	神	神	尊	大	大	鳴	野	神	鳴	神	市	之	天	神	市	鳴	彦	神	神	神	神
神	社	社	社	社	社	神	神	神	神	神	神	神	神	社	男	滿	宮	社	尊	神	社	社	社	社
社	:	:	:	:	:	社	宮	宮	社	社	社	社	社	:	:	:	:	:	社	社	社	社	社	社
:	(大	:	(大	(津	:	(桜	(塚	(上	:	:	:	(中	(桜	:	:	:	:	:	(稻	:	(粟	(大	:	(宿
:	字	:	字	之	:	ヶ	原	土	:	:	:	川	ヶ	:	:	:	:	葉	:	生	字	:	久	
:	小	:	小	江	:	丘	)	室	:	:	:	町	丘	:	:	:	町	町	:	岩	水	:	庄	
:	学	:	学	町	:	南		)	:	:	:	南	南	:	:	:	)	:	阪	尾	:	)	)	
:	谷	:	城	)	:	町			:	:	:	町	町	:	:	:		:	)	)	:	:	:	
133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109

山	御	八	二	加	春	巖	山	日	菅	御	交	村	菅	春	春	三	蹉	春	意	片	枚	水	三	八
田	狩	幡	ノ	茂	日	島	田	置	原	殿	野	野	原	日	日	之	陀	日	賀	楚	方	無	島	幡
神	野	神	宮	健	神	神	神	天	神	山	天	神	神	神	神	宮	神	美	神	市	瀨	郡	大	
社	神	社	神	豆	社	社	社	神	社	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	宮	本	神	
社	:	:	:	美	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:
(田	:	:	:	命	(野	(山	:	:	(藤	:	:	:	(長	(茄	(春	:	:	(津	:	:	:	:	:	(芝
口	:	:	:	社	村	之	:	:	阪	:	:	:	尾	子	日	:	:	田	:	:	:	:	生	
)	:	:	:	)	南	上	:	:	天	:	:	宮	作	元	:	:	元	:	:	:	:	:	)	
	:	:	:	町	町	)	:	:	神	:	:	前	町	町	:	:	町	:	:	:	:	:		
	:	:	:	)	)		:	:	町	:	:	)	)	)	:	:	)	:	:	:	:	:		
158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135	134

國	四	四	四	高	國	河	打	熱	八	鞆	菅	大	鶯	氏	高	神	八	大	友	住	寢	杉	若	甲
中	條	條	條	宮	守	北	上	田	幡	呂	原	杜	関		柳	田	坂	利	呂	吉	屋	ヶ	宮	銚
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	宮	社	社	社	社	社	社	社	社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159

守	兩	菅	靄	諸	大	大	菅	北	菅	大	若	住	菅	川	郡	天	星	磐	機	住	交	忍	住	住
口	皇	原	神	福	神	神	原	野	原	東	宮	吉	原	東	津	田	田	船	物	吉	野	陵	吉	吉
市	大	神	滿	天	神	神	神	神	神	市	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	市	神	神	神
社	社	社	社	宮	社	社	社	社	社		社	社	社	社	社	社	社	社	社	社		社	社	社
：	：	（深野北）	：	：	（太子田）	（新田東本町）	（御領）	：	（三箇）	：	：	（寺）	：	：	：	：	：	：	：	（私部）	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184

都	櫻	大	大	堤	菅	産	産	八	天	島	三	堤	門	門	大	八	八	白	高	産	天	津	佐	守
島	都	阪	阪	根	原	土	土	坂		頭	島	根	真	真	枝	坂	雲	山	瀬	須	乃	嶋	太	居
神	区	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神
社	宮	社	社	社	社	社	社	社	社	宮	社	社	社		社	社	社	社	社	社	社	社	宮	社
：	：	：	：	（ひえ島町）	：	（大字岸和田）	（城垣町）	：	：	：	：	（宮野町）	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209

菅原天満宮	大隅神社	大東淀川区	古宮神社	大宮神社	八幡宮	八幡宮	比枝神社	阿遅速雄神社	鶴見神社	大阪市鶴見区	稲荷神社	若宮八幡大神	諏訪神社	須佐之男尊神社	野江水神社	白山神社	皇大神	八劍神社	大阪市城東区	日吉神社	八幡大神	大宮神社	大阪市旭区	
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	
258	257	256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	234

香具波志神社	神津神社	大阪市淀川区	春日神	八坂神社	福島天満宮	恵美須神社	大阪市福島区	南長柄八幡宮	天神	素盞烏尊神社	八阪神社	富島神社	長柄八幡宮	綱敷天神社	豊崎神社	露天神	堀川神	大阪天満宮	大阪市北区	中島惣社	柴島神社	春日神社	松山神社	
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	
283	282	281	280	279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259

八王子神社	熊野大神	大阪市東成区	土佐稻荷神社	茨住吉神社	大阪市西区	鵜森宮	御津宮	豊國神社	玉造稻荷神社	少彦名神社	高津宮	坐摩神社	大阪市中央区	住吉神社	五社神社	鼻川神社	住吉神社	住吉神社	姫嶋神社	田蓑神社	住吉神社	大阪市西淀川区	塚本神社	蒲田神社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	（百島）	：	：	（福町）	（大和田）	：	：	（野里）	：	：	：
308	307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284

清見原神社	大阪市生野区	安井神社	東高津宮	河堀稻生神社	大江神社	久保神社	生國魂神社	大阪市天王寺区	西九條神社	濤標住吉神社	鴉日神明宮	朝日神社	住吉神社	産土神社	大阪市此花区	住吉神社	住吉神社	天満宮	三津神社	三社	大阪市港区	深江稻荷神社	中道八阪神社	比賣許曾神社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309

杭全神社	大阪市平野区	阿部野神社	阿倍王子神社	大阪市阿倍野区	産土神社	天満宮	八坂神社	八尾神社	泉尾神社	大阪市大正区	津守神社	天満宮	生根神社	大阪市西成区	廣田神社	敷津松之宮	難波八阪神社	今宮戎神社	大阪市浪速区	生野八坂神社	生野神社	田島神社	御幸森天神宮	巽神社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
358	357	356	355	354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334

高崎神社	大阪護國神社	大阪市住之江区	保利神社	神須牟地神社	止呂支比賣命神社	生根大神社	住吉大神社	大阪市住吉区	阿麻美許曾神社	中臣須牟地神社	住吉神社	素盞鳴尊神社	天叢鳴尊神社	山阪神社	大阪市東住吉区	川辺八幡神社	赤坂神社	天照皇大神社	産土神社	志紀長吉神社	瓜破天天神社	新家天満宮	菅原神社	旭神社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	
383	382	381	380	379	378	377	376	375	374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	361	360	359

屯倉神社	布忍神社	柴籬神社	松原市	三十八神	菅原神	春日若宮神	稻葉神	御劔神	波牟許曾神	仲村神	大賀世神	徳庵神	産土神	池島神	布施戒神	天江鏡神	若江鏡神	彌榮神	瓢箪山稻荷神	都留彌神	枚岡神	東大阪市	高砂神	天満宮
408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397	396	395	394	393	392	391	390	389	388	387	386	385	384

稻荷神社	八阪神社	比枝神社	西郡天神	天神	杵築神	太川神	弓削神	穴太神	矢作神	玉祖神	天照大神高座神	許麻神	八尾天神	澁川神	山本八幡	恩智神	八尾市	若林神	深居神	大堀八幡神	熱田神	巖島神	我堂八幡	阿保神
433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	415	414	413	412	411	410	409

宿奈川田神	片山神	大狛神	二宮神	金山媛神	金山彦神	春日神	石湯川神	柏原神	柏原黒田神	国分神	鐸比古鐸比賣神	柏原市	弓削神	由義神	八尾神	神劔神	御劔神	寶殿神	常世岐姫神	都留美島神	住吉神	佐麻多度神	阪合神	
458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435	434

大	堺市西区	萩原	堺市東区	蜂田	野々宮	陶荒田	堺市中区	高須	神明	月洲	田守	石津	船待	開口	菅原	方違	堺市堺区	堺市	若倭	若倭	御劔	八幡	伯太	伯太
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
483	482	481	480	479	478	477	476	475	474	473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	462	461	460	459

郷	八阪	信太森	春日	春日	男乃宇刀	聖井上	泉井	和泉市	廣國	丹比	菅生	堺市美原区	華表	金岡	百舌鳥	堺市北区	美多彌	櫻井	多治速比壳	堺市南区	菱木	踞尾八幡	石津太	日部
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	宮	社	社	社	社	社	社	社	社	社
：	：	：	（春日町）	（三林町）	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
508	507	506	505	504	503	502	501	500	499	498	497	496	495	494	493	492	491	490	489	488	487	486	485	484

津堂八幡	志疑	志貴縣	澤田八幡	古室八幡	國府八幡	黒田	大山咋	産土	伴林氏	辛國	道明寺	藤井寺市	忠岡	泉北郡忠岡町	等乃伎	高石	高石市	曾禰	助松	大津	泉穴師	泉大津市	八坂	伯太
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	宮	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
533	532	531	530	529	528	527	526	525	524	523	522	521	520	519	518	517	516	515	514	513	512	511	510	509

長野神社	菅原神社	高向神社	西代神社	河内長野市	咸古神社	板茂神社	佐備神社	金刀比羅神社	春日神社	錦織神社	美具久留御魂神社	富田林市	野々上八幡神社	蔵之内日吉神社	飛鳥戸神社	杜本神社	日吉神社	白鳥神社	壺井八幡宮	大津神社	誉田八幡宮	羽曳野市	土師里八幡神社	野中神社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
558	557	556	555	554	553	552	551	550	549	548	547	546	545	544	543	542	541	540	539	538	537	536	535	534

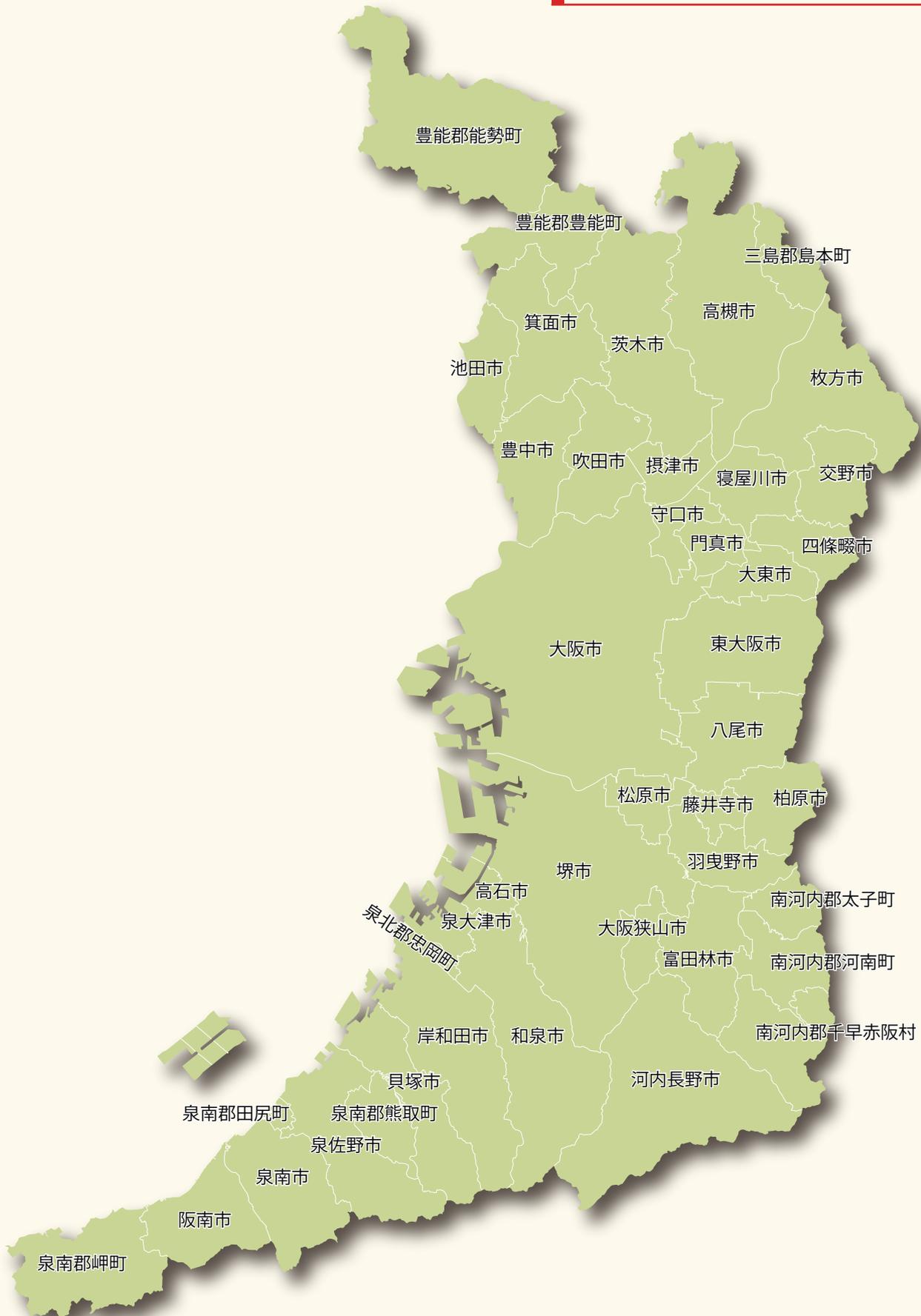
中津神社	千早神社	小吹八坂神社	金峰神社	建水分神社	南河内郡千早赤阪村	鴨習太神社	磐船大神社	壹須何神社	南河内郡河南町	春日神社	科長神社	南河内郡太子町	龍神	三都神	狭山神社	大阪狭山市	天狹山神	八幡神	蟹井神	加賀田神	赤坂上之山神	住吉神	川上神	烏帽子形八幡神社
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
583	582	581	580	579	578	577	576	575	574	573	572	571	570	569	568	567	566	565	564	563	562	561	560	559

貝塚市	山直神社	矢代寸神社	東葛城神社	波多村神社	中村神社	菅原神社	菅原神社	菅原神社	菅原神社	菅原神社	楠本神社	意賀美神社	大沢神	淡路神	土生神	積川神	菅原神	兵主神	夜疑神	弥栄神	岸和田天神	岸城神	岸和田市	不本見神
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
608	607	606	605	604	603	602	601	600	599	598	597	596	595	594	593	592	591	590	589	588	587	586	585	584

楫尾稻波	阪南	春若船	日八火	住意	奈意	蟻日	加支	春	泉佐野	西葛	道陸	稻荷	南近	阿理	感									
取崎荷太	市	日宮岡	枝幡	走吉	賀美	加美	通根	多	日市	城	神	神	神	神	神									
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神									
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社									
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：									
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：									
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：									
633	632	631	630	629	628	627	626	625	624	623	622	621	620	619	618	617	616	615	614	613	612	611	610	609

住船国	泉南	嘉春	泉南	泉南	鹿稻里	種信	一茅	泉南	北	鳥	菅	指	加										
吉守玉	土岬	祥日	田森	熊取	島荷	外河	達岡	淳	野	取	原	出	茂										
神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神	神										
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社										
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：										
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：										
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：										
657	656	655	654	653	652	651	650	649	648	647	646	645	644	643	642	641	640	639	638	637	636	635	634

# 大阪府



# 豊中市

▶ 大阪府にもどる



# はっとりてんじんぐう 服部天神宮

(通称 服部の天神さん)

## 御祭神

少彦名命  
菅原道真公

## 御神徳

足<sup>乃</sup>守護  
健脚祈願  
合格祈願

## 例祭日

例大祭(秋祭)十月二十五日



鎮座地 豊中市服部元町一―二一―一七  
電話 〇六一六八六二一五〇二一  
HP <http://hattoritenjingu.or.jp>



## 神社のおすすめ

脚気の病がこの地で治った菅原道真公の故事にちなみ「菅公脚気平癒の霊験」が広まり、江戸時代には門前市をなすようになり、「足の神様」として全国から崇敬を集めるようになりました。



足の守護御守 1,000円



足踏石 祈願台座

## 由緒

御祭神「少彦名命」と「服部天神宮」の創建

その昔、朝鮮から機織の技術を吾が国に伝えた人々に「秦氏」の姓氏を与えて、これらの子孫の多くが、この地に住まいしました。

「服部」の地名は秦氏の人々の住むところとして「機織部」から成りたつたものと思われ、第十九代允恭天皇の御代(四一二年)に織部司に任ぜられ、諸國の織部を総領した「服部連」の本拠地が服部であります。(新撰姓氏録、第十八卷攝津國神別)

外来部族であった秦氏は、外来神であり医薬の祖神である「少彦名命」を尊崇していましたが、当神社はこの服部の地に古くから、おまつりしていたものと思われ、その創建は菅公御生前より遠く、相当古い年代であったと推定されています。

「菅公」と「脚気平癒」の霊験

右大臣、菅原道真公は、ざん訴に遭い、太宰権師として左遷されることになり、延喜元年、京都から遙か筑紫の大宰府へ赴く途次、このあたりで持病の脚気に悩まされ、足がむくんで一歩も歩くことが出来なくなりました。(菅公の持病脚気は菅家後集に記載あり)そこで村人のすすめで、医薬の祖神「少彦名命」を祀る服部の路傍の小祠に詣で、一心にその平癒を祈願されたところ、不思議に痛みや、むくみが治り、再び健康を取り戻して、無事に大宰府におつきになったと伝えられています。

菅公没後、北野天満宮をはじめとして、天神信仰が全国各地で起こり、路傍の小祠であった当社に菅公の霊を合祀し、「服部天神宮」として堂宇を建立し、「脚気天神」「足の神様」として全国の崇敬をあつめる様になりました。

# 庄内神社

しようないじんじや

## 御祭神

保食神  
宇迦之御魂神  
応神天皇  
神功皇后  
稷威雄走神  
外一柱

## 御神徳

厄除開運  
家内安全  
商売繁盛

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 豊中市庄内幸町五―二―一  
電話 〇六一六三三二―二二八七  
HP <http://www.shonai.or.jp/jinja>



## 神社のおすすめ

境内神社に少彦名神社（大黒社）と、蛭子神社（恵比須社）①があり、毎年一月九日〜十一日まで、二福神大祭として「庄内戎祭」を行っています。商売繁昌、福德円満の神様として、広く崇敬されています。



①恵比須社・大黒社



庄内こどもの杜幼稚園

## 由緒

庄内神社が現在の地に御鎮座されましたのは、大正元年の十月です。それまでは各村（各大字ごと）に神社がありました。明治三十九年八月勅令第二二〇号により七村社を合祀し、社号は一方に偏ることなく、また将来崇敬上の事も考慮して、村名を用いて庄内神社と改称しました。

そして現在の地を境内地と定め、旧社殿および社務所ならびに鳥居・石灯籠・狛犬等を移築し、大正元年十月十六日の浄蘭、七社即ち八幡社三社、稻荷社三社、稷威（みいつ）天王社の御霊代（みたましろ・御神体）を御遷座し、翌日の十七日に御鎮座祭を執行し、爾来この日を大祭として現在に至っております。

ご本殿は銅板葺き流造り、拝殿は銅板葺き入母屋造りとなっております。なお、拝殿は昭和三十七年に、合祀五十年記念事業として改築されました。

庄内の街は戦後目覚ましい発展を遂げましたが、庄内神社は庄内地区の総氏神として、五穀豊穡・商工業繁栄・家内安全・縁結び・健康長寿・厄除開運・安産の守護神として、庄内地区はもとよりその他の地区の方からも広く崇敬されています。なお、平成二十四年に御鎮座百年を迎え、各種の記念事業や記念行事が執り行われました。

また、境内神社として恵比須社・大黒社があり、一月九日から十一日まで二福神大祭の「庄内戎祭」を執り行っています。

なお、境内地には学校法人「庄内神社学園」幼保連携型認定こども園庄内こどもの杜幼稚園があり、神社神道に基づいた保育と教育を日々行なっています。

# いなりじんじや 稲荷神社

(通称 豊中稲荷神社)

## 御祭神

宇迦御魂神  
天照皇大神  
月読命

## 御神徳

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 豊中市本町七-3-7  
電話 06-6852-4733  
H P <http://toyonakainari.sakura.ne.jp/>

## 御朱印なし

## 由緒

当社の創建年代は不詳である。  
僧行基の創建された金寺に、近衛殿より寺領數十町歩を寄付され、その土地の五穀豊穡と住民の家運繁栄の守護神として、勧請されたと伝えられている。

旧三車乃荘（後年新免乃荘）の産土神として社家及び寺僧共に奉仕していたが、永正元年足利義植の政令のため社領を没収され、又、天下の兵乱が続き、氏子は神社を尊崇修典することなく、荘厳な社殿も次第に荒廃していった。

天正六年に織田信長が、摂津伊丹の城主荒木村重を攻める時に、将士高山右近に命じて近郷の神社仏閣を問わず焼き払わしたので、当社も金寺千坊と共にその厄にあい、数多くの貴重な宝物文書等が烏有に帰してしまった。しかし、御神霊だけは幸い無事であったので、一時四方に避難していた氏子は兵塵の鎮まると復帰し、相謀りて仮殿を造営し奉遷した。

後、慶安四年、本殿幣殿拝殿を再建し神霊を遷座し奉った。しかし、昔の構造に比べると規模は極めて小さく、遠く及ばないといっても神社としての体裁はほぼ整った。これが現在の社殿である。

古来、新免乃荘は水利の便を欠き、干害が甚だしかったので、祈雨祭は早天毎に行われ、新願中に必ず靈験が現われ降雨をみ、干害をまぬがれたといわれている。

祈雨祭には、領主保科家より大庄屋を経て牡丹餅を神前に供えられ、氏子の催す「飛上り太鼓」の名は有名であった。しかし、田畑は宅地となり、この特殊な風習も跡を断った。

# くらはしそうしゃ 棕橋総社

## 御祭神

素盞鳴之尊  
神功皇后

## 御神徳

商売繁盛  
病氣平癒  
厄除開運

## 例祭日

十月十四日



鎮座地 豊中市庄本町一丁目二四  
電話 〇六一六三三二一三二一〇  
HP



## 神社のおすすめ



鯉(恋)みくじ



末社 出世亀菊天満宮



鯉池



秋季例祭布団太鼓

## 由緒

当神社は古来より東西棕橋荘（現庄内一円・豊南町・上津島・今在家・尼崎市戸の内・神崎・額田・高田・園田周辺）の中央である荘本（庄本）に鎮座し、同荘の総産土神で、棕橋総社又は棕橋荘神崎松原の社とも称する。

遠き神代の御時、素盞鳴尊が高天原より鯉に乗り神前（神崎）の水門を経て当荘にご降臨なされたことにより、崇神天皇七年十一月棕橋部連の祖、伊香我色乎之命が斎い定め祀つたと伝えられている。又、当社は神功皇后が新羅へご出発の時、神々を此の神庭に集め、幸いをお祈りになったという霊験著しい古社である。

天文八年四月、御奈良天皇の勅願所と定められ、東棕橋荘を社領として加えられた。また、明徳二年七月、藤原秀安は金鼓を寄進し、天正年間、池田筑後守は嫡子多聞丸誕生のため、武運長久を祈り獅子頭を寄進した。獅子頭は社宝となっている。その他の社宝には元和六年九月天下一長久の作の神鏡がある。

神庭には鯉塚、鯉池がある。鯉塚は大神がお乗りになった鯉がこの地まで来て力尽きて死んだ。ということで作られた塚である。

往時には社家多く社家町をなし、今も付近にその遺跡を存する。世の推移に従い、氏地の中には別に祠を建て、産土神として祀るところも出て、加えて戦国時代、付近一帯兵乱続き、社前も次第に衰退し、天正六年織田信長の荒木村重討伐の折の兵火により社殿、宝物、古文書等ほとんどを焼失した。

慶長四年六月十四日社殿を再建したが旧時の如くに復することが出来ず、天正の頃まで氏地であった東長島も別に祠を建て、氏地は庄本、戸の内、高田、神崎、の四か村となり、江戸中期（文化五年）には高田、神崎も一村限りの祠を建て、氏地は今の如くになった。

大正五年八月、常夜灯の倒壊によって火災を起こし、本殿、拝殿等を焼失、現在のこの社殿はその後再建されたものである。

## 境内社について

出世亀菊天満宮は後鳥羽上皇の寵姫亀菊、後の伊賀の局の信仰が厚かった天満宮をこの地に勧請し、お祀りしたものである。鎌倉時代、当地棕橋荘は亀菊の所領地で、幕府地頭との間で紛争を生じ、一二二一年に起こった承久の変の発端の場所として知られている。

# 八坂神社

やさかじんじや

御祭神

素盞鳴尊

御神徳

例祭日

十月十日



鎮座地 豊中市熊野町三十一〇一  
電話 〇六一六八五二一〇六一  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は今より九七〇余年前即ち長徳二年（一六五六）花山法皇が諸国を御巡遊なされたとき当地に來られ、この地形が紀州の熊野に似ているのを見られ、ここを熊野代と稱して俗には久末牟多井と呼んでいた。

法皇は、その導者である石川寺の仏眼上人に命ぜられ、「くず谷」山に社殿を造営され熊野権現を奉祭し神領地を寄進せられたのが当社である。

鎌倉時代（一一八四二）に至って熊野大神の信仰は全国的に普及し、また瘡の神として遠来よりの参拝者も多くあつたと伝えられる。

永年にわたり社殿が老朽していたが、永正丙寅の九月（二一六四）足利義澄は小野資広をして社殿の再建をなされた。その後天正年間（二二三三）荒木摂津守村重の兵戦によつて神殿は破壊され、歴世の記録その他悉皆散逸し神領地も亡失した。

年久しく仮殿であつたが、慶安二年八月十日（二三〇九）漸く老杉古松醇蒼たる古城の跡即ち現在の地に再建されたものである。

往古は、もと葛上神祠と称したが、弘治二年（二二二六）牛頭天王と呼ばれ、明治三年八坂神社と改められる。明治五年村社に列し、同四十年七月五日宇宮垣内の無格社愛宕神社を合祀し、同四十一年十二月神饌幣帛料供進社に指定せられた。

本殿は桧皮葺相殿造で拝殿、絵馬堂、宝庫及び社務所を存した老杉齣として社頭を蔽えり。

御旅所はもと葛上神祠の地にあつたが、昭和三十八年拝殿、宝庫及び社務所を改修されたとき、現在のところに移した。

本地熊野田、上野、東豊中、旭ヶ丘、栗ヶ丘を主領き坐す土産神で、勝運を司り給う神である。

# かすがじんじや 春日神社

(通称 利倉春日神社)

## 御祭神

素盞鳴命  
天児屋根命

## 御神徳

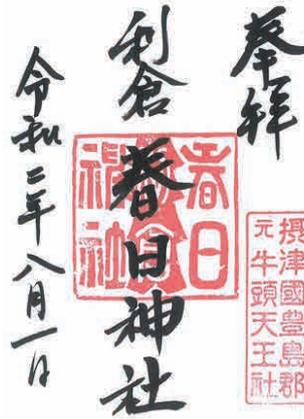
病氣平癒  
五穀豊穰  
諸願成就

## 例祭日

十月二十六日



鎮座地 豊中市利倉一三―一四  
電話 〇六一六八六二―一七二三  
HP



## 由緒

春日神社はもと牛頭天王祠と称し、その創建年代は不詳であります。第五代淳和天皇（八二四）の皇后正子妃殿下は当社に難病平癒の御祈願あせられ厄病快癒の御礼として八〇〇年代（平安朝前期）既に此の地に鎮祭されていたようであります。仁明天皇以後も皇室の崇敬厚く、多田満仲（撰津源氏）は供米料百五十石を寄進したのであります。

建武二年（一三三六年）撰津の守護、楠正成と足利尊氏の戦いで、利倉村は戦火の為殆んど焼失したが、当社のみ火難を免れたので、近郷の人々の尊崇殊に厚く、社頭は壯観を極めたのであります。又、藤原秀康は明徳二年（一三九一年）七月金鼓を奉納しております。

天正六年（一五七八年）織田信長が時の伊丹城主荒木村重を攻めた際当時高槻城主であった高山右近の劫火にかり、社殿、宝庫、古文書等を焼失したので、天正十五年に至って阿部正忠が社殿を再建したのであります。現在の内部本殿は慶長二年（一五九七年）池田光重の建営で、近郷の産土神として祭祀を掌ってきたのであります。明治初年春日神社と社名を改めたのであります。

昭和二十年六月太平洋戦争末期に社殿周辺に二度にわたり焼夷弾が二十数発もらつきました。御神威のお陰で全弾不発の為に社殿、社務所は火難を免れたのであります。が、老朽化したので、昭和五十七年十月氏子の総意による御芳志により新築し、外部社殿は鉄筋コンクリート造、屋根銅板葺の荘厳優美な体裁を誇ったものが完成したのであります。

### 境内末社

豊栄稻荷神社 倉稻魂神を祭祀し、招福、商売繁盛の神として崇敬されています。  
とくら天満宮 菅原道真を祭祀し、知恵の神、受験、入学の神として崇敬されています。  
縁結び御神木 出雲大社の御分霊、大国主大神が上部で合体した珍しい樹木であり、神宿る木として崇敬されています。  
皇 后 塚 淳和天皇皇后正子妃殿下の御分霊が祭祀され、難病克服の御霊座として崇敬されています。

# 天神社

てんじんじや  
(通称) 千里天神

## 御祭神

菅原道真公  
宇迦之御魂大神

## 御神徳

新規開拓  
家内安全  
諸願成就

## 例祭日

五月五日 春季例祭  
十月第二日曜日 秋季例祭



鎮座地 豊中市上新田一―一七七一  
電話 〇六一六八三四一五二二三  
H P <http://semi.tenjin.com/>



## 神社のおすすめ

大阪とんど祭「重要無形文化財」一月十四日  
大阪最大の火祭り。巨大なとんど櫓にご  
神火を点じ、群参する参拝者をかき分け神  
職が火柱に火焚串を投じる頃祭礼は最高潮  
に。社頭で授与される破魔餅を残り火で焼  
き食せば新年の無病息災を得られる。



高さ10mを超えるとんど櫓



浄火に天筆等が豪快に投げられる

## 由緒

当神社の鎮座地の上新田は、徳川二代将軍秀忠の治世下、大坂夏の陣翌年の元和二年（一六一六）に武蔵国の代官、間宮三郎右衛門の命により新たに北摂の丘陵を新田開発し、江戸幕府の直轄領となりました。続いて寛永十年（一六三三）に京都所司代の板倉重宗の領有を経て、寛文九年（一六六九）より淀藩領となります。

その後、明治四年（一八七一）の廢藩置県により大阪府嶋下郡上新田村となり、昭和三十六年（一九六一）に日本初の大規模都市開発の先駆けとなる千里ニュータウン造成の成功を経て、以降日本各地のニュータウン造成の模範例となり現在に至ります。

当神社の創祀は元和二年の新村の開墾に始まり、貞享三年（一六八六）には小路村の大王、市郎兵衛が社殿拡大に伴う建立を請け負い、御社殿を境内の現在地に遷座し本殿を再建。

元禄五年（一六九二）に行われた幕府の寺社改めでは、社殿の建築様式や境内の詳細が『寺社吟味帳』に記載されました。

天明元年（一七八一）には御旅所が御旅池のほとりに建立され、同年の秋祭りには猿田彦・太鼓・稚児・金幣・威儀物・神輿などの渡御列が御本宮より神幸し、氏地をくまなく巡幸して行宮（御旅所）で着御祭を齋行、再び御本宮へ還幸し、以降毎年の秋祭りには神幸祭を執り行うこととなりました。

明治五年（一八七二）、近代社格制度のもと村社に列格し、同三十八年（一九〇五）には本殿覆屋と幣殿、拝殿、神饌所、楽座を建立し、その後氏子崇敬者による神輿蔵、表参道大階段、石玉垣、御旅所社殿、社務所、手水舎その他多くの新改築や修繕、奉納寄進を間断なく受けます。

境内には五穀豊穰・社運隆昌の大神「千里稻荷」と、当千里地区の開発と発展に寄与した先人の先覚諸霊を祀る「祖霊社」が、境外には火伏・防火の大神「愛宕社」と御本社遥拝を兼ねる行宮（御旅所）が鎮座し、人びとの崇敬を集めています。

なお、貞享三年の再建より現存する御本宮の本殿は、木造の一間社流造（いちけんやしるながれづくり）の建築様式で、屋根は柿葺、正面の軒には唐破風を据え、柱や梁を中心に梅鉢や唐獅子、猿などの極彩色を施した江戸時代中期の社殿建築の特徴を良く伝えており、平成五年（一九九三）に市の重要有形文化財に指定されています。

すみよしじんじゃ  
住吉神社  
(通称 若宮)

御祭神

住吉大神  
表筒男神  
中筒男神  
底筒男神  
神功皇后

御神徳

開運招福  
安産守護  
交通安全

例祭日

十月十日



鎮座地 豊中市若竹町一―二一―六  
電話 〇六一六八六三一〇二五  
HP <https://www.wakami.yasumi.yosi.com/>



神社のおすすめ

- ①なでうさぎ…「和魂」「幸魂」を授かる
- ②力石…「荒魂」「奇魂」を授かる
- ③うさぎ守り…ツキを呼びこむ



由緒

元和元年（一六一五）住吉大神の故実である卯年・卯月・卯日に創建。地域で「若宮」といえば、当神社のことをさしたとされています。

伝承によると、天平年間に行基が興した石蓮寺の中心地と当地は目されており、同寺は千軒の坊舎を持った莊嚴・広大な寺だったと伝わります。

平清盛によって同寺は攻められ破却し、当地には嚴島神社（現・水分神社）が創祀され、当神社の起源となつたとされています。

創建当時、当社は現在の二〜三倍の境内地を有し、総社として尊崇されました。当地には、住吉大神の神使「うさぎ」像が残存し当時の様子が偲べれます。

また、地域では数々の親子伝承（神功皇后と応神天皇）の寓話が語られてきました。

すみよしじんじゃ  
**住吉神社**  
(通称 穂積服部の住吉さん)

**御祭神**

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
息長足姫命(神功皇后)

**御神徳**

厄除開運  
交通安全  
安産守護

**例祭日**

十月十五日



豊中市

鎮座地 豊中市服部南町二―三―三二  
電話 〇六―六八六四―〇七六一  
H P

御朱印なし

**由緒**

当社の創建年代は明らかではないが、住吉大社の別宮として造立され、奈良時代の末から平安時代の初めにかけて、猪名川流域における本宮の社務を管理していたもので、社殿は、平安時代の仁平二年(一一五二)に本殿・鳥居・社務所などが再建されたといふ社記があり、天正六年(一五七八)暮れに、織田信長の荒木村重討伐のとき兵火にかかって焼失し、やがて元和八年(一六二二)に本殿・拝殿・神門などが再々建されたといふと伝えられる。

現在の社殿は、昭和三十六年(一九六一)に大阪府北区中之島に御鎮座の豊国神社が、大阪城内に移転のためご社殿を拝譲し、当神社に移築再建されたものであります。

- 境内末社
- 稻荷社
- 龍神社

**神楽殿(能舞台)**

当神社の神楽殿は、元は大阪博物場(現在の「マイドームおおさか」の位置)に、明治三十一年(一八九八)に能楽界篤志家の寄附によって、総桧材を用い、古式に則って造立された大阪最古の能舞台であります。

昭和二年、博物場移転のため、これを大阪天満宮境内に移築され、昭和五十六年(一九八一)に当神社昭和の大造営を機に、大阪天満宮をはじめ関係各位のご厚志により、当神社に譲り受け、三たび移築再建したものであります。  
平成十年(一九九八)に国指定登録有形文化財にも指定されました。

# 箕面市

▶ 大阪府にもどる



# 為那都比古神社

(通称) 萱野の大宮さん

御祭神  
為那都比古神  
為那都比売神

御神徳  
良縁成就  
土地守護

例祭日  
十月十四日



鎮座地 箕面市石丸二丁目一〇一  
電話 〇七二一七二九一七〇四五  
HP

奉拝  
為那都比古神社  
令和二年七月一日

## 由緒

当社は延喜式内社で、御祭神は御夫婦神であり、為那氏の祖神である。寛平年間に分れて別殿に奉斎していたが、明治四十年六月に合祀した。天正年中に、織田信長が高山右近に命じて摂州の神社仏閣を破壊するに及んだが、社は一時牛頭天王の神号をつけて、その難を免れたと伝えられている。旧萱野谷十ヶ村の産土神で、通称萱野の大宮と称した。明治四十年六月に天満神社、三王神社、神明神社、木本神社、春日神社、大宮神社、為那神社、神明神社、愛宕神社を合祀した。境内は四四八坪ある。

# あびたじんじや 阿比太神社

## 御祭神

素盞鳴尊

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

十月二十三日



開運厄除 ゆずみくじ



境内に立ち並ぶ鳥居



箕面のゆるキャラ「滝ノ道ゆるす」が  
参拝作法を案内してくれる

## 神社のおすすめ



鎮座地 箕面市桜ヶ丘一丁目八番一  
電話 〇七二七二二二〇九六  
HP <http://abita.or.jp/>

## 由緒

延喜式内阿比太神社は大阪府箕面市桜ヶ丘一丁目八番一号の境内にお祀りしてあるが、昔は地番が新稲村と半町村にまたがっていた。

大阪府神社史資料によれば往時の鎮座地は箕面村の平尾（現在の箕面市箕面のこと）の阿比太の森であつて、後に現在の桜ヶ丘に移転し、旧地には阿比太の字を残している。仁明天皇の嘉祥三年正月辛丑従五位の下を授かつた。元禄五年十月の吟味帳によれば、「除地東西二二〇間、南北二二五間火とぼし掃除人半町村・桜村・新稲村より一年替りに勤め来り候」と記してある。領主の阿部撰津守は、桜井谷村陣屋代官水原勘右衛門をして初穂米、幣帛料を奉納させたとある。明治五年村社に列し、同四十年一月同村大字西小路の村社八幡大神宮を合祀し、同四十四年五月神饌幣帛料供進社に指定された。（同八幡大神宮は、地元氏子の要望により、昭和三十二年旧鎮座地西小路に社殿新築し、遷座奉斎された）境内三千余坪、松樹うつ蒼として社頭を蔽い、新稲参道、半町参道、桜参道と三本の参道を有している。

あめのこやねのみことじんじゃ

# 天児屋根命神社

(通称 瀬川神社、龍の宮)

御祭神 天児屋根命

御神徳 家内安全  
厄除開運  
運氣上昇

例祭日 春季例祭四月十五日  
秋季例祭十月十五日



鎮座地 箕面市瀬川一丁目二二〇  
電話 〇七二七三二二二〇七  
HP



## 神社のおすすめ

「龍ヶ井」は運氣上昇の神の井戸と崇敬を集めている。神社入口横には、「瀬川の五本松」と呼ばれていた大きな松の古木があり、御神木として守られている。



龍ヶ井



御神木の松

## 由緒

創建年月は詳らかではないが、もと春日神社と称した。摂津志に王子神祠と記されているのは当社である。

明治五年村社に列せられ、同十二年五月に今の社名に改められた。末社に八幡神社がある。その後、昭和五十七年には境内社 天満宮が大阪天満宮より勧請された。

また、八幡神社の側に「龍ヶ井」と呼ばれる井戸がある。古くから神霊が宿り、嘗て、その井戸の底より龍が光を放ちながら天に昇ったと言い伝えられている。故に、この井戸を「龍ヶ井」と称し、運氣上昇の神の井戸と崇敬を集めている。このことから、当社は「龍の宮」とも呼ばれている。

昔は、境内に「瀬川の五本松」と呼ばれる巨大な松が五本あった。時代とともに数が減り、今では古木が一本のみ現存し、御神木として祀られている。

嘗て、社地に沿った石積川の涯に、「柳の井」があった。その側に柳の古木があり、その枝葉を採って神前に供したと云う。

また、「鈴石」と称する重量およそ二十貫、楕円形にして藍色を帯び、動かすと鈴のような音が聞こえる石が境内にあったが、皆が持ち上げ破損することを案じ、今は、瀬川の願正寺境内に移されている。

# 八幡大神宮

はちまんだいじんぐう  
(通称 牧落八幡大神宮)

## 御祭神

応神天皇  
神功皇后  
比売大神

## 御神徳

開運厄除  
必勝祈願

## 例祭日

十月二十二日



「ちえの輪くぐり」

さらに大きな知恵をお受け下さいますよう御神前で祈念し、自由にくぐっていただけます。

## 神社のおすすめ



鎮座地 箕面市牧落二丁十二二二七  
電話 〇七二一七二四一三二一八  
HP

## 由緒

寛文二年十月二十二日、山城国(現・京都府)石清水八幡宮からの御分霊を勧請し、牧落の氏神様として御奉斎申し上げたのが当社の起源です。

当社の御祭神は御本殿に応神天皇(第十五代)【菅田別尊(ほんだわけのみこと)】・神功皇后(応神天皇の母君)【息長帯比賣命(おきながたらしひめのみこと)】・比売大神【多紀理毘賣命(たぎりびめのみこと)】・市寸島姫命(いちきしまひめのみこと)・多岐津比賣命(たぎつひめのみこと)をお祀りしています。

御本殿の建築様式は一間社春日造、向拝一間唐破風造で、平成六年に拝殿・幣殿・覆殿を改築し、平成二十四年には御鎮座三百五十年記念事業にて境内整備、参道拡張工作及び末社三社の新築工事が行われました。

境内末社は御本殿向かって左側(境内西側)に三社あり、御本殿に近き方より武内宿禰命社、稻荷社、久延彦命社です。武内宿禰命社には子育ての神・長寿の神・商売繁盛の神として崇められる武内宿禰命(たけのうちすくねのみこと)、稻荷社には商売繁盛の神である稻荷大神(高吉大権現・光春大善神・白玉大善神)、久延彦命社には日本の国造りの神様の中でも特に知恵の優れた神様であることから知恵の神として崇められる久延彦神(くえひこのかみ)をお祀りしています。

「牧落のはちまんさん」と親しまれる当社が御鎮座する箕面市牧落は西国街道沿いに位置しています。国道一七一号に沿って市の東西を走る西国街道はその昔、西国から京へ入る重要な道で、参勤交代の大名や西国巡礼の人々で賑わいました。江戸時代における街道の一つであり、京都から下関、あるいは九州の太宰府までの経路で、律令時代に大路として整備された『山陽道』とほぼ一致するため、近世山陽道の別名とも云われています。

この牧落の地に御鎮座されてより、長きにわたり開運厄除・必勝祈願の神として篤い崇敬を受けてまいりました。現在では商業繁栄・学業向上・人形清祓(人形供養)の神社として、氏子はもとより、他の地域からも年々多くの人々がお参りに来られています。

# 春日神社

かすがじんじや

御祭神

天兒屋根命

御神徳

例祭日

十月十七日



鎮座地 箕面市小野原西五―三十一―二  
電話 〇七二―七二九―八二六八

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。明治五年村社に列せられる。

# 八幡太神社

はちまんたじんじや  
(通称 西小路八幡)

## 御祭神

応神天皇

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穡

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 箕面市新稲三丁六-1  
電話 〇七二-七二二-二〇九六

H  
P

御朱印なし

箕面市

## 由緒

当社の創建年代は不詳である。  
明治四十年一月阿比太神社に合祀されたが、西小路一円の氏子中の要請により、昭和三十三年十月箕面市新稲の現在地に遷座する。

りゅうおうじんじゃ  
**龍王神社**

御祭神

御神徳

例祭日

九月十五日



H 鎮座地  
P 電話  
箕面市如意谷四―一―二三

御朱印なし

由緒

# とどろみじんじや 止々呂美神社

御祭神

速素盞鳴尊

御神徳

例祭日

十月二十三日

鎮座地 箕面市大字止々呂美九〇九  
電話 〇七二一七三九一〇八七一

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社は元禄年間の創建と云うが、詳らかでない（口碑）。  
明治五年村社に列せられる。

従来素盞鳴尊神社と称したが、明治四十年九月十九日、止々呂美村大字下止々呂美小  
字岡ノ上に鎮座のあった、村社日枝神社を合祀し、爾来現在の社名に改められた。

日枝神社祭神は須佐之男神であった。



すさのおのみことじんじゃ  
**素戔鳴尊神社**

御祭神

速素盞鳴尊

御神徳

例祭日

十月十五日

鎮座地 箕面市粟生間谷二九一二  
電話  
H P

御朱印なし



箕面市

由緒  
当社の由緒は詳らかでない。

かすがじんじや  
春日神社

御祭神

御神徳

例祭日

十月十五日



H 鎮座地  
P 電話  
箕面市栗生新家二一―五

御朱印なし

由緒

# 五字神社

ごじじんじや

御祭神

八意忍兼命

御神徳

例祭日

十月十五日



H 鎮座地  
P 電話  
箕面市粟生外院五―四―一

御朱印なし

由緒

# 池田市

▶ 大阪府にもどる



く  
れ  
は  
じ  
ん  
じ  
ゃ

# 呉服神社

(通称 池田下の宮さん)

## 御祭神

仁徳天皇  
呉服(くれはとり)

## 御神徳

手芸上達  
商売繁盛  
健康長寿

## 例祭日

十月十八日



鎮座地 池田市室町七-四  
電話 〇七二-七五三一-二四三  
HP <https://kureha-shrine.com/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

拝殿の正面左右にステンドグラスが埋め込まれおり鳳凰と孔雀が描かれています。



## 由緒

応神天皇の御代に呉の国よりこの地に渡来し、機織、染色の技術を我が国に伝えたと言われていた呉服(くれはとり)をお祀りしています。

応神天皇の御代に阿知使主(あちのおみ) 都加使主(つかのおみ) 親子を中国の呉国に遣わし機織裁縫の織女を求められました。長い旅の末、呉の国に趣き呉王に乞うて呉服(くれはとり) 綾羽(あやはとり) 兄姫(えひめ)、弟姫(をとひめ) 四人の織女を伴い渡来することとなりました。兄姫は帰路九州の筑紫瀧に宗形明神のお望みでお留りに、他の織女は摂津の国武庫の浦にお着きになり、更になが上がつて猪名の港(池田市)に機殿を建て迎えられます。織女たちは昼夜怠ることなく布帛(ふはく)を織り続け(暗夜には星が降りてきては白昼のように手元をてらしたとの伝承があり)我が国に機織裁縫の技術を伝え男女季節階級に応じた衣服が広まったと云われております。

呉服(くれはとり)は仁徳天皇の七十六年九月十八日に御隠れになり御身体を姫室に、翌年その功績を称え御神祠を建てられ御霊をお祀りすることとなりました。

天正六年(一五七九) 伊丹城主 荒木村重の乱により呉服神社焼亡。

慶長九年(一六〇四) 豊臣 秀頼公が片桐 且元に奉行を命じ再建。(現在の本殿)

※呉(くれ)服(はとり) (くれはとり) が約まって(くれは)と云われる様になる。

# すみよしじんじや 住吉神社

(通称 亀之森住吉さん)

## 御祭神

底筒男命  
中筒男命  
表筒男命  
息長足姫命 (神功皇后)

## 御神徳

交通安全  
安産守護  
延命長寿

## 例祭日

十月二十日



鎮守の杜がこども園の保育の庭になっています。  
住吉様に見守られ、大楠の下で子ども達の笑顔があふれています。

## 神社のおすすめ



鎮座地 池田市住吉二丁目三十一番十八  
電話 〇七二七六一八二九三  
HP <http://kamenomori.jp/sumiyoshi-jinja/>

## 由緒

社伝によりますと、此の辺りは大昔は、広々とした入海でしたが、第十五代応神天皇の頃、忽然として亀形の小島が現れてより次第に土地が開け、第四十九代光仁天皇の御代、ある夜、里人の夢に「吾ハ住吉大神ナリ、汝等、吾ヲ信ズル者ハ、白箭(矢)ノ止ル処ヲ見ン」というお告げがありましたので、翌朝、里人等が集って、森に来てみると果たして、お告げの通りでした。里人らは驚き、畏み、かつ喜びまして、ここに住吉大神を奉祀したのであります。時に、光仁天皇宝亀元年庚戌年(西暦七七〇年)でありました。爾来「風雨順ニ民豊ナリ依テ郡名ヲ豊島ト呼び、其里ヲ豊島ノ庄ト謂ヒ、世々亀之森住吉神社ト云フ」と社伝にありますように、豊島郡(今の豊中市、池田市の地域)の総鎮守、大産土神として崇敬されてまいりました。

住吉大神は、伊弉諾尊の禊祓に当ってお清め申し上げる働きをせられた神さまで、古来、神道の重要な行事である、私共の清く・直く・正しい生活の敵である罪、汚穢を清める禊祓を司る神であります。また、古くより交通交易の最重要なものである海上交通の守護神であり、ひいては陸・空の航行の安全をご守護なさる神さまであります。西日本本の空の玄関である大阪国際空港の産土神でもあり、神社の南端に添って中国縦貫道路等の基幹道路が集まるインターチェンジができ、愈々、陸・空・海の航行守護にご神徳を輝かされて居ります。

一方、神功皇后さまは、日本歴史の礎をお造りになった応神天皇の母君であり、ご胎内に天皇をお宿しになりつつも立派に夫君のご遺志を継がれ、かの三韓御経営を成功なされたという女性の理想像であることから、子供の健康に、教育に、安産に大いなる恵をくだされる神さまであります。神使の「亀」が延命長寿の象徴であるのは周知のことであります。

### 境内社

- 稲荷神社
- 天満宮
- 皇大神宮
- 神武天皇御陵遥拝所
- 桃山御陵遥拝所
- 文化財
- 江戸中期 神輿
- 関流算額 二期(二期は大阪府内最古)

# 八坂神社

やさかじんじや  
 (通称) 早苗の森・神田の宮

## 御祭神

素盞鳴尊

## 御神徳

家内安全  
 五穀豊穰  
 厄除開運

## 例祭日

十月二十二日 (近日曜日)



民俗文化財 神田まつり



重要文化財 本殿

## 神社のおすすめ



鎮座地 池田市神田四丁目七一  
 電話 〇七二一七五一―三七九〇  
 H P

## 由緒

創祀は円融天皇天元元年(九七八年)と伝えられる。神田常福寺(宮寺の深い関係にあった)蔵「摂州豊嶋郡清光山常福寺縁起」の牛頭天王来現第三の条に記載されているのが文献上最古のものである(慶長十六年辛亥臘月日 玉蔵院阿闍梨景範謹記)。早乙女が早苗を植えていたという、牛頭天王ご来現当時の情景から「早苗の森」や「神田」の呼称がおこったことや、表参道の末社「細原社」が本社創祀以前からの地主神、疫除神として、氏子が今でも本社より先に参拝する習わしの由来などが記されている。

前身の社殿は、天正七年(一五七九年)、織田信長の伊丹城主荒木村重攻略の兵火にかかり、社殿、記録等残らず焼失した。現在の本殿は、慶長十五年(一六一〇年)池田備後守光重の子である他紋丸によって再建された一間社流造、檜皮葺の建造物で、桃山時代の様式を伝えており昭和四十六年に重要文化財に指定された。重文の棟札及び前記縁起下の慶長修造繁栄第十二により、造営の事を知ることができる。昭和六十年から補助事業として解体修理を行い、翌六十一年に、華麗な極彩色の桃山時代の本殿が再現した。また令和元年には檜皮屋根葺き替え及び彩色の修理を行った。

古くは牛頭天王とも称し、神田の産土神として崇敬され、明治五年村社に列し、同四十年無各社春日神社、同九頭神社を合祀、同四十一年神饌幣帛料供進社に指定、同四十二年三月北今在家の村社十二神社を合祀したが、昭和二十一年に分離、宗教法人令により旧宮地に十二神社を設立した。

境内地、一〇、二八九平米。約二九、〇〇〇平米の境外地大藪林は住宅地となり往時の早苗の森の姿を偲ぶことはできない。

境内社に稲荷社、細原社(細原大神、九頭大神)、皇大両宮、春日社、天満宮、蛭子社、熊野社(熊野三所権現、金毘羅大権現、日野大明神)、八幡宮がある。

十月二十二日の例祭には、神輿渡御が行われるが、旧六ヶ村より豪華な幟六旒、神額灯六基の勇壮な宮入がある。伊勢音頭を唄いながら宮入するもので江戸時代中期より続いている。池田市の重要無形民俗文化財に指定されている。

千早振る 神田の村の稻なれば 月日とともに 久しかるべし

夫木和歌抄 大江 匡房

# 天満宮

てんまんぐう  
(通称 畑天満宮)

御神神

菅原道真公

御神徳

家内安全  
 学業成就

例祭日

十月二十五日



鎮座地 池田市畑三ー一五ー八  
 電話 〇七二ー七五二ー二八五三  
 H P

奉拝



令和二年七月廿五日

神社のおすすめ

北摂連山五月山の山腹に鎮座し、大阪平野や大阪湾の先に、金剛・生駒・和泉山脈の山並みを望む。眺望絶佳の境内地である。



算額 (池田市指定文化財)



石造灯笼 (池田市指定文化財)

## 由緒

当社は永長二年十一月十一日創建である。天正年間の兵火に罹って焼し、文禄四年に村民によって再建、ついで元禄・宝暦、明治に改造し、現今の社殿は平成七年の大震災で本殿が倒壊し、平成十二年氏子崇敬者の協力で造営されたものである。往時は石積山千宝寺という宮寺があったという。

明治五年、村社に列し、同四十年六月十二日、字女郎垣内の無格社愛宕神社、同月十七日、大字上渋谷字堀切の同水神社を合祀し、同四十一年十二月、神饌幣帛料供進社に指定された。

池田市指定文化財

○算額 (嘉永五年奉納) 一面

麻田藩の大庄屋をつとめ、また和算家としても有名な岩田清庸が奉納したものであり、問題のうちの一問は天満宮にちなみ梅鉢紋に関するものである。

○石造灯笼 (永和四年) 一基

この灯笼は花崗岩で作られ、主要構成部は四角形であるが火袋だけが六角形となっているのが特色であり、清楚な印象を受ける。永和は南北朝時代北朝の元号。池田市内に現存する最古の灯笼である。

○石造板碑 (弘安八年) 一基

# じゅうにじんじゃ 十二神社

(通称 駒の森・十二の宮)

## 御祭神

天神七代  
地神五代

## 御神徳

五穀豊穰  
家内安全

## 例祭日

十月十日



例祭の様子

## 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 池田市豊島南一丁目二一九  
電話 〇七二一七六二一七七五五  
HP

## 由緒

当社の創建年月は不詳であるが、古来「駒の森」「十二の宮」と称し、旧豊能郡北豊島村の北今在家、北轟木、西市場及び兵庫川辺郡神津村の内下川原の産土神として崇敬されてきたが、明治四十二年三月九日大阪府指令社甲第二五六号に依り、現池田市神田の素盞鳴尊神社（現八坂神社）に合併された。

しかし、長い歴史と伝統に培われた氏神氏子の親密な関係は大変強く、終戦により神社が国家の管理から離れたのを機に、昭和二十一年五月旧宮地に奉遷され、同年六月十四日宗教法人令に基づき分離設立届出、「十二神社」が再興された。氏地は豊島南一、二丁目、住吉一、二丁目、豊島北一、二丁目である。

爾後、十年毎の記念大祭を始め記念事業により、社殿の改修、社務所新築、境内整備等が行われ現在に至る。

境内地七五八坪。表参道はこの付近に残る旧西国街道に面している。

### 十二宮（撰津志）

在東今在家村與西今在家轟木西市場河邊郡下河原共致祭祀。

### 十二宮（稿本「名葦探杖」）

式外の神なり。東北今在家にあり。西今在家轟木西市場川邊郡下川原と祭祀を俱にす。

光り添ふ氷柱や月の宮柱

### 十二宮（撰津名所図会）

（豊島郡）東今在家村にあり。この辺の生土神なり。天神七代、地神五代を併せて祭る。

# 豊能郡 能勢町

▶ 大阪府にもどる



# 野間神社

のまじんじや  
(通称 布留宮)

## 御神

饒速日命  
栲幡比売命  
鹿屋野比売命

## 御神徳

五穀豊穡  
子孫繁栄  
病気平癒

## 例祭日

十月十五日



野間の大ケヤキは、当神社の飛び地境内「蟻無神社」にあります。フクロウが守り神です。

## 神社のおすすめ



鎮座地 豊能郡能勢町地黄三九九  
電話 〇七二―七三七―一一六六 (宮司宅)  
HP

## 由緒

古史古伝によれば、「推古十三年（六〇五年）乙丑九月二十八日（今の十一月初め頃）、勅により摂津国能勢の野間に神宮を創立云々」と伝わっています。

また、「御霊代は、大和国布留神廟（今の石上神宮）より奉遷したる饒速日命が御身に懸けさせられた勾玉二百四十一個である。」とも伝わっております。従って「布留宮」とも称する延喜式内社です。

大和国より御霊代を供奉移住した人々が地黄草という薬草を栽培したため今では、この辺りを地黄（じおう）というようになった言われています。

室町時代多田源氏末裔の能勢氏がこの辺り一帯を領地にし、野間神社を氏神として尊崇しました。

江戸時代には、鳥居の寄進や拝殿の建立をしました。  
現在の本殿は、元文元年（一七三六年）に再建されたものと伝わっております。

江戸時代後半には、滋賀県の長浜の山車を参考に、地車（だんじり）六基がそれぞれの村に造られました。それに伴い御神輿と松地車も造られ、例祭には、宵宮・本宮と二日間にわたる大きな秋祭も行われるようになりました。（最近では、六基そろってのお祭りは、数年に一回となっております。）

### 近現代

明治四十年（一九〇七年）各地区神社十社が合祀されました。

また、各地区稻荷神社も合祀されました。

大正三年（一九一四年）には、蟻無神社境内の野間の大ケヤキが寄贈されました。大ケヤキは、昭和二十三年（一九四八年）には国の天然記念物に指定されました。

平成二十七年（二〇一五年）には、陰陽石庭が造られ、平成三十年（二〇一八年）には、その横に月読神社が創祀されました。

# 岐尼神社

きねじんじや

## 御祭神

美奴売大神  
瓊杵尊  
天兒屋根命  
えびす(蛭児) 大神  
源満仲公

## 御神徳

一願成就  
富貴榮達  
航海守護

## 例祭日

四月十五日



鎮座地 豊能郡能勢町森上一〇三―三  
電話 〇七二―七三四―〇八二八  
HP

朱印授与は事前に  
予約が必要です。



## 神社のおすすめ

美奴売山遥拝、天神山神事など神社故事の祀りや場所が現存しており、それらを巡る人が多い。  
美奴売山の材を使って船を作れば無事航海できるとの云われから航海守護を願う人もある。

## 由緒

当社は、延喜式内の神社で、創祀年代は不詳なれど、延暦元年（七八二）とする記録の他、『撰津風土記』の能勢美奴売神の記載・神功皇后摂政元年（二〇一）や、岐尼地区の遺跡からは紀元前後の祭祀跡が見受けられる。

此の地は、「吾が住める所の山に杉の木有り、よろしく吾が為に伐採して船を造るべし、則ち此の舟に乗りて御幸あそばされるとまさに幸福あり」との美奴売神のお告げに従い神功皇后が三韓征伐を果たしたとされる神山・美奴売山をはじめ樹木発生の良地で、樹木の古言をとって「木根の宮」。又、「瓊々杵尊」といえば、天孫降臨の神話にある神であるが、ここにも天孫降臨の説話があり、岐尼神が南の小丘に降臨したもうたとき、土民は白の上に杵を渡し、荒菰を敷いて迎えたという。また、天降った丘を今も「天神山」と呼び、祭祀が行われている。これらの故事から、元は枳根命一柱の宮で美奴売神の巫女であったとする説や、岐尼神社が神体山・美奴売山を祀る宮であったとする諸説がある。杵・木根・枳根・岐尼何れも通音である。

社記によると、代々朝廷の勅願所であり、また將軍家代々の御祈願所であった。「源満仲公」については、多田の地に入部以来家臣の多くが当地に入り、開発治世にあたりたその君恩を子孫に伝えるため後世合祀された。

当社で特筆すべきは、「瓊々杵尊」の座像背後に、「奉勸請瓊々杵大明神至元卯九月吉日」の墨書である。「至元」という年号は中国元代のもので、我が国では南北朝時代の延元4年（南朝一三三九）、暦応二年（北朝一三三九）に当たり、在銘神像として稀に見る貴重な神像である。また「延文二年（一三五七）藤原輔女 清原 大般若経 奉納」と古記にある。

神宮寺であった白雲山神宮寺は、かつて十坊を数えたが成就坊のみが残り、ありし坊舎の面影を明治維新まで伝えたという。江戸後期に天保八年（一八三七）七月に当社の社庭は能勢騒動打毀しの発起点となり、そのときに各村村にひびき渡った早鐘は、この成就坊の釣鐘であった。

明治維新による神仏分離、続いて一村一社の神社統一により、同四十年十か村の氏神が岐尼神社に合祀された。また大正期にはいつて、当社の社司を尋ねた御歌所寄人の阪正臣氏の歌碑が木陰の中に建っている。また、『歌枕名寄』に「枳根社」とあり、次の和歌が出ている。

「おのつから 神の心に ならわしの きねか宮居の 月そさやけき」

# 山辺神社

やまべじんじや

## 御祭神

素盞鳴尊  
八耳太子命  
比売大神  
応神天皇  
源満仲

## 御神徳

## 例祭日

七月十日



鎮座地 豊能郡能勢町山辺一六一八一  
電話 〇九〇一七四一三二八四  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

当社の創建年代は詳らかではないが、推古天皇の御代、百濟の日羅上人が劔尾山を拓い月峯寺を創建した際、八耳太子がこの法筵に臨席の時、此の地に霊瑞があるとして、太子の命により素盞鳴尊を勧請した。これが当社の起源であると伝えられている。

二条天皇の長寛二年、当荘管領右衛門慰源義景が、夢感により勅を奉じて、八耳太子の自作の像を配祀した。

又、山辺下の宮に祭神二座があった。源満仲同満政で、源氏の苗孫がこれを祀ったものである。

安政の大風水害の時、宮祠が倒壊したために祭神を山辺神社に合祀した。

天文十四年十二月二日、丹波国八上城主波多野下野守秀春等が襲来して、月峯寺を焼き、翌日多田荘山下城主塩川伯耆守が襲い来って、当荘の士は兵を交えて当社を塞がんとしたため、神祠は破られ、什物は散失したが、同十八年七月二十三日神祠の上棟、寛文八年八月二十三日新たに再営が成った。

元禄十年六月三日宗源宣旨を以って正一位を授けられた。

明治四十年五月十三日字稻荷山無格社稻荷神社（宇迦之御魂神、応神天皇、火産多神）を合祀した。

明治五年村社に列せられ、同四十一年神饌幣帛料供進社に指定された。

# 倉垣天満宮

くらかきてんまんぐう

## 御祭神

菅原道真公  
応神天皇  
大山祇命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

七月二十五日



参道入口のサクラ



天然記念物  
天満宮のイチョウ

## 神社のおすすめ



鎮座地 豊能郡能勢町倉垣九八九  
電話  
HP

## 由緒

当宮の起源は、天喜二年九月二十五日に領主従五位下出羽守源頼基が、山城国北野天神の分霊を勧請して、山上に祀ったものである。

永久三年六月の早魃で人民困難の時、領主丹波守源義広が祈願したところ、忽ち雨が降り、五穀豊熟したので、社殿を造営して報賽した。しかし山上にあつては参拝に困難であるとして、天正十二年今の処に移したのである。

現在の社殿は嘉永元年の造営である。

明治五年村社に列し、明治四十年宇宮畑の若宮八幡神社、大字杉原ユリの八幡大神宮を合祀し、同四十一年神饌幣帛料供進社に指定された。

境内はおよそ二千六百坪を有し、本殿、拝殿、神輿庫、社務所等を存す。末社に諏訪神社、八幡神社がある。

境内には天然記念物の銀杏の大樹があり、天正十二年当時すでに「翠枝千歳なりき」といわれた。植物学上は、五〇〇年近い樹齢といわれる。(昭和十三年大阪府の指定をうける)

くらかきの 里に波よる秋の田はとしないかいこの 秋にそありける

匡房

# うたがきじんじや 歌垣神社

## 御祭神

速素盞鳴命  
天御柱命  
国御柱命  
国御分命  
応神天皇  
外一柱

## 御神徳

交通安全  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月十五日



手水舎



参道入口から拜殿を望む

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪府豊能郡能勢町倉垣一七六四  
電話  
HP

## 由緒

当社は、もと後背にある山腹一五〇尺余りの高地である巖石の上に、四坪ほどの大岩を天然の屋根として祀り、俗に岩神と称し、字岡崎、長尾両地の人民の崇敬が篤く、康保二年四月四日上弦午の日、始めて苗代祭りを行なった。

建久七年二月七日に、井上頼孝が社殿を今の所に移転した。

寛永二年二月領主の命により、祇園牛頭天王を勧請し、玉性坊の僧が奉侍した。

明暦元年八月領主能勢勝左衛門尉源頼春は、後背岩神の旧址に身延山の七面天女を移し、今に伝えている。

応長六年能勢撰津守源頼次の崇敬で、常免御供田二反余歩の寄附があつてより、領主交替があつても変更なく、先例により継続されていたが、第二次世界大戦後の農地開放によりなくなった。

玉性坊が神事にあたつていたが、明治維新後の神仏分離によって、寺は廃絶し、社は八坂神社と改称した。

明治五年村社に列し、同四十年七月十九日宇和田小守神社（天御分神・国御分神）、字小戸神社（天御柱神・天御分神）、大字山内字堂の丸の山王神社（大山祇神）、大字吉野字西山の八幡大神宮（応神天皇）を合祀し、大字山内字子ヶ坂の無格社八幡神社（応神天皇）、同大字笹谷の天満神社（菅原道真）、大字吉野字宮の上三十二柱神社を境内に移し、同時に村名を負わせて今の社名に改めた。

明治四十四年五月神饌幣帛料供進社に指定された。

合祀神社中、小守神社は寛治五年二月十日兵庫頭源頼光の建立。小戸神社は永正四年二月二日正四位下大和守源頼親二男頼遠の建立。又永承四年二月二十日山王神社従四位下、紀伊守源頼基の建立。八幡神社は寛治五年四月十五日吉野式部源頼吉の建立である。境内は八〇五坪有り、本殿、拜殿、神輿庫、社務所等を存す。末社に住吉神社、八幡神社がある。

# く さ さ じ ん じ ゃ 久佐々神社

(通称) 久佐々の大宮・宿野の大宮

## 御祭神

賀茂別雷神  
猿田彦命  
速素盞鳴尊  
大歳神  
応神天皇

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
五穀豊穰

## 例祭日

五月十六日



末社



長床



神社のおすすめ

鎮座地 豊能郡能勢町宿野二七〇  
電話 〇七二一七三四一〇一七  
HP

## 由緒

当社は延喜式内の神社で、官幣の小社に列せられ、往古より大宮と称し、近郷の崇敬厚く、草々明神とも云った。

社名は古来より地名に因んで久佐々神社と称したが、享保年中に宿野大明神と改め、更に享保十八年八月十一日正一位久佐々大明神と復称した。

地名の久佐々は、日本書紀卷十四雄略天皇の条に、「撰津国来狭々村云々」と見え、又続日本紀卷六元明天皇の条に、「玖左佐村山川遠随道路險難由是大宝元年始建館舎雑務公文一准郡例云々」とあり、当社はこの館舎の地であり、郡司によって奉斎されたものである。

明治五年十一月郷社に列せられ、同四十一年五月に神饌幣帛料供進社の指定を受けた。明治四十年に、大字宿野、大里、柏原、片山、平通、下田の各神社を合祀した。末社に大國主神社、事代主神社、豊受姫命神社、宇賀御魂神社、曾我神社がある。境内はおよそ二千坪に及び本殿、拝殿、神輿庫、長床、社務所等を存す。また、一華草という奇草がある。これは立春の日に開花して、花は白梅に似ており、一茎一花である。昔菅家の雲客がこの地に来た時、この花を持ち帰って寛文天皇に献上した。天皇はこの花を御覧になって、書に「一花開くれば天下みな春を知る」と記されたと伝えられている。撰津名所図絵に「この草今に在り、他所に移せども榮えず」と記されている。

# 原林神社

はらばやしじんじや

## 御祭神

速素盞鳴命  
大己貴命  
事代主命

## 御神徳

除災招福  
五穀豊穰  
商売繁昌

## 例祭日

十月十五日



樹齢約五百年の大杉（本殿東側）

## 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 豊能郡能勢町下田尻一六二  
電話 〇七二一七三七一一六六（宮司宅）  
HP

## 由緒

当社の創祀は、後冷泉天皇の永承二年（一〇四七年）と伝えられています。

明治期に田尻地区の小学校が建設される時に、神社の境内の一部が運動場として無償提供されました。（数年前、小学校が統合され、運動場は神社に返還される予定）

当時の児童たちにより、社庭から、縄文時代の鍬（やじり）が多数採集されました。

古老によると運動場拡張工事前には、古墳が数基あったといわれ、この地域は、四、五千年前から人々が住んでいたことが証明されました。

ご祭神から考えて出雲系の人々によりこの地域は開拓されたと考えられます。

また、古書によると「治承四庚子年（一一八〇年）田尻の三社を御室御所（田尻御所）が建立」とあり、鎌倉時代には延暦寺の天台三門跡の一つ妙法院領とは、田尻地区のことをさすといわれています。

京都に比較的近い土地柄のため、中世には朝廷や寺院の影響を強く受けていたと思われます。

江戸時代には、領主であった能勢氏の庇護を受け、本殿等が再建され現代に至っています。

### 近現代

明治に入り、地域の上区と下区のそれぞれの神社が合祀されました。（原林神社は中区にあります）

「大杉さん」と親しまれてきた樹齢八百年の杉が落雷により昭和五十七年に倒れました。今は、顕彰碑が一の鳥居の東側に建てられています。

# 高皇産霊神社

たかみむすびじんじや

## 御祭神

高皇産霊神

## 御神徳

## 例祭日

七月十九日

鎮座地 豊能郡能勢町天王二二四一  
電話 〇九〇一七二四一三二八四  
H P

御朱印なし



## 由緒

当社の起源は詳らかではないが、推古天皇の御宇、百濟の沙門日羅が劔尾山を開いて、月峯寺を創立した時、天野村（後の天王村）にも七堂伽藍を建設し、且つ宮ノ尾山林に牛頭天王・八王寺・稲田姫を勧請して、産土神と崇敬した。年がたつにつれ大破してきたので、徳治年中に社地を改め、宮尾に神社を再建し、延慶元年に吉辰を卜して遷座した。今里人が古宮と呼んでいるのは、即ち此の地のことで、社地の址が歴然として今も残っている。

由緒も詳らかではないが、遙かに年月を経て後に、村内に疫病が流行して絶えなかった。年を加えて益々繁くなり、村の人口の半を失った。たまたま宮山が鳴動して、三日三夜止まなかった。村人は色を失い、連日連夜相寄つて協議した結果、高僧を招いて神勅を請はしたところ、社地の上流に当る所に汚穢の墓地を設けたためであるとの神勅により、永祿二年六月十九日現在の地に遷座した。これより村里は繁栄したと伝えられている。明治五年村社に列し、同四十三年神饌幣帛料供進社に指定された。

# 豊能郡 豊能町

▶ 大阪府にもどる



# 走落神社

はしりおちじんじや

## 御祭神

天照大神  
建速素盞鳴命  
五十猛命  
水波能売神  
外六柱

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 豊能郡豊能町木代一五五六  
電話 〇七二一七三九一〇八七一  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

当社は、元小玉神社と称した。伝説によれば大永二年九月に当時同庄であった木代庄大圓村鎮座の延喜式内走落神社（後に藤森神社と改めた）の相殿にお祀りしてあった天照大神を木代村に移して小玉宮を建立し、少彦名命を切畑村に移して走湯天王社を建立したのが創めと言われている。

しかし、諸書に嘉吉、文明年中の施入文を当社に蔵せる由を記したものが発見されるし、当地が昔石清水八幡宮の神領であった関係上同宮の文明、永正年代の文書中にも往々小玉宮の名が発見出来る点から、大永（一五二二）の遷宮は全く誤伝で、其の創立年代は分らないが、嘉吉（一四四一）以前に在った事は間違いない。

その後弘治三年（一五五七）三月に名主岡信茂が再興、承応三年（一六五五）三月社殿造営の事あり以来二百余年を経て明治七年村社に列せられたが、同十一年二月境内神饌所より火を失し神饌所、幣殿、拝殿の全部を烏有に帰し所蔵の古記類もまた焼失した。明治二十七年本殿造営、二十八年祭器庫（太鼓庫）を新築した。

明治四十年村内の神社全部を当社に合併する事となり、同年十月二日より七日に渉りて合祀遷宮を奉仕した。

斯くて合併の事が終ると共に、曾て大永の昔に分離したと伝えられる、走湯神社、藤森神社、小玉神社三社の御祭神が再び同殿内に鎮座せられる事となったので、社号小玉神社を藤森神社の旧社号である「走落神社」と改めた。

# 八幡神社

はちまんじんじや

御祭神

応神天皇

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 豊能郡豊能町吉川九三六  
電話 〇八〇一三七七五ー二〇五〇  
H P <http://www.yoshikawahachiman.com/>

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年代及び由緒等は不詳である。  
社を合祀した。

明治四十年五月二十三日は無格社八幡神

お  
お  
と  
し  
じ  
ん  
じ  
ゃ

# 太歳神社

## 御祭神

稲田姫命  
素盞鳴命  
大己貴命

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 豊能郡豊能町牧西口一―三四  
電 話 〇七二―七三九―〇八七一  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建は詳らかでない。

お  
お  
と  
し  
じ  
ん  
じ  
ゃ

# 大歳神社

## 御祭神

稲田姫命  
大山咋命  
大己貴命

## 御神徳

## 例祭日

十月十六日

鎮座地 豊能郡豊能町寺田上東谷一五  
電 話 〇七二一七三九一〇八七一  
H P

御朱印なし



豊能郡豊能町

## 由緒

当社は人皇五十四代仁明天皇の御宇嘉祥三年四月二十三日の創建である。

# 吹田市

▶ 大阪府にもどる



# 伊射奈岐神社

いざなぎじんじや

(通称 山田神社)

## 御祭神

伊射奈美命  
天兒屋根命  
平力雄命  
天忍熊命  
蛭子命

## 御神徳

商売繁盛  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

十月スポーツの日の前日



風変りな狛犬さん



大阪府指定文化財の本殿



令和元年造営の大鳥居

## 神社のおすすめ



鎮座地 吹田市山田東二一三一  
電話 〇六一六八七七一五九二一  
HP <https://www.izanagi-jinja.com>

## 由緒

当社は延喜式内社で、延長五(九二七)年に編纂された『延喜式』神名帳に、「摂津国島下郡、伊射奈岐神社二座」云々とあり一座がこの神社であって、千里丘陵の中間で万国博覧会会場になった地域に隣接する高庭山に鎮座している。皇大神御霊と共に内裏に奉斎されていた豊受大御神の御霊が人皇第十代崇神天皇の御宇、皇居を離れさせられ、後に丹波国与謝郡(現在の福知山市)の比治真名井に遷し奉られたが第二十一代雄略天皇二十二年、皇大神の御神誨により現在の伊勢市山田、高倉山麓の山田ヶ原に遷座し奉られたとき、伊勢齋宮皇女倭姫命の御示教により、大佐々之命が、五柱の神を奉祀するべき霊地を諸国にもとめ、ついにこの山田の地に奉祀せられたと云う。

又山田と云う地名がこの様な処から山田原と称し、伊勢山田から名を移したものであると伝えられている。

貞観元(八五九)年正月從五位上を授けられたとの記録がある。『日本三代実録』貞観元年正月の条に「二十七日甲申京畿七道諸神進階及新叙惣二六七社云々、奉授撰津國從五位下、伊射奈岐神從五位上」。

延喜の制に大社に列し、祈年月次新嘗の祭祀に案上の官幣を預かった名祠である。明治六(一八七三)年郷社、俗に五社宮、姫宮とも称し山田町、千里丘、千里ニュータウンを含む産土大神である。

### 大阪府指定文化財

山田伊射奈岐神社本殿 「平成二十三(二〇一一)年一月十四日指定」

伊射奈岐神社は、平安時代中期に編纂された『延喜式』にも記載されている、古い歴史をもつ神社です。

現本殿は、建築様式などから十七世紀末頃(江戸時代中期)の建築と考えられています。大阪府下では希少な五間社流造で、端から中央に向かって柱間を広くしていることが特徴です。これは、中央の柱間を広くとり、両端ほど柱間を狭めることで、建物の安定性を高め、中央を強調する工夫です。臺股・木鼻・脇障子などの細部、妻飾などには華麗な彫刻が見られます。臺股内では龍・麒麟・象・鳳凰などの聖獣・瑞鳥・木鼻には麒麟、脇障子の「鯉の滝登り」など、見飽きることがなく、特に、妻飾の力士彫刻には活気が感じられます。これらの装飾性の高い彫刻は高く評価されています。

「平成二十七(二〇一五)年三月」吹田市教育委員会

# 泉殿宮

いづどのぐう  
(通称 泉殿さん)

## 御祭神

建速須佐之男神  
宇迦之御魂神  
住吉大神  
春日大神

## 御神徳

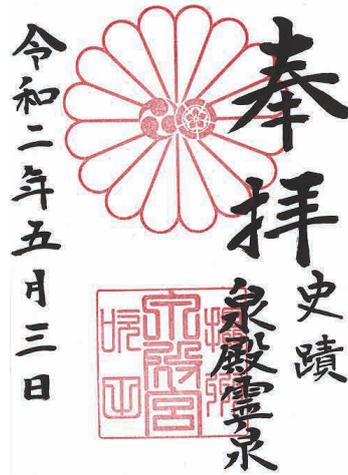
五穀豊穰  
厄除開運  
諸願成就

## 例祭日

五月三日



鎮座地 吹田市西の庄町一〇一  
電話 〇六一六三八八―五六八〇  
HP <http://www.i-dudono.jp/>



## 神社のおすすめ

久しく旱魃、疫病に襲われ境内土中より  
清泉忽然と湧き出し難を逃れた泉殿霊泉  
昭和四十五年万国博覧会建設の地鎮祭、  
立柱祭の斎主を奉仕し祭儀の元柱を奉建



泉殿霊泉



万国博覧会立柱祭の元柱

## 由緒

当宮往古は、次田ノ社と称え奉り、河内の次田連の祖神 天香山命を氏神として、五穀の神「宇迦之御魂大神」を祀る。第五十六代清和天皇貞観十一年（八六九年）当地久しく旱魃、草木は色を变じ、大河の流れも通わず、天下疫病流行し、諸民悉く枯渴に苦しむ。播磨「広峯神社」より王城鎮護の守り神として「祇園八坂神社」の御祭神として迎えられる「建速須佐之男神」の御神輿が、当宮にお立ち寄りになる。氏子が溢れんばかりに参り集い、大神に祝詞を奏上し、獅子頭を激しく振り、歎きを告げ、篤く雨を祈ると忽然と清泉土中より湧漲す。立ち処に、里人渴を免がれ、田畑隈なく灌水す。よつて建速須佐之男神を勧請し相殿として斎き祀る。この雨乞いの状と雨を喜ぶ童子の姿は、吹田市地域無形民俗文化財の「泉殿宮神楽獅子」の所作となる。

鎮座地の吹田西之庄は古史にも見え、御旅所には平安時代の「吹田殿址」の大阪府標石があり、仙洞御所御料地の産土神であり、吹田くわいも献上された。明治二十二年（一八八九年）「泉殿霊泉」をドイツのミュンヘンに送り、これビール醸造に適水との保証を得、当宮隣接地に同水系の湧水を以つて、東洋初のビール醸造工場（現、アサヒビール(株)吹田工場）建設の逸話がある。その後、近隣の都市化に伴い上水道は普及し、かつての広々とした水田が宅地に代わるのを見届けるかのようになり、霊泉は地中奥深くに水脈を移し今は湧水せず。史跡「泉殿霊泉」となる。

当宮は国家権力の保護を求めない庶民信仰に支えられたる諸社にして、創祀以来、氏子の信倚のもと、代々藤原姓南家「宮脇家」祀職を奉仕するところ、天保八年（一八三七年）大塩平八郎義兵の挙あり、当宮第三十二代宮司・宮脇志摩は、大塩平八郎の叔父に当たり、乱の主謀者として寺社方捕手役人の囲みに、この地にて切腹す。課刑峻烈にして男児悉く遠島、家門闕所となり社運も傾くかに見えたが明治維新と共にその義挙を認められ流刑地に生存の遺児すべて赦免・出島仰せ付けられ、家門再興、宮脇志津摩（しづま）・泉殿宮第三十三代宮司を嗣ぎ、社運再び赫赫として今に到る。

昭和四十五年「人類の進歩と調和」をテーマに開催、日本万国博覧会会場建設の地鎮祭・立柱祭等、一連の祭典は、当宮宮司が斎主を奉仕。祭儀使用の元柱「木曾五十年杉」は、当宮に奉建され無事の成功を祈念。日本万国博覧会が掲げた「科学の進歩と人間尊重の精神」が、永く受け継がれるべく、現在も境内に祀られている。

すさのおのみことじんじゃ

# 素盞烏尊神社

(通称 片山神社)

## 御祭神

素盞烏尊  
天照皇大神  
住吉大神

## 御神徳

厄除開運  
交通安全  
方位除け

## 例祭日

十月二十日



鎮座地 吹田市出口町三十三  
電話 〇六一六三八八―四〇七〇  
H P <http://katayama-jinja.jp/>

## 由緒

当社の創建年代は不詳であるが、古書に「風のはげしい日には海藻が打ち上げられ、一の鳥居にかかった」とある。境内地から、土器と共に貝殻が出土し、更に祭神三柱のうちに住吉大神が配祀されていること等から、往時の地勢や氏子民の生活の様子がしのばれる。

天正年間（一五七四）の兵火と、大正年間（一九一四）の二度の失火で、建造物一切が灰燼に帰し、現在の社殿は昭和五十九年（一九八四）老朽化に伴い再々建である。

# 素盞鳴尊神社

すさのおのみことじんじや

(通称 江坂神社・感神宮)

## 御祭神

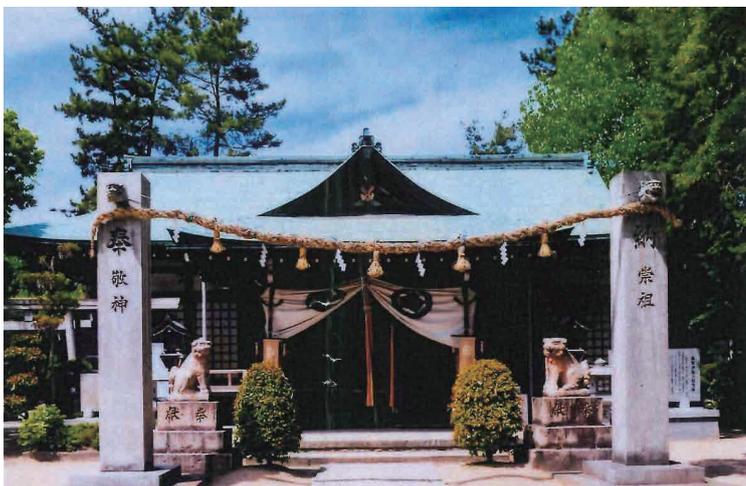
素盞鳴尊  
天照大御神  
誉田別尊

## 御神徳

庶民守護  
疫病祓除  
旱魃救済

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 吹田市江坂町三一六八一―一  
電話 〇六一六三八四一八四三四  
HP <http://www.esakajinja.or.jp/>



## 神社のおすすめ

御本殿は平成二十三年に吹田市指定文化財に指定されました。

〔特徴〕

一間社流造り千鳥破風付き。身舎に彩色を施す。



千鳥破風を付けた流造りの屋根



御本殿正面

## 由緒

古言い伝えによると、今から七〜八百年前、垂水の広芝と、小曾根の寺内にそれぞれお祀りされていた神祠(ほこら)を、この地に合祀したのが当神社の始まりといわれています。以来今日まで、旧豊嶋郡榎阪村(現吹田市江坂町)と、隣接した地域である旧豊嶋郡寺内村(現豊中市若竹町、寺内、東寺内)の氏神さま、産土神さまとして祀られ、庶民守護、疫病祓除などのご神徳のある神社として、広く崇敬を集めて参りました。表参道の鳥居に刻まれた天和三年(一六八三)の年号、旧拝殿の棟札に墨書された元禄十六年(一七〇三)の年号などから、歴史の古さを知ることができます。

境内各所には、江戸時代中期から後期に奉納された扁額、石灯籠、狛犬、絵馬などが多数残されており、庶民の崇敬の篤かったことがうかがえます。江戸時代の終わりまでは、神仏習合思想の影響により素盞鳴尊(すさのおのみこと)と、牛頭天王(ごずてんのう)・インド祇園精舎の守護神、疫病祓除の靈験がある。)が習合(同一視)され、また同じ素盞鳴尊をお祀りする京都祇園の八坂神社の古い社号をいただき、感神院とも称されました。

明治初年の神仏分離令により仏教色を廃し、現在の社号に改めました。昭和四十四年に拝殿、社務所などが改築され、現在の景観に整えられました。

# いなりじんじや 稲荷神社

(通称 蔵人稲荷神社)

## 御祭神

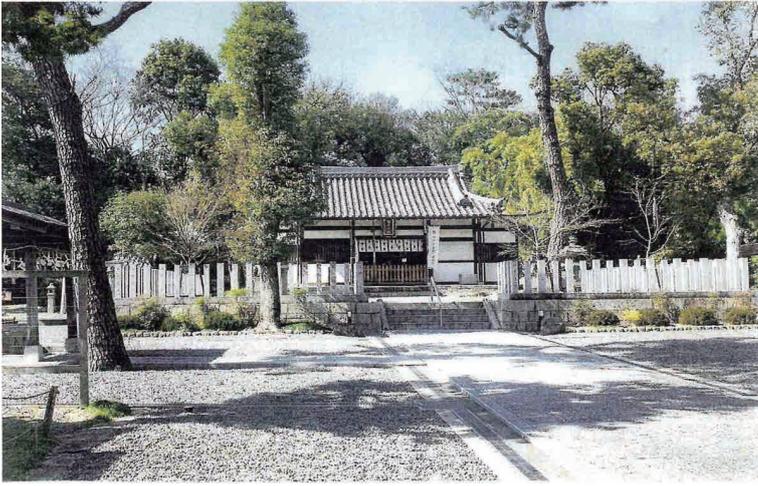
保食大神  
天照大御神  
豊受大御神

## 御神徳

商売繁盛  
交通安全  
五穀豊穡

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 吹田市豊津町三八一  
電話 〇六一六三三〇一〇二九〇  
HP



## 神社のおすすめ



狛犬



梵天太鼓



## 由緒

蔵人稲荷神社は、主祭神に穀物・食物の神である保食神をお祀りし、蔵人地域の鎮守の神として広く崇敬をあつめております。

元禄五(一六九二)年に書上げられた『榎坂村蔵人村社御改帳』によると、当神社の勧請年歴については「久遠」のことでわからないが、いまは「境内」に御本殿に「拝殿」「鳥居」「宮道」が揃った神社であると記載されています。おそらく当神社は、蔵人の村が成立したときからお祀りされるようになり、十七世紀後期には既に現在のような神社景観を成していたと考えられます。

当神社へ人々が寄せる崇敬の想いは篤く、江戸時代には神職がいなかったこともあり氏子が回り持ちで神役を務めていたといえます。また、氏子から田地の寄進があったようで、この宮田によって社殿の維持管理が行われていたという記録も伝わります。さらに、当地は旗本森氏三家一森次郎家・森左兵衛家一の支配となっていました。この三家の尊崇も篤く、毎年御供米が神前に献上されたという記録が残ることもわかります。

当社の本殿は、吹田市域において建築が十七世紀後期にまで遡る数少ない一間社流造社殿の一つで、古式を踏襲した優れた神社本殿建築の遺構であることから、平成二十三年四月十一日に吹田市指定有形文化財に指定されました。

# 伊射奈岐神社

(通称 千里、佐井寺神社)

## 御祭神

伊射奈岐命  
素戔嗚尊  
八幡大神

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

十月第二日曜日

鎮座地 吹田市佐井寺一ー一八ー二六  
電話 〇六一六三八〇一ー三七〇  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



## 由緒

当社は延喜式内の古社で、佐井寺一円の氏神である。式に載せられた二社の一つである。貞観元年正月二十七日従五位上を授かる。

社前にある一碑には、表に伊射奈岐神社一座と記し、裏に菅匡房と刻んである。

三代実録に「貞観元年正月二十七日甲申、京畿七道諸神進階及新叙惣二百七十六社、奉授撰津国従五位下、伊射奈岐神社従五位上」とある。

あたごじんじゃ  
**愛宕神社**  
(通称 愛宕さん)

御祭神

火之迦具土神

御神徳

例祭日

八月二十四日



吹田市

鎮座地 吹田市佐井寺二丁目四十一  
電話 〇六一六三八〇一三三七〇  
H P

御朱印なし

由緒

当社の由緒は不詳である。  
境内は一九〇坪あり、古くより山の神として信仰されている。

# あたごじんじゃ 愛宕神社

御祭神

火之加具土大神

御神徳

防災  
稼業繁栄  
方位除け

例祭日

八月二十四日



鎮座地 吹田市出口町三十三  
電話 〇六一六三八八―四〇七〇

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は不詳である。  
明治四十年八月十四日片山神社に合祀されたが、昭和三十八年五月二十日改めて宗教法人法に依る設立をした。

# かすがじんじや 春日神社

(通称 春日さん)

## 御祭神

春日大神  
八幡大神  
須佐之男大神

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月十日

鎮座地 吹田市春日三―三四三  
電話 〇六一六三八八一五六八〇  
HP <http://www.takano.jp/yukariFile/kesagayajinja.html>

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

全国の神社、特に吹田市内の神社には、市民の木である楠の大木を見かけますが、春日神社には、楠に加え招霊の木（おがたまのき）の大木が聳え立っています。



森に囲まれた境内地



右手に聳え立つ招霊の木

## 由緒

創建は村が出来た寛永三年から二十二年ののち、慶安元年（一六四八年）に建立されました。御祭神は春日明神を主祭神として祀り、八幡宮・牛頭天皇（こずてんのう）ス（サノヲノミコト）を祀る。（新田温故録）

元禄五年の寺社吟味帳によると、社殿は梁行老尺六寸 桁行式尺の平棟造、柿葺となつてゐる（新田温故録） 天明五年（一七八五年）には瓦葺に改修され（天保十年寺社明細帳）天保十四年の寺社明細帳では梁行三尺 桁行三尺式寸と大きく改築されております。

石の鳥居には天明八戊申年九月吉日と刻まれています。これはそれまでの高さ一間六寸の木造の鳥居をこの年、高さ八尺石造に改築したものである。天保十年寺社明細帳には寛政元年（一七八九年）石造に改築されたとするされています。

なお石段を上がると左右に石燈籠一対がありますが、これは元禄三年（一六九〇年）村人より寄進され、また境内の手水鉢は明和二年（一七六五年）村内の若者中から寄進されたものです。

社前にある左右の狛犬は比較的新しいものです。明治二十七年三月に建立、上新田と下新田の世話人の名前が刻まれています。（下新田郷土史より）

境内正面に本殿、右側奥に愛宕神社、右側手前に稲荷神社、左側奥に大峰山講の信仰の社、を構え、五穀豊穰、家内安全、無病息災に重ね、防火、雨乞いを祈り、春日の御先祖が大切に守り、春は豊作を祈り、夏は風水害のないことを祈り、秋は収穫を感謝し、村あげてのお祭りを行いました。

# 茨木市

▶ 大阪府にもどる



# 茨木神社

いばらきじんじや

## 御祭神

天児屋根命  
建速素盞鳴尊  
誉田別命

## 御神徳

五穀豊穰  
厄除開運  
諸願成就

## 例祭日

十月十日



大祓・輪くぐり神事



夏祭の神輿宮入り風景

## 神社のおすすめ

六月三十日には大祓・輪くぐり神事が行われる。また七月十三・十四日には夏祭が行われ、十四日の本宮祭では、氏子によって担がれた勇壮な神輿渡御が行われる。



鎮座地 茨木市元町四一三  
電話 〇七二一六二二一三三四六  
HP <https://www.ibarakijinja.or.jp>

## 由緒

当神社の創祀は、当社由緒書によると「大同二年（八〇七年）坂上田村麻呂が荊切の里をつくりしとき、天石門別神社が鎮座された」と伝え、明治十二年発行の「茨木村誌」や「大正十一年に纏められた『大阪府全志』」にも「大同二年二月坂上田村麻呂茨木町ヲ作ル」と記されています。そしてこの「荊切の里」は、今日の茨木市宮元町付近と伝えられています。

この処に人々が住み、天石門別神社を創祀した経緯や情況、坂上田村麻呂公との関係等については、何ら資料がなく明らかではありません。しかし、大同二年から逆上ること三年前、延暦二十三年（八〇四年）に坂上田村麻呂公は、和泉・摂津両国に天皇巡幸時の仮宮殿・行宮設定のために派遣され両国の各所を巡視されています。このような背景が起因しているのではないかと考えられます。

平安時代の延長五年（九二七年）に編纂された延喜式巻第九に撰津国嶋下郡十七座の一つとして、天石門別神社の名が記されています。それは、天石門別神社が編纂当時に官幣社として尊崇されていた神社であったことを意味し、今日では特に式内社と呼ばれます。爾来、中条村・茨木村の氏神として広く国主領主をはじめ多くの人々の崇敬をあためました。中世に入り楠木正成公が村近くに砦を築いて後、戦国時代には城郭が整えられ惣構形成の過程で、茨木村はそれまでの農村的集落から城下町へと変貌し、天石門別神社も現在地へ奉遷されたのです。

中川清秀公も当社への崇敬の念篤く、当社への狼藉を厳しく禁止する禁制の高札を掲げるとともに、天正八年（一五八〇年）には神領十三石を寄進しました。この時代、撰津名所図会（寛政十年・一七九八年）及び社伝によると高槻城主高山右近が、織田信長に倣い神社仏閣を焼却するに際し、信長が天照大御神、春日大神、八幡大神及び牛頭天王（素盞鳴命）の諸社は焼くべからずとしたので牛頭天王を祀ると詐称して焼却を免れたと伝えられています。そして、元和八年（一六二二年）素盞鳴命、春日大神そして八幡大神を祀る社殿を新たに築いて本殿とし、天石門別神社を奥宮として今日に至っております。

明治五年、明治の社格制度により茨木神社が郷社に列せられますが、氏子による元宮・天石門別神社への社格授与嘆願運動が起こり、明治十二年郷社に列することとなり、一境内に郷社が二社ある全国にも珍しい神社でもあります。昭和二十一年、神社制度の改革により宗教法人として新たに発足し現在に及んでいます。

# 磯良神社

いそらじんじや  
(通称 疣水神社)

御祭神 磯良大神

御神徳

交通安全  
病氣平癒  
厄除開運

例祭日 四月十五日



鎮座地 茨木市三島丘一四一二九  
電話 〇七二一六二二四八一五  
HP

奉拜



令和二年九月十五日

神社のおすすめ



霊泉「玉の井」(疣水)

## 由緒

当社の御祭神磯良大神は筑前志賀島の安曇氏の祖神であり、住吉三神と共に神功皇后の三韓へのご征途に際し、水先案内をされて航海の安全に功があったと伝えられる。

当社の社地は新屋坐天照御魂神社(当社の西北百メートル)の旧神域の一部であつて、寛文九年(一六六九)同神社が当時の神域の西北隅の現在の地に遷された際、同神社御祭神のうち霊泉「玉の井」と関わり深い磯良大神の御分霊をその背後にお祀りしたものである。

社伝によれば、神功皇后が三韓へのご征途に際し、天照御魂神社に御祈願あらせられ、玉の井の清水で顔を洗われた。するとみるみる疣や吹き出物に覆われて、醜い男のようなお姿になられた。これはご神慮の賜物と男装され、そのまま彼の地に向かわれ、凱旋の後再び玉の井の清水で顔を洗われると元の美しいお姿に戻られたと云う。

社頭の霊泉「玉の井」は昔ながらに清水を湛えており、一に「便の水」とも云う。『撰津名所図会』に「(前略)よるべの水は社頭の神水なり。世人此水を疣水といふ。ここに来て疣・黒痣を濯ふ時は、忽に抜落とぞ。天照御魂社の神水なれば面貌の疣に限らず、邪念の穢れを清め洗ふ時は、なかみとならざらんや。むかしはこの清水潤沢にして田畝数千頃を養ふ。後世社を北に遷し、ことごとく林樹を伐て墾開して田となす。これより清水漸涸れて水少となる。所謂君子不伐家木といふ事。故あることにや。(中略)撰津志には玉の井と書り。」とあり、疣水の霊験や新屋坐天照御魂神社の移転の事情が知られる。

「井保桜(疣桜)」は山桜の変種で、花は淡紅白色の八重咲き、花卉の数は二十三枚を数える珍しいものです。前述の『撰津名所図会』には「疣水の北にあり。此花木希代の大樹にして野辺に只一木ありて遠境より見えわたるなり。

根本より老間上より株二十余に別れて四方繁茂し小枝数千あり。一木の周り五十間許なり。(中略)浪花及び近隣より群来りて艶花を賞す。」とある。昭和二年天然記念物に指定され、桜としては大阪府唯一のものであります。しかしその頃には著しく衰え、昭和十八年には指定も解除されました。現在接ぎ木した二世樹を育てて郷土の名桜の保存に努めている。

# いのへのじんじや 井於神社

(通称 いお神社)

## 御祭神

建速素盞鳴命  
天児屋根命  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月十九日



鎮座地 茨木市蔵垣内三二五一一五  
電話 〇七二一六二二一四八一五  
HP <http://io-jinja.org>



## 神社のおすすめ



弘化三年奉納算額  
江戸時代の算術「和算」を知る貴重な資料として拝殿に掲出してあります

## 由緒

井於神社の創建年代は明らかではありませんが、平安初期、延長五年（九二七年）に編纂された延喜式神名帳に「井ノヘノ神社」と記載されていることから、千余年以上の昔に御鎮座されました。

当社は元々三宅村宇野辺に鎮座し、「井於連」が氏神として崇敬した井の神（水・泉の神）で、三宅郷の田畑の灌漑用水を守らせ給う神として、篤い信仰が捧げられておりました。その昔、雨が降らず干魃になると氏子の若衆が藁で龍を作り、雨乞いの祈願を行なった後、龍を担いで村中を練り歩き、池中に投じることで水の神の恩恵に感謝していたと伝えられています。

当社が現在の場所（茨木市蔵垣内）に遷座されたのは、享徳年中（一四五二〜一四五四四年）のことであり、永正年中（一五〇四〜一五二〇年）に三宅城城主・三宅出羽守国村公により、天児屋根命が勧請され当社の相殿におまつりされたとあります。又、素盞鳴命を祀るようになったのは、織田信長の頃、社が兵火で焼かれるのを免れるために、信長公が崇敬しておりました素盞鳴命をお祀りしたと伝えられ、その後当社の祭神とし、勧請されました。江戸時代には、主祭神、相殿（二座）の三座の大神様を合わせて「三所明神」と称されていました。明治五年には郷社に列し、同四十三年九月二十八日、宇野辺の八幡神社、鶴野の皇大神社、丑寅の皇大神社が境内に合祀され、今日まで三宅の郷の産土神として、御鎮座されております。また、親しみを込め、「三宅神社」と称されることもあり、篤い信仰を集めております。

# 郡神

こ  
お  
り  
じ  
ん  
じ  
ゃ

## 御祭神

天兒屋根命  
素盞鳴命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰

## 例祭日

十月二十日



鎮座地 茨木市郡三一二一四八  
電話 〇七二一六四三一六九〇三  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建は不詳。  
摂津国島下郡の郡・下井・上野・郡山・五日市・畑田地区の氏神。  
元、北殿垣内の宮田にあり、春日大明神と呼ばれた。  
明治二年に現在地に移転、郡神社と呼ばれ、明治四十一年五月神饌幣帛料供進社に指定された。  
明治四十一年六月、畑田宇賀神社を合祀した。

かすがじんじや  
**春日神社**  
 (通称 庄春日神社)

**御祭神**

天児屋根命  
 応神天皇  
 大山積命  
 大国主命

**御神徳**

家内安全  
 武運長久  
 産業興隆

**例祭日**

十月十四日



お盆の神事「百燈祭」



天保八年の銘のある大鳥居

**神社のおすすめ**

特殊神事として、お盆の神事「百燈祭」(八月十五日)を斎行。縁ある御霊、各氏子の祖霊を神火に迎え、送る神事です。



※他朱印あり

鎮座地 茨木市庄一〇一六  
 電話 〇七二一六二五十三〇七四  
 H P

**由緒**

創始の年月日は不詳なれど、大阪北摂には、古代後期より、奈良春日大社や中臣氏の莊園(莊・庄)がみられることから神霊を勧進、多くの春日神社が創立されたと考えられる。当地茨木には九つの春日神社が現存することからも考証できよう。当社に現存する古い建造物は、享保十年五月の刻字のある手水鉢、天保八年八月の刻字のある鳥居がある。

当社の御祭神は、多くの春日神社が祀る「春日四柱」とは異なり、春日大神は天児屋根命だけである。「春日神社」でありながら、応神天皇、大山積命、大国主命という名だたる御祭神の組み合わせは全国に類を見ない珍しいものである。

大正十一年刊行の『大阪府全志』によると、「春日神社は旧莊村にあり、天児屋根命、応神天皇、大山積命、大国主命を祀れり。由緒は詳らかならず。明治五年村社に列せらる。境内は五百式坪を有し、本殿のみを存す。末社に恵比須神社あり。氏は旧莊村、同戸伏村の内にして、祭日は十月十四日なり。」とある。(莊村は庄村の異表記)なお、現在、末社は廃絶している。

当社はもと、阪急電鉄を跨ぎ南「橋の内町安威川畔」にあったが、河川の氾濫、鉄道の敷設等の事案により、幾度となく遷座、昭和三十九年「大字戸伏字庄二九番地の池地」(現在地の庄一丁目)に遷座し今に至る。今日では、庄地区の氏神様として、地元各自治会を参与・委員とし、神社運営委員会を組織し、運営されている。また春日信仰の社としても広く崇敬を集めている。

こうたいじんぐう  
**皇大神宮**

**御祭神**

天照皇大神  
宇賀御魂神  
布留魂神

**御神徳**

**例祭日**

十月十五日



鎮座地 茨木市大字車作六一九一  
電話 〇七二一六四九一三七三〇  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

**由緒**

当社の由緒は詳ならず。  
明治五年村社に列せられる。

# 佐奈部神社

さなべじんじや

## 御祭神

春日大神  
応神天皇

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
諸願成就

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 茨木市稲葉町一六一二六  
電話 〇七二一六三三一〇九六四  
H P



## 由緒

当社の由緒は不詳である。明治五年村社に列せられた。

# 天満宮

てんまんぐう  
(通称 田中天満宮)

御祭神 菅原道真

御神徳 学業成就  
合格祈願  
出立安全

例祭日 十月二十五日



神社のおすすめ



鎮座地 茨木市田中町七一三七  
電話 〇七二一六二二一〇二五  
HP

## 由緒

神社創建年月は、数回の火災と安威川、茨木川の氾濫時の冠水等により、資料が喪失し不詳となっています。創建時の逸話として、菅原道真公が時の左大臣藤原時平の謀略により、昌泰四年（九〇一）正月二十五日太宰府権師に左遷され、二月一日京都紅梅殿の梅に別れの歌を残し出発、山城国「長岡」でひと休みの後、当地「田中村」で泊まられました。時平はざん言が発覚するのを恐れていたので、警護の役人に旅立つ前に申し渡していました。役人は一番鶏（当時の定めで一番鶏が鳴けば出発することになっていた。）を何とか早く鳴かすよう厳しい命令を出しました。村人達は何とか鳴かすことが出来なかつた様々な工夫をしましたが、鳴きません。「おまつ」ばあさんも工夫をしましたがダメでした。その日は寒い日だったので、鳥小屋に炬燵を入れてやりました。炬燵のぬくもりで鳥の勘が狂ったのか、夜八つ時（今の午前二時）突然「おまつ」ばあさんの小屋から「コケッコ」と大きくて元気な鶏鳴が二声三声聞こえ、村中が起きだし、「お立ち」と言う役人の声が出て、行列は茨木村から大阪街道に入り、尼崎の大物の浦から便船に乗り太宰府へと向かわれました。街道に出て見送りしていた村人達は昨夜の恐い役人達を思い出し、お咎めもなかったことに「ホッ」としました。その後、宿泊跡に神社が建てられたのが天満宮です。

また、文献の書き写し等から、「当村人民漸く繁富し遂に一社を創建する。」とあります。境内二の鳥居は元禄九年（一六九六）の建立で、文政七年（一八二四）献灯台より火災に遭い、その早魃にて長く再建されず、漸く天保三年（一八三二）大降雨ありて五穀豊穰となり再建されました。その後明治五年村社に列せられ、又、当宮の境内は明治までは二の鳥居までで、その前の細い道が昔の茨木街道の支線として西国街道に結ばれていました。明治になり、新しい広い道（旧府道）が完成。旧街道より新道までの道を譲り受け参道となりました。

一の鳥居の額「天満宮」は小松宮彰仁親王の御親筆によるもので、戦争中は前の街道を通る兵隊達が「額」に向かって敬礼をして通りました。

平成二年五月二日未明、御社殿が全焼しましたが、氏子崇敬者の熱意で翌年五月再建できましたことは、大神様の御神徳の御蔭とされています。今日、田中地区や、周辺地域の氏神様、産土神様として篤い信仰を集めています。

かすがじんじや  
**春日神社**  
(通称 倍賀春日神社)

御祭神

天児屋根命

御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
学業成就

例祭日

十月十七日



鎮座地 茨木市春日五―六一―  
電話  
H P

御朱印なし

● 神社のおすすめ

年間行事

一月一日 歳旦祭  
四月第三日曜日 祈年祭(春祭り)  
九月一日 八朔祭  
十月第三日曜日 例祭(秋祭り)  
十一月二十三日 新嘗祭

由緒

当社の由緒は詳らかでない。  
明治五年村社に列せられる。

大正七年一月二十一日無格社天満宮を合祀した。

境内は一九八坪を有し、本殿、拝殿がある。社側の耕地中に冷泉松井がある。里伝によれば、小栗判官の悪病に罹った時に、この水に浴して神前に祈願し、願意成就したので松樹二株を植えてより、水を松井の水と呼び社を松井の森と称するようになったと云う。

社前に古石燈籠一基があり、蒼古でかつ精巧の作である。銘記があり表に「延慶二巳辰八月紀国弘 高良社」裏に「摂洲島下郡春日村」とある。重要文化財に指定されている。

# かすがおかはちまんぐう 春日丘八幡宮

御祭神

応神天皇

御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 茨木市南春日丘四一―一四四  
電話 〇七二一六二六一八四三七  
HP



## 神社のおすすめ

- ・春季奉納体育祭
- ・夏越の大祓（茅の輪くぐり）
- ・夏季ふるさと祭りで模擬店出店
- ・福もちつき（一二〇キログラム）
- ・節分祭赤鬼青鬼の豆まき
- ・合格祈願石の新設（令和元年）



節分祭での赤鬼、青鬼



春季奉納体育祭での玉入れ

## 由緒

本八幡宮は昭和十三年春日丘住宅地開発にあたり、当地の守護神として松沢池畔の丘上に一字を建立し春日丘八幡宮と称え、御祭神は八幡宮の分霊を歎請して、誉田別尊、（応神天皇）を御祀り申し上げました。

尊は内外の政治に大御心を用いられ、文学を奨励し殖産興業を盛んにし、また数多くの池溝を開いて灌漑の便を計り、大船を作られて交通の道を開かれたと承つて居ります。昭和二十三年、現在の春日丘公園に移転、昭和三十五年に宗教法人となり、同時に境内約六百坪を公園敷地と分離しましたが、永年住民の念願でありました拝殿造営の念が稔り、昭和四十年十一月に完成致しました。

側宮と致しまして金比羅宮、稻荷神社、石槌社の三社をお祀り申し上げております。現在では春日丘地区の氏神様として地域の諸団体と連携を強め、各種地域行事に積極的に参画しております。

なお神社運営につきましては、各地区からの三十数名の神社総代により、「神社総代会」の名の元に、氏子と一致協力し氏神様の永代護持を計ろうと鋭意努力中でございます。

かすがじんじや  
**春日神社**  
(通称 中穂積春日神社)

御祭神

天児屋根命  
外二柱

御神徳

例祭日

十月二十日



茨木市

御朱印なし

H 電話  
P 鎮座地 茨木市中穂積二一六―二一

由緒

当社の創建年代及び由緒等是不詳である。  
明治五年に村社に列せられた。

かすがじんじゃ  
**春日神社**  
(通称 下穂積春日神社)

御祭神

天児屋根命

御神徳

例祭日

十月二十日



鎮座地 茨木市下穂積三十一三十一三  
H 電 話  
P

御朱印なし

由緒

当社の創建年代及び由緒は不詳である。  
明治五年に村社に列せられた。

# かすがじんじや 春日神社

御祭神

天兒屋根命

御神徳

例祭日

十月十六日



鎮座地 茨木市豊川一丁目三十一  
電話

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建、由緒等は詳らかでない。  
明治五年村社に列す。

かすがじんじや  
春日神社

御祭神

天兒屋根命

御神徳

家内安全

例祭日

十月十八日



鎮座地 茨木市西穂積町四―三  
電話  
H  
P

御朱印なし

由緒

かすがじんじや  
**春日神社**  
(通称 奈良春日神社)

御祭神

天児屋根命  
外四柱

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 茨木市天王 一―一―三二  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

創建された年代は不詳ですが、往昔当村住人である三宅石雄の妻は藤原氏の出身であり、子無きを憂い大和国春日大明神に祈った末、男子を出産しました。故に御神威を崇み大神（天児屋根命）を勧請して地名を奈良と呼び、安産の神として崇敬されるようになりまし。その後、春日神社と称して全村崇敬の誠を捧げ奉ってきました。当時の神事祭等は大和国奈良の神職三人が来村して齋行したと伝えられています。

明治五年村社に列せられました。

昭和三十八年大阪府道中央環状線建設に当たり、境内及林地の一部を道路敷地として提供したので、社殿の位置を南方に二十米、有姿のまゝ移築されました。（昭和三十九年二月完了）

# 佐和良義神社

## 御祭神

加具土神

## 御神徳

家内安全  
火災厄除

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 茨木市美沢町九一二七  
電話 〇七二一六二二一八六八九（井於神社）  
HP

御朱印なし

神社のおすすめ



## 由緒

当社は古来茨木川堤防際にあり、延喜式内の神社であるが、創建の年代は明らかではありません。沢良宜東、西、浜の三大字の産土神で、社地はその入会地と伝えられています。

明治五年村社に列せられ、然るに同四十年八月二十三日強雨出水の為、茨木川堤防が決壊し社殿が流出したので再建に着手し、大正六年五月二十八日に本殿、同年六月二十八日に拝殿及び神器具庫が竣工しました。

境内付近には東奈良遺跡があり、弥生時代の銅鐸鑄型を始め住居跡や土器、土壙墓などが多数発見されました。

境内社には八幡神社があり、沢良宜城の鎮守社として祀られていたものと伝えられています。

境内地は千余坪、元茨木川緑地（桜通り）に隣接しており、四季折々の自然を感じられます。

# 須賀神社

すがじんじや

御祭神

速素盞鳴尊

御神徳

例祭日

十月十三日



鎮座地 茨木市鮎川二丁六一四五  
電話  
H P

御朱印なし

神社のおすすめ



由緒

当社の創祀の年月及び由緒等は詳だかではない。

# 太田神社

お  
お  
だ  
じ  
ん  
じ  
ゃ

## 御祭神

速素盞鳴尊  
天照皇大神  
豊受皇大神

## 御神徳

## 例祭日

十二月十日



神社のおすすめ

鎮座地 茨木市太田三一五一一  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社創建の年代は詳だかではないが、延喜式内社である。鎮座地名並に神社名を太田と称えるのは、往古は中臣太田連が当地に居住し、其の氏神として奉祀したものである。

当地は戦国時代屢々戦乱の巷となった為め、兵火の災に遭い社殿記録も失い、由緒沿革も明確でない。往古は祭神一座であったが、現在の御祭神に変ったその間の事情も明らかでない。

江戸時代には、当神社は土俗太神宮とも又相殿三座内宮外宮天王宮とも称えていた。明治五年村社に列せられた。

# 新屋坐天照御魂神社

(通称 新屋神社)

にいやにますあまてるみたまじんじゃ

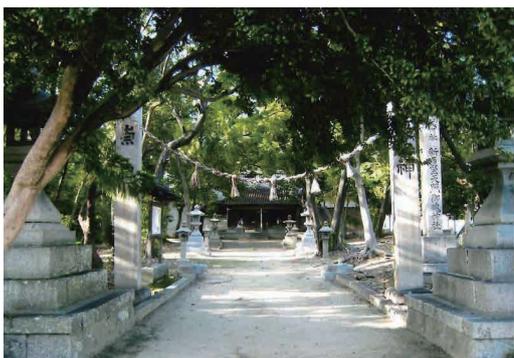
## 御祭神

天照国照彦火明命  
天児屋根命  
建御名方命

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



## 神社のおすすめ

## 御朱印なし

鎮座地 茨木市西河原三一一二  
電話  
HP

## 由緒

新屋神社・天照御魂神社ともいう。

当社の創祀は詳らかではありませんが、延長五年(九二七)に成った『延喜式』に「新屋坐天照御魂神社三座」とあり、三座はいつでも特に靈験あらたかな神に与えられた名神の称を受ける旧三島郡唯一の大社であり、中でも天照御魂神一座は相嘗祭に預かる四十社七十一座に加えられ、当時非常に格式高い神社であったことが窺われる。

大同元年(八〇六)には新屋神に封一戸が寄せられ(『新抄格勅符抄』、貞観元年(八五九)には新屋天照御魂神に従四位下を授けられる『三代実録』)。

社名の「新屋坐」は鎮座の場所を示すものであって、西河原の旧名は新屋村であり、『和名類聚抄』に「新野」の郷名をあげているのが「野」と「屋」の違いがあるがこれにあたる。言い伝えによれば、『神功皇后三韓への征途にあたり新屋の河原にて大祓をなされ、新しく屋を建て人馬を休息させられた。勝利を収め凱旋され、新屋の社に幣帛を奉られた。後世新屋を神社名に冠するに至る。』とあり、新屋の名の起りを伝えている。当時は神域も広大にして近隣七ヶ村の総社として上下の崇敬篤く神事も盛大に執り行われていたが、天正(一五七三〜一五九二)以後社領を失い、神域も縮小され、神事も振るわなくなつたという。

寛文九年(一六六九)新田開発のため神域の西北隅にあたる現在の地に遷され、境内社である東之神社(応神天皇・住吉大神・磯良大神)の社殿が造営され、同十二年その西隣に一回り小さい御本社の社殿が造営された。拜殿も東之神社の正面に建てられている。当時信仰を集めていたのが、八幡神を祀る東之神社であったことが窺い知れる。因みに当社から分祀された総持寺の八幡太神宮も八幡神である。

# 八幡太神宮

はちまんだいじんぐう

## 御祭神

応神天皇  
天照皇大神  
天児屋根命

## 御神徳

## 例祭日

十月十三日

鎮座地 茨木市総持寺一―一六―四五  
電話  
H P

御朱印なし

神社のおすすめ



## 由緒

当社の氏地の茨木市大字総持寺（現在総持寺一丁目）及び大字中城（現在中総持寺町、総持寺二丁目）は往古は新屋坐天照御魂神社（茨木市西河原鎮座）の氏地であったが後世（徳川時代の初期）西河原村と総持寺村との間に争い事があったため相別れて、総持寺村の西端八幡山に両村の氏神として奉祀されたのである。

其の後真言宗総持寺の境内に移祀されたが、明治四年十二月神仏分離のため大字総持寺字桐山に奉遷され、次で明治二十五年一月二十八日字桐山より現在の鎮座地大字総持寺字東垣内（総持寺一丁目）に奉遷され今日に至ったのである。

# 牟礼神社

むれじんじや

## 御祭神

建速素盞鳴尊  
天兒屋根命

## 御神徳

## 例祭日

十月十四日



鎮座地 茨木市中村町五―七  
電話

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社は延喜式内社であり、往古は牟礼別祖である大中津日子命を祀っていましたが、天正年間に織田信長が諸国の社寺を焼いた時、この劫火を免れようとして信長の敬う牛頭天王・春日神であると詐称したものが真実となって、現在の二祭神となりました。社地はもと牟礼村の東にありましたが、宝永元年十一月字中村に奉遷しました。その後昭和十四年安威川改修のため、八月一日現在地に移し、その際社殿も改築しました。現今の本殿等は、慶長十一年片桐且元の建築した生國魂神社末社北向八幡宮の建物を譲り受けたものです。

明治五年に村社に列しました。

# 飯原神社

い  
いは  
ら  
じん  
じゃ

御祭神

宇賀御魂神

御神徳

例祭日

二月十一日



鎮座地 茨木市大字安元二五二  
電話  
H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳ならず。  
明治五年村社に列せられる。

おおとしじんじや  
**大歳神社**

御祭神

宇賀御魂神

御神徳

例祭日

二月〜三月吉日



鎮座地 茨木市大字大岩一七三  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

**由緒**

当社の由緒は詳ならず。  
明治五年村社に列せられる。

かすがじんじや  
春日神社

御祭神

宇賀御魂神

御神徳

例祭日

十月十六日



鎮座地 茨木市清水二丁目一〇一  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

# 皇大神社

こうたいじんじや

御祭神

天照皇大神

御神徳

家内安全  
五穀豊穰

例祭日

四月十五日



鎮座地 茨木市沢良宜東町一―一四  
電話 〇七二―六二二―八六八九（井於神社）

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年代及び由緒は不詳である。  
境内は八五坪ある。

# 須久久神社

すくくじんじや

御祭神

素盞鳴命  
稲田媛命

御神徳

例祭日

十月十六日

鎮座地 茨木市宿久庄四―二―三三  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は延喜式内社、聖武天皇天平十二年中臣清麻呂の奉遷されたもので、其の祖神を祀った。明治五年村社に列せられた。



# 素盞鳴尊神社

すさのおのみことじんじや

御祭神

素盞鳴尊

御神徳

家内安全  
厄除開運

例祭日

四月十四日

鎮座地 茨木市沢良宜西一―一六―三一  
電話 〇七二―六二二―八六八九（井於神社）  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年代及び由緒等は詳だかではない。  
境内地は八七坪である。



すさのおのみことじんじゃ

# 素盞鳴尊神社

御祭神

素盞鳴命

御神徳

例祭日

十月十日

鎮座地 茨木市大字清阪二〇五―一  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳ならず。  
明治五年に村社に列せられる。



すさのおのみことじんじや

# 素盞鳴尊神社

御祭神

素盞鳴命

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 茨木市大字下音羽四九九  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳ならず。  
明治五年に村社に列せられる。

# 素盞鳴尊神社

すさのおのみことじんじや

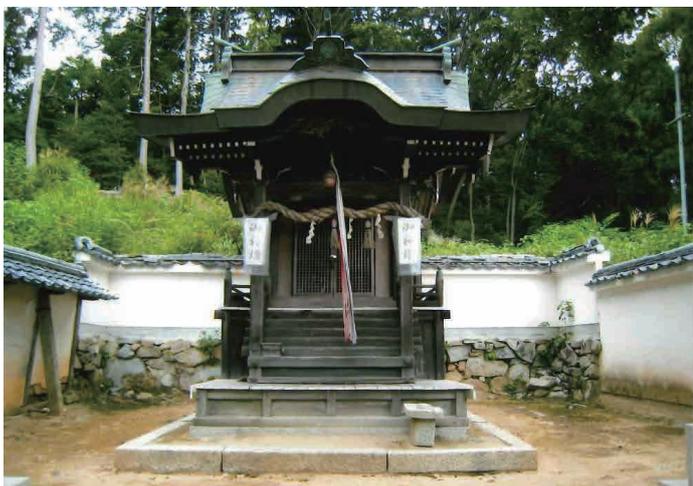
御祭神

素盞鳴尊

御神徳

例祭日

十月第二日曜日



鎮座地 茨木市大字泉原一三三八  
電話  
H P

御朱印なし

神社のおすすめ



## 由緒

当社の由緒は不詳である。明治五年村社に列せられた。

# 諏訪神社

すわじんじや

## 御祭神

建御名方神  
天児屋根命  
大山祇命  
速素盞鳴尊

## 御神徳

## 例祭日

十月十日



● 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 茨木市大字生保一三八―五三  
電話  
H P

## 由緒

当社の由緒は不詳である。明治五年村社に列せられた。  
平成十八年安威川ダム建設工事に伴ひ、集落と共に現在地に移転改築された。

# 諏訪神社

すわじんじや

御祭神

建御名方命

御神徳

例祭日

十月第二日曜日



鎮座地 茨木市大字泉原一三三一二  
電話  
H P

御朱印なし

神社のおすすめ



由緒

当社の由緒は不詳である。もとの無格社である。

# 天満宮

御祭神  
菅原道真

御神徳

例祭日  
十月吉日



鎮座地 茨木市大字上音羽六二八  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳ならず。  
明治五年に村社に列せられる。

# 天満宮

てんまんぐう

御祭神

菅原道真

御神徳

例祭日

七月二十五日



鎮座地 茨木市大字千提寺三三四  
電話  
H P

御朱印なし

神社のおすすめ



由緒

当社の由緒は不詳である。  
明治五年村社に列せられた。

# 道祖神社

どうそじんじや

御祭神

猿田彦命

御神徳

例祭日

十二月十日



鎮座地 茨木市豊川一―二九―五  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。

# 道祖神社

どうそじんじや

## 御祭神

猿田彦大神

## 御神徳

五穀豊穡  
みちひらき

## 例祭日

四月十一日



鎮座地 茨木市高浜町一丁目四八  
電話 〇七二一六二二一八六八九（井於神社）  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年代及び由緒は詳らかでない。  
境内地は七三坪ある。境内末社に水神社がある。

にいやにますあまてるみたまじんじゃ  
新屋座天照御魂神社

御祭神

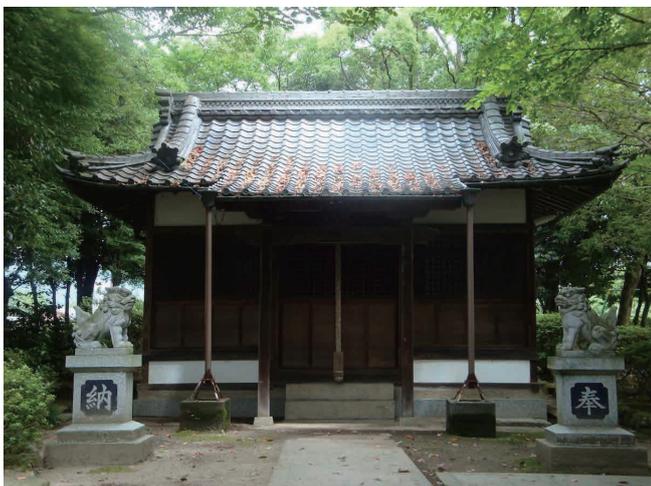
鎮座地 茨木市宿久庄五―一七―一  
電話  
HP

御神徳

例祭日

十月十六日

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



はちまんじんじゃ  
**八幡神社**  
(通称 はちまんさん)

御祭神

応神天皇

御神徳

例祭日

二月〜三月吉日



茨木市

鎮座地 茨木市大字大岩六七四  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

当社の由緒は詳ならず。

# 八幡大神宮

はちまんだいじんぐう

御祭神

応神天皇

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 茨木市大字銭原一〇二三  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

当社の由緒は詳ならず。

ふじしろじんじゃ  
藤代神社

御祭神

応神天皇

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 茨木市粟生岩阪六八〇  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

# めくじんじや 女九神社

## 御祭神

継体天皇后妃 九柱  
手白香皇女  
目子媛  
外七柱

## 御神徳

良縁成就  
安産守護  
除災招福

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 茨木市東太田三十五一三二  
電話 〇七二一六二二一〇二五  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ



## 由緒

### 祭神

祭神の「女九姫」については、確たる資料はないが、第二十六代継体天皇の皇后、手白香皇女（父第二十四代仁賢天皇、第二十九代欽明天皇の母）と、他に八柱の御后（目子媛、稚子媛、広媛父・坂田大保王、閑媛、倭媛、夷媛、広媛、麻績娘子）合わせて九柱の神で「女九神社」と言われている。

一説では、継体天皇がまだ即位される前の最初の后「尾張連草香の娘、目子媛（第二十七代安閑天皇、第二十八代宣化天皇の母）」を祀るとも言われている。

社号より案ずるに、所謂女九は目子に通じ、また、皇妃九柱の女神九人で女九であり何れとも断定なし難し。往時より安産の神、良縁の神として女性の信仰を集めている。

### 創建

当社創建年代は不詳なるも、天皇崩御の年とあまり隔たりはないものと考えられる。摂津名所図会（一七九八）によれば継体天皇崩御の時、十二皇妃の内九人殉死せられしを陵の傍に葬りその霊を祀るとある。現在の女九神社は、江戸時代宝暦年間（一七五一～一七六四）創建されたのではないかと推測されている。

享保三年（一七一九）大阪奉行所・高槻藩が調査により、当地地元五村民の入会山として管理整備も良かった茶臼山古墳を継体天皇陵とされ、その図面が作成された。その後、陵墓の下位の上野の杜に天皇の御后をお祀りされた。

### 建造物

本殿（二間社流造、桧皮葺）、覆殿、拝殿、手水舎、社務所、鳥居（寛政九年・一七九七）、灯籠二基（宝暦十四年・一七六四）、狛犬二対、記念碑（大正天皇の師団対抗大演習）観覧記念 茨木維昭男爵（書道大家）筆

末社（境内）

牛頭天皇

# 八坂神社

やさかじんじや

御祭神

速素盞鳴命  
応神天皇

御神徳

例祭日

五月十日



鎮座地 茨木市東太田二一八―四  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は大永元年二月に創建された。もと無格社である。

# 八やさ阪か神じん社じゃ

御祭神

御神徳

例祭日

十月十六日



鎮座地 茨木市宿久庄一丁目九十一  
電話  
H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

# 八所神社

はつしよじんじや

## 御祭神

応神天皇  
加茂別雷神  
大山祇神  
天兒屋根命  
外四柱

## 御神徳

## 例祭日

成人の日



鎮座地 茨木市忍頂寺三〇五  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳かならず。



いなりじんじゃ  
**稲荷神社**  
(通称 楠さん)

御祭神

楠大神  
伯光大神  
玉姫大神

御神徳

例祭日

五月一日

鎮座地 茨木市大字水尾三丁三十九  
電話 〇七二一六三三一〇九六四

H  
P

御朱印なし

由緒

# 稲荷神社

いなりじんじや

御祭神

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 茨木市粟生岩阪六六七  
電話  
H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

猿田彦神社

さるたひこじんじや

御祭神

鎮座地 茨木市大字水尾七四六  
電話 〇七二一六三三一〇九六四  
H P

御神徳

家内安全  
学業成就

例祭日

十月十七日



すさのおのみことじんじゃ  
**素盞鳴尊神社**

御祭神

鎮座地 茨木市稲葉町一六一二六  
電話 〇七二一六三三一〇九六四  
H P

御神徳

厄除開運  
除災招福

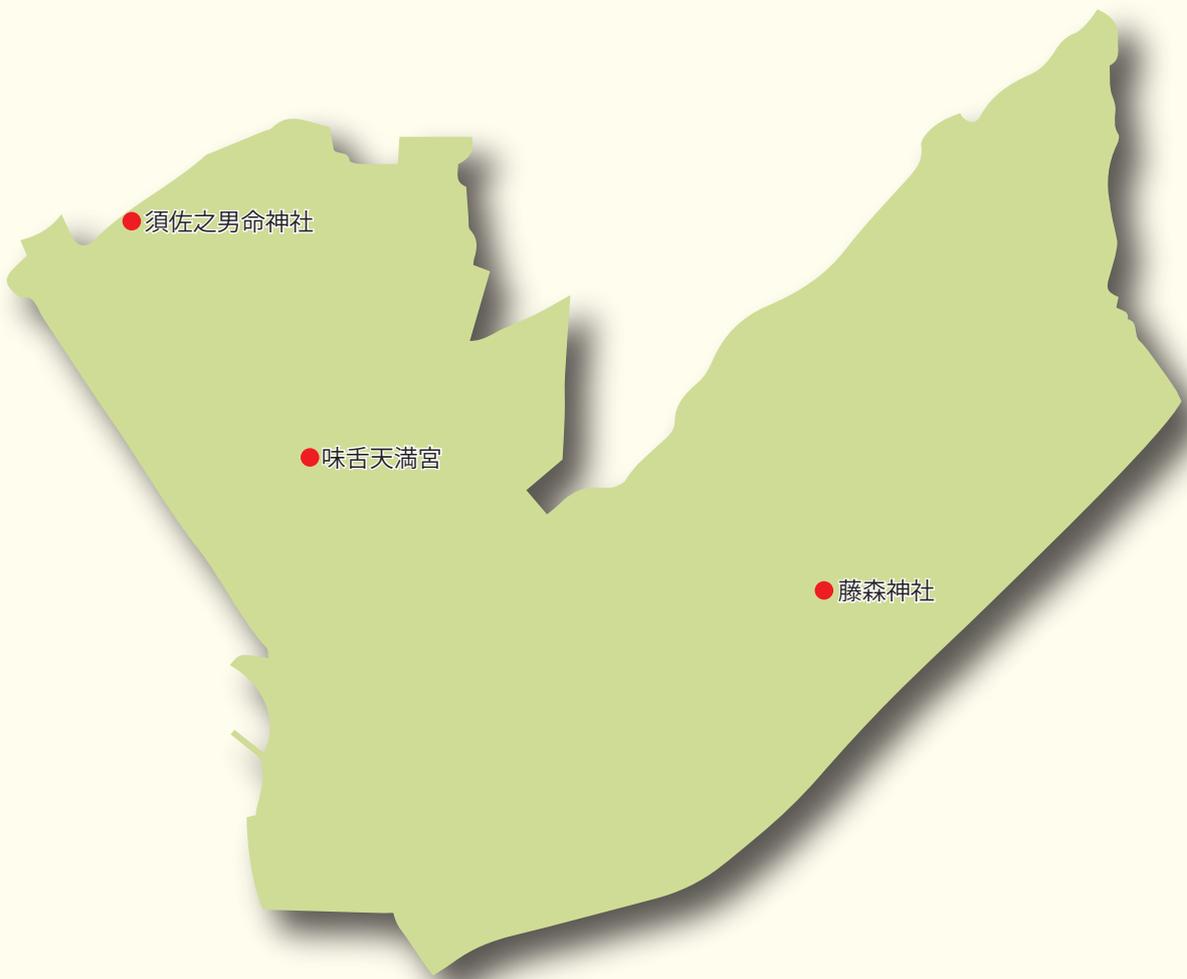
例祭日

十月十七日



# 摂津市

▶ 大阪府にもどる



# 藤森神社

ふじのもりじんじや  
(通称) ふじもりさん

## 御祭神

舍人親王(崇道尽敬皇帝)  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

十月十八日



提灯行列の宮入り「ねりこみ」



成就茄子みくじ

戦後まぼろしの茄子とも呼ばれていた、なにわの伝統野菜「鳥飼茄子」をモチーフにした「成就茄子みくじ」を奉製し頒布しています。

## 神社のおすすめ



鎮座地 摂津市鳥飼西二一ー一  
電話 〇七二一六五四一五七六七  
HP <http://www.fujimori.ed.jp/jinjya/index.html>

## 由緒

当社は、摂津市鳥飼(鳥養)地域の氏神(産土神)であり、明治には郷社に指定されました。鳥飼は古来、朝廷との縁深い土地であり、宇多天皇(在位八八七〜八九七年)は、当時この地にあった離宮に度々行幸されていたと伝えられています。当地は淀川の河畔に在るため、古来より度々水害を蒙り、記録資料等大半が流失した為、鎮座年代は不詳ですが地理的又は伝説等によれば、元は宇多天皇の離宮(鳥養院)の所在地であった大字上鳥飼にその当時より小祠が鎮斎されており、その地より水流によって現在の地(大字鳥飼西)に流れ着き鎮座致されたものであると考察されます。

現神社の形態が出来たのは天正五(一五七七)年とあり、本殿は寛文四(一六六四)年の建立であります。

舍人親王(崇道尽敬皇帝)、菅原道真公、二柱を主祭神としてお祀りし、無病息災・学業成就の御利益のもと鳥飼の氏子・崇敬者から篤く信仰されています。

### ◎舍人親王(崇道尽敬皇帝)

山城国(京都府)鎮座の藤森神社の御祭神の一柱舍人親王の神璽を勧請したと伝えられます。『藤森』の名の由来)最古の国史書である日本書紀を撰修され、その総裁となられた方です。

### ◎菅原道真公

菅公が大宰府へ下り給う時、此地に舟を止められたる縁を以て御霊を合祀したと伝えられます。清廉潔白で比類なき政治学者であり、仁徳厚く、詩歌、書道に優れ、又、弓の達人でもあります。

当社の例祭(十月十八日)の宵宮(十七日夕刻)には壮観な提灯行列の『ねりこみ』が行われます。氏子が伊勢音頭を歌いながら大提灯を掲げて宮入りを行い、境内は鉦や太鼓の音で賑わいます。

# ましたてんまんぐう 味舌天満宮

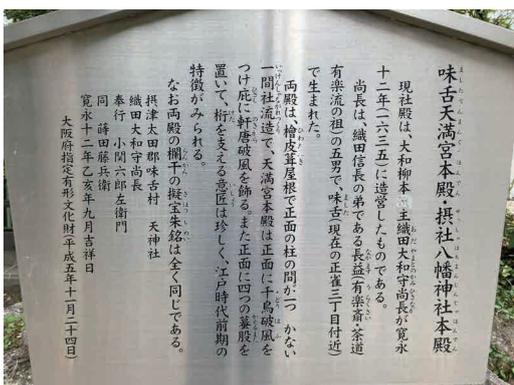
御祭神

菅原道真公  
外五神

御神徳

例祭日

十月十六日



神社のおすすめ

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

鎮座地 摂津市三島三一九一三  
電話 〇六一六三八二一四八四  
HP

## 由緒

当社は源満仲の弟の多田満政の九代の孫で、摂州止々呂美城主馬場兵衛信高の九代の孫である、馬場当次郎尚久が味舌郷の一邑を開拓し、ここに源氏の氏神である八幡大神を勧請して、産土神と仰ぎ「馬場の宮」と稱した。

尚久三世の孫馬場尚次の時に淀川が氾濫して田畑が荒廃したので、尚次が荒田を修復している時、偶々菅原道真公の霊代を発見したので、これを奉じて馬場の宮に合祀した。時に九月三日であったので、爾後祭事は九月三日に行なう様になった。(明治以後太陽暦により現在の十月十六日に改めた)。

後奈良天皇の大永年中に織田信秀の室、病にかかり当地に療養していたが、折から妊娠中であつたので、之を憂い当社に参籠して病氣平癒出産平穩を祈ったところ、幾許もなく男子を出産した。生れた子が織田有楽斎長益である。

よつて神徳を感じて社殿を再建の志があつたが、干才騒擾の時であつたのでこれを果すことが出来ず、寛永十二年に至つて、有楽斎の五男で、奈良柳本城主織田大和守尚長が社殿を造営し、敬神尊皇の精神により、御祭神を皇室の祖神である天照大神を始め、五柱の神を新たに勧請して、天神社と崇め、先の八幡大神は摂社として別に社殿を造営して奉祀した。

現在の本社及び摂社の御殿は当時の建築物である。

宝暦年間に至り、神仏習合の影響を受けて、宮寺の制になる別当寺を建て如意山天満宮別当観音寺と称し、社僧を居住させ居常の祭祀を執筆し、神前に香を焼き、素饌を献じ般若経を称読していたのが、明治維新まで及んだ。

# 須佐之男命神社

すさのおのみことじんじや

## 御祭神

建速素盞鳴命  
天兒屋根命  
事代主命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運

## 例祭日

十月体育の日前日



鎮座地 摂津市千里丘三十一番一五  
電話 〇六一六三三八二九九二

H P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

例祭日には氏子による太鼓渡御が行われます。



## 由緒

当社の創建時期は不詳ながら聖武天皇の天平年間（七二九〜七四九）に僧行基が諸国行脚の途中で味舌上村に金剛院を建立し寺の鎮守神として「牛頭天王」を祀ったことが起源と伝えられております。江戸期の寛永年間（三代將軍家光の時）に山田村長野の檜切山にあつた「三社の宮」の御祭神を合祀してからも長期に渡ってお祀りされてこられました。

明治五年神仏分離令により社名も「須佐之男命神社」と改め、村社に指定されました。一方社格指定のない無格社の整理統合が進められた結果、坪井の八幡社と道祖社、庄屋の春日社、正音寺の柚ノ木八幡社、中内の藤ノ木八幡社が合祀され今日に至っております。

# 高槻市

▶ 大阪府にもどる



# かすがじんじゃ 春日神社

(通称 五百住神社)

## 御祭神

天兒屋根命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
五穀豊穡

## 例祭日

十月第二月曜日



拝殿

## 神社のおすすめ

鎮座地 高槻市桜ヶ丘南町一九一―三  
電話 〇七二―六九三―五九一六  
HP

御朱印なし

## 由緒

両社の創建年月は詳かではないが、日本書紀の安閑天皇御宇（今から一、三〇〇余年前）に鎮座地の村名の起源が見えるので、当時から、西五百住、東五百住の村民の氏神として厚く崇敬されて来たものと思われる。

両社は古来より祭神を異にし、氏子を異にしながら、事実は一、三〇〇余坪の同一境内に鎮座されている。即ち同一形の神殿二字が相い並び、向って右は素盞鳴尊神社（現東五百住の氏神）、左は春日神社（現西五百住の氏神）を奉祀している。

両社は全くの地続きで、境内の境界もなく、古来より祭日も同じで、村社の加列も明治五年時を同じくした歴史もあり、全く二社一社の現状である。

元亀天正の頃、織田信長が近畿統一後、神社仏閣の焼討ちを行なった時も、当社の神威を恐れ破却をなさず、両社とも災火を免かれた。爾来東西五百住の鎮守として栄え、今日に至っている。

すさのおのみことじんじゃ

# 素盞鳴尊神社

(通称 庄所神社)

## 御祭神

素盞鳴尊

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
厄除開運

## 例祭日

十月十日



当神社 鳥居全景  
この鳥居の裏側に宝暦11年の刻印あり



当神社の鳥居

神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 高槻市中川町四一二七  
電話 〇七二一六七二一九二六〇  
HP

## 由緒

庄所村村社として慶長（一五九六年）（一六一四年）には存在していたと思われる。宝暦十一年（一七六一一年）には存在していたと思われる。一七〇七年宝永大地震（マグニチュード八・六）が発生、鳥居が倒壊し再建された可能性があり。慶長十年（一六〇五年）に完成した撰津国絵図に庄所村の名があり、これが現存するもつとも古い絵図でその後、江戸時代元禄・享保・天保も時代に書かれた絵図にも庄所村が出てくる村社である。これらの資料は西宮市立郷土資料館蔵にも明記されている。

# 諏訪神社

すわじんじや

## 御祭神

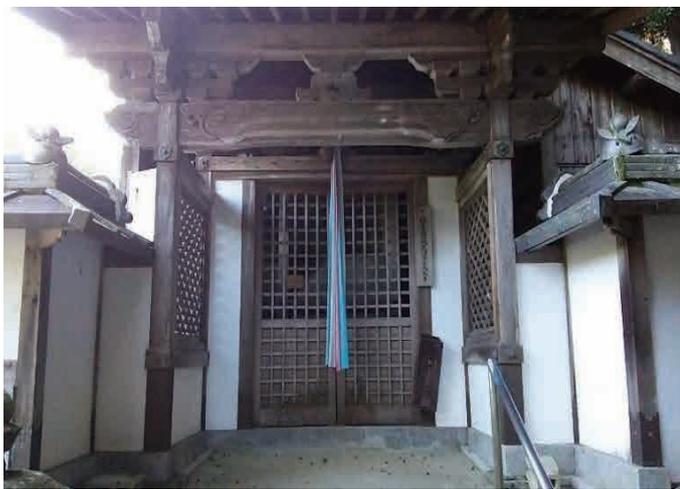
武御名方神

## 御神徳

五穀豊穡  
盛業繁栄  
開運長寿

## 例祭日

十一月二十三日



鎮座地 高槻市大字川久保七二七  
電話 〇七二一六五五九一六五  
HP



## 神社のおすすめ

拝殿は「割（わり）拝殿（はいでん）」という様式で、拝殿の中央に参道が通っている非常に珍しい構造。

水無瀬川源流の森川久保水源地鎮座。林野庁選定水源の森百選。大阪府下では

「川久保水源の森」を含めわずか二箇所のみです。



## 由緒

当社起源由来は人皇五十七代陽成天皇の御代 元慶四年（平安時代・西暦八八〇年）六月十二日信州一ノ宮諏訪ノ郡諏訪神社の分祀として撰津国島上郡久保ヶ原松勇山へ大神を迎え奉る可く詔り給り従つて三姓の者代詣、御霊代を受賜り帰村せり。

元慶七年（西暦八八三年）夏 宇尾ノ池に正倉を創立。命を勧請し村内平穩無事祈願所とし鎮守神として斎奉る。

近衛天皇の御代 久安六年（平安時代・西暦一一五〇年）夏再建。

明德二年 後小松天皇の御代（南北朝時代・西暦一三九一年）冬再三建立。

慶安三年 後光明天皇の御代（江戸時代・西暦一六五〇年）夏再四建立。

宝永四年 東山天皇の御代（江戸時代・西暦一七〇七年）正月二十八日火災に罹り焼失、同年十月二十三日大阪公儀に願出て許可を受け、再五創立。

享和三年 光格天皇の御代（江戸時代・西暦一八〇三年）夏修復、更に慶応三年 孝

明天皇の御代（江戸時代・西暦一八六七年）冬社殿を修復して十二月十二日を以つて遷

宮齋奉て報本反始として毎年十二月十二日（現在は十一月二十三日）を例大祭日とする。

明治元年（西暦一八六八年）十二月諏訪大明神を諏訪神社と社号改め称し今に至る。

明治五年村社に列し、大正六年四月四日字上垣内の無格社稻荷神社を合祀。境内は四

百坪余り、本殿、拝殿、社務所その他、末社に稻荷神社、愛宕神社がある。四方を山に囲

まれた川久保は、川が流れ地勢が窪んでいることから、かつては久保ヶ原と呼ばれたが、

後に川久保と称されるようになった。

社頭には樺の古木がそびえ、古き歴史を静かに物語っている。

# つげのじんじや 闘鶏野神社

## 御祭神

天照大御神  
応神天皇  
仲哀天皇  
神功皇后  
仁徳天皇  
額田大中彦皇子  
天兒屋根命

## 御神徳

## 例祭日

十月十日

鎮座地 高槻市氷室町六一一九  
電話  
HP

御朱印なし

神社のおすすめ



参道



名神高速道路に架かる陸橋

## 由緒

創建は延宝元年（一六七三年）以前と思われます。闘鶏野神社はもとは八幡大神宮と称し、氷室の氏神として崇敬を集めたという。闘鶏野は仁徳天皇六二年条によれば、額田大中彦皇子の獵場であったといわれ、奈良県の闘鶏野などとともに、記・紀の「氷室」発見伝承に基づく。また闘鶏を「ツゲ」とよむのは、鶏鳴が神託を「告げる」ことに由来するという。ここより北の丘陵上には南面した前方後円墳があり闘鶏山古墳と呼ばれている。このように大変大昔から氷室の氏神として、村民に広く崇敬されて今日に至っています。

# 素盞鳴神社

すさのおじんじや

## 御祭神

素盞鳴尊

## 御神徳

五穀豊穣  
除災招福  
厄除開運

## 例祭日

十月二十日



鎮座地 高槻市大字出灰小字堂の前  
電話 〇七二一六五五一九一六五  
HP



## 神社のおすすめ

樹高約三十m、樹齢は約三百年と推定される大阪府の天然記念物指定の御神木のカツラの樹。



## 由緒

詳細は不明だが、創建は元禄四年（一六九一）（江戸時代中期）であることが、本殿前にある灯籠の年号等から読みとられ、うっそうと樹木が繁る境内からは、長い歴史の重みを感じられる。

また社頭の鳥居左の御神木の巨大な桂の樹は、樹高約三十m、樹齢は約三百年と推定され、昭和三十三年に樫田地区が本市と合併するまで、京都府の天然記念物に指定されていました。現在は大阪府の天然記念物に指定されていて、大阪府下でも有数の古木である。

なお、樫田地区は戦後全国で初の府県をまたいで（京都府から大阪府へ）町村合併が行われた地区です。

出灰は出灰川・田能川・流谷川が合流する場所で、素盞鳴神社は流谷川の左岸に鎮座します。境内には神仏習合時代の牛頭天王の灯籠が残っています。

旧出灰村の村社で、出灰は「いづりは」と読み、この辺りがかつて石灰岩が産出されたことからこの名が付きましました。出灰川を挟んで高槻市と京都市が隣接する地域で、京都市側も大原野出灰町で同じ地名ですが、丹波と山城と国も違う別の村で、両村を繋ぐ橋を両国橋と言います。

# 八幡大神宮

はちまんだいじんぐう  
(通称 土室八幡さん)

御祭神

天照皇大神  
応神天皇  
天兒屋根命

御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

例祭日

十月十日



● 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 高槻市上土室一七九八  
電話 〇七二一六二二一〇二五  
HP

## 由緒

当社の創建年月は不詳であるが、八幡神社とも呼ばれ、土室（はむろ）の氏神として古くから地元民の信仰を集めてきました。はむろの「は」は埴輪の「は」のことで、「むろ」は埴輪を保管する場所という意味で「はむろ」と呼ばれていた。土室は、所謂「ハニ」（粘土）の「ムロ」で埴輪（はにわ）の製作に携わる人々が住んだと伝えられる。

日本書紀の欽明天皇二十三年（五六二）冬のくだりに、「埴廬」（はにいほ）として登場する。当社の北西にある新池周辺からは、多数の埴輪片などとともに、竈跡も見つかり、国史跡「新池ハニワ製作遺跡」をハニワ工場公園として整備され、埴輪製作工房三棟や竈十八基、工人住居が復元されています。手入れの行き届いた境内からは、当地の古い歴史が感じられる。明治五年村社に列せられ、境内は三一坪、本殿、覆屋、拝殿を有す。

平成の大阪北部地震で大きな被害をうけましたが、二年かけてようやく元の美しい姿に復旧されました。

# 八幡大神宮

はちまんだいじんぐう

## 御祭神

天照皇大神  
応神天皇  
天兒屋根命

## 御神徳

## 例祭日

十月第二日曜日

鎮座地 高槻市塚原四一五六一  
電話 〇七二一六四三一七七七八  
H P

御朱印なし



## 由緒

当社の由緒は不詳である。  
明治五年村社に列せられる。境内は五六八坪を有し、本殿、拝殿を有す。

# 素盞鳴尊神社

すさのおのみことじんじや

(通称 五百住神社)

## 御祭神

素盞鳴尊

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
五穀豊穡

## 例祭日

十月第二月曜日

御朱印なし

鎮座地 高槻市桜ヶ丘南町一九一三  
電話 〇七二一六九三一五九一六  
HP

## 神社のおすすめ



拜殿

## 由緒

両社の創建年月は詳かではないが、日本書紀の安閑天皇御宇（今から一、三〇〇余年前）に鎮座地の村名の起源が見えるので、当時から、西五百住、東五百住の村民の氏神として厚く崇敬されて来たものと思われる。

両社は古来より祭神を異にし、氏子を異にしながら、事実は一、三〇〇余坪の同一境内に鎮座されている。即ち同一形の神殿二字が相い並び、向って右は素盞鳴尊神社（現東五百住の氏神）、左は春日神社（現西五百住の氏神）を奉祀している。

両社は全くの地続きで、境内の境界もなく、古来より祭日も同じで、村社の加列も明治五年時を同じくした歴史もあり、全く二社一社の現状である。

元亀天正の頃、織田信長が近畿統一後、神社仏閣の焼討ちを行なった時も、当社の神威を恐れ破却をなさず、両社とも災火を免かれた。爾来東西五百住の鎮守として栄え、今日に至っている。

# 藤井神社

ふじいじんじや

## 御祭神

白山比売命  
日本武尊  
天活玉命

## 御神徳

五穀豊穰  
生業繁荣  
開運招福

## 例祭日

十二月第二日曜日



## 神社のおすすめ

当社は鹿爪谷の最奥にあり、一級河川安威川の水源地に鎮座し、手水舎の流水は水源の天然水です。鳥居の先の境内は、うっそうとした森に抱かれ晴天の日中でも薄暗い神域です。

鎮座地 高槻市二料字鹿ヶ爪三〇  
電話 〇七二一六五五九一六五  
HP



## 由緒

当社の勸請の年代等是不詳だが、今本村檉船神社の所蔵に係る貞応二年三月の棟札に記載された文により、当檉田庄々民には往古より藤井氏と称するもの多く、従って社号もここに起源し、庄民一般に当社を氏神として奉祀したことが推察できる。

この棟札は当地方に於ける鎌倉時代史料として貴重なもので、長さ縦二尺二寸、幅上部七寸一分、下部八寸あり、その裏面に左の如く墨書されている。

當処大明神御正射 願主 藤井國方椽共佐伯氏女

大明神御本地観音 願主 佐伯未清同守安椽芝未貞椽共女 等々。

満願成就圓滿子々孫々安穩泰平殊庄内安穩諸人快樂也

貞応二年歳次癸未三月三日為向後注之

徳川時代に至って当社の再興と共に社運の隆昌を見たようで、この時代には鹿の爪権現社とも称せられ、彼の天保十四年の編述に関り丹波東田郡の地誌を記した「桑下漫録」にも「亀山鎮に料鹿の爪権現上之字鹿の爪谷有」と記す。今当社所蔵にかかる「鹿の爪本地佛」と記した額面は徳川時代中期の制作で本社に懸っていたものである。又当社の別当寺と推定すべき阿弥陀堂が本村に現存する。

社殿の建立は近代に至っては、延享二年に再建されたもので、本社境内に二対の灯籠があり内一対には「天明九（一七八九）年二月吉日」と記し一対には「文化九（一八一二）年七月」と記され、その時の建立に係る事が読み取れる。一隅に神仏習合時代の名残の宝篋印塔が残っています。

# 稲荷神社

いなりじんじや

御祭神

宇賀御魂神

御神徳

例祭日

四月一日



鎮座地 高槻市津之江町一―一七三  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

由緒は不詳であるが、後西院天皇の勅額を所蔵する所より、古は相当盛んであった事が窺われる。明治五年村社に列す。境内は二六〇坪を有し、本殿、拝殿がある。末社に女大神社、宇賀神社がある。

# 稲荷神社

いなりじんじや

御祭神

宇賀御霊

御神徳

例祭日

三月二十三日



鎮座地 高槻市大字田能小字城山三五―一  
電話  
H  
P

御朱印なし

由緒

当社の由緒は不詳である。

# 檜船神社

かしふねじんじや

御祭神

猿田彦命

御神徳

例祭日

十月二十三日



鎮座地 高槻市大字田能小字ヨブケ八  
電話 〇七七一一二二二一〇二三  
H P

御朱印なし

## 由緒

貞應元年、当神社境内に創建されたと伝えられる。明治六年六月、村社となる。伝説によると、丹波地方が湖であった頃、神々が檜の船に乗り旧亀山地区の保津地域を切り開かれて農業が栄えた。

# 春日神社

かすがじんじや

## 御祭神

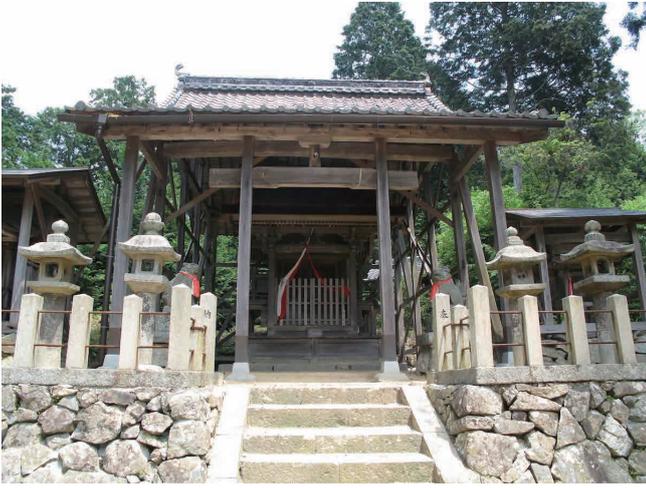
天児屋根命  
姫大神  
武甕槌命  
経津主命

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月二十三日



鎮座地 高槻市大字杉生小字年谷一  
電話 〇七二一六八八一九五五九

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社伝わる所によれば、其の昔、藤原氏を始祖とする一族が京都から杉生へ移り住んだ時、藤原氏と関係のある春日大明神が黒柄嶽に鎮座されているのを発見した。黒柄嶽は参路峻険にして遠く離れていたため、新たに神域を現地に定め神殿を造り、遷宮上棟式を天文元年十一月二十六日に挙行し現在に至る。また、境内の一角には神社に珍しい鐘楼堂があり、釣鐘には春日大明神の銘入りで、神仏習合の名残りとして残っている。

# 筑紫津神社

つくしつじんじや

御祭神

速素盞鳴命

御神徳

例祭日

十月十四日

鎮座地 高槻市津之江町一―二七―一  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



高槻市

## 由緒

当社の由緒は不詳である。

# 八幡大神宮

はちまんだいじんぐう

御祭神

応神天皇

御神徳

例祭日

体育の日

鎮座地 高槻市芝生一―九―二七  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



## 由緒

当社は字天神山にあるが、由緒は詳かでない。明治五年村社に列す。境内は三〇六坪で本殿、拝殿を存す。末社に天神社がある。

# 三島郡 島本町

▶ 大阪府にもどる



# みなせじんぐう 水無瀬神宮

御祭神

後鳥羽天皇  
土御門天皇  
順徳天皇

御神徳

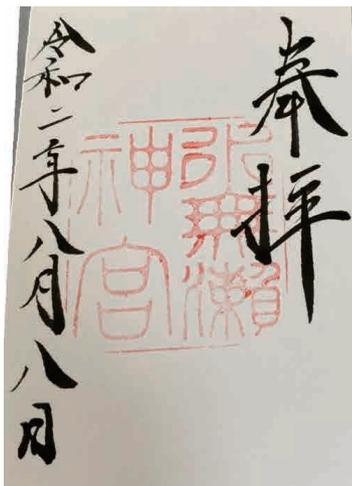
安産守護  
学業成就  
スポーツ

例祭日

十二月七日



鎮座地 三島郡島本町広瀬三一〇―二四  
電話 〇七五―九六一―〇〇七八  
HP <https://www.minasejingu.jp/>



## 神社のおすすめ

大阪府唯一の名水「離宮の水」（昭和六十年指定）  
現在も絶えることなく湧き出る名水は多くの方の健康に寄与し、特にアトピー性皮膚炎がよくなたとの声はよく聞きます。



祈願玉（おもいだま）

この御神水に願いを込める「祈願玉」（おもいだま）は夏の風物詩になっております。

## 由緒

「ご祭神は「承久の御三帝」。文武に秀でた才能を持ちながら時の流れに翻弄され、それぞれ隠岐、佐渡、阿波にて崩御された御霊を御弔い祀るために建立されました。この地は、天王山の麓、大阪府と京都府の境にあり、三川が合流し淀川となる場所であり、その淀川の兩岸に小高い山々が迫る風光明媚な場所でもあります。古来より眺望が非常に素晴らしく、多くの和歌や文学も生まれました。

後鳥羽天皇は生前、多芸多能、文武両道にすぐれた才能を発揮されましたので、朝廷、武家からも崇敬され現在も学問、スポーツの神として崇められています。また、正平二年（一三四七）五月には、足利直義（尊氏の弟）が夫人の安産祈禱を行い無事男児をもうけた故事により安産祈願の申し込みは多く、社頭で腹帯の授与もしております。

またこの地はきれいな水が湧き出ており、境内より湧き出る「離宮の水」は大阪府では唯一、環境庁指定（昭和六十年）の名水であります。健康、命を頂ける水に対する信仰も厚く、御神水を求める人々の列は絶えることはありません。（午前六時～午後五時まで）

宝物（国宝は非公開）

後鳥羽天皇像（国宝） 紙本着色

承久の変後、隠に迁幸直前、当時似せ絵の名手と言われた藤原信実に命じ描かされたものと伝えられ、これを御母七条院に残し隠岐へ旅立たれました。細い線を巧みにひき、上皇の面影を美事に活写しています。着彩は簡雅で、鎌倉時代初期の日本の肖像画の中白眉とされております。

後鳥羽天皇御手印置文（国宝）

隠岐で十九年お過ごしの後鳥羽天皇六十歳の春、ご自身の余命も長くないと覚悟され御自身の両手に朱印を付けしたためられました。これを書かれて二週間後にお隠れになられた天皇の御意志であり、「我後生を返々とぶらふべし」との一文により、御御霊をこの水無瀬の地にお遷ししてお祀り申し上げた当宮の起源となる宝物であります。

重要文化財

豊太閤寄進の「客殿」、後水尾天皇縁の茶室「燈心亭」（重文）があり、特にお茶室は事前の予約で拝観もできます。（一人～五百円 五名以上で要予約）

# 枚方市

▶ 大阪府にもどる



# かたのじんじや 片埜神社

(通称 河州一の宮)

## 御祭神

建速須佐之男大神  
菅原道真公  
事代主大神  
外八柱

## 御神徳

商売繁盛  
学業成就  
方除厄除

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市牧野阪二一三二一五  
電話 〇七二一八五七〇七七五  
HP <https://www.katanojinja.com/>



## 神社のおすすめ

毎年一月九・十・十一日の枚方えびすには多くの参拝者で賑わう。

## 由緒

北河内・交野ヶ原の一角、牧野阪に鎮座する延喜式内の古社で、第十一代垂仁天皇の御世、出雲の豪族「野見宿禰」が当麻蹴速との相撲に勝ち、その恩賞としてこの地を拝領した折、出雲の祖神である建速須佐之男命を奉祀して土師氏の鎮守としたのが当社の草創と伝わる。

欽明朝時代、勅により「片野神社」の社号を賜り、土師氏一族の社から公の神社となった。

平安期の天徳四年に野見宿禰の後裔である菅原道真公を併祀、同後期には社名を「一宮(いちのみや)」と改称した。その後、戦国の争乱で幾度かの兵火に遭い荒廃していたが、天正十一年、豊臣秀吉公が大坂城築城の際に、大坂城の良(東北)に位置する当社を錦城の鬼門鎮護の社と定め修築、尊崇してから、河内国北部地方における鬼門方除け守護に靈驗あらたかな神社と広く知られ崇敬を集めた。さらに慶長七年に豊臣秀頼公が片桐且元を総奉行として本殿、正門などを修築、造営した。特に御本殿は桃山建築の粹として国の重要文化財に指定されている。

明治四十二年、近隣諸社を合祀申し上げ、社名を欽明朝以来の「片埜神社」に復して現在に至っている。

### 文化財

本殿(重要文化財 桃山時代) 三間社流造 松皮葺 朱漆塗

慶長七年(一六〇二)、極彩色と飾り金具の美しい大型社殿で、桃山時代の様式手法を示し、特に四面を飾る臺股は秀逸である。棟札を有す。

南門(府指定文化財 桃山時代)

当社の正門(俗称 赤門)。切妻造本瓦葺の四脚門で総丹塗り。慶長の本殿再建と同じ時期のものである。

東門(府指定文化財 室町時代)

俗称 黒門。鎌倉〜室町期に武家屋敷に多くみられる棟門をいつの頃か当社に移築したもの。当神社現存最古の木造建造物で府下でも数少ない貴重な遺構である。

石造灯籠(府指定文化財 鎌倉時代)

無銘六角型の一基で、鎌倉期の形状・風格を良く留め、火袋に彫られている梵字から、かつて神社に付属していた神宮寺の遺品であると思われる。

# お か み じ ん じ ゃ 意賀美神社

## 御祭神

高齋神  
素盞鳴尊  
大山咋神  
大国主神

## 御神徳

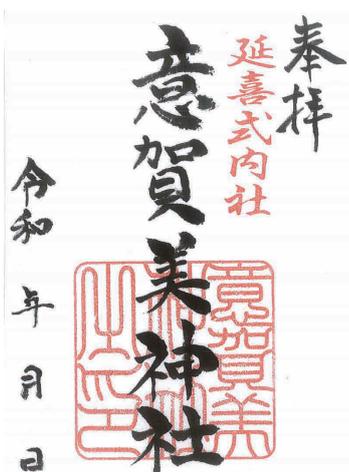
家内安全  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市枚方上之町一―一二  
電話 〇七二―八四一―二七九〇  
HP



## 神社のおすすめ



- 1 景勝 意賀美梅林
- 2 枚方市指定文化財「算額」
- 3 枚方八景「万年寺山の緑陰」



## 由緒

創建年代は不詳であるが、延喜式内の古社である。

当社は元伊加賀宮山の地にあり、産土神として、又淀川の鎮守として御神威高く、古来航行の船人達が通行の安全と水害排除祈願のために創建、開化帝の御代、伊香色男命、伊香色女命の邸内にあつたと伝えられる。

明治五年村社に列せられ、明治四十二年十月十四日村社須賀神社（素盞鳴大神）、村社日吉神社（大山咋大神、大国主大神）を合併、翌十五日境内狭隘のため、須賀神社の旧地である現鎮座地に遷座した。同四十二年十二月神饌幣帛料供進社に指定された。又、昭和九年大風害で社殿・社務所を大破、同十年十月現社殿・社務所を復興した。

合併した須賀神社は牛頭天王社（祇園社）とも称し、もと現鎮座地にあり、清和帝貞観十四年、天下に悪疫流行の時、万年寺の開祖聖上人が天皇より神璽を賜り終熄祈願のため山上に勧請した。爾来諸病平癒に神験がある。万年寺は明治三年廃寺となり社は同五年村社に列せられた。

日吉神社は岡の地にあり山王大権現と称した。往古洪水に際し、日吉大神の御神体が流れ来り村人が家に持ち帰ったが靈験顕著なので氏神として奉祀したと伝わる。一説には伝教大師が平安京の裏鬼門に当たる此の地に阿弥陀仏及び日吉大神の二像を造り、皇城の鎮護の社寺と定めたとある。

後、応仁の兵火に焼亡したが慶長五年枚方城主本多政康が一乗寺と共に再建し、氏神として厚く尊崇した。

※【式内】とは延喜式に登載されている神社のことで、正式には延喜式内社と言います。【延喜式】とは平安初期の国家の法制書で、律令制時代の施行細則として延喜式五十巻があり、その中の巻九・十は神名帳と言われ官社たる天神地祇三、一三二座（二、八六一社）を載せています。

茨田郡（まむたのこほり）五座 意賀美神社（おかみのかみのやしろ）

今も表参道の数多い石段の緑陰の中に、「長松山万年寺」と刻んだ標石や十三重の石塔が苔むしており往時を偲ばせてくれます。神社の森を北に向かうと、豊臣秀吉の茶屋御殿跡があり、枚方小学校も一時この地に建てられました。近年、丘の中ほどに紅梅を中心とした植樹もすすみ新たな観梅の名所になっています。

# かすがじんじや 春日神社

## 御祭神

武甕槌命  
経津主命  
天児屋根命  
比売大神  
天押雲根命  
外一柱

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

十月十九日



鎮座地 枚方市津田元町一―一〇一  
電話 〇七二―八五八―八〇四五  
HP <https://shinto-shrine-108.business.site/>



## 神社のおすすめ

本殿が二殿ある  
平成十八年(二〇〇六)の修理で鮮やかな朱色に復元され、創建当時の面影を見ることができ、都市化が進む当地域で緑豊かな神社です。大きな楠が左右に一对あったり、三晃の松があったり。草も多いが生命にあふれており、これも神様の生命の恵みと考えます。地球温暖化防止に貢献していると思います。中世以来の祭祀機構といわれる宮座が残っているのも特徴です。  
大きな石の鳥居があります。天保三年(一八三三)建立で津田の山から切り出し、大きすぎて辻が曲がれなかつたため、辻の家を一軒つぶして神社まで運んだという言い伝えがある鳥居です。  
塀に囲まれた境内に、橋で川を渡って入場でき、神域に入場した意識を明確に持てます。心を引き締められる場所です。昔は門前町が栄えていましたが、今は隣にショッピングセンターができ、お参りとともに買い物、または買い物とともにお参りをされる方が増えています。  
神社の社務所は旧津田尋常小学校の教員室の建物で、尋常小学校を垣間見ることが出来ます。  
秋祭りには夜店が百軒程度出て、賑わいます。ちょうろんと大太鼓が見物で、子供達が順番に大太鼓演奏する様子は当地域の秋の風物詩です。

## 由緒

当社の創建は嘉吉二年(一四四二)。「津田史」では三宮神社の内宮として、津田集落に建立されたという記述がある。明治五年(一八七二)村社に列し、宇堂山の八王子権現社および同宮山の治郎兵衛宮を合祀し、明治四十一年(一九〇八)神饌幣帛料共進社に指定された。本地の産土神として崇敬されている。往時より神社固着の氏子に南座、津田座、兵衛座、四十人座があり輪番交代して御神酒御供を献じていたが、今はこの四座で御神酒と一組の御供を献じ、他の侍座、久和也座、植元座、杉植座、親九郎座、宗祐座、谷本座、横御鏡講が各座毎に御神酒、御供を献じて祭儀を行っている。祭日当日は地方有数の祭礼として各地より参詣者群集し、露店は軒を並べ、非常な賑わいとなる。境内六三三坪、本殿、拝殿あり。

春日大社に天明六年中臣延樹筆「河内交野郡津田村春日遷宮記」が残っており、現在の本殿はそのとき奈良から遷されたものである。春日大社の本殿を遷宮の際に旧社殿を譲り受けるいわゆる「春日遷し」といわれるものである。またその本殿の隣に位置する末社若宮の社殿は奈良の春日大社の末社三十八所神社の旧社殿であり、これもいわゆる「三十八所遷し」といわれるものである。三十八所遷しは全国でも八例を数えるにとどまり、大阪府内では唯一のものである。

遷宮までは宮座を形成し、各座ごとに家庭祭詞を行っていたようである。現在も宮座組織は残り例祭の時に各座が一同に会しての宮座例祭が行われている。

本殿が二殿有り、一つは春日大社の本殿の第四十九回式年造替で作られた物を移築している、いわゆる春日遷しの社殿。もう一つは同時に移築された春日大社の末社である三十八所神社の社殿。いわゆる三十八所遷しである。春日遷しは奈良市に次いで枚方市が多いが、三十八所遷しは全国で八件しか例がなく、大阪府内では唯一の三十八所遷しといわれている。

# さだじんじや 蹉跎神社

(通称 天神さん)

## 御祭神

菅原道真

## 御神徳

家内安全  
学業成就

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市南中振一七七一八  
電話 〇七二一八三二一五五〇  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

天歷五年（九五一年）創建。

ご祭神菅原道真公は平安時代の学者で文章（もんじょう）博士となられ宇多天皇の信任が厚く右大臣に昇られましたが、左大臣藤原時平の策略によりて延喜元年（九〇一年）正月、大宰権師（ださいごんのそつ）として京の都より九州の筑紫（福岡県）にあった大宰府（大和朝廷の出先機関）に御左遷の途中、此の山にて休息せられ逆に京の都を望み名残を惜しまれたのち西へと旅立たれました。この休息せられた山を菅相塚（かんそうづか）と云います。

都に残られた人々の中でも菅公が特に可愛がっておられました菟屋姫（かりやのひめ）が別れを惜しまれて御跡をしたって此の地まで来られましたが、菅公はすでにご出発されました後でお逢いになれなかった。此の地で選に西を望み蹉跎（あしづりすること）して悲しまれたのでその旧跡を蹉蛇山と名づけられています。

菅公は身の丈三尺二寸のご自身のご座像をお手づから作られましたものを村人が当山に社殿を造営し近郷二十有五個村の産土神（総社）としてお祀りしました。

その後慶長一九年（一六一四）の兵乱に社殿は炎焼しましたがご神像のみ厳然とませましたので再建され中振・出口両村の産土神として奉祀されました。

創建より幾多の変遷を経て明治五年より郷社に昇格明治二十二年三月社殿を改築し明治四十年八月府告示を以て幣饌料供進社に指定され今日に至っております。

# 三之宮神社

さんのみやじんじや

## 御祭神

素盞雄大神  
御食津大神  
大國主大神  
天津神  
住吉大神  
外一柱

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
方除

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市徳谷二丁目一  
電話 〇七二一八五八一〇七四〇  
HP



## 神社のおすすめ

三之宮神社は雨乞いの神様としても崇敬が篤く、雨乞いの際石を西側、川に投げ落として祈願した。



立石 (伝竜王祇)

## 由緒

当社の社記によれば、仁徳天皇二十九年（西暦三四一年）春、額田大中彦皇子に社殿の創建を命じられた。

孝謙天皇天平勝寶二年（西暦七五〇年）、「息筒大明神」の神号を授け、文徳天皇仁壽二年（西暦八五二年）、惟喬親王を遣わされ正三位勳六等を与えられた。後冷泉天皇治暦元年（西暦一〇六五年）正月二十九日、山火事によって灰となったが、八年後に再建された。後堀河天皇貞応元年（西暦一二二二年）6月、盗賊によってまたもや焼失したが、嘉祿二年（西暦一二二六年）三月、中原宗兼外當郷住の三十余人によって再興された。

その後数回の改造修復が加えられたが、慶長年間に大阪城の鬼門除けとして豊臣秀頼によって再興され、牧野阪の一之宮神社（片碁神社）、船橋本町の二之宮神社とともに交野三之宮と称した。創建当時は息筒大明神と称され、屋形大明神、住吉大明神と呼ばれたが、鬼門除けの交野三之宮となった後は、三宮屋形大明神、三宮住吉大明神等とも呼ばれていた。今の社殿の元になっているのは寛永十一年（西暦一六三四年）に再建されたもので、尚、現在の社殿は平成四年に津田郷の氏子衆により完全再建したものである。

### 【屋形石】

玉垣で囲まれた中に大きな石が二個筑座している。これは本殿の外に位置するが、三之宮神社の御神体である。神様が降臨され聖なる岩として祭祀が行われるとされる磐座（いわくら）と呼ばれるものであり、断面が三角形の柱を寝かした形を屋根に見立て「屋形石」と呼ばれ、「三之宮屋形大明神」の名称の元となっている。

# かすがじんじゃ 春日神社

## 御神

天兒屋根命  
比売大神  
武甕槌命  
経津主命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
除災招福

## 例祭日

十月十九日



鎮座地 枚方市春日元町二一八―一  
電話 〇七二一八五八一三三六六

H  
P



## 神社のおすすめ



枚方市指定保存樹木  
クスノキ



天保 12 年建立 石橋

## 由緒

中世まで津田山の東南麓にあったとされる畠田村が洪水による衰微に伴い、その住人が春日・津田へ移り、春日の集落が形成されたという。村落の形態は、周囲に濠をめぐる環濠集落で、大和や摂津・河内・和泉の中世村落に多くみられる。

春日神社は、畠田村の祭神を分霊したものとわれ天兒屋根命・比売大神・武甕槌命・経津主命を祀っている。神宮寺として薬師仏を本尊とする真言宗正楽寺があったが、明治初めの神仏分離令によって廃寺となり、薬師仏は融通念仏宗大聖寺（春日元町二丁目）に移された。

# かすがじんじや 春日神社

## 御祭神

武甕槌命  
経津主命  
天児屋根命  
比売大神  
配祀 火産靈命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
心願成就

## 例祭日

十月十四日



鎮座地 枚方市茄子作三十一番一丁  
電話 〇七二一八五二一四一三八  
HP



## 神社のおすすめ

本殿に近づき参拝の出来る割拝殿様式  
拝殿の真中が石畳になっており、本殿に  
近い所まで進むことが出来る。関西でも  
貴重で他には奈良春日大社若宮がある



願を茄子(なす)守

茄子作春日神社



なすひめ なすのすけ

## 由緒

当社は、嘉吉元年九月九日に奈良春日大社より御神霊を勧請して茄子作村の氏神とした。

明治五年村社に列し、同四十一年十二月神饌幣帛料供進社に指定された。

古来宮座の厳重であったこと、その座列は本殿に向かって、右側に端野・堀・奥野、左側に桜井・清水・岡市諸氏の順であった。以って、神前儀式の厳重が伺える上に、今も尚総代による奉仕が厳重になされている。

当神社の本殿・拝殿は、寛政十一年(一七九九年)に再建されており、本殿と拝殿の造営資料については『平橋家大工文書』の負請文書がある。境内における石造物のうち最も古いのは享保十四年(一七二九年)の鳥居である。また北河内でも大変貴重で珍しいのは、江戸時代の狛犬の奉納主に女性の名前が残っていることである。相当高い身分の女性であったことが伺える。なお、地元『春日小学校』の校名と校章は、当神社の社名と神紋『下がり藤』に由来する。

### 末社について

御祭神は火之迦具土神。昭和十七年四月、京都愛宕神社より東京第二陸軍造兵廠香里製造所御鎮座。終戦後末社として当社に御鎮座。毎年四月三日に例祭が執り行われている。

### 遥拝所

神宮遥拝の為の標識として、大正の御大典記念として石垣・岩標と燈籠一対や榎等植樹、令和の御大典記念として小型の伊勢鳥居と石柱が奉納されている。

### 氏地の神社キャラクター

平成二十四年に氏地の子供たちが神社に親しみが持てるように、地元の地名を活かした「なすひめ&なすのすけ」のキャラクターを選定し、それ以降子供たちの人気者となっている。また社報「とこわか」にもお祭りや季節の話題など中心に四コマ漫画として掲載を続けている。

# すがはらじんじや 菅原神社

御祭神

菅原道真

御神徳

五穀豊穰  
厄除開運  
学業成就

例祭日

十月十九日



鎮座地 枚方市長尾宮前一―二―一  
電話 〇七二―八五九―七七〇八  
HP



## 神社のおすすめ

当神社はJR学園都市線長尾駅（東口）下車一〇〇mに位置する。緑の木々と玉垣と献燈籠に囲まれた参道一五〇mを進むと本殿に到着します。毎月一日は長尾の郷の総代さんが丹精込めたお米「御饌米」をいただけます。ただし午前中になくなります。当神社は大阪府下で近年絶滅している植物「天台烏薬」を見ることができます。



御饌米

## 由緒

創建は慶安三年（一六五〇年）で、菅原道真公を祭祀する。元和元年（一六一五年）大阪城落城の後、徳川家康の命により、その旗本久貝因幡守正俊公が交野郡（交野市、枚方市東部）、讃良郡（四條畷市、寝屋川市東部）を采地する。その頃長尾の丘陵地は荒野であったが、河内・山城の国境で交通の要所であり、古来から戦略上の要地であった。また京都、大阪を見渡せる丘陵地であった。

久貝氏の家来細谷善兵衛は近隣村民を集め荒野山林を開拓、開墾地は良い土壌で穀物増収があり「福をもたらす岡」とのことから当時は福岡村と名付けられたとのことである。戸数も増加したので、村の団結を図るため、京都長岡天神の分霊を受けたのが、菅原神社の始まりであった。

境内には末社として水神宮、高倉稻荷神社、皇大神宮、米宮が順次造営された。

また、摂社として隣村に峠天満宮、高野道天満宮が造営された。

現在のお社は平成六年三月二十七日竣工した建物です。

# むらのじんじや 村野神社

## 御祭神

素戔嗚命  
櫛稲田姫命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
心願成就

## 例祭日

十月十四日

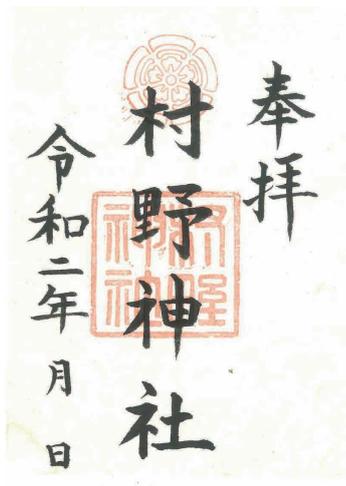


神宮遙拝所庭苑



本殿

## 神社のおすすめ



鎮座地 枚方市村野本町二九一  
電話 〇七二一八四七一三三〇  
HP <https://murano-jinja.jimdofree.com/>

## 由緒

当社の創立は、弘安二年二月八日神司神地が定まり、新たに宮祠を造立し、続いて神霊を遷し奉った。(大阪府神社誌によれば、弘安二年八月勸請云々とある。)

明治五年には村社に列し、同四十一年十二月神饌幣帛料供進社に指定された。

祭礼に当っては、青白和幣を神殿に捧げ、巫八乙女は鈴鼓の神楽を奏上して、天下泰平を祈り、また弘安二年秋九月十八日の祭礼には、神輿を拝殿に出し奉り、天ノ川の西に御旅所を設け、同月二十一日に神司初め、供奉の神人前後左右に行列を引き、神輿を渡し奉り、日々幣帛・御酒・御供種々の時の物等を奉る。十月十九日に御遷幸(この間三十日)。この時以来毎年この祭礼を執行したと伝えられている。

文徳天皇の御宇惟喬親王が御狩の時、群臣諸郷を誘い御幸あり、御安座を設け遊覧をなし給う。霊跡所領の庄園である。親王の尊敬が厚かった事は勿論のこと、多くの人の崇敬が厚かった。

現在の本殿は、昭和三十七年十月竣工落成(鉄骨コンクリート造、銅板葺)。

手水舎は、平成三年十二月十五日に新築した。

末社に住吉、西野、次野、乾野、火産霊、稲荷神社、金毘羅神社がある。

令和元年七月、神宮遙拝所庭苑改築。

## 神宮遙拝所庭苑「やえのせせらぎ」

出雲の山々を背景に、天照皇大御神と見立てた景石を中心に据え、そこから肥河(現在の斐伊川)のせせらぎが始まり素戔嗚命と見立てた景石を通り、櫛稲田姫命と見立てた景石のもとへと流れていきます。生命を表す美しい水が素戔嗚命、櫛稲田姫命のご縁を結んだ様子です。

# 交野天神社

かたのあまつかみのやしろ  
(通称) かたのてんじんじや

## 御祭神

光仁天皇  
 天児屋根命  
 菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
 厄除開運  
 学業成就

## 例祭日

十月十七日



- ① 継体天皇樟葉宮跡伝承地
- ② 交野天神社本殿  
末社八幡神社本殿
- ③ みっけみっけ守  
みっけ絵馬

## 神社のおすすめ



鎮座地 枚方市楠葉丘二一九一  
 電話 〇七二一八五七〇七三三二  
 H P

## 由緒

桓武（かんむ）天皇は、延暦六年（七八七年）、長岡京の南郊の地を選び、郊祀壇（こうしだん）を設けて、父光仁（こうにん）天皇を天神（あまつかみ）として祀った。これは、中国の皇帝が毎年冬至に都の南に天壇（てんだん）を設けて、天帝（てんてい）を祀る例にならったもので、当社の起源はこの郊祀壇にあるといわれている。主祭神は光仁天皇で、天児屋根命（あめのこやねのみこと）菅原道真公（すがわらのみちざね）が合祀されている。

交野天神社本殿は、一間社流造、檜皮葺（ひわだぶき）で、鎌倉時代の嘉禎四年（一二三八年）と室町時代の応永九年（一四〇二年）に修復され、嘉吉二年（一四四二年）鑑葺（よろいぶき）を檜皮葺に改めた。全体の外観は雄大な手法で鎌倉時代の様式を残し、墓股（かえるまた）等の彫刻は繊細で美しいものが多く、室町時代初期の特色を備えている。菅田和気命（ほむたわけのみこと）を祀る末社八幡神社本殿は、造営年代は交野天神社よりやや下るもので、小規模で簡素な造りになっている。構造や形状は交野天神社に等しく、向拝（こうはい）の墓股や欄間（らんま）の透彫（すかしぼり）に見るべきものがある。大正六年四月五日に特別保護建造物に指定、昭和二十五年八月二十九日には文化財保護法による重要文化財に指定。その後昭和三十九年に国の重要文化財に指定された嘉禎四年、応永九年の棟札（むなふた）と嘉吉二年の棟札が残っている。又、参道奥に鎮座する、末社貴船神社は継体（けいたい）天皇が即位した樟葉の宮跡を祈念するために、当地の氏神である高麗神（たかおかみのかみ）をこの地に移して祀ったのが当地の起源といわれている。貴船神社はまた雨乞いの神様で、早天の時雨乞いの祈りをすると、慈雨が降ったと言い伝えられている。

社殿は、建立年代は不明だが、一間社流造、檜皮葺（ひわだぶき）で、建築様式から桃山時代に遡る遺構と見られる。平成十六年四月一日市の有形文化財に指定される。継体天皇樟葉宮跡伝承地、『日本書紀』は、越前三国にいた男大迹王（おおどのおう）が樟葉で西暦五〇七年即位して継体天皇となり、五年にわたり宮を営んだと記している。樟葉宮跡の位置は不明だが、交野天神社の社に囲まれた末社貴船神社の鎮座する小丘の麓に「此附近継体天皇樟葉宮址」の石碑が立っている。昭和四十六年に大阪府の史跡に指定される。

関白左大臣 一条実経（いちじょうさねつね・一二三三年〜八四年）は、次の歌を詠んでいる。

### 『続古今和歌集』

くもらしな 真澄の鏡 かけそふる 樟葉の宮の 春の夜の月

# 御殿山神社

ごてんやまじんじや

## 御祭神

八幡大神（品陀和気命）  
 稻荷大神（豊字氣比賣神）  
 貴船大神（高禰神）

## 御神徳

厄除開運  
 商売繁盛  
 地鎮方除

## 例祭日

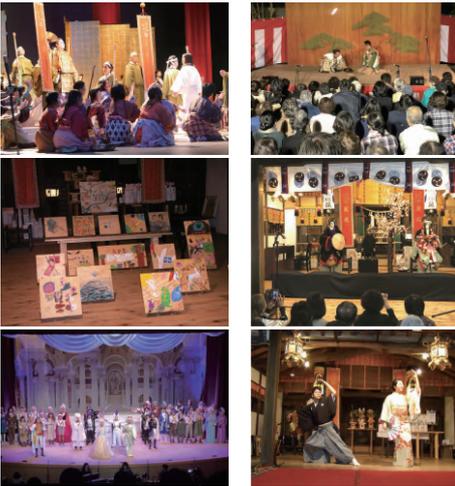
十月十九日



鎮座地 枚方市渚本町一丁目五  
 電話 〇七二一八四七〇六六五  
 H P

御朱印は直接神社へ  
 お問い合わせください

## 神社のおすすめ



## 由緒

当社は、枚方市渚本町の通称御殿山の丘上に鎮座し、山上境内地は二八四坪八一、山麓境内地は二八七二坪で、氏地は（旧）大字渚一円である。丘は氏地を瞰下し、淀川を隔てて近く山城・摂津の翠黛に對し、風光絶佳である。

御殿山の名称は、惟喬親王は渚院に去来した当時、この山上に亭榭を置かれたので、こう名づけられたと言われ、また万治元年に、領主となった永井伊賀守尚庸は、山上に屋形（陣屋・居城）を設けてから、御殿山と呼称したとも伝えられている。

渚院の址は、氏地の渚元町（旧）渚北之町）にあつて、今は鐘楼と寛永元年に永井伊賀守の家隸杉井吉通の建てた「河州交野渚院碑」が残っているが、その昔惟喬親王が駒を繫がれたと伝える「駒留松」や、親王遺愛の「ちもの桜」と言った名木は、名のみが残り、惜しいことにそのおもかげが見られない。惟喬親王は小野里に幽棲されてから、渚院の邸も荒れたので、それを精舎に造り改めて観音寺と称し、寛永元年に領主永井伊賀守尚庸によって修葺を加えられた。

その昔、この渚院の邸内址の東北隅、観音寺の北側に隣り合せて粟倉神社の御旅所があつた。粟倉神社は、元和二年に小倉村に社殿を造営して、新たに八幡大神（品陀和気命）を勧請し八幡宮と称して、小倉村・渚村二村の産土神と仰ぎ奉つて、文政年間に更に拡張改築されたがその頃から渚村に独立の産土神を勧請しようとの議が起り、渚村にあつた粟倉神社の前記の御旅所に、八幡大神（品陀和気命）を勧請して、渚村一村の産土神と斎き祀り、西粟倉神社（通称・若宮八幡宮）と称した。降つて嘉永四年十二月はじめに御神像奉安祭が執り行なわれた。

往古は、法印別当を置き社寺を兼ねて奉仕したが、明治維新の際廢せられた。明治二年に、御殿山に社殿を造営し、明治三年九月十九日に西粟倉神社のお社から御遷宮して御殿山神社と改称し、現在に至っている。渚院・渚の杜・渚の岡などについて、古来縉紳・公卿らの懐古の情を寄せて詠じた歌が数多くある。

（伊勢物語「渚院の桜を眺めて」）

世のなかにたへて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂世に何か久しかるべき

交野なるなぎさの桜いく春か絶へて問ひし跡に咲くらん（法印定円・新後拾遺集）

むら時雨いくしほそめてわたつみの渚の杜の紅葉しぬらん（衣笠内大臣・続古今集）

わたつみの渚の岡の花すすまねきぞよする沖のしら浪（源信明・新続古今集）

昔より松で名高き岡をしとどにぬらす宵のさみだれ（宮司岩橋袍月）

現在、境内では市民の皆様による絵馬の個展や市内でも市民オペラや子供ミュージカル等、舞台芸術のスキルを活かした活動もしている。  
 春と秋の奉納芸能祭では乙女楽座による人形浄瑠璃や狂言師茂山千三郎さんによる奉納狂言等を開催。

# 菅原神社

すがはらじんじや

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

学業成就  
家内安全  
身体健全

## 例祭日

十月十九日



鎮座地 枚方市藤阪天神町一―一  
電話  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

創建年代は不詳であるが、藤阪村の始めは津田村から分かれたもので、古くはその名が永仁六（一二九八）年三ノ宮造菅奉加の村々中に記されている。

その頃当社は津田郷の脇宮として三ノ宮座衆で祀られていたと伝えられている。

後土御門天皇の頃（一四六四―一五〇〇）津田城主備後守正忠は、この地を開き津田郷の一座を移植したので当時氏は十二軒であったが、天文元年（一五三二）明尾寺の辺りに在った津熊郷五軒が戦に焼けて当郷に加わったので十七軒となった。その姓名は、永禄二年（一五五九）河州交野郷五ヶ郷（津田・藤阪・杉・尊延寺・穂谷）侍連名帳に記して三之宮神社に奉納したが、それは今も同神社に残っている。

天正年中（一五七三―一五九二）津田城主主水頭正時は当社の造営をなし、村人は天満山を伐り開いて畑地や屋敷を拡げた。

天満のお茶屋はこの宮の前に在って坂道の傍らの藤の古木と共に交野近在にその名を知られた。

当社の造営修復はその後寛永六（一六二九）年及び寛文十一（一六七二）年に行われたことが記録に伝えられている。

文久三（一八六三）年当社の本殿として奈良春日大社の一殿を寄附せられたので氏子一同はその木材を当村に運んで組み立てたものが今日の春日造りの社殿である。

明治三十一年（一八九八）旧拝殿を改築して現在のものとした。これと時を同じくして関西鉄道（現 JR学研都市線）が開通為、当社の境内を通過することとなった。

# 日置天神社

ひおきてんじんじや

## 御祭神

天之御中未之大神  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月十日



鎮座地 枚方市招提南町二一二八―一  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

日置郷は古墳時代からの複合遺跡がみられるように古くより「日置千軒」と伝わる繁栄をみた場所です。平安時代にこの地に天神、天御中主大神を祀ったのが当社の創始といわれ、惟高親王が渚院を中心として交野ヶ原に遊獵した折、この祠を訪れ、日没を惜しんで「暫し日を置かせ給え」と天神に祈願した事から「日置天神社（へきのあまつかみのみや）」と称したと伝わる。

天文年間（一五三二〜）、蓮如の子、蓮淳によつて日置の里が招提寺内町へと整備された時、当社も寺内町の氏神となった。

現在の社殿規模は慶長六年（一六〇一）再建の社殿に基づき、元禄年間再建の社殿は丹塗りであったが、現在は白木造に改められた。

貞享年間（一六八四〜）には菅原道真公を合祀した。

招堤の村は九町に分たれ、それぞれが地車一台を有し、近年まで勇壮なまつりが行われていた。現在でも境内に八台の地車倉庫がならび、秋の例祭には扉が開けられ、そのうち一台に子供達が乗り込み町内に曳き出されている。

# 山田神社

やまだじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
稲田姫命

## 例祭日

十月十四日



鎮座地 枚方市山之上四一五―三六  
電話 〇七二―八四四―九〇一六  
HP

奉拝  
山田神社  
令和二年八月八日

## 神社のおすすめ

末社

春日神社…順徳天皇の御宇「建保」一年中に大和春日神社の御神霊を勧請して宮山の北麓に移し祀つたと伝えられ今その地を春日前という。

石神社…寛弘元年、安倍晴明が藤田の里に滞在して加持石で祈禱したので田中修理亮が本社を祀る。

稻荷神社…安政二年五月に伏見稻荷大社の御神霊を勧請して境内地に祀る。

## 由緒

山之上の土地は、北河内郡牧野郷一の宮片埜神社の氏地であったが、弘安元年の社務職で、この土地に居住していた田中修理亮は、田中山（今の宮山）を神地として、新たに神社を造営して、同二年九月、一の宮の御分霊を勧請して山之上神社と称した。明治五年村社に列せられる。

明治六年二月十日田宮の地にご鎮座の田宮神社を廃して御祭神祇園牛頭天王（素盞鳴命）を山之神社に合祀し同時に両村の頭文字を取って山田神社と改称した。

# 厳島神社

いつくしまじんじや

## 御祭神

市杵島姫命

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市尊延寺五―九―一―  
電話  
H P

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

厳島神社・本殿と並んで立つ「末社春日神社本殿」への御参拝もお忘れなく！国の重要文化財に指定されています。

末社春日神社本殿の建立は推定室町時代中期と伝わっており、平成七年（一九九五）大がかりな解体工事が行われ、創建当時の極彩色が甦っています。

## 由緒

厳島神社は全国に約五百社あり広島の厳島神社を総本社とする。

厳島神社・本殿は総本社と同じく市杵島姫命を御祭神とする

厳島神社・本殿の創立 沿革は「氷室村郷土史」によると、明治五年（一八七二）村社に列し、大正四年（一九一五）村社に指定と記されている。

現在の厳島神社・本殿は社殿平面や構造形式などから、江戸時代末期文久三年（一八六三）の式年造替の折に、奈良春日大社の旧殿を本殿として譲り受けた「春日遷し」とされている

春日遷しの際、従来から有った社殿は、「末社・春日神社本殿」として、厳島神社本殿の北側に移された。

末社・春日神社本殿は地域的な特色をもつ、中世在郷神社の貴重な遺構として、昭和五十三年（一九七八）国の重要文化財に指定されている。

この末社・春日神社本殿の建立は、推定 室町時代中期で、村の鎮守として長年に渡り地域の人々に親しまれ、現在に至っている。

十月十五日の祭日には大太鼓を乗せた山車が境内に出される。

これは河内だんじり文化の北限かもしれない。

境内には末社・稲荷神社がある

# 春日神社

かすがじんじや

## 御祭神

天児屋根命  
豊受姫大神  
(末社 山田神社)

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十九日



鎮座地 枚方市野村南町一―一  
電話  
H P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

枚方市の野村を護っていただいている神社です。  
文字通り「野」の中に有、境内間近まで住宅が接近して開発され閉塞的な境内にならざるを得ないこの大阪で、開放的な境内を維持できています。境内から南側に、生駒山を遙拝できます。

## 由緒

当社の由緒は不詳である。明治五年村社に列せられた。

# 加茂健豆美命神社

（通称 加茂神社）

かも たけづみの みこと じんじや

## 御祭神

加茂健豆美命

## 御神徳

家内安全  
夫婦和合

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市走谷一―一七―二  
電話 〇七二―八三二―一五五〇

H  
P

## 御朱印なし

## 由緒

当社は、人皇五十代桓武天皇の御代、勅命により和氣清麿呂公、この地を河内の一の宮として「賀茂の大神」を齋き祭れるがその始めなりという。

古き史を繙けば、祭神「賀茂の大神」は、神武天皇国を建つるにあたり、畿内の豪族として大功をたて、山城の国を賜わるや、民生の安定に貢献、ために「賀茂御祖の大神」として奉祭さる。今の京都「下鴨神社」これなり。

御分霊を当地に迎えるにあたり、賀茂の社家の人々多く移り住み、堂山に三千坪の神域を開き、その中腹に広大な社殿を造営せり。丘の下を走井と言ひ、今の走谷これなり。近くに清冽な御手洗川あり。社参の人々この川にて禊し、敬神の誠を捧げしという。

しかるに約六百七十余年を経て應仁の乱起り、惜しくも兵火にかかり一切の財宝焼失し、今に残れるものなしと言う。されども今日、走谷に宮の上。宮の下。大門前。堂前等の地名が残れるは、往時の隆盛を窺うに足るといふべきか。

わが「加茂神社」は、これより百六十余年を経て、寛永六年に「産土神」として再建され、氏子の年長者が「一老」と言ひて神主となり、氏が祭員となりて春秋の祭典を執行せり。明治五年「蹉跎神社」に合祀、同十二年、現在地に復社し今日に至る。明治三十九年、加茂の森の浄材をもって拝殿を、昭和三十九年、社務所を新築、昭和四十九年、本殿を改築せり。境内に「御手洗。琴平」の小祀あり。

神と人相和し、神霊に仕えるはわが民族の卓越せる資質にして、わが走谷も千百余年にわたりて「賀茂の大神」を奉祭す。

# 二ノ宮神社

にのみやじんじや  
(通称 河内の牛頭さん)

## 御祭神

建速須佐之男命  
稲田姫命  
大己貴命

## 御神徳

商売繁盛  
良縁成就  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市船橋本町一七〇七  
電話 〇七二一八五七七一六二五六  
HP



## 神社のおすすめ

自分一人だけのお守り「おかげ様守り」  
願い事を記入し守り袋に入れ神殿にお祈りして成就すれば神殿に再訪し感謝御報告しお返しする。



おかげ様守り袋



おかげ様守りお返し処

## 由緒

當社は枚方市の北部船橋本町（旧大字船橋）北方村里に接し、杉・松・樟・榿等の樹林の中の社域に鎮座す。御祭神は建速須佐之男命、稲田姫命、大己貴命三柱の神にして、社記傳ふる所に依れば仁徳天皇二十九年春の勸請にして用明天皇は當国を収め給ひし矛を納めて郷の巨鎮と為し、桓武天皇は延暦十六年十一月大納言藤原繼繩を遣はして奉幣祭祀せしめ、文徳天皇は齊衡三年十一復た大納言藤原良相を遣はして奉幣祭祀せしめ給ひしといふ。

二宮牛頭天王と號し、天正年中織田信長は深く当社を尊崇し、社殿に修繕を加え、采地を寄せたりも、豊臣秀吉に至りて没収せられたるを慶長八年豊臣秀頼は片桐東市正且元に命じて、本殿及び摂社、御旅所、別堂を造営せしめ、且神苑を附し大阪城鬼門除の社と為して崇敬せり。

同時に従来牛頭天王と稱したりしを、改めて二宮神社と稱するに至れり。

當時の棟札今も尚存す、明治維新後境内にありし別堂即ち地藏堂をば浄土寺に移し、明治五年村社に列せられたる後、同四十一年神饌幣帛料供進社に指定せられたり。

本殿建築は一間社流れ造檜皮葺の優雅なるす建築物にして一ノ宮（牧野片埜神社）の建築に次ぎ推賞すべき本郡有数のものなり。

例祭は往時より菊月九日なりしも、今は改められて十月十五日に行はれる。

# 八幡神社

はちまんじんじや

## 御祭神

誉田別尊

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
学業成就

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市磯島元町五―七  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

枚方市磯島の地は古くは淀川中洲の島で、住民も十軒に満たなかったが次第に膨張し一村を成した。

社伝によれば、八幡神社は当地の領主大納言日野家が元和三年、八幡大神を勧請して氏神としたもので、村内十二軒からなる宮座が年番で神主役を奉仕した。

正徳元年に本殿を修理、宝暦四年に社殿が大破した時も、京都より堂上日野家が修理した。

明治四十一年、神社合祀の令により近隣の片埜神社に合祀されたが、昭和三十三年再び分離独立した。

当地は江戸時代までは摂津国に属し、境内には「寛保元年 摂津国嶋上郡磯島」銘の鳥居遺構が残る。

# 御狩野神社

みかりのじんじや

## 御祭神

大鶴鷓命  
進雄命  
百済王

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市禁野本町二一七一四一  
電話 〇七二一八五八一〇七四〇  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

当社は、万治寛文年間に、禁野の市辺浅右衛門の邸内に勧請した社を、その後（年代不詳）に和田寺の上方の現在地に移して、（旧）大字禁野の産土神として斎き祀った。

明治四十二年三月五日に、（現）枚方市牧野阪に鎮座の片埜神社に合祀された。合祀前の境内地は一四〇坪であり、田地七八坪・畑地九三坪・山林三六〇坪を有したが、合祀の際に片埜神社の基本財産に転入された。

昭和二十六年三月十五日づけをもって現在地（元の神社跡）にご遷宮された。現在境内地は一〇〇坪である。昭和三十一年十二月二十七日づけをもって、神社設立をした。

### 〇雉塚大明神

惟喬親王御遊の時、三足の白雉、渚の院に飛び来って死んだので、和田寺の上方の菓子山の頂に塚を造って葬ったといわれ、三足白雉霊と刻んである碑石は、一時東方の畠地に移されていたが、現在は和田寺内に移され保存してある。碑石の裏面は磨滅して文字は判読し難いまでになっている。

### 〇河州交野郡禁野村医王山

鎮守雉大明神因由記（安永二年書）

「惟喬親王の時、白雉の霊を祀る雉大明神の神祠が建てられた。」とある。

また、菓子山の頂に、神社の境内に接して古墳があったが、宅地造成のため、昭和四十三年に取除かれてしまい、その古墳に用いられていた岩石の一部は、枚方市役所の敷地内に、またその一部は御狩野神社の境内に保存されてある。この古墳から、大正の初めに、古刀・剣・土器等の埋蔵物を発掘したがこれを目撃した人の話によると、土中に石槨があつて、西南に面して高さ約五尺余・巾六尺・奥行約一丈あり、羨道とも見られる入口の中二尺・高さ四尺・奥行四尺ばかりあつたということである。

なお、前記の雉塚大明神は、この古墳とは別のものであつて、此地に於ける雉子の多獲からその霊を弔う意味で雉塚が作られたものではないかとの説もある。

### 〇禁野

古の所謂禁野は、今の枚方市禁野から枚方市渚・御殿山および甲斐田に亘った一帯の丘陵地を指したものである。禁野は平安朝当時の御猟地であつて、人臣の猥りに狩猟する事が許されなかつた地域である。しかし別に勅命のある時は、親王・大臣その他縉紳が鷹を臂にして猟に従う事を許された。禁野の地は水辺丘陵の地帯で、古来交野の雉子の称があるように野鳥が多く、また水禽等も多く獲れたのであろう。昔の淀川は、今の渚の平野部から禁野の丘陵に逼って流れ、文祿の頃には、天の川は現在の禁野橋附近の地で淀川と合していた。

# 山田神社

やまだじんじや

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市田口一六六一一八  
電話 〇七二一八四九一五九七三

H  
P

御朱印なし

## 由緒

旧交野郡山田郷田口に鎮座する古社で、この地は仁明天皇外祖母正一位田口姫を輩出した事からも知られるように古くより開けたところであった。

創建年月は詳らかでないが、天明六年の社殿再建に際し、奈良春日社社家、中東正四位下上野介大中臣時春より、春日社旧殿の下賜があった。

明治五年に村社に列し、同年、田口枝郷である出屋敷地区に鎮座していた春日神社が境内に遷された。

現在では、春の例祭が摂社春日社、秋の例祭が本社として祭祀が続けられている。

# 甲鉾神社

かほこじんじや

## 御祭神

八幡大神  
品陀和氣之命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地  
枚方市甲斐田町一

H 電  
P 話

御朱印なし

## 由緒

創建年月は不詳だが、古くより八幡宮と称される交野郡甲斐田村の氏神で、延宝九年（一六八一）の寺社改に「甲斐田村氏神 無年貢地 八幡宮 宮座二座 一座二十八人、一座に八人、合三十六人 此内八人の一座は神主役不相勤 二十八人の一座より一年一人宛籤神主役相勤」とあり、文化十二年（一八一五）の文書にも「・・・右支配は村方二組座中間より宮守仕候」とあるように、神主役は宮座から順番で奉仕されていた。明治初期、となりの片鉾村の八幡宮を合祀し、「甲斐田」「片鉾」の両字をとって「甲鉾神社」と称した。片鉾村の八幡宮は同十三年に返祀されたが、社名はそのまま残された。覆屋の中にある本殿は様式上、在郷神社本殿建築の典型的なもので、明暦〜寛文頃の江戸前期の技法を色濃く伝える貴重な遺構である。

# わかみやじんじや 若宮神社

御祭神

八幡大神

御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

例祭日

十月十五日



鎮座地 枚方市杉一―三―一五  
電話  
H P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

平成二十九年に改築。平成八年の大雨で裏山が土砂崩れを起こし、現在「堂の背公園」として整備されている。大雨でも大きな被害に遭わなかった当社のご神徳をいただいでください。

## 由緒

津田城主 津田主水正行の守護神として崇敬のあつた社であつた。  
明治五年（一八七二）尊延寺厳島神社に合祀されたが同十二年復旧して村社に列せられた。境内は九十坪。本殿、拝殿、土蔵を存す。末社には天満宮、稻荷、八幡、琴平、龍、庚申あり。

# 杉ヶ本神社

すぎがもとじんじや

## 御祭神

八幡大神  
品陀和氣之命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日

鎮座地 枚方市片鉾本町一五―三〇  
電話  
H  
P

御朱印なし



## 由緒

枚方市片鉾鎮座で八幡大神を祀る。  
古来、石清水八幡宮に当村から御鉾一体を献上し、例祭に毎年、神役として参加した事にちなみ片鉾村と称した。  
神社創建年月は不明だが、この地は中世、桓武天皇による天神郊祀壇の旧跡と伝わる。  
明治五年五月に隣村の甲斐田村・甲鉾神社に合祀されるが、同十三年分離独立し旧跡に復した。

# 寝屋川市

▶ 大阪府にもどる



# すみよしじんじや 住吉神社

(通称) **ねや川戎神社**

## 御祭神

住吉大神 (息長足比賣命)  
春日大神 (武甕槌命)  
戎大神 (事代主命)

## 御神徳

安産守護  
商売繁盛  
武運長久

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 寝屋川市木田町六一〇  
電話 〇七二一八二一七四五七  
HP <http://www.neyagawashrine.com/>



## 神社のおすすめ

【毎年十万人を超える ねや川の戎っさん】

そう広くない境内へは混雑防止のため入場制限も行われる事もしばしばあり、多くの参拝の方の人波。軽快な笛や太鼓のリズムののって「商売繁盛笹もって来い ねや川の戎っさん ここだっせ」と縁起の良い♪お囃子♪。ところ狭しと軒を並べる色とりどりの出店から聞こえる呼び声、焼き食べ物の漂う煙と匂い。これ等が相って醸し出す祭りの雰囲気はまさに【神賑い】。ご祭神のご神威はいよいよ高まり、ご神徳の高い「ねや川の戎っさん」として広く崇められている。

## 由緒

当社 伝ふる所によれば其のむかし 神功皇后様が舟に召されて当地方を御巡啓の砌 たまたま濃霧に遭はせられ 方角も判らなくなったので舟の櫂を立てて占いたまひ。其の櫂の倒れた方に向かつて進まれた所一つの小島があり 早速上陸して暫時の御座所とされた。(現在の木田元宮付近) その時 当地方の住民が伏兔を献上して 徒然を御慰め申したところ 皇后様はいと御満足に思召され 御腹帯を賜つて妊産婦の悩みを救わんことを 誓わされた。ある年 住民協力して土地開墾の事に従い 新しく若干の宅地と耕地を得竣工祝賀の日 一羽の白鷺 西の方より飛来し奇遇にも皇后様が御座所とされた所に 撰津住吉神社の神札を落として飛び去る 住民大いに喜び奇瑞となし住吉大神として之を其処に鎮祭し 永く産土神と仰ぎ奉つた。(元々この地区は中木田地区の一部であるがその中で、この周辺は古くから木田元宮と言われており現在は木田元宮一丁目と住居表示となっている。同一番地に、木田元宮舊地」と揮毫された石の碑がある)。

しかし 此の処は低地のため 大雨には必ず浸水した。

承応二癸巳歳(西暦一六五三年) 神社移転の事あり(相殿天井裏古札による) 即ち一夜神靈祠人に告げて宣く「たとえ糠団子を喫するとも高燥の地に移らんと」即ち木田村一番地(木田町六番十号 現在の境内)に社殿を造営し 別に相殿を建て もと木田村東北鬼門除の神として祀られていた 戎大神を配祀すると共に男子の武運長久を願つて春日大神を合祀した。三大神が御鎮座されることから 本神社は古来三社大明神と言われていた。

# ともろぎじんじゃ 友呂岐神社

## 御祭神

応神天皇  
菅原道真  
茨田連珍子

## 御神徳

安産守護  
厄除開運  
学業成就

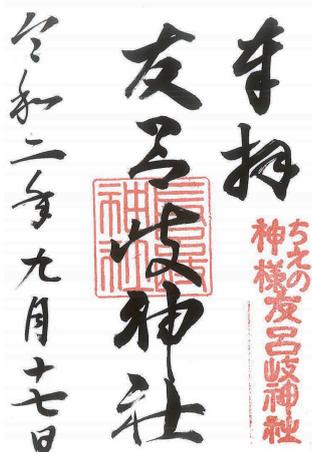
## 例祭日

十月十六日



寝屋川市

鎮座地 寝屋川市香里本通町一九一三  
電話 〇七二一八三二一〇三〇〇  
HP <http://tomorogi.com/>



## 由緒

当社は康正二年（一四五六年）後土門天皇北ノ小路新邸をこの地に造営し南に鎮護神として八幡宮を祀り北に南無阿彌堂の伽藍を建設せられたと古書にあります。その後畠山義就と畠山政長はこの地で戦い兵火の為に社殿は焼失したが、この八幡宮が当社の始めであります。その跡地に小社を建て、氏神として祀っていたが又も兵火の為に焼失した。

天正五年（一五七七年）八月この地の人々は社殿を再建し氏神として崇拝し、近隣の人々は祈願所として諸々の願い事をし参詣していたという。

寛永年間に改築し元禄初年に修築、昭和四十九年に改築していますが、御本殿は古色豊かに、色彩を止め時代を物語っています。

明治四十三年元の若山神社（三井神社）元の二本松神社（田井神社）元の太間神社が八幡神社に合併し、この地の地名をとって友呂岐神社と改称し現在に至っています。

元の若山神社は延喜元年（九〇一年）菅公が左遷のとき、此の地を通過の折三井本法寺（本厳寺）に宿舎して寺僧と親交厚く、菅公が筑紫で薨去し給いしを知りこの地の人と議り壯観なる社殿を造営して若山に祀り氏神とした。

建武年中に後醍醐天皇が吉野よりこの地に駕籠給う時、宿舎を本法寺に定め菅公の社殿に御参詣になり萬壽殿の三字の勅額を賜ったと伝えられる、又元和元年（一六一五年）徳川家康の武運長久と五穀豊穰、悪魔退散を祈願すると共に、その年の吉凶を占う為に正月八日八つ時（午後二時）に御弓式行事を行い、近郊の人々は恩恵を受ける為に参詣していたという、この行事は今尚続いている。又二本松神社は菅公左遷の時この地を通過の折、手植の松が記念となり、樹下に一社を建て菅公の霊を祀って氏神とした。そして元の太間神社は創建年代不詳。仁徳天皇の十一年（三八三年）寝屋川市の淀川左岸・太間地区の茨田堤構築に貢献した故事により茨田連珍子（まんだむらじころもこ）を当地に昔から小社を建てて祀っていたという。

以上の歴史の変遷を経て、現在は菅田別尊（応神天皇、厄除け・安産の八幡様）・菅原道真公（学問の天神様）・茨田連珍子（土木建築の神様）の三柱を御祀りしております。また、境内摂社の成願稻荷社に倉稻魂神が鎮座しております。

# おとしじんじや 大利神社

## 御祭神

大歳神  
菅原道真公  
大国主大神  
事代主大神

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

十月十八日



鎮座地 寝屋川市大利町二三一  
電話 〇七二一八三九一八〇六五  
HP

奉拝  
大利神社



令和二年八月四日

## 神社のおすすめ

当社の御神牛は身代わりの牛さんと云われ、痛い所をさすると痛みをとっていただけです。



御神牛

## 由緒

江戸時代末に刊行された河内名所図会には 大歳神祠（おとしのやしろ）大利村にあり 此里の産土神とす 例祭九月十五日 とある。本地（大字大利）は古来茨田郡に属し、もと九個荘の内にして、大年村と称したが、後に利益を生むようと大利に改められた（寝屋川市誌より）。久安元年（一二四五年）星田小松寺文書に大利郷とある。

貞享三年（一六八六年）の調査では昔よりあり。創建年代不明である。元治元年（一八六四年）の大利村明細帳に真言宗京都泉涌寺非田院末寺社僧金剛寺 氏神境内に御座候とあり、明治の神仏分離までは宮寺の社僧により管理されていた。

河内九個荘村郷土誌によると、金剛寺は東の坊と呼ばれ、慶長八年（一六〇三年）豊臣秀頼による総持寺（西国二十二番札所）再建の時に当寺の仁王を移したとあり、また総持寺山門はもと金剛寺のものと伝えられている。宝永六年（一七〇九年）の拝殿再興の棟札には住持金剛寺圓了、文化十四年（一八一七年）の修覆天満宮社頭の棟札には遷宮権律師普見とある。

天保十二年（一八四一年）再建。

往古より農家の五穀豊穣を守る神である大歳神を祀って来たが、寛文十年（一六三三年）永井信濃守尚政の領地となってから菅公を合祀し、後に天満宮、氏神社、大利神社と改称される。明治五年村社に列し、同四十三年神饌幣帛供進社に指定せられた。境内地二八〇坪、末社に稻荷社、皇大神宮社、八幡宮社、神牛舎あり。稻荷社の白菊大神は京都伏見稻荷大社の三ノ峰より勧請したる。八幡宮社は大利村の庄屋茨木家の鎮守であったが、明治中頃に同家が転居した後、大利神社の末社となる。文化九年修覆、慶應元年再建の棟札あり。拝殿には江戸時代末期に奉納された三十六歌仙の額が並べられている。

大正十五年の財産登録台帳には地車倉庫六坪の記載があるが、昭和四十年代初めに焼失してしまった。

# やさかじんじや 八坂神社

## 御祭神

素盞鳴命  
住吉大神  
豊受姫命

## 御神徳

厄災除け  
病氣平癒  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 寝屋川市八坂町一―一三  
電話 〇七二―八二二―二六五六  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

(御祭神 素盞鳴尊)  
病氣・災難・御禊の神  
知恵・学問・和歌の神  
縁結びの神  
安産の神  
海陸・交通守護の神



樹齢約 650 年を超えるご神木

## 由緒

当社創建年代は詳らかではないが、伝承によれば第三十五代皇極天皇二年〔六四三年〕の頃と伝えられる。昔、第十六代仁徳天皇、浪速高津之宮におわせし頃、茨田の堤を築かれたため、河内平野東部を南北に走る山脈丘陵に源を発し、高宮台地に迫り南流したる水は此の地に滞留し広大なる池となり、人呼んで茨田の池と云う。皇極天皇二年七月、池の水腐敗し口黒く身白き小虫湧きて池を覆い、翌八月に入ってその虫死して死骸は水面十糶から十五糶の厚さになりしと云う。その為池の水藍汁の如く変じ魚類死滅、悪疫発生し住民死亡する者多し、ここに於いて里人困窮し播州廣峯神社に疫病平癒の祈願を行う。靈験著しく、日成らずして終息す。人々これを忘れざるため、神恩報謝の心を以って其年、廣峯神社の分霊を播州より勧請して池の辺りに小社を建立し、これを祇園社と称え里の守神として齋き奉る。その後爾來年月を重ね池の水渴き芦原となりしを以って開墾し、数十町歩の農地を生ず処々に五穀豊饒を祈願し豊受姫の命住吉大神を合祀し相殿齋き奉る。当祇園社は代々茨田の池の茅を持って屋根を葺き、二十年毎に葺き代えてきました。が万延元年正月「一八六〇年」時の代官多羅尾民部殿に願ひ出て永世不朽の瓦葺入母屋造りとなせり。現在の社殿是なり。

### 【ひろむね橋由来】について

全国祇園総本社と云われる廣峯神社は姫路城の北方約五キロの地点、広峯山(旧称・廣峯山)あり、当八坂神社は令和元年より約一三七六年前(西暦六四三年)廣峯神社より勧請したるを以って、古老の説によると、当社南方約三百メートルの位置に旧ひろむねと名付く集落並びにひろむね橋なるものがあり、その石碑もありたりと云う。これは当時播州廣峯の地名そのゆかりを以って称したものと思われる。現廣峯神社西脇芳一宮司の説によると、この地より勧請したる神社は、当山の地名が各所に伝えられているとのこと。

### 【御神縁】

「八雲たつ 出雲八重垣 妻こみに 八重垣つくる その八重垣を」

結婚賛歌とも申すべきこの御神詠は、当神社御祭神「素盞鳴尊」がお妃「奇稲田姫」と御結婚の折り、新殿を造営して迎えられ、この歌を詠まれ、御夫婦の仲いとも睦じく国造りされたと云う。

この御神詠は我国最初の和歌といわれ、和歌の祖神と仰がれている。

# かみだてんまんぐう 神田天満宮

御祭神

菅原道真公

御神徳

例祭日

十月十八日



鎮座地 寝屋川市上神田二一二二  
電話 〇七二一八二七四六四〇  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は貞享三年（一六八六）の調査によれば、往昔より鎮座されていたとあり、もとは下神田の天の淵の東に鎮座し、旧四宮村上島頭の氏神と川を隔てて相對していた。島頭の祭りには神田の当神社から御幣を受け、祭りが終るとまた当神社へ納めることになっていた。

万治二年（一六五九）今の地（上神田一番地）に遷した。

神社所蔵の菅公の尊像の掛図に、例祭のとき神酒を供えたと、菅公のお顔が神酒を聞食めされて、赤くなられるといひ伝えられている。

境内地一七七七平方米を有し、樹令八〇〇年余の楠の大木があつて幹の周囲一〇米、高さ約三〇米あり本市きつての名木である。

たかやなぎじんじや  
**高柳神社**  
(通称 高柳天満宮)

御祭神

菅原道真公

御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

例祭日

十月十八日



鎮座地 寝屋川市高柳三一九―二五  
電話 〇七二―八二六―九四二四  
H P

御朱印なし

由緒

当社の創立年代は詳らかでないが、貞享三年（一六八六）の調査によれば古くより鎮座されていたとあり、社殿は宝永七年（一七一〇）に再建され、明治五年（一八七二）村社に列せられ、同年十一月大字葛原の氏神社を合併した。

明治十三年（一八八〇）社殿が造営され盛大な正遷宮を執行したとある。これより先に合併した氏神社は葛原之復旧のために分離され、現在の社殿は昭和五十年（一九七五）に造営された。

境内（三九六坪）に繁る老楠は推定樹令二百五十年以上とされ、昭和五十二年寝屋川市保存樹木の指定を受けている。

# うじじんじや 氏神社 (通称 仁和寺氏神社)

## 御祭神

菅原道真公  
伊弉諾尊  
伊弉冉尊  
藤原藤房

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月十八日



鎮座地 寝屋川市仁和寺本町四一―一二九  
電話 〇六一六九〇一七五〇〇(佐太天神宮)  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

田圃の中に残されていた本宮跡は、現在では、建物に囲まれながらも地域の人々に守られています。



氏神社本宮跡



氏神社例祭

## 由緒

当神社は、元からここに鎮座されたのではなく、延宝二年(一六七四)六月十六日の淀川の仁和寺堤防が決壊して、社殿が流され村の田畑は皆川砂をかぶったので、その上砂を村の中央に集めて耕地の復旧を図り、その砂山の地に新たに社殿を造営し、神様をお移したものである。

元の鎮座地は字本宮(もとみや)と称し、田圃の中に、籬で囲った石碑が建っている。ここが、もとの「氏神社」の建っていた所である。その石碑には、「仁和寺氏神社御本地 代々能人敬う神乃宮之跡」と刻まれている。そして傍らに小さな石の祠がある。

旧社の起源は、伝うるところによると、仁和寺庄に観音寺(※)の建立されると同時に、本宮の地に建てられた白山権現であるとされている。元の産土神は今古宮と称して境内摂社に奉祭する白山権現(祭神・伊弉諾尊・伊弉冉尊)であった。寛永十年(一六三三)永井信濃守が当地方の領主となり、領内の産土神に菅原道真公を祀ってよりは当社の主神として天満宮・白山権現とならべ称えることになった。明治五年、当社は村社に列せられたが、明治四十四年一月十四日、隣村の佐太天神宮に合祀されて表向きは佐太天神宮の御旅所となっていた。

昭和になって間もなく神様に戻ってもらう気運が湧き、昭和四年以降内務省に、村を挙げて神社復旧運動を起し、それが正式に復旧を許可されたのは太平洋戦争のさなか昭和十八年七月二十六日付けであり、その翌月の八月二十五日、盛大な還幸祭を執り行い、長い間の村民の願いは達せられた。

仁和寺地区のほぼ中央にあつて、大木が茂り、鎮守の森としての威容を備え、この神社ならではの感がある。

※観音寺の創建者 敦實親王(あつみのしんのう) 宇多天皇の皇子八九三生く九六七没

# 鶯関神社

おうかんじんじや

## 御祭神

天照大御神  
菅原道真公  
野々宮大神

## 御神徳

家内安全  
学業成就  
諸願成就

## 例祭日

十月十六日



御神木の楠

## 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 寝屋川市堀溝二一三二二〇  
電話 〇七二一八九三一二二二二  
HP

## 由緒

古代、大和と河内の交通に大きな障害となったのが、今も変らぬ生駒山系です。この山を越える道は十指にあまるほどあります。なかでも、清滝越えは交通量が多かったようです。これに目をつけたのが、財源のほしい寺社や領主でした。この道を行く人が必ず通る沼辺の堀溝に關所を設け、通行人から関錢をとり、通行を許したわけです。それに軍事的要素も加わったようです。その關所がいつごろ作られ廃止されたかは定かではありませんが、平安末に存在していたことは藤原時代康資王の母君が詠まれた歌集『康資王母家集』の次の歌で知られます。

我が思ふこころも尽きぬ ゆく春を越えずもとめようぐひすの関

この關所の名は、近年までうぐいすの名所であったところから「鶯の関（うぐいすのせき）」と言います。所在地は堀溝の大念寺あたりと考えられます。これに因んで町の神社を古くから「鶯関神社」と称しました。

当社より西三〇〇メートルのところには「野々宮塚」があります。当社は元々京都嵯峨の野々宮と同様、天照大御神を御祭神として、天皇即位のとき伊勢神宮に奉仕された斎王が立ち寄られた由緒ある神社です。江戸時代に永井信濃守尚政が領主であった時代、鶯の関所跡に野々宮から神社を移し、永井信濃守尚政が奨励敬神された菅原道真公を合わせ祀るようになったと伝えられています。その後、天満宮と称し、現在の「大念寺（寝屋川市堀溝）」が旧跡地であるとされています。

境内の手洗鉢には、天満宮明和四丁亥五月の銘があり鶯関神社と称されたのは、明和四年（一七六七年）ころと伝えられています。鳥居の額は従五位勲四等大村屯の書であり、社頭額は明治二十五年十月、山階宮晃親王の御筆であります。境内のうちで最も古い鳥居の柱には貞享元年（一六八四年）の銘が残っております。現在の正面鳥居は嘉永七年（一八五四年）に建立されたものです。

明治五年村社に列せられ、大正二年十月神饌幣帛料供進社に指定されました。

境内の末社神社には野々宮大神・菅原道真公を御祭神として祀られております。末社天神社は、平成十七年九月二十五日大念寺より当社へ移されました。

お  
お  
も  
り  
み  
お  
や  
じ  
ん  
じ  
ゃ

# 大杜御祖神社

(通称 奥の宮)

御祭神

天萬魂命  
建速須佐之男命

御神徳

五穀豊穰

例祭日

十月十七日



鎮座地 寝屋川市高宮二一五十一  
電話 〇七二一八二二二五八

H  
P



## 由緒

当社は延喜式内の神社であるが、創建の年月は詳らかでない。明治五年村社に列せられた。もと牛頭天王と称した。

玉松寺という宮寺があつたが、明治維新の神仏分離により寺は廃絶した。

# 菅原神社

すがわらじんじや

## 御祭神

菅原道真

## 御神徳

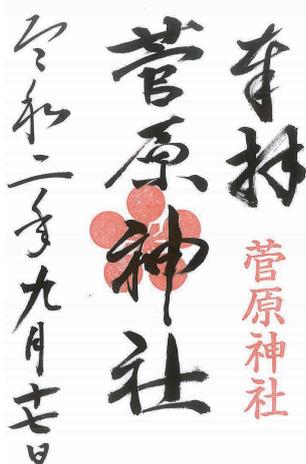
家内安全  
学業成就  
除災招福

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 寝屋川市池田中町三二一―一三  
電話 〇七二―八二九―五四八二  
H P



## 神社のおすすめ

菅原神社本殿各部に桃山時代の様式に通じる彫刻が施されており、寝屋川市において江戸時代前期に遡る可能性のある数少ない神社建築で、平成二十三年十一月三日に市指定有形文化財に指定された。

## 由緒

当社の創建の年月は詳らかでない。伝説によれば、往古より当社に祭ってあったのは、現在の末社琴平神社の御祭神大國主命であったが、正暦年間に中振村の蹉跎天満宮より道真公の遺物である白木の太刀（長さ一尺余り）を請受け来って御霊代として、本殿に合祀してより在来の祭神を忘れ、祭神は単に道真公のみと誤って今に及んでいる。もと天満宮とも称したが、のち氏神社と改め俗に門田神社とも呼んだ。門田神社と呼んだのは鎮座地の地名によるものである。明治五年村社に列し、同四十四年神饌幣帛料供進社に指定され、同年一月十日に葛原と点野の菅原神社が合祀され、大正元年八月十九日今の社名に改められた。末社に琴平神社、白太夫神社、稲荷神社がある。

# ともろぎじんじゃ 鞆呂岐神社

## 御祭神

天照皇大神  
豊受大神  
蛭子大神  
住吉大神  
神功皇后  
外一柱

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
交通安全

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 寝屋川市木屋町一〇―二五  
電話 〇七二―三三四―二二七五  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

● 拝殿・本殿の東側から石段を上ると奥宮に通じる参道になっている。  
石段下に立つ鳥居は赤穂浪士の村松喜兵衛秀直の四代目の子孫による「寄進の鳥居」として知られている。  
境内になで大黒有り。

## 由緒

当社の創建は社伝では、奈良朝末期の淳和天皇の天長八年（八三一）、天皇の近侍藤原保則卿が、従者を伴い淀川堤を逍遙せられ、翌年に東赤井堤南御供堤を築き云々とあり、清和天皇の貞観三年（八六一）、地元有志によって神社を建立勧請した。とある。現在の社殿は、明治二十年代に再建したもので、桃山式彩色である。石灯笼二十基は、用水桶の水源にある神様として、用水掛の二十ヶ村から、文久三年（一八六三）九月に寄進されたものである。明治五年村社に列せられ、大正二年十月に神饌幣帛供進社に指定された。境内に若宮八幡神社（応神天皇）、稲荷社がある。

### 境内

井路（いじ）にかかる石橋を渡って石鳥居をくぐると、南面する拝殿、その奥に本殿が建っている。本殿は覆屋がかぶられているが、一間社流造、彩色の一部を残す江戸時代中期の遺構である（櫻井敏雄編『大阪府神社本殿建築聚成』）。本殿の左側に稲荷を祭る小祠がある。また境内の東北隅には、大正三年（一九一四）に合祀された若宮八幡社があり、奥宮と呼ばれている。

石造遺物の中で最も古いものは、上の段にある寛文七年（一六六七）の灯笼で、現在一基は奥宮の前、一基は石階段を上った左側に分かれているが、もとは一対である。拝殿前に立つ灯笼は明和八年（一七七二）の造立で、村中から寄進されたもの、各正面に「六柱大明神」と刻んでいるのは、当社の祭神が六柱であることからこのように呼ばれていたのである。

● 拝殿・本殿の東側から石段を上ると奥宮に通じる参道になっている。石段下に立つ鳥居は「寄進の鳥居」として知られている。右の柱に、

播州赤穂城主

浅野長矩家中四十七人之内

村松喜兵衛秀直四代之孫

村松喜兵衛源尚次

と刻まれている。村松喜兵衛秀直は赤穂播の中小姓・扶持方奉行であったが、元禄十四年（一七〇一）、藩主浅野長矩（ながのり）が殿中で吉良義央（きらよしなか）を刃傷させ切腹したので、彼は大石内蔵助らとともに四十七人で翌年十二月吉良家に討入り、仇討ちした。忠臣蔵四十七士の一人である。事件後、彼は毛利家に預けられ切腹したが、その遺族が縁故を頼って木屋村に来、神社西の真宗道場で寺子屋を開き暮したという。秀直から四代目の尚次が右の鳥居を寄進したのである。

（寝屋川市史所載）

# 八幡神社

はちまんじんじや

## 御祭神

誉田別尊  
別雷神

## 御神徳

## 例祭日

十月十七日前後の一週間



鎮座地 寝屋川市八幡台一―五  
電話 〇七二―八二四―〇五六〇

H  
P

御朱印なし

## 由緒

秦 河勝の勧請と言い伝えられている。  
元和九年（一六三三年）の棟札には、「奉 管上（勧請）宇佐八幡宮御社」と書かれている。  
明暦三年（一六五七年）の灯籠、寛文二年（一六六二年）の鳥居がある。  
明治五年 旧秦村（東は池の瀬町、西は本町までの広い範囲）の氏神として、村社に列せらる。  
昭和十年大雨で裏山が崩れ、神社も倒壊。  
昭和十一年十月 再建。  
平成十二年細屋神社とともに、宗教学法人八幡神社に認証される。  
平成二十四年九月五日焼失。  
平成二十六年十二月二十日再建。

# あつたじんじゃ 熱田神社

御祭神

日本武尊

御神徳

家内安全  
五穀豊穡

例祭日

十月体育の日



鎮座地 寝屋川市太秦中町四一三  
電話 〇七二一八三九一八〇六五  
H P

御朱印なし

## 由緒

室町末期の石山合戦のとき、石山本願寺方に属していた一浪人が、太秦の地に落ち着いて寺子屋の師匠をしながら、おりにふれて自分の郷里（尾張国熱田）の熱田神宮の尊さを説いた。その話に感銘した太秦の人々は、相談のうえ尾張国熱田から熱田神宮の神霊を氏神として勧請したと言い伝えられている（寝屋川市史より）。

一八〇八年本殿再建の棟札あり。拝殿には一八七七年奉納の田原坂図絵馬が掛けられている。

末社の若宮社には日本武尊の御子である足仲彦尊（たらしなかつひこのみこと）（仲哀天皇）がお祀りされている。

雄略天皇の時代に秦族の貢ぎ物とした絹布が朝廷に山のごとく充満し、族長の酒公に禹都満佐の姓を賜ったのが太秦の語源である。当地の太秦トノ山古墳は古くから野見宿禰の墓と言い伝えられている。（寝屋川市誌）

# 打ちあげじんじや 打上神社

御祭神

武内宿禰

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 寝屋川市打上元町三八一  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当神社の創建年代は不詳なれど、もと高良大明神と称され、交野郡打上村の産土神で明治の初め打上神社と改められた。市内南東端の山腹石ノ宝殿古墳の北西に位置し、ご祭神は竹内宿禰大神。古老の言葉によれば、八幡の高良社と同一祭神であり、高良を名乗る宮は近郊には京都布八幡の八幡宮の境内に高良社があり、八幡の高良社は社記に「貞観二年〔八六〇〕六月十五日行教造 神殿云々」とあることより八幡宮と同時の創建である。この祭神を当地に勧請されたとするのが地理上からしても最も無理のない解釈であろう。摂社に八幡大神八大竜王が祀られている。八幡大神と高良社とは離せない関係からしても裏付けるもので八大竜王はやはり高地のことでもあり水不足に困らないよう祀られたものであろう。

尚、神社一ノ鳥居左右の柱には京保七年〔一七二二年〕の建立で河州交野郡打上村と刻んである。

又、寛政七卯年〔一七九五年〕八月と天保五年〔一八三四年〕に時の奉行大久保加賀守様に屋根葺き替えの許可願いが出されている。

# かわきただいにじんじゃ 河北大神社

(通称 大神社)

御祭神 天照皇大神

御神徳 家内安全  
諸願成就

例祭日 十月十六日



鎮座地 寝屋川市河北西町四一八  
電話 〇七二一八九三一・二二二  
H P

御朱印なし

## 由緒

御祭神（天照大御神）は寛永五年（一六二八年）に祀られたと伝わります。

中世の荘園時代には伊勢神宮の社領として全国的に御厨が寄進されました。古代において、天照大御神は皇祖神として天皇、皇后、皇太子以外の奉幣は禁止されましたが、中世に入り朝廷が衰微するに伴い、伊勢神宮は信者を獲得し各地の講を組織させる御師が活躍しました。皇室のためだけの存在から日本全体の氏神・鎮守としての存在へと神社の性格が大きく変わってまいりました。布教とともに各地の有力者による神領（御厨）の寄進が行われ、その地に天照大御神がお祀りされ神明神社が広範囲に分布することとなります。

その時に、御祭神（天照大御神）として当社も祀られたと伝わります。

河北は、もとは「河内屋北新田」と呼ばれ、河内屋源七が宝永元年（一七〇四年）に新田開発を開始して、宝永五年（一七〇八年）に完成させたものです。同時に河内屋源七は東大阪市日下町一帯も開拓しました。河内屋北新田に対して河内屋南新田と称しました。

また、河北大神社の祭神は天照大神で産土神として鎮座しておりました。ところがこの地が元は新田開発にも従事した人々の朝夕の集散場所であったといわれ、「河北」発祥ともいえる新しいこの地に氏神を祀り、新しい村の繁栄を願いました。今も先人の声が聞こえるようです。

明治五年村社に列せられます。

末社の須賀神社・八坂神社（祇園社）は、もと新田支配人・朝田家の屋敷大神として祀られていたそうです。その後境内に移されたと伝えられています。

# くにもりじんじや 國守神社

御祭神

応神天皇  
菅原道真

御神徳

家内安全

例祭日

十月十日



鎮座地 寝屋川市明和二二二一  
電話  
H P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

遠くには大阪市内の高層ビル群を見渡せる寝屋川市の小高い丘の上に鎮座されています。

第二京阪道路の近くですが、トンネル部分の上に位置しているため、静かです。

## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。  
もと八幡宮と称したが、明治維新後に今の社名に改められた。  
末社に若宮神社、貴布神社、水神社がある。

# 高宮神社

たかみやじんじや

## 御祭神

天剛風命  
弥都波能売神

## 御神徳

五穀豊穰

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 寝屋川市高宮二一―二二三  
電話 〇七二―八三二二五八

H  
P



## 由緒

当社は延喜式内の神社であるが、創建の年月は詳らかでない。もと若宮神社と呼ばれていた。

明治五年郷社に列せられた。

# ねやじんじや 寝屋神社

御祭神

誉田別命

御神徳

殖産産業  
五穀豊穰  
水難守護

例祭日

十月十五日（又は前週土曜日）



鎮座地 寝屋川市寝屋南二一三一一八  
電話 〇七二一八二一七四五七（住吉神社）  
H P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

寝屋川市内で近代では少ない昔の農山村の佇まいが味わえるお社。

## 由緒

元禄五年甲十月の日付で寝屋村庄屋 義兵衛他二名の年寄記載の「神社覚」と表題した古文書があるが、その造立や勧請の年は不明。本地は東高野街道の西に位置していることで八幡より勧請して奉ったもので平安中期以降の造立との見方がある。

（寝屋川市誌から）

# 四條畷市

▶ 大阪府にもどる



# しじょうなわてじんじや 四條畷神社 (通称 小楠公さん)

## 御祭神

楠正行(くすのきまさつら)公  
をはじめ二十五柱

## 御神徳

心願成就

## 例祭日

二月十二日



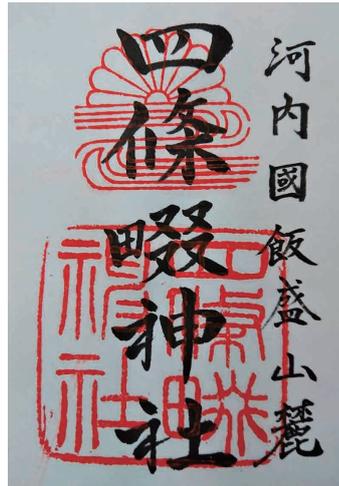
小楠公御墓所



樹齢約550年のクスノキ

参道を西に1km下ると小楠公御墓所がある。樹齢約五百五十年のクスノキは大阪府天然記念物に指定されている。

## 神社のおすすめ



鎮座地 四條畷市南野二一八一  
電話 〇七二一八七六〇〇四四  
HP

## 由緒

当社は鎌倉末期、皇位の継承が、公卿・幕府の思惑がからんでもつれたとき、不利を覚悟で一身をなげうって飽くまで正統の天皇を守り、明治維新の原動力ともなった楠正成公(大楠公)の嫡男で、父にも劣らぬ忠孝両全、情厚く、智勇に優れた楠正行公(小楠公)を主神に弟、正時以下二十四柱を配祀する。明治天皇は、ことに楠公がお気に入り、正成公には正一位を追贈し、別格官幣社第一号として神戸湊川神社にお祀りになり、正行公に明治三十年に従二位を追贈された。

これより先、地元の住吉平田神社の神主、三牧文吾らは、小楠公の殉死のこの地に神社創建を熱心に願い出て、明治二十二年に勅許がくだり、四條畷神社という社号がくだされ、別格官幣社に列格された。里人喜び境内地や金品を寄進して、老いも若きも土を運び石を積んで奉仕し、立派な社殿が完成し、明治二十三年四月五日御鎮座祭を挙げた。平成元年には、本殿をはじめ拝殿等の修復、社務所の新築、境内地の諸施設の整備拡張を行い、平成二年十月五日には、御鎮座百年奉祝大祭が斎行された。

### 御妣(みおや)神社

本殿西側にある撰社。小楠公御母堂を祀る。大楠公亡き後、正行公をはじめ御兄弟を、正しく導き国家の忠臣として育て上げられた。賢母の教えを慕う地元の人たちの願いにより、女性の鑑・子育ての大神として祀られる。大正十四年十月五日鎮座。

# くになかじんじや 國中神社

## 御祭神

国常立尊  
菅原道真  
天照皇大神  
猿田彦大神

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
学業成就

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 四條畷市清滝中町四一四八  
電話 〇七二一八六二一〇七一八  
HP



## 神社のおすすめ

神社からの眺望が良く、大阪平野を見はるかします。大阪中心部の高層ビル群、あべのハルカス、遠くは淡路島が見てとられます。



神社からの眺望

## 由緒

当神社の創建時の記録は現存しておりませんが、醍醐天皇の御代延長五年（九二七年）に選定された延喜式神明帳には河内国讚良郡鎮座と記載されており、古くから当地域の産土神として崇拜されてきました。

国中と云う名の如くこの地域を中心として、所謂の四神相応の御鎮座地として、最適な処であった事が今日でも明白であります。

東に生駒山・飯盛山の麓より流れくる清滝川に沿い、西に大阪平野に面し、南に浪速の港より奈良の都へ通じる清滝街道に接し、北には清滝古墳群の丘陵地に囲まれた景勝地でもあり、創建時より御鎮座地が一度も移動した記述はありません。

この歴史ある悠久の神域は、私達の祖先が幾多の苦難を乗り越え今に継承されて来た努力を考える時、この「心のふるさと」鎮守の杜は絶やす事なく、次世代に引継ぐ事がこの地域に住む私達の責務でもあると思います。

尚当神社は明治以前にこの地域の人達は口伝ですが、別名大蛇宮と称していたとの記述があります。何故大蛇宮なのか確定的な資料は見当りません。

又旧社殿の建築年代についても詳細は判明しませんが、建築様式上から推定すると延宝（一六七三年）頃の建築であると推定されています。安永八年（一七七九年）江戸幕府による社殿改修許可を得て改修された記録に続き、天保三年（一八三三年）にも改修した記録がありますが、その後については昭和二十九年一月（一九五四年）本殿の屋根・神具庫の修理に続き、昭和四十年（一九六五年）拝殿の改築・本殿の修理の記録があります。

社務所については平成六年三月（一九九四年）焼失につき、平成七年五月（一九九五）年に再建され社殿・神具庫については、近年に至り荒廃が進み維持管理が困難となり氏子崇敬者の皆様のご協賛を得て、平成十二年十二月（二〇〇〇年）社殿・末社（小宮さん）・神具庫を大改修すると共に、玉垣建立境内の整備も併せて実施し今に至っております。

# すみよしじんじや 住吉神社

## 御祭神

上筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
息長足媛命

## 御神徳

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 四條巖市大字上田原三三五  
電話 〇七四三―七八―〇三二一  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は不詳である。  
伝説によれば、交野村私市に鎮座の岩船宮より分祀したものと伝えられている。

# 住吉平田神社

すみよしひらたじんじや

## 御祭神

住吉大神  
平田大神

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十七日



参道の石段。二二八段は北河内最多の石段

## 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 四條畷市南野二一八一二六  
電話 〇六一六九六一〇四八一（白山神社）  
HP

## 由緒

創建年代は寛平、延喜（八八九〜九〇二）の代に、既に飯盛山の麓に鎮座し給うとも伝えられているが、江戸期（一七三八）の旧記帳には「勸請年代不知」とあって、詳細には分からない。住吉大明神の名は、延享二年（一七四六）村明細帳に記されている。当地の領主、三好家は、住吉神社を南野村の氏神と尊信し、三牧氏の先祖、八右衛門は宝永年間（一七〇四）領主、三好家の代官となり、当地を守護した。大阪府神社史によれば、平田神社は、元南野平田に鎮座、三牧氏により奉仕されていたが、元文（一七四〇）年代に、三牧氏は住吉神社の神官も兼ねられ、寛延年間（一七五〇）頃、両大神を合祀、改名されたと思われる。氏子地の南北二分制は、元文年間（一七四〇）に定着したものと推察される。近郊の住吉神社は、天の川（枚方―私市―田原）に沿って、数々存在する。

# 忍陵神社

にんりょうじんじや  
(通称) しのぶがおか神社

## 御祭神

津杵大神  
熊野皇大神  
藤原鎌足公  
馬守大神  
大將軍神

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

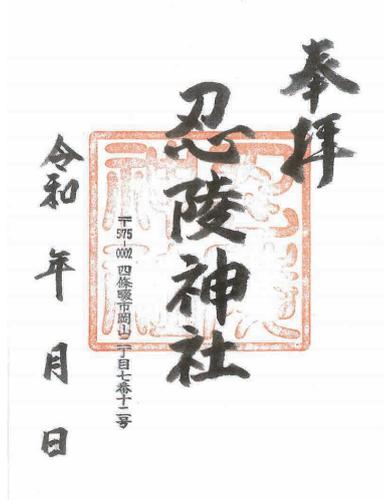
十月十七日



古墳履屋前面

社殿東側に古墳時代（四世紀中頃）の前方後円墳が現存しており大阪府の文化財として古墳履屋の中に当時の石室が保存されています。

## 神社のおすすめ



鎮座地 四條畷市岡山二一七一―二二  
（旧地名）河内国讃岐郡甲可村大字岡山字忍岡二四九番地  
電話 〇七二一八七七―一八五〇  
HP

## 由緒

当神社はこの地域の古代豪族津杵氏（中臣津杵姓）の氏神として創建人王四代天武朝（六七五年頃）熊野三山より役の行者開山岡山八幡山へ熊野皇大神を勧請又清和朝（八五八年頃）摂政藤原良房が岡山鎌足大明神として大和多武峯より勧請した記述があります。

創建時は奥の宮・下の宮と境内外地一五、〇〇〇坪余を有しており延喜式神明帳には河内国讃良郡鎮座津杵神社と記されております。

天和年間に（一六一八年頃）大坂夏の陣徳川秀忠軍の本陣跡である現在地に遷座され天和・寛永に御社殿の大改修を経て明治四十四年（一九一一年）鎮座地の古称忍岡の地名に因んで忍陵神社と改称すると共に砂東村（現在の字名奈良田地区周辺）の氏神馬守社と砂西村（現在の砂地区一帯）の氏神大將軍社の大神を合祀致しております。この合祀された馬守大神は古来より牛馬畜産の神として崇敬され大將軍神は日本最古の方除神として崇拝されております。

又現在の社殿は昭和九年（一九三四年）室戸台風により倒壊した旧社殿跡に馬守社の社殿を昭和十年（一九三五年）解体移築したのですがこの社殿も江戸末期（一八六五年）から明治初期（一八八〇年）の建物である事が判明しております。

この社殿移築工事中に社殿東側から古墳時代前期（四世紀頃）の竪穴式前方後円墳石室が発見され保存の覆屋が設けられ貴重な文化財（大阪府指定史跡）として現存しております。

特に忍岡の丘陵地は古代より開け栄えた処でありますが境内東参道入り口に往時この地を訪れた歌人が詠んだ古今集忍岡古歌を刻んだ歌碑が建立されており、又永禄六年（一五六三年）にはこの処が岡山キリシタン発祥の地として文献に登場立派な教会が建っていた記述もあり元和元年（一六一五年）大坂夏の陣には徳川方の本陣が設けられ江戸幕府成立に重要な役割を成した処でもあります。

この歴史ある鎮守の杜も私達の祖先が幾多の苦難を乗り越えて今に継承されて来た努力を考える時この「心のふるさと」忍岡の杜を絶やす事なく次世代に引継ぐ事がこの地域に住む私達の責務であると思えます。

戦後荒廃していた境内も昭和五十八、九、九年（一九八三、四年）に第一次神域整備が行われ平成八年（一九九六年）に第二次境内整備として参道の補修・玉垣増設・スロープの新設・東参道鳥居の再建を行い、平成二十四年（二〇一二年）秋には地域の人達の賛同を得て古事記編纂一三〇〇年に事よせて御社殿を改修すると共に社務所・神具庫・遥拝所を再建平成二十七年五月に大坂夏の陣四〇〇年を偲び記念建碑をスロープ玉垣前にし、今に至っております。

# 交野市

▶ 大阪府にもどる



# すみよしじんじや 住吉神社

(通称 住吉さん)

## 御祭神

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
息長帯姫命

## 御神徳

厄除開運  
交通安全  
安産守護

## 例祭日

十月十六日



- 御本殿 春日大社第一殿同形
- 万延元年 高 7.27m 幅 6.67m
- 手水舎のくぼみ石
- 現光寺梵鐘(拓本)未解説



鎮座地 交野市私部一三六一二  
電話 〇七二一八九二一〇三八三  
HP <https://kisabe-sumiyoshi.net/>

## 由緒

鎮座地私部は日本書紀卷第二十、敏達天皇の条、六年にある私部(きさいちべ)が、きさいべ、きさべとなりました。

豊御食炊屋姫(推古天皇)が敏達天皇の皇后となり、叔父の蘇我馬子が勢力を拡大し、対する物部守屋は交野の沃野を皇后に献上し、天皇への接近を図りました。以来、皇后の為の皇室領となり農耕や身の回りを世話する人等の総称を私部といいました。大化の改新後、班田収授法による条里制では三条、四条の中心地となっています。

神社創建は詳らかではありませんが、出土した瓦の年代鑑定は鎌倉中期との結果でした。

### 御本殿と境内社について

春日大社より賜った御本殿※1、乾神社※2、巽神社※3、稻荷神社※4、放生池では水神社として高麗大神、市杵島姫命※5を祀っています。遥拝所は、交野山山頂にある観音岩を拝めます。祖霊殿では、明治三十年代より神道に進まれたお家のご先祖様を祀っています。

※1 安政四年(一八五七年)三月十六日正遷座。

※2 蛭子大神、菅原道真公、品陀和気命

※3 天照皇大神、大物主神。明治に入り当村長寿山光通寺より御遷座しました。

※4 保食神。明治に入り乾神社内より場所を遷し、拝殿を設けて祀っています。

※5 旧名称は弁天池、龍王社、弁天社。

### 近現代について(左記出典※6)

古くより附近十六ヶ村の鎮守として士民の崇敬甚だ厚く、明治六年郷社に列せられ、同四十年八月二十一日神饌幣帛料供進指定あり、翌年十月十六日會計法適用指定せらる。(以下略)

昭和六十年、有志による交野戒講が発足され、戒祭は賑やかに執り行われています。昭和六十三年より平成五年には社誌編集委員会による社誌が整えられ、収集した貴重な資料は後世に読み継がれています。

地域には敬神家が多く、御氏子・崇敬者を始め、役員・総代の方々には甚大なお力添えを戴き、神社は今も心の拠所となっています。

※6 『全国神社神職名鑑』第壹輯四二八頁、大正四年十一月十日発行 神社社出版部  
※参考資料『交野市史 民俗編』三八〇頁、

『郷社住吉神社社誌』

# 機物神社

はたものじんじや  
(通称 織姫の宮)

## 御祭神

天棚機比売大神  
栲機千々比売大神  
地代主大神  
八重事代主大神

## 御神徳

恋愛成就  
裁縫上達  
金運

## 例祭日

七夕 宵宮七月六日 本宮七月七日



鎮座地 交野市倉治一―一七  
電話 〇七二―八九一―四四一八  
HP



## 神社のおすすめ



## 由緒

### 創建年代

創建年代は定かではないが以下の事が窺える後漢(古墳時代)の頃大陸(中国・長安)から養蚕と機織の技を持った渡来集団が交野が原の交野山山麓で機織(絹織物)を始めたのは、そしてそれらの絹織物は朝廷・明日の宮に献上していたのではと考えられる。その係わりから神社様式を知りこの地に機物の社を起こし祀ったと考えられる、そしてしだいに絹織物を各地に伝え広めたのでは

### 記録

元龜三年三月信長の禁制札を建て河州機物神社を守る  
天正元年十一月十七日信長下知状にて神鏡東西二百六十間南北六十七間神職十六人制と決められる  
天正十年六月九日明智光秀は武運長久を祈願し初穂料白銀百枚を奉納  
天正十年七月九日信長に倣い秀吉の禁制札を建て河州機物神社を守る  
天正十六年四月十四日聚楽第行幸のある日快晴を祈願し感応ありで同年四月十六日から河内機物明神宛で永く神饌百俵を奉納  
文祿三年五月十日秀次は武運長久大満願成就感応に依り神殿を新造し歳出来一千俵を奉納  
宝永五年に至り社殿大破の為再建せり

# いわふねじんじや 磐船神社

御祭神

天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊

御神徳

病氣平癒  
交通安全  
武運長久

例祭日

五月五日



鎮座地 交野市私市九一一九一

電話 〇七二一八九一一二二二五

H P <http://www.osk.3web.ne.jp/~1w082125>



## 神社のおすすめ

ご神体磐座「天の磐船」

高さ約十二m幅約十二m 重さ推定三千  
t以上の巨石

岩窟拝観

修験道の行場であった岩窟で拝観順路は  
距離約三百mある。危険なので雨の日は  
拝観出来ない。

## 由緒

当社御祭神は天照皇大神の御孫神であり、日本書紀等国史によりますと、神武天皇のご東征以前に日本の国の中心である大和の国（現今の奈良県）に入らんとして天の磐船に乗り天降られた天津神であります。また先代旧事本紀によりますと「天孫瓊杵尊に先立ち天祖の詔をうけて十種瑞の神宝を捧持し三十二人の伴緒を率い天の磐船に乗り天翔り空翔り河内の国川上峰ヶ峯に天降られた」とあります。太古淀川は枚方（シラカタノ津）付近まで入江となっており、大和に入るには当地峰ヶ峯の麓を流れる天野川を溯りつつ大和に入るのが至便であったと考えられます。

御祭神は当地に降臨された後は先ず十種瑞神宝を以て病み患う者を助け給い和を以て人々を導き給わったのであります。十種瑞神宝は後世神道家必修の祝詞「十種の祓」の根元をなし、現在でも鎮魂行法の根本として、神職・宗教家の修行研鑽する処であります。その後時代を経て神武東征の御御祭神の子孫は、東征軍に敵する鳥見の首長である長髓彦を誅し神武天皇大和創業の基幹となり代々武人の一族である物部として朝廷に仕え、御祭神はその遠祖と崇められたのであります。その教義（十種瑞神宝）は永く代々の朝廷と共に栄えましたが、用明天皇二年（西暦五八七）物部蘇我の争いから遂に物部氏の滅亡をみ、仏教の隆盛を来したのであります。以来当社はその影響を受け社勢の衰退を余儀なくされましたが、御祭神のご事蹟と十種神宝の御稜威は磐船の磐座と共に人々に篤く信仰され、その根本意義はなお現として神道の血肉となり伝承されております。

古事記日本書紀以外の書物では、先代旧事本紀巻五「天照靈貴（天照皇大神）の太子正哉吾勝々速日天押穗耳尊、高皇産靈尊が女、万幡豊秋津姫袴幡千々姫命を妃となし天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊を誕生す。（略）天祖、天爾瑞宝十種を以て、饒速日尊に授けたまふ。即ち此の尊、天神の御祖の詔を稟けて、天の磐船に乗りて天降りて、河内国の河上の峰ヶ峯に坐す。（略）所謂、天の磐船に乗りて大虚空を翔行きて、是の郷を睨りて天降りたまひて、「虚空見つ日本の国」と謂ふは是なり。」

続歌林良材集（貞享元年（一六八四）刊）「饒速日尊と申せし神天祖の詔を受けて天磐船に駕し給いて天降りて河内国河上峰ヶ峯にいたりこれより遷りて大和国鳥見の白庭にいましき云々今河内国に磐船明神とおはすはかの饒速日尊をいはひ申すと云う。

雲根志後編卷之三（安永八年（一七七八）刊）「河内国交野郡天河に岩船大明神と云大社あり。此処に岩船あり、かたち船のごとし。六月晦日神事なり。」

その他貝原益軒の南遊紀行に磐船明神の事を伝え、明治維新の先覚者伴林光平の捕へらしし時磐船山間近により「梶をなみ乗りて連れん世ならねば岩船山もかひなかりけり」と詠み古来より有名でありました。

当社は古くは物部氏、特に交野に在住した肩野物部氏が祖先降臨の地として祭祀を行い、物部滅亡後も磐船・星田・河内田原・大和田原の近隣四村の総氏神として崇敬されておりました。また、当地は生駒・葛城の修験道の発祥の地近くに位置し、中世以降その影響を強く受け、生駒修験の北端の霊場として栄えましたが、江戸時代の半ば宝永の頃相次ぐ天災により社殿を失い、交通その他種々の事情により、村々ではついにそれぞれに二分霊を祀り、宝物をも分祀せられたことにより、本社は衰退の一途をたどり、磐座のみが残る有様でありましたが、昭和に入り社殿などが整えられ、ようやく復興を遂げたのであります。

境内磨崖仏

神仏習合の伝統を残す石仏です。

四社明神

鎌倉時代で作住吉四神の本地仏と伝わる四体の石仏。磐船和讃が伝承されている。

「きみおちよらい磐船の地蔵菩薩のはすの池水はなくとも舟はしる、舟はしろかね、櫓はこがね、金銀帆柱おし立てて六字の妙を帆に上げて」

不動明王

戦国時代天文十四年（一五四五）の銘文がある。

岩窟

御神体北側には数多の巨石からなる岩窟があり、古代から続く霊場行場として、近年では岩窟めぐりとして有名です。

# ほしだじんじゃ 星田神社

## 御祭神

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
息長帯姫命

## 御神徳

家内安全  
安産守護  
諸願成就

## 例祭日

十月十七日



星田妙見宮 拝殿



妙見宮 降星伝承ゆかり御朱印帳

## 神社のおすすめ

当社から徒歩十分の場所にある星田妙見宮（境外末社）は北極星・北斗七星の御神格である妙見様をお祀りしています。降星伝承や七夕伝承も伝わり、遠方より多くの方がお参りに来られます。

※他朱印あり



鎮座地 交野市星田二一五―一四  
電話 〇七二―八九三―二二二  
HP <https://www.hoshidajinja.com/>

## 由緒

かつて当地一帯は交野郡と呼ばれていた。交野郡は、大宝令施行の際の郡の分割で、茨田郡から割置の段階で中心的な地域であった大交野荘の「交野」の地名が採用された。そして大交野荘は星田荘ともよばれていたように星田を中心としていた。古代、この星田の里で奉斎されていた神が交野大明神である。

現在、当社の御祭神は住吉四神で、近世中後期には住吉大明神と呼ばれている。かつては住吉四神をお祀りしたよりも遙か以前に、ここに一本の大杉があつて、そこに当地の氏神として、櫛玉饒速日命（交野大明神）をお祀りしていた。しかし、後に杉が枯死したので、その芯を御神体として社にしたという。天文四年（一五三五）の奥書のある神明帳には、この交野大明神の名が記されている。

元々、当地の交野ヶ原一帯は古代より肩野物部氏が開拓して発展したことから物部氏の御祖である櫛玉饒速日命を祀る社が多数存在した。しかし、物部が蘇我の争いに破れた影響で、櫛玉饒速日命を当地で奉斎出来なくなり、近辺の社は悉く津守の物部の奉斎する住吉の住吉大神の御分霊を奉斎することとなる。この中で密かに当社は櫛玉饒速日命を今日まで連綿と奉斎してきた。

その後、宝永年間（一七〇四―一七一）当時周辺諸村の惣社であった磐船神社における宮座争いの結果、当時神主職の平井源左衛門が当社にその御分霊（住吉四神）をお遷し、本殿にお祀りする事となったという。

現在、櫛玉饒速日命（交野大明神）は末社の交野社にお祀りしており、別名「古宮」と呼ばれる。

文化二年（一八〇五）の三浦蘭阪著「川内奨撫古小識」には、当社に正平二十一年（一三六六）銘の石塔があつたと記されている。

明治五年村社に列す。

境外末社 星田妙見宮（小松神社）

御祭神 天之御中主大神・高皇産霊大神・神皇産霊大神

鎮座地 交野市星田九一六―一 〇七二―八九一―二〇〇三

当社の縁起によると、平安時代、嵯峨天皇の弘仁年間（八一〇―八二二）に、弘法大師が交野へ来られた折、獅子の窟に入り、仏眼仏母尊の秘法を唱えると、天上より七曜の星が三か所に分かれて地上に落ちた。この時よりここに「三光清岩正身の妙見」として祀られる。

平安時代には「神福寺」と称されており、河内長野の天野山金剛寺の古文書には「嘉承元年（一一〇六）九月二十三日、星田神福寺」と見える。

江戸時代初期の貝原益軒の紀行文『南遊紀行』には「此谷のおくに、星の森有。星の社あり。其神は牽牛織女也。」と記載され、七夕にゆかりの社でもあった。

あまたじんじや  
**天田神社**  
(通称 天田宮)

**御祭神**

底筒之男命  
中筒之男命  
表筒之男命  
神功皇后

**御神徳**

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穡

**例祭日**

十月十六日  
(だんじり宮入は毎年変わります)



鎮座地 交野市私市一三〇一  
電話 〇七二一八九二一八九五  
HP

**御朱印なし**

**由緒**

当社の創建年代などは詳らかではないが、交野地方の稲作と関わりが非常に深い神社である。古代この地方は地味肥えた作物豊かな野であったので、甘野と謂われ、川は甘野川、田は甘田であった。この甘田に田の神を祀って建てた甘田の宮が当天田神社の起源である。古来日本人は、普段は山に住む神様を、春の稲作の時期になると人里に迎え、仮の神座をもうけて田作りを見守っていた。秋になり収穫が終わると再び山にお帰りいただいた。この折々の祭りを農耕の祭祀の中心としていたのだが、のちに神社を建て常に神様にお鎮まりいただくようになったのである。当社は山と里の境に位置し、山に住む神様が人里近くに居を移したかのごとき景観を呈し、田の神を祀る鎮守の典型といえるものである。

交野地方はかつて肩野物部氏の所領で、その祖先饒速日尊は天の磐船に乗って河内の哮ヶ峯に天降った、と先代旧事本紀に記され長く交野の各社の祭神となっていた。その物部氏が西暦五七七年敏達天皇の皇后、豊御食炊屋姫命(後の推古天皇)にこの地を献じて、ここが私市部(きささいちべ)となったのであるが、平安時代に入り都の宮廷貴族が遊猟に来ては盛んに和歌を詠み七夕伝説に因んで甘野川は天の川、甘田は天田と書くようになった。その頃住吉信仰が流行し、一方磐船の神も海に関係あると考えられ、さらに物部氏の衰退もあって、交野の神社の祭神が饒速日尊から海神であり和歌の神でもある住吉神に替わって今日に至っている。境内から祭祀に用いられたと思われる土師器が出土し当社の歴史の古さを偲ばせるものがある。また近くの山中に物部氏のものと思われる巨大古墳群が発見されたが、この場所に田の神を祀る神社を建てたのは、この地方に稲作の文化を持ち込み、一大穀倉地帯として開拓した祖先の御魂を田の神として崇めていたからであろう。交野が原は、天の川が生駒山麓より磐船溪谷を通って運んで来た豊富な水と土砂により作られた、水田耕作に適した実り豊かな土地であり、古来より現代に至るまで農業が盛んであるが、当社正面より一の鳥居を通り私市の村中に続く道は古代条里制の遺構で、北は枚方、西は星田まで続く交野が原の水田がこの地から一望でき、まさしく当社がこの一帯の農耕祭祀の中心であったことが納得できるのである。

# 郡津神社

こうづじんじや

## 御祭神

天照大神  
素戔嗚命  
住吉明神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
身体健全

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 交野市郡津一七七一  
電話

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社は郡津の氏神でも一の宮といわれ、神社の創建年代は詳らかではありませんが、白鳳時代（六五六〜七一〇）に交野地方で権力をふるっていた郡衙の郡司がこの地に大堂山長宝寺を建立し、奈良平安時代にかけて一の宮とともに神仏習合の形で栄えていたようであります。ところが鎌倉時代の初め長宝寺は焼失し、その後再建されることもなく長宝寺は廃寺となり、一の宮だけが氏神として残っております。

明治維新になり神社の統廃合が行われ、高野街道の西に住吉大神を祀った二の宮、大塚の丸山古墳の東に天照大神を祀った大神宮の神々をこの一の宮に合祀し、名も郡津神社と改めて今日に至っております。

明治五年村社に列せられ、明治四十二年十二月神饌幣帛供進神社に指定されました。

# 川東神社

かわひがしじんじや

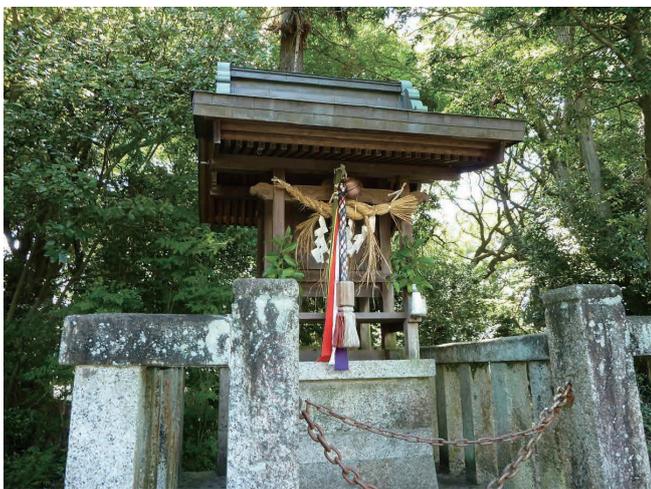
御祭神

品陀別命

御神徳

例祭日

十月十六日



鎮座地 交野市森南二丁四七〇  
電話  
H P



## 由緒

当社の創建演題は詳らかではないが森地区は古来石清水八幡宮の所領であった事が知られ、平成十二年には区域内の「河内磐船駅北側より平安時代の三宅山荘園の遺構が発掘され、鎌倉時代まで荘園が続く事が確認された。

また森地区の氏は石清水八幡宮の勅祭石清水祭に御先払神人として毎年奉仕しており未だに強いつながりを持っている。このような事から氏神として八幡大神である御祭神をお祀りしたものである。

# 菅原神社

すがはらじんじや

御祭神

菅原道真公

御神徳

例祭日

七月二十五日



鎮座地 交野市傍示一九五一  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年代は詳らかでない。もと紅梅神社と称したが、後今の社名に改め、明治五年村社に列す。

# 住吉神社

すみよしじんじや

御祭神

住吉大神

御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

例祭日

十月十六日



鎮座地 交野市寺二二〇一  
電話  
H P



## 由緒

当社の創建年代は詳らかでない。明治五年六月私市の天田神社に合祀せられたが、十二年七月旧に復し村社に列せられた。

# わかみやじんじや 若宮神社

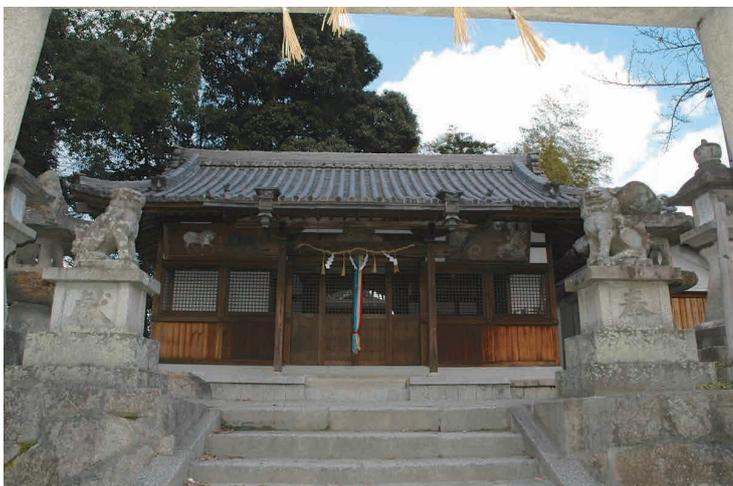
## 御祭神

住吉大神四柱  
〔但し饒速日尊を起源とする〕

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 交野市私市六―六一八  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当地区には天田神社が古来より祭祀してありますが、元々天田神社は産土の神を祀ったものと考えられます。

上古天孫饒速日尊が天の磐船に乗って、この地方に降りられて大和に入られ、その子孫が天野川を中心として、大和・河内地方に勢力を伸ばし、肩野物部氏の強大な部族を形成したのでありますが、この部族の総社として磐船宮があり、私市、星田、河内田原、大和田原の氏神とされてきました。蘇我氏との争いに敗れた物部氏がこの地を追われた後、「神が船に乗って天降った、天野川文化圏」との考え方と、航海守護の住吉信仰が混同し、いつの間にか住吉四神を祭神として伝承してきたと思われる。

江戸時代宝暦年間に、四村宮座の諍いが解決せず各村々は磐船明神の御分霊を神輿に乗せて持ち帰り祭祀しましたが、私市には古くから天田神社がありましたので、若宮神社と称号したのでありましょう。

# 大東市

▶ 大阪府にもどる



# 菅原神社

すがはらじんじや

御祭神

菅原道真公

御神徳

例祭日

十月二十日



鎮座地 大東市三箇五―二―三  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の鎮座に関する詳細は不明であるが、河内キリシタンで有名な元三箇城（後に築城されたもので、神社は以前よりあった）の城内にあった関係上、城主三箇サンチョ（キリシタン名）が、家臣及び領民を強制改宗させ、神社を一時仮教会堂にし、キリシタン迫害に伴ない、隠れキリシタンの本拠とした。

明治に至るまで、神宮寺である水月院の僧侶が神主を兼ね、秘法を用いて奉仕したと  
のことであるが、文献口伝等がなく全く不明である。社殿は一間半四方の荘麗華美を極める、桃山時代の御創建と判断されるものが現存している。

文献等があれば有名神社になったであろうが社領と目されるものも約三分の二は、旧神宮寺二ヶ寺に取られ、僅かに四〇〇坪の境内に過ぎない。

但し約一七〇余年前迄は、周囲約四里の深野池の中の五つの島の中で、最大の三箇島に御鎮座の神社であるので、現在の大東市の神社十九社中では、最古のものと判断され、境内地は狭少であるが、神社の施設は完備に近い。

大東市に現存の菅原神社、北野神社等の御神霊は当神社の御分霊と惟される。池の干拓に伴ない、遂次菅原神社を奉祀したと考察される点が多い。

# 北野神社

きたのじんじや

御祭神

菅原道真公

御神徳

学業成就  
五穀豊穰

例祭日

十月二十日



鎮座地 大東市大東町五八三  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒については不詳である。昭和四十六年社殿を新築されたが以前の社殿は安土桃山時代の形式を残していたと言われている。その一部が現在保存されている。また当社は古墳時代の遺跡としても有名である。明治五年村社に列せられる。

# 菅原神社

すがはらじんじや

御祭神

菅原道真公

御神徳

学業成就  
五穀豊穰

例祭日

十月二十日



鎮座地 大東市御領三十四八九  
電話  
H P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

御領せせらぎ水路。

神社境内前を流れる水路の美しさと風情  
ある街並み。



## 由緒

当社は明治十二年本殿を改築、鳥居は安永七年の銘が記されている。由緒は不詳であるが御領地域の開拓時氏神として祀ったものと思われる。明治五年村社に列せられる。

# だいじんしゃ 大神社

(通称 新田山王宮)

御祭神

大山咋命

御神徳

五穀豊穰

例祭日

十月二十日



鎮座地 大東市新田東本町八八四  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒については不詳なれど地元の伝承によれば、最初にこの新田開拓を手掛けた多くは近江から移ってきた人たちで、この山王宮も故郷の神である比叡の山王神社を勧請したものという。天保五年には社殿を改築している。

明治五年村社に列せられる。

本殿覆屋、拝殿を新築し本殿遷座祭を昭和五十九年に斎行した。

# だいじんしゃ 大神社

御祭神

天照皇大神

御神徳

五穀豊穰

例祭日

十月二十日



鎮座地 大東市太子田二一三〇  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒については不詳であるが文久三年九月に奉納された灯籠が一对、年代の重みを感じさせる。

明治五年に村社に列せられた。

境内二〇〇余坪で、本殿、拝殿が有り西隣が聖徳太子堂である。

# 諸福天満宮

もろふくてんまんぐう

御祭神

菅原道真公

御神徳

学業成就  
五穀豊穰

例祭日

十月二十五日



鎮座地 大東市諸福一七七一三  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は寛永二十年九月にこの地に勧請され、社殿が建立されたとの記録が本殿に納められている木札に記されている。

本殿は江戸初期の権現造りで、円柱・破風などに見られる彫刻は桃山建築の様式を残しており、色彩も鮮やかである。

明治五年に村社に列せられ、元は産土神社と称せられたが、同三月菅原神社と改称。

以降百年余のあいだ、同社名で呼ばれていたが、平成の修復の折、菅原神社と書かれた額の板をめくると、天満宮の文字が現れ、宝暦二年調整の菅原道真公画像の掛け軸の箱書きにも「天満宮」の銘があることから、平成十一年一月一日をもって諸福天満宮に改称した。

# 龍神社

おかみじんじや

御祭神

龍神

御神徳

五穀豊穰

例祭日

十月二十日



鎮座地 大東市御領一―二五三  
電話

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社は府道枚方八尾線沿いに鎮座す。

この辺りは往時河内湖とも呼ばれる草香江に浮かぶ島であり、その後池水が挟まった後には深野池の堤防を形作つたと考えられる。その頃当社は湖沼に浮かぶ小島的存在で、開拓後は御領村の中心地域として始まり、集落はここより西へ広がっていく。御領村発生の聖域であつたと云えよう。

龍とたいへん難しい字であるが、分解してみると「雨」と「口」と「龍」になり、農耕に必要な水を司る神であることがわかる。現在の社殿は昭和四十六年に新築された。明治五年村社に列せられる。

# 菅原神社

すがはらじんじや

御祭神

菅原道真公

御神徳

例祭日

十月二十一日



鎮座地 大東市深野北一―五二七  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創立年代および由緒は詳らかでないが当地は昔若江にかけて沼沢地であり、鴻池善右衛門宗誠と云う人の開拓によって出来た土地柄である。宝永四年以降に当地に移住した農耕者等によって創立されたものであろう。  
明治五年村社に列せられた。

# 両皇大神社

りようこうたいじんじや

## 御祭神

天照皇大神  
豊受大神  
菅原道真

## 御神徳

## 例祭日

十月二十一日



鎮座地 大東市深野一―五八九  
電話  
H P

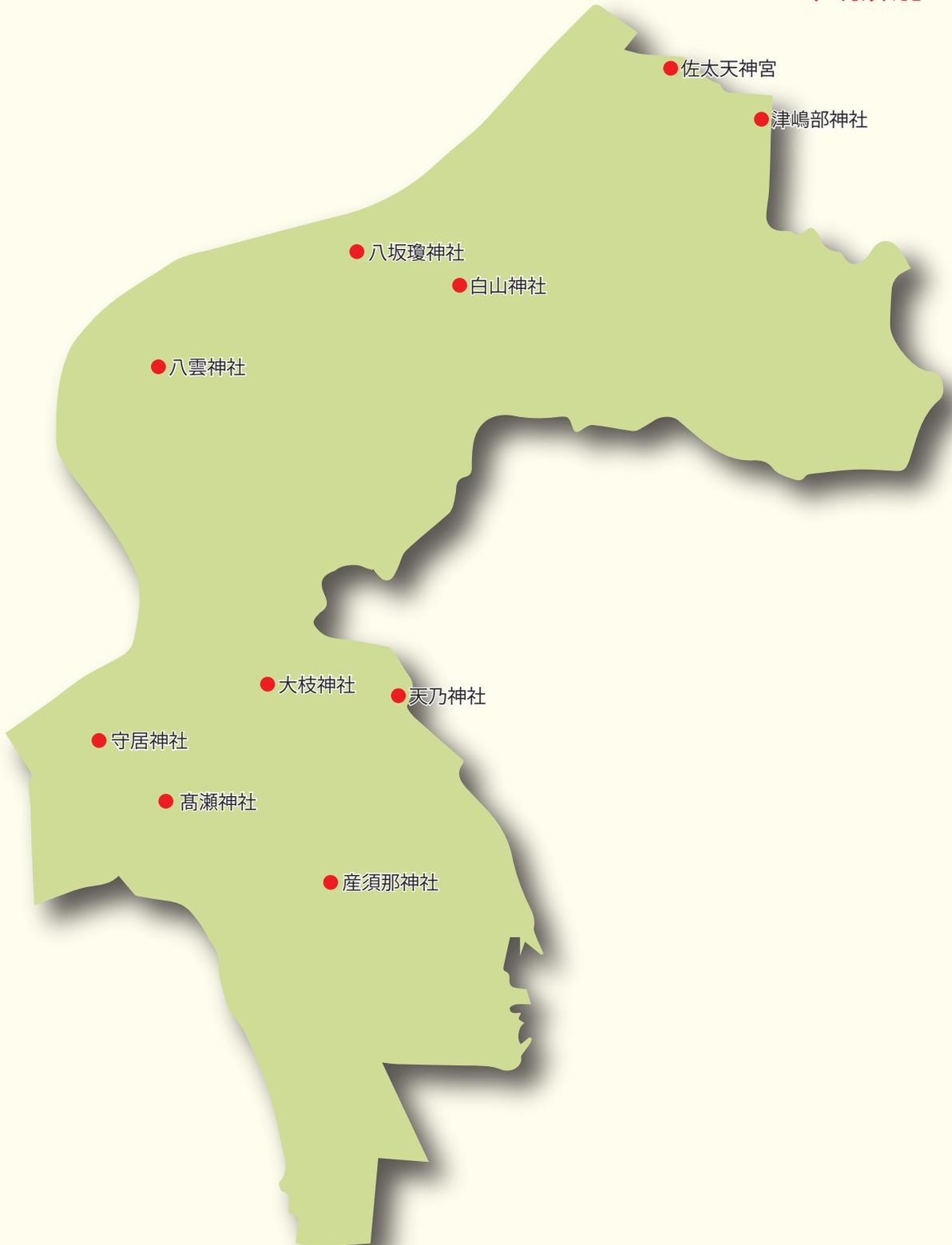
御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。明治五年村社に列す。本地一円の氏神なり。

# 守口市

▶ 大阪府にもどる



# 守居神社

もりいじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
賀茂別雷神

## 御神徳

## 例祭日

十月二十一日



鎮座地 守口市土居町二一三  
電話 〇六一六九九一〇四一九  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は醍醐天皇延喜十八年九月十九日この地に鎮座して素盞鳴命外二柱の神を祀るとあり、また天道神、太歳神、歳殺神を祀るとも記され素盞鳴命、三輪明神、清滝明神、或は日吉権現新羅明神、三井神ともあるが、いずれにしても淀川流域の洪水地耕の守護神として、この地に土居を築き社殿を構へて勧請したことに創ったもので、地名を土居の庄と称し土居神社と称号していた。

明治四十年十月七日産土神社及び大隅神社が合祀され、守居神社と改称された。

社記によると延喜年間淀川流域の守護神として鎮座ありて以来、後宇多天皇建治年間には釈法仍沙門、当社を以って神仏護法の道場として靈感によりて本地垂迹説を称へ三社の神珠を奉じて釈迦薬師観音の垂迹による祈禱修法を尽せりとある。

又後小松天皇嘉慶年間、この地は兵火の巷となり、疫病頻りに流行したので僧不閑沙門当社に祈願をこめて災疫を鎮め、次いで、後花園天皇の寛正四年に再び悪疫流行のあった時、嘉慶の例にならいて祭祀を修し美しい花を供へて鎮花の災祭を行ったとあり、今この祭儀を伝えて七月二十五日の夏祭には、その行事を伝えている。

# 佐太天神宮

さ た て ん じ ん ぐ う

## 御祭神

菅原道真公  
戎大神  
白太夫之命  
宇迦之御魂大神  
火産霊神  
外二柱

## 御神徳

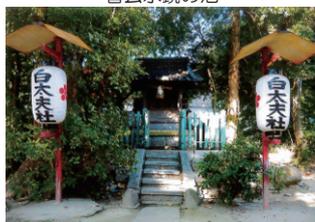
学業成就  
厄除開運  
商売繁盛

## 例祭日

十月二十日



菅公水鏡の池



白太夫社

## 神社のおすすめ

菅公の御領地であった当時、下屋敷の庭にあった御池に御自身の御姿をうつされ、木像を彫られたものが当神社の御神体となっております。

※他朱印あり



鎮座地 守口市佐太中町七一六一二五  
電話 〇六一六九〇一七五〇〇  
HP

## 由緒

昌泰四年（九〇一）、菅原道真公が筑紫に遷せられし途中、菅公の御領地であった当地に暫時滞在され、その出立に際して自作の木像と自画像を残されました。またこの時、楊枝を土に挿し「わが身の無実の罪たる証拠として二葉の松となって生い栄えよ」と誓われたところ、程なくこれから発芽して見事な松の木に成長したので、その名を「アカ松」（明しの松）と称えられました。

延喜三年（九〇三）、菅公が大宰府で薨去されてより約五十年後の天曆年中に、里人がその徳を慕って、菅公の残し置かれた自作の木像を、ご神体としてお祀りしたのが佐太天神宮の創建であります。

それより河内国茨田郡大庭荘の惣社となり、天正八年（一五八〇）、小出播磨守秀政が、元和元年（一六一五）、大阪夏の陣後、三代目吉英が社殿を再興しました。現在の社殿は、江戸老中永井信濃守尚政が当宮の社宝である文安三年（一四四六）の『天神縁起と勸化帳』を見て大いに崇敬し再興したものです。まず、寛永十七年（一六四〇）に本殿が再興され、続いて慶安元年（一六四八）に拝殿、神門等が造営されました。

以来、三百有余年の間二十五年毎に御神忌大祭を斎行し、明治の初め頃までは、例年正月、五月、九月には連歌が奉納されてきました。また、明治元年三月二十二日、明治天皇大阪行幸の御時、当宮にあらせられました。平成十五年一月に本殿、幣殿、拝殿が大阪府有形文化財の指定を受けました。

### 勸梅

正保三年（一六四六）、永井信濃守尚政が御水尾上皇から百和の香合に添えて梅の折れ枝を賜りました。早速この枝を当宮の梅の木に接木したところ、見事に活着したことから、勸梅と呼ばれるようになりました。これにより上皇から次の御製を賜りました。

家の風世々に伝えて神垣や  
絶えたるをつく梅もにははむ

『菅原伝授手習鑑』「佐太村の段」と白太夫社

文楽や歌舞伎で有名な『菅原伝授手習鑑』（延享三年「一七四六」・初演）「佐太村の段」は、菅公の御領地であった佐太村の忠臣白太夫邸を背景として、七十の賀を迎えた白太夫と梅王丸、松王丸、桜丸という三つ子の兄弟の物語です。境内の白太夫社は忠臣白太夫をお祀りしています。

### 戎社

昭和六十一年に戎総本社西宮神社から戎大神を勧請申し上げ、告文社に合祀して以来、例年一月九・十・十一日の三日間戎祭を行っています。近郷の人々には「守口佐太のえべっさん」として親しまれています。

# 津嶋部神社

(通称 黒原の宮さん)

## 御祭神

津嶋女大神  
素盞鳴尊  
菅原道真公

## 御神徳

安産守護  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月第三日曜日



## 神社のおすすめ



鎮座地 守口市金田町六丁目一五―六  
電話 〇六一六九〇一―四七六三  
HP

## 由緒

当社は、今よりおよそ千二百年前より当地の氏神で、延喜式内の古社である。旧茨田郡一の宮の称あり。かの六国史のひとつである文徳実録に「嘉祥三年（八五〇年）十二月河内国津嶋女神従五位上」と見ゆるは当神社のことであり、寛永十年（一六三三年）淀の城主永井信濃守尚政がこの地を領するに及び菅公を合祀し神領五百石（一七八五二平方米）を寄進して大宮天満宮と称し、篤く崇敬せられた。

氏は現在の守口市と寝屋川市の両市に亘り、境内地は今より拡大にして古松老楠生繁り、荘厳な鎮守の森で、絵馬殿、宝物庫、地車庫、観音堂等があった。本殿、幣殿、拝殿総絵皮葺にして壮麗を極めたが、元和元年（一六一五年）五月、大阪夏の陣の兵火のため炎上し、天保七年（一八三六年）壮大な規模をもって社殿を復興した。

現今の社殿は、明治十五年（一八八二年）に造営せしもので、同年十月盛大な正遷宮が行われた。その後、総瓦屋根であった社殿を、昭和五十九年十月総銅板葺に葺替え現在に至る。

境内に皇太神宮、白龍稻荷社、若宮天満宮、厳島神社、山王神社などを祀る。また神宮寺として、金龍寺、豊蔵寺、大竜寺ありしも今は金龍寺のみ存す。

# あまのじんじや 天乃神社

## 御祭神

素盞鳴大神  
八幡大神  
菅原大神

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 守口市橋波東之町二丁目一八  
電話 〇六一六九九二一七〇六  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建年月は不詳であるが、元弘三年（一三三三）五月、鎌倉幕府はたおれ、ここに建武の新政が実現した。

新しく河内、和泉、摂津三国の守護となった楠木正成は、さつそく戦火に荒れた千早、赤坂の城を改築。北部の枚方、禁野に和田氏を置いて淀川堤防から京都にいたる出入口を守らせた。また、津田にも津田氏を配し東高野街道から京都にかけて、さらに交野方面の備えにあたらせ尊延寺、獅子窟寺などの僧徒も味方に入れて、都の守りをいよいよ強固なものにしたのである。

しかし、平和がよみがえったのもつかの間。ふたたび足利尊氏のそむくところとなり延元元年一月、尊氏は入京。新田義貞、北畠顕家の軍と戦い一度は九州へ敗走したものの、次第に勢力をもちかえし東上してきた。正成、義貞はこれを迎えうつく同五月出陣したが、正成は不幸にして戦死。十一月に後醍醐天皇は光明天皇に三種の神器を授けられ、みずからは十二月、難を大和の吉野山にさげられた。その間、尊氏は幕府をひらいて建武式目を制定。ここに南北両朝は分裂し、五十五年にわたる動乱へと突入するのである。

有名なる四条畷のいくさは正平二年十一月、正成の子・楠木正行が山名時氏、細川顕氏などを住吉、天王寺に破り翌三年一月、門真に一番二番、三番、四番、守口に五番、六番、七番、八番、十番の陣を築いた。この時の戦いで東橋波、当天乃神社を本陣とした為焼失されたと伝えられている。そののち、後村上天皇の御宇正平の乱に社頭兵火に罹りしが寛文十年の時、領主竹内門主良尚親王より菅原道真公の木像を下賜せられ、再建せられ合せて素盞鳴命、菅原別命を御鎮座せらる。

明治時代、大正時代、昭和を通じ御霊験の御顕現は、近郊の人々の崇敬を仰ぐものである。

# 産須那神社

うぶすなじんじや

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

## 例祭日

十月二十五日



鎮座地 守口市寺方元町二一八一一五  
電話 〇六一六九九六一四九七二  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建の年月は不詳であるが、元和元年大阪の乱に全村焼失した時、当社もその災にかかったが、神霊を土中に納めて避難した。記録等も当時亡失して社の由緒等を知る事はできない。寛永元年九月社殿を再建し、前年土中に納めておいた神霊を奉安した。その後寛延二年五月五条家より同家に於て崇敬のある道真公の木像を寄せられたので社殿に祀った。

# 高瀬神社

たかせじんじや

御祭神

天之御中主神

御神徳

例祭日

十月二十三日



鎮座地 守口市馬場町一丁目一―一  
電話 〇六一六九九六一四八〇八

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は延喜式内の古社で、聖武帝の勅願によって高瀬川の高瀬ノ里辺に鎮座。神殿其他全備した大社で附近十七ヶ村の崇敬する所であったが、天正年間織田三好の兵燹に罹り、社殿等烏有となる。のち世木、馬場両村より社殿を造営。其の産土神となる。(大阪府全志) 明治五年村社に列し、昭和三年十月神饌幣帛料供進神社に指定。

# 白山神社

しらやまじんじや

## 御祭神

伊弉諾尊  
伊弉册尊  
天児屋根尊  
經津主尊  
武甕槌尊  
外一柱

## 御神徳

## 例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 守口市大日町二一三二一  
電話 〇六一六九〇三一六六五四

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は旧大庭六番、旧大庭四番、旧大庭三番の三カ村の氏神として、往昔より鎮座されてきた。明治維新まで社地内に、禪宗白山寺があつて、社僧が当社に奉仕し、社号を白山妙理大権現神社と尊称し、厄除祈願のため浪華在および近郷より、多数の参拝者があつて賑つていた。境内地は一、一七七平方米を有し、藤の古木が多く、往昔初夏の頃には、藤の觀賞地として名高く、河内名所図絵にある杜若の名所藤の森は当社の元地であつて、現今御旅所として保存されている。

社殿の建築については、旧記に乏しく詳かに知ることができないが、明治九年十一月に改築し、鳥居の額を有栖川親王に請い、白山妙理大権現の額を掲げたのである。

現今の社殿は明治三十四年十月二十日（棟梁大阪天満宮大工、柳佶兵衛）御造営が成り盛大に正遷宮を執行した。

境内末社に稻荷神社を祀る。

# 八雲神社

やぐもじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
応神天皇  
菅原道真公

## 御神徳

## 例祭日

十月第三土・日曜日



鎮座地 守口市八雲北町二一五一一  
電話 〇六一六九九三一五四二〇

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒不詳。

由  
緒

# やさかにじんじゃ 八坂瓊神社

(通称 七番のお宮さん)

## 御祭神

素盞鳴尊

## 御神徳

家内安全  
病氣平癒  
厄除開運

## 例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 守口市大庭町二一九三  
電話 〇七二一八八三一〇七八八  
HP



神社のおすすめ

## 由緒

当社の創立の年代は詳かではないが、疇昔より鎮座されていた。

京都祇園の八坂神社の御祭神を勧請したと伝えられている。

文化十四年(一八一七)九月二十日より、京都葉室殿の御祈願所となり、毎年例祭には葉室殿より高張提灯御紋附二張、御膳一膳、青銅一貫匁を供進せられた。

社殿は慶長年間、大阪の役に兵火のため炎上し、元和九年(一六二三)九月十六日に藤原朝臣赤楚藤兵衛が造営した。現今の社殿は明治十一年(一八七八)三月十日に赤楚重五郎、同与八が造営したものである。

境内地は一一二平方米を有し、境内末社に稲荷神社、開墾神社を祀っている。

開墾神社の由緒書(社蔵文書)に「往昔より鎮座あり。河内国川流の後葭草の処、村人二十四名相互に土地を開墾し、五穀を蒔付くるに、繁茂成熟して種実を得るに至る。彼此境界無く殆んど分界し難し依つて傍爾を設け立て名を道祖神と仰ぎ奉祀す」とある。

# 大枝神社

おおえだじんじや

## 御祭神

誉田別尊（応神天皇）

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 守口市大枝東町二一七七  
電話 〇六一六九九六一七二七  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

皇紀八五二年頃より、九州の熊襲が朝廷にそむいていたので、仲哀天皇が征討の軍をお進めになったが、戦い半ばにて崩御遊ばされた。熊襲の背後に新羅のある事が明らかになったので神功皇后は諒闇中であり、且つ御懐胎中にも拘わらず、凜として男装にて新羅をお討ちになった。やがて乱もおさまり遷啓の後、皇紀八六〇年十二月十三日に筑紫にて、誉田別皇子をお生みになった。

幼少より智才が優れ、慈愛は殊の外深く、御即位御在任は四十二年で、その間御仁政をなされた。

弓月君、王仁、阿知使主等の半島より帰化する者が多くなった。文物も続々と伝来し、我が国文化の発展に寄与するところ頗る大であった。

皇子は百十一才の御長寿であった。

長寿神、方位除宮、文武の神として崇められるようになった。

当社の創建の年代は詳かではないが、境内に現存する石造物等より推して三百年前である。小灯籠元禄十六年

石鳥居正徳三年九月

高麗灯籠文化二年九月

大常夜灯文化十年

中灯籠文政八年九月

尚境内の老松、檀の双樹（神木）にも、その歴年の程を立証することが出来る。

古老の言によれば、明治初年頃の境域は、周囲一帯篠竹が叢生し、裏側の洞穴は老狐の棲所となり、昼でも暗く、鬼気の迫る感じがすると。

本殿は昭和二年十月に竣工。社務所は大正十四年に、神社会館は昭和三十三年十月十二日落成奉告祭を執行した。

大常夜灯は昭和三十年二月に交通安全と氏子の火災予防のために現在地に移転した。

# 門真市

▶ 大阪府にもどる



かどまじんじや  
**門真神社**  
(通称 四番のお宮)

御祭神

素盞鳴命

御神徳

例祭日

十月十六日



鎮座地 門真市元町一七一  
電話 〇六一六九〇九一〇二二五  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建年月日は詳らかではない。

元南宮、中宮、北宮の三社あり、当社はその中宮であると伝えられている。

門真庄が発展して一々四番村が形成され、四番村の独立と共に元村の牛頭天王を移して当社の創立と成った。

文祿三年（一五九四年）片桐東市正且元の検地があり、その際より社地四畝一步を除地とした。

門真三番村は、もとの真手御宿所の辺に早くから産土神を有し、黄梅寺がその宮寺と称したが、類中府の禁令により、之を拡大改築を許されず、よって三番村宇治と同小路はそれぞれ分列してより、近くの神社に合併することとなり、宇治は二番村の氏神、小路は四番村の当社へ合併された。

明治五年に村社に列せられた。

明治四十一年に神饌幣帛供進社に指定された。

# 堤根神社

つつみねじんじや

## 御祭神

彦八井耳命  
神武天皇第一皇子  
菅原道真  
若宮大神

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 門真市宮野町八一三四  
電話 〇七二一八八四一五一八八  
H P <https://tutunine.jindofree.com/>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当神社は仁徳天皇の御代の茨田堤築堤を起源とすると伝わっています。茨田堤は日本最古の築堤といわれており、大国家事業として当時の最先端技術を持って行われ堤の完成により農耕文化の発展と経済的基盤が確立したとされ、現在日本の発展の礎になったといわれています。当神社の由緒として次のように伝わっています。

仁徳天皇の御代北河内の治水を為し給うに当たり、先ず内外に線の茨田の堤を築かれる。而して堤は既に成りたるも、外堤には尚二ヶ所の断間あり塞ぎ叶わず。潰流内堤に切迫して工事いよいよ困難なり。

天皇深く之を憂い給う時に神夢あり。曰く『河内皇別茨田連杉子(ろもこ)を召して事に当らせれば必ず成就せん』と之において天皇直ぐに杉子を探し給いに神夢のごとく河内にあり。よつてこの事を命じ給う。杉子謹みて勅命を拝し第一にその成功を記念せんが為に内堤の辺りに祠を建て河神を祀り而して杉子は二個の瓠をとり塞ぎ難き水に臨み請いて曰く「禍神何ぞ祟る。吾幣となさんが為に今茲に来る。」吾を得んと欲せば先ずこの瓠を沈め而して浮かばしめざれば、即ち吾真神と知り水中に入らん。もし瓠を沈め得ざれば吾自ずから偽神と知る。「何ぞ徒に吾身を亡くさんや」と瓠投げ入れるや風忽ちおこるも、瓠水中に浮遊して沈まず流れ去る杉子意に介し神助を得て断間を修復し以つて天皇の御慮を奉安。民の困苦を救う事を得たり。

之全く杉子の才覚を持つて大事を遂行し得たりとも、杉子我の微力に非ず。祖先の神助致すことなりと、河神を祀りし祠を改築し祖先たる彦八井耳命を齋奉し氏神と尊崇せんにいたる。之即ち堤上に修祀する故を以て住古より堤根神社と尊称する所以なり。

築堤後堤の安全を願ひ先人は護持発展に努め、江戸時代初期には永井信濃守尚政により菅原道真公を合祀し、また末社より若宮大神を合祀し現在に至っています。平安時代中期に編纂された延喜式神名帳には河内国茨田郡五座の第一位に列せられる門真市唯一の延喜式内社で、鳥居前には河内と大和を結ぶ「行基道」が通じており古来より篤い信仰を集めています。近年では杉子の御遺徳により幸の守り神災難除け、大願成就の神様として信仰されています。

# 三島神社

みつしまじんじや

## 御祭神

天照皇大神  
素盞鳴命  
大己貴命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
延命長寿

## 例祭日

十月二十二日



薫蓋樟

本殿前の大楠は、「薫蓋樟」といわれ、目通り周囲約十三・一m、高さ約三〇m、枝振りは東西に約四〇mで、昭和十三年五月十日付で国の天然記念物に指定された。千年以上の樹齢をもっていると思われる。

## 神社のおすすめ



鎮座地 門真市三ツ島一―一五―二〇  
電話 〇七二―八八三一〇七八八  
HP

## 由緒

当社は、門真市南部、府道深野南寺方線京阪バス停三ツ島下車北へ徒歩一分、または地下鉄長堀鶴見緑線門真南駅下車北へ徒歩十分に位置する。古来山王権現と称したが、明治三年四月今の社名に改めた。近江国の山王総本宮日吉大社より御分霊を勧請し、当村の氏神として奉祀したことは、江戸時代末、安政三年（一八五六年）の神社改築時の棟札により明らかであるが、創建の時期は不詳である。詳細な史料は残されていないが、宮座関係者から近江国の農民移住の伝えが語り継がれている。

山王権現は、伝教大師がシナ（中国）の天台山の山王祠に模して、比叡山延暦寺の守護神として山王祠を建立したのが初めである。その祭神は天台一実神道の本尊として、いわゆる山王三社といい、これに八王子客人、十禅師等を加えて上七社、下七社総称して山王二十一社といわれる複雑なる神であるが、これを要約して素盞鳴尊と 大己貴命（即ち大國主命）としたのである。明治五年郷社に列し、同四十一年八月二十一日大字稗島字堤下の村社堤根神社（祭神天照皇大神）を合祀したので、現在の祭神は表記の三神となった。同四十二年八月神饗幣帛料供進社に指定された。境内は三六〇坪を有し本殿の外に、拝殿・手水舎・社務所・大石燈籠を存す。この燈籠は、明治初年に当村が大坂の石屋から買取ったもので、大正の頃までは当地の樋口家で燈明をあげていた。本殿前の大楠には根元に碑があり、左少将有文の歌が刻まれている。

村雨の あまやどりせし 唐土の

松におとらぬ 樟ぞ此のくす

この和歌の作者、左少将有文とは公家の千種有文（一八一五―一八六九）のことで、幕末から明治維新にかけて岩倉具視らと共に活躍しました。しかし明治二年に死去したので、具視ほどには有名になりませんでした。本姓は村上源氏の久我家末流で家禄は一五〇石、代々和歌の家柄として知られています。

この薫蓋樟に代表される楠は、市内の社寺等で雄姿を見ることができ、広く市民に親しまれています。楠はわが国に産する樹木中最大の常緑樹で、地にどっしり根をおろし、大空に向かって高くそびえるその姿は、門真市の将来を象徴するものとして「市の木」にも選定されています。（昭和四十八年一月）

# しまがしらてんまんぐう 島頭天満宮

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

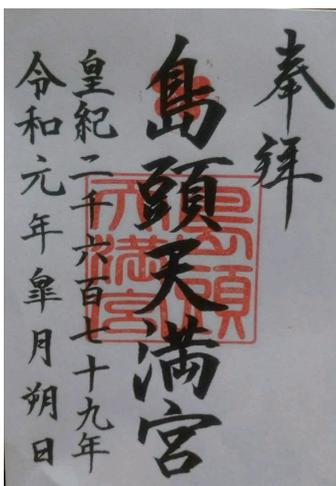
学業成就 厄除け  
芸事上達  
立身出世の神

## 例祭日

十月第二土曜日、日曜日



鎮座地 門真市上島町四二二二七  
電話 〇七二一八八一―三四九一  
H P



## 由緒

島頭天満宮の創建年月日は不詳であります。太古この地は、河内湾であったが次第に陸地化が進み、微高地に人が住みつき産土神の社が出来ました。入江の中へ島のように突き出した地形により、地名は嶋頭と名付けられました。嶋頭の地名の起源は、小松寺縁起によると鎌倉期を下るものではありません。(門真町史より)

寛永十年(一六三三)領主の永井信濃守尚政が旧来の祭祀に菅公を合祀しました。(門真町史より)

明暦二年(一六五六)尚政が検地を行ったとき、氏神天神社とも表記されており、境内は東西十五間、南北四十間とあります。現在の社殿は正徳六年(一七一六)に一間社流造の本殿を再建し、文政十年(一八二七)拝殿を再建されたものです。菅公九百五十年祭は嘉永五年に執行されました。

明治元年(一八六八)社名は天神社から産須那神社に改称され、明治五年(一八七二)に、村社に列せられました。境内は、七百九十一坪を有し、本殿のほかには拝殿、一の鳥居、二の鳥居、手水舎、神輿庫、および社務所を在し、老楠は樹齢七百年余と推定され、その雄姿は鎮守の森として氏子達の心のより所になっています。

昭和五十一年(一九七六)産須那神社から永年馴染んだ地名を残したく島頭天満宮に改称しました。

# 天神社

（通称 二番の宮さん）

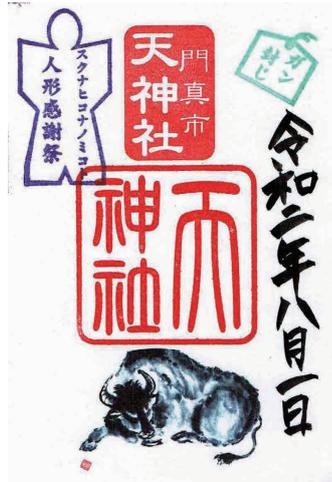
御祭神 少彦名命  
菅原道真公

御神徳 病氣平癒  
学業成就  
ガン封じ

例祭日 十月十七日



鎮座地 門真市月出町二二二  
電話 〇六一六九〇〇一四九五五  
HP <https://tenjinja.sakurai.ne.jp/>



## 神社のおすすめ

少彦名命が雛人形の神とされる事もあり、古い人形類を納めに訪れる方も多く人形感謝祭を齎行している。それにちなみ、感謝祭を行う日本人の精神性について海外テレビ局から取材を受ける事もある。



## 由緒

当神社創建の年代は詳かではありませんが、この地は古くは伊勢齋宮帰路の道筋に近く、その創建は相当古い時代であるとされています。主祭神の少彦名命は大國主命と共に国土経営に尽力され医薬の神（神農さん）としても著名です。少彦名命を主祭神とする神社は北河内地域では珍しく当社のみです。相殿には菅原道真公が祀られており、菅原道真公は寛永年間、永井信濃守が淀城領主の頃に祀られたものと伝わっています。

現在の本殿・手水鉢は江戸中期のもので、拝殿は江戸後期の建造です。平成七年の阪神淡路大震災では拝殿が甚大な被害を受けた為、修復補修工事が施され、同年竣工奉祝祭が齎行されました。

当社の氏子地域は、今でこそ門真市役所を含む市の中心部に変遷していますが、それ以前は一带湿地で大部分は淀川上流より運び出された土砂が堆積して出来た地域です。従って表面は豊穡な壤土ですがその部分には粘土・砂等が混在しており、その性質はレンコン栽培に適し、古くから「かどまレンコン」の産地で有名でした。また地下四米くらいの所ではもとの海底に当り、所々に海産の貝類をなしています。

### 例祭

例祭における賑わい行事には旧二番村より太鼓台、旧三番村より地車が巡行し、毎年十月十七日には熱気と迫力が観衆を包み込みます。そしてその太鼓台の巡行は昔ながらの所作が今に継承され、戦前戦中も含め起源以来一度の中断も許していません（特殊な事情を除いては）。これが氏子地域の誇りとするとところでもあります。

# 八坂神社

やさかじんじや

御祭神

素盞鳴命

御神徳

例祭日

十月十五日



鎮座地 門真市御堂町四一二八  
電話 〇六一六九〇一一七三三四  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創立年代は詳らかではないが、所在地は門真庄としては、最も早くから村里を形成していたので、当社の創建も古いと思われるが、文献の徴すべきものは見当らない。恐らく普賢寺が附近に建立された頃、すでに存していたものと推測される。

長弓寺大磐若経中に「応永十四年（一四〇七）十一月、摺字功終、河州茨田郡普賢寺庄内古林宮御経也」とある古林宮は明らかに当社のことと、当時普賢寺は当社の宮寺で、古く盛大であったと思われる。

氏は旧一番上村、同下村、現在の御堂町、垣内町、幸福町、古川町、末広町、寿町、速見町、大倉町と一番町の一円である。

明治五年村社に列せられ、同四十一年神饌幣帛料供進社に指定された。

昭和四十年拝殿を改築、社域周囲に石玉垣をめぐらせ、翌四十一年末社稲荷神社を勧請し、毎年旧暦初午の日に御神火祭を斎行している。

うぶすなじんじや  
**産土神社**  
(通称 上馬伏の宮さん)

**御祭神**

菅原道真公

**御神徳**

学業成就 厄除け  
芸事上達  
立身出世の神

**例祭日**

十月第二土曜日、日曜日



鎮座地 門真市城垣町一―三二  
電話 〇七二―八八一―三四九一  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

**由緒**

当社の創建の年月は詳らかではないが、当社の宮寺として隣地に存在する、宝蔵寺の御本尊が平安末期のもので、その境内には鎌倉時代の建立と思われる、十三層の塔の一部が残っている事等から、八ヶ庄上西ヶの内馬伏庄の草創は相当古く、当社創立もその頃と推測される。明治五年村社に列せられた。境内は三八二坪有る。

うぶすなじんじや  
**産土神社**  
(通称 岸和田の宮さん)

御祭神

菅原道真公

御神徳

学業成就 厄除け  
芸事上達  
立身出世の神

例祭日

十月第二土曜日、日曜日



鎮座地 門真市大字岸和田六〇三  
電話 〇七二一八八一三四九一  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

当社の創建年月は詳らかではないが、鎌倉時代以前と推測される。永井信濃守が、当社の宮寺長福寺を再興した時、当社の修理も行なった。明治五年村社に列せられた。境内は一五五坪で、松樹が社頭に繁茂している。

# 菅原神社

すがはらじんじや

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

学業成就 厄除け  
芸事上達  
立身出世の神

## 例祭日

十月第二土曜日、日曜日



鎮座地 門真市下馬伏二五五  
電話 〇七二一八八一三四九一  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建年月は詳らかではないが、菅公を祀ったのは、恐らく他の旧四宮村の神社と同様この地が京都北野の神領となったためであろう。

末社の厳島神社の創建も不詳であるが、この辺りが末だ充分陸地になりきっていなかった時代、即ち室町時代末期の八ヶ湖の名残りを、未だ相当残っていた下馬伏村草創の頃に、氏神として祀られたものと推測される。

明治五年村社に列せられた。

境内は一五八坪で、松樹が繁茂している。

# 堤根神社

つつみねじんじや

## 御祭神

天照皇大神  
素盞鳴神  
大己貴命

## 御神徳

## 例祭日

十月二十二日



鎮座地 門真市ひえ島町十二番九号  
電話 〇七二一八八四一四〇四〇

H  
P

## 御朱印なし

## 由緒

当社は、その創立の年代を明らかにしないが、文禄三年（西暦一五九五年）の検地帳に葎島・桑才二村の氏神として、山王宮と呼ばれていたことが記されている。祭神は素盞鳴神、大己貴神二座である。「山王」とは大己貴神を祭る神社が、「山王」と呼ばれる例に従ったものであろう。その後年月を経て、享保十年の検地帳では、「八剣大明神」と記録されている。これは天叢雲剣の神格速蛇建雄命を祭る神社が、八剣神社と称しているの、天叢雲剣は素盞鳴命が八岐大蛇を退治の際出現したものであるから、祭神素盞鳴神につながり、素盞鳴神を重視する時代に、さきの「山王」が大己貴神を重視する時代のものであったように、八剣大明神と呼ばれたものと思われる。元文三年の古文書では、祭神に新たに天照大神が加わって三座になっている。

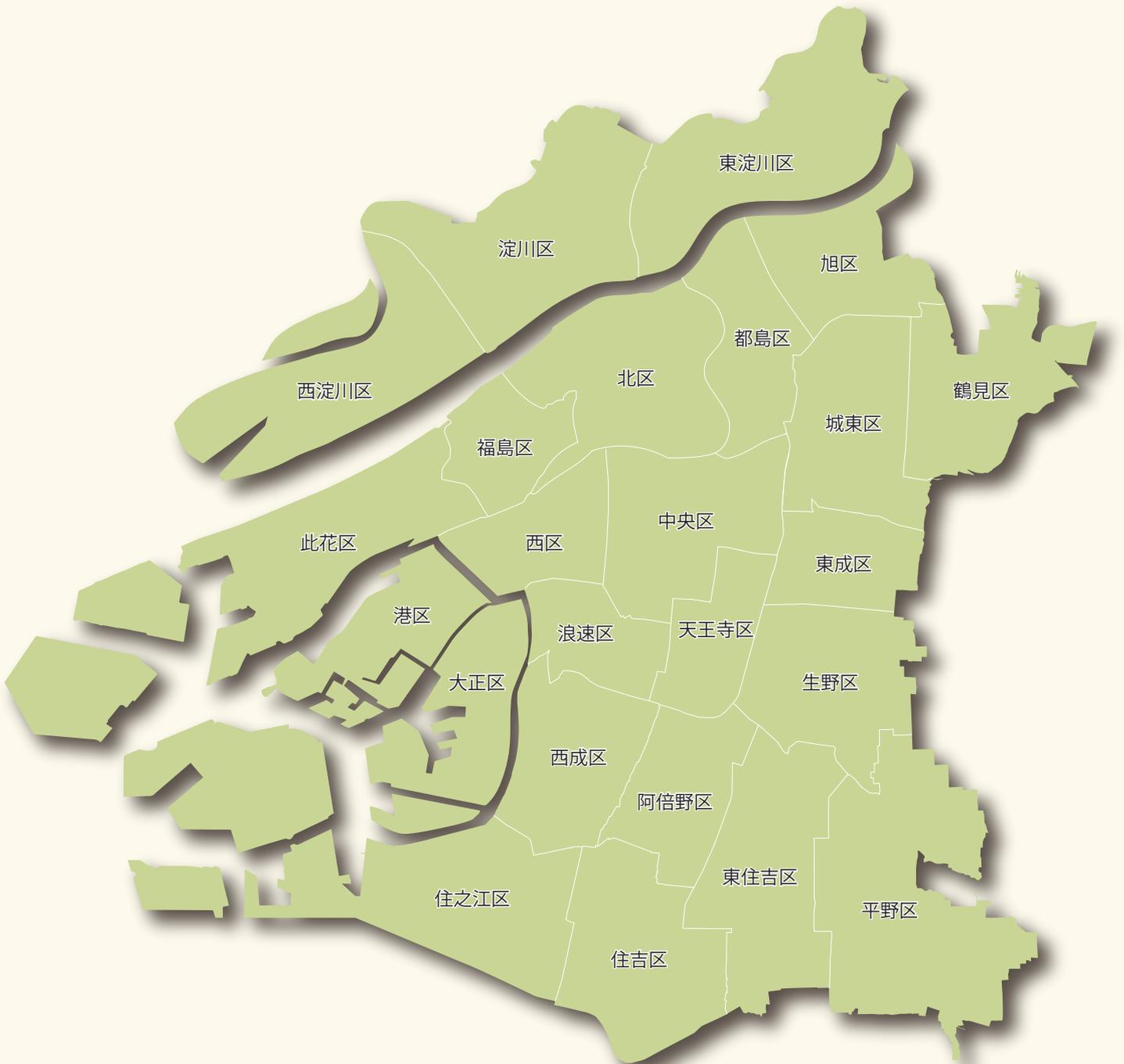
それが明治十二年の北河内郡神社財産登録では「両村神社」と呼ばれて、祭神は天照大神一座となっている。葎島・桑才二村の氏神社であるから、こう呼ばれたものと思われるが、何故、祭神が一座になったか分らない。

明治四十一年「堤根神社」と改称し、村社としての指定を受けたが、当時神社の合祀が広く各地で行われていた例に従って、郷社三島神社に同年八月合祀された。

それ以後、当地には氏神社をもたなかったのであるが、太平洋戦争終結後、葎島、桑才の住民は、氏神社の復帰を希望し、遂にその熱意は昭和二十一年十月十六日をもって成就し、ここに旧来の姿をもって堤根神社は再び鎮座せられることとなり、昭和二十八年二月十日には、宗教法人としての登録を完了するに至ったのである。

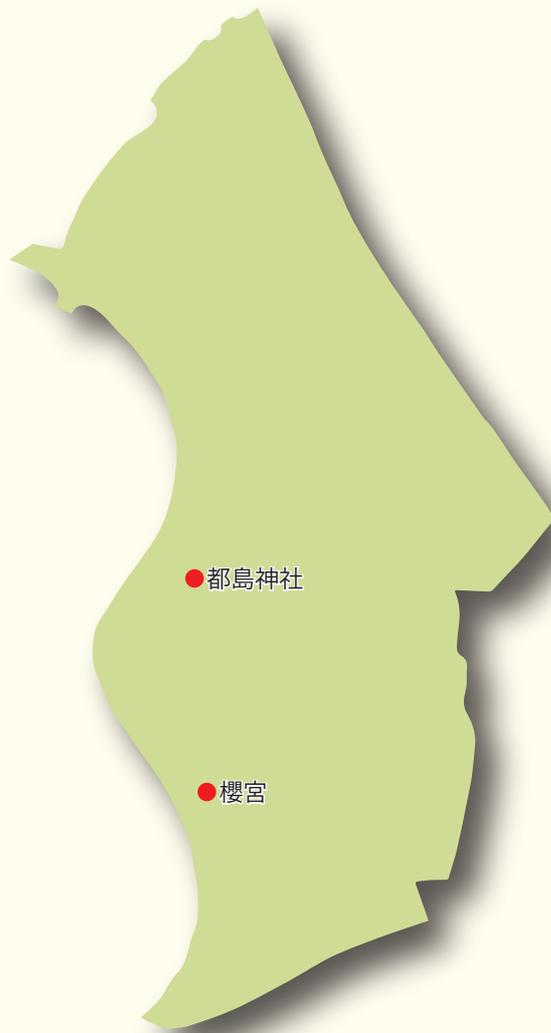
# 大阪市

▶ 大阪府にもどる



# 大阪市 都島区

▶ 大阪市にもどる



# 櫻宮

## 御祭神

天照皇大神  
八幡大神  
仁徳天皇

## 御神徳

## 例祭日

七月二十一日



鎮座地 大阪市都島区中野一丁目三十二  
電話 〇六一六三五一一六六〇七



## 由緒

東生郡野出「小橋」桜の馬場字「宮田」に氏神として奉斎したのが創祀の地で、豊臣氏が桜を愛し、馬場に馬を進めて落花の下に勇壮なる流鏑馬式を行なったと云う。斯くて慶長十八年冬再建されたが、元和六年大和川の洪水により社殿流出して、中野村（今の環状線桜宮駅直下の地）に漂着、此の地に祀ったが、爾後寛文六年延宝二年の水禍に罹り、社域低地であるため社地に適せず、城代の允許を得、現在の地に（此の地神鳳抄に摂津中村厨にして伊勢神宮の旧由緒地なりと云う）遷座した。「宮田」に鎮祭の時代より大阪城守護社として豊臣氏、徳川氏の尊崇を享け、屢祈願供御の儀があつたが、惜いことには兵火洪水の難に遇い、神宝記録散逸したため、創祀の年代詳らかでない。

社地は淀川の清流に臨み桜樹多く陽春美観を極め、且つ東の方田園を隔てて遙かに生駒飯盛諸峰の翠黛を見ることが出来る。南方には豊公の遺蹟「青湾」（湾の良水を太閤点茶の料となす）を祠前に擁し、錦城又巍として樹木参差の間に聳え、西北は近く澱江の清潭を狭み、往古は帛布観造幣局敷地に壮麗なる権現社があり、広い境内の桜と相対し、自然の巧妙と人工の雄偉、眺望は、霊地と共に絶佳のものである。妹に澱堤の桜樹は明治十八年の洪水に淵と化して旧観を失なつたといつても、尚その数は多くて而も皆老幹で春風に一度訪れ、花将に絳唇を開こうとすれば、忽ち幾多の茶亭が軒を連ね、宴席を設けて観客を引き、鐘太鼓囃等各様の見世物が相競いて群衆を招き、境内は更に場所が狭まくなる。花は東都の墨堤と並び称せられ、水の清いことは彼に勝つたという。菜種の頃は附近の田園一面に黄金世界を展開し、遠近の青嵐みな雅趣を添えて、文人墨客の来遊の絶えることがなく、中秋の観月には前流の銀波と後堤の虫の声が両々相俟ちて、秋もまたよいものであつた。四時の佳景が具はり尽している。昭和の初期まで漸々此の情景を呈していたが、爾来都市の発展に伴ひ、田園は宅地に、工場また林立し煤煙に樹は育たず、更に昭和二十年六月七日戦災を被り、今は昔日のおもかげを止むるのみで、大阪市は近く此の風致区一円の保全に努め市唯一の散策遊地として桜宮公園に桜樹を移植して、名所の復活を企画中であるという。

明治五年郷社に列し、同三十九年神饌幣帛料供進社に指定された。

# 都島神社

みやこじまじんじや

## 御祭神

天照坐皇大御神  
 広田大神  
 三十三大神  
 小守大神  
 石上大神  
 外十柱

## 御神徳

家内安全  
 病氣平癒  
 厄除開運

## 例祭日

十月二十日



「結び御守」

高校生がデザインした「貴方の願い」を  
 神様と共有する巾着型の御守

## 神社のおすすめ



※他朱印あり

鎮座地 大阪市都島区都島本通一―五―五  
 電話 〇六―六九二―一五四九六  
 H P

## 由緒

当社の創祀は人皇第七十八代二條天皇永暦元年（皇紀一八二〇年）源平両氏相争う兵乱中で、文献散失してこれを詳かにすることはできない。然し乍ら社伝によれば、後白河法皇当地母恩寺（御勅願寺）に行幸の時、「当村の守護氏神として永く御奉斎せよ」との御勅により御鎮座。当時村民いたく感激し、御聖旨を奉戴して「産土神の祭祀と維持は吾等の手で」を誓い合い、且之を誇りとして敢て他に依存せず 基本財産を造成し四大祭を年々厳肅盛大に奉仕し永く崇敬の赤誠を捧ぐ。赫々たる御神威は年と共に数多き奇蹟を顕現して神饌田（七反余現在貸地とす）石造三重塔（重美第七号美術品）等を献納されると伝えられ、天照坐皇大御神を始め十五柱の祭神を合祀したので、当時十五社神社と称していたが、都島区制に伴い昭和十八年都島神社と改称。

### 石造三重宝篋印塔

由来等不詳、宝篋印塔は元来密教系の塔で、塔中に宝篋印神咒経を納めることからこの名がついた。通常は平面方形の一重の塔で、笠の四隅に隅飾の突起を作り、笠上部は数段の段形とし、その上に相輪を立てる。都島神社の宝篋印塔は、各層の塔身と相輪は後補で珍しく三重塔となっており、全国的にも稀有で関西最古の石造塔、基礎台に「嘉元二甲辰／六月／廿九日」「願主□／沙弥□蓮／造立之」の銘文があり、一結衆による供養塔であろうと思われる。



六月 甲辰 嘉元二甲辰  
 願主□ 沙弥□蓮  
 造立之

大阪府指定有形文化財建造物 建第四号  
 重要美術品 第七号

# 大阪市 旭区

▶ 大阪市にもどる



# 大宮神社

おおみやじんじや

## 御祭神

應神天皇  
神功皇后  
姫大神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛

## 例祭日

十月二十六日



① いほ大神  
モチの老木、病氣平癒の  
神様として崇敬を集める。

② 高良社  
令和二年、全国最大の豊  
国大明神等身大坐像が発  
見されました。



## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市旭区大宮三ー一ー三十七  
電話 〇六一六九五ー一二二九六  
HP <https://omiyajinja-osaka.sakura.ne.jp/>

## 由緒

大宮神社の創建は今から約八百二十五年前に遡ります。文治元年二月（一一八五年）に源義経が平家追討の南向の折、この地に立ち寄り、宇佐八幡の神の霊夢を見て目覚めたところ、一樹の梅の古木に霊鏡がかけられていました。義経は我に神助ありと勇気百倍になり、その鏡を奉じて平家を打ち滅ぼし、このことを後鳥羽天皇に奏上して神社建立を許され、この地に社を建て「大宮八幡宮」と称したと伝えられます。撰津誌には「南島神社」と記されています。

時代は降り、天正十一年（一五八三年）には豊臣秀吉が大阪城を築くにあたって、当社を「鬼門守護神」と崇めました。社殿・末社の建立や神域の整備が手がけられ、毎年正・五・九月に幣帛を献じお祀りしたと伝えられます。当時の社殿は広壮で境内は三ヘクタールあり、南は京街道（現在の内代町）に一の鳥居があり、そこから神社まで続く参道には両側に松並木が続いていました。境内には樹木がうっそうと茂り、四周に清らかな流れがひかれていたそうです。殊に朱の社殿、朱の橋が社の緑に映える姿は荘厳この上もなかったと伝えられています。

続く徳川時代にも大阪城の鬼門守護神としての信仰は厚く、大阪城交代時には当社への参拝が行われ、毎年正月には初穂料を、また五・九月には大幣を献納して祈願したと伝えられます。しかし、社殿などは年を追って衰微していましたが、天明・寛政の時代に、祠官廣瀬肥後守善直が社殿・境内の復旧に努め、その功により朝廷より従五位下を授けられています。

その後、明治末期に近隣神社七社を合祀し、明治四十五年四月に「大宮八幡宮」改め「大宮神社」と称するようになり、現在に至っています。

以前は本殿北側に小山があり、沢山の椿が見事に咲き乱れ、昼間でも狐が寝そべっているといふのどかな風景だったと伝えられますが、明治初年の京街道改修の折に小山は取り崩されました。現在は大宮中公園として地域の憩いの場となっています。

大宮えびす祭 一月九日、十日、十一日

夏まつり 七月第四日曜日とその前日土曜日の二日間

秋まつり 十月第四日曜日とその前日土曜日の二日間

# 八幡大神宮

はちまんだいじんぐう

(通称 不焼宮【やけずのみや】)

## 御祭神

春日大神  
八幡大神  
蛭子大神

## 御神徳

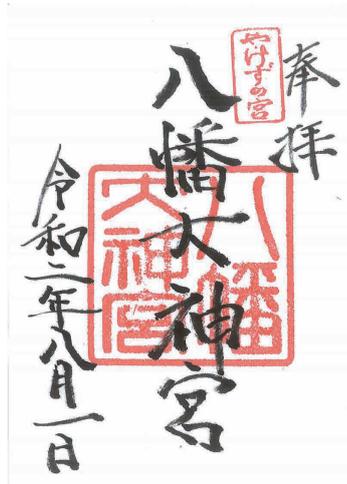
家内安全  
厄除開運  
除災招福

## 例祭日

九月十五日  
(日曜日でない時は第二日曜日)



鎮座地 大阪市旭区清水三―二十一十九  
電話 〇六一六九五二―二二二五  
HP



## 由緒

当社の創立年代は皇紀一三〇〇年初期で、その濫觴は人皇三十八代、天智天皇の頃現在地の辺りに宮寺があり、茲に関尹の藤原某氏春日大神を守護神として勧請し、後ち産土神と崇め奉祀する。

然るに今を去る六百年前に融通念仏宗の中興の祖法明上人男山八幡宮の霊夢を蒙り、後醍醐天皇に奏上して天皇より天筆如来を賜り、深江の法明寺に帰り一宗の弘道に余念なかつたが、上人臨終に際し石清水八幡宮より所伝の本尊及び宝物を悉く高弟の実尊(誠阿上人と称し佐太本山来迎寺の開山なり)に授け、汝が生国河内大庭庄に帰り一寺を建立せよとの遺命うけ、実尊命に従い故郷に帰らんとするに、先師の遺弟等は之を妬み檀徒と力を合せて其の後を追つたので、実尊は何れかに身を隠さんと思ひ、煩える所に一宇の古社祠あり入らんとすると、其の戸堅く閉じていたので実尊願いたれば、戸は自から開きその内に隠れたまえば、遺弟等怒つて火を放ち焼かんとしたが、火忽ち消えて焼くことができず、遺弟等其の有徳に感じ直ちに実尊に帰依した。古社祠は是より不焼宮の名を為し其の所在地馬場村の一名となつた。

其後実尊は佐太に來迎寺を建立してその開山となり、当時の保護に酬ゆる為め男山八幡宮の御分霊を此地に奉祀した、これが本社の八幡宮である。因縁によりて來迎寺住職の交代毎に当社に來拝するを例とした。今に絶えず下辻(現鶴見町)より般若寺(現両国町)に至る堤を劔嶮と云う。右の騒動には深江の檀徒それぞれ礎物を携へて追いかつたので劔嶮と云う。其の後ち某年村民悪病退散の祈禱を實尊に乞ひ靈驗あつたので、従来の主神を相殿とし八幡大神を主神とした。蛭子大神の奉祀の由は詳らかでない。例祭は九月十五日石清水八幡宮の例に習いて御旅所を般若寺(現両国町)に置き神輿渡御がある。

摂津誌に「三社神社在馬場村」と記すは当社である。

皇太神宮(廢社)大字馬場小字伊勢地に鎮座伊勢皇大神を奉祀した俗に若宮と称したが廢社となつた。以前は本村青年の伊勢參宮の帰途、淀川を舟で下り今市の渡に出て、迎へるものも此処へ出向し本宮に參拝するのが例であつた。

# ひよしじんじや 日吉神社

## 御祭神

大山咋神

## 御神徳

五穀豊穰  
病氣平癒  
水利・水難除け

## 例祭日

七月十八日  
十月十八日



芝守稲荷社



日吉行者堂

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市旭区赤川四一十九一十三  
電話 〇六一六九二五二六二三六  
HP <https://hiyoshi-jinja.wixsite.com/mysite>

## 由緒

当社の創建された年代は明らかではありませんが、室町時代の文安年間（一四四四年―一四四九年）に、すでにこの地に赤川寺（せきせんじ）という天台宗の巨刹（大寺）があり、この地の地名の由来となりました。その境内に比叡山日吉大社の御分霊を祀る神社とする「山王宮（さんのうぐう）」又は、「山王権現（さんのうごんげん）」とよばれた神社がありました。赤川寺は、大坂夏の陣で戦火に炎上し、その後廃寺となりましたが、神社は類焼することなく氏神様として近郷の崇敬篤く、代々栄えてきました。山王宮が「日吉神社」と改称されたのは、明治になるときでした。

明治三二年の淀川拡張工事に境内地の北部分が接収されて社殿をお遷ししたのが現在の鎮座地となります。

【氏子区域は、赤川町、大東町、高倉町、御幸町、都島北通、友渕町です。】

○境内北東には、京都伏見稲荷の御分霊を戴いた芝守稲荷社が鎮座し、毎年初午の日に「稲荷祭」を斎行させていただいております。

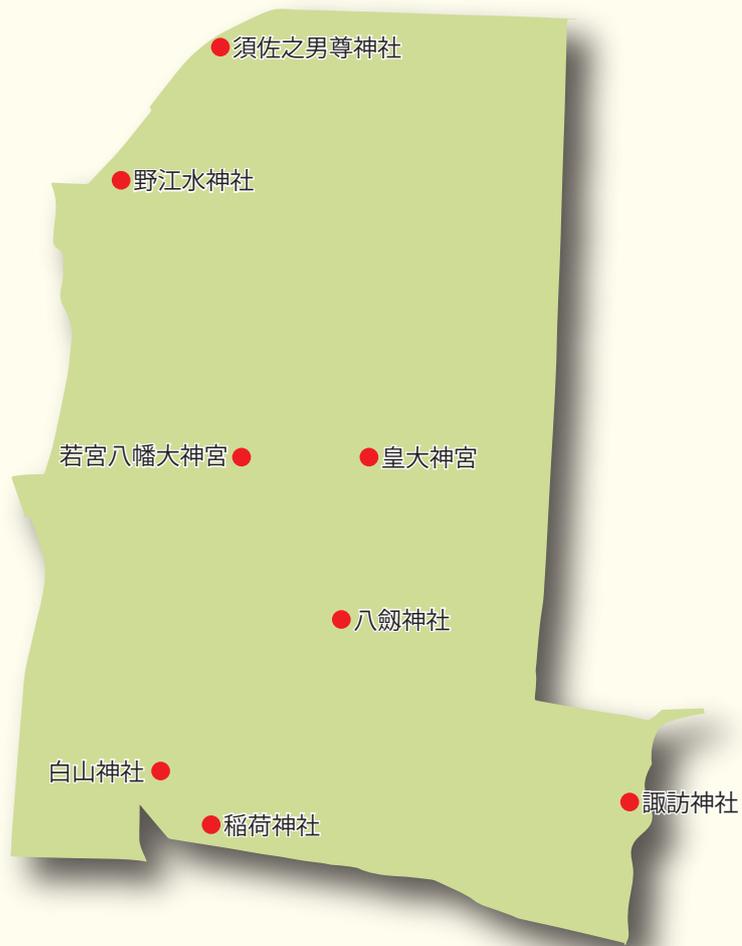
○境内北西には、赤川寺境内に鎮座されていた「役小角（えんのおづぬ）」の石像をお祀りする日吉行者堂が奉斎され、毎年四月二十九日に「大護摩探燈神事」が斎行されています。

○境内北西奥には、「黒い石神」「白い石神」のお社が奉斎され、それぞれ「病氣平癒」「子孫繁栄」の御霊験が報告されています。

○当社の神使（神の遣い）は、「神猿（まさる）さん」とよばれています。「魔が去る」「勝る」に通じ、とても縁起の良いお猿さんです。

# 大阪市 城東区

▶ 大阪市にもどる



# 八劔神社

やつるぎじんじや

## 御祭神

速素盞鳴尊  
奇稲田姫尊  
八柱大神  
天照大御神  
春日四柱大神  
外一柱

## 御神徳

## 例祭日

十月二十二日



大阪市城東区

鎮座地 大阪市城東区鳴野東三十三番一丁目八  
電話 〇六一六九六一一五〇〇三  
H P [www.880.jp/](http://www.880.jp/)

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は宝暦年間（一七五一年〜一七六三年）本社宮座間に伝承していた縁起によると、応永の始め、鳴野村の住民某がある夜夢を見た。その夢枕に一人の老翁が現われ、「吾はこれ熱田の神なり。跡をこの地に垂れんと欲す。明日汝等出でて、吾を淀川の河辺に迎うべし」と告げたので、某はこれをよく胸にきざみこんでいて、翌日村人十数人を呼んでこの次第を語ったところ、同じ夢を見たと言う者が十人余に及んだ。そこで一同は各々衣服を改めて河辺に出迎えると、果して一ぴきの小蛇が河中に現われまっすぐこちらに向って来て、やがて岸に上った。その様の悠々泰然たるを見て、村人は畏敬にうたれ、一同相従って行くと、小蛇は川を越え堤を経て鳴野村に入った。そして、小蛇がとどまつた所をしかと見とどけた村人たちは、その処に小さな祠を建ててこれを祀った。時に応永三年（一三九六年）九月二十二日に初祭を行って以来、今に至っているというのが、本社の縁起である。

大正三年四月八日、天王田村社八阪神社、永田村社水神社を本神社に合祀遷宮し、以来本神社は鳴野、天王田、永田の産土神社である。

# 皇大神宮

こうたいじんぐう

## 御祭神

天照皇大神

## 御神徳

五穀豊穰  
国家鎮護  
除災招福

## 例祭日

四月二十二日  
十月二十二日

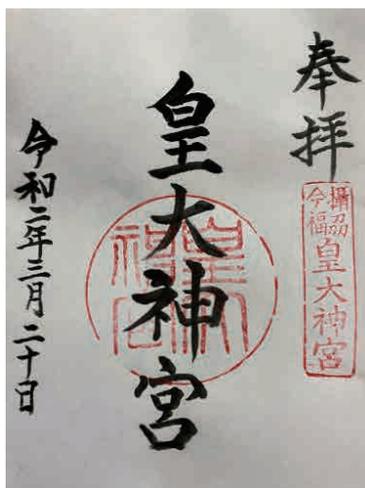


小女郎稲荷社  
摂津名所図会第三巻に載る御社



今福の道標  
おかげまいの伝承に縁ある道標

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市城東区今福南二丁目三十一番  
電話 〇六一六九三二二六六八  
HP [www.eonet.ne.jp/~kouraijingu/](http://www.eonet.ne.jp/~kouraijingu/)

## 由緒

当宮御創祀年代は不詳では有るが、久岐今福御厨が開領された頃に遡り千年以上の歴史を持つと云い伝わる。現在の御祭神は天照皇大神一柱である。

今福の地名の初見は貞応三年八月十日の宣陽門院所領目録にあり「新御領（自上西門院被進之）摂津国久岐今福御厨」と記され長講堂領となっている。「久岐」は国境の意で摂津國の境の示し、「今福」は「今封戸」が転じたもので新御領を示す。御厨の起源は、御厨子所の設置確認が寛平九年である為、その所領である御厨は九世紀末まで遡りうる。久岐今福御厨は鳥羽天皇の皇女上西門院より寄進された新御領で、上西門院が母待賢門院より法金剛院領を相伝したのが久安元年、此れを上西門院が獲得した莊園とともに宣陽門院に譲つたのは文治五年であることから遅くとも十二世紀中頃には成立していた。創祀の始まりが明確ではないものの、少なくとも平安末期には当宮は創祀されていたと云われるのは此れに由来する。

木下與右衛門御檢地帳（文祿三年）に東西二十六間南北十七間面積一反四畝四町歩を除地されたと記載されている。又、今福地開発百姓宮座として年積りたる者六人が六老と云い神社の掃除一式を執り行っていると記載されている。難波戦記にある今福堤は、旧大和川の北岸で東西に長く、今俗に今福元町と云う。その元町に連なる小丘に当宮は鎮座している。境内には大正期まで榎木の老大樹があった。樹齡千年以上の御神木で、本多林学博士著「大日本老樹名木誌」にも収録されている。如何に今福が古い集落であったかが判る。

又、此の地一帯は広く榎並莊と称して、当宮がその氏神と祭祀され伊勢神宮の神税を納める齋蔵が此の小丘に有ったと古老等が言い伝えている。

所蔵の棟札が六枚有り、内四枚に三十番神但し天照皇大神両側に春日大神、八幡宮と三行に記載されている。各札には文祿三年、宝永四年、享保十一年、寛保二年、延亨四年、天保十三年と記され夫々修改築がされた。

昭和七年にも社殿改修がなされたが平成七年、阪神淡路大震災により大きく被災し同年拝殿を瓦葺から瓦型打銅板葺に改修、現在まで被災した末社等施設を改修し続けている。

明治元年神仏分離令を受け明治五年に皇大神宮と称し、旧社格は村社に列せられた。明治四十四年に会計指定社、大正元年に神饌幣帛供進社となり、戦後、昭和二十二年神道指令により国家の管理から離れ、現在の護持運営の形となった。

# しらやまじんじや 白山神社

御祭神

菊理媛神

御神徳

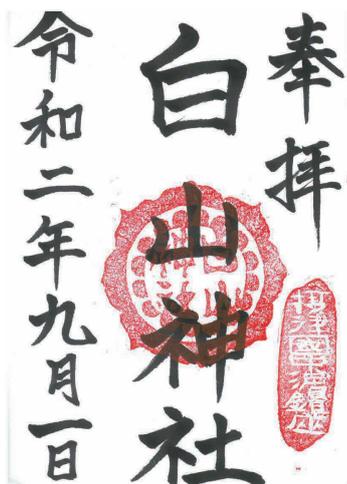
家内安全

例祭日

十月十七日



鎮座地 大阪市城東区中浜二丁目三十一番五  
電話 〇六一六九六一一〇四八一  
HP



## 神社のおすすめ

境内の大いちはようは昭和二十四年に大阪府の天然記念物に指定されております。大阪冬の陣にて東軍の将、本多出雲守の陣屋となり、この木に登って戦況を偵察したと伝えられております。



②天然記念物 大いちはよう  
①身体健全御守 各色五百円

## 由緒

当神社は昔、白山妙理権現と称え応永の頃（一三九四年）までは中浜・鳴野・森の諸村の氏神でありました。  
当御祭神は常に親子・兄弟・姉妹・夫婦・朋友等すべての仲を守り給ふ、和の守護神であり、また水の大元の神として崇められております。  
明治五年村社に列せられ、権現号を廃止し、白山神社と改称されました。

# 野江神社

(通称 野江神社)

## 御祭神

水波女大神

## 御神徳

安産守護  
厄除開運  
水火除難

## 例祭日

十月二十日



御神水

## 神社のおすすめ

当神社は水火除難・安産・厄除の神様として知られ、氏子は勿論の事、特に水道工事関係者や水商売の人々の篤い信仰もあります。又、境内の「御神水」を受けに遠来より多くの参拝者があります。



鎮座地 大阪市城東区野江四一―三十九  
電話 〇六一六九三二―六九七六  
H P [www001.upp.so-net.ne.jp/water-shrine/](http://www001.upp.so-net.ne.jp/water-shrine/)

## 由緒

この地に人が住みはじめたのは、神亀元年（七二四年）頃で、菜種を栽培し、菜種油を第四十六代孝謙天皇に献上して、「油江村」の名を賜りましたが、いつしか訛って「野江村」になりました。

又、この地は榎並猿楽発祥の地でもあります。榎並の猿楽は鎌倉時代末期に丹波猿楽の新座として、このあたりに座を構え、南北朝時代には榎並座と呼ばれ、丹波猿楽の楽頭として活躍しました。猿楽は後に観阿弥や世阿弥たちによって舞台芸術である能楽を大成させました。

元来、このあたりは、土地が低く、大雨が降ると淀川やその支流が氾濫し、再々水害を被ることがありましたので、水の神様を勧請されたものと思われます。世間では当神社を、水神宮・水神社・水神さま、地名から野江神社と称されています。

天文二年（一五三三年）十月三好政長（宗三）がこの附近に榎並築城の際たびたび水害を被ったので、水火除難の守護神として城内に小祠を建てて篤くまつられたのが、現在の社殿の位置と言われています。

天正十一年（一五八三年）六月、豊臣秀吉も大阪築城に際して、水火除難の守護神として、近郷の諸社中最も崇敬篤く、社殿を修築し幣帛を奉り国家泰平・武運長久を祈願致しました。

境内は、延宝七年（一六七九年）己未八月七日永井市内検地惣奉行安達文左衛門の調書に御宮地と記されています。

元禄十六年（一七〇三年）九月の大洪水でこの附近は水海と化し、住民がことごとく困窮の日を重ねていた時、「水徳甘露神万民化楽氏子繁昌之所」勤行者鈴木久太夫と書いた木札を神前に奉り快晴祈願をしたところ、雨がやみ洪水は減退したと伝えられています。

享和二年（一八〇二年）六月の大洪水にも当神社は無事であったことを、榎並八箇洪水記の中に記録され絵にも画かれています。明治五年（一八七二年）には、村社に列格し野江の氏神としておまつりされています。

現今の社殿は、明治十六年（一八八三年）の造営にして、明治十八年の大洪水のため倒壊し、明治二十一年完成後、大正十一年幣殿を増築し、昭和五十三年に雨天の祭儀に便利な渡り廊下を新築、昭和六十二年に透塀を改築、平成九年には屋根瓦の葺替と社殿修築、平成十九年に本殿屋根の銅板葺替をして今日に至ります。

# 須佐之男尊神社

(通称 関目神社)

すさのおのみことじんじや

## 御祭神

須佐之男尊

## 御神徳

## 例祭日

七月二十二日



鎮座地 大阪府城東区成育五―十五―二十  
電話 〇六一六九三二―六八四四  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創祀は、天正八年豊臣秀吉が大阪築城の際防備の一つとして、木村大字関目より古市森小路の間十余町の道路を、特に数曲屈折させて、敵兵の進軍を俯瞰し、その軍容兵数を察知するのに便利なようにした。これと同時に鬼門鎮護の神として、昆沙門天王、牛頭天王を勧請して小祠を建立した。先の屈折した道路を俗に七曲りと云う。

明治四年に改称して須佐之男尊神社と称し、翌五年村社に列せられた。現社地はもと沼中の小立であったが、開墾されて、その二方は小川となり、一方は創建の際盛土を採掘した痕であるという連池がある。

現在の本殿は南面している。鯉江町八幡大神宮に所蔵されている再建願書、その他古文書によれば、正徳年中大風のため、本村の民家が多く倒壊したが、この時本社殿も亦厄災に罹ったとある。その後明治十八年大水害に社殿が流失した。この正徳及び明治の両度の厄災後の再建の年代は詳らかではない。

明治十八年水害以前は、本社の分霊を大字野江字関目一六番地に勧請して、小祠を造り行宮として神輿の渡御があった。これは此の地の住民が元関目より移ったものが多かったためと伝えられている。しかし水害により神輿も流失し村民も疲弊したため、遂に渡御の事も絶えてしまった。

大正四年八月十四日会計指定を示達された。明治初年に明治天皇御巡幸の際、本村宇茶屋西田屋利助氏宅に御小休された。その地を記念して、明治天皇御鞆碑を岡本文五郎、岡田富三郎氏等発起し建立した。それより毎年七月六日にその記念祭を執行している。

# 諏訪神社

すわじんじや

## 御祭神

建御名方刀美命  
八坂刀売之命  
外(末社) 腰掛天神

## 御神徳

健康祈願  
勝運祈願  
家内安全

## 例祭日

十月二十三日



鎮座地 大阪市城東区諏訪二丁十五一十六  
電話 〇六一六九六一二二八七  
HP



## 神社のおすすめ

例年秋祭に豊臣秀吉公奉納の獅子奉納舞を保存会により神前にて斎行。令和元年にはMBSテレビ「ちちんぷいぷい」番組にて河田アナウンサーとくっすんが獅子舞を二ヶ月練習の上、スタジオにてその成果を披露し、より有名になりました。

## 由緒

当社の創建年代は詳らかではないが、境内に現存している古い灯籠に、承和三年一月十六日奉寄進と記されている点から、千年以前に創設せられた事が想像され、尚風化のため判然としないが、これも同年期のものと思われる石鳥居一基が、神社の創立を物語る史実の一端となっている。

御祭神の父神様である大国主命を大國神社に母神様である高志沼河比売命を春宮神社に摂社としてお祀りしてある。

第六十代醍醐天皇の御代、当時右大臣であった菅原道真公が筑紫に大宰権師として左遷配流の身となられ、河内道明寺に在任の伯母君にお別れのため、当神社の前の堤(当時神社の附近は竹藪が繁り、堤の両側は沼地であった。道明寺に通じる道路は、この堤が唯一のものであったと伝えられる。神社の参道と接していた。)を横切られ、参拝の上御休憩になった。その際近くの住民を呼ばれ「ここは何と云う地名か」と質問されたところ、「左専道」と答えた。道真公は「どんな字を書きますか」と問われると「左専道」と書くと答えると、道真公は「われ今左遷される身なれば、左専を左遷と改めては...」と、自分の身の哀れを訴えられたと伝えられている。その後、道真公の御身上を同情し左専を左遷と改め、土地の人達は村名にしていた様であるが、縁起がよくないと云って、何時の程にか元の左専道に改められて今日に至っている。

その後、道真公は御神号の額一面を奉納になった。

豊臣秀吉公が大坂城を築城すると、城の真東に当る当社を、城塞鎮護の社として格別崇敬された。当時、当社で行なわれていた「御頭祭」には、その都度名将を代参させ、武将数名を遣わして、「流鏑馬の神事」を奉納され、事ある毎に参拝されて祈願し、靈験を得たと、剣一振・御紋章の提灯・青銅の灯籠一対等、数々の寄進をされた。中でも雌雄一対の大獅子(白雲号・白豊号。白雲号は流失し白豊号のみ現存。例祭に保存会に依り奉納舞を行なっている)の奉納は、一五九〇年七月に小田原城の北城氏を攻め、開始して一ヶ年包圍して三ヶ月、遂に諏訪の大神を祈願して靈験を得、落城せしめた事の戦勝感謝の奉納品であることは有名である。

# わかみや はちまん だいじんぐう

## 若宮八幡大神宮

(通称 若宮さん 蒲生の西向き八幡さま)

### 御祭神

大鷦鷯尊

### 御神徳

家内安全  
病氣平癒  
厄除開運

### 例祭日

十月二十一日  
(現在は第三土曜日の次の日曜日に振替)



鎮座地 大阪府城東区蒲生四一三ー十六  
電話 〇六一六九三二ー五九二七  
HP



### 神社のおすすめ

若宮のだんじりとだんじり囃子は近辺の垂涎の趣がある。このだんじりをデザインしたキティ守は当宮のオリジナル。



大坂冬の陣  
佐竹義宣本陣跡石碑



当宮のオリジナル  
「キティ守」

## 由緒

当宮は、大阪城の東北蒲生郷に鎮座する。世に「蒲生の西向き八幡さま」、「若宮さん」と親しまれてきた。

抑々、当地域の土地柄は、寝屋川（古くは大和川）・鯉江川の二川、また古街道が東西に貫通し、低地であり地味砂土に富み、農耕に適し、水運の便多く、浪速に於ける庶民生業の中心地として繁栄してきた関係上、浪速に都を定められ、御製「高き屋にのぼりてみれば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり」に示された仁徳天皇（大鷦鷯尊）の御遺徳をしのび奉り、村民こそぞつて神祠を勧請御創建した事に始まると伝えられている。「撰津名所図会」によれば、蒲生は名産に蒲穂あり、色美しく、尺長く、良質のものが出来たと記されている所からの地名という。

社伝によれば、人皇一〇三代後土御門天皇の御宇文明十四年（一四八二）八月、畠山政長が畠山義就を河内守口城に攻めた時、村民の崇敬篤く神域が广大であった当地の神祠に、武運成就を祈願したとあり、また大坂冬の陣（今福合戦）に於ては、佐竹義宣が当地境内に本陣を構え戦勝を祈願したとある。

明治五年には村社に列せられ、蒲生郷一帯、現在の聖賢地区の守護神として、絶大な信仰を集めている。

現在の社殿は、昭和十二年に大阪府技手木村義一の設計の下、木曾の宮大工梶浦鎌吉によつて造営された。平成二十六年に御社殿の大修理がなされ、造営当初の荘厳な姿が再現された。

例祭日は、明治六年の改暦の時、旧暦九月一日に相当の新暦十月二十一日に改められ、現在は十月第三土曜日の次の日曜日をこれに充てている。この例大祭（秋祭り）の宵宮を含めた両日には、だんじりが曳行されている。老朽化のため曳行中断を余儀なくされた時期もあったが、平成十年には氏子青年会が結成され、春祭に氏子有志手作りの子供だんじり曳行、翌年には氏子待望の親だんじりの曳行が再興され、以来宮だんじりとして春・夏・秋祭りに賑わい現在に至っている。

境内末社には、豊受稻荷社・祖霊社（社殿は現御本殿造営時の仮宮）・乾大神（いぬいのおおかみ）社がある。

いなりじんじや  
**稲荷神社**  
(通称 東本稲荷神社)

御祭神

宇迦之御魂大神

御神徳

商売繁盛

例祭日

五月五日



鎮座地 大阪市城東区中浜三丁十八番十一  
電話 〇六一六九六一〇四八一 (白山神社)  
H P

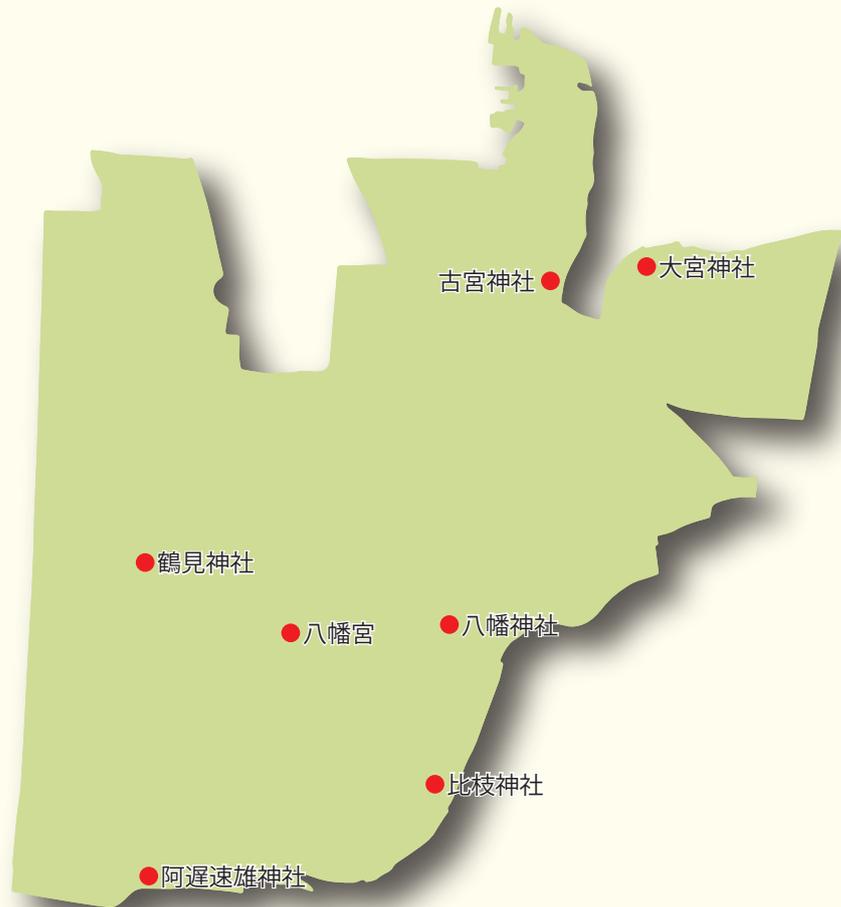
御朱印なし

## 由緒

創立の年月日は不明ですが、天正四年(一五七六)の兵乱で神殿を焼失し、慶長八年(一六〇三)豊臣秀頼公により再建されました。しかし、元和元年(一六一五)の大坂夏の陣で再び焼失し、その後、江戸時代に大阪城代阿部備中守正次が再建しました。明治十八年(一八八五)の大洪水により流失、有志の協力により小祠を建てたものの荒廃し、昭和三年(一九二六)御大典記念として、有志相寄り神殿を再建し、今日に至っています。

# 大阪市 鶴見区

▶ 大阪市にもどる



# 鶴見神社

つるみじんじや

## 御祭神

大山咋神荒魂  
正勝吾勝速日天之忍穗耳命  
天之菩卑命  
天津日子根命  
活津日子根命  
外四柱

## 御神徳

厄除開運  
病氣平癒  
延命長寿

## 例祭日

十月第三日曜日



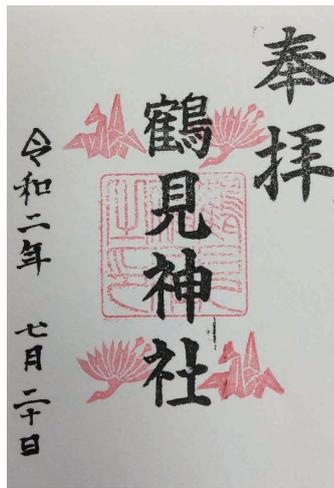
九鬼稻荷社



御神木

## 神社のおすすめ

境内に夫婦楠という保存樹に登録された二本のご神木があり、木の根が夫婦の契りのように地中深くで結びついていることから、夫婦円満・良縁成就のご利益があるとされている。



鎮座地 大阪市鶴見区鶴見三十三一七十六  
電話 〇六一六九二一一五六七  
HP [tsurumi-jinja.hanamizake.com/](http://tsurumi-jinja.hanamizake.com/)

## 由緒

創祀の由来は当地の鶴見（旧下の辻村）の開村に関わるもので、旧記によれば当社は平安時代末期、近江国辻村の農民十七人が多数の人夫を随え、この地に移り開村した際に、比叡山峯八王子社の分霊を勧請したのに始まるといわれている。明治五年、村社に列せられる。

古来より八王子社と称したのを、大正十五年に八王子神社と名称を変更、昭和二十九年に鶴見神社へと変更された。

### 鶴見の由来

開村時は自分たちの郷里である辻村を名乗っていたが、旭区にあった上辻村に対して下の辻村と呼ばれるようになり、江戸時代になって下辻村が正式名となった。

下辻が鶴見に改名されたのは大阪市に編入された大正十四年からである。鶴見の名は鎌倉時代に源頼朝が、富士の裾野で鶴を放ち、その鶴がこの地に飛来して舞う姿が見られたことに由来する。

### 社殿について

旧社殿は極彩色椀皮葺であったが、明治二十三年に椀皮葺流造に改めた。拝殿・本殿両覆は共に享保年間の建築で、当時は萱葺であったが宝暦年間に瓦葺に改めたと伝えられている。

昭和四十四年に入り、本殿・幣殿・拝殿を鉄筋コンクリート造りに改築。本殿は春日造りに改めた。

### 末社について

神社境内に四つの御社があり、八大龍王を祀る福龍社、鶴八大明神を祀る鶴八社、境内右奥左手側にある大東亜戦争の際に殉じた英霊・当神社の関係者・氏子崇敬者の物語者を祀る祖霊社、境内右奥右手側にある九鬼和泉守と住吉大神を祀る住吉・九鬼稻荷社となっている。

### 末社の九鬼稻荷神社・住吉神社について

延宝年間の下辻村（鶴見）の石高は八百余石とされていたが、低地のために度々の浸水にあった。見地に立ち会った九鬼和泉守はこれを哀れみ、石高を減らす事にしたので村人はこの恩を忘れず、神社を建て、以前から祀られていた住吉大神と合祀して祀ったのが当末社であるといわれている。現在でも、五月五日に行われる稻荷祭りでは、予定が合えば九鬼和泉守の子孫の方をお招きし祭祀を行っている。

### 御朱印について

御朱印に関して、神職が他の業務や仕事で多忙な場合はお断りさせていただいております。その際、授与所にお断りの張り紙をしておりますので、事前に電話で確認いただくが、来社時に授与所をご確認ください。

# 阿遅速雄神社

あちはやおじんじや  
(通称) 放出神社

## 御祭神

阿遅鉏高日子根神  
(迦毛大神)  
草薙御神劍御神靈  
(八劔大神)

## 御神徳

## 例祭日

十月二十一日



鎮座地 大阪市鶴見区放出東三十三番一十八  
電話 〇六一六九六二一〇三七八  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

阿遅鉏高日子根神は本地に降臨せられ給い、民に耕耘の業をさづけ、恩沢をたれ給い、父神大國主命の神業を補翼し給ふ郷民その御神徳を忍び撰津河内の国造神として、御神恩を、お慕い申し上げ、神いませし此の地の守護神として齋いまつると云い伝えたるものにして……この宮を阿遅速雄神社と称し、古代は阿遅経宮又は浦明神と称され、のち八劔大明神と尊称す。

天智天皇(三十八代)七年十一月新羅の僧道行尾張国熱田宮に鎮り座す御神劔天叢雲劔即ち草薙御劔を盗み出し、船にて本国へ帰途、難波の津で大嵐に遇い流し流され、古代の大和川河口であった当地で、嵐は更に激しく、これ御神罰なりと御神威に恐れをなし、御劔を河中に放り出し逃げ去り(これが地名となり放手(はなちて)、放出(ばなつて)、放出(はなつてん)、今「はなてん」と云う)後この地の里人この御劔をお拾い申し上げ、大國主命の御子、阿遅鉏高根神御鎮座の此の御社に合祀奉齋すること数年、後飛鳥浄見原宮に御うつし申し上げ、更に朱鳥元年六月、皇居より尾州熱田の御社に奉還し給い、永えに熱田神宮に鎮り座した。右御由緒あらたかな当御社に御鎮座の八劔大神に、中御門天皇(百十四代)享保八年御神階正一位を贈られ八劔大明神と尊称す。

# ひえじんじゃ 比枝神社

## 御祭神

天照皇大神  
大山咋命  
大己貴命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
厄除開運

## 例祭日

九月二十三日



鎮座地 大阪市鶴見区今津中五―五―二十三  
電話 〇六―六九六一―六六八二



※他朱印あり

## 神社のおすすめ



- ③ 病氣平癒御守 1000円
- ④ 安産御守 1000円



- ① 豆まきの様子
- ② 豆まきの景品

## 由緒

今津には往古より「上の宮」「中の宮」及び「下の宮」の三社があったが、明治十三年四月に中の宮に上下の二社を合祀した。上下の両社の創建は不詳であるが、御祭神はともに天照皇大神を奉祀する。中の宮は元禄四年九月近江国坂本に鎮座の日吉神社の御分霊を勧請し奉り、山王権現と称したが明治二年十一月比枝神社と改称した。

# 八幡神社

はちまんじんじや

御祭神

誉田別命

御神徳

例祭日

十月二十二日



鎮座地 大阪市鶴見区諸ロ二丁四一四十一  
電話 〇六一六九一一三六〇二  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の起源は社記によれば、延久四年三月十五日に南河内の誉田八幡宮（現羽曳野市）の分霊を勧請したものである。  
後に建武年間楠正成の家来に井賀和泉守源義明と云う人がいて、徳庵城に拠りて当社を祈願所と定め五十石を寄附した。爾来幾多の変遷を経たが、明治維新前までは領主より毎年二十石を御供米として寄附があつた。  
明治五年村社に列し、大正元年十月神饌幣帛供料進社に指定された。

# 八幡宮

はちまんぐう  
(通称 横堤八幡宮)

## 御祭神

応神天皇  
神功皇后  
比売大神

## 御神徳

家内安全  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

十月二十二日



御神木の楠



宮司奉製の天然石御守

大地主黒龍大神を祀る末社の御神木の  
一願成就が有名で、特に病氣平癒がよく  
叶えられると言われている。

## 神社のおすすめ

令和 年 月 日



鎮座地 大阪市鶴見区横堤二丁目二十五  
電話 〇六―六九―一〇一六  
HP <https://yachitanomiya.com>

## 由緒

創建は、南北朝時代延文五年九月二十一日、現在の京都府八幡市にある男山に御鎮座されます「石清水八幡宮」より御分霊を勧請し、横堤地域の守り神としてこちらの地に御鎮座になったと伝えられています。

境内は百七十一坪、地は横堤村（現大阪市鶴見区横堤）一円にして、春季例祭は三月三日・秋季例祭は十月二十二日とされ、創建当時から五百九十五年の間「産須那神社」と称しました。

その後、末社「豊栄稻荷大神社」「大地主黒龍大神社」を造営。昭和三十年五月八日に「八幡宮」に改称されました。

### 【沿革】

延文五年（西暦一三六〇年）九月二十一日 茨田郷横堤村に氏神として御鎮座

明暦二年（西暦一六五六年）甲九月二十二日 八幡宮 河内国茨田郡十七番横堤村 極彩色 御本殿御造営

宝暦八十二年亥歳（西暦一七五八年）九月二十四日 河州横堤村 奉遷座八幡宮氏地繁昌祈所

玉造稻荷社神職鈴鹿頼 藤原重吉奉遷之

天明九年己酉歳（西暦一七八九年）正月吉祥日 河州松田郡横堤村 奉遷座八幡宮天照皇大神宮

氏地繁昌五穀成就祈所 玉造稻荷社神職鈴鹿友之丞 藤原重教奉遷之

弘化三年丙午歳（西暦一八四六年）四月十九日甲辰日 奉祈禱天下泰平五穀豊饒火災除村方安全

御神樂之霊 神奈奈神奈貴友田越企 藤原輝謹言

幕末から明治初期頃（年代不明） 地車制作が成されたとみられている

明治五年（西暦一八七二年） 村社に列される

大正三年（西暦一九一四年）十月 神饌幣帛料供進社に指定される

昭和二十八年から二十九年頃（年代不明） 末社「豊栄稻荷大神社」造営

昭和二十九年（西暦一九五四年）十月二十二日 氏子中より地車（だんじり）御霊代新改納付之

昭和三十年（西暦一九五五年）五月八日 「産須那神社」を「八幡宮」と改称する

昭和四十八年（西暦一九七三年）十月吉日 御本殿極彩色塗替修理並幣殿拝殿改築完成

平成六年から平成十七年（年代不明） 末社「大地主黒龍大神社」造営

平成七年（西暦一九九五年）九月吉日 地車保存会結成

平成八年（西暦一九九六年）十月 阪神・淡路大震災により破損した本殿拝殿内壁修復 内陣改修 御神体カプセル庫作成奉納

平成十二年（西暦二〇〇〇年）十月 地車保存会並びに氏子崇敬者の協賛に依り八幡宮地車大修

理完成

# 大宮神社

おおみやじんじや

## 御祭神

天照大神  
火車大神

## 御神徳

五穀豊穰  
商売繁盛  
火難除け

## 例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 大阪市鶴見区茨田大宮一―十八―十七  
電話 〇六―六九―二一―五六七（鶴見神社）  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ

樹齢約三百年、高さ約十七m、幹回り約五mの楠の御神木があり、大阪市の保存樹に指定されている。



御神木の楠

## 由緒

創建は江戸時代初期といわれており、境内にある大楠より古いか同時であろうとされている。大神社は大正三年八月十一日に大字浜宇赤曾根の古宮神社に合祀されたが、昭和十二年に旧地に遷座した。

### 撰社の火車大神社について

火車大神は昔、天空より大車となつて此の地に降臨され、村人に祀られたという伝承がある。鎮火防災の御神徳がある。

### 地名の由来

当地は河内国茨田郡下であつた、茨田は日本書紀によると仁徳天皇時代に茨田親王の水害を防ぐために水防低堤を建造され、その堤を茨田堤といい、現在も一部残っている。明治以後、北河内郡古宮村大字下となり昭和十四年に隣村の諸堤村と合併して茨田町となる。下を大宮とし茨田大宮となる。昭和三十年に大阪市に編入され城東区茨田大宮となる。昭和四十九年に分区され鶴見区茨田大宮となり現在に至る。

# 古宮神社

ふるみやじんじや

## 御祭神

天照大御神  
息長足姫命  
誉田別命  
上筒之男命  
中筒之男命  
外二柱

## 御神徳

学業成就  
安産守護  
交通安全

## 例祭日



撫で牛



浜の大太鼓（1783年製作）

## 神社のおすすめ

平成二十四年に菅原道真の眷属である牛のブロンズ像が奉納されました。撫でること御利益を頂けるとされ、古宮神社のシンボルとなっています。  
一七八三年製作の大太鼓は「浜の大太鼓」として知名度が高い。



鎮座地 大阪市鶴見区浜四一十六一二十  
電話 〇六一六九一一〇一九〇  
HP

## 由緒

悠久の歴史をもつ古宮神社は河内国茨田郡古宮村大字浜赤曾根の地に鎮座し、赤曾根（あかそね）神社（俗称古宮八幡宮）と称していた。  
明治五年村社に列し、明治四十年神社合祀令が発令され、大正三年に赤曾根神社に村社安田産須那神社（住吉大明神）と無各社太神社の二つの神社を合祀することになり、この時点で御祭神が七柱となった。  
大正四年七月に社名を赤曾根神社から古宮神社に改称し、浜、焼野をはじめ近隣地の守護神として永く氏子たちに奉斎されてきた。  
昭和六十一年に大阪都市計画の該当地域の指定を受け、平成二年「国際花と緑の博覧会」開催にあたり、国家的事業に賛意を表し、旧社殿より南西約一五〇mの現地に移転し現在に至る。  
最初の御鎮座時期は不詳であるが狛犬に刻まれた年号には文化九年（一八二二年）とあり、二百年以前には既に存在していたものとみられる。

# 大阪市 東淀川区

▶ 大阪市にもどる



# 大隅神社

お  
お  
す  
み  
じ  
ん  
じ  
ゃ

## 御祭神

応神天皇  
別雷大神  
天児屋根命  
市杵島姫神  
伊邪那美神  
外六柱

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

十月二十三日



狛犬 それぞれ表情が異なる



高さの異なる燈籠 五対

明治の終わりの合祀により、境内には  
狛犬と燈籠がそれぞれ五対ずつありま  
す。

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市東淀川区大桐五丁目一十八番一  
電話 〇六一六三二八一六七〇四  
HP

## 由緒

応神天皇二十二年（西暦二九一年）春三月、帝難波の地にみゆきしたまい、この大隅島に離宮を営んで宮居せられ、これを大隅宮と称した。

天皇の崩御の後、里人帝の御徳をしたい、宮址に神祠を建てて、帝を奉祀したのが当社の起源であるといわれている。爾来当社はこの地の産土神として尊崇せられて来たが、一とせ淀川がはらんした際、賀茂明神の御神体が漂着して霊光を放った。里人はよろこび迎えて、これを産土神祠に合祀した。

むかしは境内が広く、老杉古松繁茂して森厳な神域をなし、社殿もまた壮麗を極めたが、天文十八年（一五四九年）江口の中島城を中心として三好宗三が同族の三好長慶と相争い、更に元龜・天正の騒乱を経て、慶長・元和の大坂陣に至るまで、幾多の戦乱を経過する間に、当社も幾度か兵火に焼かれて頽廃し、多くの貴重な古記録や社宝の類も失われた。加うるに、元禄年間には神木が濫伐せられて、社頭荒涼の観を呈するに至ったが、宝永四年（一七〇七年）宮寺曹洞宗大道寺の社僧天順これをなげき、苦心の末、村人の協力を得て漸く拝殿を再興した。降って文政十年（一八二七年）には更に本殿の補修が行われた。しかし、その頃東西五十二間、南北六十三間あった境内地は、明治初年に行われた境内地の払下げによって、四囲ごとく民有地となったが、明治四十二年七月より四十三年四月にわたり付近の村社二社と無格社三社を合祀し無格社二社を合併移転するに至って、社頭大いに面目を改めた。

昭和十五年十月、本殿・透塀・幣殿を改築すると共に、拝殿を修理して、建築上特異な様式をそなえた現在の社殿が完成した。

# 大宮

おみや  
(通称) 大宮神社

## 御祭神

安閑天皇  
天手力男命  
大貴己命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穡

## 例祭日

十月二十二日



鎮座地 大阪市東淀川区大道南三丁目二  
電話 〇六一六三二八七一一〇四  
HP [www.hyg-oomiya.j.sakura.ne.jp/](http://www.hyg-oomiya.j.sakura.ne.jp/)

令和二年八月十五日奉拜  
大宮  
摂津國西成郡天王寺庄

## 神社のおすすめ

この地は聖徳太子の伝承多く、境内社として聖徳太子社を奉斎している。因みに、現在の豊里地名は太子の別称豊聡耳皇子から名付けられた。



聖徳太子社



聖徳太子社裏手

## 由緒

当社の創立は詳らかではないが、主祭神である第二十七代安閑天皇は、しばしばこの地に行幸あそばされ、即位二年の秋、勅して牛を放牧せしめられ、土地の発展を計らめ給うた為、後にその御功績を人々が慕い祭祀奉った。

明治五年、村社に列格するに当り「大宮神社」と称した後、明治四十三年、呼称であった「おおみやさん」をそのまま社号として「大宮」と定めた。

明治四十三年十月、豊里村大字三番の村社「豊国神社」御祭神天手力男命を、大正八年六月、村社「橋多賀神社」御祭神大己貴命を夫々合祀した。

社殿は、改修前の旧淀川北岸の堤に面し、千年に余る楠の大樹六本、杉松の大樹六本、二丁余の竹藪と共に千古を語る鬱蒼とした森厳なる境内であった。徳川時代末期には、京都東本願の棟木に松一本献上したと云われている。

当時淀川を上る船は、この森を目標にして西風を帆一杯にはらませて逆航し、当宮の正面に至って帆を一旦おろし、舵を北に取り帆を逆に巻き揚げて北進し、辻堂の浜にかかって舵を東に、帆を元に戻して江口・鳥飼へと東進したもので、徳川時代三十石船の上り下りはこの森が灯台の役をなし、蔵王権現・大宮大明神・大宮大権現と親しみ崇められていた。(古地図に逆巻の地名が見られる)

明治三十三年五月、淀川改修工事施工にあたり、境内は新淀川の河川敷となった為、もとの西成郡豊里村大字天王寺庄宮浦から、現在の天王寺庄字長沢に遷座し奉ったと同時に、氏地の中央に新淀川が掘削され、本流の曲りは緩やかになり、川幅も広くなつて逆巻の難所も洪水の恐れもなくなったが、氏子の人々は南岸と北岸に住み別れ、氏地は二つに分断された。

大正十四年、大阪市編入時は、南岸となった地域も北岸と同じ東淀川区であった。

昭和十七年、南岸は旭区となったが、町名区画は旧来のまま橋寺町・豊里町・豊里三番町と変らなかつた。

後、昭和四十六年、旭区の町名区画が変更され、氏地の大半は太子橋となったが、一部地域は他の町名に変更されてしまった為、氏地の境は不鮮明となった。

しかし、平田の渡し舟に代り、昭和四十五年、近代的な豊里大橋が完成し、大阪内環状線の大動脈が当宮正面の鳥居前を走り、平成十八年には、大阪市営地下鉄今里筋線、だいたい豊里駅が開業し、この土地の発展は止まる所を知らない。

# すがはらてんまんぐう 菅原天満宮

御祭神  
菅原道真公  
宇迦御魂神

御神徳  
厄除開運  
学業成就  
除災招福

例祭日  
十月二十五日



鎮座地 大阪市東淀川区菅原二一三一二七七  
電話 〇六一六三二八一六〇七九  
HP <http://sugawaratema.ac.jp/free/jinja>



## 神社のおすすめ

大阪市無形民俗文化財「菅原天満宮の砂持ち神事」十月二十五日例祭日に菅原天満幼稚園々児により行う。

## 由緒

当宮は寛永年間この地開発の時に勧請されたが、天保時代に天災にあい、由緒古文書等焼失したため、詳細は不明であるが、旧社殿は天保十三年再建されたものを、昭和四十三年十月二十三日本殿、拝殿を新築したものである。  
境内地は古之の逆川堤防上にあり、その一段高く（石段十五段）小丘をなしているのは、天保年間以来毎年九月九日に土持ちと称し、境内に土を運んで盛る慣例があったに因と云われる。明治五年村社に列した。なお境内には樹齢四百年の楠の大樹がある。

### 大阪市無形民俗文化財「菅原天満宮の砂持神事」

天保年間時の代官築山左衛門が「いたずらに堤防を崩壊すべからず」と「堤防崩壊禁止令」を出し、毎年九月九日（栗の節句）に村人が半日の休みを取って境内に土を運び逆川の堤防を補強した。「砂持ちせんものは鼻黒や」と言って村人こぞって参加した。  
現在十月二十五日の例祭日に菅原天満幼稚園の園児により「砂持ち神事」が行われて、境内に運んだ砂を通じ園児と神様が生涯にわたり繋がり、心の安定を得ている。

### 大阪市保存樹「菅原天満宮の楠」

樹齢四百年高さ十八m幹回り四、六m。石段十五段の高い境内にそびえる楠の大樹は他を圧倒している。

### 菅公ゆかりの地「牛まわし」

言い伝えによると菅公は太宰府に流されるときこの地でお休みされ、村人が牛を引き回しておなぐさめした。現在階段下に「牛まわし」の碑がある。

# まつやまじんじや 松山神社

御祭神

菅原道真公

御神徳

例祭日

十月二十五日



鎮座地 大阪市東淀川区小松四丁目十五番三十八  
電話 〇六一六三二八一三八七五  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社はもと天満宮と称したが、明治四年今の社名に改称した。この名は字名松の山より採ったものである。創建は不詳であるが、享保元年（一七一六年）以前といわれる。社伝によると醍醐天皇の延喜元年（九〇一年）道真公が大宰権帥として筑紫へ左遷の時、住みなれた京都を出で淀川を下らせられた時、この地に立寄り、数千株の小松を見、御感の余り傍の石に腰掛け小松の詩を吟じ給うたのを縁とし、村号の小松もこの時より始まったといわれる。その後公は道明寺より大宰府に到られたがこの所縁の地に神祠を創建、公を祭神とし奉祀来つたと伝えられている。



本殿と御神木（樹齢約500年）

# かすがじんじゃ 春日神社 (通称 春日さん)

## 御祭神

建甕槌神  
経津主命  
天兒屋根命  
比咩大神

## 御神徳

家内安全  
厄除開運

## 例祭日

十月二十五日

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市東淀川区上新庄二丁目二十五  
電話 〇六一六三二八一七八二二  
HP

## 由緒

当社には往時神の大木があったのを、里人は神木と称して崇敬し、ついに御神体として祀ったのが当社の起源である。後に神木の朽腐するに及び、一社を建立して稻倉魂神を勧請して神神社と名づけて祀ったが、天正六年正月十一日奈良の春日神社分霊を勧請したため、春日神社を本社として神神社を撰社とした。  
明治五年村社に列し、同四十年六月神饌幣帛料供進社に指定された。

# く に じ ま じ ん じ ゃ 柴島神社

## 御祭神

八幡大神  
天照皇大神  
春日大神

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
商売繁盛

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 大阪市東淀川区柴島三ー七ー三十  
電話 〇六ー六三二一六六〇九  
HP



## 神社のおすすめ



明治後期に淀川の河川敷より移転してからも、地元を守り神として親しまれている古社。大きな目鼻で笑みを誘う文化生まれの狛犬など、後世に残したい貴重な狛犬たちが待っている。

## 由緒

社伝に依れば、人皇八十七代四條院の御宇、貞永元年（西暦一二三二年）仲秋の大洪水にて、三十余日大海の如くになったが、当所産土仲哀天皇の森は他の島より一丈ばかりの高地であったため、村民危難を避た九月二十七日、偶然一束の柴に小祠（社）乗り流れ来りて此の森岸に漂着した。拝し見れば八幡大神、天照皇大神、春日大神の三柱である。故に崇敬し奉り、更に御旅所を宇小金畑に設け、仲哀天皇を奉遷、右三神を産土神と斎き奉たのが、即ち当社の起源である。

当社はもと原外島字白妙に在って、樹木繁茂し明治五年村社に列したが、明治三十四年四月二十六日淀川改修工事のため、同川敷となったので、現今の宇調布に移転した。無格社仲哀天皇社をも、明治四十二年二月十六日境内に奉遷し、全年六月神饌幣帛料供進社に指定せられた。宝暦五年六月正親町三条殿御祈願に依り、六歌仙額並に灯笼一對寄附せられた。年号不詳午六月園前大納言殿より神号額並に灯笼一對寄附せられる。

本村は文録の昔より今に至る迄、淀川の流れを汲んで木布を晒す。之が柴島晒と云つて有名である。柴を久爾と訓むのは古言である。北越方言に柴籬を久爾と云う事は今なお然り。

国島であったのが、柴島神社創立により柴島となったとも言われている。柴島町の名の謂であるう。

尚現社殿は昭和四十一年に改築したものである。

# 中島惣社

なかじまそうしゃ

## 御祭神

宇賀御魂神  
受保大神  
大市比賣神  
外、本社相殿に十二柱

## 御神徳

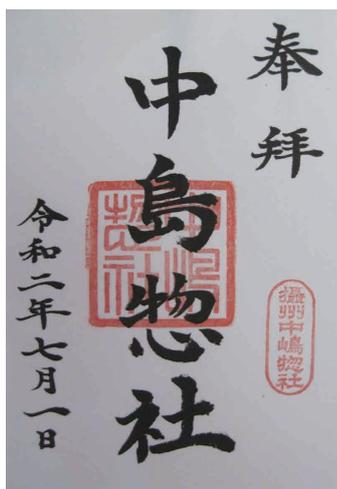
家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穡

## 例祭日

十月十八日



鎮座地 大阪市東淀川区東中島四一九一四十一  
電話 〇六一六三二一九九二九  
HP



## 神社のおすすめ

松尾芭蕉の句碑

『宮人よわが名を散らせ落葉川 はせを』  
不二庵二柳の門弟三四坊扇暑が芭蕉の百二十  
回忌にあたる文化十年に惣社近くの俗称「落  
葉川」に因んで建立したといわれる



手水舎横、松尾芭蕉の句碑

## 由緒

当社の創祀年代は不詳であるが、もと稻荷神社と称した。社の系図等は神庫に秘蔵されてあったが、慶長の末年大坂の乱に兵災に罹って悉く焼失した。

孝徳天皇が豊崎宮に奠都遊ばされた時、五穀の豊饒を当社に祈願され、田畑数多を神領として寄せられた。

豊臣氏は特に当社を崇信して社領を檢地した。豊臣秀頼は「中島総社」の四字を記した絹地一通を寄附した。

明治五年郷社に列し、同四十年六月神饌幣帛料供進社に指定された。

明治四十一年一月十四日に無格社天満宮、同年三月二十七日に無格社春日神社、同年四月十一日無格社春日神社、無格社皇大神社、同年五月二十九日村社稻荷神社、同年六月二日村社天満宮、同月十日村社八幡大神宮、村社八幡大神宮、同年八月二十二日村社稻荷神社、同四十二年十二月二十四日無格社天満宮、村社須賀神社を合祀した。  
明治二十九年六月現在の社名に改称した。

# 大阪市 北区

▶ 大阪市にもどる



# おおさかてんまんぐう 大阪天満宮

(通称 天満の天神さん)

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

商売繁盛  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

三月二十五日



天神祭船渡御・奉納花火



天神祭陸渡御

## 神社のおすすめ

「天神祭」は神田祭、祇園祭とともに日本三大祭りの一つと言われ、愛染祭、住吉祭と大阪三大祭とも。毎年百三十万人の方が参拝され、毎年、七月二十四日、七月二十五日に御齋行しております。

※他朱印あり



鎮座地 大阪市北区天神橋二丁目一八  
電話 〇六一六三三三〇〇二五  
HP <https://osakatenmangu.or.jp/>

## 由緒

当宮御鎮座の地は、大阪城地を軸として南北に走る古期洪積層の台地の北端に当っており、この地形と航行の要たる点から、大化元年（六四五）孝徳天皇は都を難波長柄豊崎宮にお遷しになり、その皇宮四境鎮護の神として鎮齋されたのが現在当宮の撰社「大將軍社」と伝えられる。斯くしてこの地には内外の船舶の往来で賑わい、又陸路の要衝ともなった。延喜元年（九〇一）二月、大宰府権師に左遷された道真公は筑紫大宰府への途次この地に大將軍社を拝し海路にて御出立になり、大宰府に在ること二年有余、延喜三年（九〇三）二月二十五日薨ぜられ、その後四十有余年、天曆七年（九五三）、大將軍の森（現在地）に村上天皇の勅願により当宮が創建されたのである。

往古より交通の要地であつた事から当宮門前町の発達を先駆として漸次股賑を加え、郷名も当宮に因み、「天満」と称するに及び、神領も十有余村の多きに達し「渡辺の浜」たる社頭に入港する諸船より「帆別銭」と称して入船料を徴収する特権を保有して渡辺の橋を維持管理し又文禄三年（一五九四）には当宮会所支配人大村由己をして一新橋を架せしめた。これが現在の「天神橋」の始めである。大阪役後には数千歩の境内に楼門、廻廊、神楽殿、宝庫、文庫、連歌所、能舞台が相連なり氏地百有余町を有し、畿内多数の神社として相当の賑わいを呈し、文神としての崇敬もいよいよ篤く文龜二年（一五〇二）菅公六百年祭には当宮連歌所にて飯尾宗祇による「撰津中嶋聖廟千百発句」が献ぜられた。宗祇の発句は「あすも見ん松に大江の夕霞」とある。正保四年（一六四七）九月、西山宗因を連歌所宗匠として伏見より迎え、戦乱の為中断されていた月例連歌が再興され、これより代々西山家が受け継ぎここに連歌の全盛を迎えるのである。蓋し宗因を当宮の招聘があればこそ井原西鶴、近松門左衛門等が輩出し、上方文壇の誕生を見たのである。日本三大祭の一つと称される「天神祭」は、社伝によれば創祀の翌年より始まっているが、現存の記録としては大永六年（一五二六）八月、御湯殿上日記に天満祭の御供前を御所へ奉献した由が記載されており、又天文十五年（一五四四）、本願寺連枝の順興寺実従が「風流の金蘭は前代未聞の華奢なり」と驚いており、当時すでに規模内容共相当充実していた様かうかがわれる。文化、文政の頃には在阪の各藩倉屋敷、大商人の助力もあつて天神祭を中心に社運は隆盛を極めた。

明治三十五年（一九〇二）、一千年祭を齋行この頃全国神社に先駆けて教学部が組織され、御祭神の頌徳に積極的な活動が展開された。昭和二十年（一九四五）六月十六日午前二時焼夷弾相当数落下するも、いづれも不発、又は出火すれどほとんど被害なく、全建物罹災を免れた。昭和二十八年（一九五三）、昭和十三年戦争のため中断されていた天神祭は水陸渡御を復活、年々盛儀に向っている。

# 堀川神社

ほりかわじんじや  
(通称 堀川戎神社)

## 御祭神

蛭兒大神  
少彦名命  
天太玉命

## 御神徳

商売繁盛  
除災招福  
福徳圓滿

## 例祭日

十一月二十日



鎮座地 大阪市北区西天満五丁目一七  
電話 〇六一六三一一八六二六  
HP <http://www.horikawa-ehisu.or.jp/>



令和 年 月 日

## 神社のおすすめ

【福興戎像】

平成七年一月十七日の「阪神淡路大震災」で破断した表門石造鳥居（昭和二年奉納）の柱に彫刻された戎像。平成十年の十日戎に奉納され、「幸いを与える」の「福」と、「生ずる・起さる・盛んになる」の「興」を付けた「福興戎像（ふくこう・ふくおこしえびす）」と命名される。被災鳥居から蘇った由来をもって、除災招福の象徴として広く崇敬者の心の支えとなっている。像を撫でて御利益を授かるうとする参拝者が引きも切らない。



福興戎像



榎木神社 内部

## 由緒

御創祀は詳かでないが社記に依れば、欽明天皇の御代（約一四〇〇年前）止美連吉雄が夢に蛭兒大神の御神託を蒙り堀江（当時の淀川川口付近）に一箇の玉を得て、此の玉を神魂代として蛭兒大神を利島に祀り、瓊見社又は止美社と号け、孝徳天皇の御代皇后病氣平癒を祈請して淡島明神（少彦名命）の神像を彫刻し白雉二年当社に納め祭る（約一三〇〇年前・神主吉延の時）。又文武天皇の御代大宝三年（約一二五〇年前）神主吉明が神託に依り天太玉命を相殿に祀る。

平治の頃（約八〇〇年前）戦乱を避け丹波国山家に御動座したが、文和年間（約六〇〇年前）藤原吉次が浪華へ遷し、現在地に再興した（撰陽奇観にも所載）古社である。

以後堀川戎社「蛭子社・堀川恵美須社・堀川戎社」と称し一般の信仰深く十日戎には諸人群参したが（神社古文書・撰陽群談・撰津名所図会・女訓浪華名所等に所載）度々の炎上（近くは文政及天保にも）にもかかわらず盛大となり明治四十年十一月八日数社を合併して堀川神社と称し村社に列した。

当社社地は明治以前は大阪三郷の内天満郷に属し、明治以後大阪市制と共に北区に属し、大阪市街の発展と共に益々十日戎は盛況を加えた。（大阪府全志等）

昭和二十年戦災の為め社殿を始め全建物が焼失したが順次復興し、昭和三十八年本殿が再建した。本殿流造・内拝殿切妻造・外拝殿入母屋妻入正面緋向拝・軒唐破風造鉄筋コンクリート造内部総檜造・屋根銅板葺約五十三坪の外、榎木神社（地車型重層唐破風造彩色総檜造）を始め末社・参集殿約二百坪の建物が境内に配列し一月十日戎当日は数十万の参詣者が踵を接し、境内立錫の余地なき盛況と境外参詣道には数百の露店が軒を連ね、その神賑は関西では特殊なものである。

その神徳は太古水産物生成の霊徳から伸展し商売繁昌産業発展の守護神として、大阪人から深い信仰を捧げられ又大衆にも「福の神」と親しまれその御神徳の強大さが窺われる。

又境内の榎木神社は地車稻荷神社又はだんじり吉兵衛とも称され、御鎮祭は詳かでないが天保八年迄は堀留めであった約一町北方の榎木の木霊を祭る小祠であったが社殿社務所を有する神社となり、だんじり吉兵衛の称名にて諸人の信仰が厚く、特殊の信仰も多く「だんじり囃子」が聞こえるといわれている。明治四十年五月当社境内に遷し、昭和二十年戦災同三十三年再建奉斎されている。

# つゆてんじんしゃ 露天神社

(通称 お初天神)

## 御祭神

少彦名大神  
大己貴大神  
天照皇大神  
豊受姫大神  
菅原道真公

## 御神徳

五穀豊穰  
商売繁盛  
諸願成就

## 例祭日

七月二十日



鎮座地 大阪市北区曾根崎二丁目一四  
電話 〇六一六三二一一〇八九五  
HP <http://www.tuyutenjin.com/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

「曾根崎心中 お初 徳兵衛 ゆかりの地」と刻まれた石碑が設けられており、近年「恋人の聖地」との認定も受け、縁成就のご利益でも崇敬されています。



幸結び御守 各色 600円



お初、徳兵衛慰霊像

## 由緒

創建は一千年を遡り、難波の海に浮かぶ曾根ノ洲に「住吉須牟地曾根ノ神」(スミヨシヌムチソネノカミ)を祀り鎮座されたと伝えられています。

現在の曾根崎の地名はこのご神名に由来するとされています。

そもそも往古大阪は、多くの島々が湾中に点在していた地形であり、福島・都島・網島・御幣島・歌島・姫島・百島等々現在の地名にもその名残を留めています。

これら島々を古くは「難波ノ八十島」と呼びました。

当社の詳しい創建年代は不明ですが、古代祭祀として重要な位置を占めていた「難波八十島祭」(\*)旧跡の一社に数えられ、この祭祀が六〜七世紀頃まで遡れることから、当社起源もこの頃かと推察されます。

承徳元年(一〇九七年)に描かれた『浪華の古図』にはその所在が記されています。(\*)「難波八十島祭」 古代難波において天皇ご即位の翌年に執り行われた皇位継承祭祀の一つで、六世紀の欽明天皇の頃には形式が整っていたとされています。)

通称「お初天神」について

曾根崎地域の鎮守として崇敬されるなか、元禄十六年(一七〇三年)当社境内地で心中事件が起きました。これを近松門左衛門が人形浄瑠璃『曾根崎心中』として書き上げ、公演は空前の大成功を納めます。

現在に至るまで通称される「お初天神」は、その主人公の名前によるものです。

境内社について

時移り、明治の廃藩置県に伴う諸藩蔵屋敷(藩邸)の撤収に際し、四国の高松・丸亀両藩蔵屋敷に祀られていた「金刀比羅宮」、また九州・久留米藩邸内「水天宮」をお迎えして、当社境内社としてご奉斎しています。

また、明治四十二年の「北の大火」の後、近隣地域にそれぞれ祀られていた四社の稲荷社を合祀の上、開運稲荷社としてご奉斎しています。

近現代

明治七年(一八九四年)「曾根崎村」の一角に初代大阪駅、その後の阪神電鉄・阪急電鉄梅田駅、また地下鉄各線の梅田・西梅田・東梅田・北新地駅などが相次いで開業し、農村の鎮守社であった当社も、氏子地域である梅田・曾根崎地域の変遷と共に発展を続けています。

# とよさきじんじや 豊崎神社

(通称 豊崎宮)

## 御祭神

孝徳天皇  
速素盞鳴大神  
應神天皇

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 大阪市北区豊崎六―六―四  
電話 〇六―六三七一―五二六四  
H P



## 由緒

当宮は孝徳天皇（孝徳天皇御諱は軽、天萬豊日天皇）を奉祀する大化改新の史蹟である。我が国史上の一大変革であった、大化改新の聖業は天皇の御理想を基とせられたのである。然し乍ら時勢は非常に困難にして容易に改新の断行を行う機会を得なかつた。

この内外情勢の止み難き要請に基き、この時遂に皇極天皇四年六月十一日中大兄皇子、中臣鎌足等は蘇我入鹿を大極殿に誅し、改新への大道を茲に切り開かれたのである。

この月十四日御即位遊ばし、中大兄皇子を皇太子にたてられ、我が国始めて左大臣（阿倍内麻呂）及び右大臣（蘇我倉山田石川麻呂）内大臣大職冠（中臣鎌足）を置き、僧旻、高向玄理を国博士として政治の顧問とせられ、即位後五日目に（同月十九日）始めて元を立てて大化の年号を制定し、天皇は群君を大槻樹の下に召し天神地祇に盟つて、改新政治の本義を明らかにし給うたのである。又、朝鮮の使にたいしては「明神御宇日本天皇」と号を示した。「日本」の国号が公定されたのは、この時である。

大化元年十二月の条に「天皇遷都難波長柄豊碕。老人等相謂之日、自春至夏鼠向難波遷都之兆也」と見えて、宮号は難波長柄豊碕宮と称せられた。

大化二年一月元旦豊碕宮に於て賀正の礼畢るや直ちに大化改新の詔を仰せ出され給うたのである。

白雉二年十二月晦日の条に「於是天皇従於大郡遷居新居。号曰難波長柄豊碕宮」とある。豊碕宮は長安の制を摸して茲に恒久的な大都城を营造されたのである。

その他百宮を設け位階を制定し、又、中国、朝鮮との外交をも、平和維持を念とし給う天皇の御精神より自主的の外交方針が天皇によつて堅持され、白雉四年五月十二日天皇は遣唐使二船で吉士長丹を大使とし吉士駒を副使として、二百四十二人が渡唐し、その他しばしば豊碕より遣唐使を派遣されているのである。

白雉五年十月十日（新暦十一月二十七日）豊碕宮の正寝に於て御宝算五十九才にして崩じ給い、同年十二月大阪磯長陵に葬り奉つた。

大化元年より白雉五年まで十年間が大化改新であり、天皇の御代が国史上如何に重大な時期であつたかが推測される。即位以来御英邁なる天皇の御努力によつて大業が着々として進展し後の大宝令の制度によつて結実したのである。

其の後、一條天皇正歴年中、藤田重治豊碕宮の故宮の煙滅を恐れ林中に祠を作り崇敬追拝し奉つたのが豊崎神社の創祀である。

# つな しきてんじんしゃ 綱敷天神社

(通称 喜多埜天神)

## 御祭神

嵯峨天皇  
菅原道真

## 御神徳

平安豊饒  
学業成就  
諸願成就

## 例祭日

七月十五日



鎮座地  
御本社 大阪市北区神山町九十一番五  
御旅社 大阪市北区茶屋町十二番八  
御本社 大阪市北区角田町二番八  
御旅社 大阪市北区角田町二番八  
電話 06-6361-1158  
FAX 06-6361-1158  
HP <http://tunashi.ki.com/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

当宮は梅田キタの氏神さまとして知られ、都会の喧騒の中、平安の御代より梅田の古風を今に伝えていきます。神山町に御本社、茶屋町に御旅社、角田町に末社の歯神社が鎮座しています。



歯神社



御旅社

## 由緒

当宮は今から一千二百年ほど昔の弘仁十三年(八二二)に、第五十二代天皇であらせられ、平安文化の祖神とも称えられる嵯峨天皇が、当地「兎我野(現在の梅田)」に行幸あそばし、神山の地に頓宮を構え一宿にられた事に由来する神社で、嵯峨天皇崩御の後に、河原院左大臣こと源融公が、御追悼の為、承和十年(八四三)に、御父、嵯峨天皇をお祀りする社殿を、頓宮のあった神山の地に創建。天皇の御名から「神野太神宮」と号し、当宮の御本社が創建されました。

後に、学問の神様として慕われる「天神さま」こと菅原道真公が、昌泰四年(九〇一)に無実の罪により京都より大宰府までの左遷の際に、当地で今を盛りと咲いていた紅梅に目を留められ、仁徳天皇の御代の例と思し召されて、船の艫綱(陸と船をつなぐ綱)を円く敷き寄せ、即席の円座と成し、この上に坐られて紅梅を愛でられた由縁より、「綱敷」の社号が興りました。

この時に道真公は、従臣であった白太夫こと度会春彦の一族に、これ以上の苦難を共にするのは忍びないとして、当地に留まるよう仰せられ、一族は主君の仰せに従い当地に留まる事とし、道真公より別れに際し御影、御綱、また白江の姓を賜り、道真公は大宰府へと旅立たれました。

後に一族は道真公が愛でられた紅梅の樹下に、旅立たれた西向きに小祠を構え、これを「梅塚天満宮」と号し、この社に代々奉仕し、道真公のご帰還を待ち続ける事としました。また道真公の愛でられた紅梅は、後に梅田の梅の字の由来ともなったといわれています。

一條天皇の正暦四年に至って、道真公に正一位太政大臣が追贈され、この時に勅旨を以て、神野太神宮を御本社、梅塚天満宮を御旅社として合わせ祀り、当地の旧称、喜多埜の字を採って喜多埜天神と呼ばれました。

南北朝時代に兵乱により御影と御綱を除き社頭神宝悉く焼失しましたが、その約八十年後に当地に一夜にして七本の松が生える奇瑞があり、京都の北野天満宮より改めて御神霊を勧請し社殿を再建。この頃に当地を北野村と呼ぶようになり、この北野村が「キタ」の語源ともなったといわれています。

中近世には天神信仰の霊地として厚く信仰され、明治になって鉄道が当地に開通すると、一気に西日本最大の都市となりました。昭和には戦災にも遭いましたが、御影と御綱は幸にも難を逃れ、大神さまは今も昔も変わる事なく梅田キタの氏神さまとして街を行き交う人々を見守られておられます。

# ながらはちまんぐう 長柄八幡宮

## 御祭神

八幡大神  
大己貴大神  
少彦名大神  
住吉大神

## 御神徳

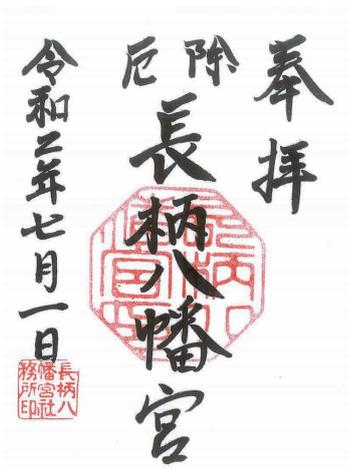
家内安全  
病氣平癒  
厄除開運

## 例祭日

十月十八日



鎮座地 大阪市北区長柄中三三三ー一  
電話 〇六一六三五一一六九〇八  
HP <http://nagarahachimangu.web.fc2.com/>



## 神社のおすすめ

摂州長柄八幡宮だんぢりばやし、獅子舞、曳き神輿、担ぎ神輿等は夏祭に氏地巡行。

## 由緒

本社は永仁四年二月、人皇九十二代伏見院御宇、山城国鳩峯鎮座、男山八幡宮より勸請創祀す。氏地一円は奉祀日を弓の日と号し、又春祭と定め、休日とし、永くこの風を伝う。

御神体は今を距る七百二十余年前、即ち八幡神崇敬の最も盛んなる、鎌倉時代の特徴を表現せる、優秀にして、国宝的価値ありと謂わる、僧形八幡神像を安置す。

往時社頭に近接せし道路あり。この道牛馬車通行するとき、忽ち神威にふれ、前進するを得ず、引き返して他の道へ迂回したりしと謂う。

口碑、本社と表裏一体の関係ある社に、相殿出雲神社（旧薬師堂）あり。創建年代不詳と雖も、往古より左側に南面して存し、地方民は雷除に靈驗灼かなりと、信仰せしと古老申し伝う。これ鎮護国家を標榜して、諸国特殊著名神社に建てられし、神仏習合に依る神宮寺なりしこと明らかなり。本社及相殿出雲神社（旧薬師堂）の存在を証するものに、享保三年、同七年、元文三年、延享二年、同四年、慶応元年、何れも検地図書に記載せられたり。

御鎮座地長柄の地方は、往昔中津川、淀川の分岐点にありて、交通の要衝となり、早くより韓半島の文化を摂取、此の地に居住するもの多く、中世にこの子孫と覚しき者の中には、豪華なる家軒を連ね、その當時を偲ぶに足る長柄長者の名は、多くの人の知るところなり。

社地は、慶長十五年片桐市正検地に依り、境内地東西二十六間、南北三十三間、往古より無年貢の故を以て除地と定め、又寛永五年代官豊島十右衛門検地には、三反十四歩、同除地、制札建有り」と記され、元禄十四年己三月には、松林長さ四十間、横二十二間五尺、又天明八年も同上の如く記されている。

社殿の建て替えを記録するものには、明応九年三月十八日、文禄三年御陽成院御宇、宝永五年八月十二日、大正六年五月二十五日、昭和四十年十月十八日の五ヶ度に及べり。明治五年村社に列し、同四十二年六月大阪府告示第二〇三号に依り、幣帛供進指定神社とせらる。

大正三年三月三十一日北長柄村末広住吉神社合併。  
平成二十七年四月一日大阪市認可保育園オープン。

# とみしまじんじゃ 富島神社

## 御祭神

速素盞鳴尊  
天照皇大神  
奇稻田姫命  
住吉大神  
八幡大神  
外二柱

## 御神徳

産業守護  
悪疫祓除  
諸願成就

## 例祭日

十月十四日



鎮座地 大阪市北区中津二一五一〇  
電話 〇六一六三七二一二五七四  
HP



## 神社のおすすめ

碑陽には明治天皇御製「わがころおよばぬ国の・・・」の陰には明治十八年の大洪水によりて淀川改修の議起こり・・・と刻まれている。新淀川の開削に伴う兩岸に分断された十三の人々の記念碑である。



十三思昔會碑

## 由緒

当社の由緒は不詳であるが、社伝によると足利時代既に存在した。此の地往古摂津国西成郡南中島村光立寺と云い、祇園牛頭天王社を光立寺下三番、南浜村の氏神鎮守様と敬仰し、国土安穩、五穀豊饒氏子繁栄を祈願し、初期六名の宮座が年番交替制で朝夕懈怠なく奉仕して来たが、明暦年間より馬場氏を定番とした。

明治二年社名を利島神社と改称した。神仏習合禁令による。利島とは浪速八十島の利島を引用した。これは神祇伯白川資訓王の撰名である。

明治四十三年一月四社合併により、再び富島神社と改称した。往昔此の地富島の荘と呼べるに因む。

明治五年村社に列格。

検地の事、文禄三年九月片桐市正が、延宝五年十二月青山大膳亮が、それぞれ検地帳に、牛頭天王社除地一反二十歩とある。

寛保三年馬場先に石の鳥居を建立し、氏子衆挙て神幣を捧げ持つて、行きつ戻りつ、祝い踊り奉祝した。明治初期に於ける境内の状態は、社地東西二十間南北十九間、樹木老繁り、中央西寄りに高さ四尺周囲三十八間の石垣をめぐらし、土壇を築き桁行二間梁行三間の本殿と、桁行三間半梁行二間の拝殿が東向きに建ち、北脇に宇賀御魂社、東の入口に、朱塗木造の鳥居、其の南側に神主邸がある。御社より東へ距る、百間幅二間を馬場先と呼び、東端に石鳥居、松樹数本繁茂していた。此の馬場先は先年除去。

明治十八年枚方の堤防決壊による、大洪水で神主邸浸水し、古記録等悉く流失した。往時度々水難に遭遇したが、幸い御社殿は被害なし。

明治三十三年五月字城より、島之宮を、境内社として、奉遷す。

明治四十二年六月七日、天満宮、春日社、鷺島神社、八阪神社を合祀。

明治四十四年七月被合併神社の建物を移築社務所と神具庫を建設。

大正十一年十月境内社を合祀美津神社を創立する。

昭和二十年六月一日朝、米軍の空襲で美津神社と神器庫を残し、建物悉く焼失。御霊代は別所に奉安して御安泰。

昭和三十年七月戦災復興、社殿新築竣工、夏祭を兼盛大なる祝祭を行う。

昭和三十八年九月、十三に御旅所移転。

昭和三十九年二月二十五日八阪神社を分離塚本神社設立により抹消する。

同四十一年七月 社務所新築により戦災復興事業完了。夏祭りに合わせ盛大に祝祭を行う。

同五十三年十月二十一日 新北野二丁目四五番地に鷺島神社（仮称成小路神社）を移転改築し御神霊を奉遷す。

同五十八年七月十二日 本殿改築。

同五十九年七月十二日 稻荷社、境内東側より北西角に移転改築。



やさかじんじや  
**八阪神社**  
(通称 大仁八阪神社)

御祭神

素戔鳴尊  
天御中主神  
天照皇大神  
熊野大神

御神徳

厄除祈願  
病氣平癒祈願  
家内安全

例祭日

七月十八日

鎮座地 大阪市北区大淀中三丁目一三  
電話 〇六一六四五八一三五五〇

H  
P



由緒

当社の由緒は記録としては残っておらず、口伝に依れば室町時代の末期当社地に隣接する荒廃せし土地を開墾するにあたり、大半土中に埋没せる神祠を発掘、その中に靈石有りて、隣地に比べ稍々高地なるこの地に移し祀つたと伝えられている。  
延寶五年青山大膳亮検地の際、境内除地となり、時を経て明治六年社格を村社と定められ、明治四十二年神饌幣帛料供進社に指定された。

# 素盞烏尊神社

すさのおのみことじんじや

(通称 浦江八坂神社)

## 御祭神

素盞烏尊

## 御神徳

厄除開運  
学業成就  
良縁祈願

## 例祭日

十月十八日



社 王仁神社  
御祭神 王仁博士

鎮座地 大阪市北区大淀南三丁目二五  
電話 〇六一六四五一一五八一〇  
HP <https://www.yasakasan.com>



## 神社のおすすめ

王仁博士は我が国に論語や千字文を伝えたとされています。  
氏地に王仁の墓と伝えられる石棺があり、その傍にあつた社殿を明治四十五年七月二十五日に当神社境内に遷されたのが王仁神社です。

## 由緒

当神社の由来等は、幕末の失火によって悉く焼失し、詳ではありませんが、浦江村（現鷺洲及大淀の一部）の鎮守として、足利時代には既に存在しました。  
嘗て社畔に松の大木があつたのを、明治初年、鉄道敷設の際に「視界の妨げとなる」という廉で伐採されましたが当時樹齢千年を数えることが出来ました。平安時代の古地図に浦江村が存することから思い合せ、この地に、私達の祖先が住み初めた頃から、いつとは知れず、自然に創立され、今日に至つたものと思われまふ。そして近代迄、九戸の宮座の人達によって守られて来ました。  
以前は、牛頭天王社とも、祇園社とも称されましたが、明治五年、素盞烏尊神社と改称し村社に列せられました。

### 御社殿

明治九年建設され、大正十年大改築を行つて威容を誇つておりました御社殿は、惜しくも戦災により焼失し、昭和五十一年八坂神社社殿復興奉賛会によって、氏子諸氏より、六千万円の浄財が集められ、建設に着手、五十二年四月十六日、竣工、遷座祭を行いました。鉄筋コンクリート権現造りであります。

### 沿革

この辺は、大古より形成された難波江の多くの島々の中の一つである田蓑島であつたろうと考証されています。鎌倉時代の末まで行われていた八十島祭りはこの島でも行われました。新後撰和歌集に津守経國が、後鳥羽院の八十島祭りにはべりけると詞がきして  
「あめの下のとけかるへし難波潟たみのゝ島に御祝しつれば」と歌っています。

淀川の河尻で、塩淡の水が合し、潔斎修祓の儀に応しく源氏物語の漣標の巻にも、「たみのゝ志まにみそきつつかまつる、日くれがたになりゆく、夕汐みちきて入江の田鶴も声を惜まぬほど蓑なるをりからなればにや人目もつゝまず相みまほしくさへおほさる。つゆけさのむかしに似たる旅衣田哀の島の名にはかくれず」と述べられています。

又何れの時代の御杖代であられたかは不明ですが、伊勢の奇宮女御の御祓の地でありました。内親王が、以豆岐乃美夜と定まりました「宮城外、便宜の所を奇宮に結構し御祓ありて其の奇宮に入らせ給ひ、翌年七月迄御座ありて清浄の他に野宮を定め、河原の御祓ありて伊勢に移り奇宮と称し奉る」という事であり古書に「石造の宮の屋根なるもの見ゆ、これ祓所の地の古蹟なるか」と記されていますし、古地図に示された野宮の位置と、野々宮社の旧地が概ね一致し、撰津誌や大日本史に御祓の地と断定しています。

中世に於きましては陸上の交通の要地であり、楠正行の軍勢の通過した記録があります。  
近世になり、宇西里中小字城の内に三好長慶の城と伝えられる城があり、享祿四年に細川常植が浦江城に陣して細川晴元と戦い、又元龜元年に織田信長の石山本願寺攻めの際、先陣は海老江堤に陣をしき、將軍足利義昭が浦江城に入城して、野田・福島城のこともつた三好方と戦つたことが記録されています。

近代になりましては、なにわの街の近郊の農村であり村人達だけでなく、町の商家の人達が、月詣りや寒行に、又花の季節にと折にふれて参拝されました。  
少女子がすその浦江のかきつばた  
いろのふかくも見えにけるかな 好述

燕子花 語るも旅のひとつ哉 芭蕉

又阪神電車が始めて開通した時に沿線の名所として

「浦江のなたね 野田の藤 新淀川の秋の月」と歌われましたように、菜の花の名所でもありました。

菜の花の中へきこむゆききかな 梅居

あまつかむのやしろ  
**天神社**  
(通称 淀川天神社)

御祭神 天穂日命

御神徳 合格祈願

例祭日 十月二十五日



鎮座地 大阪市北区国分寺一丁目一  
電話 〇六一六三三三六五三七  
HP



## 由緒

御祭神 天穂日命 (アメノホヒノミコト)

「天穂日命」は、素盞鳴尊が天照大神に、身の潔白(逆心のない事)を示さんが爲誓約された時、天照大神との間に生り坐せる男神五神・女神三神の中の二番目の男神で、天孫降臨に先立ち、国譲り説得の使命を受けて、出雲の国に遣わされたが、返言を申されず、天つ神達から裏切り者と疑われていたが、其の後大国主・事代主命の国土を返上されるに及んで、その功を認められ、疑いも晴れて永く大国主命の祭祀をつかさどり給うた神であります。

末孫には、野見宿禰(相撲の神・埴輪の祖)・菅原道真(天満天神)・出雲大社の社家千家等の各公がある。子孫繁栄・冤罪(無実の罪)消除・円満和合の御神徳があります。特に安産の効験と、境内石狛犬(文化八年村上吉右衛門恭重氏寄進)の足を紐でくくり祈願すると、家出人の消息が判明すると言う信仰があります。

由緒

当神社は、聖武天皇の御代、天平十年(西暦七三八年)行基菩薩が、此の地方に巡錫(説教に廻ること)に来られた際、此の地方開拓の守護神として、「天穂日命」を勧請し奉り、民衆の幸福を祈念せられて以来、祭祀を絶やすことなく今日に至っている。

資料は散逸して不詳であるが、西隣の国分寺の鎮守社として創建されたとも言われ、明治初年当時の国分寺村村長安東萬次郎氏よりの聞伝えによると、江戸時代中期より、神佛混淆思想の影響で、東隣の正徳寺の同域境内にあつて管理されていたが、明治六年神佛分離令によって分離独立し、当初社名を天神宮と称したが、明治五年社格を「村社」に列せられてより、天神社に改める。(昭和三十五年より通称名を淀川天神社としている)明治四十一年神饌幣帛料供進社に指定される。

大東亜戦争中昭和二十年六月七日・十五日の二回に亘り、米軍機の空襲を受けたが本殿・幣殿・拝殿は、戦災を免がれ、鳥居・玉垣・社務所・倉庫は、戦后復興したものである。(稻荷社は本社に合祀している。)

「御神体」は、創建当時は小祠であったので、鏡又は石玉類であったと思われるが、分離独立した時に寺側より返納された御神像(木造彩色坐像)を現在御神体として奉齋申し上げております。(年代不詳)。

現在の神殿(瓦葺流造)は、明治四十三年に中島村(東淀川区)の神社神殿を買受け建替えた物で享保年間の社殿と推される。古い建造物では、裏門の鳥居(寛保三年・明治末期迄表門になっていた。)明和・寛政年間の石燈籠・宝暦五年の木造彩色狛犬・文化八年の石狛犬等がある。

# みなみながらはちまんぐう 南長柄八幡宮

御祭神

應神天皇

御神徳

厄除開運  
水難除け

例祭日

七月十日



鎮座地 大阪市北区長柄中一丁目二五  
電話 〇六一六三七一一五二六四  
HP



## 由緒

当宮は應神天皇を奉斎し、承徳二年の難波八十島の古地図に記された宮で、当時は広大な境内に鎮守されてあった。

御神体は金像で尤一寸五分と古記録にある様に御立像であらせられる。古老の申伝には江州八幡社の本社にして靈驗灼なる御神体は、水中より流れつかれたとも伝えられ、水中八幡宮と称せられた。

広大な境内には頗る幽邃にして棕・榎・松・楠等の大樹が鬱蒼と繁茂する中、樹令六〇〇年と云はれた銀杏の大樹が人測四抱もあり、天に沖し夏日行く人の競つて憩うところであった、と伝えられる。

「浪花の梅所載」延享元年五月中旬当八幡宮の神木に鶴の子を育てたる様を見て読人しらずの歌あり、「鶴もすをかけすハニウも見られまし今もなからにつつく人はし」当時多くの人々に鶴の八幡宮と称し、したしました。この宮は明治三十九年の発令により、四十一年七月四日豊崎宮に合祀され、昭和二十三年大東亜戦終結と共に当地に還御鎮座されたのである。

当初のものとしては、本殿のみ其の昔の影をのこし、建物は徳川末期に改修されたものと見られる。

# 大阪市 福島区

▶ 大阪市にもどる



# 恵美須神社

えびすじんじや  
(通称 野田のえびすさん)

## 御祭神

事代主大神  
天照皇大神  
八幡大神

## 御神徳

商売繁盛  
家内安全  
開運招福

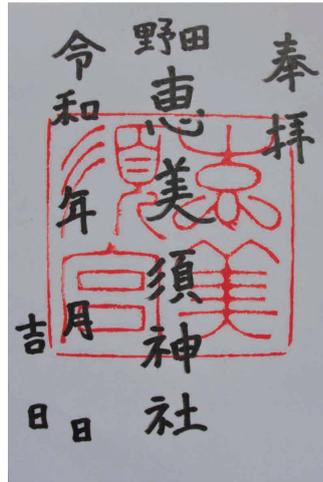
## 例祭日

十月十日



## 神社のおすすめ

- 夏祭奉納神事  
①「太鼓」  
②「地車」  
③「鯛鉾」



鎮座地 大阪市福島区玉川四一―一  
電話 〇六一六四四一―七〇八四  
HP <http://www.noda-ebisu.com/>

## 由緒

古く大阪湾は今よりずっと内陸にあり、この辺りも難波八十島（なにわそじま）と言われ、島が点在していたようです。だんだんと川の堆積作用により陸地化が進み開発され、平安時代末頃には土地が広くなり、この地に住む人々が漁業を営み、海の向こうから幸をもたらす「えびす様」をお祀りしたのが、神社の起源と考えられます。

当社は、野田又は西野田と呼ばれていた、玉川、野田、吉野、大開、新家の地域の氏神様です。創建は不詳ですが、神社に保存されている御影石の建石の表面に「ゑみすのみや」と刻まれ、側面に「永久三乙未年三月」とあります。永久三年は平安時代の末期で、西暦一一一五年ですので、九百有余年前になります。この建石そのものは後世のもので、神社にとって大切な年を伝えるために記されたものと考えられ、神社の創建或はこの神社にとって何か特別な出来事があった年月と推察されます。

「えびす様」は古くから漁業の豊漁をもたらす神様であり、漁業を営む人々の信仰から家や地域の神様として、更に商売の神様として信仰を集めてきました。

神社創建以降この地も更に開け、戦国時代には、四国の豪族三好氏の築城した野田城の一部となり、守護神として、武士の信仰となっていたようです。

江戸時代には、大阪は商業の町として栄え、えびす様は福の神として商人たちの信仰を更に集めるようになり、今日に至っています。

主祭神の「えびす様」は、明治の国家管理の神体制の中、名称の変更により、福の神の中で「事代主大神」と御祭神を登録し、現在に至ります。しかし、今も「えびす様」として信仰されています。

商売繁盛の神様として信仰され、お正月の九・十・十一日に行われる「宝之市大祭・十日えびす」には社頭は、遠近より大勢の参拝者が「福」を求めてお参りされ、大変賑わいます。「福娘」から縁起物を授かる様子などが知られています。

夏祭には、古くは神幸祭が行われ、行列を伴って新家地区の御旅所に神輿の渡御を行っていましたが、昭和十二年を最後に中止となっています。今は七月十九・二十日の夏祭に「太鼓」「地車」「鯛鉾」が氏子地域を巡行し、二十日は御旅所を巡り、御旅所祭を行った後、本社境内にて奉納行事が賑やかに執り行われます。

# ふくしまてんまんぐう 福島天満宮

(通称 上の天神)

## 御祭神

菅原道真公  
大国主命  
事代主命  
少彦名命

## 御神徳

病氣平癒  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月二十一日



鎮座地 大阪市福島区福島二丁八一  
電話 〇六一六四五一一五九〇七  
HP <http://www.temmangu.com/>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ

〇『菅公聖跡二十五拝』

十二番目

〇『関東に御分霊』

関東地方三浦半島の突端に、徳川四代将軍家綱公の時、奉斎されたのが  
久里浜天神。

〇『戯曲 敵討天下茶屋聚』

主人公公林伊織を祀っている。

## 由緒

御祭神の菅原道真公の家筋は、代々学問を以て仕えたが、道真公に至りその秀でたる才能は、朝廷の厚い信任を得て政界にも重用せられ、醍醐天皇の昌泰二年、皇室の外戚として権勢並びなき藤原氏一門の間に伍して、遂に右大臣にまで任ぜられた。果たせるかな、藤原氏一門の激しい反目のもとに、左大臣藤原時平の讒言により九州の太宰府の権帥(副長官)に左遷せられた。時に御年五十七才。

醍醐天皇の延喜元年二月一日、当時の都一京都を出発せられた道真公は、途中、河内道明寺の御嬢一覚寿尼のものと名残つきぬ別れの一夜を惜しまれたと、淀川より船路西のかたをめざされることになる。

当時の淀川の本流一今の堂島川のほとりなる福島の地は、大阪港より海路を目指す船旅の風待ちの所。九州下向の失意の旅路の道真公一行を丁寧に迎えた土地の徳治郎なる者の心からのもてなしに、いたく喜ばれた公は、謝するに術もなしと、折りふし里人の織り成した布に親らの御姿を描き与えられた。現在も此の御自画像が当社の御神体とされている。又、土地の名を問わせられた処、『鹿帆島』又は『葭原島』なる由を答えし処、『鹿帆』は、『鯨鬼』に、『葭』は『悪し』に音が通じ何れも良からず、又徳治郎の徳の字の縁に因りて『福島』と改むべく、徳治郎には『福元』の姓を名告らしめられたこと。『福元』の一族は後、当社の一老・宮座となり、代々伝えて明治維新に至り、今猶存続すると言ふ。

時に、ウメの一木有るを御覧になった公は、『行く水の中の小島の梅さかば、さぞ川浪も 香に匂ほらむ』と詠まれ、再び都に帰る事も測り難い故に、此の島に憩ひし遺蹟を作ると、梅の枝に松の枝を添えて一緒に刺し植えられた処、不思議にも一本となって根を下ろし、元禄十余年の風害に跡なくなる迄、永く葉を茂らせたと言ふ。

翌朝、別れを惜しむ里人等は、公の船に従って針間(播磨)の国までお供したが、太宰府に赴かれた公が二年後、延喜三年二月二十五日逝去せられた訃報を風の便りに耳にし、その徳を慕う余り、かの梅松二枝の根を下せし所に、延喜七年十一月十五日、小祠を設けて公を祀った。(即ち、当神社の創始である。)

翌延喜八年一月十三日、相殿神として大国主命・事代主命を合わせて祀り、同年九月二十一日に盛大なる神事を行った事が、以後毎年の秋祭の始めとされる。(尚、九月二十一日は、後、明治に至り陽暦となつて十月二十一日に改まり、年間最重要の例大祭として戦後の今日も、特に神社本庁・大阪府神社庁より献幣使の参向を得て祭儀が厳粛に執り行われる。)(従つて当社の創始は、共に村上天皇の天歷年間の創始とされる京都北野天満宮(天曆元年)及び大阪天満天神(天曆三年)より、四十余年更に以前に遡る事になる。)

一条天皇の正暦四年十月十九日、勅使散位為理卿筑紫に赴かれる時、風待ちのいとまに祭神を菅公と聞かれて御酒を神前に献じ御拝せられし処、神霊感応して御尊顔自ずから紅を顔し給うたと伝えられ、此の故に『神酒天神』とも称し崇められた。

源平時代の寿永年間、平氏追討の源義経公此の島に暫く陣を張りし時、戦勝の祈願を込めたことが、有名な逆櫓論議の処処として附近に残る『逆櫓之松跡』と共に今日に伝えられている。

江戸時代末期の文政十三年十一月十日、不思議の霊夢にまかせ、一老・宮座に年番守護せられ来た公の御自画像の御神影は、その昔の如く御本殿に鎮納せられて今日に至っている。

宝暦八年の御改築を経て、嘉永三年の御造営になる旧社殿は、明治四十二年七月三十一日所謂『北区の大火』(天満焼け)に炎上、御神体のみは辛うじて浦江八幡神社に遷し奉り得たが、旧記・宝物等の、当時まで伝え得た大部分も、この時灰燼に帰した。然し乍ら、同年秋の大祭を間近に控える為、直ちに仮殿急造にかかり、同年十月十九日両神社総代供奉して御神体を遷し還し奉るを得た。本建築の本殿成は、大正四年、拝殿以下一切は大正十年に竣工した。

今次大戦に、境内落下の焼夷弾十一発は不思議にも全弾不発。道路を隔てた一帯の民家を始め氏地の被災は被害甚大のものがあつたが、神社の一面は事無きを得た。昭和四十二年、幹線道路『なにわ筋』の拡幅に伴い、旧浄正橋筋に面する約一二〇坪を失い、境内狭小となりし為、本殿その他の配置・結構も今日の如くになった。

後世、天満天神の、天神祭川渡御に先立ち『鉾流しの神事』が執り行われ、その木鉾の流れ着いた所がその年のお旅所となる事が行われたが、『福島天満宮』も、その「お旅所の一つであつたのではないか」との説をたてる者があるが、『摂陽群談』に『天満神輿、この川を渡御の時、此の社に向ひ船中に於て、陣太鼓の鳴を静めて、神楽奉幣神拝あり』と記し、お供え物を献つて遥拝すると言ふ事は、お旅所のあとなら左程の敬を致す要のない事と思はれ、やはり菅公の遺蹟としての敬意が働いているからであると思われる。

# やさかじんじや 八坂神社

(通称 海老の宮)

御祭神

素盞鳴尊

御神徳

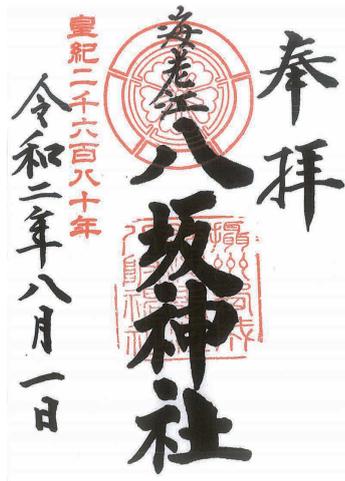
家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

例祭日

七月十八日



鎮座地 大阪市福島区海老江六―四―二  
電話 〇六―六四五一―〇二六四  
HP <http://ebi-yasaka.sakura.ne.jp/>



## 神社のおすすめ

● 特殊神事である宮座の祭りや夏・秋例大祭の他、立春の節分祭や菖蒲祭等、多くの氏子崇敬者の皆様にご参拝いただき、地域と密着した神事・行事を行っている。



12月15日宮座神事(冬の座)



夏・秋大祭 太鼓1基 地車3基

## 由緒

当社の創建に関しては、天治・大治と読み得る石灯籠が以前まであった。また、伝えによれば永徳三年(一三八三)霜月社殿再建と云う。織田信長が石山本願寺を攻めた際、先陣の将が戦勝を祈り、陣馬、陣刀を献じたとも云う。細川家の記録に海老江堤の田中に陣したと記す。文禄三年(一五九四)、延宝五年(一六七七)の検地に境内を免税にされた記録あり。又明暦元年(一六五五)氏子の先覚、道意翁が尼崎に新田(道意新田)を開発。その氏神として当神社の御分霊を奉遷して祀ったと伝う。「ひげ長き海老江の松の千代かけてふとしき立てる宮柱かな」高宮正路 往時の氏地は浪花八十島の中の一農村にて農耕守護、生産守護、疫病厄災守護の御神徳を以て氏子の崇敬篤く、枕太鼓一基、地車三基の巡行が今尚夏祭りの神賑として行われている。

昔は牛頭天王社と称せられていたが、明治初年八坂神社と改称せられた。「草の露朝だんじりに 幕かける」青々

### 特殊神事

氏子の旧い家々の組織で宮座と称する団体によって奉仕せられる所謂「宮座神事」が之である。元来宮座は各地に存続しているが、特に当地の近代化が激しい都会の中で、今尚連綿と続行しているので珍重せられ、昭和四十七年に大阪府の無形文化財指定を受ける。

当神社所属の宮座は三組あり、その一組は一月十五日夜、他の一組は十月十七日夜、残りの一組は十二月十五日に行われる。その中で十二月十五日の夜に行われる宮座が座衆の数も多く、口伝により伝えられた素朴な特殊神饌が献進せられる。

俳人松瀬青々がこの祭りを「椎の葉に盛りけむ飯か霜の饗」と詠じている。

### 御神縁

「八雲たつ出雲八重垣妻籠みに八重垣つくるその八重垣を」結婚賛歌とも申すべきの御神詠は、御祭神素盞鳴尊が奇稻田姫命と御結婚の折、新殿を造営して迎えられ、この歌を詠まれ御夫婦仲いとも睦まじく国造りせられたと云う。この御神縁により結婚守護の御神徳を高く仰ぐ次第である。

又、御鎮座地の「海老江」の名も蝦に縁深く、蝦は偕老同穴と申し仲睦まじい夫婦の表現に用いられる。正月や結婚を祝うも蝦が用いられる。「ひげ長き海老江」等と不老長寿の意味にも用いられる目出度い地名である。

「海老江の菖蒲ひげ長く御代のためしと引きはへて、八坂の神の弥栄之を祝うも嬉し年毎に」と菖蒲祭賛歌を歌人 小野利教が詠じている。

# 天神社

(通称) 下福島天神社  
下之天神  
【しもふくしまてんじんしゃ】  
【しものてんじん】

## 御祭神

少名彦名命(本社主神)  
菅原道真公(本社相殿)  
天照皇大神外六座(大神宮社)  
榎木神・市杵島姫命(榎社)  
事平神・宮比神(相殿社)  
宇賀御魂神・稚産霊神(稻荷社)

## 御神徳

由緒欄をご参照下さい。

## 例祭日

十月二十五日



鎮座地 大阪市福島区玉川一丁目四一五  
電話 〇六一六四四一七〇二五  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



① 大神宮社  
② 榎社  
③ 相殿社  
④ 稻荷社

## 由緒

### 由緒と御神徳

少名彦名命(すくなひこなのみこと)「体の小さな男性」神。日本神話では、造化三神の一つ神産巢日神(かむむすひのかみ)の子。大国主神(おおくにぬしのかみ)に協力して国作りをしました。現実の国に幸いをもたらす神、百薬の長として酒や医療の神、石の神として信仰されています。

菅原道真(すがはらのみちざね) 平安時代前期の公卿で学者。宇多天皇の信任を得て右大臣に任ぜられました。左大臣藤原時平の中傷により大宰権帥(ださいごんのそち)に左遷されます。延喜元年(九〇一)正月、淀川に舟に召され筑紫へ下向の砌(みざり)、当社のご祭神少名彦名命の御前に御拝あつて海路の平穩を祈り、地名を「福島」と名付けられたと伝えられています。延喜三年二月二十五日に五九歳で配所に薨じ、後に天神様として風雨水火を掌り悪者を退治する神、冤罪を救う神、慈悲救済の神、学問や諸道芸能の守護神として信仰されています。

天照皇大神(あまてらすすめおおかみ)「天にあつて照り輝く偉大な神」。日本神話では、日神・穀霊神・高天原(たかまのほら)の主宰神・皇祖神・鏡や機織りの女性神とされています。

榎木神(えのきのかみ)「神木の榎は地上の高さと同じくらいに根が深く倒れにくい高木で、雷や地震の災禍を防ぐ神として信仰されています。多雨の年には樹葉が大きく、少雨の年には小さく育つ、樹齢三百年近い古木です。

市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)「身を清浄にして神に仕える島の女性」神。日本神話では、天照大神が誓約(うけい)をした時、スサノオノ命の剣から生まれた宗像(むなかた)三女神の第二子です。

事平神(ことひらのかみ) インドのガンジス河に棲息するワニの神格化がクンビラで、雨乞いや海難予防の水神として信仰され、日本に垂迹(すいじやく)してコンピラとかコトヒラと呼ばれます。ところで江戸時代、淀大川が大江橋付近から堂嶋前川と呼ばれましたが、当社前近くで旧首根崎川(蜷川)が再合流し、更に氏地内の船津橋付近で南を流れる土佐堀川が合流して安治川となり大阪湾に注ぎます。下福島はこの水上交通の要衝地に位置します。当社の事平神は、近世堂島蔵屋敷に出入りした海運業者等が事業繁栄と海路の平安を願い、下福島の鎮守の杜(もり)に勧請(かんじよう)したようです。

宮比神 宮比の読みがミヤヒ(ビ)なら宮中の平安と神主職掌人が過ちなく奉仕せんことを祈る神、又、雅の連想から演劇・舞踊関係者が信仰した神。一方、読みがクーヒ(ビ)なら、事平の原音クンビラの万葉仮名表記がもしれません。

宇賀御魂神(うかのみたまのかみ)「稲に宿る神秘的な霊神」。稲魂(いなだま)を指します。

稚産霊神(わくむすひのかみ)「若々しい生成の霊力神」。子授けや安産の守り神。

尚、明治四十年十一月十五日、大阪市北区下福島大字安井木場(旧、下福島五丁目隣接地)の無格社「豊光神社」を当「天満宮下之社」内の「稻荷神社」に合併し社号を改称。

【参考文献】『古事記』(新潮日本古典集成)、『日本書紀』(新編日本古典文学全集)、『浪速叢書』、『江川家文書』(大阪市史編纂所)、『神道大辞典』(臨川書店)、『若波古語辞典』。所収「菅原道真の実像」(臨川選書)。立川武蔵「幻獣十選」(日本経済新聞、平成二十二年四月)。

# かすがじんじゃ 春日神社

(通称 玉川春日神社)

御祭神

天児屋命  
天照大神  
宇賀御靈神

御神徳

家内安全  
除災招福  
病氣平癒

例祭日

四月二十九日



鎮座地 大阪市福島区玉川二丁目二  
電話 〇六一六四四一―六四四九  
HP



## 由緒

『藤之宮来由略記』 摂州西成郡野田藤名所 藤之宮来由略記

抑藤之宮と申し奉る春日大明神御事は、其のいにしえ藤原の藤足と歌御祈願所勸請なり、此地野田藤名所の事世に高し、誠に難波江の藤池の藤と書にしたり。野田村居出来しより野田の藤といふ。近辺福嶋・堂嶋・中の嶋・九条嶋・江の子嶋・四貫嶋・浦江・海老江・此嶋と江との間、天順によって藤の木あまたあり、天子御製の御歌有りたる御事なり。則人皇九十六代光厳院元弘元年吹田に別業をたてられ、行幸ましまし此あたり西園寺大臣公経公御領にて就中当所は藤名所、西園寺家は藤原氏、春日明神は藤原氏の祖神なればとて、和歌一所に宝剣を備え給ふなり、こゝに貞治三年辰四月足利義詮將軍住吉まふでの御時、野田の藤花盛りきこしめし御遊覧、則ち御詠歌奉納、住吉もうでの記にのせられたり。猶御上々様おさめ給う宝物ありといへどもおしい哉や、天文二年巳八月九日本願寺第十世證如上人近江国佐々木六角禪正定頼合戦にて此地へおちきたり給ひ、其時野田の百性廿老人討死、證如上人御書今にあり。此兵乱の間藤地陵廢し社頭および樓閣などのありしも破却し、春日明神の神祕のまゝにてことごとく紛失しぬ。しかりといへども大明神の異光のいまだたへやらせ給はぬ御利生によって、古跡の藤ありよつて、古將軍も来り給ふ地なればとて、文祿三年午の春、太閤秀吉公藤の花盛のころ、此地来らせ給ひ藤庵におみて御茶をもよふせられ、木々の梢にかゝれる藤の花を詠纏ましまし、まことに藤の浪をなせるとあり、一人興に乗じ給ひ、藤庵の文字を御かたわらに何公せる曾呂利といふ人に仰付られ、写せ下し給ふ。今の世にあり、当社藤庵の額楚路利の墨跡なり、むかし難波江の池のこりし池のかたちあり、義詮公玉川となぞらへ給ひしをめでさせ給ひ、つれづれ御信仰の弁才天の尊像を安置し給へり、相殿に天照大神・春日明神・弁才天女、此の三神を藤の宮となへ願ひ奉るなり。猶いにしへより藤名所の御事は世に用ひる書のごとく、難波江の藤池の藤と出し野田の藤なり。すなわち古来より今にいたる、御上々様と歌御奉納遊ばされ、和歌の御祈願所によつて毎年三月廿一日より同廿七日まで神事執行、和歌を備へ神樂を奏する事、まことに以て天下泰平・五穀成就・民安全にいのり、又和歌・連俳志のともがらは奉納、すなわち巻にするし、藤名所の什物にて美に和歌の道すなをになさしめ給ふ。徳によつて家内安全・息才延命・子孫繁昌にまもらせ給ふありかたき古例なりいにしへ今にいたり御神徳まことに日本にきこえし書にありしごとく藤名所藤の宮畧録こゝにするすものなり。

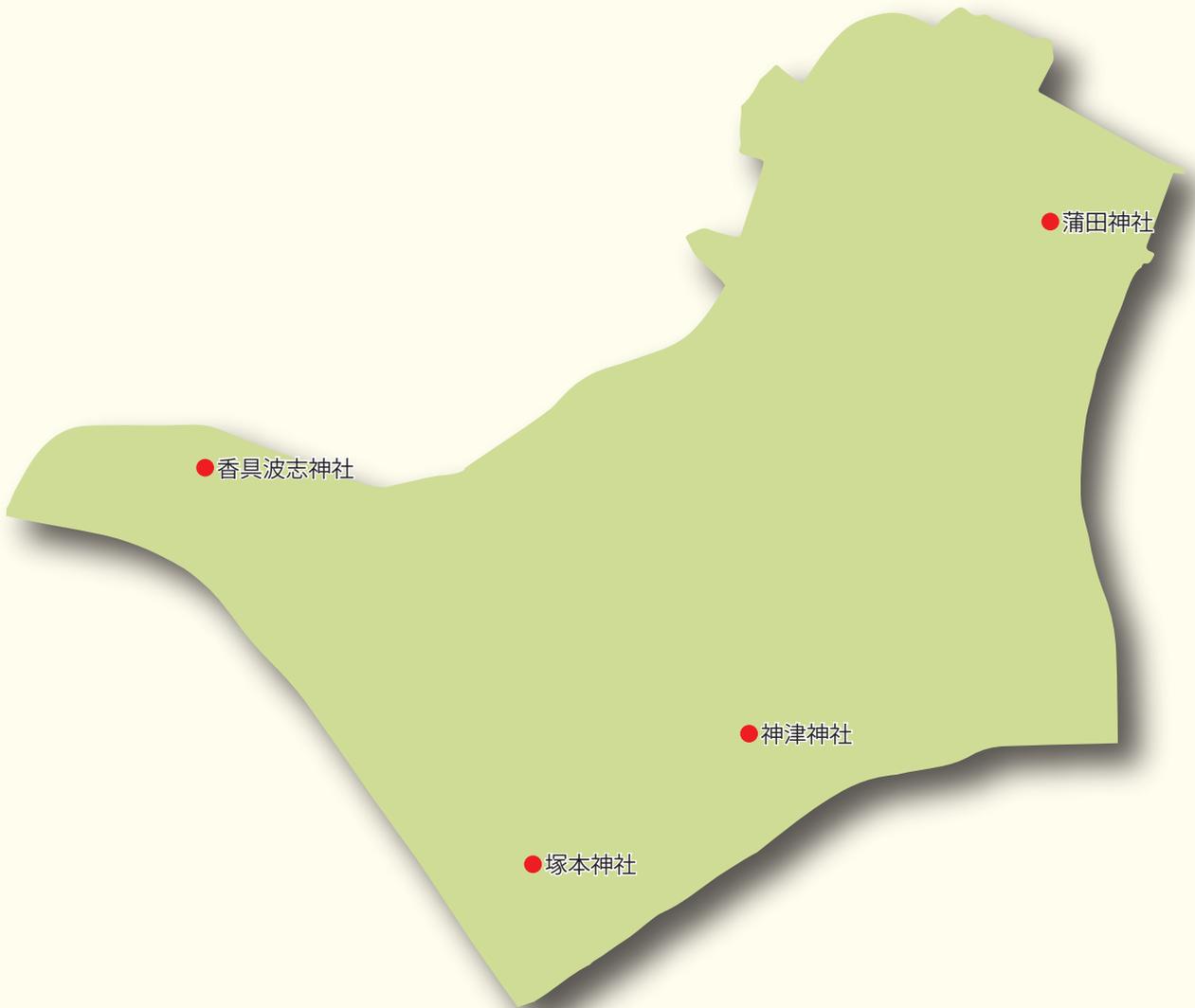
難波野田藤之宮 神主

江戸時代、この神社の境内に咲く藤が「野田の藤」と呼ばれ有名であった。それにちなんで日本固有のフジの学名は「ノダフジ」とされている。現在は大阪市の藤名所になっていて、「大阪市都市景観資源」として登録されている。「のだふじ」は福島区の区花であり、四月中旬から下旬にかけて「のだふじ巡り週間」が福島区を上げて開催されるが、当神社は、その中核として多くの藤見物の客で賑わう。

豊臣秀吉も当地を藤見物に訪れたと言われ、豊公画像も本神社に伝わる。浪速百景にも記載されており江戸時代は観光名所で、当時は「藤之宮」と呼ばれていた。

# 大阪市 淀川区

▶ 大阪市にもどる



# かみつじんじや 神津神社

## 御祭神

応神天皇  
神功皇后  
底筒男神  
中筒男神  
表筒男神  
外四柱

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
厄除開運

## 例祭日

十月二十三日



鎮座地 大阪市淀川区十三東二一六一三九  
電話 〇六一六三〇一一五七二四  
HP <http://kami-tsujinja.ec-net.jp/>



## 神社のおすすめ

神津神社境内の吉向窯は昭和五十九年十三小学校に再現したものを移築したもので、毎年正月に吉向窯で焼いた土鈴を授与しております。



土鈴  
(令和二年子年)



吉向窯

## 由緒

当社は南に中津川（新淀川）、北に神崎川を控え、数度の水害に遭遇したため、旧記録流失し、創祀年代は不詳である。昭和二年、社掌足立正嗣、社殿改築に付き、旧社殿取毀の際本殿内より巾六寸、長さ一尺五寸の桧の板の棟札が現われ

### 正八幡宮

天正年中勸請より不知、細川氏、神主足立氏  
文禄年中再建、摂州西成郡小島、船越五右兵衛様、御領地御除地延宝年中、再建小嶋村、  
青山大膳様、御領地御除地

宝永七庚寅年四月二十八日再建氏子供

とあり、天正年間には現在地に鎮座せられていた事が判る。約四四〇年程前に当る。

明治五年村社に列し、八幡神社と称した。当時は六月、九月の晦日に祭典を行い、つもごり祭と称した。また八幡宮当時より宮講と称して、小嶋村の旧家の本家の者ばかり、宮講の田地より収穫した米で酒と米飯をつくり、一月二十一日には当家の家集り、八幡大神の軸をかかげ、一日、祭を楽しむ習慣があり、簡略化した形で平成七年まで行われた。

明治四十二年、旧神津村の内、字三津屋を除き小島（現在の十三東）、木川（同木川、西宮原の一部、三国本町の一部）、野中（同野中）、新在家（同新高）、堀上（同三津屋南一、野中の一部）、今里（同十三元今里、田川の一部）、堀（同十三本町）、の七ヶ字協議の上、小嶋村の村社八幡神社に各産土神社及び末社を合祀し、神津神社と改称した。（そのとき西成郡小島村猿田彦神社、木川村産土神社・天満神社、野中村野々宮神社、新在家村東宮稲荷神社・西宮稲荷神社、堀上村稲荷神社、今里村八幡神社、堀村稲荷神社が合祀された）神津神社と改称されてからは昭和四年、同二十四年の改築となり、同四十七年には現在の社殿が造営された。

### 十三戎神社について

氏子区域内の商工業が益々発展する様に今宮戎神社の御分霊を昭和三十年にいただいて奉斎した。一月九・十・十一日の十三戎祭は七福神の氏地内巡行をスタートとして三日間、境内では福笹授与、十三戎籤の抽選、縁起物の授与等が行われる。阪急沿線の戎っさんとして多くの参拝者で賑わう。

### 吉向窯について

伊豫（現在の愛媛県）大洲藩出身の戸田治兵衛が享和の頃大阪十三に窯を築いた。時の將軍家の慶事に際して食籠を献上した折、海亀の食籠が非常に気に入られ、亀甲即ち、吉に向う因み「吉向」（きつこう）の窯号を賜った。明治十八年の中津川大洪水により吉向窯は水没。現在東大阪市布市、枚方市私市に吉向焼の二家がある。

# かぐはしじんじや 香具波志神社

## 御祭神

倉稻魂神  
保食神  
天照皇大神  
稚産靈神  
埴山姫神  
外二柱

## 御神徳

## 例祭日

十月二十三日



鎮座地 大阪市淀川区加島四丁目二〇  
電話 〇六一六三〇一一六五〇一

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創祀は平安朝末天徳三年秋のことであつて、去る昭和三十四年に一〇〇〇年祭を行った。御鎮座当初より稲荷大神としての信仰が厚く成産繁栄五穀豊穰福徳円満無病息災などに顕著なる御神徳を具有される。通称ごんのかみと称す。当加島は難波八十島の一、神下蟹島鍛冶島飯島香島と称された。土農工商の尊崇厚く北条時頼連歌田を献し、戦国の雄三好長慶社前に大島居を奉納す。

豊臣時代太閤検地の際除地になり、徳川時代に至り武門庶民に稲荷信仰が旺盛となつて当社の分霊奉斎は遠くに及んだ。文人墨客の中では上田秋成の報恩に依る六十八首の献詠和歌は有名である、雨月物語刊行の頃当境内近くに住んだ。又寛永通宝のが島錢座は当稻荷明神を奉斎して良鑄と称揚せられた。何れも大阪市史蹟の指定となつた。又境内の大樟は楠木正儀駒繫の樟と伝えられ、八〇〇年の樹容は府下の天然記念物として指定になつたが遂に枯れ巨幹を残す。氏子地御幣島町は古代八十島祭の斎場「みてくらの浜」の趾である。其の他史実に満ち大阪の名所として顕彰せられている。

# 蒲田神社

かまたじんじや

## 御祭神

宇賀御魂大神  
別雷大神

## 御神徳

五穀豊穰  
厄除開運  
諸願成就

## 例祭日

十月二十四日



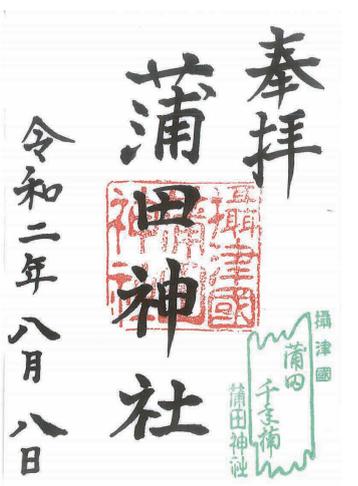
白光社



十二支の祈り

## 神社のおすすめ

特殊神事「三午の社参（さんごのしゃさん）」  
午（うま）の日から始めて、次の次の  
午の日までの二十五日間、一日も欠かさ  
ず祈願するという特殊なお参りの仕方  
です。満願の日にお礼参りと願ほどこ  
きをします。



鎮座地 大阪市淀川区東三国二一八―一二  
電話 〇六一六三九一―二九九五  
HP

## 由緒

遠い遠い昔、摂津の国の蒲田の里に暮していた人々は、この地に二柱の神様をお迎えしてお祀りしました。土地を開きお守りくださる別雷大神（わけいかづちのおおかみ）と生活の基盤となる衣・食・住をつかさどりお守りくださる宇賀御魂大神（うがのみたまのおおかみ）です。神様は里の人たちの心の支えとなり、その霊徳を仰ぎ感謝の祈りを捧げながら、日々の仕事に励みました。おかげさまで里は豊かで、代々守り伝えられてきたのでした。

社伝によるとその昔、山城国（やましろのくに）（今の京都）賀茂別雷神社（かもわけいかづちじんじや）の御祭神である別雷大神のご分霊をお乗せして播州（ばんしゅう）（今の兵庫県御津町室津（みつちようむろつ））へお渡りになる船がありました。ところが、この地を通りかかった時につむじ風に遭遇し、この蒲田の社で一旦とまって風除けをしました。このような由縁（ゆえん）により、当神社にも別雷大神をお祀りすることになったといわれています。

室町時代にはこの辺りは仏生院村（ぶつしよういんむら）といい、神社は宇室（あざむろ）にあつたので「室の社（むろのやしろ）」と呼ばれていました。また、ご祭神の宇賀御魂大神の神名を稻荷大神とも称えるところから「稻荷神社」ともいいました。明治四十二年より当時の地名である西成郡中島村大字蒲田（にしなりぐんなかじまむらおあざかまた）を冠して「蒲田神社（かまたじんじや）」と呼ばれるようになりました。昭和三十年頃までの市販地図では、「室社（むろのやしろ）」となっています。

現在、境内には樹齢千年余と言われる本殿裏の千年楠、また同じく樹齢千年余の社務所前の楠の切り株、外に数百年を経た二株が現存し、季節を彩る様々な花が境内を彩っています。その昔には楠、杉、松などの大樹が数十株も繁茂していて、空を覆い昼なお暗い状態であつたと伝えられています。室社と呼ぶにふさわしい防風の役目を果たしていたのでしよう。

### 撰末社

白光社 稲と水の神様で、巴さんをお祀りしています。畳四〜五帖ほどの広さのある樹齢千年余の楠の切り株の上に鎮座しています。もとは六角形の瓦葺きの覆屋根がありました。阪神淡路大震災の際に、覆屋根は倒壊しましたが、白光社には被害もなく、守られたのでした。

祖霊社 祖先の御霊を祀るところです。故郷を離れている人がお参りすれば、故郷の神社を通じて家へ帰ることが出来ます。  
恵比寿社 商売繁盛の守護神様です。

# 塚本神社

つかもとじんじや

## 御祭神

建速素盞鳴尊  
天照皇大神  
稻荷大神（塚本稻荷大神）  
大国主命（撰末社）  
塚本清瀧大神（撰末社）

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
心身湧祥

## 例祭日

七月二十日



鎮座地 大阪市淀川区塚本二丁目二七  
電話 〇六一六三〇一一八七二二

H  
P



## 神社のおすすめ

復興時に植えられた  
松の木は、今では龍神  
が宿るご神木として崇  
敬の念を厚く集めてい  
ます。



## 由緒

現在の神社がある辺りには、慶長十四年（一六一〇年）近在の人々によって創建されたと伝えられる「牛頭天王社」の祠がありました。牛頭天王というのは、京都の八坂神社の御祭神で、病気や厄災を除く神様であります。後に神仏習合（神も仏も現れ方が違おうが同じであるとの意）で素盞鳴尊と合体して農村の守り神として信仰されるようになりました。

しかし明治の始めにはこの考え方が禁止となり、牛頭天王を名乗ることが出来なくなつたので、以後、塚本八坂神社と改め、昭和五年、社格は村社に列格されました。江戸時代から明治にかけて石の鳥居を構え、本殿・絵馬堂など整った立派な神社となっております。

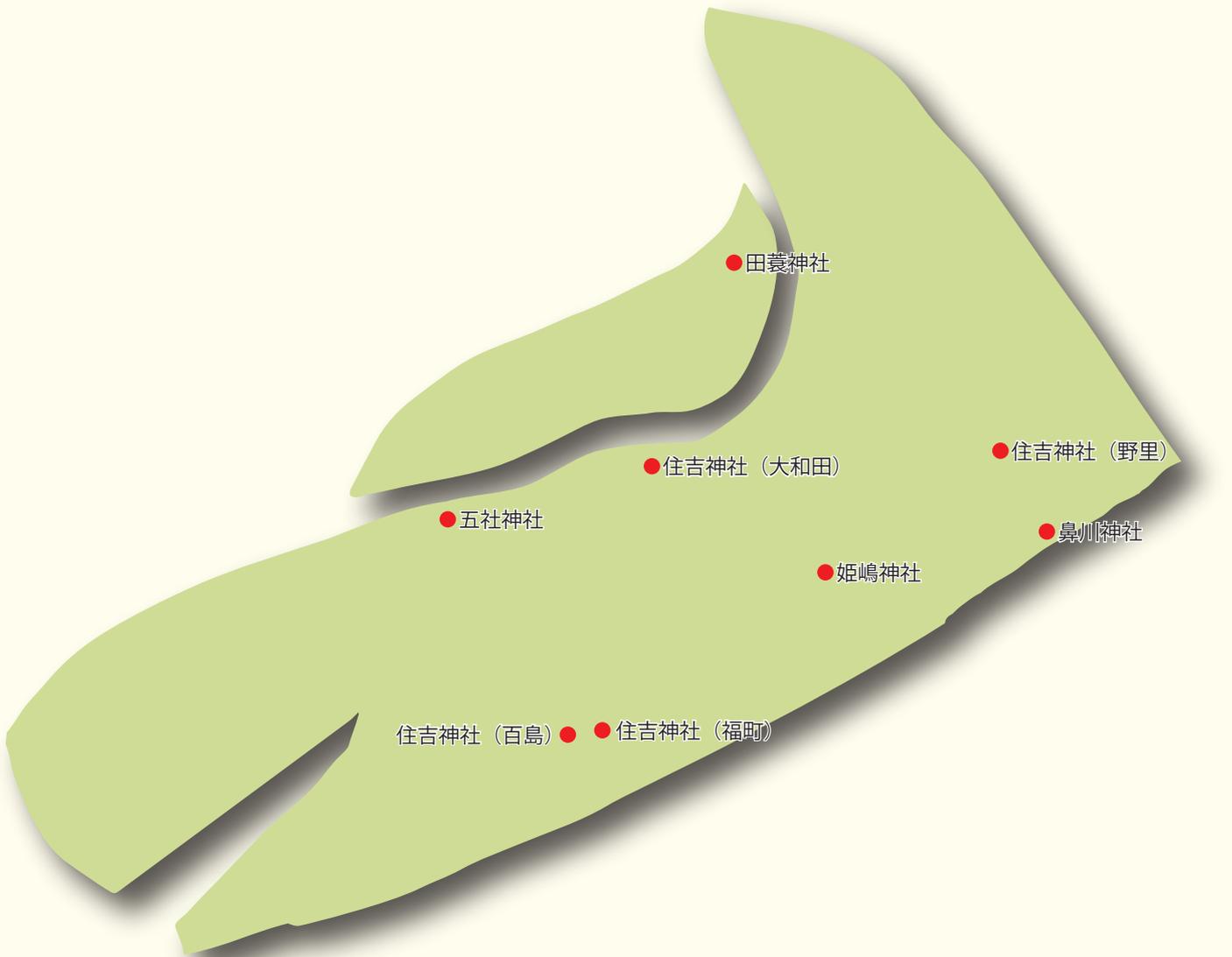
ところが、明治三十九年に出された神社を整理統合する法令により、塚本八坂神社は、中津の富島神社に合祀されることになりました。以来五十数年もの間、塚本八坂神社の跡は富島神社の御旅所として僅かに名残を止めておりました。

戦後、町の人々の神社復興への熱意が稔り、昭和三十八年七月富島神社から独立して「塚本神社」と改められ、新たに町の守り神として社殿・社務所も新築され見事に甦りました。

翌年には「伏見稻荷」の分霊を頂き「塚本稻荷社」も建立され、名実ともに町の人々の信仰の場となっております。

# 大阪市 西淀川区

▶ 大阪市にもどる



# すみよしじんじや 住吉神社

(通称 野里住吉さん)

## 御祭神

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
神功皇后

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

二月二十日



大阪市西淀川区

鎮座地 大阪市西淀川区野里二一五―一二  
電話 〇六一六四七一一〇二七七  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳かではないが、時代によって主神に変動があったことが伺われる。現在の住吉大神は南朝の永徳二年、野里川の合戦の際、戦勝祈願のため時の將軍足利義満が勧請したものと伝えられている。

社紋は十六の菊紋章を用い住吉大神宮と呼称されたものであるが、明治以降は住吉神社に改められている。

昭和四十年社殿改築の時、旧本殿の下より数多の出土品がありその年代を考察すると五、六世紀の頃すでに現在の地に神祠が存在したものとされる。

特に戎神像と重量のある特異な自然石で左側が古代人の頭(首)右側が鯛の頭の形をしたものが砂中に安置されてあつて、古くは戎大神を主神として祀られたことも考えられる。現在の二月二十日の一夜官女の行事は撰津名所図絵にも記されている奇祭であつて、その祭具に使用する桶(神饌を入れるもの)は元禄十五年に作成されたものである。

この行事は岩見重太郎の狛々退治、他に日本武尊の大蛇退治につながるものであるとの説もあるが何れも確証はない。

ただ現在も神社の境内に狛々退治の現場といわれる龍の池が形ばかり残っている。

# たみのじんじや 田蓑神社

## 御祭神

底筒男命  
中筒男命  
表筒男命  
神功皇后

## 御神徳

商売繁盛  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

十月十七日



拝殿前狛犬

御垣内狛犬

近年これを撫でて参拝していた方が願いが叶ったとうわさが広がり、遠方から参拝される方も見受けられる新スポット。

## 神社のおすすめ

御垣内にある狛犬は元禄十五年に奉納されたもの。浪速狛犬としては古いものとされています。また、拝殿前の狛犬は、



住吉大明神

難波八十島 田蓑嶋  
佃漁民ゆかりの地  
西成郡佃村  
宮つくる 田蓑の嶋の 神垣を  
折ればやがて守りますし  
日野齊枝

令和〇年〇月〇日

鎮座地 大阪市西淀川区佃一―一八一―四  
電話 〇六一六四七一一五四一六  
HP <http://www.tamino-jinja.com/>

## 由緒

田蓑神社の由緒とお鎮まりの神さま

「日本書記」や「古事記」でよく知られるお話しで、伊邪那岐命が、火神の出産で亡くなられた妻・伊邪那美命を追い求め、黄泉の国に行きました。そこで受けた汚れを清めるために、「筑紫の日向の橘の小門の憶原」というところで禊祓いしたとき、住吉の神である底筒男命、中筒男命、表筒男命の「住吉三神」が生まれしました。

時代は下って、十四代仲哀天皇の妻である神功皇后が新羅に出兵する際に、住吉の大神を守り神と奉り、遂に成し遂げ国の安定を築かれました。その帰途、この地に立ち寄り、海士が白魚を献上されてより、その海士を奉ったとされており、

後の世、当地開拓の時その海士が出現し、神功皇后の御船の鬼板を伝え守って数百年、この神宝を安置して住吉大明神をお奉りせよと申され、貞観十一年に創建され、住吉三神と神功皇后の「住吉四神」をお奉りいたしました。

社名は時代と共に、田蓑嶋神社、住吉神社と変遷し、明治に田蓑神社と改められました。

情けは人の為ならず（佃漁民ゆかりの地）

天正年間、徳川家康公が多田の廟（現在、池田市多田神社）に参詣の時、佃の村人が漁船をつかって、神崎川の渡船を勤めた縁により、家康公が関東へ下降の際、田蓑神社神職を含む三十四人の村人が江戸へ下りました。後に幕府より干瀉を賜り、故郷の名をとり佃島と定め、田蓑神社の御分神霊を奉戴しました。これが、佃煮発祥の地として有名な、東京の佃島と同地の住吉神社の起源です。また、佃島の漁民たちは「全国どこで漁をしてもよし又、税はいらない」という特別のごほうびをいただき、本家である大阪の佃も愈々栄えました。

人助けにより、後々の村の繁栄がもたらされたのです。先人に学び、その心を大切に、世のため人のために奉仕し、福祉の増進を心掛けたいものです。

震災復興モニユメント

氏地となる西淀川区佃は、平成七年一月十七日未明に発生した阪神・淡路大震災で多くの家屋で全半壊や土地の液状化現象などが発生し、大阪府下では多大な被害を受けた地域の一つであり、当社も拝殿の傾き、社務所の全壊、鳥居、灯籠の倒壊、地割れや液状化による参道の隆起など多大な被害を受けたが、同年十月には拝殿の修繕、社務所の竣工がなされ、平成十二年の参道復旧をもって復興事業が完了しました。同年復興を記念し、倒壊した社標をモニユメントとして境内に建立しました。

# ひめじまじんじや 姫嶋神社

(通称 やりなおし神社)

## 御祭神

阿迦留姫命  
住吉大神  
神功皇后

## 御神徳

再起復活  
女性の開運招福  
女性の心願成就

## 例祭日

二月二十日



はじまりの碑



帆立絵馬と断ち玉 800円

## 神社のおすすめ

事を始めるのに良いとされており、夢や目標を決めると良いともされておりま

※他朱印あり



鎮座地 大阪市西淀川区姫島四一四二一  
電話 〇六―六四七―一五三〇  
HP <https://himejinjinja.wixsite.com/himejinjinja>

## 由緒

明治五年、郷社に列せられる。創建年代は不明であるが、境内には正保五年（一六四八）からの石灯籠が十基あり、少なくとも江戸時代以前から御祭神として阿迦留姫命を祀っていたことが考えられる。

『古事記』には、阿迦留姫命が新羅の王子（天之日矛）の妻となるが、夫に耐えかね祖国に逃避行してきたとある。応神天皇の御代、新羅の国から筑紫（九州地方）の比売島、さらに移って摂津の比売島（姫島）に留まると伝えられている。阿迦留姫命は夫と別れ、海を渡り、新たな地で再出発し、女性達に機織りや裁縫、焼き物や楽器などを教えたことから、多くの女性に親しまれ「決断と行動の神様」として信仰されてきた。また、赤い玉が美しい女性に姿を変えたことから、美の神様ともいわれている。

当社は、大阪大空襲により社殿・宝物・地車十基以上を焼失、戦後は再起を図る人々の信仰も集め、阿迦留姫命同様にも無い状態からの出発となり「やりなおし神社」ともいわれるようになる。蛇神が祀られている楠社には、戦火の傷跡がまだに残る樹齡九百年といわれていた御神木の太楠があり、再生の象徴でもある蛇の信仰も合わせ「再出発の木」となっている。

ある女性が阿具奴摩（あぐぬま）という沼で昼寝をしていたところ、虹色の光が当たった。

すると女性は、すぐに身ごもり赤い玉を産み、その玉が美しい女神（ご祭神…阿迦留姫命）に姿をかえた。

このことから、当宮において「赤い玉」は特別なものであり「虹色の光」は、そのはじまりである。

虹の色数は「赤、橙、黄、緑、青」の五色とされている。

# すみよしじんじや 住吉神社

(通称 大和田住吉)

## 御祭神

表筒男尊  
中筒男尊  
底筒男尊  
神功皇后

## 御神徳

## 例祭日

八月一日



鎮座地 大阪市西淀川区大和田五―二〇―二〇  
電話 〇六―六四七―一五三三五  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建は仁明天皇の御宇承和九年九月十九日の御勅請と伝えられ、その後明治になり濱ノ宮八幡神社・出来島皇大神宮・稲荷社を合祀し、昭和三十七年金毘羅神社を建立されました。  
神功皇后が三韓を征し、還御の時に当浦に船を寄せたと言う由縁があり、神功皇后を勧請する所以であります。  
住吉大神は、御出現の際より河海に御関係があり、古来、海路平安の・和歌の神・排水・治水の神・農業・産業の神として信仰が篤く、五穀豊穡・福徳円満・無病息災などに顕著なる御神徳を具有され人々の深い信仰の的となっておりです。

神功皇后は仲哀天皇の皇后で、仲哀天皇とご一緒に九州の熊襲征伐に向かわれ、天皇が崩御された後も、女性の御身ながら、更に進んで新羅に遠征されて、大いなる国威を輝かされ還御の砌り、当大和田の浦に船を寄せられたと伝えられています。

当地は昔より大和田の庄、大和田の浦とも称し、神崎川の東岸に在って、佃島を挟んで大物の浦に対して、大河尻にして大物と共に平安朝時代には、大小の船舶の寄港した大津港であります。魚鱗に富み村民の多くは天賦として漁業を営み、海上の守護神である住吉三神を勧請する所以です。

また、和歌の名所としても知られており、数多くの歌が残されています。

### 判官松の由来

平家物語第十一逆櫓の記述によれば

「元暦二年（一一八五）二月三日九郎判官義経都をたつて摂津國和田岬渡辺（今の堀江）より船ぞろへして八嶋へすでよせんとす。三河守範頼も同日都をたつて摂津國神崎（今の西淀川）より兵船をそろえて山陽道におもむかんとす」とある。平家追討の軍勢は折からの台風の影響にあい一時退避を余儀なく去れ、陣を張ったのがこの地である。その時義経は改めて住吉大明神に海上安全の祈願をし一本の松の苗を手植えた。それが判官の松の由来である。

亦、一説に義経の軍が流れ着いた時、大和田の庄屋が鮒の昆布巻を献上しこまごまと生活の煩事を援助した。喜んだ義経は食事の箸を地中に立てその意を天に示した。どうした事かみるうちに生き返り松の姿に成長したとある。

尚この庄屋に「鮒子多（ふなした）」の性を与えたと伝えられている。（大和田墓地に鮒子多家の塚と墓石が現存している。）以来この判官の松は年と共に天を突き沖を往き交う船人たちに航海の指針として親しまれた。明治十年雷火の為に不幸にも焼失の災いにあい今はその大要を地元青年団が石に刻み後世に伝えている。

### 大和田住吉神社 万葉歌碑の由来

濱清み浦うるはしみ神代より  
千船のとまる大和田の濱

万葉集に垣間見る事の出来る大和田を歌った古い和歌の碑である。

併しこの歌の大和田の地は、神戸市の和田岬に近く、かつて「大輪田の泊まり」と呼ばれた付近をよんだものであるとの説があるが、これは謬りで摂津名所図栄会には、大和田が「御手村の西北にあり此所尼崎に近くして河海の堺なり、故に漁鱗多し殊に鯉摺」という、なお浦浜古詠あり兵庫の和田岬とするは謬也」と断つてある。尚、土佐日記の一文を引用しこの歌をのせているのでこの万葉碑の重要性を再認識したいものである。

### 新千船橋の親柱

この石柱は大和田街道（梅田新道）（俗に旧街道）にあつて大和田と出来島の間の大和田川に架かつていた橋の橋名柱であります。これを親柱と云います。

この親柱のあった橋は、初代心齋橋として明治四十三年（一八七三）迄の間、長堀川に架けられた大阪三番目の鉄橋で当時としてはモダンで浪速っ子の人気を集め、錦絵にも描かれています。その後、境川橋の時代を経て昭和三年（一九二八）に新千船橋として利用され、大和田川の埋め立てにより昭和四六年（一九七一）撤去される迄活躍しました。現在は鶴見緑地西橋として残っています。

この親柱は丸四十三年間大和田の変遷を見つめ続け、その役目を終え平成十年（一九九八）三月この大和田住吉神社に安住の地を得ました。

# すみよしじんじや 住吉神社 (通称 福住吉)

## 御祭神

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
神功皇后

## 御神徳

厄除開運  
海の神  
産業の神

## 例祭日

二月二十日



鎮座地 大阪市西淀川区福町二一五一六  
電話 〇六一六四七二一四六四〇  
HP



※他朱印あり

## 神社のおすすめ



平成6年に再建された神馬

大正11年奉獻された神馬は昭和17年12月太平洋戦争の際、金属類回収により供出、その後50有余年、平成6年11月再建されました。

## 由緒

当社は、明暦二申年（一六五六）正月二十日に、神崎川内に宮を建て、住吉大明神を勧請せられたものと伝えられている。

延宝五年閏十二月六日の、青山大膳檢地本帳（福村北村弥三郎所藏檢地帳）によれば、『正保元年申比新田開發、其以後小濱民部致檢地候宮地の儀は明暦式申年宮建立、今度遂吟味候處式拾貳年以前よりの宮地に候得共、地外川内に築宮建仕候儀に付除え』と記載により明らかである。

明治五年村社に列し、当地一円の氏神であり今日に至る。

氏神様として、太平洋戦争までは当地から一人の戦死者も無く、先の大戦でも、焼夷弾は淀川に落ち、福町は被災に遭わなかったと崇められている。

### 境内社

福戎神社・金刀比羅神社・福稻荷神社をご奉斎している（勧請年代不詳）。

# 鼻川神社

はなかわじんじや

## 御祭神

神功皇后  
素盞鳴尊

## 御神徳

商売繁盛  
交通安全  
安産守護

## 例祭日

十月十八日



大阪市西淀川区



鼻災除「鼻守」600円



種銭

## 神社のおすすめ

社地を万倍の地と称したる所以で、一粒万倍入り銭の元「種銭」を奉製。



鎮座地 大阪市西淀川区花川二一〇一  
電話 〇六一六四七一三九〇三  
HP

## 由緒

当地は、古く淀川水系旧中津川口に生成した三角洲上に発達し、対岸に突出した半農半漁の集落で、社記に、神功皇后鹿嶋に御幸の時この地を御立所とせられ、住民高貴の御来所を知り取急ぎ搗立の餅を柏の葉に載せ野咲の草花を束ね添え参らせしに、御意殊の外麗しく賞味遊ばされ、種々御下問あつて当地の無名なるを聞召されて、地形対岸に突出し恰も鼻の如きを奇とせられ、地名を「はなかわ」渡しを「かしわ」と御命名賜いしに依り、由来此地を「鼻川の里」、渡しを「かしわの渡し」と称へて慈しみを仰ぎ、この尊き御命名を記念して、一堂宇を建て、神功皇后を祀り、後住民出生の対岸海老江の氏神素盞鳴尊を併せ奉斎し、地名を冠して鼻川の社と呼称申し上げたと創祀の由来を留め、祭礼には柏餅と菜の花を束ねて御供えずと相伝。当地は度々水害に遭い幾度も社殿を修復、改築し、祭事は住民の交替に依り、年々祭費を集め、宮座を組み、その料を賄いしと記した。尚その当番頭を、とや、と称し、神事一切を主宰しその御供物も調達煮物を献ずる慣習を受継ぎ、現今の特殊神事として最も厳肅に奉仕無言の行事として伝統を承継するものである。承久三年辛巳前前に豊作を祈願した処、稀にみる豊作を得て、集落挙げて神思に感謝、一粒万倍の御利益を賜つたとして、社地を万倍の地と称し、同年社殿を改築し常例の御供の外初めて甘酒を献じたりと、万倍の地名現存呼称せり。明治三十年淀川改修に際し、社地は河川敷に相当の為、移転料を受けて堤防外側に移転したる折、大阪府の神社整理の為止むなく姫嶋神社に書類合併をした。爾後村民挙げて基本金を積立て苦難を排除して、大正三年八月独立神社として承認され、昭和九年現在の社殿造営、昭和十六年村社に列格更に昭和三十一年六月飛地境内神社を設定し氏子崇敬者の中継神社として隆々神威を仰ぐに至る。

平成九年、現在地へのご鎮座百年を記念し、又平成七年阪神淡路大震災による罹災の為の復興工事と合せ、平成のご造営事業と称し、目出度くご竣工奉告祭をご斎行。

### ◎無言の神事

例祭の神事として秋祭十月十七日の宵宮終了後午後十一時半頃頭家を始め氏子総代社務所に参集、予て調達したる神饌品を検分、宮司の調理始めの挨拶あり、次いで全員にて調理熟饌として二膳（なまぐさ）（しょうじん）浄暗の裡に神前に献供、宮司祇候座に着き、次いで御給仕一度祝詞は目読奉仕、次いで奉幣行事（稻穂幣）、玉串奉奠（忍手）、頭家氏子総代（忍手）斎了撤饌（伝供―氏子総代献饌同じく）、直会式は社務所にて（祭典中は全員無言）宮司挨拶献供物は（魚野菜果物一切）一釜にて煮上げて神酒、小鏡一重、甘酒、白蒸と夫々配膳し札手一乾、以下神酒拝戴終了午前二時。

# 五社神社

ごしやじんじや

## 御祭神

天照皇大神  
豊受皇大神  
住吉大神  
速素盞鳴大神  
加具土大神

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月二十六日



大阪市西淀川区

鎮座地 大阪市西淀川区中島一丁目一八  
電話 〇六一六四七二一二七二七  
HP



## 由緒

当社は元禄元年中島新田開発の時勧請されたものと伝わる。なお、文化文政の頃城島常則という高徳碩学の土神主として奉仕す。此の人或る夜神勅を蒙りて曰く。「此の世に住める人の病む悪しき腫物（くさ）は悉に救ひ治むべし。」と伝わってより、祈願によりご霊頭を受けたもの多く、以来だれいうとなく此の神社を城島のくさ神と俗称する。現在では絶えて久しいが、五月節句の日を卜して耕牛の藪入と称し、家畜をいたわり感謝をしめす風習として、各農家は耕牛に五色の幣串を立て繩を首にしめ美わしく飾り、社頭に牛をひきいて参拝し、境内にて「ちまき」を食した。昭和七、八年頃迄、盛んに行なわれていた風習で、美わしくもまた、壮観な景を社頭に展開した。

人のためはたらく牛を人なみに

休ましむるも人の道なり

北里蘭

# すみよしじんじや 住吉神社

(通称 大野百島住吉)

## 御祭神

表筒男尊  
中筒男尊  
底筒男尊  
神功皇后

## 御神徳

## 例祭日

八月一日



鎮座地 大阪市西淀川区百島一丁目三十九八  
電話 〇六一六四七二一〇〇九四  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社正保元年四月、此れの地開発の時村民が協力して創建されたものと伝えられています。

明治八年三月村社に列し、明治四十四年三月七日大宇百島字上の島の村社と稻荷社を合祀しました。

境内は本殿・拝殿を有し、末社に戎神社・金毘羅宮が在り、古くは境内に樹木が蒼然としていた事が残存の樹齢約四〇〇年の大樹楠切り株によつて往時を偲ぶ事ができます。

また、平成七年の阪神大震災により旧社殿は倒壊しましたが、氏子崇敬者の協力により平成八年十月に近代的な御本殿が御造営されると共に、境内も整備され、社務所も修築されました。

# 大阪市 中央区

▶ 大阪市にもどる



# いかすりじんじゃ 坐摩神社 (通称 ちまさん)

## 御祭神

生井神  
福井神  
綱長井神  
波比岐神  
阿須波神

## 御神徳

住居守護  
旅行安全  
安産守護

## 例祭日

四月二十二日



鎮座地 大阪市中央区久太郎町四丁目渡辺三号  
電話 〇六―六二五―一四七九二  
HP <http://www.ikasuri.or.jp/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

御安産の神としての信仰が深く、戌の日の安産祈願が多い。神功皇后ゆかりの黄色い岩田帯（腹帯）や安産鈴守が人気。また広げると一枚の絵になる白鷺のオリジナル御朱印帳もあり。



安産鈴守と岩田帯



オリジナル御朱印

## 由緒

御創建約一八〇〇年の歴史を持つ全国有数の古社であり、摂津国一之宮、また旧官幣中社として皇室を始め広くご崇敬を集めております。

当社の御祭神は五柱を総称して坐摩神（いかすりのかみ）と申します。坐摩神は古語拾遺等によれば、神武天皇が即位された時、御神勅により宮中に奉斎されたのが起源とされ、坐摩の語源は諸説ありますが、土地又は居住地を守り給う意味の居所知（いかしり）が転じた名称といわれています。

御祭神の御神徳は往古より宮域を守る神であることから、居住地を守り給う住居守護の神、また行路の安全を守り給う旅行安全の神、安産守護の神等として広く信仰を集めており、御祭神の名義から流水、井泉の神であり龍神としても篤く奉斎されています。

安産の神としては、神功皇后が応神天皇の御安産を当社に御祈願になり、近くは明治天皇がお生まれになるとき特に宮中より御祈願があり、当社の秋季大祭当日「旧暦」に皇子が御降誕されました。

旅行安全の神としても、萬葉集に防人が旅立ちに際して坐摩神に行路の安全を祈願した歌が詠まれています。

創祀には諸説がありますが、神功皇后が新羅より御帰還の折、淀川南岸の大江の岸・田蓑島、のちの渡辺の地（現在の天満橋の西方、石町附近）に奉祀されたのが始まりとされています。平安時代の「延喜式」には攝津国西成郡の唯一の大社と記され、産土神として今日に至っています。

また、朱雀天皇の御代、天慶二年（九三九）以来祈雨十一社中に列し、以後たびたび祈雨（雨乞い）のご祈請・奉幣に預かりました。

天正十年（一五八二）豊臣秀吉の大坂築城に当たり替地を命ぜられ、寛永年間現在地に遷座されました。現在の鎮座地名を渡辺と称するのも、元の地名が移されたもので、全国の渡辺・渡部等の姓の発祥の地でもあります。旧社地と伝えられる石町には現在も当社の行宮（御旅所）が鎮座します。

明治元年（一八六八）の明治天皇大阪行幸の際には当社に御親拝なされ、相撲を天覧されました。

昭和十一年（一九三六）官幣中社に列せられた際に御造営された壮麗な御社殿は、残念ながら戦災により焼失しました。現在の御社殿は昭和三十四年（一九五九）に鉄筋コンクリート造で戦前の姿のままに復興されたものです。

# 高津宮

こ  
う  
づ  
ぐ  
う

(通称 高津さん)

## 御祭神

仁徳天皇  
仲哀天皇  
心神天皇  
神功皇后  
葦姫皇后  
外一柱

## 御神徳

良縁成就  
諸願成就  
商売繁昌

## 例祭日

七月十八日



祭神事



縁結び守 各800円

王仁博士の故事に習い梅花を神前に奉  
献する献梅祭や天皇陛下御誕生の祝賀を  
こめた祭神事があります。

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪府中央区高津一丁目二九  
電話 〇六―六七六二―二二二二  
HP <http://www.kouzun.or.jp/>

## 由緒

当宮は浪速の地を皇都（高津宮）と定められ大阪隆昌の基を築かれた仁徳天皇を主神と仰ぐ神社であります。仁徳天皇が高殿に昇られて人家の水煙の乏しいのを見られて人民の窮乏を察し直ちに諸税を止めて庶民を救済されました御仁政はあまねく国民の敬慕する処であります。

その御仁政を慕い平安期の初期清和天皇の貞観八年（八六六年）勅命（天皇の命令）によって旧都の遺跡を探索して社地を定め社殿を築いてお祭りしたのを創始といたします。以後世々皇室を始め時の幕府等の度々の御造宮寄進を重ねて浪速津の守護神と仰がれ御神威輝き渡ったのでありますが、その後七〇〇年を経た正親町天皇の天正十一年（一五八三年）豊臣秀吉が大阪城の築城に際し比売古曾社の現在地に御遷座（神社の御神体に移ること）になって今日に及んでおります。

仁徳天皇の徳政を敬い大正十年に制定された大阪市歌にも「高津宮の昔より代々栄えをかさねきて民のかまどに立つけむりのにぎわいにまさる大阪市・・・」と歌われています。

昭和二十年三月の第二次大戦の戦火を浴び神輿庫を一つ残して社殿ごとく焼失しました。しかし戦後氏子を始め崇敬の厚い奉賛により昭和三十六年十月社殿以下ごとく復興完成を見ました。

大祭（夏祭）七月十七日・十八日

高津宮において、もつとも荘厳でかつ賑わいのある祭で浪速の夏の風物詩になっている。古伝に基づき当日は神饌には境内地に自生する「ごさいば」と「氷室」すなわち水をお供えする。この両日のみ夏の邪気をはらう獅子頭のついた笹が授与される。神賑いとして黒門市場より「みこし」が渡御され、境内の仮設舞台ではさまざまな演芸が奉納される。また絵馬殿では「だんじり囃子」にあわせて龍おどりが賑やかに行われる。そして両日も夜十時までたくさんさんの露店が軒を連ね多くの人々で賑わう。

### 「高津の富」

富くじ（現在の宝くじ）は寺や神社の修理基金を集めるのが目的で、江戸時代盛んに行われた。「高津の富」は高津神社が舞台となった落語で宿賃を踏み倒そうとした男がなけなしの一分の金で千両を当ててしまった話である。その他に「崇徳院」「高倉狐」の落語の舞台となっている。

### 「高津の黒焼き屋」

西坂をおりたところに戦前まで大阪名物の黒焼き屋が二軒あった。惚れ薬「イモリの黒焼き」「願かけのへび」など奇妙な薬を売っていた。

### 「遠目鏡屋」

江戸時代は今の絵馬殿のあたりが、展望の名所として全国にも知られており、ここで望遠鏡を貸して大阪のまちなみの説明をする商いが庶民の娯楽として賑わっていた。

すくなひこなじんじゃ  
**少彦名神社**  
(通称 神農さん)

御祭神

少彦名命  
神農氏

御神徳

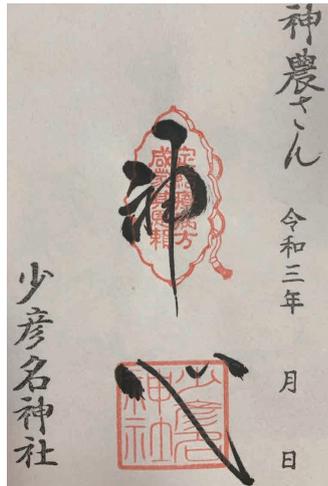
病氣平癒  
家内安全

例祭日

十一月二十三日



鎮座地 大阪府中央区道修町二一―八  
電話 〇六一六二三二―六九五八  
HP <http://www.shinosan.jp/>



※他朱印あり

## 由緒

当社は我国医薬の祖少彦名命と共に支那の薬祖神である神農氏を薬業界の守護神として祀る。桜町天皇享保七年に徳川八代将軍吉宗が南紀より入国の途次、大阪に於て病に罹り、容易に治らなかつた時に道修町より進上した薬が非常に能く効き、忽ちにして本復せられた為、入国の後、直ちに大阪道修町の薬屋一二四軒に免許を与え、共に和薬改会所を設けて諸国産地より入荷する薬の真偽善悪を吟味する特権をも附与せられた。ところが薬種の吟味は非常に至難な業であり、一步誤れば人命に関するので改役行司等が相議り、伊勢講を組織して神の加護を祈り、日々会所に出張し、薬種の吟味に従事したが尚安心できず遂に安永九年十月京都松原通西の洞院五条天神社の御祭神少彦名命と共に支那の薬祖神である神農氏をも改会所に勧請鎮祭して神明照覧の下に吟味の万全を期するに至つたのが当神社の起源である。

毎年十一月二十二、二十三日が当神社の例祭で大阪年中行事の一つとして親しまれ、神農祭と称して全国よりの崇敬者達で賑い盛大に執り行われている。また大阪の諸祭の中で年間最後の祭礼故に、とめ祭ともいわれている。

祭礼当日神社より授与される張子の虎の由来は文政五年の秋三日亡(コレラ)が流行して人々が大変苦しんだ時、道修町の薬種商等が相議って疫病除の薬として虎頭骨等を配合して製した、虎頭殺鬼雄黄圓という丸薬を施与し、合せて「張子の虎」を製し医薬の祖神である当神社の神前に供えて祈願を箆め笹に付けて病除の御守とし、一般に無料施与したのが初めであり、其の靈験著しく顕われて、之れの授与を乞う者が年々増加したが、明治中期売薬規則の発布と西洋医学の興隆に伴い、この丸薬施与を廃止して現在の「張子の虎」のみを一般に授与している。

# たまつくりいなりじんじゃ 玉造稲荷神社

(通称 玉造神社)

## 御祭神

宇迦之御魂大神  
下照姫命  
稚日女命  
月読命  
軻遇突智命  
外三柱

## 御神徳

商売繁盛  
良縁成就  
子授

## 例祭日

七月十六日



鎮座地 大阪市中央区玉造二丁目三十八  
電話 〇六一六九四一一三八二一  
HP <https://www.inari.or.jp>



## 神社のおすすめ

※他朱印あり



くろもん寿司



玉造の名産を寿司で食べる  
玉造黒門越瓜食味祭



子持勾玉土鈴 1,000円



恋キツネ絵馬 800円

## 由緒

垂仁天皇十八年(紀元前十二)に創祀され、古墳時代には、『日本書紀』に記された勾玉などを製作する難波・玉作部が居住したことから「玉造」の地名が発祥した。用明天皇二年(五八七)の秋には、聖徳太子(厩戸皇子)が仏教需要問題で物部守屋と争われた際、当地に陣を敷き、戦勝祈願した後「我に勝を与えるなら、これに枝葉を生ぜしめよ」と栗の白木の箸を地に差し込まれた。翌日、この箸から枝葉が生じ、戦も大勝に終わったことから、太子自ら十一面観音像、多聞不動像を作られ、長楽寺観音堂を建立された。社も天皇によってさらに増改築され、多くの人々の崇敬を集め、稻生五幸大明神といわれるようになった。

後醍醐天皇御代の建武の戦では、大和国にご神体を奉遷されたが、天正期の石山合戦で兵火を受けて社は消失した。その後、豊臣秀吉による大坂城築城で、神域が三の丸として整備され、付近には、前田利家や宇喜多秀家、細川忠興など大名の屋敷が並んだ。慶長八年(一六〇三)秀吉の後を継ぐ豊臣秀頼が、奉行の片桐且元や加藤嘉明に命じ再建し、大坂城の鎮守神として祭祀される。

元和元年(一六一五)の大坂の陣では、再度戦火に見舞われたが、元和五年(一六一九)大坂城代の内藤信正や諸士、氏子の寄進で再建された。徳川の世に入っても大坂城の鎮守神として崇敬され、城代が着任する際には、必ず定紋の提灯を奉納し、城内の諸神事を、神職が奉仕していた。また、江戸期の『稻荷社十五社巡り』等の史料には、大坂稲荷社の御本社と記され、当時流行した「お伊勢参り」では、西の玄関口として道中安全を願う参拝者で賑わいをみせた。文久三年(一八六三)の「新町焼」の大火では、またも社を消失し、明治四年(一八七二)に建立となるが、第二次世界大戦によりまたも灰燼に帰した。昭和二年(一九五五)に現在の社が建立された。混乱する近代において明治三年(一八七〇)に郷社、昭和三年(一九二八)十一月に府社へ累進せられた。昭和五十一年(一九七六)の三笠宮寛仁親王のご参拝を機に境内整備・拡張を始め昭和六十一年(一九八六)には、難波・玉造資料館を開館、創祀二〇〇〇年の平成元年(一九八九)、玉造稲荷神社分社を建立。平成二十七年(二〇一五)に、古代の三韓館にゆかりを持つ松の木大明神を合祀し、江戸期に疫病除けとして祈願された梅薬師を、新型コロナウイルスの沈静と民の安全を願い、令和二年(二〇二〇)再整備した。

# 豊國神社

ほうこくじんじや  
(通称 太閤さん)

## 御祭神

前関白太政大臣贈正一位豊臣秀吉公  
配祀前右大臣正一位豊臣秀頼公  
前権大納言従一位豊臣秀長卿

## 御神徳

出世開運  
必勝

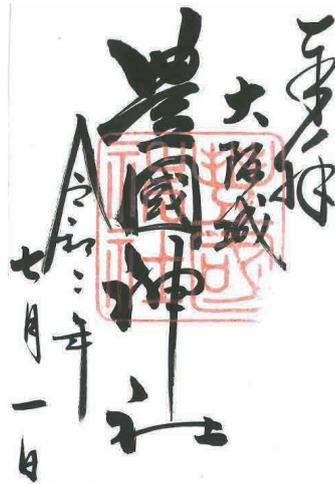
## 例祭日

八月十八日



豊臣秀吉公銅像

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市中央区大阪城二一  
電話 〇六一六九四一一〇二二九  
HP <http://www.osaka-hokokujinja.org/>

## 由緒

当社は明治元年に明治天皇大阪へ行幸あらせられ、四月六日当時の神祇局並に大阪裁判所に対し、次の如く御沙汰があった。「有功ヲ顕シ有罪ヲ罰スハ經國之大綱況ヤ國家ニ大勲勞有之候者表シテ顕スコト無之節ハ何ヲ以テ天下ヲ勸励可被、遊哉豊臣太閤側微ニ起リ一臂ヲ攘テ天下之難ヲ定メ上古列聖之御偉業ヲ繼述シ奉リ……」同時に「別紙之通被仰出候ニ付テハ大阪城近傍ニ於テ相應之地ヲ撰ヒ社壇造営被仰出候……」よつて明治十二年北區中之島一丁目山崎の鼻(今中之島公園中央公会堂附近)は土地清潔景勝の地であるから社地と定め、官費を以て豊國神社大阪別社々殿の造営に着手し、明治十三年九月二十八日正遷座祭を執行した。又明治四十五年七月二十九日現在の府立中之島図書館前(大阪市役所東)の地に移転の工を起し、同年十一月十五日正遷宮祭を執行した。而して大正五年六月十八日別社の崇敬者連署して別社独立を政府へ出願し、その結果大正十年十二月に至つて出願の趣旨聞届けられて、別格官幣社豊國神社の別社を廃止して、同時に豊國神社と改称し府社に列せられた。昭和三十四年中之島の社地も、大阪市発展と共に市役所庁舎の増築の議が起り、御祭神豊公ゆかりの大阪城二の丸の三〇〇〇平方米を境内地と定め御遷座申上げる事となり、同三十六年一月十八日大阪城内に御遷座の儀を執行した。

御祭神豊臣秀吉公は尾張の微賤より身を起し乱れた天下を統一し、天正十三年七月に関白となり、従一位に叙し、翌十四年には太政大臣に任じた。十九年関白職を猶子秀次に譲り太閤と称したが、慶長三年八月十八日朝鮮への壮途半ばに病を以て伏見城に薨去せられた。御年六十二才であった。

配祀の御祭神秀頼公は第二子で、母は淀君、文祿二年大阪にて生る。慶長三年八月、秀吉公薨ずるに及んで家を襲ぐ。元和元年再度徳川氏と開戦し、五月八日大阪城陥り年二十三才を以て濃ぜられた。また秀長郷は、秀吉公の弟で天文九年生る。天正十年美濃守、十一年大和國を与えられる。天正十九年五十二才を以て薨じられた。

# 御津宮

(通称 御津八幡宮)

## 御祭神

応神天皇  
仲哀天皇  
比咩大神

## 御神徳

厄除開運  
安産守護  
必勝祈願

## 例祭日

六月十五日



鎮座地 大阪市中央区西心斎橋二一〇一七  
電話 〇六―六二一―八六五五  
HP



御津八幡宮

令和二年七月十五日

※他朱印あり

## 神社のおすすめ

夏祭にはギャル神輿が氏地である心斎橋一帯を練り歩く、活気に満ちた渡御が行われ、節分祭には約五千個のクジ入り福豆を撒き、景品と引き換える追儺神事が行われ、多くの参拝者で賑わいます。



夏祭ギャル神輿



節分追儺神事

## 由緒

御津宮（御津八幡宮）は現在の心斎橋一帯の産土の社です。この地は、江戸時代初期以来全国有数の街として発展し、今日ではこの辺り一帯は「みなみ」と呼ばれ、大阪の繁華街を形成しています。

故にここを氏子としている当宮は、境内こそ約四百坪と狭いものの常時参拝者も多く、今も神社前を東西に伸びる街路は「八幡筋」の名を以て呼ばれ、大阪人にとって親しみのある社として今日に到っています。

縁起に依れば、孝明天皇の天平勝寶元（西暦七四九）年、手向山八幡宮が東大寺の守護神として宇佐八幡宮から勧請された折、宇佐からの神輿がこの地に上陸し、一時安置され、後にこれを御津八幡宮と改めたとなっております。

しかし、創始については明確に記した文献が残っているものはなく、諸説があります。法学者瀧川政次郎氏はこの地の歴史的背景から考察され、延久元（西暦一〇六九）年より承久二（西暦一二二〇）年の一五〇年間にこの地が石清水八幡宮の荘園となっており、石清水八幡宮が源氏の氏神として勢力を伸ばしたこの時代に創始されたのであるという推定を下しております。

いずれにしても古い歴史を有する神社であることは間違いありませんが、戦国時代の兵火に焼かれ、旧記も失われてしまいました。

また昭和二十年には、大阪大空襲のため本殿・拝殿すべて焼失し、現在の社殿は、昭和三十五年に再建されたものです。

かささぎもりのみや  
**鵲森宮**  
(通称 森之宮神社)

**御祭神**

天照皇大神  
用明天皇  
穴穂部間人皇后  
素盞鳴命

**御神徳**

病氣平癒  
除災招福  
諸願成就

**例祭日**

十月十六日



鎮座地 大阪市中央区森之宮中央一―一四―四  
電話 〇六一六九四一―九二九四  
HP <http://www.morinomiya.net/>

奉拜 聖徳太子創建の宮

令和二年 月 日

**神社のおすすめ**

一九四五年七月二十四日の空襲で被害を受けず現存する社や狛犬、鳥居。



鵲森宮御守



大友家持歌碑

**由緒**

当社は崇峻天皇二年七月、聖徳太子が御父用明天皇崩御の後、追慕の御孝心深くあらせられ太子自から尊像を彫刻し、且つ宮殿を造営になり御親祭のあった古社で、用明天皇を御祭神とする日本唯一の神社である。  
社名を鵲森宮と云うのは、上古難波の森と云ったのを、推古天皇の御代に、難波の吉士盤金と云う人が、新羅国より還つて鵲を二羽献上したのを、此の森に飼うようになり、鵲の森と称え、後に宮の名となった。略して森之宮とも云う。

当社御創建の当時は境内方八町あり神領神田は広大で、往古は神領千石余有り其の後織田信長の頃武人の為に掠奪せられ建造物も亦兵燹に罹り、当社の東に天皇田村(今の天王田)又その東に御供田村があり、これ等は古の当社の神領所であった。又当社の氏地と称するものは応永年間の頃迄は東方生駒山麓迄の村々皆氏地であったと云え、天文文禄の頃より寛永年間に至り鳴野村、中浜村、玉造村の一部及び森林が氏地となり、現在では東区森の宮町及森町一円の氏神として崇敬されている。

尚当社と四天王寺の關係は深く、崇峻天皇二年七月御祈願により聖徳太子自ら四天王の像を刻み大伽藍を当社附近の玉造の岸に建立せられた最初の四天王寺がこれである。然るに此の土地は低地にて、ともすれば浸水し伽藍を損することあるを以て之を憂い給い、推古天皇元年九月四天王の像及伽藍を現在の荒陵山の地に移し給う、而して諸堂の御鑑はその儘当社に残し置かれたと伝う。当社の東方にある寝駒川(禰駒川)の寝駒堤は聖徳太子の乗馬を飼育せられた旧跡であり又その附近に亀井水と云う有り、太子伽藍を建立の砌此処に自然に湧出する霊水あり、太子試み給うに人々の病を治すこと妙なりを以て亀井水と名付け給うた。

大友家持歌碑があり

「鵲の渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」

中国の伝説に七夕の夜にだけ鵲が翼を広げ天の川にかけて橋を織姫を渡すという「鵲の橋」という物語があり大伴家持の一首は七夕ではなく冬の歌です。鵲森宮の東側に流れ込んでいた天野川にかかる鵲の橋を歌ったものとされています。

境内には亀井水跡、安政時代に奉納の田沼玄番の鳥居あり。

# 大阪市 西区

▶ 大阪市にもどる



# 茨住吉神社

いばらすみよしじんじや

## 由緒

寛永元年頃に始まった新田開発工事の完成に伴い、九条新田の産土神として、また周囲の河川守護の神として、住吉大神をお祀りしたのが、創祀とされています。もともと、九条一帯は、淀川や大和川の河口付近に位置し、砂州を形成していました。やがて砂州は大小の島名なり、難波八十島と呼ばれ、九条島もその一つでした。時代の推移と共に、九条新田の田畑は家が建てられ、村となり、町となり発展し、大正から昭和初期にかけて、西大阪の中心街・歓楽街として繁栄し、神社境内には常時映画館や出店があり、昼夜参拝者で賑わっていました。昭和二十年の空襲により、神輿庫一棟を残して、焼失しました。

同四十年、現在の鉄筋コンクリート造二階建ての社殿を竣工し、同四十六年に、参集殿・渡廊・鳥居門・手水舎・石玉垣等の付属建造物と共に完成しました。

茨住吉神社の「茨」については、菟原群住吉郷の住吉神社（現在の本住吉神社）から分祀したためという説や、新田開発当時、「いばら」が生い茂った荒地に祀られたためという説がありますが、特定できる資料がありません。

### 境内社について

「玉照稲荷神社」と「市杵島姫神社」があります。

市杵島姫神社は、撰津名所図会巻三（寛政十年・一七九八年頃刊）所載の「かきつばたの池」に描かれ、大正時代に「亀の池」にお遷しをし、更に昭和五十三年有志の方々の御寄進により、御神木でもある「樟」の傍らにお祀りすることになりました。この御神木は九条島の当初から空高く聳え、樹齢六、七百年を数えた樟木の太木で多数の巳が棲息して信仰の対象になっていましたが、戦災で焼損しましたので、その樟の御霊を偲びこのお社にあわせてお祀りいたしました。

鎮座地 大阪市西区九条一―一―一七  
電話 〇六―六五八二―二二二一  
HP <http://www.iharasumiyoshi.org/>



## 神社のおすすめ

毎月一日午前九時過ぎに湯立神楽を行っております。  
また、数量限定ではありますが、御神酒と御饌米を授与しています。



### 例祭日

十月二十三日

### 御神徳

交通安全  
安産守護  
厄除開運

### 御祭神

底筒男命  
中筒男命  
表筒男命  
息長足媛命

# とさいなりにじんじや 土佐稲荷神社

## 御祭神

宇賀御魂神  
素盞鳴大神  
大市姫神  
田中大神

## 御神徳

## 例祭日

四月上旬



鎮座地 大阪市西区北堀江四丁目九一七  
電話 〇六―六五三二―二八二六  
HP <http://www.tosinari.jp/>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建は古く、天正年間と云われているが詳かではない。当社の棟札記（戦災により焼失）によれば、「享保二年に土佐藩主山内豊隆が、その臣、田中閔大夫及び片岡多門に命じて社殿を造営す。」とある。

即ち、西長堀橋畔にある、土佐藩蔵屋敷の守護神として奉斎したのが始まりである。故に、俗称「土佐稲荷」と呼んだのである。

又、当初は藩費をもって、蔵屋敷に勤める藩士により祭祀を行っていたようである。明治維新後は、その邸地一帯が三菱の岩崎弥太郎の有するところとなり、明治八年、三菱の資を投じて社殿の造り替えをするに及んで、大いに神社の荘厳を加え昭和の御代に至り、郷社に列し、その面目を一新したのである。

山内侯寄進の石灯笼数基あるが、末社石宮神社の側にあるのが、人目を惹いている。又本殿前参道両脇に、岩崎弥之助寄進による青銅狗犬一對もある。

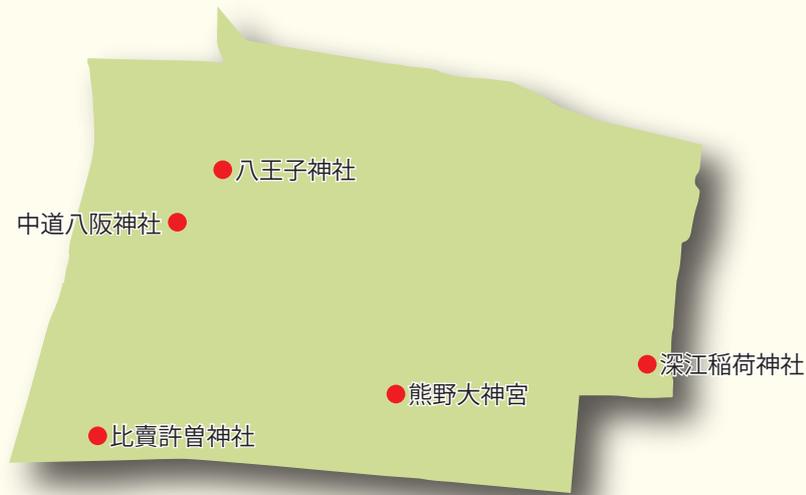
### ◎土佐稲荷の桜

古来より桜樹多く、次の様な記事を摂津名所図会大成に記載されている。  
「あみだ池の西、土佐御屋敷の内にあり。鎮守の稲荷の神なり。近来、社頭に桜を多く植えつらねてより花の頃は一しほに参詣者群をなせり」

風流の国守なるらん山さくら 北村  
殿達に袖すれ合はせ花見かな りん  
心程うごくものなしはなの暮 睦台

# 大阪市 東成区

▶ 大阪市にもどる



# くまのだいじんぐう 熊野大神宮

## 御祭神

伊弉册尊  
速玉男命  
事解男命  
大己貴尊  
素盞男命  
外一柱

## 御神徳

諸願成就

## 例祭日

十月十七日



このような古い狛犬も

## 神社のおすすめ

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

鎮座地 大阪市東成区大今里四一六―四八  
電話 〇六一六九七一―六九九七  
HP

## 由緒

当社創立年代は少くも一五〇〇年以上を経ており、遠く詳らかではないが、用明天皇二年、厩戸皇子が四天王寺を浪速玉造の岸に創立された時、十二坂の伽藍を建立せられ、当社の社務を司どらしめられた。当社社殿は宏麗、境内は広潤、祭事備具すこぶる堂々たるものであったと伝えられている。然るに正親町天皇元龜元年、石山寺本願寺の主僧頭如が、織田信長と交戦の時、当社及び伽藍が兵火のため烏有に帰したので、本社及び一坊舎（角坊今の妙法寺）が仮に建立された。

後陽成天皇文祿甲午年、船越五郎右衛門検地の際、氏神熊野権現宮地四反四畝二十四歩に削減。

慶長の初め従二位阿闍梨正園社僧。

慶長六年阿闍梨祐慶社僧となり、同九甲辰年本殿及び拝殿を再興。

同十九甲寅年冬、徳川將軍家康大阪の役の時京極若狭守当宮地を陣屋とした。

後水尾天皇元和元丁卯年、松平下総守忠明以後、大阪城代就任の節及び領地検地の際必ず当社に参拝されている。

元和元年阿闍梨手定社僧。

靈元天皇延宝五乙巳年、九鬼和泉守検地の際以前の通り除地と記録されている。

延宝七年阿闍梨契神社僧。

明治八年村社に列せられ、ついで権現号を廃止、熊野大神宮と改称。

全年地租改正の際、又々境内を削減せられ一反七畝九歩官有地第一種となり、明治四十四年七月十一日、大阪府指令を以って東今里村社八劔神社を当社に合祀。

全年七月十七日同じく無格社菊理姫神社を合併。

大正七年神饌幣帛料を供進することを得べき神社と指定。

# 八王子神社

はちおうじじんじや

## 御祭神

八王子大神  
宇賀御魂神  
素盞鳴命  
奇稲田媛命  
大己貴命  
(末社)  
八立龍王社  
白龍王社  
熊鷹稻荷社  
(拝殿内)  
不動明王

## 御神徳

厄除開運  
邪気清祓  
家内安全

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 大阪市東成区中本四一―二―四八  
電話 〇六一六九七一―八四七九

H P



## 神社のおすすめ

二月三日節分祭は八王子神社厄除大祈願として、午後七時より修験道を招き、大護摩焚を斎行し、約五千本の護摩木・古札御守等をお焚きし、最後に火渡り神事を行い邪気を祓う恒例行事です。

## 由緒

当社の創建年代は詳ならず。社伝に依れば応神天皇三年に浪速の東方を流るる平野川の右岸、狭技荘、一の丘なる小松山（現在地）に鎮祀せられし御社が本社の起源なりと伝う。

又、孝徳天皇浪速味経宮に坐せし頃、御崇敬の叡慮に依り、高麗狗一對を献納せられたとも伝わる。

其の後星霜を経て、里人産土神とし、八王子稻生大明神、と称へ崇敬せり。

往古より境内には椿樹繁茂し、俗に「椿の宮」として世に知られたり。

社殿も記録に依れば、天曆二年、元仁二年、宝曆五年、安政六年に夫々修営改築し、

近くは昭和四十年に造営せるものなり。

明治五年村社に列し、社名を百濟神社と改め明治四十二年十一月、旧西今里村社八劍神社（御祭神、素盞鳴命、奇稲田媛命、大己貴命を奉斎し、仁徳天皇高津宮の皇居守護神として勧請せられし社なりと伝え、現在当社の御旅所なり）を合祀し、社号を八王子神社と改称し当地一円の氏神として今日に至れり。

尚境内末社として、八立龍王社、稻荷社を祀れり。

昭和五十三年より日本相撲協会、時津風部屋の宿舍として平成二十六年まで、平成二十八年より錦戸部屋の春場所宿舍として約四十日間滞在し、氏子地区・多方面の方々が連日陣中見舞いに来られ春の行事として年々盛大になってます。

# ひめこそじんじや 比賣許曾神社

## 御祭神

下照比賣命  
速素盞鳴命  
味組高彦根命  
大小橋命  
大鷦鷯命  
橘豊日命

## 御神徳

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市東成区東小橋三十一番一四  
電話 〇六一六九八一〇二〇三  
HP

御朱印は直接神社へ

お問い合わせください

## 神社のおすすめ



夏祭りの風景

## 由緒

当社は其の創建極めて古く、人皇第十一代垂仁天皇の御代（今より約二千年前）愛来目山（今の天王寺区小橋町一帯の高台）に下照比賣命を祀ったのを起源とすると伝えられ、其の後第二十三代額宗天皇の御代、社殿の造営あり、又第三十三代推古天皇十五年春正月正遷宮の際天皇の行幸あり、又第五十六代清和天皇貞観元年に神階を従四位上に進められた。即ち延喜式内名神大社であり、実に壮麗なる社殿であったが数度の兵乱により改築毎に小社となり、遂に天正年間織田氏の石山本願寺攻めの兵火に遇い、辛くも難を避けて撰社であった牛頭天王社に移ったのが現今の社地である。昭和三年御大典を記念して社殿社務所を改築、昭和十二年一月氏子有志より大神輿の奉納があり、その年より夏祭に神輿渡御を行い其の巡幸行列は年々歳々盛大である。

### 境外撰社産湯稻荷神社略記

当社は其の創建年代等は詳かでないが比賣許曾神社旧社地大小橋命の産湯の井と称する井の附近にあつて、産湯稻荷神社と称せられ比賣許曾神社の撰社であつたが、天正年間の兵火により悉く烏有に帰し、比賣許曾神社は現今の社地へ移され、当神社のみ再び旧地に奉祀せられる。其の年代不詳なるも寛政八年出版の撰津名所図会に其の建物を挿絵に記載せられているので寛政以前の建造物である事は明かである。而して今次大戦の戦火により、古い社殿は焼失しそのあとへ昭和二十三年有志の寄進により社殿を新築されたものの規模は極めて小さく、境内は荒廃したままであつた上に大阪市の都市計画により境内隣接地に公園が新設せられ、周辺の様相が一変したので本社としてもこれに適応せしむる為に産湯稻荷神社復興委員会を組織して復興に当り、昭和三十九年七月社殿社務所の新築境内地の整備を完成す。

# なかみちやさかじんじや 中道八阪神社

## 御祭神

素戔鳴尊  
菊理姫命

## 御神徳

厄除開運  
良縁成就  
交通安全

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 大阪市東成区中道四一八一〇  
電話 〇六一六九七一四一〇三  
HP <http://yasaka-ehisu.jp>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

物事がウマくいく『福を運ぶ親子神馬』  
として親しまれております。  
家内安全や商売繁盛などを祈願する縁起  
物として、紙絵馬を家の内側に  
向かって福が駆け込むように飾ると良い  
とされます。



親子神馬



親子神馬紙絵馬 1,500円

## 由緒

八阪神社について

御祭神 素戔鳴尊（厄除け開運・交通安全）

菊理姫命（良縁結び）

〔当社は元東成郡中道字法性寺通称二侯の地に鎮座せり。往時此地は一带の丘陵地で風光明媚なので、寛仁元年法性寺入道関白藤原道長此れの地に別邸を設け、守護神として牛頭天王及び白山権現を鎮祀せしに始まる。〕

当神社の創建は古く、寛仁元年（一〇一七年）までさかのぼります。平安貴族の中でも栄華を極めた関白藤原道長が東成郡中道法性寺なるところに別邸を建て、素戔鳴尊・菊理姫命の同一神とされる牛頭天王・白山権現を鎮守の神として奉祀されたのが始まりです。その後、仁安元年（一一六六年）に社殿を再興し、天正十二年（一五八四年）には現在の地に遷座。社殿を東向きに配し、牛頭天王白山権現社と称せられました。そして、明治五年、八阪神社と改め、この地の産土神社となります。明治四十二年には境内より暗越奈良街道参詣道を開拓し、街道筋に大鳥居を建てましたが、大正六年、玉垣を新設するとともにこの大鳥居を移動し、その跡に社名標石を建てました。現社殿は、氏子総代、世話人、崇敬者などと共に準備・設計を進め、大正十一年十二月に起工。大正十三年五月末日に完成し、その姿を南向きに変えました。

玉造戎神社について

御祭神 事代主大神（商売繁盛）

大国主大神（家内安全）

当神社の社殿としては最も古く天正十二年（一五八四年）この地に建てられ、主祭神（素戔鳴尊・菊理姫命）が祀られました。その後、大正十三年（一九二四年）には、現在の本殿に主祭神の神霊を移し、元の社殿は修築を施し、昭和二十三年（一九四八年）に島根県美保神社より事代主大神を御分霊いただき、出雲の国より大国主大神をここにお招きし、御鎮座いただきました。

この際には、戦後の玉造の復興と発展を願って、官公庁を始め、商店街、神社総代、世話人の方々など、多くの人々に開わり協力していただきました。

また、美保神社からの御分霊の際、帰途の道中では、日本国有鉄道玉造駅（現JR玉造）の駅長室を神霊の仮のお宿として開放していただきました。このように、地域のさまざまな方々から、大きな願いとご期待を寄せていただき、また多大な御協力をいただきましたことを鑑み、お迎えしました事代主大神、大国主大神を『玉造戎神社』としてお祀りし、現在にまで至っております。

# 深江稲荷神社

（通称 鋳物御祖神社）

ふかえいなりじんじや

## 御祭神

稻倉魂大神  
猿田彦大神  
天鈿女大神  
月讀大神  
稚日女大神  
軻過突智大神  
下照姫大神

## 御神徳

## 例祭日

十月十七日



境内風景

## 神社のおすすめ

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

鎮座地 大阪市東成区深江南三十一六一一七  
電話 〇六一六九七一四二三三  
HP <https://www.fukaeinarijinja.jp/>

## 由緒

当社の創建年代は垂仁天皇の御代笠縫氏の祖が摂津国東生郡笠縫島宮浦の地（今の深江東五丁目の地）に居を定め、下照姫命を奉祀したのを始めとし、その後元明天皇和銅年間に山城国稲荷神社の御分霊を勧請したものであるといわれる。慶長八年豊臣秀頼、片桐市正、加藤左馬介に命じ社殿を改造したが、慶長十九年に兵火にて焼失、その後宝暦十年に本殿及び絵馬堂を再興し、寛政八年に本殿、拝殿に修理を加え、同時に石鳥居を再建し、明治五年村社に列せられた。

又境内鎮座の笠縫部の祖を奉祀する笠縫神社がある。笠縫氏は世々大和笠縫邑に住み皇祖の御神鏡を守護し、垂仁天皇の御代その一族は浪速の入江、片江、深江の島に移り笠縫島と称し世々菅笠を作るを業とし、伊勢神宮式年遷宮の行われる毎に御神宝の菅御笠と菅御翳を調進し奉るを例とする。又歴代天皇御即位式の大嘗会に用いられる菅笠をも、この深江より調進された。菅笠は古くは専ら貴顕の用に供されたが、近世に至り、一般世人の旅行あるいは作業に用いられ、伊勢参宮などには必ず携帯する習慣となった事は、摂津名所図会に見えるところである。

又同じく境内の御食津神社は霊亀元年伊勢外宮より豊受御食津神の御分霊を移し奉祀せるものである。

# 大阪市 港区

▶ 大阪市にもどる



# 三社神社

さんじゃじんじゃ  
(通称 三社さん)

## 御祭神

天照皇大神  
豊受大神  
住吉大神  
熱田大神  
齋主大神  
外一柱

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
厄除開運

## 例祭日

十月二十一日



稲荷社



大海神社・柿本神社

市内に於ける氏神様としては境内が広く、すっきりとした印象の神社です。特に七月二十日・二十一日の夏祭は、西大阪地域では最大で太鼓・獅子が練り歩き多くの露店が並び賑わいます。

## 神社のおすすめ

奉拜  
三社神社  
令和二年七月二十日

鎮座地 大阪市港区磯路二一八一三  
電話 〇六一六五七一〇五八  
HP

## 由緒

当社は元禄十一年十一月、現在の氏子地域(当時、この地は九条島浦という海辺)の開拓者、伊勢桑名の人で市岡与左衛門宗勝が、埋立開拓工事の安全と成功を祈り、守護神としてこの地に勧請し奉ったもので、日夜従業者と共に祈願をこめ、防波堤は波浪にさらわれるなど、しばしばの災禍にも霊験あらたかであったと伝えられる。

やがて工事の竣成と共に、元禄十三年三月市岡新田字十の割に神域を劃し、社殿を建立して御神徳にこたえ、尊敬の誠をささげると共に永久にこの地の住民の守護神として奉斎した。

爾来開発鎮護の神として、居住者一般の崇敬篤く、江戸時代から、明治、大正、昭和にかけて、この地の精神的結合の中心として、生活の根源を培い、郷土発展の基盤となつて氏子住民の繁栄をもたらすと共に、神社もまた大いに興隆した。

大正末期には、参詣者の増加に伴い、氏子各位の御発意と御奉賛によって、神域を氏子地中央部に移すこととなり、大正十四年新社殿の造営に着工、昭和二年、旧社地に壮麗な神殿の竣工を見る、盛大な遷座祭が行なわれた。次いで昭和十一年、参集所兼婚儀殿の造営がなつて、境域は整備し、神輿、鳳輦、御所車なども整い、壮厳な夏祭、神幸祭が行なわれ、西大阪における敬神の霊場として、社頭は殷賑を極め、氏子各位の福祉とつながって、愈々御神徳の高揚を拝した。

然るに昭和二十年三月十三日の戦禍に遭遇し社殿など一夜にして炎上したが、幸い御神体を奉安、祭祀をつづける中、たまたま大阪市の都市計画と盛土工事を機会に換地移転して、神域を現在地に移し、昭和三十五年十二月、社殿復興造営新築なり、今日に至っている。

# 三津神社

みつじんじや

## 御祭神

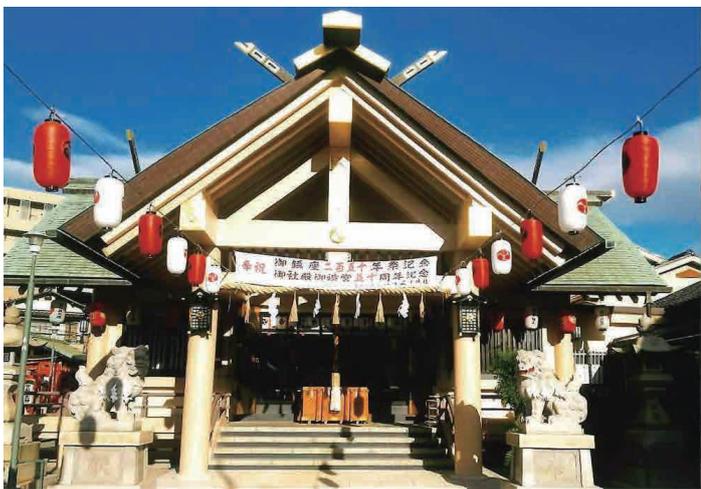
天照皇大神  
大海大神  
住吉大神  
生国魂大神  
宇迦魂大神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穰

## 例祭日

七月二十三日



石中稻荷神社（末社）



戎神社（末社）

神社のおすすめ



鎮座地 大阪市港区夕風二一六一一  
電話 〇六一六五七三一〇六二三  
HP

## 由緒

当社は明和元年大阪府下豊島郡才田村の人、石田三右衛門が石田新田開発の際、工事の安全と成功を祈り守護神として、明和五年此の地（今の石田町二丁目から安治川の川中にあたる）に社殿を建造勸請したもので、創祀にあたり天照皇大神を奉斎して、石田皇大神宮と称し、爾来当地の開発鎮守の神として村人の崇敬篤き神社となる。

明治五年村社に列せられる。

明治四十年十月七日石田皇大神宮へ、田中町村社の田中産土神社を合祀し両町名の一字ずつを取って社号を石中神社と改称した。

明治四十二年石田神楽町へ移転遷座した。其の後大正二年十月六日八幡屋町の八幡屋住吉神社を合祀し、三つの津、三つの社を合祀されたところから、昭和七年四月社号を三津神社と改称されるに至った。昭和八年三月田中元町五丁目に移転した。ここで三町協力し、社殿改築御造営に着工し、昭和十一年十月十六日壮麗な新社殿の完成と共に御遷座せられたが、然るに昭和二十年六月一日第二次大戦の戦災に罹り焼失するに至った。其後大阪市の都市計画と盛土工事のため、昭和二十五年五月一日西田中町に移転、仮殿に遷座せられ祭祀を続ける内、たまたま大阪市が同氏神地に国際見本市会場を建設するに至り、やむなく移転する事となる。これを機に茲に再建復興の御造営の運びとなり、現在地に昭和四十二年十二月二十日壮麗な新社殿の竣工と共に正遷宮を執行。こうしてあらゆる苦難を乗り越え七転・八起今日に伝えた吾が郷土生成発展の守護神であります。

# 天満宮

てんまんぐう  
(通称 三先天満宮)

## 御祭神

菅原大神  
住吉大神  
稲荷大神

## 御神徳

学業成就  
海路平安  
五穀豊穰

## 例祭日

十月二十五日



鎮座地 大阪市港区三先一―五―四〇  
電話 〇六一六五七一―〇五二七  
HP <http://www.temmangu.net>



## 神社のおすすめ



## 由緒

天保初年（一八三〇年）葦屋勇助なる人物がこの土地の開発を試みますが、度重なる水害に遭い、功半ばにして池田屋大吉なる人物にその開発を譲ります。池田屋大吉は開発に先立ち天保六年（一八三五年）、成功を祈願して大神様を勧請し、お祀りします。

開発は無事成功し、開発された土地は「池田新田」と称されるようになりました。この成功を以て神域を整え（現在の港南公園北東隅付近）、大神様を産土神とされました。明治三十三年（一九〇〇年）より鎮座地名は新池田町となりました。

明治四十五年・大正元年（一九一二年）には当時の地主、田中市蔵なる人が私財を投じ修築されました。大正十四年（一九二五年）より鎮座地名は三先町となり、昭和二十年（一九四五年）には、この辺りは空襲に遭い焼け野原になりましたが、当社は大神様のご加護により消失は免れました。しかし、その後の風水害により荒廃し、その都度改修工事を繰り返しました。

抜本的改修が必要とされていた折、大阪市による盛土工事の施行と隣接の港南中学校の拡張が決まり、これを機に昭和四十年（一九六五年）に現在地に遷宮御造営がなされました。昭和四十三年に鎮座地名は現在と同じ三先となりました。

平成十七年（二〇〇五年）には、御鎮座百七十年のお祝いの節目を迎え、昭和三十年に齋行された奉祝祭以来五十年ぶりに奉祝祭・奉祝行事を厳粛に齋行申し上げます。

また、御鎮座百八十年の節目を迎えるに当たり、平成二十六年（二〇一四年）に氏子崇敬者の崇敬の念のもと玉垣改修工事を執り行い、御神威をあらたかに翌平成二十七年（二〇一五年）に御鎮座百八十年奉祝祭・奉祝行事を齋行申し上げます。

港区三先・池島の氏神様として崇められています。

すみよしじんじや  
**住吉神社**  
(通称 福崎住吉神社)

**御祭神**

天照皇大神  
住吉大神

**御神徳**

家内安全  
商売繁盛  
交通安全

**例祭日**

七月十八日



鎮座地 大阪市港区福崎一―一三九  
電話 〇六一六五七四―二五九二  
HP



**神社のおすすめ**

境内に有るザクロの木に毎年二百個以上の実が成り、婦人病や子宝など秋には多くの方にお頒ちしています。



**由緒**

天保六年新田開発の際勧請した。  
明治四年洪水に遭い流失、明治七年八月再建され明治四十二年「村社」に指定された。  
大正四年九月尻無川改修用地に該当したため同年十月移転。  
昭和三十三年十一月大阪市長より都市計画交換地指定を受け現在地の移転。  
昭和二十年大空襲、昭和二十五年ジーン台風により荒廃幾多の災難に見回れながらも神社総代や責任役員等の厚い志により三十年かけ昭和四十四年七月十八日日本殿竣工・昭和五十五年八月二十五日社務所が整い氏子一同の永年の宿願が叶う。

**境内**

倉庫や運輸会社、工場の中に位置する小さなお宮で有ながら、四季折々の花々が咲き温州ミカン・佐藤錦サクランボ・レモン・柘榴・カリン・姫りんご等の季節の果物も実り参拝者の目を楽しませております。珍しい海鳥も迷い込んで来たりと心和む風景に出会えています。

すみよしじんじや  
**住吉神社**  
(通称 湊屋住吉神社)

御祭神

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命

御神徳

海路平安  
海上守護

例祭日

十月二十四日



鎮座地 大阪市港区池島二一八―四  
電話  
H P

御朱印なし

由緒

宝暦四年（一七五四年）に、湊屋新田を開発成立させた湊屋吉左衛門により勧請されました。

社殿は安政四年（一八五七年）、明治四十三年（一九一〇年）、昭和五年（一九三〇年）に改築されました。その間、鎮座地名は明治三十年（一八九七年）に湊屋となり、同三十三年（一九〇〇年）には湊屋町、大正十四年（一九二五年）には湊屋浜通となりました。

昭和二十年（一九四五年）六月一日、空襲に遭い社殿は焼失し、終戦後の昭和二十二年（一九四七年）頃、安治川拡幅工事により境内地も水没しました。翌昭和二十三年（一九四八年）頃、大阪都市計画事業港地区復興土地区画整理事業による換地である現在地に移転し、現在に至ります。

# 大阪市 此花区

▶ 大阪市にもどる



# 産土神社

うぶすなじんじや  
(通称 産土さん)

## 御祭神

天照皇大神  
住吉大神  
宇迦之御魂神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穡

## 例祭日

十月十六日



昭和十三年御造営された「住吉造り」のご本殿です。  
戦災風水害を乗り越え、今日も尚荘厳さを保ち続けております。

## 神社のおすすめ

※他朱印あり



鎮座地 大阪市此花区島屋三十一三一二八  
電話 〇六一六四六一〇二四七  
HP

## 由緒

宝暦年間、大阪の人、島屋こと浅田市兵衛氏が、此地の開墾を企て、住民の福祉と土地の繁栄を祈願し、皇祖 天照皇大神、海波の守護神清祓の神 住吉の大神、五穀豊穡の神 宇迦之御魂神の三柱神を夫々本宮より奉請正連寺川南岸の一角（北港大橋南西詰）に社殿を営み、当地方の守護神と奉斎したのが当社の創祀であります。

明治四十四年八月七日 旧恩貴島北之町（現在伝法六丁目） 恩貴島橋北東詰に鎮座の皇大神社を当社に合祀す。同神社は元禄十五年（西暦一七〇二年） 大宮仁左衛門氏が恩貴島新田を開拓するに当たり、同三柱を奉祀したものである。

大正四年十一月十日大阪市より神饌幣帛料を供進し得べき神社と指定される。

昭和九年秋 室戸台風の災禍を蒙り昭和十三年七月十六日、現在地に鎌倉時代の遺繩に則り壮麗なる社殿を造営し遷宮される。

昔日、大戦の戦災被爆には厳然として社容を保ち、再三の風水害の被害には常に時の氏子崇敬者の奉賛に依つて、その都度営繕し、御造営当初の社容を保持し、其の神威も赫々と満ち今日にいたることは、累代の氏子一貫して当地方安寧融和の指針として本神社を守り抜いた神威の尊厳と氏子の民風敦厚なるを知る証左である。

而して今や住民の心の拠り所として、且つ、大工業地帯の守護神として益々ご神徳は崇敬され又神奈備の神の森の茂りと共に此花区の名所の一つに挙げられ、常に野鳥の群れ飛びきたり住民の丹心の齋庭となり心の休まる杜となつておりましたが、平成十年に当神社現在地へ遷座六十二年御創建二百三十年奉祝記念事業として氏子崇敬者・関係各位のご協賛を仰ぎご本殿・拝殿の御屋根銅板葺き替え工事を致しました。

次いで、平成十一年には桜島守口線道拡幅工事の為、やむなく境内地の一部を大阪市へ譲渡することとなり、境内整備工事に致しましてご本殿拝殿を元のごとく境内の中央に配置したく南へ約四メートル移設し、末社・手水舎・制札の移設に御屋根葺き替え工事を始め、神器庫、太鼓蔵、社務所の新築工事に玉垣新設等 平成十三年二月に完工し四月春大祭に併せて報告祭を斎行申し上げました。

さて、当此花区は古くより我が国、重工業の発祥の地として、産業の発展に貢献し、日本の経済に、又世界経済の興隆に寄与して参りました地域であり、かつては多くの船が造られ世界七洋の海に船出し活躍してきたところでもあります。大阪の一番西ではあります。今にては、産業・経済・流通・文化交流の基盤として湾岸道路の開通、スポーツランドの舞洲、令和七年大阪・関西万博が行われる夢洲、大阪府庁舎がある咲洲と愈々に将来の発展が期待される場所ではありません。平成十三年三月三十一日よりハリウッド映画テーマパークのユニバーサル・スタジオ・ジャパンの開業が始まり、毎日日本中へもとより、世界各地から多くの人々が訪れ、楽しい一日を過ごされ盛況を博しており、此花といえど大阪、此花といえど日本と広く知れ渡る事となりました。

今後は鎮守の杜の護持に努力致し信仰の場として神奈備の神鎮まりますお社として形成して参ります。

すみよしじんじや  
**住吉神社**  
 (通称 四貫島住吉神社)

**御祭神**

表筒男神  
 中筒男神  
 底筒男神  
 息長足媛命

**御神徳**

交通安全  
 安産守護  
 除災招福

**例祭日**

十月二十日



大阪市此花区

鎮座地 大阪市此花区梅香三丁一四一六  
 電話 〇六一六四六一二五七二  
 H P



**神社のおすすめ**

神職が思いを込めて調製した良縁守りがおいてあります。



良縁お守り 600円

**由緒**

当社は本地の中浦と呼ばれた天正年間、七右エ門、弥右エ門、重右エ門、長右エ門と云う四人の者が来て漁業をなし、又は船夫に雇われ、余暇には土地の開墾に従事した。慶長の頃には戸数も漸く増加して二十戸を算え、米、麦、野菜等は外から供給を仰がなくてもよくなったが其の主な職業は前記の様に漁業又は船夫であるので、海上の守護神と尊ぶ住吉大神を信仰する事深く、元和年間、住民協議して、摂津住吉大社の神官橋本亀太夫に請い、其の四柱神の分霊を今の千鳥橋の下方なる中津川沿岸(四貫島元宮町)に祀ったのが当社の起原である。宝暦五年、四貫島大通一丁目に移転、更に大正十年大阪市電敷設に当り、境内地其の敷地になり現在の所に移転する。この間昭和二十年三月十三日及び同年六月一日の空襲にて戦災をうけ、昭和三十八年復興する。

# 朝日神明社

あさひしんめいしゃ

## 御祭神

天照皇大神  
倭比賣命

## 御神徳

五穀豊穰  
商売繁盛  
諸願成就

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市此花区春日出中一―六―二  
電話 〇六一六四六一―八二三八  
HP



令和二年八月十四日

## 神社のおすすめ

平成七年に境内社である春日社が再建された際、信楽焼の親子の鹿三匹が奉納され、春日社左側スペースに鎮座する。



## 由緒

当社は、古く大阪市旧東区神崎町にあった「朝日神明宮」と、此花区旧川岸町にあった「皇太神社」を合祀したものである。朝日神明宮（一名逆櫓社）は古く、享保年間、源政冬が書いた縁起書によれば、朱雀天皇の天慶年中、平貞盛の創建とあり、その要旨を抄録すれば、平将門が下総で乱を起し、常陸にあった平国香を亡ぼした。これがため国香の長男であった貞盛が、父の仇を報せんと、時の摂政藤原忠平に乞い、朝敵追討の勅命を受け、関東に下向せんとした。貞盛京師を發つに当り、浪速の地に天照皇太神を奉斎し戦勝を祈願した。幸い将門を討ち平げこのことを帝に奏上したところ、帝も叡感の余り御神徳を称え「朝日宮」という神号を賜わった。その後年月を経て、源義経が、平家追討の途次（屋島の合戦）には、当社に寄つて戦勝を祈願している。これには、義経が梶原景時と史上有名な「逆櫓の論」をやっているが、自分は神明宮に祈願をこめていたので、戦勝疑いなしと、敢えてこの論争をやったものという。豊臣時代になっては豊臣秀吉が大坂城築城に当り、多くの社寺は遷坐を命ぜられたが、当社はさきに勅願の故もあつて、そのまま旧地にあつた。のみならず年米百俵の寄進も記録されている。大坂夏の陣においては真田幸村公が当社に金色の採配を奉納し出陣した。徳川時代に降つても大阪城代は、例年参社の上、神饌を供していた。当時境内は、方八町もあつたという。又、熊野御幸記に記せる坂口王子祠（第二王子）も当社ならんという。

一方、皇太神社は、古くより川岸町にあつた。この川岸町は、南新田といわれ、一面芦原であつたが、この新田の支配を命ぜられていた佐竹甚兵衛という人が、開拓し今日の基礎をつくつた。この佐竹氏は、生来敬神の念厚く、天保年間伊勢の御分霊を乞い受け、神祠を造つて新田の鎮守の社として奉斎していた。これが皇太神社である。

明治維新後は、両社とも社運傾き、当時維持困難な社は、合併合祀を命ぜられ、その去就を問われていた。当時南区にあつた富豪豊田宇左衛門が、これを聞き、氏は川岸町一円の大地主であつた関係上、両社を合祀して「朝日神明社」と社号を改め、明治四十年認可を受けて、新しく発足した。ところが川岸町一帯は世の進むにつれ、工業地として発達したため、このあたり一帯は、煤煙に包まれ、社頭の尊厳さえも維持し難い有様となつた。そこで豊田氏より、境内地の寄進を受け昭和六年、現在地である、春日出町に遷宮した。

## 境内社

春日社は当社が鎮座する「春日出」の氏神であり、元禄十二年奈良の春日より一匹の社鹿が当地に出て来たことに由来する。残念ながら先の大戦において焼失したが、平成七年春日大社ご造替に伴い本宮神社の旧社を撤下され春日の社殿が再建された。

安喜良神社は河内国道明寺村の道明寺に安置ありし、菅原道真公自作の荒木の尊像を明治の神仏分離に際し土師神社神勤松寿院住職より阿波屋の有志が譲り受け奉斎したが、先の大戦により焼失した。

# からすのみや 鴉宮

(通称 本宮鴉宮)

## 御祭神

内陣(三柱)  
天照皇大神  
住吉大神(四神) 神使 八咫鳥  
蛭子大神(えべっさん)  
外陣(一柱)  
市杵島比売大神  
(水神・宇賀弁財天)

## 御神徳

諸願成就  
商売繁盛  
家内安全

## 例祭日

一月十日 えびす例大祭  
八月一日 夏例大祭  
十一月三日 秋例大祭



・JFAサッカーお守り  
・やたがらす携帯ストラップ  
・やたがらす守  
・八咫鳥うちわ  
・八咫鳥交通安全ステッカー  
・やたがらすおみくじ



官幣中社時代に宮殿を遷宮(神明造 鯉木六本)



船先は太閤合により源氏神主田中八太夫が水先奉行(大坂船奉行の前進)となる記念。

## 神社のおすすめ

※他朱印あり



令和二年八月一日

鎮座地 大阪市此花区伝法二丁目一〇一八  
電話 〇六一六四六一―三五九二  
HP OSAKA INFO大阪観光局公式サイト(鴉宮で検索)

## 由緒

鎌倉時代前期(一二一五年)人皇八十四代順徳天皇建保二年三月十七日傳母(デンポウ)村開拓の始め村と港、全国の隆盛繁栄を祈願し建保三年四月二十五日傳母頭(モリス)宮殿を建立し宮殿に皇祖天照皇大神、住吉大神、蛭子大神(恵美須大神)を奉祭し敬神行事を厳肅にせり。

文祿元年二月十九日太閤豊臣秀吉公は日本海彼地渡航に際し、重要港を傳母村川口の港と定められ、出征の時に際して傳母頭宮殿奉仕の源氏神主田中八太夫に令し海路の平穩渡航安全長久及他祈願をなさしめたり。

亦最も奇しき事には、神主隅々夢中神の御告には、社頭の森中より三足の八咫鳥が出現し全船に驚かせしめ、海路の方向を示し、且つ守護なさんと神主深く感佩して、翌朝秀吉公に謁を請い恭しく之を言上し公は殊の外満足せられ、即刻神主八太夫をして此渡航に於ける水先奉行とした。

神主謹て大命を拝し、直に斎戒沐浴烏帽子直垂を着し、一方の赤誠を以て神前にて祝詞を奏し、同月二十日巳の上刻全船纜を解き傳母村川口の港を出帆したが、果せるや千里の鵬程風静かに波平かなり、神夢の如く三足の八咫鳥は船団の前後に翔して飛去らず。守護の任を全うしたかくて満願叶い文祿二年正月十六日未の下刻に全船帰航した。

翌十七日午の刻秀吉公は傳母頭宮殿に参拝し、自から祭主となり帰航の報告祭典を執行せられた。此の時に傳母頭宮殿を改め鴉宮と称え、神領を入津料とし、碇泊船より納米させる権利を得て宮殿の位置を現在の東隅に当る、森林鬱蒼たる鴉の巢を成したる所を選定して、遷宮をなし奉り、茲に於て三柱の大神等を木像に彫刻された。此の御祭神の中に住吉大神は渡航に際して、殊に海上の御加護奇しかりしを記念として、御木像の左手に杖を携え、其の上に一羽の八咫鳥を止まらせた彫刻せられたのは、他に其の類例を見ない。

鴉宮を改称したのは、三足の八咫鳥に因みしものである。これらは秀吉公による寄進と伝う。名譽と経済的利益の両面で報いた苦勞人秀吉ならではの逸話といえる。

慶長十九年十二月徳川將軍令にて水先奉行の入津料を献上後大坂船奉行と改称する。鴉宮莊園地は東百舌鳥土師新田大野芝にあり。御旅所兼務社と新田開發地含む數十社あり。

大規模な神輿渡御祭あり現在中断状態。傳母を傳法と改称理由文祿三年五月伏見城と天王寺太子堂普請時傳母船問屋船頭三十六人法規遵守の効にて母を削り法と改める。往古八十島祭木簡人形の禊と潮汲神事あり。社号 宮号 社格 元官幣大社。官幣大社新規準により明治五年村社次に官幣中社昇格、次に大社復活説あり。

# みおつくしすみよしじんじや 漣標住吉神社

(通称 みおつくし神社)

## 御祭神

住吉大神  
天照皇大神  
八幡大神  
神武天皇  
神功皇后

## 御神徳

## 例祭日

十一月三日



鎮座地 大阪市此花区伝法三十一一六  
電話 〇六一六四六一〇七七五  
HP

漣標八住 住吉神社 導きの神



令和元年十二月二日

## 神社のおすすめ

境内入り口、及び中程に「漣標」を再現。

## 由緒

社名の漣標は、昔浪速津の川口に建てられた船航の標柱で、水の尾の海中に示したしるしであるのを神社名としたものである。創建年代は不詳であるが約五、六百年以前と推察されている。

当地は上古、浪華八十島の一つで、東西に長く白砂の浜にうつそうたる緑の樹林がある幽邃の島であった。既に住民が少数ではあるが集落を形成していた。偶々西暦八〇四年、桓武天皇の延暦二十三年、遣唐使の一行が途次この辺りの景勝に感じ、愈々明日より渺茫たる内海航路に入るのを前にして、前途の安泰を祈願するため祭壇を設け住吉四柱神を奉祀し、祈った。(この一行の中に留学僧空海もいたと伝えられる。)この辺りの民は漁撈に従事する者が多く、これが機縁となり、協議の上小祠を造営するとともに、一行の帰路を迎えるのに便利のように、漣杭を打ち建てた。これが社名の縁由するところである。

この事があつてから、諸国廻漕の帆船や防人の用船等がその往還に寄泊するものがあり、また住民も次第に増加して、社屋も改まり、境内も整備され、本格的な神社を具現するようになった。

中世に入って諸川の流条に変化を生じ、京師への途は専ら大物の浦(尼崎)より神崎川を遡行したため、当地は稍々疎外の孤島としてその発展にも限度があり、当社も島内の産土神として静寂に過ぎた。

その後、豊臣秀吉が大坂城を築くに及んで、当社は「伝法口」として湾内随一の要津となった。その上水質にも恵まれていたため、灘五郷の地に先駆して各種酒造の本場となり、徳川期には樽廻船を創始して海運界を牛耳るとともに販路も遠く江戸、東北、北海道に及んだ。集落も繁栄し、住民皆航海の守護神として神徳を仰ぎ畏み、各々生業に安んじた。従つて当社への奉幣献饌も盛んであつた。現存の本殿の規模が近郷に類のない雄大さを示していることや、石燈籠、狛犬よりみて、天正以後の盛儀を想見することができる。

明治の中葉まで、浜辺には大なる漣標があり二基の燈籠が水面に映え、樹木を背景に丹塗りの大鳥居が屹立し、参道の奥深く常夜燈の明滅していた情景は、今も古老の感慨深く追憶するところである。(この大鳥居は、無事長期の航海を果たした船主が、奉謝に献納した帆柱を用材として、次々建立を新たにしたものとして伝えられている。)

# 西九條神社

にしくじょうじんじや

## 御祭神

住吉大神  
(底筒男命)  
(中筒男命)  
(表筒男命)  
稻荷大明神  
三十柱大神

## 御神徳

厄除開運  
除災招福  
商売繁盛

## 例祭日

十月二十六日



鎮座地 大阪市此花区西九条二丁目四一二〇  
電話 〇六一六五八二一三二一 (茨住吉神社)

H  
P

御朱印なし

## 由緒

貞享年間に施工された淀川（現安治川）改修工事完成に伴い、住吉大神、稻荷大明神、そして有名三十神社の御分霊を勧請されたと言われています。

その後、西九条一帯は、瀬戸内海航路の起点として、発展しました。  
（残念ながら、その後二〇〇年余り、西九条神社に関する資料が残っていません）

明治五年に村社となるも、神社合祀条例により、明治三十八年に西野産土神社（現西九条神社）は茨住吉神社の行宮所となりました。

行宮所時代の夏祭には、茨住吉神社本社より、亀甲太鼓や獅子舞、大神輿、御所車等が団平船で安治川を渡り、巡行し、安治川兩岸は見物人で大変賑わいましたが、戦争により中断を余儀なくされました。

神社は幸い戦災を受けなかったが、台風や火災の被害を受けてしまいました。

昭和二十一年四月、茨住吉神社の撰社として、西九条神社となり、同二十四年には社務所が、同四十七年現在の社殿が完成します。

同五十一年宗教法人 西九条神社として認可される。

# 大阪市 天王寺区

▶ 大阪市にもどる



# 難波大社 生國魂神社

なにわのおおやしろ  
いくたまじんじゃ

(通称 生玉さん)

## 御祭神

生島大神  
足島大神  
大物主大神 (相殿神)

## 御神徳

万物創造  
生成発展  
諸願成就

## 例祭日

九月九日



旧神域の大阪城に神幸する御鳳筆



数十万の人出で賑わう表参道

## 神社のおすすめ

生國魂・天神・住吉と続く大阪三大夏祭りの魁。殊に「陸」の生玉、「川」の天神と並び称され、旧神域の大阪城へ人馬織り交ぜ長大な渡御列が巡行。大阪大空襲で灰燼に帰すも平成二十六年に復興。

生國魂祭

宵宮 七月十一日  
本宮 七月十二日



鎮座地 大阪市天王寺区生玉町一三一九  
電話 〇六一六七七一〇〇〇二  
HP <https://www.ikutajinja.jp/>

## 由緒

約二七〇〇年の歴史を重ねる大阪最古の神社。

第一代神武天皇は日本建国を発願され、九州日向を発つて瀬戸内海を船で東進し各地を平定、難波津（大阪湾）に至り、湾を東西に二分する難波之碕の北端（現・大阪城を含む一帯）に上陸、日本統一を願ひ生國魂大神を御親祭され当社の歴史が始まります。今を遡ること神武天皇即位前紀戊午年春二月（紀元前六六三年）、建国三年前の出来事です。

御祭神の生國魂大神は生島・足島の二柱の大神よりなり、生島は「島が生まれる」働きを、足島は「その島が充足し育ちゆく」働きを現す言霊です。

畿内の幾千もの川々が淀川や大和川等の大河に収斂して湾内へと注ぎ込み、上流より運ばれた砂礫が河口に砂州を生み、その砂州が大小様々な島へと成長して難波八十島と呼ばれるようになりました。このご神徳が永代に繰り返され大阪平野が生成発展します。現在も出来島、歌島、柴島、御幣島等、大阪に島のつく地位が多いのはその名残です。

これらの経緯から大神は別名「八十島神」と尊称され、日本列島をご神体とし、日本各地の国魂信仰の本宗と仰がれています。

最初の正史『日本書紀』には第三十六代孝徳天皇の条に「生國魂の樹」と有るように、当社の神域を伐り拓き難波宮が造営されました。

第五の正史『文徳天皇実録』には、嘉祥三年（八五〇年）第五十五代文徳天皇の御代に「八十島祭」齋行とあり、爾来四〇〇年に亘り生國魂大神を主祭神とする国家祭祀が御代替わりの度に難波で執り行われました。

また第六の正史『三代実録』には、貞観元年（八五九年）に「難波大社」と記されています。大社号は嘗て杵築大社（現・出雲大社）等全国でも僅か数社に留まり、畿内では当社のみの尊称でした。

延長五年（九二七年）の『延喜式』には「難波坐生國魂神社」と記され、名神大社に列し祈年祭、月次祭、相嘗祭、新嘗祭の年中四度の官幣に預かり祈雨祭にも加わり、また宮中神祇官西院に於いても「生島巫」という特別の官職によって奉斎されます。

室町時代には本願寺八世蓮如上人が神域内に建立した石山御坊が本願寺へと発展し信長と合戦、豊臣の治世下に当社は現在地に遷座し、以降江戸期全般を通じ篤い崇敬に支えられ、天下の台所として力を蓄えた町人主体の上方文化の発祥地となりました。

維新後は官幣大社に列格し朝野の尊崇極まりますが、昭和二十年の空襲により灰燼に帰し、氏子崇敬者の寄進によって戦後復興の歩みを進め、平成二十六年には生國魂祭の陸渡御が復興しました。

# くぼじんじゃ 久保神社

## 御祭神

天照皇大神  
速素盞鳴尊  
伊邪那岐尊  
伊邪那美尊  
宇賀御魂神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
諸願成就

## 例祭日

七月十六日



鎮座地 大阪市天王寺区勝山二一五一―一四  
電話 〇六一六七七一―九四八二  
H P



## 由緒

当社は天照皇大神祀る旧久保村の産土神なり。往昔四天王寺建立の際其の守護鎮守の神として創建せられ、天王寺七宮の一つとして、また境内には願成就宮として聖徳太子の深く信仰あらせ給い、御願の成就を遂げ給うにより願成就宮と称へ、今に庶民の信仰絶えず靈驗あらたなりと言われる。

明治五年、村社に列し、同四十年十月十四日東成郡生野村大字国分字東の村社稲生神社、生野国分町字西、熊野大神宮を合祀し、同四十三年十一月十七日神饌幣帛科供進社に指定せられる、境内は八九七坪にして本殿・幣殿・神庫・社務所等を存していたが、昭和二十年三月十三日戦災の為焼失、現存の社殿は昭和二十七年再建したものである。

### 末社

正一位白玉稻荷大明神  
方除神社  
白龍神社  
大岩・小岩大明神  
願成就宮

# 大江神社

おおえじんじや

## 御祭神

豊受大神  
素佐之男神  
少彦名命  
大己貴命  
欽明天皇

## 御神徳

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市天王寺区夕陽丘町五―四〇  
電話 〇六一六七九―八五五四  
H P <http://ooejinja.net/>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は厩戸皇子が天王寺を荒陵に移され、此地が伽藍所の乾の方に当り福門であることから毘沙門天を安置し、神宮寺と唱えられたりと伝わる。

尤本社は氏神として天王寺建立前より存在せりと雖も其鎮座年紀等は詳かではない。

明治四十年一月十一日土塔神社祭神と明治四十年一月二十九日上之宮神社の祭神を本社へ合祀、同四十一年九月二十五日小儀神社境外末社齒神の社を合祀する。

### 招魂社

元治元甲子年前後回夫の志士山口藩士四十八名を祀る。明治三年八月十八日同藩より之を創設する。

### 羽呉神社

難波村の米倉元此地にあり、享保年間の鎮守なりしか其後米倉を今の地に移転の後此の町の鎮守として町民之を崇敬せり、明治三十九年十一月五日天王寺夕陽丘郷社大江神社の境外神社となる。

# 河堀稲生神社

こぼれいなりじんじや  
(通称 河堀の宮)

## 御祭神

宇賀魂大神  
崇峻天皇  
素盞鳴尊

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

七月十九日

## 奉拝



令和二年八月一日

鎮座地 大阪市天王寺区大道三―七―三  
電話 〇六一六七七一―六五二三  
HP

## 由緒

当社は第十二代景行天皇の皇子小碓命（日本武尊）が、筑紫の熊襲を御征討の時に此の地に御来啓になった。夏目入穂の孫逆輪井を舟師としてお供を申し付け、無事御征定になり、帰路難波柏の濱にても悪神等を誅せられた由縁の地である。

これより先、逆輪井の妻日柿日夜皇子の御息災を祈願せんがため、大和笠縫の斎宮に参上り倭姫命に太玉串を授け祀り給うた。たまたま二年豊饒が続いたのと、皇子の恙なきとにより、逆輪井をして鉄津の西浪花瀉屋ヶ丘に神地を賜い、稲生の神を奉斎し代々祭祀するようになった。時に景行天皇の御代己亥年の秋と伝えられている。（社蔵記録）

第十六代仁徳天皇の時、九月九日に本年の初穂を献供し、豊年初穂祭を執行。翌年三月三日に勅種授与祭を執行。当社の主き祭祀の永制が定められた。（社蔵記録）

後に聖徳太子四天王寺創建と共に、此の昼ヶ丘に社殿を建て、崇峻天皇（第三十二代）を祭祀し、四天王寺七宮の一宮として、稲生大明神と併祀することとなった。例祭は十一月十日と定められた。

天王寺東門より四丁計り河堀口にあり、昼ヶ丘澤龍山巽宮崇峻天皇社と称せられた。（社蔵記録、摂陽群談、摂津名所図絵、四天王寺縁起大阪府全誌）

此の地を古保礼（又は古保利）と云う。延暦七年三月、摂津大夫和氣朝臣清麿をして、河内摂津両国の界に川を堀り堤を築き、荒陵の南より河内川を導きて西の海に通せんとして、清麿当社に祈願して、二十万余人に糧を給いて事に従わせた。以後河堀と書いて「コボレ」と称し、附近一帯を河堀口と云うようになった。（社蔵記録、摂津名所図絵大成、浪華百事談、続日本紀、日本後記）

大阪冬の役には南河内郡（今の羽曳野市）誉田八幡宮に、夏の役には柏原片山大県にと奉遷した。此の時当社社家大阪方なりしたために、阿波の武士に宝物の大半奪い取られた。（社家記録）

大阪冬夏両度の陣以後河堀神社と称し、現今に於いてもこの呼称が一般に用いられている。

明治五年に旧村社に列せられた。

明治四十年十月二十四日に東区清水谷西之町鎮座無格社稲生神社を合祀し、社名を河堀稲生神社と改称した。

明治四十一年二月二十七日、当時の東成郡生野村大字林寺村社素盞鳴尊神社を合祀（昭和三十一年生野八坂神社として再び独立）。

明治四十二年六月三日神饌幣帛料供進社に指定される。



# ひがしこうづぐら 東高津宮

(通称 元高津)

## 御祭神

仁徳天皇  
磐之姫命

## 御神徳

国家安康  
五穀豊穰

## 例祭日

七月十二日



鎮座地 大阪市天王寺区東高津四一八  
電話 〇六一六七六一二三三〇  
HP

奉拜  
東高津宮  
令和二年七月十二日

※他朱印あり

## 神社のおすすめ

## 由緒

東高津宮は「大阪市歌」に「高津の宮の昔より」とある難波高津宮（たかつのみや）に都を営まれ、大阪発展の基を築かれた第十六代仁徳天皇と磐之姫皇后をお祀りしています。『日本書紀』によれば都から外を「覧になると、竈を炊く煙が見えませんでした。都に近いところでさえ食事を作る事も出来ないのか、と三年間課役を免除され、ご自身も儉約に努められました。三年後、今度は多くの煙が見え、「これで私も豊かになった」と仰ると皇后が「宮殿も荒れ放題なのに何が豊かなのですか」と不思議がると「民が豊かになる事が私に豊かになる事だ」とお答えになったとあります。そのような仁徳天皇を称えてお祀りされたと考えられるのが当宮です。

創建については史料もなく不詳ですが、古い地図には「平野社」そしてその場所附近を「仁徳天皇大宮跡」と記されています。

近世には「東高津村仁徳天皇」という社名が記録され、明治時代の地図には「元高津神社」とあります。

そのころの鎮座地は現在の近畿日本鉄道本町駅七〜九番ホームの当りでした。昭和七年（一九三二）駅の拡張の為、現在の鎮座地（元「新梅屋敷」跡）に遷座しました。

遷座当時の社殿は大東亜戦争中の昭和二十年三月十四日大阪空襲において焼夷弾直撃し全焼。ご神体は本殿地下防護施設に遷座し無事と報告されています。戦後昭和二十五年拝殿等新築、更に昭和四十二年御祭神を同じくする中央区鎮座、高津宮の旧拝殿を譲り受け今日に至ります。

## 高津（たかつ）とは

江戸時代の下河辺長流著『続歌林良材集・上』に引用されている『撰津国風土記』（逸文）には『難波高津は、天稚彦天下りし時、天稚彦に属（つき）て下れる神、天の探女、磐舟に乗て爰（ここ）に至る。天磐船の泊（はつ）る故を以て、高津と號す』とあります。また万葉集には『ひさかたの天の探女が岩船の泊てし高津はあせにけるかも（巻三・二九二番）』とあります。

「津」とは港の事です。から「磐船に乗って天より着いた港」でしょうか。又上町台地即ち「高い」ところにあった港という説もあるようです。

今「こうづ」と呼んでいます。が「重箱読み」ですので「たかつ」が本来であると考えられます。

# 安井神社

やすいじんじや  
 (通称 安居天満宮)

## 御祭神

少彦名神  
菅原道真公

## 御神徳

病氣平癒  
学業成就  
諸願成就

## 例祭日

四月二十五日



真田幸村公戦死の地の石碑と銅像

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市天王寺区逢阪一丁目二四  
 電話 〇六一六七七一四九三二  
 H P

## 由緒

当神社は、茅渟の海（大阪湾）を遙かに見下ろす景勝の地に在る。その創建の年代は古文書の散佚せるため詳らかではないが、聖徳太子が四天王寺を建てられた頃であろうと伝えられている。

御祭神少彦名神は、記紀神代の巻によると、大国主神と相並び、共に力を合わせて、国土経営にあたり給い、又種々の病を治療する方法を創り定め、その上禁厭の法を以て諸々の汚穢災厄を祓い除かれるなど、国中に深い恩恵をほどこされた御神威あらたかな神である。

又、菅原道真公は、学問の神としてのみならず、人の世の災難艱苦に深い御慈悲を垂れ給う御神徳の高い神として、天満天神ともたたえられている。

けだし公は、逆境に沈んで不平なく、流涕に泣いて怨恨なく、その忠誠心には一点の汚れもなく、清明透徹至純そのもので、人心を超えて正に神の境地にあらせられた。

この道真公が、筑紫に左遷され給う道すがら当境内にしばし安居された（憩われた）という旧址の縁を以て、公の薨後四十年を経て天慶五年（西暦九四二年）ここにその神霊を合祀され給うたことはいみじくも畏いかりである。

当神社の御神徳を蒙った多くの人々の中でも大丸の業祖、下村彦右衛門正啓居士は享保十一年（西暦一七二六年）、この難波の地に於て開店するに際し社殿を修築し、又境内地拡張のため敷地を寄進するなど、奉養の誠心をささげられたのである。

爾来歴代大丸店主の当神社に対する信仰は極めて篤く、世に大丸天神と称せられる所以である。

境内に、古より安井、或はかんしずめの井、と称する清冽なる水の湧出する井戸あり、霊水として広く知られているが、現在は四囲の状況に禍され、枯渇の状態にある。

又、大阪夏の陣における真田幸村戦死の地と伝えられ、その石碑と銅像が建っている。昭和二十年、太平洋戦争の災禍をうけ一切の建物は烏有に帰したが、大丸を始め奉賛者の寄進により、同二十六年春に社殿並に社務所が復興され、現在種々の祭典が執行されている。

### 境内社

玉姫稻荷神社

御祭神 宇迦之御魂神（うがのみたまのかみ）

金山彦神社

御祭神 金山彦神（かなやまひこのかみ）

金山姫神（かなやまひめのかみ）

淡島神（あわしまのかみ）

# 大阪市 生野区

▶ 大阪市にもどる



# 清見原神社

きよみはらじんじや

## 御祭神

天武天皇  
素戔嗚尊  
大山咋命  
天水分神  
国水分神

## 御神徳

厄除開運  
安産守護  
交通安全

## 例祭日

八月一日



祖霊殿（英霊殿）



春高稲荷社（令和二年改修）

## 神社のおすすめ

作家の東野圭吾氏の小説「浪花少年探偵団」等に当社の事や周辺について下町情緒あふれる舞台として登場します。また、「清見原神社楽人会」という雅楽団体を持ち教化演奏活動を行っています。



鎮座地 大阪市生野区小路二丁目二四―三五  
電話 〇六一六七五二―四二二六  
HP <https://www.kiyomihara-jinja.com/>

## 由緒

創紀の年代は詳らかではありません。（もと宮地は高地でありましたが、附近一帯は沼沢地でありましたため度々水害に見舞われ、そのため社記その他の古文書が流失したといわれています。）

口碑の伝える所によりますと、天武天皇が皇居であった、大和国飛鳥浄見原宮から難波宮に舎人親王多比古鷹等を従えて行幸遊ばされた際、当所に御休憩遊ばしたと申します。当時この地は高地で樹木が鬱蒼と茂り見晴らしがよく、住之江の海（今の住吉）に浮かぶ白帆が見え憩うには格好の場所であったようであります。ここにしばし御休憩遊ばした天皇は「吉野はどのあたりになるのであるか」と吉野の方をかえり見られたといので、今に「吉野見」の地名（小路三丁目三番吉野見通り）を存しています。天皇崩御の後、この地に縁のあった大伴氏が、社を建てて天皇の御神霊をお祀りし、天武天皇宮と称し崇敬したと伝えてあります。その後天慶九年（西暦九四六年）社殿を再建、随時修理し、明治五年に天武天皇宮を清見原宮と改められました。

明治四十二年四月十日、時の政府の、神社を合祀して神社維持の基礎を確立し祭祀を厳修する、という方針に基づき大阪府から神社合祀の指令を受けました。よってこの指令に従い、当時片江村に素戔嗚尊神社、中川村に松尾神社、腹見村には木守勝手神社、大瀬村には八剱神社が鎮座していましたが、各神社の総代が協議の結果、当時の小路村の中央であり、学校の所在地であった大友村鎮座の清見原宮に合祀する事になり、同年七月三十日夜、誠に厳肅なる合祀の儀が行われ、翌三十一日には合祀大祭が夏祭を兼ね盛大に執行されました。社号は、村名「小路」をとって小路神社と称せられました。その後年と共に発展に発展を重ね今日に至るのであります。

現社号清見原神社は皇紀二千六百年記念事業として行われた、境内拡張、社殿、社務所増改築玉垣建設等を機に昭和十七年五月に改称されたのであります。

また、平成十九年に「合祀百周年」の記念事業として「御社殿平成大修理」を執り行いました。平成二十一年七月、地域の皆さんのご協力のお蔭をもちまして、吉野の桧材を用い、江戸時代末の社殿部分と新築部分との調和のとれた神明造の見事なご本殿が完成しました。

# 翼神 社

たつみじんじや

## 御祭神

応神天皇（品陀別名命）  
印色入日子命  
伊弉册尊  
天常立尊  
天照大神  
天児屋根命  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 大阪市生野区巽南三丁目一七一  
電話 〇六一六七七五七〇五四五  
HP [http://www.ta.biglobe.ne.jp/yasuni\\_jinja/index.html](http://www.ta.biglobe.ne.jp/yasuni_jinja/index.html)



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

古く万葉集にも詠われた式内横野神社社地跡が巽西三丁目にある。  
日本書紀仁徳紀に記される横野堤の鎮守として祀られていた。現在、祭神印色入日子命は翼神社に合祀されている。



式内 横野神社 社地跡



犬養毅先生揮毫による万葉歌碑

## 由緒

当社は旧河内国洪川郡大地村にあつて八幡神社と云い創立年代は明らかでないが当時の地名を大地と称えるのは和名類聚抄に邑智（おおち）のことは明らかである。

和名抄巻の六に 河内国 洪川郡 竹洲 邑智 餘部 賀美 とある。

元来日本の国の風習として昔から人が住めば必ず始祖紙（氏神）を祀る。それで人皇第六十二代（紀元一六〇七年）村上天皇の御時編纂せられた和名抄に当地名が記載せられてあるのを以て見れば当時既に神社の祀られて居たことは疑う余地がないのである。延喜式神名帳は人皇第六十代醍醐天皇の御時編纂せられたものであつて和名抄の編纂とは僅かに数十年前である。故に邑智の名称は延喜の頃すでに河内五郷の一として盛大な村落であつたことは明らかである。

それで延喜式編纂当時に八幡神社が存在して居つたが神名帳に洩れたものであろう。式に洩れた社を式外と云い有名な社もその間に多くある。

当社には式内横野神社があり、人皇第十一代垂仁天皇の第二皇子印色入日子命を祀る。

昔神威輝き享保の頃まで衰退して居つたが同十六年再興せられたのである。その都度八幡神社の境内へ移した事があつたと云う。明治五年七月村社に列らなり、同四十年四月二十七日付を以て政府より許可を得て次の五社を合祀し、村の名をとつて翼神社と改称する。

- 一、大地字印地 横野神社
  - 二、伊賀ヶ字伊賀ヶ 天神社
  - 三、西足代字葭の内 天照皇大神社
  - 四、矢柄字宮の前 熊野神社
  - 五、四条字山小路 天神社
- 明治四十年十二月五日合祀祭を執行する。

社殿は流造。元の建物は享保五年の建築にて腐朽甚だしきため昭和五十年六月御造営する。

末社 稻荷社豊川稻荷大神を祀り昔より守護神として当境内に安置する。賽神社、八衢彦、八衢姫、久那斗神を相殿として祀る。

氏子区域 旧巽町全域（巽中・巽南・巽東・巽北・巽西）

夏季（七月十五日）・秋季（十月十五日）の大祭には四台の地車と一台の太鼓台が宮入し、たくさんの参拝者と見物人で大変な賑わいを見せる。

# 御幸森天神宮

みゆきもりてんじんぐう

(通称 御幸森神社)

## 御祭神

仁徳天皇  
少彦名命  
忍坂彦命

## 御神徳

家内安全  
病氣平癒  
厄除開運

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市生野区桃谷三丁目一〇一五  
電話 〇六―六七三二―二八一六  
HP <https://miyukimori.net/>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ

仁徳天皇が鷹狩に來られていたことに由来し、非常に珍しい「鷹」の神紋となっております。

撰社には戎社があり、毎年一月九・十日は御幸えびす祭りで賑わいます。



御幸森天神宮の鷹の神紋



御幸えびす祭り・福娘

## 由緒

今から一六〇〇年程前の猪飼野は猪甘津と呼ばれ難波の入江の港であり猪甘部(猪を飼育していた古代の官職。鷹甘部などと同じ)が住まいしていた所でありました。

日本書紀仁徳天皇十四年の条に「猪甘津に橋をわたす名付けて小橋」とあり、当宮の前を流れていた百済川(旧平野川)に架けられた文献上最古の橋がこれです。

さて、難波に都を定められた仁徳天皇は鷹狩の折り、また、当地の東南方(現在の東住吉区あたり)に渡来し住まいする百済の人達の様子をご覧の為の道すがら度々当地の森にご休憩されその由縁により御幸の森と呼ばれる様になりました。天皇崩御の後、西暦四〇六年、人々はこの森に社を建立し天皇のご神霊を奉祀し御幸の祠とも御幸宮とも称したと伝えられております。

年代は下って西暦八五〇年頃、この地方に疫病が流行し人々が罹病に悩まされていた折り当宮の社僧大蔵院行綱は京都五條天神社に参籠し災厄追放を祈願し、同社の御祭神少彦名命のご神霊を当宮に勧請奉斎したところさしもの疫病も治まったといいます。なお、この頃から天王天神社とも天神宮とも呼ばれるようになりました。

次に玉造清水谷付近に忍坂彦命を奉祀し地主神として崇拝していた社がありましたが大坂夏の陣の兵火に遭い消失、それを畏憚した大坂城主松平忠明は当宮にご神霊を奉遷するように指示し旧平野川中洲の地三〇〇歩と灯明台一基を寄進されました。昭和四十三年十月一日境内の棕の木(樹齡凡そ三〇〇年)五本が大阪市の保存樹木に。平成十二年四月二十八日本殿・幣殿・拝殿・透塀が国の登録有形文化財に指定されました。平成十八年創祀一六〇〇年祭を斎行し記念事業としてご社殿のお屋根替えを致しました。

次に大きな行事としては新年の初詣。福笹に託して商売繁盛・社運隆昌・八方開運祈願の一月九・十・十一日の御幸戎祭。厄除開運を願う人々の為の二月節分の日の厄除祭。音楽奉納がある四月十六日の御幸福稻祭。神輿渡御・獅子舞巡行・地車曳行で賑う七月の夏祭。宮入りの際に担ぎ上げる神輿と地車は見事なものです。神社にとって一番重要なお祭十月十五・十六日の秋の例大祭。子供達の無事成長を願っての十一月の七五三参り等々、一年を通して、大人も子供も厳肅にあるいは晴れやかにそして懐かしく感じられる所、それが鎮守の森の氏神様、御幸森天神宮なのです。

# たしまじんじゃ 田島神社

## 御祭神

少彦名命  
菅原大神  
事代主命  
八幡大神

## 御神徳

医薬治療  
学業成就  
商売繁盛

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市生野区田島三二五―三四  
電話 〇六一六七五八一〇二九〇  
HP <https://yaokami.jp/1270067/>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ



御神木 こがねもち



田島眼鏡の碑  
田島の地場産業 眼鏡発祥の碑文

## 由緒

当社所蔵の社記録等は、明治初年まで伝わっていたが、洪水などで散逸し、御創建年月等不詳である。古来人々が住み始めると清浄なる場所を設けて天地の恵みに感謝し、その地の収穫・安寧を祈願した事などから、かなり早い時期には当地が祈りの場としてあつたのではないかと推量される。

現存する遺物等により徴すれば、石燈籠に「貞享元甲子歳（西暦一六八四年）」とあり少なくともこれ以前から現在のような神社としての態を成していたことが伺われる。又、社寶の後陽成天皇「安土桃山時代」御宸筆の軸や神額などには、現主祭神である少彦名命の御神名がみえず「南無天満自在天神」や「天満宮」「天神社」とあり、その裏書や、少彦名命の御樋代には「寛政四壬子年（一七九二年）」とあること等から、寛政四年までは菅原大神を主祭神に、事代主命・八幡大神を相殿神として『天満宮』と称していたが、この年少彦名命を勧請合祀して『天神社』と称していたものである。

後、明治四十二年四月現社号に改称したが、この頃までは境内地も広大で、裏山には千数百年を経た古松、数百年の老杉が繁茂し昼尚暗く狐や狸が棲息する程であった。

現御本殿（「流造」）創建の年代も審らかではないが、明治二十七年檜皮葺屋根。

昭和三十五年銅板葺屋根に葺替修築。

平成二年御大典を奉祝して本殿屋根葺替、幣・拝殿改築。

末社二社、石鳥居、銅製御神牛舎及び石玉垣を新築。

平成二十五年神社会館新築。

境内整備の一環として、天神様ゆかりの紅、白梅林が整備された。

# 生野神社

いくのじんじや

## 御祭神

素盞鳴尊  
大国主命

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 大阪市生野区舍利寺一―二―二七  
電話 〇七四二―四三―八六四七（杵築神社内）  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は天平七亥年九月八日勧請にして元は八阪神社と称せられたが、明治五年村社に列し、明治四十二年に社号を素盞鳴尊神社と改称し同四十四年五月会計適用の指定を受け大正十五年十月十七日神饌幣帛供進の指定を受けた。昭和二十二年四月一日付にて生野神社と社号を改称す。

# 生野八坂神社

いくのやさかじんじや

## 御祭神

速素盞鳴尊

## 御神徳

商売繁盛  
病氣平癒  
厄除開運

## 例祭日

七月十六日



鎮座地 大阪市生野区生野東四一七一  
電話 〇六一六七三一七二四六  
HP



## 神社のおすすめ

境内社「歓喜殿」は近年、良縁・子授・安産の神として信仰を集めています。



安産祈願所品 御守・腹帯

## 由緒

旧東成郡林寺村字林に鎮座する当社の創建の起源は、『神社明細帳』（明治十二年）に元禄二巳（一六八九）年勧請とあるが、始祖神を祀るべき村自体の歴史は遙かに古く、室町期には「林地庄」、天正二十（一五九二）年、北の政所の所領として「はやし寺」とあり、その他の説もあり不詳（例えば『浪華往古図』（応永年代作説）に「林津」、天正十二（一五八四）年と記述の『撰津国東生郡浪速総社生国玉大明神御神名記』には「林神社・・・林津邑坐」等）。

そもそも当地は、上町台地の東端に位置する舍利寺台地（我孫子丘陵）上にあり、河内湖の時代も陸地であった可能性が高く、宝永元（一七〇四）年に大和川が改修される迄は、旧大和川（現平野川）と、狭山池を元とする西除川（現今川、駒川）が合流する地であり、古代の主たる交通手段が川運であったことや、飛鳥・奈良期とされる「林寺遺跡」の存在からも古代から主要な地であったと思われる。

神社前の道筋を「桑津街道」と称し、この道筋（西除川筋）には応神・仁徳期の伝承を多く残し、当村も『撰津名所図会大成』には「速志都（はやしづ）・・・林寺の古名なり・・・允恭天皇の寵臣、速志津彦命の居住地・・・伝う」として同時期の允恭帝期の伝承が在する。

明治期、合祀令により明治四十一（一九〇八）年、天王寺区の河堀稻生神社へ合祀され、同社の御旅所となる。

しかし戦後、国家管理から離れると敬神崇祖・報本反始の念篤き全氏子の熱誠により、昭和二十八（一九五三）年に本殿・拝殿・社務所を竣成、同三十年、神霊の還御を仰ぎ、同三十一年、「生野八坂神社」として独立、「生野の祇園様」として親しまれ、現在に至る。

### 境内社

大楠稻荷神社 御祭神 宇賀御魂神（ウガノミタマノカミ）

三寶荒神社 御祭神 奥津日子神（オキツヒコノカミ）

奥津比賣神（オキツヒメノカミ）

火産霊神（ホムスビノカミ）

御祭神 伊邪那伎命（イザナギノミコト）

伊邪那美命（イザナミノミコト）

# 大阪市 浪速区

▶ 大阪市にもどる



# いまみやえびすじんじや 今宮戎神社

(通称 今宮のえべっさん)

## 御祭神

天照皇大神  
事代主命  
素盞鳴命  
月読命  
稚日女命

## 御神徳

商売繁盛  
福徳円満  
家内安全

## 例祭日

一月十日



十日戎 境内風景



吉兆

## 神社のおすすめ

小室について  
十日戎の象徴である「吉兆」は神社では古くから小室といひ、のし、銭、錢袋、末広、小判、丁銀、鯛などをひとまとめにしたもので「野の幸」「山の幸」「海の幸」を象徴しています。



※他朱印あり

鎮座地 大阪市浪速区恵美須西一丁目一〇  
電話 〇六六四三〇一五〇  
HP <http://www.imaniya-ebisu.jp/>

## 由緒

当社の創建は推古天皇の八年に聖徳太子が、四天王寺建立に当り、同地西方の守護神として鎮齋せられ、同九年春三月に太子自ら当社祭神に祈誓して市場鎮護の神として尊崇せられたと伝えられている。

当社の鎮座地は平安中期、即ち御宇多天皇の文永十一年正月二十五日出納造東大寺判官東市正中臣朝臣の御牒によれば御厨子所が設けられ日毎に宮中へ鮮魚奉献の歴史がある。その後南北朝の戦乱の為一時中絶したが、後奈良天皇の弘治三年四月十日に御綸旨を賜り、爾来明治維新まで毎年正月鮮魚を奉献していた。これを朝役と呼んでいる。この朝役を懈怠なく奉仕する為、京都四條小路に四間四方の家屋を拝領していた。この所が丁度八坂神社（祇園社）の氏地であったので祇園祭に奉仕する事になり、毎年駕輿丁を当社の鎮座地より送っていた。これを神役と呼び京都所司代の変る毎に奉仕の下知状を受領し、慶応四年まで続いていた。又当社は明治初年の神仏分離まで九月十七日十八日の両日に祭礼があり、神輿が四天王寺の西門まで渡御をし、西門前に神輿を置いて駕輿丁が帰社すると、四天王寺の僧侶がその神輿を奉じて神社に還幸し、四天王寺楽人による舞楽の奉納の神事があつた。平安末期には四天王寺西門に浜の市と呼ぶ市が立っていた。当時の市の慣習として市には必ず市神を祭り、その市神に戎神を奉齋していた事実から考えると、浜の市も市場鎮護の戎神を奉齋したであろうと思はれる。その奉齋に当り朝役に依つて明らかのように、漁民としての当社鎮座地の住民が、在来から戎信仰をもつていた為、その祭祀に関与したのがその始まりであろうと思われる。

つまり当社は鎮座地の住民が漁民として戎信仰をもつていたところ、浜の市の市神祭に関与してから市場鎮護、即ち商工業繁栄の守護神として庶民から崇敬されるに到り、ここに四天王寺との関係ある伝説が生れたのであろう。江戸時代に入ると十日戎の祭礼が行われるようになり、元禄時代に到つて今日と同じような形態をとるようになり、当時の記録地誌等に盛大な祭礼の様子を伝えている。又江戸時代の問丸が明治時代に到つて講社を結成し、十日戎の祭典に一層賑いを附加したものである。

明治三年十二月上地して無格社となり、明治四十一年一月二十七日村社となり、翌四十二年六月神饌幣帛供進社に指定せられ、大阪市の発展と共に庶民の崇敬は年々盛大になったが、昭和二十年三月十四日に戦災を蒙りことごとく烏有に帰し、その後追々復興を図り昭和三十一年十一月に御本殿、拝殿等が竣工し、毎年例祭には数多くの参拝者が訪れる。

# 難波八阪神社

(通称 なんばの八阪さん)

## 御祭神

素盞鳴尊  
奇稲田姫命  
八柱御子命

## 御神徳

商売繁盛  
良縁成就  
厄除開運

## 例祭日

十月十四日



大阪市浪速区

鎮座地 大阪市浪速区元町二丁目一九一  
電話 〇六一六六四一一二四九  
HP <http://nambayasaka.jp/>



## 由緒

当社の創立の年月日は詳かでないが、古来難波下の宮と称し、後三条天皇の延久の頃には、既に祇園牛頭天王を勧請せる古社として栄え、世に聞えていた。仁徳天皇の御宇、此の難波の郷に悪疫流行し、老若男女不幸短命にして死者が多かつた。時に此の難波の浦の万木森々とよく繁つたところの松樹に、牛頭天王の霊地とゆう文字顯れた。仍つて郷人此処に社を設け大神を祭祀申し上げた。これより悪疫屏息し郷人大に助かり、生業頗に振い、耕殖産の道も進み此の地の人は非常に富み栄え近辺も亦大変にぎやかとなつた。此の事叢聞に達し、難波の地の守護神として深く御崇敬あらせられた。

後世武將の域内交代の際は必ず参拝し、若干の幣物を供進せられた。猶又、後陽成天皇の第八宮重雅親王深く当社を御崇敬遊ばされ、寛文元年九月御染筆の縁起書一軸を、当社の時の神主氏原右衛門尉に御下賜あらせられた。

昔は難波一村の氏神であり、もと仏寺併立し七堂伽藍巍々として聳え、附属の寺院十二坊を有したと伝えられているが、その由縁は今不詳である。諸寺の多くは兵燹にかかり荒廢し、明治維新の後、神仏分離により関係寺院は廢絶した。

古来度々の修理改築及び境内の整備改変が行なわれたが、其の年月日は明確ではなく殆ど不詳である。其の中で社蔵記録によると、享保七年四月二十六日近火の為に類焼し、同十二年九月、再建の出願、同十三年三月十二日竣工すとあり、文政五年三月十日より難波大門坊牛頭天王正遷宮あり、此の前年御造営が行なわれた。

明治五年郷社に列し、明治十二年本社拜殿大修理及び境内の大整備を行ない、明治十四年竣工。明治二十五年境内社の総修理を為し、神楽所の跡へ絵馬所を新設、明治三十九年十二月二十四日神饌幣帛料供進社に指定さる。同四十一年十一月二十四日木津川町二丁目北帯島の八阪神社を合併移転し、大正元年十二月二十五日合祀を取消し、大正二年一月三十一日浪速区反物町（現桜川四丁目三番地五）に移転分離し境外社となした。前の無格社反物町八阪神社で現在難波八阪神社御旅所である。

大正四年大正天皇の御大典記念事業として、従来の西向の本殿（境内東寄り宮跡）が現在地に御動座申し上げ、神輿庫の新設、境内社の移転修理、社務所の改造が行なわれた。昭和二十年三月昭和大戦の戦災により悉く灰燼に帰し、昭和二十三年暮現社殿の復興について社務所御旅所社殿及び社務所其の他の復興施設を了す。

# 敷津松之宮

しきつまつのみや  
(通称 木津の大国さん)

## 御祭神

素盞鳴尊  
大国主命  
奇稻田姫命  
事代主命  
少彦名命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
良縁成就

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 大阪市浪速区敷津西一丁目二二  
電話 〇六一六六四一一四三三三  
HP



## 由緒

神功皇后三韓よりご帰帆の時、住吉社を定め武内宿禰を随え浦伝いに敷津浜に航し給えるとき、荒磯浪の岸に打ち寄せるのを見て、「今より後は之を界に潮満つる勿れ」と、松樹三本を渚に植え、その下に素盞鳴尊を祀りて渡海安全のご霊徳を賽し奉られた。これが本社の起原で称して松本ノ宮という。実に一、七〇〇余年の昔である。

元正天皇、靈龜二年遣唐使吉備公崇敬篤く、入唐の時当社に参拝せられた。

清和天皇、貞観八年夏、天下に悪疫流行し災を除かんとし、始めて京祇園の地に牛頭天王を播磨国広峰より勧請の途次、暫く当社に旅宿し給い、悪疫退散の祈言をされる。と神靈感応、立ちどころに熄みた。これより災疫除の神として地方の崇敬が篤かった。

宝暦年間、出雲大社の大国主大神の御神霊をこの地に勧請し、国家安泰、人民幸福を祈言すれば、広大無辺の神恩に感謝して世の人は、福神、縁結び、医薬の神として崇め奉る、甲子の日には産業の神として地方よりの参拝者多く生産繁栄に祈り奉るに至った。

# ひろたじんじや 廣田神社

## 御祭神

撞賢木巖之御魂天疎向津媛命  
(天照大神の荒魂)

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
病氣平癒

## 例祭日

十月二十三日



鎮座地 大阪市浪速区日本橋西二丁目一四  
電話 〇六一六六四一一七七一  
H P



## 由緒

当社は昔難波新地より住吉に至る街道にあたり、今宮戎神社の北東に在る。

創建年代は詳らかではないが、もと天王寺の鎮守の社で古い由緒がある。往古は社地も頗る広く、西方には紅白二種の萩を植え、茶店があり萩の茶屋と呼んだ。稚松の林をなしたのを広田の森と称し、径路四方に通じてその外圍は全く田圃であったが、今は茶屋もなく、萩も絶え稚松も影を没した。

明治五年村社に列し、同三十九年十二月二十四日神饌幣帛料供進社に指定された。

当社に昔より赤鯿を画いた額を多く拝殿にかけた。これは痔疾をうれうる者が、この神に平癒を祈り、治癒すれば御札に捧るものである。これは如何なる由縁かわからないが、古人の伝えるところによれば、この神は土地を守り給う神で、地所のことを祈るのを、地と痔と音が通じるころから誤って、痔疾平癒を祈るようになった。神もこれを守り給うことが不思議である。

# 大阪市 西成区

▶ 大阪市にもどる



# 生根神社

いくねじんじや  
(通称 上の天神)

## 御祭神

少彦名命  
蛭児命  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
学業成就

## 例祭日

十月九日



鎮座地 大阪市西成区玉出西二一ー一〇  
電話 〇六一六六五九一二八二一  
HP <http://www.ikune.net/>

奉拝令和二年



上の天神 生根神社

## 神社のおすすめ

大阪府有形文化財民俗資料 第一号  
「玉出のだいがく」を七月二十四日、二十五日両日公開いたします。  
境内にこつま南瓜塚があり、中風除け・ボケ封じのご利益を求め多くの参詣があります。十二月冬至に「こつま南瓜祭り」があります。



玉出のだいがく



こつま南瓜塚

## 由緒

当社創立の年代は詳らかではないが、この地はもと住吉大社の神領で、住吉の生根神社の御祭神少彦名命の御分霊を受け、勝間村（こつまむら）（玉出）の産土神（生根神社）として奉祀した。少彦名命の奉祀以前古くからこの地に有喜恵美寿社（うきえびすしや）として蛭児命を奉祀していた。即ち大昔、茅海（ちぬのうみ）（大阪湾）に大津波が起り、西宮の恵美寿神社は社殿と共に流れ、御神体は勝間の浦に流れつかれたので、村民これを漁船に迎えこの地に祀った。後、西宮の氏子がこれを聞き伝え、返還を要請され御神体をお返しして、御分霊を奉祀したのが神社創建の始めであると言い伝えられている。（玉出実記・大阪府西成郡玉出町誌による）

菅原道真公を奉祀したのは、明治初年廃藩置県の際、黒田藩の鎮守社として、大阪の筑前屋敷に奉祀していた筑紫天満宮（上の天神）を奉遷した。御社殿は所謂大名普請にして文化財的存在であった。昭和二十年三月十四日戦災により御社殿は炎上したが、御神体は住吉の生根神社にいち早く奉遷し、御安泰であったので、仮社殿に奉祀の後、氏子崇敬者の奉賛により、昭和四十一年十月鉄筋コンクリート造りの御社殿、儀式殿社務所を復興した。御神木の楠木は、昭和二十年当時、樹齢六百年と推定され、神社創建の歴史を物語っていたが、惜しくも戦災により枯死し、現在はその大木の根の一部を保存して、境内に大楠社をお祀りし、その故事を継承している。

なお、当社にはその昔、雨乞い神事に用いられたと言われる「だいがく」を保存している。明治の頃は玉出（勝間村）には六基あったが、戦災で焼失し、一基だけが残り、今では毎年七月二十四日・二十五日の夏祭り両日公開して、だいがく音頭に合わせて祈願太鼓も勇ましく昔のよすがを偲んでいる。

また、伝統的な特殊神事として、この神社に古くから伝わる「こつま南瓜祭り」がある。江戸時代より、当地勝間村の特産物であった「こつま南瓜」にちなんだ無病息災（中風除け・莫気封じ）を祈願するお祭り、毎年十二月の冬至には大勢の老若男女の参拝で賑わう。

# 天満宮

てんまんぐう  
(通称) 天神ノ森天満宮

御祭神

菅原道真公

御神徳

学業成就  
安産守護

例祭日

十月二十五日



鎮座地 大阪市西成区岸里東二一三十一  
電話 〇六一六六五一五三三〇

H  
P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

樹齢六百年の樟におおわれた境内と、毎年五月連休明けの日曜日に樟の新緑をめぐる祭と野点を行っています。

## 由緒

当社の創建年月は詳かでないが、古書によれば応永年間に北野天満宮の御分霊を奉斎したと見える。一名、子安天満宮と称した。

樟樹の森を「紹鷗杜」と言う。茶人武野紹鷗幽棲の旧跡で紹鷗は京都北野の人、平素信仰した天満宮を迎えて奉斎されたものである。豊公秀吉堺政所に御往来の時、此処に御輿を止め風景を賞し、休息され茶を献上したことにより天下茶屋の地名となった。老樟の下に子安石と称する霊石がある。これに祈ると安産の奇瑞があると參賽多い。

秀吉公淀君懐妊の節、安産を祈願され、安らかに秀頼公の出産を見られた事により社地一町四方、その他神田を寄進せられたが徳川の代になって、大阪陣での御朱印焼失の責により没収されて現在の地となる。

当社には、後西院天皇の皇女、宝鏡寺官理徳尼王染筆の額があるが破損甚しい。

現在の本殿は、元禄十五年に建設されたものである。境内は大阪府史蹟名勝天然記念物である。

明治十二年、大阪市南区阪町の天満宮を合祀した。

# 津守神社

つもりじんじや

## 御祭神

天照大御神  
稲荷大神  
大歳大神  
住吉大神  
綿津見大神

## 御神徳

## 例祭日

十月二十一日



鎮座地 大阪市西成区津守三一四―一  
電話 〇六一六六六一―六七五六  
HP



## 神社のおすすめ



## 由緒

当社は当津守新田開発の最初は木津崎と称し木津川尻の寄洲の岡の上に神殿を造営して、天照大御神、稲荷大神達五社の大神の大神威を畏んで此の新田の守護神と仰ぎ奉り勤請奉齋して稲荷神社と称え奉り新田成就を祈念したのに始るものである。

古文書によれば元禄十一年八月京都の人金屋源兵衛、木津島上納地代二、二三〇両、反別七一町二反六畝、石高四五七斗余（此の時、三軒家浦、九条浦、四貫島など十二ヶ所共願）とあり、元禄十五年四月、稲荷大明神小社氏宮地九畝十七歩免祖の事が記されてある。故に当神社創建は元禄十一年金屋源兵衛の信仰により勤請鎮齋したものである。（紀元二三三五年）

其の後木津島は袴屋新田となり、津守新田と所有者の移転により変ったのである。明和初年津守新田会所開設せられ、本稲荷神社は五社大明神とも申され、明和六年津守新田中央、北島南島の中堤防の上、現社地に神殿拝殿手水舎絵馬殿及社務所等新しく造営し同年六月十八日正遷宮せられた。（紀元二四二九年）

その後文久元年と明治二十七年社殿改修屋根替を奉行した。明治四年津守神社と改称し、同五年村社に列せられ、同四十年六月神饌幣帛料供進の神社に指定せられた。

昭和九年九月関西地方大風水害により神殿其他建物悉く大損障を来し、大阪府大阪市の特別供進金と氏子崇敬者寄金とにより、同十一年五月神殿、幣殿、祭器所、神饌所、拝殿、手水舎、神器庫、絵馬殿及社務所等復興造営し、境内の秋葉神社、稲荷荒魂神社、産土神社三棟改築し境内地七一坪内樹木を植込み、石玉垣、参道敷石、高塀等設置して境内整備を完成したのである。

当時白山邸内にあった変化灯籠の寄進があり古来狸灯籠といわれ四面姿を変化して暗夜火焰をなすなど伝説がある。撰津名物の一つで由緒深きものである。

大東亜戦争の戦禍は免れたが終戦により国家制度廃止となり、昭和二十一年十二月宗教法人令による神社登記をなし、宗教法人法の制定によって新神社規則を作り、昭和二十七年十二月十日の認証を得たのである。

其の年崇敬氏子会を結成し氏子約三千余戸、昭和二十一年月次講社を組織し、神社護持祭祀厳修の為金献納により神社運営に尽粹しつつある。献賜供課講四五〇余名

# 大阪市 大正区

▶ 大阪市にもどる



# 泉尾神社

いずおじんじや

## 御祭神

住吉大神  
大國主神  
八幡大神

## 御神徳

## 例祭日

七月二十三日



鎮座地 大阪市大正区泉尾二一七七八  
電話 〇六一六五五一四六三二  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ



## 由緒

元禄十一年泉州踞尾の人北村六右エ門公許を得て泉尾新田開拓に当たり事業の成功、土地の繁栄を祈願する為、産土神社を奉斎されたのが創始であります。

爾来農村の氏神として崇敬されてきましたが、明治四十一年村民の願いによって、茨住吉神社に合祀されました。

大正七、八年諸産業の興隆に伴い、泉尾も住民が激増、氏神信仰を中心とした当時の風習として九条までの参拝は、遠距離であり、茨住吉神社側として考究の末、昭和十一年内務省異例の承認を受け、現在の泉尾の地を買収、石垣を築き、飛地境内神社が昭和十七年創祀され、荘厳な社殿が造営されましたが、戦災の為灰燼と帰しました。

昭和二十七年氏子崇敬者の要望もあり、復興に専念、現在の総備州檜造の社殿が造営され、石玉垣、鳥居門、鉄筋の社務所、植樹と整備されました。

平成四年、茨住吉神社の承認により、神社本庁の承認を得、分離独立、大阪府の認承を得て分離独立、「宗教法人泉尾神社」が設立され、創祀以来再度の変遷を得て、泉尾の地の守護神として鎮座されています。

# 八坂神社

やさかじんじや

(通称 下之宮八坂神社)

## 御祭神

素盞鳴尊  
応神天皇  
仁徳天皇  
菅原道真  
相殿天照皇大神  
弥都波能売神  
春日大神

## 御神徳

## 例祭日

十月十七日



大阪市大正区



鎮座地 大阪市大正区三軒家東六一四―一二  
電話 〇六一六五五一〇五八五  
H P

## 由緒

寛永二年素盞鳴尊を勧請したと伝えるも詳かでない。明治四十年より同四十四年の間、新炭屋町村社高津宮、平尾町村社八坂神社、千島町村社天満宮、千歳町村社八幡大神宮、北恩加島町村社天満宮を合祀す。

昭和十一年五月社殿改築。旧観を改めたが、昭和二十年三月大東亜戦争の戦火を蒙り全焼。昭和二十二年三月仮社殿再建。昭和二十四年本殿のみ竣工。幣拝殿は昭和四十一年七月竣工現在に至る。

元は西面であつたが昭和二十七年、大阪市都市計画により南面となる。

『節分特殊行事、笹付宝船由来』当社に於て節分の夕刻より、宝船絵巻物を笹につけ参拝者に授与する慣習がある。

この宝船の絵巻物は、節分の夜枕の下に敷いて寝ね、吉夢を見た時は今年吉事ありとして之を秘蔵す。之を船をつなぐという。凶夢を見た時は河に流す。之を流すという。当地は昔大阪の関門であつて、北前船入津して土地の潤い多大であつたため、北前船は三軒家の宝船であつた故事を襲い、除厄招福の靈験を祈る伝統となつたものである。註。北前船

宝永年間加州藩より二百五十石積の大船を以て加州米一万石を毎年大坂に運搬した船を謂う。経路は日本海より下関を経て瀬戸内海を通り大坂に至る。

# 八坂神社

やさかじんじや  
(通称) 上(かみ)のやさかさん

## 御祭神

素戔鳴尊  
天之德日命  
応神天皇

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
水利水運守護

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 大阪市大正区三軒家東二一七一十八  
電話 〇六一六五五一一五二七五  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ



中村勘助之碑

## 由緒

大阪市大正区の基礎となる姫嶋(勘助嶋)を慶長十五年(西暦一六一〇年)に開発し、また大阪市水利の恩人とされる中村勘助翁が、正保四年(西暦一六四七年)京都祇園の八坂神社より三軒家村丸島(姫嶋)に御分霊を勧請したのが始まりとされる。宝永の大地震のため、正徳年間に現在地へ遷座。明治四十一年(西暦一九〇八年)、難波嶋町村社八坂神社を合祀。昭和二十年(西暦一九四五年)、空襲により焼失するも、昭和三十二年(西暦一九五七年)に社殿が再建された。

### 末社

姫嶋龍神社 御祭神 天一根  
天神社 御祭神 菅原道真公

安永三年(西暦一七七四年)東千島村に勧請  
明治四十二年(西暦一九〇八年)現在地に遷座

# 天満宮

てんまんぐう  
(通称 南恩加島天満宮)

御祭神

菅原道真公

御神徳

例祭日

七月二十五日



鎮座地 大阪市大正区南恩加島町一―三―四―  
電話 〇六一六五五―一五六六八

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

天保七年南恩加島開拓の祖、岡島嘉平次、新田開墾の成功を祈り其の郷土の氏神、道明寺天神を勧請し当町東北端丘阜に祀る。

明治四十三年十一月三軒家八阪神社に合祀の命があつたが、合祀するに至らなかつた。

昭和二十年三月大東亜戦争の戦火を蒙り、社殿及社務所焼失す。

戦後宗教法人令の施行に伴ひ南恩加島町の氏神として奉斎す。

昭和二十七年七月現社殿再建、

昭和三十三年四月、大阪市都市計画により現在地に奉遷す。

うぶすなじんじや  
**産土神社**  
(通称) 小林の宮さん・さんどさん

**御祭神**

天照皇大御神  
住吉大神  
応神天皇  
春日大神

**御神徳**

厄除開運  
鬼門守護  
中風封じ

**例祭日**

十月十五日



境内社 小林稻荷神社



末社 小林恵美寿神社

鎮座地小林地域の乾(地面)を守護しています。

**神社のおすすめ**



鎮座地 大阪市大正区小林西一七七一三  
電話  
HP

**由緒**

当神社は、天保三年(一八三二)小林新田の鎮守として、住吉大社より住吉三柱の大神様をご勧請申し上げて創建されました。

その後、天照皇大御神・応神天皇・春日四柱の大神様を合祀申し上げ、現在に至っています。

昭和五十年、都市整備計画により現在地に遷座されました。現社殿は、昭和五十四年に建立されたものです。

御祭神に因み、「開運厄除」・「航海安全」の神と信仰されてきましたが、現在では鎮座地が氏子区域の乾(北西)にあることから「鬼門守護」・「中風封じ」の神として信仰されています。

また、「大正区戦没者慰霊碑」が建立され、年に一度大正区遺族会の慰霊祭が斎行されることもあり、大正区の「招魂社」的性格も帯びてまいりました。

境内には、末社「恵美寿社」と「稻荷社」が鎮座し、いずれも「商売繁盛」・「家内安全」の守護神と仰がれ、「稻荷社」は、「火伏」の神としても信仰されています。

境内南西にある神木「二股の楠」は、縁結びに靈驗あらたか度知られ、毎月一日・十五日の月次祭には、この楠を触れて拝礼される参拝者を多く見かけます。

大正区で最も小さな神社ながら、神社役員・氏子・崇敬者に、篤い信仰と共に護持運営されています。

# 大阪市 阿倍野区

▶ 大阪市にもどる



# あべおうじじんじや 阿倍王子神社

(通称 王子神社)

## 御祭神

伊弉諾大神  
伊弉册大神  
素盞鳴大神  
品陀別大神

## 御神徳

厄除開運  
家内安全  
病氣平癒

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 大阪市阿倍野区阿倍野元町九一四  
電話 〇六一六六二二二五六五  
HP <https://abeouji.tonosama.jp/>



## 神社のおすすめ

「昔、仁徳天皇御夢に熊野神使が現われ、阿倍島に熊野大神を祀れとお告げがあり、勅使を遣して調べられた処、阿倍の中洲の老松に、首は雪よりも白く、眼は日よりも明い、三足の霊鳥が居り、天皇神駿いと畏み給い、其の所に熊野王子の大宮を造り営み給うた」と伝わる。



陰陽師 安倍晴明大神



過ぎの神使 八咫烏大神

## 由緒

当神社に伝わる縁起絵巻『摂州東成郡阿倍権現縁記』には仁徳天皇の御創建とあり、一説には往古この地を本拠とした安倍氏の創建とも伝わる。平安時代より蟻の熊野詣と称された熊野信仰が盛行するや、熊野九十九王子の一社となり、「阿倍野王子社」「熊野二ノ社」「阿倍王子権現」等と称せられ、法皇、上皇、女院等百数十度に及ぶ熊野御幸の途次御参詣御奉奉のことあり。その間、淳和天皇の天長三年、悪疫が天下に流行するや、弘法大師空海が勅命を奉じて当社にて祈禱を修し、疫病を鎮静するを以て『痾免寺』の勅額を賜わり、又後光厳院が御病平癒を当社に祈つて靈験著しく、社殿を補修し、神輿を再興し、供田を寄せられ益々国家の安泰を祈られたこと等古書に見えるところである。

南北朝時代に於ける地方の戦禍と共に、御社運は幾変遷を経て阿倍野村の氏神として徳川時代に至り、元和二年には御社殿造替のことあり。爾来、種々の講社組織を通じて住民信仰の中心となり、明治五年神仏分離の際大江神社と改称して村社に列し、明治四十年東区安土町鎮座の男山八幡神社を合祀して大江八幡神社と改称したが、明治四十四年阿倍王子神社の現社号に復し、大正二年郷社に列せられ、明治百年を期した昭和の大造営として、昭和四十二年本殿以下社殿造営、昭和四十四年社務所参集殿の造営並びに神域の整備が完成した。尚、前記の如く、当社に合祀された男山八幡神社は、往昔、石清水八幡宮の社家に「白革染」の法を伝える者あり、附近の農家これを修得して、京、大阪、江戸、長崎等に分散居住したが、大阪に移った者は安土町に住んで専らこの業を営み、元禄元年、町内に男山八幡宮を勧請して一社を創建し、毎年八月には「放生会」を行い、又、「菖蒲革祭」と称して神輿渡御式もあつたが、明治三十九年八月に発令された神社合併の勅令に基き、当社に合祀されたものである。

飛地境内社の安倍晴明神社は、一条天皇の寛弘四年の創建と伝えられ、治承二年及び寛政年間には両度の御改築あり。旧幕時代大阪城代の更迭に際しては特に当社に参拝古文書の拝観を例とされたが、後、衰微して明治に至り、僅かに文政年間泉州堺の住人神奈辺大道心が建立した「安倍晴明誕生地」の一碑を存するのみとなっていたが、時の阿倍王子神社々司長谷川熊次郎が氏子崇敬者の協賛を得て、大正十四年現社殿を造営復興し、「葛之葉子別れ」の伝説に因む郷土の祖神として庶民の崇敬を集めている。

尚、令和元年九月十日当社内の綜合末社本殿、葛之葉稻荷神社本殿、安倍晴明神社本殿、弊殿、拝殿、透塀が国の登録有形文化財に指定されている。

# あべのじんじや 阿部野神社

御祭神

北畠親房公  
北畠顕家公

御神徳

学業成就  
知徳賦与  
義勇向上

例祭日

一月二十四日



鎮座地 大阪市阿倍野区北畠三ー七ー二〇  
電話 〇六ー六六六一ー六二四三  
HP <http://www.abenojinjya.com/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

御本社他に六社ある摂社末社には、それぞれ独自の御神徳を有し多くの方々より御崇敬を集めております。



旗上稲荷社鳥居



奥宮の快癒御守

## 由緒

### 神社創建の沿革

当神社の鎮座地は顕家公が足利軍と戦った古戦場にあり、御旅所には顕家公の墓碑がある。この御墓所の存在がきっかけとなり、顕家公をお祀りする神社創建運動が起こった。これを受け政府は御祭神を顕家公と親房公とし、明治十五年一月二十四日に阿部野神社と号して別格官幣社に列せられた。また当神社は全国にある「建武中興十五社」の一つに数えられる。

### 御祭神の由緒

北畠親房公は、村上天皇の皇子、具平親王の子息である師房が、源の姓を賜った事に始まる、村上源氏の血筋を引く。後醍醐天皇の信任が厚く南朝方の中心となり、国家中興に挺身されたが、御年六十二歳で薨じられた。

後醍醐天皇の崩御後は、中世二大史論の一つである『神皇正統記』を著し、それ以外にも『職原抄』、『二十一社記』等を著して、日本思想史上に大きな足跡を残した。

北畠顕家公は親房公の御長子で、一三三三年建武の新政で陸奥守兼鎮守府將軍に任じられ、義良親王を奉じて陸奥へ下向され、奥州を治めた。

足利尊氏が謀反を起こすと、上洛して九州に敗走させ鎮守府大將軍の号を賜った。その後勢力を盛り返した尊氏が京都を占領した為、再び西上し各地を転戦して北朝方を破ったが、阿倍野・石津の戦いで壮烈な戦死を遂げた。御年二十一歳。

また、顕家公が戦死される一週間前に、後醍醐天皇へ送った「上奏文」は、顕家公の卓越した洞察力と政治理念を知ることのできる資料として今日に至るまで高く評価されている。

### 摂末社

御魂振之宮（奥宮・一願一遂之宮）

天照大御神・三輪大神・少彦名大神・菅原道真公を祀る。戦後宮司を始め氏子崇敬者が祈念しつづけ、遂には社殿復興の悲願を成さしめたお宮である為、一願一遂の宮とも言う。

### 勲之宮

南部師行公とその一族郎党百八名を祀り、御扉には南部家の家紋向鶴が施されている。

### 祖霊社

歴代宮司・奉賛会会長・氏子総代・崇敬者の物故者を祀り、年二回祖霊祭をとり行う。

### 土宮

白姫大明神（大土地主之神）を祀り、阿部野神社の土地や地域を守護し古来より信仰される。

### 旗上稲荷社

豊受稲荷大神・高倉大明神・白鷹大明神を祀り、「旗上」とは一旗上げるという意味を指し、鳥居や旗を奉納し、商売繁盛や事業の成功が祈念されている。

### 旗上芸能稲荷社

大宮能売大神（天宇受売命）を祀り、芸能上達の守護神として、諸芸に勤しむ人々より篤い崇敬をうけ、多くの鈴を奉納されていることから「鈴之宮」とも呼ばれる。

# 大阪市 平野区

▶ 大阪市にもどる



# 杭全神社

くまたじんじや

## 御祭神

素盞鳴尊  
伊弉册尊  
速玉男尊  
事解男尊  
伊弉諾尊

## 御神徳

攘災招福  
家内安全

## 例祭日

七月十一〜十四日  
十月十七日



鎮座地 大阪市平野区平野宮町二一―一六七  
電話 〇六一六七九一―〇二〇八  
HP <https://kumata.jp/>



## 神社のおすすめ

「福の種」は、豊作を祈念する「御田植神事」にちなんだ一粒万倍・金運の縁起物で、神田で穫れた粳より奉製しています。ご希望の方には神事当日のほか、社務所にて随時お頒ちしています。



福の種



拝殿・鎮守の森 上空写真

## 由緒

平安初期、征夷大将軍 坂上田村麿の子、広野麿が杭全荘といわれた当地に荘園を営み、その子当道（まさみち）が貞観年中に、氏神として京都より牛頭天王を勧請して祇園社を創建したのが杭全神社の始まりです。近世までは「祇園宮」と称されましたが、現在は杭全神社の第一殿としてお祀りしています。

降つて建久元（一一九〇）年、熊野信仰の隆盛により、熊野證誠権現が勧請され、現在の第三殿が建立されました。当社所蔵の『平野郷社縁起』には、「山伏が笈を担いで当社を訪れ、社僧に役小角手づからによる熊野證誠権現の尊形を牛頭天王と並べて崇め祀るよう伝えたが、社僧が断つたため、山伏は一本の松に笈を掛けて去った。その夜、松の木から現在の本殿の辺りへ光が放たれるなど奇端が相次ぎ、社殿が建立されて多くの人々の崇敬を集めた」と證誠殿鎮座の由来が記されています。

更に、元享元（一三二一）年には、證誠殿鎮座の来由が天聞に達し、後醍醐天皇の詔勅により現在の第二殿である熊野三所権現が勧請建立されました。鎮座に合わせて境内の諸殿・宝塔などの諸堂が修復され、詔勅により熊野権現は総社として、祇園社と並び称されるようになりました。現在でも、「熊野権現」「祇園宮」と記された道標が旧平野郷の町なかに残されています。

明治三年、当地の古名「杭全荘」に基づき杭全神社と改称し、昭和五年には府社に列せられました。なお、本殿三棟は国の重要文化財に指定されています。

## 「平野」について

当地は中世まで「杭全荘」と称されましたが、次第に広野麿の「ひろの」が転訛したと言われる「平野（ひらの）」と呼ばれるようになります。中世後期、経済活動が活発になるに従って、交通の要衝であった平野は経済力を高め、戦禍を避けるため町の周囲に濠や土塁を築くなど自治都市として発展してゆきます。江戸初期には広野麿の子孫とされる七名家の一つ末吉家が銀座の運営・朱印船貿易などで隆盛を極めました。元禄年間より、本郷七町と西方の散郷四村を統合して平野郷町が成立し、現在でも当社の氏子地域は平野区（旧本郷）と東住吉区（旧散郷）の二区にまたがっています。

## 夏祭について

毎年七月十一日から十四日の夏祭は、本郷九台散郷一台のだんじりの曳行があり、大阪でも指折りの規模のだんじり祭として、毎年30万人を超えるとも言われる大勢の人出で賑わいます。

# 旭神社

あさひじんじや

## 御祭神

素盞雄尊  
外八柱  
撰社  
若宮八幡宮

## 御神徳

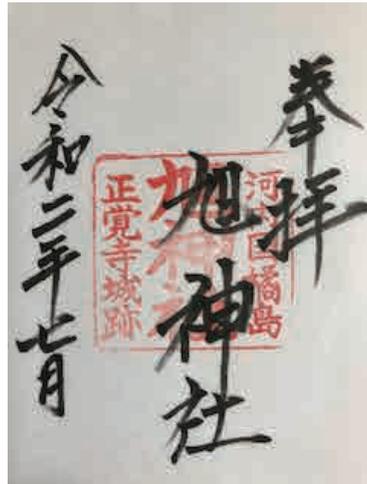
五穀豊穰  
諸難除け  
疫病退散

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市平野区加美正覚寺一―一七―三〇  
電話 〇六一六七九一―四〇四五  
HP <http://www.eonet.ne.jp/~asahi-jinja/>



## 神社のおすすめ

非公開であるが、昭和九年 台風で倒れた木の下から珊瑚製の首飾りと思われる物が出土した。出土当時、京大で調査してもらった記録があり、その後も府市文化財保護課に問い合わせたりしたが、類似の出土例がないとの事である。途年代等不明。類似例等があればお知らせいただけると幸いです。

## 由緒

東に向かって並立する二つの社殿のうち向かって左が素盞雄尊を主祭神とする旭神社、右が応神天皇を祀る撰社若宮八幡宮。

旭神社は、天平五年（七三三）頃の御鎮座で、もともとは旭牛頭天王社と呼ばれていた。当社縁起によると、風雨がやまず困り果てていたところ古老にお告げがあり、流した「橘」が流れ着いたのが当地で、その橘が旭の様に照り輝いたことから「旭大神」と称えたと伝えられている。諸難除け・疫病退散・厄除・家運繁栄・縁結び・安産の神として崇敬を集めてきた。

若宮八幡宮は天平勝宝六年（七五四）頃、東大寺鎮守・手向山八幡宮を勧請して若宮八幡宮と称し、水禍を防ぐ宮とし、古くから雨乞い、また良き縁は結び悪しき縁は切る神として篤く信仰されてきた。

建武年中（一一三三〇頃） 河内守護 楠正成、子正行 度々祈願に訪れる。

明応二年（一四九三） 正覚寺合戦 正覚寺城炎上、將軍足利義材囚われ、畠山政長自刃。

元禄十二年（一六九九） 旭神社を現加美小学校付近より当地に遷座。

明治五年（一八七二） 周辺に鎮座していた天照大神・春日大神・堅牢地神・諏訪明神  
公守大神・勝手大神・丹生大神・嶋戸大神を合祀。

昭和五十六年（一九九一） くす・いちよう・むく 大阪府天然記念物に指定。

# すがはらじんじや 菅原神社

(通称 方除天神)

## 御祭神

菅原道真公  
天照大神

## 御神徳

学業成就  
厄除け

## 例祭日

十月十六日



ハート型の御神木

境内にはハート型の御神木があり、恋愛成就のパワースポットとしても注目されている。

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市平野区加美鞍作一―五―一七  
電話 〇六一六七九二―六四二五  
HP <https://kami-sugahara.wixsite.com/home>

## 由緒

かつて、この地には神明水という清水がこんこんと湧いていました。渋川郡竹洲村に住んでいた止菊村家歴は、神明水を満たした池に燕子花(カキツバタ)の花を植え、鬼門の守り神として、天照皇大神をお祀りしました。古来、鬼門は災いがやってくる方角であると恐れられておりましたが、この災いを除いてくださる「方除け」の御神徳あらたかとして、崇敬者は年ごとに増加。境内の砂を頂いて鬼門の守りとする信仰は今も続いています。

昌泰四年(九〇一年)、菅原道真公は赴任先である筑紫国(現在の福岡県)の大宰府へ向かわれる途中、道明寺にいらつしやる叔母上のもとへ立ち寄ろうとお考えになり、船で大和川を下っておられました。そのとき、季節外れであるにもかかわらず、この地の燕子花が満開に咲き誇っておりました。その様子をご覧になった道真公は、川べりに船を留めて、珍しい金色の燕子花をいたく愛でられ、また、歓待した里人との別れを惜しまれたということです。

やがて、村上天皇の御代(天暦年間)になると、京都北野の地に道真公をお祀りする神社が建立されました。御神縁浅からぬこの地においても、道真公をお慕いする人々の願いにより、新たに社殿を建てて天照皇大神と並べてお祀りすることとなり、郷里を守る産土の神として信仰されました。

江戸時代には、道真公は学問の神・大威徳天満大自在天神として、ますます深く崇敬されるに至りました。明治四十年十月に南鞍作村の無格社・天照皇太神社を、さらに明治四十一年十月鞍作新家村の村社・菅原神社を合祀しましたが、新家村の菅原神社は昭和二十四年十二月に旧地に遷り、新家天満宮となりました。

当社にはかつて、京都の公家高辻家(道真公の子孫)より寄進された台灯籠があり、これを掲げた時には大名も馬から下りて通行する習慣がありました。明治維新後は行方不明になっています。

## 鞍作について

当社が鎮座する加美鞍作の地は、古くから馬の鞍を作る技術者集団が居住していたと考えられ、古典にも鞍部賢貴、鞍部村主司馬達等、鞍作止利など、当地にゆかりの深い人物の名が記されています。

# 新家天満宮

しんけてんまんぐう  
(通称 川べり天神)

御祭神

菅原道真公  
天照大神

御神徳

学業成就

例祭日

十月十七日



御神木

● 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市平野区加美南五丁目二二五  
電話 〇六一六七九一一八三七〇  
HP <https://shinketenmangu.wixsite.com/home>

## 由緒

当社の創建年月は不詳であるが、所伝によれば、この鎮座地は、御祭神の菅原道真公が左大臣藤原時平の陰謀、讒言によって昌泰四年（九〇一年）、十六歳の醍醐天皇により右大臣・従二位の官位から大宰権帥に左遷され（道真公没後二十年目の延喜二十三年（九二三年）、同じ醍醐天皇により右大臣に復され正二位を贈られた）、筑前（福岡県北西部）の太宰府に行かれる折、菅原家歴代の菩提寺道明寺の住職である叔母の覚寿尼に別れの挨拶に立ち寄られた帰りに平野川を船で下り休憩された所で、後年京都の北野天満宮の御分霊を勧請した場所とのことで、その社は「川べりの天神」と呼ばれて尊崇されていた。

時が移り、明治五年（一八七二年）「村社」に列せられ、明治三十九年（一九〇六年）公布の政令「神社合祀令」に従い、同四十一年、加美村大字鞍作の村社菅原神社に合祀された。社殿はその後ほどなく自然倒壊したが、大木や石の大鳥居、灯籠等の残る境内地は保存されていた。

戦後の昭和二十四年（一九四九年）四月に、新しく造営された現社殿へ菅原神社から御祭神にお遷りいただき、当時の所在地名、加美村新家町に因んで宗教法人「新家天満宮」という社名で再建された。

# 瓜破天神社

うりわりてんじんしゃ

## 御祭神

菅原道真公  
素戔鳴尊  
平維盛

## 御神徳

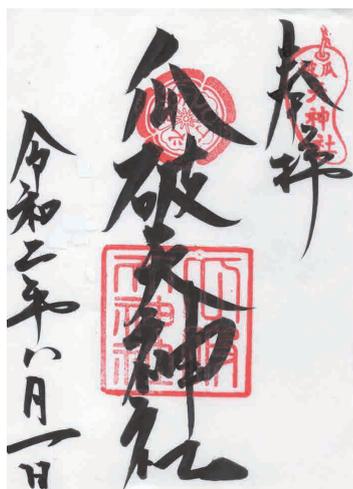
学業成就  
厄除開運  
商売繁盛

## 例祭日

十月十八日



鎮座地 大阪市平野区瓜破五丁目一四一九  
電話 〇六―六七〇九―一〇三  
HP



## 神社のおすすめ

神社の起源が「瓜破（うりわり）」の地名発祥の由来となった。



稲荷社

## 由緒

当地郷土の歴史を記録し唯一現存する船戸録（元文元年、一七三六 記）によれば、孝徳天皇の大化年間（六四五～六四九）当地に居住された高僧 船氏道昭が、五月晦日、三蜜の教法観念の折、庵室に赫々と光る天神の尊像が現れたので、奇異の思いをなし、これはおそれ多い事であるというので、祭壇を設けておりよく収穫してあった瓜を割って供えた。時に六月朔日であった。道昭はこの由を朝廷に上申したところ、方八町の宮地を賜わり社殿を造営し、この霊像を祭祀して当地の氏神と崇め奉り、西の宮、又は方八丁の宮と称したのが当社の起源である。この時から地名を「瓜破」（うりわり）と称することになったと記されている。

また当地の北部に牛頭天王を祀る社（祭神 素戔鳴尊、起源鎮座年月不詳）があり北の宮と称して両社並立してきたが、慶長年間（一五九六～一六一四）に至り公命によって西の宮へ合祀した。この牛頭天王社は、特に時の人との崇敬深く、早魃請雨には必ずこの社に祈願して瑞雨を賜ったと言われる。北の宮社前には横三間長さ五丁の馬場があり地名を鳥井崎と称した。その後、片桐且元の検地によって一面荒廢の芝原を不要地として開墾田畑としたため北の宮の古跡は消滅した。

一方寛永年間（一六二四～一六四三）に当地の農耕村民が耕作の都合で集団移住し西川村（旧西瓜破）を形成し、そこに氏神として祀った天満宮（祭神 菅原道真）、また東瓜破成本地区の氏神として尊崇された天神宮（祭神 菅原道真、起源鎮座年月不詳）、さらに東北部に当時東の宮と称した小松大明神社（祭神 平維盛）があった。この社は、寿永年間（一一八二～一三）平 重盛に大恩を受けた源氏の武将湯浅七郎兵衛宗光が京都守護職として赴く際、当地にて重盛の嫡子、維盛が熊野浦にて入水の由を聞き、追悼慰霊を営み、神領五十歩を寄進して宮居を建てたのが起源とされている。その後氏地、本郷の地の発展と村民の熱意で天和年間（一六八一～一六八三）現今の地（東南部）に勧請され氏神（小松神社）となる。

明治四十三年には、一村一社制の公命により各社は当神社に合祀され、昭和の時代を迎え、村民の願いによって再び各社に分霊鎮座された。

現在、社域六五七坪、社殿は東に面し流造檜皮葺、江戸末期の修葺で、境内末社として稲荷社がある。

# 志紀長吉神社

しきながよしじんじや

## 御祭神

長江襲津彦命  
事代主命

## 御神徳

交通安全  
厄除開運  
勝運

## 例祭日

十月十六日



大阪市平野区



全国各地より注文あります勝守



企業・個人からの奉納の大願旗

当神社は戦国武将、真田幸村が夏の陣決戦前に軍旗・刀剣を奉納され必勝祈願された神社です。平野の災除けの神です。また、えべっさんです。神社カフェあり。

## 神社のおすすめ

奉拝 勝運の店  
志紀長吉神社  
令和二年八月四日

鎮座地 大阪市平野区长吉長原二一八一三  
電話 〇六一六七〇九一七五七  
HP <https://www.shikigatayoshi-jinja.org/>

## 由緒

日本最古の書物古事記・日本書紀に載せられている延喜式内社であり、ご鎮座になったのは今から一二〇〇年前の平安初期頃（七九四年）であり、第六十九代後朱雀・第七十代後冷泉天皇の祭りの場となった場所である。天皇即位の祭・大祭の時に当社の東の飛び境内地（宝田）（現在の長原東二丁目六番）より全ての者に罪・穢れがつかないよう祓うものとして日蔭の蔓を供え、平安朝第五十一代平城天皇（八〇九年）より日蔭大明神の位を授けられ、神紋と定められた。

### ご祭神

長江襲津彦命（ながえそつひこのみこと）【ご神徳 交通安全・厄祓い・必勝】

長江襲津彦命は、葛城襲津彦命とも称し、第八代孝元天皇の孫にあたり武内宿禰の六子として生誕され、第十五代応神天皇・第十六代仁徳天皇にお仕えし、三韓征伐の際に海上・道中の安全を守護されました。長江襲津彦命は、もと大和地方を支配した葛城氏の祖先で、この長吉の地に居住し又、住吉の墨江の名より長江へと変わり鎮座されました。地名の通り長吉は、長江から変わりました。

事代主命（ことしろぬしのみこと・通称えべっさん）【ご神徳 商売繁盛・五穀豊穡】

事代主命は、天照大神の建速須佐之男命の五番目の孫で大国主命の二子であり、当時よりこの地の守り神として祀られています。又、七福神の神で、長古の地の商売繁栄を守られています。

# 産土神社

うぶすなじんじゃ

## 御祭神

素盞鳴命

## 御神徳

厄除開運

## 例祭日

十月十六日



大阪市平野区

鎮座地 大阪市平野区長吉出戸六一〇一四  
電話 〇六一六七〇九一七五七  
H P <https://www.shikinagayoshi-jinja.org>

御朱印なし

## 由緒

産土神社 開運厄除けの宮

創建は明らかではないが、もと牛頭天王社と称し素盞鳴尊を祀った。

明治五年に産土神社（うぶすなじんじゃ）と改称し村社となった。旧社殿の棟札（屋根裏の柱に取り付け後世に記録を残す板札）に天保七年以上棟の記述があったが、現在の社殿は老築化により昭和六十一年に建て替えられたものである。

交通

大阪市営地下鉄谷町線「出戸」駅を東へ八〇〇M

# 天照皇大神社

てんしょうこうたいじんじや

## 御祭神

天照皇大神  
春日大神  
八幡大神

## 御神徳

厄除開運

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市平野区長吉出戸四―四―三六

電話 〇六一六七〇九―一七五七

H P <https://www.shikinagayoshi-jinja.org>

御朱印なし

## 由緒

天照皇大神社 開運厄除けの宮

創建は明らかではなく、天照皇大神・春日大神・八幡大神の三座をお祀りしていたが、明治五年産土神社に合祀された。

明治十三年七月分離し村社となった。

交通

大阪市営地下鉄谷町線「出戸」駅を東へ四〇〇M

# あかさかじんじや 赤坂神社

## 御祭神

素盞鳴尊  
菅原道真公

## 御神徳

厄除開運  
学業繁盛

## 例祭日

十月十六日



## 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 大阪市平野区長吉六反一―一四―二四  
電話 〇六一六七〇九―一七五七  
HP <https://www.shikinsagayoshi-jinja.org>

## 由緒

赤坂神社「学向の神・開運厄除の宮」

赤坂神社の創建は不詳ではあるが、文献には「南北朝時代までこの地を赤坂村とよび、後醍醐天皇が鎌倉幕府を滅亡させようとした元弘三年（西暦一三三三年）に河内の国の武将楠木正成が後醍醐天皇に協力し河内国石川郡赤坂村（現・南河内郡千早赤阪村）にて挙兵し足利尊氏の軍勢と建武二年（西暦一三三五年）に戦になった際、京都にいた足利勢に河内国石川郡赤坂村と混同されることを恐れ六反村に改められたといわれている。」と記されていることより、いまから約七〇〇年以前に創建されたものと推測されます。

六反村へ改名した由来は「赤坂」という文字の「赤」を縦横棒を消して「六」に、「坂」の字の土へんをとり「反」にし以前の村名を残しつつ混同されあらされることのないようにするための苦肉の策であったといえます。また、赤坂村は、もともとは赤阪村でしたが古来より掘り起こすと赤い土器が出土したことからござとへんの「阪」よりつちへんの「坂」に改名されたといわれています。

赤坂神社のご祭神

素盞鳴尊（すさのおのみこと）

ご神徳・厄除け

南北朝時代この赤坂の地に疫病が蔓延し素盞鳴尊が祓いおさえられたと伝えられています。

菅原道真公

ご神徳・学問・芸能

交通

大阪市営バス「長吉六反」停留所西へ一〇〇M

# 川辺八幡神社

かわなべはちまんじんじや

御祭神

品陀別命

御神徳

例祭日

九月十五日

鎮座地 大阪市平野区長吉川辺一丁目三三八  
電話 〇六一六七六九一〇三二三  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

大和川堤防の北に位置し、創建の年月は不詳である。石清水八幡宮の分霊を勧請したもので若宮八幡宮と称したと伝わります。

後醍醐天皇の御代に宸翰を賜り、楠木正成公より菊水旗二流の奉納を受け、往時は社殿広壮にして社領も四百町歩に及び末社に少彦名神社、厳島姫神社等ありと伝えられるも、宝永元年大和川付替え工事に際してその大半は川床となり、現在地に遷宮し大和川堤防上にお旅所が築かれたと伝わります。

明治五年にはほぼ現在の社領となり、大正四年本殿、拝殿、手水舎、社務所を整え、末社に金吉稲荷神社、齒神社があります。

昭和二十七年神社本庁に参加。川辺八幡神社と改称。



# 大阪市 東住吉区

▶ 大阪市にもどる



# 山阪神社

やまさかじんじや

## 御祭神

天穂日命  
野見宿禰命  
猿田彦命  
素盞鳴尊  
宇賀御魂命

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 大阪市東住吉区山坂二丁目一九一三  
電話 〇六一六六二二一八三八  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は一に山阪明神ともいわれ、撰津志に記せる田辺西神祠は当神社なり。勧請の年代は不詳であるが、田辺宿禰この地にありて氏の祖神天穂日命を祀ったに始まるといわれる。

三代実録清和天皇の貞観四年八月十一日に「撰津国正六位上田辺東神、田辺西神並授從五位下」とあるは当社で東の神は現東住吉区中野町の中井神社のことである。

元禄十六年検地帳写によると、当時の境内は東西四二八間、南北七七間、坪数九八五六坪という広大なものであった。

明治五年村社に指定され、社名を山阪神社と改称した。

明治二十三年当社の東一丁半の地に鎮座の八王寺神社（素盞鳴命）を同四十年田辺町松原字浜田（現山坂町）の土公神社（猿田彦命）を境内に移しついで、猿山字柳ヶ原（現阿倍野区西田辺町）の稻荷神社（宇賀御魂神）およびその境内社荒川神社を移転合祀し五神五社殿の本社と末社荒川神社を奉祀することとなるも創建以来日をへること久しく社殿荒廃のため、大正十二年七月改築し従来の五社殿を住吉造銅板葺の一社殿として大いに神域を整備し幣殿、拜殿、絵馬所を設けた。

なお社殿右方の相撲場は、祭神野見宿禰命に因んでつくられ毎年例祭（十月十五日）に近郷近在の草角技の力士によって奉納相撲が行なわれておったが現在では、学生相撲を主体に田辺相撲部が奉納行事を行っている。

# あまつかむやしる 天神社 (通称 桑津天神社)

## 御祭神

少彦名命  
菅原道真  
須佐之男命  
天兒屋根命  
布刀玉命  
外六柱

## 御神徳

病氣平癒  
良縁成就  
学業成就

## 例祭日

十月十七日



大阪市東住吉区

鎮座地 大阪市東住吉区桑津三十四一七  
電話 〇六一六七一九一三九五九  
HP <http://amatsukamuyashiru.com/>



## 神社のおすすめ

全国で応神天皇と髪長媛をともに祀りしているのは髪長媛出生地に鎮座する早水神社と当社のみである。



由緒に関する図案の木製御朱印帳



由緒に因んだデザインの御守

## 由緒

大阪陣の時に資料を失い、由緒は詳かではない。けれども口伝によれば、髪長媛が病気をされた時、少彦名神に祈願され全快された。その縁故に依り、後世同神を勧請され桑津の地に奉祀された。髪長媛がこの桑津の地に召された記事は、『日本書紀』の応神天皇の条に「十三年春三月、天皇専使を遣して髪長媛を徴さしめたまふ。秋九月中に、髪長媛日向より至れり。便ち桑津邑に安置しらしむ。」と記されている。髪長媛は桑津邑の創始者とも言うべき神で、天神社に奉祀される以前は、金蓮寺の境内の八幡宮に奉祀されていた。その境内は髪長媛の宮跡であったからである。

金蓮寺については、古記録によると「文禄三年浅野弾正の検地以来その境内四百九拾参坪は余地となり、宝暦七年住職洞空の再建す」と記している。ところが次第に廃頽し、明治初年に無住となつてしまった。そして神仏分離に依り寺は廃絶し、境内にあつた八幡宮は、天神社境内へ遷し末社となる。尚、天神社は、明治五年村社に列し、同四十一年三月二十五日、生野村大字林寺新家の村社林神社を合祀し、同四十二年六月神饌幣帛料供進社に指定される。以上の外、境外地に末社として歳徳神社あり。

# 素盞鳴尊神社

すさのおのみことじんじや

(通称 鷹合神社)

## 御祭神

素盞鳴尊

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
交通安全

## 例祭日

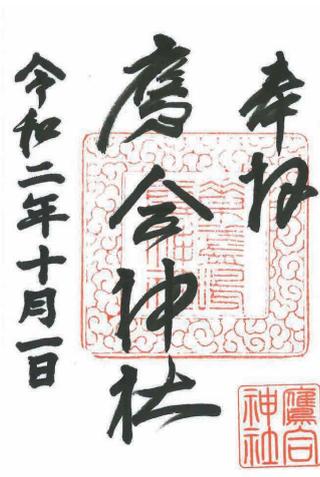
十月十三日



鏡淵の石碑

## 神社のおすすめ

百済王の一族で帰化人である酒君が仁徳天皇の命により、日本で最初に鷹狩の鷹を飼育した場所である鏡淵(鏡池)の石碑が当神社の境内にあります。鷹合の地名はそれに由来します。



鎮座地 大阪市東住吉区鷹合四一五一二二  
電話 〇六一六六九一―四八九七  
HP <http://www2s.biglobe.ne.jp/~falcomy/>

## 由緒

当社は往古地名に因んで鷹合神社と称し、また牛頭天王とも称し、村の東方に鎮座せしを後年現在のところに遷座したものである。  
天正年中に武田信玄の臣沼田重光が此の地に來り、村民の信賴を得て当社に奉仕していたが数年たらずで大阪に移去した際、当社の旧記全部を持ち去ったため、由緒は不明であるが、住吉神社の旧神官青蓮寺という家の記録の内に、延徳元年八月云々、鷹合の祭也云々と記録されているので、当社の創祀はその以前であらう。  
明治五年村社に列し、同四十二年六月神饌幣帛料供進社に指定された。

すみよしじんじゃ  
**住吉神社**  
(通称 湯里住吉神社)

御祭神  
中筒男命

御神徳  
商売繁盛  
五穀豊穰

例祭日  
十月十三日



鎮座地 大阪市東住吉区湯里四一七七一四  
電話 〇六一六七〇二一七二七二  
HP

奉拝  
**住吉神社**

令和二年八月九日

## 由緒

当社は東住吉区湯里町に鎮座し、中筒男命を祀り中古以来住吉二の宮と称し、明治五年現社名に改められる。創建の月日は詳でない、伝えられる所に依ると往時は当地の南三町余の天神山と云う所に須牟地神社があり、富田荘住道氏の氏神であったが後、同社の数邑を割いて河内国丹比郡に編入されることになり、社も同国の所属となったので同社祭神中の一座を勧請したものが当社であつて、初めは須牟地神社と称していたが、中古以来は住吉二の宮と称した。中筒男命が住吉大社の第二神であらせられるに因ると伝へられ、旧須牟地神社のあつた天神山の称は東住吉区矢田住道町の田畑の家として残っている。天正慶長年間の兵火に罹つて社殿旧記等が焼失した。社地の二十畝二十一歩は除地であつたが、文禄三年矢島久兵衛検地の際にも除地となつており、延宝七年三月二十七日九鬼和泉守の検地帳にも同じように除地とあり明治初年に至つた。大正十一年十一月発行の東成郡誌に依れば、「境内は大宇部落の中央庚申街道に沿ひ土塀を以て区域とす。官有民地合わせて一八九坪あり。境内広からざるも樹木繁茂し幽寂たる一区を為す。社殿は其再建年代社記の紛失に依り詳にすることを得ずと雖も住吉造の精巧古雅なるは殊に神威の著しきを感じしむ。本殿は東向一幣殿、拜殿権現造、その他絵馬所、井戸屋形境内社二門及び社務所あり。祭祀は祈年祭(二月十八日)、夏祭(七月十四日)、御祓祭(七月三十一日)、例祭(十月十三日)、新嘗祭(十一月二十三日)、鎮火祭(十一月三十日)、月次祭(毎月朔十三日)等なり。境内社に竹生島神社、稲荷神社の二社あり、氏子区域は本大字一円、戸数約百七十あり」と記されている。明治五年村社に列し、大正四年九月神饌幣帛料供進社に指定された。昭和二十一年氏子の方々の寄付に依り境内地は三八一坪となる。昭和二十八年十一月二十七日宗教法人住吉神社となる。昭和三十三年二月周囲の土塀を石玉垣に改築境内西地に社務所を新築す。

昭和三十八年八月参道に石畳を敷く。昭和四十一年八月境内の東南に聳る大樹楠に籠られる神霊の御告げが尾谷鹿三代に下り、人々寄り十二月楠社を建立す。尚本社古名と類似の須牟地神社(泉北郡俗に勝手明神)、中臣須牟地神社(矢田住道町)又東住吉区長居の神須牟地神社等に想いを致す時、本社とこの三社との間に何等かの関係があつたものと考えられる。

# なかとみすむちじんじや 中臣須牟地神社

(通称 住道神)

## 御祭神

中臣連の祖先が相伝えて  
祀り来った住道の神  
中臣氏の祖神

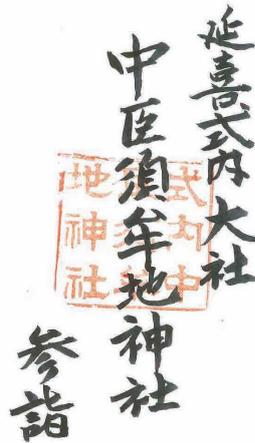
## 御神徳

## 例祭日

十月十三日



鎮座地 大阪市東住吉区住道矢田二丁目二〇  
電話 〇六一六七〇二一六八三五  
HP



## 神社のおすすめ



多都比咩社



前：竹生島社 後：猿田彦社



## 由緒

当社は、またの名を住道（スムチ）『和名抄』須牟地の神とも申し『大日本史』四度の官幣および八十島祭に預けられた延喜式内の大社である。

南北朝時代から室町時代にわたる長い間の戦乱などによって、当社の御由緒は忘れられてしまったようである。

当社は、中臣氏の祖先であり神武天皇にお仕え申された天種子命をはじめ、その御一族や御子孫の方々が、二千数百年以上もの昔から在住せられた由緒ある地の神社である。藤原不比等公は勅命をお受けになって、大昔から中臣氏の根拠地であった当地に、御先祖をあわせまつられた。『社記』

応神天皇の御代に、大陸の人たちが、本国の戦乱をさけて平和なわが国に新しい大陸文化を伝えました。わが国内は、神をまつる固有の信仰で固く結ばれ幸せに暮していましたが、その人たちも当社の神酒を賜うたといわれています。また、西暦紀元六三二年には、唐の国王のお使いに、当社で醸したお酒を難波の館でふるまったとの伝承があります。『日本書紀』『延喜式』『玄蕃寮式』『社記』

# あまみこそじんじや 阿麻美許曾神社

御祭神

素盞鳴命  
天兒屋根命  
事代主命

御神徳

例祭日

十月十七日

鎮座地 大阪市東住吉区矢田七―六一―一八  
電話 〇七二―三三二―〇二二三  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は大和川の南、天見丘に鎮座する延喜式内の旧社で、俗に阿麻岐志の宮と呼び、旧郷社である。

大同年間の創建であるが、沿革ならびに社名の由来は詳かでない。

社域約三千坪。老楠が数株あり、昭和四十三年十月大阪市の条令により、保存樹林としての指定を受けた。

昭和三十五年、耐震耐火を考えた独特の本殿を造営した。



# 大阪市 住吉区

▶ 大阪市にもどる



# すみよしたいしゃ 住吉大社

## 御祭神

第一本宮 底筒男神  
第二本宮 中筒男神  
第三本宮 表筒男神  
第四本宮 息長足姫命  
(神功皇后)

## 御神徳

清祓  
航海安全

## 例祭日

七月三十一日



御田植神事（おたうえしんじ）



反橋（太鼓橋）

## 神社のおすすめ

御田植神事（おたうえしんじ）  
国の重要無形民俗文化財に指定される御田植神事（六月十四日）は、儀式を略することなく、古い様子を今に伝える。  
本宮祭に続き、御田において替植女や奉耕者の手によって早苗が植え付けられる。中央に設けられた舞台では、巫女による田舞をはじめ様々な神事芸能が華やかに奉納される。

※他朱印あり



鎮座地 大阪市住吉区住吉二一九一八九  
電話 〇六一六六七二一〇七五三  
HP <http://www.sumiyoshi-taisha.net/>

## 由緒

当社は住吉神社の総本社と仰がれ、延喜の制では名神大社に列し、月次・相嘗・新嘗の祭祀において官幣に預かった。神階は早く天平年間には従三位、大同元年（八〇六）従一位、その後まもなく正一位を極めた。また、天皇の御代替わりことには大神宝使の発遣、八十島祭の奉幣に預かり、中世には勅祭二十二社、撰津国一宮、維新後は官幣大社に列格。戦後は神社本庁の別表神社となる。

伊弉諾尊が筑紫の日向の橘の小戸の櫛原にて禊祓せられた際、海中より出現せられた底筒男神・中筒男神・表筒男命の三柱の総称を住吉大神と申し上げる。さらに、仲哀天皇の御代、神功皇后（息長足姫命）は神託を奉ぜられ、熊襲の帰服、新羅の平定を終えて御帰還、大神の荒魂を長門国に、和魂を当地に御鎮齋せられた。その際の御神託「真住吉」によって住吉・住之江の地名が起った。御鎮座は皇后摂政十一年辛卯年（西暦二一一年）のことである。後に皇后を併せて住吉四社大明神と崇められた。

仁徳天皇の御代、難波に遷都して墨江津（住吉津）が開港となった。後、遣隋使や遣唐使といった海外使節の派遣に際して、朝廷より臨時祭の奉幣があった。南北朝期には後村上天皇の行宮となり、また、長慶天皇は当地で踐祚せられた。中世の堺、近世の大坂の海運貿易、天下の台所を支えた北前船など廻船業による崇敬も厚く、各業種より寄進された石燈籠六百余基が境内に林立する。

かつて、住吉の地は風光明媚な歌枕とされ、歌人たちは大神をもって歌神と尊崇した。特に現人神との信仰があり、神詠をもって託宣を下された。また、伊勢物語や源氏物語など王朝文学の舞台として、さらには御伽草子や謡曲などの題材にもなった。近世期の天皇は歌道の極秘伝「古今伝受」を相伝せられた際、当社に奉幣、御法楽和歌と御短冊奉納を行なわれる伝統があった。

特筆すべきは、伊勢の神宮と同じく式年遷宮の制があり、延喜の制では鹿島・香取とともに二十年に一度の造替が定められた。戦国期の停滞をへて、近世以降は社殿修復による式年遷宮を実施して今日に至る。その社殿は特徴的な配列で、第一本宮より第三本宮まで縦直列、第四本宮は第三本宮と横並列という他に例を見ないものである。さらに、各本宮の本殿は「住吉造」と称する古代神社建築の一つであり、大嘗祭の悠紀殿・主基殿と平面構造が類似するもので、本殿四棟はすべて国宝に指定。ほかに重要文化財二四件、府指定文化財五件、登録文化財三五件などを有する。

正月三が日の初詣では毎年二百万人を超える参詣で賑わう。特徴的な六月十四日の御田植神事（重要無形民俗文化財）をはじめ、夏祭りの住吉祭は「おほらい」とも称し、七月三十一日の夏越大祓神事（府指定無形民俗文化財記録選択）と例祭があり、翌八月一日の神輿渡御では、堺市の宿院頓宮まで渡御、荒和大祓が行われる。ほかに、踏歌神事（一月四日）、白馬神事（一月七日）、御結鎮神事（一月十三日）、松苗神事（四月三日）、卯之葉神事（五月上卯日）、宝之市神事（十月十七日）等の特殊神事がある。

# 生根神社

いくねじんじや  
(通称 奥の天神)

御祭神 少彦名命

御神徳 家内安全  
健康促進  
病氣平癒

例祭日 十月九日



大阪市住吉区



奉拝  
奥の天神  
生根神社  
令和二年八月一日

鎮座地 大阪市住吉区住吉二丁目一五  
電話 〇六一六六七一一二九六四  
HP <http://ikune.a.la9.jp/>

## 由緒

延喜式神明帳において当時の官幣大社に列し年四度の官幣に預るとある。古来有名大社であった文献も多く特に豊臣時代には淀殿の崇敬社にて片桐東市正且元が奉行して現存の御本殿が寄進されている。(現大阪府重文)

徳川時代においても徳川綱吉が修理を奉幣している。(住吉大社造宮記)

又別名「奥の天神」名は住吉大社の奥の天神を称したとも云われ、一節には沖の天津神(少彦名命)から出た名称とも云われている。

天満宮(撰社)は徳川時代に「紅梅殿」と称され(住吉名所図会)現在の建物は江戸時代後期の建造物である。殿内には御祭神菅原道真公の御神像が安置されている(大阪市指定有形文化財)、文明十四年(室町時代)天台法主融円律師作の在銘。

# とどろきひめみことじんじゃ 止呂支比賣命神社

(通称 若松宮)

## 御祭神

素盞鳴尊  
稲田姫尊  
止呂支比賣命

## 御神徳

文武  
航海  
政治

## 例祭日

十月八日



## 神社のおすすめ

願いの御神水

神社境内より湧く御神水に神様への願いを届けて頂きます。水に溶ける神札を授与所にてご用意しておりますので、この水の中に入れて願いを届けて下さい。

※他朱印あり



若松宮

鎮座地 大阪市住吉区沢之町一―一〇一四  
電話 〇六―六六七一―〇四四三  
HP <https://wakamatsujinja.sakura.ne.jp/>

## 由緒

式内 止呂支比賣命神社(とどろきひめみことじんじゃ)略記  
通称名 若松神社

### 一、御祭神

素盞鳴尊  
稲田姫尊  
止呂支比賣命

### 一、御神徳

素盞鳴尊は天照大神の御弟神にして海原を治め給ひ、高天原を降り給ひて後に雲の簸の河の川上に八岐大蛇を平げ稲田姫の危機を救い姫を妃とし出雲の国須賀の地に宮を御造営し、専ら国土経営に尽力され貿易を奨めた。

やくも起つ出雲八重垣妻ごみに

八重垣つくる其の八重垣を

右の御歌は、我国短歌の濫欄にして世人尊を文武・航海・政治・厄除の神と崇め、姫の御高德、御幸運を慕ひ、奇稲田姫と称へ奉る。

### 一、由緒沿革

延喜式内の古社にして全神名帳には止杼侶支比賣命神社とあり、古来真住吉国の氏神として齋き奉る、御創立の年代は不詳である。承久三年に後鳥羽上皇が討幕軍を起し給はんと熊野詣でに名をかりて 浪華住吉の家族津守一族の勢力並に大和河内の兵をも集めにならんと墨江の里に行幸される時に当社の松林中に若松御所を造営し行宮として渡御し奉るときに、上皇は当社に国家安泰御武運の長久を祈らせられた。この御所の名称により若松神社と呼ばれる事となつたと推測される。

### 一、祭日

春祭(鎮火祭) 四月八日  
夏祭 七月十一・十二日例祭  
十月七・八日  
冬祭 十二月八日

### 一、氏地

墨江各町、安立各町、浜口各町、住之江各町、西住之江各町、遠里小野、沢ノ町、殿辻、千躰各町、清水丘各町、南住吉二丁、山之内の一部

# かみすむぢじんじや 神須牟地神社

## 御祭神

神産霊大神  
手力雄命  
天児屋根命  
天日鷲命  
大己貴命  
外四柱

## 御神徳

病氣平癒  
延命長寿  
心願成就

## 例祭日

十月二十一日



神須牟地社石碑



多米社

元和元年に徳川幕府の幕吏菅廣房より建立された「神須牟地社」と刻む石碑が現在も現存している。この石碑は、末社の多米社にも現存しており、双方とも大阪市の有形文化財歴史資料として指定されている。

## 神社のおすすめ



鎮座地 大阪市住吉区长居西二一―四  
電話 〇六―六六九二―六二〇二  
HP <http://www.kamisumochi-jinja.or.jp/>

## 由緒

当神社は、延喜式内社の古社として三の宮と称され、古くより医薬の祖神、酒造の神、文武両道の神として厚く崇敬されている。

本殿には、九柱の神様が鎮座しており、それぞれの神様の御神徳に沿った祈願をする事によりその御神徳が受けられ、なかでも病氣平癒、健康長寿、勝利を導く等の御神徳が顕著である。

社領は、住吉大社二万二千石の内の三百七十五石余りであったが、社領減地の節に没収された」と記されている。

本殿は、慶長年間（一五九〇年頃）に兵火にかかり社殿を焼失したが、多賀谷氏、秦氏、小山氏、岡田氏等の協力のもと再建し、元和四年八月二十一日に遷座の式が執り行われたと伝えられている。

現在の本殿は、昭和四十三年五月に御造営された本殿である。

元文元年九月、再び神社の廃滅の危機に際し、これを憂いた徳川幕府は、幕吏菅廣房に命じ、「神須牟地社」と刻む石碑を建立し崇敬した。

この石碑は、末社の多米神社にも「多米社」と刻む石碑が現存しており、御祭神は、明治四十年十二月五日に合祀が許可され、神須牟地神社へ合祀されている。江戸時代時期と同様にこの石碑を抛所として現在も崇敬をされている。江戸尚、双方とも大阪市より有形文化財歴史資料として指定されている。

## 境内社・末社について

農神社 御祭神 大己貴命

農耕の神として農民の尊敬が厚く、作物を守り、農民の生活を守る神として崇敬されていた。もとの鎮座地は、今の長居墓地東北一〇〇米の三つの池の中央に土塀をめぐらし、一本の松の木の下に社があり鎮座していたが、明治四十年十二月五日に神須牟地神社の境内に遷座されている。

多米神社 御祭神 宇賀魂命 神稚魂神 保食神

多米連の建てた神社と言われ、延喜式内社の古い神社で別名「種貸神社」「種貸社」「種貸の森」「苗見神社」「鎮座の社」「苗見の森」と称されている。

多米連の祖神を祀る神社として子孫繁栄、子宝の御神徳があり、浪速の名所の一つとして厚く崇敬されていたが、明治四十年十二月五日に神須牟地神社に合祀されている。神社境内地は現存しているが、社殿は無く徳川幕府より建立された石碑を抛所として崇敬されている。

古くに旧暦二月始の甲の日に土器に粃を入れて地中に埋め五月二十七日に此れを取り出して住吉御田の祭儀に用いる神事が奉仕されていたが、神須牟地神社へ合祀後廃絶した。

# ほりじんじゃ 保利神社

(通称 長居の宮)

## 御祭神

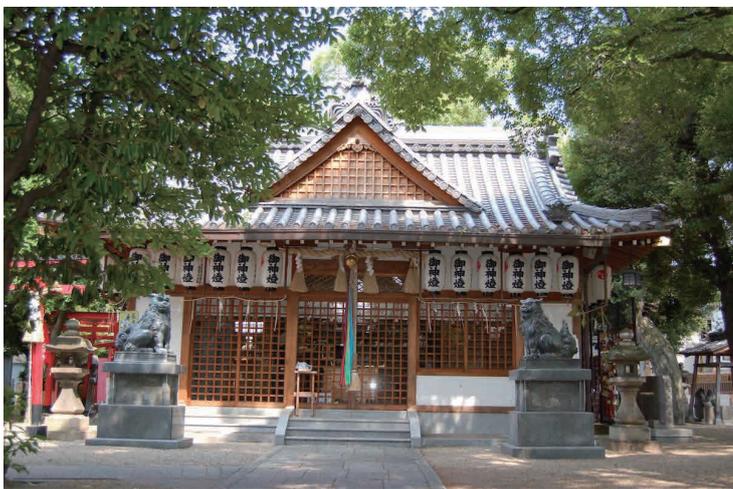
速素盞鳴尊  
大己貴命

## 御神徳

厄除け  
子孫繁栄  
家内安全

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 大阪市住吉区长居東一―一四―一七  
電話 〇六―六六九二―〇八二六  
HP



## 神社のおすすめ

平成十二年、皇紀二六六〇年のよき年にあたり、「だいがく」を八十年ぶりに復活して「かん燈」が製作された。三十二張の御神燈を六段に配置するもので、高さ約十一m、幅約四mにおよぶ。夏祭に東西二基が氏子総代によって設置され、「保利かん燈まつり」が斎行される。



かん燈

## 由緒

鎮座地はかつて堀村と呼ばれていた。集落の周囲に濠をめぐらしていたことがその名の由来とされる。神社創建の年代は不詳である。里伝によれば、足利時代に周防守某なる者が集落の周囲に幅五十尺、深さ六尺の濠を掘り、その内側に竹藪を植え込み城廓とした時に、城の守護神として勧請されたとされている。

「撰津志」には「堀属一邑」、「追分茶屋 寺岡・堀二村出戸」との記載がある。追分とは現在の長居小学校付近で、堺と住吉に向かう分岐点となる交通の要所で、慈光寺と茶屋などが建っており「三軒茶屋」とも呼ばれた。堀村は、慶長二十年大坂夏の陣のち幕府領となり、享保二十年の撰河泉石高帳では、下総古河藩土井家の領地で高六八六石余とあり、同藩領として幕末に至った。

隣接する前堀村は、集落の前に堀があったことがその名の由来とされる。享保二十年の撰河泉石高帳では高一一六石余、幕府領とあり、文化九年に相模小田原藩大久保家の領地となって幕末に至った。

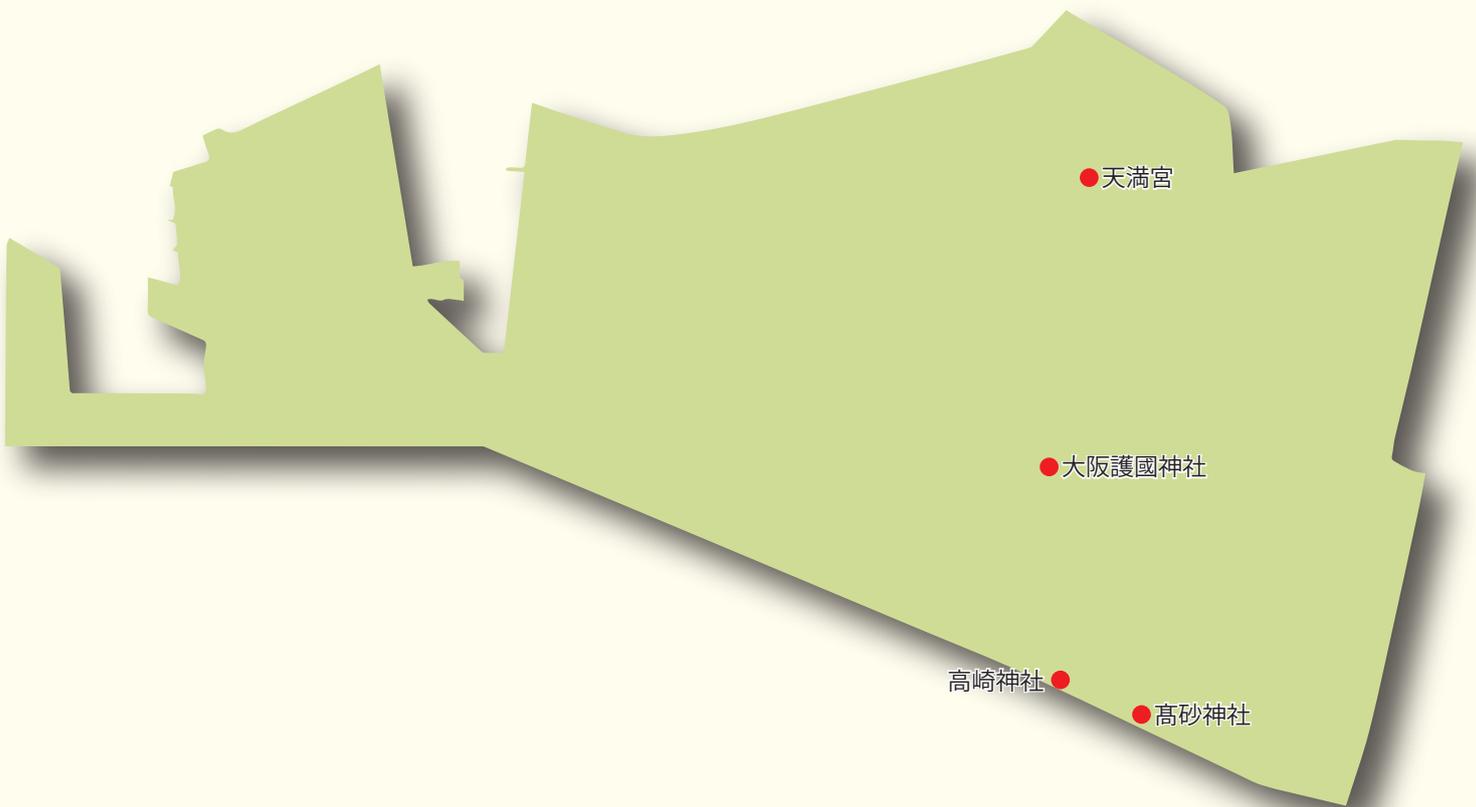
明治四年の廃藩置県を経て同年十一月に大阪府住吉郡に編入され、明治七年に大阪府下撰津国住吉郡第二区第七大区小区堀村・前堀村と称した。

当社は従前、速素盞鳴尊を祀り牛頭天王社と称していたが、明治五年に村社に列せられ速素盞鳴尊神社と改称し、明治四十年十二月に前堀村の村社である吉山神社(御祭神は大己貴命)を合祀して名称を祇園社と改めた。明治四十二年十月、神饌幣帛料供進社に指定され、明治四十四年四月に邑名を万葉仮名で表記した保利神社に改称して現在に至る。

平成十年、氏子・崇敬者の浄財により本殿・幣殿・拝殿が、新しく建て替えられた。

# 大阪市 住之江区

▶ 大阪市にもどる



# 大阪護國神社

おおさかごこくじんしゃ

## 御祭神

明治維新以前の天忠（誅）組十柱を始め、西南の役、日清・日露戦争、志那事変から大東亜戦争に至る迄の戦歿者十萬五六六五柱。仁徳天皇・東郷元帥。

## 御神徳

国家安寧  
家内安全  
除災招福

## 例祭日

五月二十日・十月二十日



歴戦の勇士を偲ぶ数々の慰霊碑



日の丸を象った大和魂守

## 神社のおすすめ

広い境内に大阪府最大の鳥居と立派な本殿。殿内の御神鏡は戦前の研磨技術では最大のものとなります。多くの慰霊碑が建ち並び規模の大きな神社です。



鎮座地 大阪市住之江区南加賀屋一―一七七  
電話 〇六―六六八―一三三二  
HP <http://www.osakagokoku.or.jp>

## 由緒

当社は大阪に戦歿者の御霊を恒久的に奉斎する御社がなかったため、支那事変を契機に英霊をお祀りし、勲功を永く顕彰する気運が高まり昭和十五年に創建されました。造営に当たっては、湿地帯であった鎮座地を多くの府民達の奉仕により整地しています。そして時の大阪府知事が奉賛会会長に就任して内務大臣指定の護國神社として昭和十五年に鎮座祭が斎行されました。

御祭神は明治維新の先駆けとして最初に攘夷を行った天忠（誅）組十柱を始め、西南の役、日清・日露戦争、支那事変から大東亜戦争にいたる戦いにおいて散華された大阪府に所縁のある十萬五千余柱の英霊をお祀り申し上げています。

大東亜戦争敗戦後は進駐軍の厳しい監視下に置かれた事もあって、慰霊祭の禁止や神社名の改称を余儀なくされた時期もありました。その時は、浪速興隆の基を築いた仁徳天皇を御祭神とする「浪速宮」として辛うじて存続を許されています。

昭和二十七年サンフランシスコ講和条約締結により、再び現在の「大阪護國神社」に復称し、さらには昭和三十八年に遺族を中心として大阪府民、官公財界の協賛を仰いで新しい本殿・社務所等を竣工し、五月二十九日に遷座祭が執り行われました。

当社は皇室の御崇敬も篤く、昭和天皇陛下・香淳皇后陛下には昭和四十五年、上皇陛下・上皇后陛下には昭和五十三年（当時は皇太子・同妃両殿下）にそれぞれご親拝を仰ぎました。また各宮殿下の御参拝は二十一回を数えます。さらに、終戦五十周年（平成七年）、六十周年（同十七年）、七十周年（同二十七年）には天皇陛下より幣帛料を賜り、奉幣大祭を多くの遺族・戦友・崇敬者参列のもとに斎行しております。

広い境内には地元大阪の師団・聯隊が建立した立派な慰霊碑が二十三基もあり、一年を通じて各慰霊祭が営まれています。

当社では神社関係者の枠を越え、様々な団体や個人による御奉仕が行われており、境内清掃等を積極的に行って戴いています。戦争で尊い命を散華された英霊達への敬意と感謝の心を引き継いだ人々が当社を支えて下さっていることは、戦争の記憶が風化する中、高齢となられた遺族や関係者の方々にとりまして、誠に有り難い事だと感じています。

# 高崎神社

たかさきじんじや

## 御祭神

天之水分大神  
天照皇大神  
柿本人丸大神

## 御神徳

五穀豊穰  
縁結び

## 例祭日

二月二十六日



御神木

## 神社のおすすめ

高崎神社は、平成三十年には御鎮座一八〇年を迎えた。境内の御神木は高崎神社より古く樹齢三〇〇年以上と言われおり、パワーを与えてくれると古来より崇敬の念を厚く集めている。



令和二年七月三日

鎮座地 大阪市住之江区南加賀屋四一十五一三  
電話 〇六六八八一八二二八  
HP <http://www.takasakijinja.com>

## 由緒

当地一円の開発者加賀甚兵衛氏の埋立工事が洪水、高潮に度々阻害され其の加護を祈願して自身生国の氏神水分社の御分霊を祀官松原若狭守により勧請祭祀され、高崎宮と称す。

当神社は天保十亥年正月二十五日に鎮霊、以来埋立工事は着々と進み、西成区に接する嬰木町に至る宏大な土地が完成、其の守護神として、又五穀豊穰、縁結びの神として尊崇され、明治に至り、釜口政吉氏が釜口新田を平林甚助氏が平林新田を開発、昭和十六年軍の飛行場として、南港が造成され御神威益々光輝せり。

明治五年村社に列せられる。

大正元年幣帛供進社に指定される。

文久三年六月天火に依り御社殿凡て焼失、元治二丑三月御社殿が改築されたのであるが当時、加賀屋新田は棉作地帯にて数年に亘る干害に百姓困窮、当社に雨乞をなしたる時、其の靈験慈雨となり、棉は豊作、此処に其の報謝として寄進された物である。然しながら造営着手と共に物価急昂騰してままならず（記勸財帳）とあり、それからあらぬか、御本殿が祝詞殿に棚祭祀とされたのみである。

明治四十五年当時の合祀令に対し、一才湯を建設、其の営業利益を以て一村一社を堅持した昭和三年御大典奉祝事業として、本社瑞垣、石玉垣、末社の稲荷社の改築、社務所新築等其の面目を一新す。

- 昭和二十一年二月二日 占領軍指令に村社高崎神社は解散される
- 昭和二十二年 勅令公布され、高崎神社設立
- 昭和二十七年 宗教法人法制定され、全年十二月 宗教法人高崎神社設立
- 昭和三十二年 北島町二丁目二十番地（平林南二丁目六番五十二号）に行官地三〇〇坪設立
- 昭和三十四年十月二十六日 全地に末社林平高崎神社を造営する。
- 御祭神 天之水分大神、大物主大神、久々能知大神
- 昭和四十三年十月三十日 明治改元百年、御鎮座百参拾年を記念して社務所を新築、全五十四年御鎮座百伍拾年を奉祝して御本殿造営と共に境内整備が行はれ鎮守の御神威益々光被四表たり

# 天満宮

てんまんぐう  
(通称 加賀屋天満宮)

## 御祭神

菅原大神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
学業成就

## 例祭日

七月二十五日



鎮座地 大阪市住之江区北加賀屋五丁目二丁目四  
電話 〇六―六六八―一五八二〇



## 由緒

当社の氏地は此の附近は昔敷津浦と称せられた所で海中であった。

住吉の松の岩根を枕にて敷津の浦の月を見るかな(藤原実定)

もしほ草敷津の浦に船とめてしばしば聞かん磯の松風(慈鎮)

住の江の沖ふく風に雲はれて淡路の島に舟のよる見ゆ(海量)

しかし大和川の流下する砂の為海辺が次第に浅くなった。

住吉の新田ふえて年々にあとずさりする岸の姫松(太田南畝)

新田がつぎつぎに開発されるため、元の岸辺が遠のいて岸辺でなくなる事をあらわした歌であるが、此の浅洲を利用して徳川の慶長末期から盛んに新田の開発が行なわれたのである。天満宮の氏地は、加賀屋、現在の鎮座地より東の十三間川との間の土地全部と、西側今の北加賀屋町は三代目加賀屋甚兵衛氏が(一八三〇〜一八四一)開拓した加賀屋新田であるが、一部鎮座地より東側には村上新田、庄左衛門新田があり、西側には妥木新田と云われた緑木町の辺は一八五〇年頃に柴谷新田と云われた柴谷利兵衛氏により開拓され、更に川上新田が拓かれたのは、明治三年であり現在の加賀屋地区の土地発展の歴史であり、柴谷利兵衛氏は崇敬の念厚く開拓につき守護神として菅原大神、又諸新田は海中であったので末社に住吉神を鎮め奉ったのが神社の起源である。此の加賀屋の新しい集りが敷津村となり静かな農漁村であったが、周囲が十三間川、住吉川、敷津川の河川による立地条件のため、工業街化が急速に始まり、地名も加賀屋町となった。天満宮も柴谷町の鎮座地を余儀なく移転になり(現在の名村造船所)又昭和の軍需産業の隆盛により、立退き問題起り昭和十八年移転途中敗戦のうきめに会ったが、現在地に(昔の新田)加賀屋の中核に本地開発の鎮守神として鎮め奉ったのである。

# 高砂神社

たかさごじんじや

## 御祭神

天水分神  
住吉大神  
柿本人麿  
外七柱

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
諸厄難除

## 例祭日

九月二十六日



宮司制作の狛犬

## 神社のおすすめ

「はや住之江に着きにけり」と謡われた謡曲『高砂』に因み、高い砂丘に位置するために『高砂神社』と名づけた。



令和二年十月吉日

鎮座地 大阪市住吉区北島三ー一四ー一二  
電話 〇六ー六六八ー一五三三七  
HP <http://www.cwo.zaq.ne.jp/takasago-jinja/>

## 由緒

元禄十六年（一七〇三）幕府の布令に於いて、大和川の付替え以来住之江浦に土砂が堆積して浅洲を形成した。そこへ大阪淡路町の両替商の加賀屋甚兵衛は、堺を往来する途中、靄松原から見た西方の浅洲が新田に適していると、享保十三年（一七二八）より開墾に着手し、北島新田と名付け元文二年一応の完成と共に代官 庄田庄九郎の検地を受け、御見捨地十五間四方を以て境内と定め、出身地の河内国石川郡新堂村の産土神天水分大神を勧請し、神職 松原大蔵の奉仕により鎮斎。「はや住之江に着きにけり」と謡われた謡曲『高砂』に因み、高い砂丘に位置するために『高砂神社』としたのが元文二年九月二十六日のこと、これが御鎮座の初めである。

加賀屋甚兵衛は、その後さらに加賀屋新田を開発、北島新田は宝暦四年以来、堺の甲斐町 小部屋久兵衛が継承して、宝暦十一年（一七六一）御造営を行い、柿本人麿の神像をも松原太蔵の子息 松原出羽守り幸正が奉斎しました。

しかるに、天保六年（一八三五）八月二十七日の夜出火し、社殿を焼失しましたが、翌年天保七年再建され八月二十八日に住吉大社神職 山上松太夫の奉仕で正遷座が行われました。

以後、明治五年村社に列し、境内地は小山久兵衛の後は明治三十五年以來浜田甚兵衛の所有地でありましたが、村社として村民によつて維持せられ、昭和六年三月神饌幣帛料供進社に指定。戦後、全国の神社が宗教法人となった際、浜田氏より寄進され今日に及んでいます。

又、昭和四十二年御鎮座二百三十年に当たり御造営が行われ、昭和六十年には昭和の大改修として社殿・玉垣・社務所・神庫等を大々的に改築し、九月二十六日正遷座祭、二十七日奉祝祭並びに御鎮座二百五十年祭を執行した。

古来日本では、人の住むところには必ず鎮守氏神が祀られています。人々は氏神様、産土神様を中心に喜びも悲しみも分かち合いつつ生業に勤しみました。したがって氏神様には一本の木や一枚の瓦にも父祖先輩の尊い血が通っています。私どもの住む北島の先人達も新田の開発に血のにじむような苦勞を重ね、【鎮守氏神 高砂神社】を心の拠り所として、社会生活の中心に仰いでまいりました。時代は代わり住む人々もかわりましたが、現在でも北島町はもとより住之江方面の開発の初めの氏神、鎮守産土神社として『家内安全・交通安全・諸厄難除』の神として崇敬を集めております。

# 東大阪市

▶ 大阪府にもどる



# 枚岡神社

ひらおかじんじや

(通称) 元春日

## 御祭神

天児屋根命 天押雲根命  
比売御神 (若宮社)  
経津主命  
武甕槌命 他 八百万神

## 御神徳

厄除開運  
良縁成就  
安産守護

## 例祭日

二月一日



三度大きく笑い、新年の笑福(招福)を願う



大小23台の布団太鼓が宮入する

## 神社のおすすめ

注連縄掛神事  
(通称 お笑い神事)  
毎年十二月二十三日  
に行われる、笑いに、  
新年の災厄を祓い、  
注連縄を通して大き  
く三度笑う。

秋郷祭  
毎年十月十四、  
十五日に行われる  
収穫感謝祭。勇壯  
な布団太鼓の宮入  
や四百余の露店が  
軒を連ね盛大に行  
われる。



※他朱印あり

鎮座地 東大阪市出雲井町七-一六  
電話 〇七二一九八一-四一七七  
HP <http://hiraoka-jinja.org/>

## 由緒

神武天皇御東征の紀元前三年に、神武天皇が平国を祈り霊地神津嶽に一大磐境を設け、天児屋根命・比売御神の二神を祀られたのが創祀とされる最古の神社。

白雉元年(六五〇年)に山麓の現地へ遷されたと伝えられ、神護景雲二年(七六八年)春日大社創建の際に、御祭神の二神が皇室の守り神として招かれ祀られており、そのことから「元春日」とも呼ばれている。その後、宝亀九年(七七八年)春日大社より武甕槌命・斎主命の二神を迎え現在の四殿となった。

主祭神の天児屋根命は、日本で初めに祭事を行ったことから祭祀を司る「神事宗源」の神、天孫降臨の際には皇室のご祖先瓊瓊杵尊の随行神として天降られたことから皇室の守護神「天孫輔弼」の神として崇敬されている。

神階は正一位の極位であり、延喜式神名帳では名神大社、明治四年には官幣大社に列せられた河内國一之宮である。勅使参向のもと行われていた春秋の大祭をはじめ、年四回の官幣や祈雨、祈病平癒の奉幣に預かる他、春冬上申の祭典には神祇官人が祭事に供奉する等、古来より朝廷から最も厚い崇敬を集めていた。

近年では、神話の中で祈りと笑いにより天の岩戸を開いたことから、開運招福、開運厄除の神として崇敬されており、ご夫婦の神様をお祀りしていることから夫婦円満、家内安全、結びの社であるともいわれている。

平成二十五年から行われた「平成令和の大造営」では左記の大事業が行われ、奉祝祭の折には畏くも天皇陛下より幣帛料を賜り、装いも新たに美しく甦った。

### 平成令和の大造営 造営内容

- 本殿 檜皮屋根の葺替・彩色、飾り金具の復元(江戸期明暦年間頃)
- 摂社 御殿の復元(江戸期明暦年間頃)
- 末社 御殿の新築、合祀境内末社二社(一言主社、飛来天神社)の復興
- 二の鳥居修復
- 齋館増改築
- 収蔵庫新築
- 齋庭舞台拡張工事並び拝殿前石畳整地工事
- その他諸事業

# 都留彌神社

つるみじんじや  
 (通称 布施の氏神さん)

## 御祭神

速秋津日子命  
 速秋津比売命  
 素盞鳴命  
 豊受姫神  
 菅原道真公  
 外四柱

## 御神徳

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 東大阪市荒川三丁二〇一十八  
 電話 〇六一六七二一〇六六四  
 H P

## 由緒

第六十代醍醐天皇の延喜十庚午年は春の中旬より夏至にかけて聊かも降雨なく、河水細り井水涸れて毎日赫灼たる旱天続きにて田植すること叶はず、天皇はこのことを聞き召され深く愍み給ひ河内国に十二社を選定し、勅使を遣はされて五月二十三日より雨乞の御祈願をなされた。

御祈り空しからず神応ありて、同月二十五日に至ると大雨降り来て甘水田畑にうるをし喜びの声國々に満ちた、その後続いて順雨あり連年豊作が相続いたと云う。天皇もこの奇蹟に御感ありて親しく御拝あらせられ、此時に都留彌神社の社号を賜貼り従五位上を贈られた。

鎮座地東大阪市荒川三丁目二十番十八号旧布施村の中央部、荒川の森に有り御祭神は縁を結び給ふと俱に家業を御守護なり。当神社の創祀は頗る古く今より千百年以上に仁和二年第五十八代光孝天皇の御代の國史所載の由緒深き式内の神社です。現社殿は大正三年三月旧布施村八大字の神社を整理合祀することになりました。

- 大字岸田堂鎮座 天神社 大字菱屋西鎮座 稻荷神社
- 大字太平寺鎮座 子守神社 大字長堂鎮座 大歳神社
- 大字三の瀬鎮座 産土神社 大字永和鎮座 子守神社
- 大字荒川鎮座 鹿島神社 大字足代鎮座 都留彌神社

そして布施神社となるべき処、当時政府の勧告に基き由緒深き都留彌神社の社号を残し現在に至ります。

# 瓢箪山稻荷神社

ひょうたんやまいなりじんじゃ  
(通称 おいなりさん)

## 御祭神

保食大神  
素戔鳴尊

## 御神徳

商売繁盛  
良縁成就  
除災招福

## 例祭日

七月十八日



鎮座地 東大阪市瓢箪山町八一  
電話 〇七二一九八一―二二五三  
HP fb.me/hyotanyama\_inari



## 神社のおすすめ

ひょうたん型の双円墳に鎮座する辻占総本社である。良縁、商売繁昌、より良い暮らしができます。よう、あらゆる人々を見守られている。辻占には、判断、おみくじ、瓢箪篋の三種類がある。



占には、判断、おみくじ、瓢箪篋の三種類がある。

## 由緒

生駒山西麓に群集する山畑古墳群の中でも六世紀に築かれた最古最大の古墳、通称「瓢箪山古墳」(双円墳)の西斜面に鎮座する。保食大神を祀り、明治の合祀令により氏神「花草神社(牛頭天王社)」を合祀し、辻占総本社として名高い。社伝によると天正十一(一五八三)年、豊太閤が大坂城築城に当たり、吉方巽三里の瓢箪山に「ふくべ稲荷」(豊受比賣神と謂われる)を鎮護神として祀り、金瓢を埋めたと伝わる。

境内社について  
末社には、水分神社(水分大神)、菅原神社(菅原道真命)、宮比神社(天宇受賣命)、三柱神社(天照大御神、月夜見命、素戔鳴命)、戸川社(保食大神)がある。その他に御塚が祀られ、古墳北側「大塚」の石室は祠として古来は御狐が住み、狐塚とも呼ばれ、子宝安産に詣でる方に尊崇篤い。

### 「辻占」について

万葉の時代から歌にも詠まれていた「夕占」は昼と夜の境である夕刻に、辻を通る人の会話などを基に占うので「辻占」とも謂われている。古来から現世と異世界の境界である「辻」には神霊精霊が降ると信じられており、表参道西側、東高野街道と交わる一の鳥居のある辻は、俗称「みこの辻」と言われ、神霊の降る所として「占場」になっており、そこを通る人の言動、外見などを基に占われていた。現在、その占場は東参道東側に移され、往來者の観察内容を宮司に告げ、宮司家口伝の顯示により判断される。当社の「辻占」には、前述の形式を今に伝える「辻占判断」、焼きぬき、あぶり出し、おみくじの三種が入った「辻占おみくじ」、餅花ひょうたんの中に辻占おみくじが入った「辻占瓢箪篋」の三種がある。「辻占判断」は大坂堂島米相場を占ったり、御神託により商売が大いに繁栄する事例が後を絶たなかった。「辻占おみくじ」は辻占売りの少女と『淡路島通ふ千鳥の河内瓢箪山恋の辻占いらんかへ』という売り口上と共に、いつでもどこでも辻占の御神託を授かることができる、全国津々浦々流布した。「辻占瓢箪篋」はフォーチュンツッキーの原形とも言われる縁起物である。

### 人びとに親しまれるお祭り

二月「初午大祭」は稲荷の春の祭として、福餅まき、福餅つきで、厄除、無病息災、運氣隆昌の御神徳を授かる人で賑わう。例祭は七月十八日、十七日宵宮祭とあわせ夏祭として一番の賑わいを見せる。その他に、崇敬者、地元、こどもに親しまれる地域に根差したお祭りが開かれる。

# 彌榮神社

いやさかじんじや  
(通称 やえじんじや)

## 御祭神

素盞鳴命  
天穗日之命

## 御神徳

五穀豊穰  
厄除開運  
除災招福

## 例祭日

十月十四日



秋祭の地車



境内の様子

## 神社のおすすめ

境内には、大楠・大銀杏・榎・棕櫚など繁茂し、椿・桜・桃・金木犀その他の花木が四季折々の風情を添える。住宅地の中に貴重な自然を残す鎮守の社である。



鎮座地 東大阪市中小阪二一三一二  
電話 〇六一六七二二一四二七  
HP

## 由緒

当社の創建年代は不詳であるが、往古は牛頭天王宮又は祇園様と称せられた。

一説、古老の言に伝え聞く所によると、本地はもとの大和川(宝永元年、一七〇四年現流域に付替え)の支流久宝寺川の東岸近くに位置し鬱蒼たる老杉、松、樅樹林の中に祀られたが、天正年間(一五七三年〜一五九一年)に起った天正の役の石山合戦の際、村落共に兵火を罹り灰燼に期したと云う。

後、慶長五年(一六〇〇年)正月、時の所領主片桐市正守より旧社地を拝領、社殿を再建したと云う。

当社に現存せる古書冊「上小阪村中小阪村寺社御改帳」(元禄五年一六九二年)によると

- 河州若江郡中小阪村
- 牛頭天王之社
  - 一、無年貢地
  - 一、境内六十八間二十二間四尺七寸
  - 一、梁行四尺七寸
  - 一、桁 四尺 但し縁廻りは外 こけら葺
  - 一、禰宜神子宮座は神事役にて公事百姓廻持に相勤申候
  - 一、勸請之年号覚上者当に無之候

松平美濃守  
石丸数馬 入組知行所

とあり、現存の本殿(春日造、極彩色、コケラ葺)は、この当時からのものではないか。明治五年村社に列せられ、明治三十九年専任神職を任置、大正十五年七月神饌幣帛料供進社並びに会計規定適用神社に指定された。終戦後は、宗教法法人法による宗教法人として神社本庁と包括関係を保持しつつ氏子の崇敬の念篤く奉祀されている。

境内地は一四二三坪余りを有し、現存の境内建物は昭和四十七年、五十六年、平成八、九、十年に改築改修新築され、十七年に表参道、二十三年に北参道が改修整備された。現在境内に弥栄稻荷神社(御祭神宇賀之魂神) 照光神社(御祭神照光大神)がある。

# わかえかがみじんじゃ 若江鏡神社

## 御祭神

大伊弉槌大神  
仲哀天皇  
神功皇后

## 御神徳

五穀豊穰  
所願成就  
安産祈願

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 東大阪市若江南町二一三一九  
電話 〇六一六七二一三三四  
HP <http://www.wakae-kagami.jp/>



## 神社のおすすめ

大阪で唯一の「鏡」神社 神様と自分を結ぶ「鏡」を通してお祈りしましょう。「雷の手形石」が有り、雷除け、自然災害避けとして信仰されている。



思い叶うかがみ守り

## 由緒

当社は、総面積二千余坪の境内を有する延喜式内社であるが、創立年代は不詳である。しかし、文徳実録（六国史）、その他の古書に「河内之国大雷火明之神從五位下」と記されている。神社及び数多くの宝物は、大阪陣の兵火にあい焼失したが、文政十一年八月に現在の三間社流造皮葺龜腹上に再建され、文化、文政期の社殿建築の特色を示すものとして貴重なものとなっている。即ち、一間社流造二棟を中央に相殿を入れて連結したためらしい遺構である。昭和四十三年十月二十九日東大阪市文化財保護規則により有形文化財に指定された。

尚、本社の外に天照皇太神社、稻荷神社、熊野神社等の末社を祀る。

本殿前に雷の手形石と称する奇石があり、長さ三尺高さ地上に現わるもの六寸余、周囲七尺三寸の玉垣をもって囲まれている。又、森林中に俗に鏡塚といわれる古墳があり、前者共古くから土民が之に触れることを恐れる。神功皇后御在世四年六月に大旱魃があり、近郷一帯の農作物が殆んど枯死寸前に至ったとき、神官、国師、氏子一丸となり、神前で大般若経を唱読し祈願したところ、十四日目神社裏の淵より清水が出て危機を救ったという。これより般若経の若と水の源の江をとり旧六十余ヶ村を若江郡と称せられた。

後、若江城主畠山政長より三好左京大夫源義継までの代々の城主の崇敬するところとなり、神饌田の寄進までされたり、寛永年間には公儀の費用をもって修葺がなされた。

明治五年に郷社に列し、同四十一年一月神饌幣帛料供進の指定になった。

元より御祭神は、人間生活上最も必要な水と深い縁があり、安産の守神として信仰されている。

あまつかむやしる  
**天神社**  
(通称 御厨神社・てんじんしゃ)

**御祭神**

大名持命  
少彦名命

**御神徳**

家内安全  
厄除開運  
学業成就

**例祭日**

十月十八日



鎮座地 東大阪市御厨一四一二九  
電話 〇六―六七八一―八二五二  
HP



令和二年八月二十九日

**神社のおすすめ**

願い事が良く叶うと云われる  
『智葉のお稲荷さん』



智葉神社



樹齢 700 年と言われる楠

**由緒**

当社の創建年代は詳らかではないが、延喜式に意支部神社（おきべのかみのやしる）があり、これは村名が社名になったもので、口碑によると現在の社名は近世に改称したものである。古くは意岐部神社、または御厨神社と称していたと伝えられている。

大阪府全志によれば、本地（大字御厨）は古来若江郡に属し、御厨村といった。延喜式の内膳司に「造雑魚縮十石、味塩六斗河内国江厨所進」と見える江厨は本地であって、村名はそれによって起こり、姓氏録河内国皇別に「江首江人附彦八井耳命七世孫木津彦大雨宿禰大確命之也」と見える江首もまた、本地ではないかと考えられる。

里伝には、文武天皇の吉野に行啓あらせられた時、本地から供膳されたので此の名を賜ったといい、あるいは称徳天皇が河内国に由義宮を造って、西京と称されたとき、御厨を設置された所という。

大阪府史跡天然記念物によると、天神社意岐部村大字御厨西北隅奥方と称するところに鎮座とある。

境内の楠（幹周六メートル）平成十年十月東大阪市の天然記念物に指定の老樹をもって風致を添えている。

境内社に智葉神社、稲荷社、水神社、須賀社、愛宕社がある。元禄の銘のある石燈籠があり、枚岡神社より移された能舞台もあるが、演能も無く毀損している。

明治五年村社に列し、大正四年十一月九日、大字新家字砂開の村社菅原神社（東大阪市新家）、大字菱屋東の同稲荷神社（八劔神社）（同市菱屋東）、同大字々十三割の無格社山科神社（同市七軒家）、大字荒本字若宮町の村社荒本神社（春日若宮神社）（同市荒本）合祀するも後其々復社した。又、玉岡稲荷も合祀していたともあるが不明である。

天神社の北を敷地といい、往昔大伽藍の遺跡というが、その名の詳細はわからない。寺内、北坊、門屋小路、中小路、出口等の地名があるが、往昔大伽藍のあったことを証している。

本尊薬師如来（伝聖徳太子作）は、後世これを大和国秋篠寺へ移したものと、同寺の石灯籠は当社前のものと同形であり、また紋章も共に巴となっているのは何らかの相互関係を有するものとされている。

また、御本社東側に鎮座する智葉神社は創建年代等不明であるが言伝えによると神社北東に智葉池という名の池がありその傍に祀ってあったお社を現在の処に移したとされている。商売繁盛や願い事が良く叶う神様であるとお参りされる方々は言い「智葉さん」「智葉のお稲荷さん」と称し日々多数の参拝のあるお社である。

# 布施戎神社

ふせえびすじんじや

## 御祭神

戎大神  
事代主命

## 御神徳

商売繁盛

## 例祭日

一月十日



日本一大きい戎さん

## 神社のおすすめ

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

鎮座地 東大阪市足代一―一五―二二  
電話 〇六―六七二八―一六〇一  
HP <https://fuse-ebisu.or.jp/>

## 由緒

この地は、その昔、足代村の氏神として延喜式（九二七）の神名帳にみえる都留弥神社（祭神 速秋津日子神・速秋津比売神）がまつられていました。

江戸時代後期の「河内名所図会」享和元年（一八〇一）刊には、都留弥神社、足代村にありとみえています。

明治十八年（一八八五）の淀川大洪水により、神社は、神殿・宝物・古文書などすべてを流失し、その後、村民の手により再建されて、足代村の氏神社としてまつられてきました。

都留弥神社は、明治四十年（一九〇七）から始まった、国の神社合併により、近隣の荒川・長堂・岸田堂などの神社と合併して、この地から東方約一キロメートルの現境内地に移転し祭られて居りますが、この時に等境内地は、地元 足代の有志へ払い下げられ、民有共有地として保管されてきました。

この由緒ある境内地跡に、地元の要望に従い、昭和二十九年（一九五四）西宮神社から戎大神（ひるこの尊）の御霊代を勧請申し上げ、布施戎神社の祭祀が始まりました。周辺地域が商業地として発展するにともない、更に昭和六十三年（一九八八）には大阪の今宮戎神社（事代主命）を勧請申し上げ、以来厳粛な祭祀を執行し、広大な御神徳を仰いでいます。

参拝者も飛躍的に増加し、毎年一月九日、十日、十一日の十日戎には商売繁盛を願う参拝者が群れをなし、境内地は身動きができないほどの賑わいとなります。

# 池島神社

いけしまじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
大山咋命

## 御神徳

五穀豊穰  
除災招福  
芸能技能上達

## 例祭日

十月二十二日



鎮座地 東大阪市池島町三十八一八  
電話 〇七二一九八一―二二五三  
HP



## 神社のおすすめ

岡田政太郎、玉子屋円辰生誕の地であり、上方演芸・漫才振興のお宮。



四町の太鼓台（秋祭）



岡田政太郎奉納の鳥居

## 由緒

創建は慶安二（一六四九）年とされ、旧村北側大門と言われる所に大山咋命を祀る日吉神社（山王権現社）と、南方に素盞鳴命を祀る八坂神社（牛頭天王社）があり、明治五年に枚岡神社に合祀され、明治十八年十月十三日に復社、両社を併合し、旧日吉神社の境内に社殿を建て、村名を社名にした。境内にも二社の社名が刻まれた石燈籠や、旧八坂神社跡から遷された神輿台や狛犬がある。

本殿東側に末社の水神社、南西に令和二年十二月に造営復遷座された恵比須社があり、農業始め諸産業振興を見守られている。

旧来の氏子地域は池島町のみで、旧町名の乾、巽、橋詰、本町の四町からなる。現在は池島校区を広義の氏子地域とし、池島町、新池島町、若草町、下六万寺町（一部）、横小路町（一部）とする。

### 祭について

祭には大きく、一月六日の初戎祭、七月三十一日の夏祭、十月二十一、二十二日の秋祭（例祭）がある。大阪、関西地方では一月十日にえびす祭が通常行われるが、当初から六日に行っている。夏祭、秋祭と、春と秋の社日祭には献湯神事の御湯神楽奉納が行われ、秋祭には氏子四町の太鼓台が町内を練り、宮入する。

### 上方芸能発祥ゆかりの地

参道南入口に建つ石鳥居両脇の石燈籠に、浪華落語反対派であった太夫元岡田政太郎と富貴席、花月亭などの寄席名が刻まれている。岡田と吉本泰三は明治四十五年に提携し、吉本興業を創業し、上方芸能の礎を築いた。

岡田政太郎だけでなく、玉子屋円辰（漫才の創始者）は池島出身であることから、上方芸能発祥に大きくかかわる縁の地と言える。

# 産土神社

うぶすなじんじや

## 御祭神

天照大神  
大国主神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
諸願成就

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 東大阪市南鴻池町二一―一〇  
電話 〇六一六七四五一四〇八〇  
HP <http://www.wakakagami.jp/>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当神社の創建年月日は不詳ですが、伝承によると仁徳天皇（五世紀）の時代に神武天皇のご東征のとき鴻池の地がまだ海辺であり、初めて御足をつけられた場所に建てられた神社（御祭神「天照大神」）であるとされています。

当神社は、江戸時代には鴻池家邸内に鎮座し明治時代まで宮座制により維持管理されてきました。この「産土神社」と明治四十年九月、新庄に鎮座した元村社「皇大神社」（御祭神「天照大神」）及び三島に鎮座した元村社「三島神社」（御祭神「大国主大神」）の三社を併合祀したる神社が現在の「産土神社」であります。

そして、「産土神社」は昭和十年四月に鴻池家邸内より現在の地に新たな社殿を造営し、御神霊を奉遷申し上げております。

天照大神は、最も尊貴な神と仰ぎまつり、天津神と崇めまつる神様であり、伊勢の皇大神宮の内宮に奉養せられ御皇室の御祖神で私達日本民族の御祖神としてあまねく世を照らされておられます。天照大神は、田畑を耕して産業を奨め、そして衣食住を満たし安定した国土を経営した神様であります。

大国主大神は、国津神と称えまつり、出雲大社に鎮まります神様と同じ神様であり、またの名を大物主命ともいわれ、機械器具、生活用品の製造、医薬の発展、そして人々の生活を守り縁結びの神として御神徳の高い神様であります。

当神社では、天照大神と大国主大神の二柱を御祭神に産土大神として奉養申し上げます。

# 徳庵神社

とくあんじんじや

## 御祭神

天照皇大神  
豊受姫大神  
住吉大神  
大国主大神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
交通安全

## 例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 東大阪市徳庵本町八一―一  
電話 〇六一六七四四一〇九八〇  
HP

令和 年 月 日



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

通常授与している御朱印以外に、祝日祭・朔日祭・五節句等、季節折々の限定の御朱印を授与しています。



## 由緒

往昔の沿革と創建の年代については古文書もなく不詳なるも御社号を昔から神明社と申し上げて天照皇大神、豊受姫大神をまつり当地開発の地主神として住吉大神（底筒男命、中筒男命、表筒男命、神功皇后）と商繁葉事の守神として大国主大神を奉斎、時代を経て天保二年に敬慕する奉拝者相議り神恩を畏みて社殿を改築造営して八劔宮祠官、友田出羽亮藤原愛敬奉行して盛大な奉祝祭が行はれたと伝えて居ります。当地の産土さんとして夏祭は盛大で七月三十日の宵宮、七月三十一日の本祭とつづき猷湯神事、神楽をはじめ神賑行事で賑やかなまつり姿を伝えて今日に及んで居る。

昭和二十六年に至り氏子中より浄財を勧募して現社殿を再建、御造営を完竣し正遷座祭を斎行の上、御社号を徳庵神社と改称す。以後漸次御社殿の威儀物をはじめ大鳥居、玉垣、手水舎、社務所等篤志の奉納建設相つぎ夏まつりは愈盛賑となり社頭の神賑と共に夜店が軒をつらね一夏の宵の情緒を呼んで夕涼を求めながら信者続々と参道を埋め商売繁昌、交通安全、家内安全の祈願がつづき徳庵の夏祭として往時をしのぐまつり姿となり、神恩益々厚くいやちこな御神徳と神慈のめぐみを仰ぎ更に久遠の光芒に耀やかせまつり奉護崇敬の誠を後世に伝えたいものです。

# 大賀世神社

おおがせじんじや

## 御祭神

天御柱神  
国御柱神

## 御神徳

## 例祭日

十月十一日

鎮座地 東大阪市横小路町二丁目四五  
電話 〇七二一九八一―一七五九  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は不詳であるが、明治五年六月枚岡神社に合祀されたが、同十三年三月二十七日に旧に復して村社に列せられた。



# 仲村神社

な  
か  
む  
ら  
じ  
ん  
じ  
ゃ

## 御祭神

興台産霊神  
伊弉諾尊  
伊弉冉尊  
天照大御神

## 御神徳

疫病除け  
家内安全  
諸願成就

## 例祭日

十月十六日



七五三詣り



秋祭

## 神社のおすすめ



鎮座地 東大阪市菱江二丁目二五〇  
電話 〇七二一九六四一九八三八  
HP

## 由緒

御祭神

己巳都牟須比命（興台産霊命・こことむすびのみこと）

「新撰姓氏録」によれば

己巳都牟須比命―天兒屋根命―藤原朝臣・大中臣朝臣・中村連

とあり奈良の春日大社、河内の枚岡神社の御祭神「天兒屋根命」の親神様「己巳都牟須比命」を祭祀奉る神社であります。

当社は延喜式内社と申しまして、延長五年（九二七）に完成した「延喜式」五十卷（醍醐天皇）の巻第九神名帳に「河内国、若江郡、中村神社」と、あるが如く千年を越える古い歴史を持ち、その創立は当社の御祭神より分かれた藤原氏、中臣氏と並ぶ《中村連氏族》によつて氏神として奉斎せられたことに始まり、近世には「菱江村」の氏神様となり、当時、流行していた疱瘡（天然痘）の病魔退散の神として又、身体健康、家内安全を守る神として近郷近在は勿論、遠くは京都、阿波の徳島、淡路の庶民より崇敬され、上は朝廷藩主の信仰にも接し、その霊験も大なるものがあつた。その証として淡路洲本の住人、陶山与一左衛門長之が病氣平癒を祈願して後、目出度く完治した事を感謝して寄進した朱塗りの鳥居一基（元文三年、一七三九）又、寛政四年（一七九二）には、大坂城代であつた紀朝臣正順（堀田正順）が伝染病の流行を恐れて、大阪庶民の為に当社に祈願し、その謝恩として寄進したとされる石燈籠一対が、境内に現存し当時の信仰を現代に伝えている。

# 波牟許曾神社

はむこそじんじや

## 御祭神

天照大神  
伊弉那岐大神  
伊弉那美大神

## 御神徳

## 例祭日

十月二十三日

鎮座地 東大阪市北蛇草一―一〇―九  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



## 由緒

当社の創建の年月日は詳らかではないが、醍醐天皇の延喜の制には、官幣の小社に列せられた古社である。

# 御劔神社

みつるぎじんじや

## 御祭神

素戔鳴尊  
菅原道真

## 御神徳

厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月第二日曜日



鎮座地 東大阪市友井三十一一  
電話 〇六一六七二六一五九五九  
HP



## 由緒

古来の事暦は判明しがたいが、平安中期には友井四丁目「法敬寺」の東北方に牛頭天王を創祀せられていたことが確認される。

御祭神の神霊を京都祇園八坂神社にて、素戔鳴尊の分霊を御霊代に遷し鎮め奉り、江戸中期享保元年九月二〇日に菅原道真公を合祀して現在の友井三丁目一番地に遷座せられた。

当時、神仏習合思想にて素戔鳴尊の神霊は祇園精舎の守護神牛頭天王の神霊と一対視されていたが、明治元年神仏分離の趣旨により牛頭天王から素戔鳴尊と改められ、明治四二年一月一八日に若江鏡神社に合祀せられた。

昭和二十一年の宗教法人制定を機に、同年九月二〇日に現神社に遷座されることとなり、本殿を中心に境内の整備を行い、神霊をお慰めする正遷座大祭が執り行われた。昭和四二年には、京都国立博物館内修理所にて御霊代の修復をし、鳥居をはじめ狛犬などが新しく整備された。その際には、境内修祓及び清浄の目的をもって桜本坊第六五世異良乗大導師による採燈大護摩供が齎行された。

当境内地には末廣大神、大杉大神を祀り、商売繁盛・五穀豊穡の御神威をなす。

### 主な行事

節分祭・二月節分の日に境内にて火焚神事（護摩祈禱）

夏季例祭・七月第二土日の二日間に神輿大小二基、布団太鼓大小六台が町内を巡り宮入する。

### 社宝

元禄一五年の燈籠・狛犬

宝暦年間の牛頭天王碑

素戔鳴尊・菅原道真公の御神像画

（全日本肖像美術協会総裁・馬堀喜孝画伯作）

# いなばじんじゃ 稲葉神社

## 御祭神

受鬘尊  
武内宿禰

## 御神徳

家内安全  
子供の無病息災

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 東大阪市稲葉四一七一〇  
電話 〇七二一九八一四一七七  
HP

奉拜  
稲葉神社  
令和二年七月十日

## 神社のおすすめ

月次祭、夏祭、秋祭に御朱印を授与致します。

境内には「亀石（かめいし）」と呼ばれる岩石が埋まっている。日照りが続き雨が欲しい時は、この石を掘り出すと忽ち恵雨を授かると伝わる。

## 由緒

鎮座地は、江戸時代は河内國若江郡稲葉村。延宝七年（一六七九）の片桐検地による『河内國若江郡稲葉村御水帳（おみずちょう）』に「蔵王（ざおう）権現宮（ごんげんぐう）」とみえ、その当時の土地台帳に、すでに神仏習合の古い社地として除地されている。

ここには、付け替えられる前の古大和川が北流して、稲葉村浮面と呼ばれていた。奈良街道（暗峠越街道）の川の渡し場となっていた。この渡し場の権利による収益で、往時は壮麗な社殿が建設されていたと伝わる。宝永元年（一七〇四）の大和川付け替えにより大きな新田が開発された。

昭和三年（一九二八）の御大典記念事業により、腐朽した社殿、拝殿が改築されたが、室戸台風により倒壊し、昭和十一年（一九三六）に再建されたがまた第二室戸台風の為に飛散した。昭和四十年現在の鉄筋銅板葺きの社殿が完成して、その時に御祭神を、同名の鳥取市鎮座の稲葉神社から勧請している。

御祭神武内宿禰は神功皇后の皇子（応神天皇）をお育てなされたことに因み、長寿、子供の無病息災である。

境内には末社、大神社、琴平社が祀られ、燈籠には正徳三年（一七一二）の銘がある。

# 春日若宮神社

(旧称 荒本神社)

かすがわかみやじんじや

## 御祭神

春日大神  
天照皇大神  
品陀和気命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
諸願成就

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 東大阪市荒本一四九一二  
電話 〇七二一九六四一九八三八  
H P



## 由緒

当社は由緒詳らかでない。明治五年村社に列す。

# すがはらじんじゃ 菅原神社

御祭神

菅原道真公

御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

例祭日

十月二十五日



社殿前石灯笼「天満宮」の社名

神社のおすすめ



鎮座地 東大阪市新家三十七一三  
電話 〇六一六七八九一二八六  
HP

## 由緒

当社の御創立については詳らかでないが、当地の旧家、規矩家に伝える覚書に、(興教大師)僧覚鑊(平氏相馬将門の後胤)の開山になる新義真言宗の本山、紀州根来寺の僧兵(根来衆)規矩九衛門は、元和元年五月(一六一五年)大阪夏の陣に依って、豊臣氏の滅亡したのを期に河内国若江郡の辺に到り、之を永住の地と定め新家村の基を拓くと云う。同様同家所蔵の書に「此之額者本管相公之浅盆也、洞宗良高禪師書閃跳不出字以為額蓋以賢聖之手況而千歲之古物也、相伝蔵千山城国紀伊郡吉祥院村則公之邑故此器明和三年余適之得之然市井塵埃常恐賢聖之茲歲明和辛卯仲夏寄附我生所神天満宮之祠祠在河州若江郡新家村会明和八年(一七七一年)辛仲夏五月吉日規矩英貞謹記」

因に規矩家も亦平氏の胤にして、筑紫より紀州に移った旨記されている。之を以って按ずれば開拓の時に奉斎されたと思われる。

現在の社殿は、昭和十四年修築御造営されたもので西面しているが、往時は南面していたと伝えている。天満宮の扁額は、高辻中納言菅原胤長の染筆であると、亦浅盆は御祭神縁りの品と伝えられている。

### 新家と菅原神社

新家は新しく開かれた村という意味で、全国各地に同様の地名があります。本市の新家は、規矩氏によって開かれたと伝えられています。規矩氏は、戦国時代に栄えた和歌山県の根来寺に属する武士集団の一員でした。当時全国統一を望む織田信長と敵対し、天正十三年(一五八五)羽柴秀吉による紀州攻めにあい、根来寺は焼失し人々は各地に離散しました。その後、元和二年(一六一六)規矩九右衛門と弟の新三郎がこの地を開拓し村をつくりました。当時の村高は周辺の村と比べて少なく二三六石と記録に残されています。

四代目の庄左衛門は幕府御用を勤める商人で、菱屋と称していました。宝永元年(一七〇四)大和川が付け替えられるとその子岩之助と新田の開発に参画し、合計約六八町余の菱屋西・中・東の三新田を開発しました。

暗越奈良街道の北側に沿う家並の背後にある氏神の菅原神社は、字砂開の地にあり、菅原道真公を祀っています。神社の石の鳥居には、二元禄戌寅十一年(一六九八)九月吉日願主菱屋庄左衛門・・・の文字が認められ、新田開発者の庄左衛門が寄進したものであることがわかります。

社殿前に明和五年(一七六八)の石灯笼が在り、伊勢参宮の常夜灯笼といわれています。火袋下面に天満宮と記されており、戦前まで天満宮と称されていたことから社名を刻んだものと思われれます(東大阪市資料・他より)

# 三十八神社



例祭日

十月十三日

御神徳

家内安全  
商売繁盛  
諸願成就

御祭神

誉田別命  
帶仲彦命  
息長姫命  
天照皇大神  
天兒屋根命

鎮座地 東大阪市西岩田一―二  
電話 〇七二―九六四―九八三八  
H P



## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。  
明治五年三月に岩田村の石田神社に合祀されたが、同十二年六月三十日復旧して村社に列せられた。  
末社に金比羅神社がある。

# 松原市

▶ 大阪府にもどる



# 柴籬神社

しばがきじんじや

## 御祭神

反正天皇  
菅原道真公  
依羅宿禰

## 御神徳

家内安全  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

十月十日



鎮座地 松原市上田七ー二二二二  
電話 〇七二一三三二一三三  
HP <https://www.shibaigaki.or.jp/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ



① 歯神社 (はがみしや・住吉社)



② 歯神社御守



③ 井原西鶴句碑

## 由緒

当社は仁賢天皇の勅命により創建されたが、後世に至り二度の兵火にかかり、古文書、宝物等を焼失した。

現在の社は寛永年間の再建によるものである。

清和天皇の貞観六年奉幣を給い、観応二年足利直義が祈願。河内国守畠山氏もまた信仰が篤かった。

旧幕時代に京都御室御所より、菊花御紋章幕一連を給わった。

明治五年村社に列し、同二十二年神饌幣帛料供進社に指定された。

明治四十五年十二月八日大塚山々頂の菅原神社を合祀、明治四十一年三月二十三日田

井城の田座神社を合祀した。

境内は実測四、〇〇〇坪ある。

境内末社として、稻荷社、住吉社(別名歯神)大歳社がある。

氏子区域は上田町、立部町、柏ノ木町、岡町出岡町、新堂町、栄町、高見町、高見ノ

里、田井城町、柴籬町、西野々町、西大塚町、府宮住宅地、分譲住宅地に分れている。

昔は一時広庭神社及び天満宮と称した頃もあり、神仏混合のときは、境内に真言宗広場山観念寺があつたが、明治五年分離により廃寺となつた。同寺の釣鐘は願正寺に移り、不動明王は上田の観音堂に移り、僅かに往時の姿を止どめるものは、今の表門のみである。

## 柴籬宮址について

当地は元丹北郡に属し、古の松原荘の内、人皇第十八代反正天皇(別名瑞齒別命)の皇居跡で、史記に丹比柴籬宮とあるのは、即ち本宮跡である。

天皇は仁徳天皇の皇子として生れて駢齒。浴し給いし時に多遅花が散つて産湯の中に落ちたことにより、多遅比瑞齒別命と名づけられた。姿は美麗で、身長は九尺二寸半といわれる。履仲天皇の後大統をつがれ、この宮にあつて天下を治め給うた。当時風雨は順調で五穀も豊作で人民は富、天下は太平となつた。天皇はこの宮で崩御され、堺百舌鳥耳原北陵に葬られた。

宮址としては、昔の諸殿の跡の地名として、小園田、若山、東宮、学堂、極殿山堂、後中門中橋等今も存し、区域としては旧松原町の大半がその後であると思われる。大正六年大阪府より史跡に指定された。

# ぬのせじんじゃ 布忍神社 (通称 藤の宮)

## 御祭神

速須佐男之尊  
八重事代主尊  
武甕槌雄之尊

## 御神徳

病気平癒

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 松原市北新町二丁目一  
電話 〇七二一三三四一七六三四  
HP <http://www.eonet.ne.jp/~nunose/>



## 神社のおすすめ



- ①みちしるべ
- ②独創的な御守
- ③イチハラヒロコの恋みくじ
- ④自転車交通安全守り (チャリ守)

## 由緒

速須佐男之尊・八重事代主尊・武甕槌雄之尊を御祭神として祀っている。里老の口碑によると、「十八町許り北方なる宇天見丘にありしを、白布を敷きて当所へ迎え奉る。」

故に社名を布忍神社と号し、村名を向井村(現北新町)と称すと社の近傍なる氏子の各村は毒虫の到ることなく、神霊の奇端なりと称して崇拜せり。」と伝わっている。

本殿は桃山様式を受け継いだ江戸時代初期の一間社流造で、屋根は檜皮葺である。蛙股には速須佐男之尊を表す梵字がはめ込まれ、神仏習合の形を取る建築物として貴重である。また、本殿正面に掲げられている「布忍宮」の扁額は京都府宇治市の黄檗宗大本山・万福寺五世・高泉性敦筆である。本殿身舎の両側面に描かれている唐獅子は、狩野探幽が描いたと伝えられている。

寛文三年(一六六三)五月九日、氏子の清水村(現南新町)の木下氏が武運長久や無病息災等を祈って奉納された奉納札と共に、本殿は大坂府指定文化財となっている。平成十七年、本殿に使用されている木材を年輪年代測定で調査した結果、南北朝時代の一三七二年頃(五〇〇一〇〇年)に伐採された事がわかった。

拜殿には宝永二年(一七〇五)十一月十三日に奉納された「布忍八景」の扁額が掲げられている。八景には、神社周辺の宮裏白桜、孤村夕照、野塘春日、平田秋月、南山残雪、西海晚望、竹林黄雀、籠池白鷗を樺板で一面に二景ずつ、計四面に描かれている。八景は二組作られ、現存する六面が松原市指定文化財となっている。

# みやけじんじや 屯倉神社

## 御祭神

菅原道真公  
須佐之男命  
品陀別命

## 御神徳

家内安全  
病氣平癒  
学業成就

## 例祭日

十月一日



境内一面 梅が開花

二月末頃境内の梅が満開となる。

## 神社のおすすめ



鎮座地 松原市三宅中四一八  
電話 〇七二一三三二一二五〇  
HP

## 由緒

屯倉神社は、江戸期の享保十一年（一七二六年）に書かれた「三宅天満宮縁起」によれば元は上古より鎮座の天神で、「穂日乃社」といわれ、菅家（菅原家）の祖神である天穂日命をお祀りした神社であった。

菅原道真公は、右大臣、右大将までなられたが、御年五十七才の時無実の罪で筑紫太宰府に流されることとなった。任地に赴かれる折、伯母にあたられる道明寺の覚寿尼公に別れを惜しまれた後、氏の社であるこの神社へも参られ、無実の科が晴れることを祈られた。この時にお座りになったという石が「神形石」としていまも境内に残っている。

翌年、延喜二年（九〇二年）御年五十八才の時、道真公は太宰府において鏡に映した自らの姿を木像に刻まれた。この木像は依羅の三宅寺に深く因縁ありということで此所に送られた。（この三宅寺は、明治の初め頃まで今の社務所のある所にあり、梅松院三宅寺といわれ、十一面観世音が祀られていた。）

この寺に、朱雀院の頃、釈道賢という人が参籠した折、十一面観世音のお告げを受けた。そこで郷人とはかって、天慶五年（九四二年）壬寅秋八月十八日、菅公御自作の尊像と、左には素戔鳴命、右には八幡本地の神影（応神天皇）を本社の神に崇め奉った。当時の郷人は穂日乃社に参った後、本社の天満宮にお参りすることを習いとしたとある。

江戸の頃は、河内國丹比郡依羅三宅天満宮と称していたが、明治の頃より屯倉神社と称するようになった。明治五年、村社に列し、明治四十四年、神饌幣帛料共進社に指定された。

旧社殿は、寛政四年（一七九二年）八月十二日に本殿（こけら葺）および幣殿、拝殿（瓦本葺）が建てられており、約二百年の歳月を経ている。

新社殿は、氏子の方々の神社を思う気持ちと尊い御寄付により、また各団体のご協力のおかげで、昭和六十三年（一九八八年）、本社はもとより、末社、手水舎、社務所にいたるまで全て新しく建て替えられ、十二月四日、竣工式が執り行われた。

また、境内には延喜式卷九神名帳にある丹比郡十一座の一つである酒屋神社（祭神津速魂命）も祀られている。

# 阿保神社

あ お じ ん じ ゃ

## 御祭神

菅原道真公  
阿保親王  
市杵島姫命

## 御神徳

学業成就  
無病息災

## 例祭日

十月第二日曜日



①御神木・樹齢約一千年の大き  
すの木  
②阿保親王を祀る親王社  
③新年の書き初め奉納

## 神社のおすすめ



鎮座地 松原市阿保五丁四一一九  
電話 〇七二一三三二一六一五三  
HP <https://ao-shrine.com/>

## 由緒

本殿にお祀りする御祭神は菅原道真公です。

道真公は藤原氏の讒言により無実の罪で大宰権帥として九州に左遷されることになりましたが、その道中、叔母の覚寿尼公が住まっていた道明寺に一夜のお暇乞いが許され、この土地を通られて休息されたことで、道真公を祀る阿保神社が建てられたといわれています。

現代に至るまで、道真公は学問の神様として崇敬を集めていらつしやいます。また書道の神様としても有名な道真公にちなみ、新年には書き初め奉納が盛大に行われます。

当社の阿保の名は、平安時代初期の第五十一代平城天皇の第一皇子である阿保親王に由来し、拝殿の北側には阿保親王を御祭神とする親王社が建てられています。

阿保親王は、承和元年（八三四年）にこの地に別荘を造営したといわれており、境内には阿保親王住居址の石碑があります。それは、阿保親王の母が葛井氏の葛井宿禰藤子であり、葛井氏の氏寺である葛井寺との関係があったためと考えられます。阿保親王の性格は謙譲にてその才能は文武に秀でており、伊勢物語の主人公であり六歌仙の一人としても有名な在原業平の父親としても知られています。

当時の阿保の地は水利の便が悪く干害地だったので、親王は邸宅の中庭の池を農民に開放し、更に灌漑用に改造され、農業生産を奨励されたため阿保の地は豊かになったそうです。人々は親王の人徳を慕い、邸宅の池を親王池（稚児が池・棒池）と呼ぶようになったとされています。現在では親王池は埋め立てられていて、その姿を見ることはできなくなっています。

本殿は一間社流造で覆屋内にあります。身舎の側背面には古風な幕股があり、庇柱には、虹梁型頭貫を通して龍頭の木鼻を飾ります。身舎背面には双折棧唐戸を装置しており、これは全国的にもかなり珍しい事例といえます。

拝殿は入母屋造、割拝殿の形式で、その中央天井には「花天井」といわれる四十八枚の花弁図が並べられています。その作者や年代などは不明ですが、江戸時代後期のものではないかとされています。

境内には三本の大きくすの木がそびえ立っています。拝殿の奥の南側には、阿保親王のお手植えとい伝えのある御神木があり、樹齢は約一千年を超え、幹回りが四米強の大きくすの木です。市内でも有数のパワースポットとされています。

# 我堂八幡宮

がどうはちまんぐう  
(通称 厄除宮)

御祭神

菅田別命

御神徳

厄除開運  
家内安全  
除災招福

例祭日

十月十五日



北大鳥居



力石

## 神社のおすすめ



鎮座地 松原市天美我堂四一―二〇  
電話 〇七二―三三五―三三三四  
HP

## 由緒

創建の記録は残っていないが、当町の旧家、山口悦太郎氏の古い記録によれば、元禄年間には既に当宮の鎮座せる記事が記録されており、おそらくそれ以前に創立されたものと思われる。里伝によれば、堺市の百舌鳥八幡宮より分祀され、近年になり京都の石清水八幡宮の分霊を勧請したもので、御祭神は菅田別命（ほんだわけのみこと）である。神仏習合の時代には当宮にも黄檗宗（おうぼくしゅう）の神宮寺があり、阿弥陀如来の坐像が安置され、像裏に「本尊阿弥陀如来 神宮寺置之 永和三年（一三七七）に寄進した」との銘があり、成田氏が南北朝時代（北朝年号）の永和三年（一三七七）に寄進したとある。現在その坐像は、近くの善正寺（天美我堂）に遷されている。

延享元年（一七四四）の「両我堂村明細帳」には「十五社明神」、享和二年（一八〇二）の「東我堂村明細帳」にも「氏神十五社神」とあり、江戸時代は「十五社」と呼ばれた。

明治初年に「八幡神社」と称した後、大正二年（一九一三）に「産土神社」と改め、現在の「我堂八幡宮」の社名で「開運松原六社参り」の一つの社として、厄災を祓い清める厄除宮としても知られる。

現西鳥居が旧来の参道であったが、この鳥居側に六個の力石（ちからいし）が置かれている。東我堂村・西我堂村の若者らが力試しに使った楕円形の自然石である。いずれにも文字が刻まれ、「明治石 東連中□□□」「金剛石 東連中」「八幡石 西連中」「竜王石 西連中」「力石 東連中」「力石 西連中」とあり、明治時代初期のものと思われる。

# いづくしまじんじゃ 嚴島神社

## 御祭神

市杵島姫命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
交通安全

## 例祭日

七月、十月、十二月の各十日



鎮座地 松原市一津屋五―八―一九  
電話 〇七二―三三四―一二七五  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

嚴島神社は、古来より莊園町会の東北に鎮座し、この地の産土神として崇敬され、旧一津屋町会の古老有志と莊園町会の有志により、「氏子総代」を選出して七月十日より例祭日を定めて齋行されてきました。「氏子」の皆さんが、子孫に敬神崇祖の念を培い神を通じて人の和を計ることは尤も有意義なこと信じ、心の安らぎを求め、憩いの場を求めるにも、当町に残されたこの神域は、祖先の恵みでありましょう。このように吾々の祖先が崇拝して来た村の守護神を氏神としてお祀りすることは当然のことであると信じます。また、当地には「蘭学者」として立派な先考があった土地でもあります。嚴島神社と申せば、直ぐに廣島県の「安芸の宮島」を想起する程に、私等の心の隅に残っている親しみの深いお社であります。市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命。の三柱は天照皇大神と素戔嗚尊が高天原で剣玉のお誓があった時御出現になった神々で、皇室や国家鎮護、又海上の守護神として古くから上下の尊信を受けさせられたとあります。当社には三柱のうち市杵島姫命一柱が祀られております。市杵島姫命は神仏混合時代には仏教的には弁財天として信仰されて今日に至っていても伝えられております。

大阪府志に依るとこの一津屋は、古くは丹南部に属し、一津屋村でありその由緒は詳かではないがお社は明治五年村社に列せられ、本殿のみ存し、祭礼は七月、十月、十二月の各十日に齋行されていたとあります。天和年間には徳川氏が代官として支配し坂倉内膳之正重種の領地となっていたものが同二年再び徳川代官の支配に移り宝暦九年には村高(年貢)四九四石五二四合の内三四〇石九五升は高木主人正粥の領地となり明治二年六月土地するに依って丹南藩の支配となり同四年七月丹南県に、同年十月堺県の管轄となる等、その他伯太県に属した時もあったのですが、この時に至り初めて全村一管治となったのであります。

なお、巷間の伝説や口碑として残っておるものに足利氏と楠氏の戦った際には楠氏の砦となった所であり、又戦国時代藤井寺小山城主、三好厳笑斎人道が同じく楠氏の一族であった和田何某と戦った所でもあり和山城とも呼ばれていたものが戦火で焼失したらしく文献などは残っていないが和田氏がこの市杵島姫命を守護神としてお祀りされたことが想像されます。

当時この一津屋に北山橋庵という蘭学者があつて狭山城の典医として奉仕され傍ら乞はるるままに学問を教えたり、医師として施療されるのみならず詩歌にも一家をなされるほどの学者が居住されておられたので松原市の史跡研究会や教育委員会の手で其後標識を樹て保存されることになりました。現在莊園町会八組内にその墓石が現存されております。橋庵は名を彰字名は玄昌とも世美とも称され二代は玄元、三代は玄彰と名乗られ何れも蘭学者として誉高かったとのことであります。当地北山氏は大阪の桑津天神の宮司として奉仕され当社の祭礼には宮司として招待してあります。

現存の本殿造営の年月は詳かではありませんが、拝殿は五十年程以前に造営されたものであるとの古老の言葉であります。

左に橋庵師の詠まれた一句を紹介します。

一歳今宵遍 寒燈自可親 人皆噫老朽 吾独愛清貧  
為悟升沈理 都志去底事 余生宮底事 明日復迎春

因みにお社のある所あたりを一津屋宇弁天とも呼んでいたとも伝えられています。

平成十七年七改刷

あつたじんじゃ  
**熱田神社**

**御祭神**

日本武尊

**御神徳**

商売繁盛  
五穀豊穰  
除災招福

**例祭日**

十月十五日



鎮座地 松原市別所六―五―二八  
電話 〇七二―三三二―二三八 (柴離神社々務所)  
H P

御朱印なし

●  
神社のおすすめ



キリシタン灯籠

**由緒**

当社の由緒は詳らかでない。明治五年村社に列せられ、本地一円の氏神である。

# 大堀八幡神社

おおほりはちまんじんじや

## 御祭神

品陀別命

## 御神徳

交通安全  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 松原市大堀三十一―四四  
電話 〇六一六七〇九一―七五七  
HP <https://www.shikimagaoshi-jinja.org/>

御朱印なし

## 由緒

大堀八幡神社は、一三三七年に東隣する小川村の深居神社から分祀され一七〇四年大和川付け替えにより地形が変わり、大和川には剣先船と呼ばれる荷物を運ぶ舟も運行されまして水路による交通網の玄関口となり村落の安全と水路等を守る為に祀られ、品陀別命（応神天皇）を祀っています。神社は明治五年に村社明治二十一年には産土神社より八幡神社に改名されました。昭和五年大島居と玉垣の建立同四十七年老朽化の為神殿の覆屋・拝殿・社務所を鉄筋コンクリート造にて再建し現在に至っていました。同四十五年中央環状線が、万博の開催に伴って吹田市から長吉・堺市まで造られ、それから後阪神高速、西名阪・近畿及び阪和自動車道が通りそれに伴い現在村も分断され、環状線沿いの住居は、大堀南部へ集団移転。平成二十年大阪府都市計画道路改良事業により神社敷地買上げの決定。移転用地の選択に入り、松原市の大堀給食センター移転跡地の譲渡の話があり町内の中心地ともなり、地域住民崇敬者の皆様の願望が叶いました。移転し境内全てが新しくなり過日平成二十七年三月七・八日遷座・奉祝祭を執り行いました。

# 深居神社

ふかいじんじや

## 御祭神

品陀別命

## 御神徳

厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 松原市小川五十二番四  
電話 〇六一六七〇九一一七五七  
HP <https://www.shikunagashin-jinja.org/>

御朱印なし

## 由緒

この深居神社は、奈良時代の養老元年（西暦七一七年）の創建と伝えられ、品陀別命（ほんだわけのみこと）である応神天皇が祀られています。棟札から一間社流造りのことから葺の本殿は、江戸前期の万治三年（一六六〇）に建てられています。また小川に古代から中世を通じて恵我地方の総産土神である深居神社が鎮座したのも同地が東除川の水として重要視されています。社名が「深居」と称されるのも「居」はもともと「井」よりの転化であり、農耕に欠かせない井戸水の神として崇められたからだといわれています。もともと深居神社は小川だけでなく、津堂や松原市内の若林・大堀・川辺（大阪市平野区）の総産土神でしたが元弘建武期（一三三一〜三五）以降、現在のように小川一村の氏神となりました。この経緯もあつて深居神社より分祀された若林神社・大堀八幡宮・津堂八幡宮・川辺八幡宮の祭神もおなじ品陀別命（ほんだわけのみこと）が祀られています。

# わかばやしじんじや 若林神社

御祭神

品陀別命

御神徳

厄除開運

例祭日

十月十五日



鎮座地 松原市若林一―六一三〇  
電話 〇六一六七〇九―一七五七  
H P <https://www.shikinagayoshi-jinja.org/>

御朱印なし

## 由緒

建武四年（西暦一三三七年）に深居神社から分祀され創建される。江戸時代前半に今とは比べられないほど広大な境内地が盛で囲まれています。同地に小字「若林」がある上、鎮守の森が陣取場になりやすかつたく戦略的拠点に適していることから、戦の際神社付近に陣取をし戦略拠点にする武将も多かつたようです。

# 八尾市

▶ 大阪府にもどる



# おんぢじんじゃ 恩智神社

## 御祭神

大御食津彦大神  
大御食津姫大神  
天児屋根命

## 御神徳

厄祓・厄除け  
縁結び  
社運隆盛

## 例祭日

十一月二十六日



鎮座地 八尾市恩智中町五一〇  
電話 〇七二一九四三三七〇五九  
HP <http://www.onji.or.jp/>



## 神社のおすすめ

一〇〇〇年以上続く伝統神事では、人の形をした神饌を作り、秋祭りにお供えます。氏子・崇敬者の身代りとしてお供えし、罪・穢れ・災難・悪運を祓います。厄祓・厄除けの御祈禱では「身代りの人形」をご神前にお供えし一年間の無病息災を祈ります。



人形の神饌（お餅）



厄除けの御守

## 由緒

### 【格式高い恩智神社】

当神社の創建は大和時代の雄略年間（四七〇年頃）と伝えられ、河内の国の御守護のためにお祀りされた神社です。令集解には、「奈良時代、全国的に最も重要な神社の一事である」ことが記されています。国内でも有数の古社であり、後に延喜式内名神大社に列する神社となります。また、社殿は当初天王森（現頓宮）に建立されましたが建武年間に恩地左近公恩智城築城の折、「社殿より上方にあるのは不敬」として現在の地恩智山上に奉遷され、現在に至っています。

### 【元春日と呼ばれる所以】

奈良時代（天平宝字）に藤原氏により当神社を再建されることを機に、藤原氏の祖神である『天児屋根命』を常陸国『現香取神宮』より御分霊を奉遷し、摂社として祀られました。その御社を建立した後、宝亀年間に枚岡（枚岡神社）を経て奈良（春日大社）に祀られました。このことから当神社は元春日と呼ばれています。

### 【お導き・祓の神】

神功皇后が三韓征伐の際、当社の神が住吉大神と共に陸路、海路を安全に道案内し、前衛、後衛となり神功皇后に加勢しました。その功により朝廷から七郷を賜りました。以来、朝廷からの崇敬厚く、持統天皇の元年（六八九）冬十月に行幸され、称徳天皇（第四十八代）天平神護景雲二年（七六八）には、河内、丹後、播磨、美作、若狭の地三七戸を神封に充てられ、文徳天皇（第五十五代）嘉祥三年（八五〇）十月に正三位、清和天皇（第五十六代）貞観元年（八五九）正月に従二位、更に正一位に叙せられ、恩智大明神の称号を賜り、名神大社として、延喜式神名帳に登載されました。以後醍醐天皇、村上天皇の御宇（延喜及び応和三年）の大旱ばつに勅使参向して祈雨をされ、その靈験があり、それぞれ蘇生したと伝わっています。

また、一条天皇正暦五年（九九四）四年、中臣氏を宣命使として幣帛を奉り、疫病等の災難除けを祈願されました。これが当神社の大祓神事（夏祭・御祓い祭）の始まりであり、明治以前までは住吉大社と共に行われていました。

### 【水分社】

三代実録によれば当神社は下水分社と云われています。これは建水分神社（千早赤阪村）を上水分社、美具久留御魂神社を中水分社といわれ、三社とも、楠一族が崇拝した神社です。

### 【猿楽】

明治維新前迄は、奈良春日社の猿楽は当神社が受けもち、この猿楽座に対して、春日社より米七石五斗と金若干が奉納されていました。

# 山本八幡宮

やまもと はちまんぐう

御祭神

應神天皇

御神徳

厄除開運

例祭日

十月十五日



鎮座地 八尾市山本一丁目一六  
電話 〇七二一九三二一〇七八九  
HP

鎮座 大阪府八尾市山本町

山本八幡宮

奉拝令和 年 月 日

## 由緒

山本八幡宮は享保元年（一七二六）、新村として成立した山本新田の開発者、山中正永、本山重英らによって石清水八幡宮より神霊を勧請し、村の鎮守として分祀された。

その後、享保十三年（一七二八）本山氏から地主をついだ住友氏の尊崇と保護を受け近代に至ったが、明治三十年代政府による神社の統合合祀が強力に実施された際には、度々の廃社の憂き目を不思議にも躲かし、存続する幸運に恵まれた。

昭和十五年（一九四〇）玉串川沿いの池を埋めためた社務所が新築されたが、その後第二次世界大戦の影響もあり、境内・社殿の整備は思うにまかせず年月は流れていった。

戦後ようやく世情も落ち着き、昭和三十一年（一九五六）損壊著しい社殿の復興が旧檀原神宮の古材を用いてなされ、旧山本新田住友会所の建物の移築もあり、ようやく復興も成り境内も整備されるに至った。

平成五年（一九九三）、山本の発展著しく八尾市から都市整備の一環として、境内の玉串川沿い部分四メートル幅を遊歩道にする要請があり、これに協力すべく当該地を市へ割愛し、これを機会に社務所の移転（新築・参集殿・太鼓蔵の新築、石鳥居・石玉垣・石燈籠などの新設、据え替えなど再度の整備が行われ、平成九年（一九九七）これが完成した。

# 澁川神社

しぶかわじんじや

## 御祭神

主神天忍穗耳尊  
饒速日尊  
国狭槌尊  
日高大神  
菅原道真公

## 御神徳

五穀豊穰  
病氣平癒  
厄除開運

## 例祭日

十月十六日



樹齢千年 大阪府天然記念物指定 大楠

## 神社のおすすめ



鎮座地 八尾市植松町三十一一六  
電話 〇七二一九二二一〇一五二  
HP <http://shibukawa-jinja.com/>

## 由緒

当社は、延喜式内の神社で、もと旧大和川の東側にある宇川向にあったが、其の地は年々多少の水害を蒙り、殊に天文二年五月五日の水災は、社殿其の他の全部を流失し、末社浮島神社の如きは茨田郡新田村に漂着し、これをよつぼどの宮と称したのを、発見の後迎えて境内に移したと云う。依つて宮座一統は社の御幸地である現在の所に社殿を造営する事に決し元龜三、四年の頃竣工移転した。思うに当社は式に若江郡に載せられてある所より見れば、それ以前にも社地に変更があつたのであろう。創建の年月は詳らかではない。往時より物部、中臣、忌部連等の一族官位を授かつて奉仕し、これを宮座と称し、宮田を置いてその作得米を以つて祭祀の費用に充て、社殿等の修理費を弁じて来た。又、中世より龍華寺の僧侶が祭祀を助けたが、天文二年同寺廃絶の後、元龜三、四年の頃より社内に宮寺興つてこれを継ぎ祭祀を掌つたが明治維新後の神仏分離に依り寺は廃絶した。

明治六年郷社に列した。例祭は十月十六日、夏祭は七月二十六日で、その祭は他と例を異にし、宵宮祭を後縁祭、後縁祭を宵宮祭と唱え、俗に逆祭と呼ぶ。これは、天文の水害に漂流の時、神体渦に捲かれて水上に逆流したので、この意味から社祭にこの呼称をなすようになったのであろうと云われる。

# やおてんまんぐう 八尾天満宮 (通称 八尾の天神さん)

## 御祭神

天穂日命  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

七月二十五日



節分祭追儺式の鬼



八日戎祭で吉兆を求める参拝者

## 神社のおすすめ

毎年二月の節分祭で追儺式が行われます。松明を掲げて境内を暴れまわる、赤・黒・青の三匹の鬼を「鬼追い神」が矛で追い払う光景は壮観です。府内でも数少ない鬼追い神事です。



鎮座地 八尾市本町四一―二―四五  
電話 〇七二―九二二―三五五八  
HP <http://www.yao-tenmangu.com/>

## 由緒

創建の年月については文永年間とも、慶長年間とも二説が有って不詳であるが、旧八尾町大字八尾部落の開発は、慶長年間であるから河内名所図会所載のごとく、八尾天満宮は慶長年間 片桐東市正且元の造営であること正史に沿うものとの確証が強い。(附記参照)

享保十四年の火災により、社殿悉く烏有に帰したが村民直ちに協力して再興した。現社殿は安政五年の改築である。

八尾部落沿革誌によれば「社記・社宝は享保の火災で焼失のため旧縁不詳であるが、祭神二座の内、道真公神像は明和四年五月菅前大納言高辻殿当社に参拝寄進せられ、爾後御神忌の都度高辻家より寄附目録等有之」とある。

明治五年四月、大信寺新田の菅原神社を合祀し又、明治四十年九月、佐堂の杵築神社、穴太の穴太神社を合祀した。(但し、杵築・穴太の二社いずれも昭和三十四年十二月宗教法入法により創立分離した)

境内は、一一四二坪、社殿は本殿・幣殿・拝殿があり中門・手水舎・遙拝所の設け有りて、末社には、稲荷社・琴平社・三社(天照大神、春日大神、八幡大神)のほか、八尾市産業の守護神として、崇敬篤き八尾戎神社があり、毎年正月七・八両日の「八尾の八日戎祭」には盛況を呈する。氏子範囲は本町一丁目より五丁目までと栄町・光南町・新家町に及び八尾市の中心部を占める。

### ※ 附記(社前一対の石灯籠の銘)

河州渋川郡久宝寺村産住 森本七郎兵衛貞治 慶長十一年丙午十一月  
八尾寺内村開発移住 貞治 六代孫 森本七郎兵衛房吉敬立  
明和四年丁亥九月吉日

# こまじんじゃ 許麻神社

## 御祭神

高麗王靈神  
素戔鳴尊

## 御神徳

不撓不屈

## 例祭日

四月十六日



鎮座地 八尾市久宝寺五丁目四一八  
電話 〇七二一九二三四三三五  
HP <http://komajinja.com/>



## 神社のおすすめ

当地に咲く金色の杜若（かきつばた）は有名で、他所に移し植えるとその色を失ったという。社伝の古歌「許麻の里 沢辺に生ふる杜若 君が手毎に水やかざさん」



今も境内に咲く杜若



久宝寺観音院鐘楼（現手水舎）

## 由緒

延喜式所載の古社であるが、創建の由緒は明らかではない。

『大阪府全志』には「延喜式内の神社にして高麗王の靈神を祀れり。創建の年月は詳ならず。大狛氏の其の祖神を祀りしものなるべし。昔は天王と称し、本地の産土神にして河内国内神名帳には神位を従三位と記せり」、また『大阪府史蹟名勝天然記念物』には、「按ずるに、久宝寺村はもと許麻荘と称し高麗人の住地なるべきか。新撰姓氏録河内國諸蕃大狛連は高麗國溢土福貴王の後とあり。されば許麻神社は大狛連の祖廟ならんか」とある。

祭神は近世まで牛頭天王と言われていたが、明治期には素戔鳴尊であるとか、高麗人の祖神と考えられるようになった。七世紀に高句麗（高麗）が滅亡すると、多くの遺民が日本へ逃れ、各地に定住した。大縣郡巨麻（柏原市）・若江郡巨麻（東大阪市）などはその名残である。当地もまた、高句麗系氏族である大狛連が居住した場所であり、祖國を失った彼らが、新たな地で生き抜こうとする自分たちの守護神を祀ったのが、許麻神社の始まりであったらう。故に、困難に直面しても挫けず立ち直る心、即ち「不撓不屈」を守らせ給う大神と、その御神徳を仰ぎ慕うものである。

### 久宝寺について

鎮座地名の由来ともなった久宝寺は、聖徳太子の建立によると伝わる寺院である。太子自作の十一面観世音を本尊とする大伽藍で、当国仏法の中心であったが、松永久秀の兵火に罹って悉く灰燼に帰した。本尊のみ難を逃れて伊賀国に遷されたのち、夢告によって送り返され、小堂を建てて供養したのが、当社宮寺の久宝寺観音院の創始である。

観音院はその後廢寺となった（本尊は当地念仏寺に安置）が、鐘楼は現在も許麻神社手水舎として姿をとどめている。この鐘楼に懸っていた梵鐘は有名なもので、十里四方にその音を響かせたと言われ、奈良の高田（十八キロメートル以上）に達したとの伝承も残っている。ところが、明治以降所在不明となり、里人は大いに心を痛めていた。明治三十七年清水重吉という人が、モスクワの正教会に「渋川郡久宝寺村」と刻した大鐘があるのを発見したものの、遂に返還されることはなかったという。

あまてらすおおかみたかくらじんじや

# 天照大神高座神社

(通称 高座神社)

## 御祭神

天照大御神  
高皇産大神  
市杵島姫大神

## 御神徳

生命力上昇  
五穀豊穡  
子孫繁栄

## 例祭日

七月七日



鎮座地 八尾市教興寺五五〇  
電話 〇七二一九四一一一六八〇  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ

招福の神、諸業繁栄の守護神で御座いますので誠心大神の御加護を御願するの  
であります。皆々様是非参拝して下さい。



高安山・天照大神高座神社と太陽の道

## 由緒

古来から弁天山は大洋祭祀の聖地でありました。御祭神の天照大神は伊勢国山田原、現在の伊勢神宮外宮周辺に御鎮座ありましたが、雄略天皇二十三年（西暦四七八年）に当地に御遷座になられたと伝えられています。後醍醐天皇の延喜の制には官幣の大社に列せられた古社であります。皇祖神の天照大神を神社名にしているのは全国でも唯一『天照大神高座神社』だけなのです。

### 御神徳

御祭神は国土万有を産成化育し給ふ一番根元の神であり、絶対的に尊い大神であり、一番心をこめて御造り下さった人間の親神ですから我々の無事息災を御守護下さるも当然であり、古来災厄除、延命の神と尊拝せられます。

### 高安山・天照大神高座神社と太陽の道

当社は太陽の道が交差する高安山に鎮座されています。撰津一之宮の坐摩神社から見る冬至の日の出は天照大神高座神社の磐座から生まれて高安山山頂から昇ると考えられてきました。

『日本書紀』には「等乃伎神社の大木に夕日が当たるとその影は高安山を越えた」とあります。大阪府高石市に鎮座する等乃伎神社からは夏至の日の出が高安山山頂から昇ります。

当社は住吉大社の真東に位置します。この東西線上には明石海峡、住吉大社、天照大神高座神社、信貴山、法隆寺が一直線に並ぶのです。住吉大社からは春分の日、秋分の日の日の出が当社の磐座から生まれて昇るのです。当社は古代から人々が信仰してきたパワースポットでありました。

たまのおやじんじや

# 玉祖神社

(通称 高安明神)

## 御祭神

玉祖命  
外十八柱

## 御神徳

心願成就  
技能向上  
宝石等研磨業守護

## 例祭日

十月十日



鎮座地 八尾市神立五一九三  
電話 〇七二一九四一〇九四四  
HP <https://www.kawati-tamanooya.net/>



## 神社のおすすめ

境内は大阪平野を一望する高台にあり、摂社や末社の奥には玉光ノ滝という白滝がある。近年、周防国にて、大和国を守る大王の詔を賜り高安郷に遷座されたという内容の「護東」の石碑が見つかる。



牛玉宝印



制札(重文・日本最古)

## 由緒

当社は、氏地の東北端標高一八〇米の高地に鎮座し、玉祖氏の祖神玉祖命(又の御名を天朋玉命)を祀る。高安大明神(又は高安明神)とよばれ、古来より大字垣内以北の一部落の氏神である。

社伝によると、垂仁天皇御宇、祭神の子孫に当る建大荒木命の率いる玉造部は、周防国より当地に移住し、その子孫は祖先の御名を取りて氏を玉祖(多末於也)と称し、姓の宿禰を賜り漸次一族同胞繁栄して、遂に氏名を冠せる玉祖の一郷をなすに至った。

その間にも同族においても多少の勢力の盛衰はあつたが、遂に和銅三年九月十日に周防国の一宮である、玉祖神社の分霊を勧請して玉祖宿禰一族の居住地である、多末於也郷に社殿を造営して、祖神を奉祀したのである。

童子由来記によると、分霊勧請の時に供奉した人々は、神主ならびに禰宜三人、神子二人、童子三人、座人二十五人と記され、この供奉人等によって、祭祀の一切を執り行う宮座であることを伝えるものである。

平安朝の仁明天皇の承和三年九月十日、僧耆演慈濟和尚が当社に参詣発願し、自作の玉宝印を奉納して、自から宮寺を境内に建立した。即ち当社神宮寺にして、感應山竹之坊菌光寺と称し、天平の写経を多く蔵す。

「古経題跋」によると、天平十一年二月上旬の日付ある、大般若経卷五二六、天平十三年五月二十四日の、大般若経卷五七三、天平十三年七月十八日の、大般若経卷一一、天平十六年六月三十日の、大般若経卷五九一が、かつての菌光寺の蔵であつて、現存しているものである。

奈良興福寺には、天平十三年七月十八日付の大般若経卷一一、卷一五が菌光寺のものとして伝わっている。

尚、南北朝末の大般若経教巻が、所々に蔵されている。

貞和二年定量文による菌光寺竹之坊、向之坊神光寺、上之坊、北之坊、中之坊、南之坊とあり、当時神宮寺が六坊が有つたことがわかる。

文治年間、源頼朝の祈禱所となり、社殿を造営し、社領一町歩を寄進した。また時の執權北條時政の木造制札が保存されている。明治四十三年四月二十日に国宝に指定された。(現在重要文化財)

天正二年九月十八日の兵戦により、社殿炎上したので仮殿に奉祀していたが、慶長八年徳川家康が当地に狩猟の時、当社に参詣、神主津村真次の由緒言上により、直ちに侍者片桐市正、小出播磨守に社殿の造営を命じ、この二人の名をもって河内国高安郡神立村、山手米八斗、山手錢二十三貫九百六十匁の領地を寄進し、引続き徳川幕府において、朱印地として寄進。(明治初年上地す)その寄進状は今に当地に保存している。

明治十年神仏分離に因り、神宮寺菌光寺は廃寺となり、神社は郷社に列した。

# や は ぎ じ ん じ ゃ 矢作神社

## 御祭神

主神 経津主命  
表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
品陀気命

## 御神徳

家内安全  
商賣繁昌  
厄除開運

## 例祭日

七月三十一日



鎮座地 八尾市南本町六―六―七二  
電話 〇七二―九二二―一四六五  
H P <https://yabuki.jinja-yao.info/>



## 由緒

当社は延喜式内社で、創建の年代は詳らかではないが、往古此の地方に於いて弓矢を造らせ給いし事があり、それより主神である経津主命を祀って掃部宮と称したと伝え、弓作弓場等の地名が今も存在する。

姓氏録に依れば当国矢作連は、布都怒志乃命の後裔であり、後八幡大神、住吉大神を併せ鎮り、是れより土人稱して八幡宮と云う。

往古より著名の社にして、神護景雲三年称徳天皇由義宮に行幸の時、勅使参向奉幣があつたと伝えられている。又貞観十六年十二月二十九日授河内国正六位上、掃部神従五位下（三代実録）とあるのは本社の事であると云う。

元弘建武の頃は本社であつて多くの神領を有し、神官、社僧の奉仕するもの少なくなかつたが、延元の兵火に社殿全く烏有に帰し、其の後再建して遂に旧に復さなかつた。現在の社域は千余坪あつて街道に接し、本殿、幣殿、拝殿、神輿庫の外、白山神社、八坂神社、琴平神社、稻荷神社等の末社四座がある。

明治六年郷社に昇格した。社に長久年中の綸旨を蔵していたが、現在の所在は不明である。

# 穴太神社

あのほじんじゃ

## 御祭神

天照大神  
春日四座大神  
住吉四座大神

## 御神徳

五穀豊穰  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 八尾市宮町一〇一五  
電話 〇七二一九九六八六六七  
H P



## 由緒

当社は旧若江郡式内十三社の中にて、安康天皇の設けられた御名代部である、穴穂部の後であつて、聖徳太子の生母間人穴太部皇后の生地であり、成人された地であつて、その産土神として奉斎せられ来つたと伝えられる。

古来、宝物・古記録等豊富であつたが、後世回録の災に罹り総て焼失したので、創建年月は不詳であるが、古名社の一つである。

境内及附近から鎌倉・室町時代の古瓦が出土する。

元和元年大阪夏の陣に渡辺勘兵衛の陣所となつたので、境内に勘兵衛鎧掛けの松があつたが今は無い。

明治四十年九月、神社整理にて八尾天満宮に合祀せられた。爾来氏子民敬神崇祖の念やみがたく戦後特に旺盛を極めたので、昭和三十四年十二月、宗教法人法にて合祀先より分離創立して旧地に鎮座するところとなつた。

境内四八〇坪、本殿・幣殿・拝殿の外、末社に稻荷社がある。全境内玉垣を囲らし樹木多く森厳である。

# 弓削神社 ゆげじんじや

## 御祭神

饒速日命  
可美麻治命  
天照皇大神

## 御神徳

## 例祭日

七月三十一日



鎮座地 八尾市弓削町一―三六  
電話 〇七二―九四九―一六二三  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

当社の創建の年代は不詳であるが、大阪府神社史料弓削神社の条に記載されている、河内誌大阪府全志、大阪府史蹟名所天然記念物によると、「貞観元年正月授從五位上」とあり、又、同書に、「延喜式内社として、並大月次、相嘗、新嘗に予る」とある。恐らく、奈良朝の末期か平安朝初期の創建と推定せられる。

御祭神については、大阪府神社史料弓削神社の条の河内誌に「比古佐自布都命」、大阪府全志に「一に布都大明神とも呼び」、大阪府史蹟名所天然記念物の渡会氏神名帳考証に「弥加布都命、比古佐自布都命」、特撰神名帳には、「高魂命、天日鷲命」とあり、神社叢録、大日本史神祇志、地理志料等には、「弓削宿禰神敷、或は弓削宿禰祖廟也」とあって諸説があるが、弓削宿禰は物部連の族であるので、物部氏の祖神である饒速日命、可美麻治命を御祭神として奉斎し、もと二俣に鎮座の天照皇大神を合祀して三柱を奉斎している。

明治五年村社に列し、大正三年十月に神饌幣帛料供進社に指定せられた。

境内は三九〇坪を有し、本殿拝殿絵馬殿社務所が存し、境内社に菅原神社、稲荷猿田彦神社琴平神社があつて、弓削及二俣を氏地としている。

境内に往昔から「延命水」と呼ばれる井戸があり、如何なる早魃の日にも、霊泉滾々として尽きず、清冽な此の霊水を口にすると長寿を保つと信仰せられている。

# おおかわじんじゃ 太川神社

## 御祭神

素盞鳴命  
保食神

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月十六日



鎮座地 八尾市南太子堂六―一二  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

太川神社は太子堂中央字高見に鎮座（現住地 八尾市南太子堂六丁目拾壹番地）太子堂は聖徳太子縁の古き地にして神社の建立亦古し。創建の年代は詳らかならざるも古来より當領水域一円を潤す太川の名に因み太川神社と稱え奉る。

御祭神の素盞鳴命は災難厄除け招福の神として勇氣と活力を授け給い、保食神は五穀豊穰と商賣繁昌に靈驗灼かなり。

舊大和川、太川は太古より洪水の歴史を繰り返し、寛永元年（西暦一七〇四年）現在の太川に川違えせらる。翌寶永二年早魃起り以来村民水飢饉に苦しみ、厄除けの為神社に参籠、とんどを行い御祭神に祈願せり。

その後悪疫、水災害の憂いもなく平穩、安泰となり住民遍く神の御恵みに浴し、太子堂の氏神として崇敬篤く現在に至る。

明治五年村社に列し、同年本地の稻荷社を合祀せり。

# 杵築神社

きづきじんじや

## 御祭神

須佐之男命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 八尾市佐堂町二二一九  
電話

H  
P

御朱印なし

## 由緒

古記録が失われたために由緒不詳であるが、佐堂の地は元和元年より徳川氏直轄、代官之を治め来たところであり、境内の鳥居・灯籠等の年号より推定すれば、およそ徳川初期の創祀と覚しく、佐堂の産土神として永く奉斎せられて来たが、明治四十年九月、神社整理にて八尾天満宮に合祀となった。それ以来、氏子民敬神崇祖の念やみがたく、戦後特に旺盛を極めたので、昭和三十四年十二月、宗教学法人法にて合祀先より分離創立して旧地に鎮座するところとなった。

境内二六三坪、本殿・幣殿・拝殿のほか、末社に八幡社がある。正面鳥居を挟み全境内玉垣をめぐらし景観荘厳である。

# 天神社

御祭神

素盞鳴命  
菅原道真公

御神徳

学業成就

例祭日

十月十六日



鎮座地 八尾市渋川町五丁目四八  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建の年代は詳らかではない。  
明治五年四月十八日渋川神社に合祀せられたが、同十三年七月十四日復旧して村社に列せられる。本殿、拝殿を存す。末社に天照皇大神社稲荷神社がある。氏地は本地一円である。

# 西郡天神社

にしこおりてんじんしゃ

## 御祭神

天穗日命  
素盞鳴命  
菅原道真

## 御神徳

## 例祭日

十月二十五日

鎮座地 八尾市泉町二丁一八  
電話  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



## 由緒

当社は天文年間の創建であるという。明治五年村社に列し、境内地九九六坪である。昭和三十八年十月に本殿、拝殿を造営した。

# 比枝神社

ひえじんじや

御祭神

國狭槌尊

御神徳

安産守護

例祭日

十月十六日



鎮座地 八尾市相生町三十七  
電話  
H P

御朱印なし

## 由緒

御祭神

國狭槌尊（くにさつちのみこと）  
京都坂本日吉神社の末社である。

由緒

宝暦十二年九月吉日改築される。  
昭和十四年十月改築される。

毎年旧暦九月四日末明に年中行事として餅まきを行う。

太平洋戦争にて中斷。

安産の守護神として信仰厚く九月四日の餅まきは近郷近在に有名であった。

明治五年澁川神社に合祀せられたが、同年十五年二月三日復旧して一社となる。

昭和五十六年七月改築現在に至る。

# 八やさ阪か神じん社じゃ

御祭神

素盞鳴命

御神徳

家内安全  
厄除開運

例祭日

十月十二日



鎮座地 八尾市西山本町二一九一三二  
電話 〇七二一九二二一四六五

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は明治四十一年四月十五日、八尾市西郷の八尾神社に合祀されたが、太平洋戦争後分離独立した。

# 稲荷神社

いなりじんじや

## 御祭神

稲倉魂命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡

## 例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 八尾市柏村町四一〇七  
電話 〇七二一九四三一七〇五九

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒不詳であるが、もと刑部に在ったが、明治五年九月一日この地に遷座した。

# 阪合神社

さかあいじんじや

## 御祭神

瓊々杵尊  
彦谷出見命

## 御神徳

## 例祭日

十月十二日



鎮座地 八尾市小阪合町二一八一三九  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社は八尾市大字小阪合の産土神であつて小字宮前に鎮座す。  
創建その他については詳らかでないが、当社は、古くから朝廷の崇敬篤く、陽成天皇の元慶七年十二月二十八日特に神階一級を昇進され従五位下となつた。その後一千年当社の消息は不明であるが、明治五年村社に列し、同四十年八月二十日矢作神社に合祀、昭和初年復旧現在に至る。

# 佐麻多度神社

御祭神

佐麻多度大神

御神徳

五穀豊穰  
商売繁盛

例祭日

十月十日

鎮座地 八尾市山畑三四〇  
電話 〇七二一九四一一三八二七  
HP

## 御朱印なし

## 由緒

創建は千四百年を遡り、高安郡山畑村（現大字山畑）の東方の天神山、通称水垂（みたらし）に白華山観音院という宮寺があり、この寺領内に鎮座していた。明治五年の神仏分離令により、寺は廃絶し、佐麻多度神社は村社に列し、同年四月、山畑神社と合祀、明治三十二年六月、現在地に遷座された。由来は、天神山の水垂とは、谷川の水源に近く、どの様な旱魃にも水は涸れなかつたと言う。故に佐麻多度神社とは、水分（みくまり）の神、または、佐麻は沢に通じ「澤女神」即ち水霊であり、多度の度は多に通じる多々波志、即ち土霊であろうという説がある。御祭神は、佐麻多度大神。澤女神、埴安神の御二柱、即ち水神と土神とを齊祀せる大地の守護神である。

同境内に、山畑神社、高安郡天満宮（高安郡一郡一社の御社）を祀っている。

佐麻多度神社の例祭は、①一月一日の歳旦祭（お神酒授与）、②二月節分の日に節分祭、③七月中旬の夏祭り（太鼓台および神輿の渡御、夏越しの祓え）、④十月十日の秋祭り（お神楽奉納）、⑤十一月第二日曜日の七五三祭り、⑥十二月三十一日の大祓、また、⑦毎月一日は月次祭を奉斎している。⑧お宮入りも随時受付けている。

一方、高安郡天満宮は、約千四百年前、天神山に「あまつかみ」即ち天の神として祀られていて、時が経つにつれて、天神社と菅原道真を火雷神とする御霊信仰が一つになったと思われる。明治三十二年に現在地に遷座された。高安郡天満宮では、毎年一月二十五日に初天神祭を奉斎している。

また、山畑神社（春日戸社坐御子神社）は御祭神を高坐御子神とする、延喜式内小社である。貞観元年（八五九年）山畑村善心山福寿院宝積寺域内に鎮座し、明治三十二年に、佐麻多度神社に合祀され現在地に遷座された。

御神木は、八尾市保全樹木指定の楠（樹齢約百三十年）である。また、高さ二十米、幹回り二・七米の有加利（ユーカリ）も珍しい。

境内には、力石「かたげ石」があり、江戸時代から昭和初期に若者が力比べに用いたものである。佐麻多度神社には四個あり、そのうち一つには「力石」の文字と人名が陰刻され、いま一つは「山響」という、しこ名を思わせる文字も刻まれている。力持ちや村相撲の力士が持て囃された時代を偲ぶものである。



# 住吉神社

すみよしじんじや

## 御祭神

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
息長足姫命

## 御神徳

厄祓  
航海安全  
水難守護

## 例祭日

十月十二日



鎮座地 八尾市東山本町二一三八  
電話 〇七二一九四三二七〇五九

H  
P

御朱印なし

## 由緒

飛鳥時代、聖徳太子所縁の寺として栄えた満願寺だが、度重なる戦乱により消失、又は河川の氾濫により流出したと推察される。その後、寺の名に因んで村名とされる。この満願寺村に安土桃山時代（慶長）に河川の氾濫を鎮め、水難を避けるために住吉大社より御分霊を遷し祀ることになる。元禄十六年、大和川の付替工事が完成し玉串川、恩智川の氾濫が収まり、水難がなくなつたので村名が萬願寺村と改められた。

# 都留美島神社

つるみしまじんじや

御祭神

闇御津羽神

御神徳

家内安全

例祭日

十月二十日



鎮座地 八尾市都塚二九六  
電話 〇七二一九四三―七〇五九  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は、延喜式内の古社ではあるが、祭神は詳らかではない。都塚は即ち由義宮の一部で、古代の塚であり当社は即ちこの地の守護神である。或は闇御津羽神であるとも云われている。

とこよぎひめじんじや  
**常世岐姫神社**  
(通称 八王子神社)

御祭神  
常世岐姫命

御神徳  
家内安全  
安産

例祭日  
十月二十三日

鎮座地 八尾市神宮寺五十一七三  
電話 〇七二一九四三一七〇五九  
H P

御朱印なし



## 由緒

当社は、常世氏の祖神である常世岐姫を祀り明治五年村社に列せられた。由緒は詳らかではないが、里人俗に八王子と称し、産前産後に靈験があると参詣する者が多い。

# 寶殿神社

ほうでんじんじゃ

## 御祭神

天照皇大神  
誉田別命  
春日四柱  
住吉四柱

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
所願成就

## 例祭日

十月九日



鎮座地 八尾市沼一―一三〇  
電話 〇七二一九七二一〇〇一六  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

夏季大祭・例祭日  
湯立神事あり



末社えびす神社



例祭日 地車 曳行



例祭日 蒲団太鼓 担行

## 由緒

当神社の創建の年代は明らかではないが、伝承によると、往古畠山氏一族の建立で、畠山氏の居城小山砦の鬼門除けの神社であったという。

それで屢々境内に伏兵を配備して奇功をたてたという。永祿年間、三好勢のために社殿、宝庫を焼かれ古文書宝物等も焼失したと伝えられている。畠山城より当社に通ずる参道もあつて老松多く繁茂していたが、宝永元年の大和川付替により中断せられ、爾来全く古有の風致を失う。その時当社は恰も大和川本流の中心に当り、まさに川床にならんとした。この由緒深き社地の存続を願う為、城代の副申あり、氏子一同より千金を醸出し流路を迂回せしめ、現在の通り全きを得た。よつて里人相呼んで「沼の千両曲り」と云い今に伝えられる。

明治五年、村社に列す。明治四十年、神社合祀令により、北条黒田神社に合祀されるも、社殿等は存続、昭和二十一年十月復帰独立す。

平成十五年三月、本殿及び木造並に陶製狗犬各一對が、八尾市指定有形文化財の指定をうける。江戸時代宝永年間と推定される。

例祭日に地車、太鼓台の曳行、担行あり。又夏季大祭並びに例祭日には湯立の神事が行われる。

# 御劔神社

みつるぎじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
天穗日命

## 御神徳

## 例祭日

十月二十日



鎮座地 八尾市刑部四丁二一八  
電話 〇七二一九九一―九七二七  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の由緒は詳らかではない。  
明治五年柏村新田の稻荷神社に合祀せられたが、同十三年七月十五日復旧し村社に列せられる。

# 神劔神社

みつるぎじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
保食神

## 御神徳

## 例祭日

七月三十日



鎮座地 八尾市田井中三十一七八  
電話 〇七二一九四九一七八八四  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。明治四十一年十一月二日に誉田八幡宮に合祀されていたが、太平洋戦争後独立した。

# 八尾神社

やおじんじや

## 御祭神

可美麻治命  
品陀和氣命

## 御神徳

家内安全  
商賣繁昌  
厄除開運

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 八尾市本町七ー七ー二七  
電話 〇七二一九九三一四四三五  
HP



## 神社のおすすめ

近鉄八尾駅西 徒歩五分

## 由緒

当社は延喜式内の神社にして、可美麻治命及び品陀和氣命を祀る。姓氏録河内国神別に依れば「栗栖連、神饒速日命子干摩治命之後也」とあり、栗栖連の族の共の祖を祀つたものである。

貞観四年四月十二日從五位下に授けられ、同四年十一月十一日官社に預る。本地の産土神である。

明治五年村社に列し、同四十一年四月十五日大字八尾中野字樋の裏の村社八阪神社（素佐男命）及び大字萱振字北町の同加津良神社（素盞鳴命）を合祀して今の社名に改められる。元栗栖神社と称したが、明治四十一年八尾神社と改称した。

# 由義神社

ゆぎじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
少彦名命

## 御神徳

## 例祭日

十月二十日に近い土日



鎮座地 八尾市八尾木北五―一七二  
電話 〇七二一九九一―九七二七  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

由義神社は由義宮（西の京）に神護景雲三年（七六九）称徳天皇たびたびこの地に行幸され、その宮域は若江、大縣、高安三郡またがる広域の中心由緒深い宮跡に氏子により、崇敬の精神を持って造営され、広大な氏地を有し、その規模、格式共に近隣に比をみない堀を巡らし、森をようした荘厳な河内五社の一社であったが、中世たび重なる兵火により焼失し、住民も亦諸方に分かれたが、江戸時代貞享三年（一六七八）氏地に天災、水害多く、氏は霊験あらたかな、御祭神、素盞鳴命、少彦名命を祀り神社を再建して由義神社と称す。境内には本殿・幣殿・拝殿・絵馬所が存し、末社に皇大神社を祀り、氏地は八尾木・中田にして夏祭は七月二十日に秋祭は十月二十日である。神社は以来文化三年（一八〇七）・明治八年・明治三十九年・大正十三年と改修された。このたび（昭和五十八年）多額の浄財寄進により両級著しい本殿・幣殿・拝殿・鳥居・絵馬所・手水烙・狛犬その他附帯改修工事を完了し、末ながく氏地氏子の家運隆昌、五穀豊穰、災害防除を祈願する産土神であり、氏神である由来茲に記す。

### 由義宮趾

奈良時代の七五六年、称徳天皇が紀伊周遊の帰佳、道鏡の出世のちである弓削の行宮に立ち寄られ、道鏡を太政大臣禪師に任ぜられた。行宮とは天皇が旅の途中でお泊まりになる仮の御殿で、その時に弓削行宮も造られた。

七九六年天皇が再度弓削行宮に訪れられた時弓削行宮を由義の宮と改称し（由義は弓削の好字）河内の郡を西の京と名付けられた。その後天皇の命により郡としての造営がはかられた。七七〇年天皇は三たびこの地を訪れ西の京造営の進捗状況を視られた。その時に歌垣も催された。「乙女らに男立そひ踏みならす西の郡も萬代の宮」

「溯も瀬も清くさやけし博多川千歳をまちて澄める川かも」  
等の歌が残っている。その後程なく称徳天皇が亡くなられ（七七〇年）道鏡の威勢もなくなり、千代万代を祝した西の都も僅か十ヶ月の短期間で廃止されてしまった。おそらく整地のみで宮殿の建築には着手していなかったろう。その宮域を考えると東は玉串川、南・西は長瀬川、北は中田辺である。

現在、由義神社境内に「由義神社旧址」の碑が建っているこの辺が西の京の最北端であったと思われる。

# 弓削神社

ゆげじんじや

## 御祭神

饒速日命  
弥加布都命  
宇麻志麻治命  
天日鷲命  
比古左自彦命  
外二柱

## 御神徳

家内安全  
病氣平癒  
健康長寿

## 例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 八尾市東弓削一―三六  
電話 〇七二―九四三―七〇五九  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒は不詳であるが、延喜式内の大社で、貞観元年正月二十七日に従五位上を授けられ、布都大明神と称した。

# 柏原市

▶ 大阪府にもどる



# ぬでひこぬでひめじんじゃ 鐸比古鐸比賣神社

## 御祭神

鐸比古命  
鐸比賣命  
猿田彦命  
春日四柱  
稻荷三柱

## 御神徳

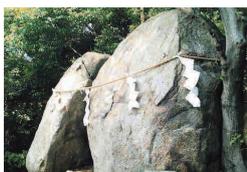
家内安全  
厄除開運  
所願成就

## 例祭日

十月十五日



稲荷神社



森の中腹に夫婦石



夏季大祭の渡御

## 神社のおすすめ



鎮座地 柏原市大泉四一六一  
電話 〇七二一九七二一〇九九七  
HP

## 由緒

当社は、成務天皇二十一年辛卯七月十日の創建で、延喜式小社に列せられ、從三位の神階を給う。往古、鐸比古神社、鐸比賣神社の二社として延喜式に登載され鐸比古神社は、現在の神社の森の背後の高尾山（二七七米）の磐座を御神体として祭祀され、鐸比賣神社は山麓の谷間の磐座を御神体として祭祀され、それぞれ高尾大明神、比賣御前と称えられてきた。太古、早天続きで飢饉の時、天皇の勅使が参向され、雨乞の御祈願があったと伝えられる。最近まで、早天の折には里人松明をもって高尾山に登り雨乞の祈願をしたという。

祭神鐸比古命は、古事記では沼滞別命、日本書紀では鐸石別命と申しあげ、垂仁天皇の第四皇子で、御事蹟は詳らかではないが、金属精錬に御縁があったと考えられ、馬場先には鍛冶場跡が発見されている。

曾孫弟彦王は、神功皇后の三韓治政に当り大功を立てられ、又その凱旋の途時、詔を奉じて忍熊王の叛逆を平定され、其功績により備前の磐梨の県（後の美作備前）を賜る。応神天皇元年三月此地に移り、祖神鐸石別命の御霊を勧請され、十二世の孫にあたる和氣清麿公とともに和氣神社として祭祀されている。

天正の頃、松永弾正、信貴城に於て謀反を企てた時、織田信忠が当社に立て籠り、信貴城攻取の計画を立て、天正五年丁丑九月、信忠天下平定後、当社へ新地五十石、灯籠一對を寄進した。

明治五年、旧大泉郡の郷社に列し、明治四十一年神社合祀令により若倭彦神社、若倭姫神社を合祀したが、昭和二十五年、旧に復帰した。

大泉地区、法善寺地区の氏神である。

神社の森の中腹に二つの大きな岩が寄り添っており、夫婦岩（めおといわ）といわれており、男女の神さまが一体として祀られていることから「夫婦和合」「家内安全」の御神徳がある。

高尾山々麓の切山から多鈕細文鏡（東京博物館蔵）が出土しており、銅鐸との関連も考えられる。

七月三十一日の夏季大祭には、お旅所へ御神輿の御神幸があり、蒲団太鼓の随行がある。

# 国分神社

こくぶじんじや

## 御祭神

大国主命  
少彦名命  
飛鳥大神

## 御神徳

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 柏原市国分市場一六―三五  
電話 〇七二―九七七一三〇六〇  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は宇美山にあり、その創建年代は詳らかではないが、古書、口伝等によれば、鎌倉時代の建立によるとある。

創建当時の現在地には、推古、舒明の両天皇に仕えた、船氏（帰化人）が住んでおり、中国の古礼すなわち有職、接待、技術等、かつて見た事もないものを伝え、その才の勲功があつたと、大仁後の正二位の官位を賜つたが、舒明帝十三年に没した。二十七年後の天智天皇の御代妻安里故能刀自も没し、同じように神社の背後の松岳山の上に葬つた。その墓は前方後円墳で、史跡として当社が所有している。（昭和三十四年四月に、京都大学の小林行雄氏が石棺の調査をされ、四世紀末の古い墓である事が判明した。）

境内地は、そのような古い歴史をもち、その後の武家政治による変遷により、船氏の地位も消失して、ここに氏人達の信仰のあつた大和桜井の、三輪大明神の大国主命と、少彦名命、更に飛鳥部の伴造飛鳥大神の三柱を当地に勧請された。

明治五年村社に列し、同四十年字水谷の無格社社本神社を合祀した。

当社宝物として、漢鏡三面（重文）がある。

尚、船氏の王後首墓誌（長さ三十七センチの銅板で厚さ一ミリメートル）は、江戸時代の考古学者である、京都の藤井貞幹が、この墓誌を古市の西淋寺にて、寛政六年に発見したと「好古小録」に書いているが、その後転々として現在は三井高遂氏が所蔵されている。

# かしわらくろだじんじゃ 柏原黒田神社

## 御祭神

天御中主大神  
天照皇大神  
春日四柱神  
塩土翁命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
所願成就

## 例祭日

十月九日



柏原えびす神社



石力不動尊

## 神社のおすすめ

柏原えびす祭 毎年一月六日七日  
石力不動尊 眼病祈願 交通安全祈願  
夏季大祭 地車曳行、蒲団太鼓担行

鎮座地 柏原市今町一―三―一三  
電話 〇七二―九七二―〇〇一六  
HP



## 由緒

柏原黒田神社は、元々は塩殿神社と称し、小高い丘となっていた現在地に祭祀され、「ショウデンサン」と呼称されていた。塩土翁命をお祀りされていた事から、水運、交通安全の神としてお祀りされたものであろう。大和川付替前後の三百年前「柏原船」の往来が盛んであった頃に創建されたと考えられる。その後明治五年に、本郷の御劔神社に合祀され、明治十二年に再び復旧した。ところが明治四十年神社合祀令により当柏原村の氏神である北条の黒田神社へ合併した。社殿及び跡地はその儘で保存されていたが、昭和二十年七月二十八日、米軍機の爆弾の投下により、神社の遺構は壊滅状態のままであった。

大和川の付替によって、北条にある氏神様である黒田神社への参拝は柏原地区の人々は、大和川を渡らねばならず難渋を極めていた。

昭和四十年頃から、氏神である黒田神社の御分霊を柏原の地にも祭祀されたという声が高まり、上市地区鎮座の春日神社、また黒田神社に合祀されていた塩殿神社、そして氏神である黒田神社と共に、昭和四十四年十月柏原黒田神社として創建された。

昭和五十三年、柏原の町の繁栄のため、「えびすさん」の本宮である島根県的美保神社より御分霊を勧請し、境内社として東側に祭祀し、毎年一月六日、七日に「柏原えびす祭」を行う。また西側には、「石力不動尊」を祭っている。現在地が付替前の旧大和川の西堤であった頃、河原に流れつかったという伝承がある。

# かしわらじんじや 柏原神社

(通称) お稲荷さん・白髭「しらひげ」さん

## 御祭神

宇迦之御魂命  
天照皇大神  
猿田彦命  
住吉之大神  
大宮女命  
外三柱

## 御神徳

五穀豊穰  
商売繁盛  
厄除延寿

## 例祭日

十月第四日曜日



鎮座地 柏原市今町二丁目二二〇  
電話 〇七二一九七二二二四〇  
HP



## 神社のおすすめ



お守り



旧奈良街道からの全景

## 由緒

古代より、奈良盆地の水を集める大和川は、生駒山系と金剛山系の間の亀の瀬を経て大阪府に流れてくる。そこに位置しているのが柏原である。大和川が北流して大阪城の東に流れていた頃の元和六年(西暦一六二〇年)と寛永一〇年(一六三三年)に、大和川の堤防が決壊して、柏原村は壊滅的な被害を被り、村ごと南西に移転した。村の復興事業として、平野川の掘削と川を利用した舟運「柏原舟」の営業が寛永一三年(一六三六年)から明治四〇年(一九〇七年)までの約二七〇年間続けられ、天満や平野と並んで今町は経済拠点となりました。

言い伝えによると、「往古大和川の堤に一祠あり。白髭の老翁 稲を背負いて現れ 我は此の神の現身なり 旧二月初午に神慮を慰め 祭事あるべし。厄災を祓い 延寿を授かり 萬民安全に守るべし。」と神祠に入り給うと。

江戸時代の奈良街道に面し、神域約四四〇坪。参道を進んでいくと、石橋の下には、かつての大和川の左岸の堤防の水抜き用の溝が今も残っている。四段ほどの階段を上がると、そこからは、宝永元年(一七〇四年)の大和川の西への付け替え以降の新田開発で造成された市村新田西大崎である。水舎・神楽殿・神輿庫・拝殿・幣殿・本殿と続いている。本殿の北には大きい銀杏木があり、十一月から十二月にかけての黄葉は鮮やかである。

古来より農業・商業・工業に霊験あり、また厄除け延寿の神として大和・摂津・河内・和泉の各地には、稲荷講ができて、庶民の信仰を集めている。明治四十一年には、社名を白髭稲荷神社から柏原神社へと改称している。

# あまゆかわたじんじや 天湯川田神社

## 御祭神

天兒屋根命  
天湯河桁命  
大日靈貴命

## 御神徳

除災招福  
家内安全  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 柏原市高井田八九  
電話 〇九〇一六七五三一五六四  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ



①鳥三羽：持って参拝用  
②白鳥二羽：家族安泰

当社伝説の鳥(白鳥)は、皇子復活の原点であります。皆様にも幸わせになって頂きたく設置しました。身代御守は玄関の上に貼って下さい。



2

## 由緒

人皇十二代景行天皇三十八年九月 西暦百八年 鎮座  
四十四代元正天皇 養老元年三月  
御幸 四十五代聖武天皇 天平元年三月  
四十九代光仁天皇 寶龜二年二月

天湯川田神社の伝説は鳥取県の名前の由来であります。以前にNHKが鳥取県のルーツをたずねての番組で取材にこられました。

祭神天湯川田桁命はこの地、高井田にお生まれになりました。皆様も山の稜線から登る朝日、西に沈む夕日、大和川の水の流れ、当時と同じ景色を感じるところを見つけて下さい。この土地は、当時は外国から来た人にとっては、奈良の都の入り口でありました。この土地にはじめて古墳を築き、その後、山の稜線に鳥坂寺外、五つの寺が建っていました。当社の境内地には、三重の塔の真柱の礎石が有ります。近在の人々は古墳の上に立つ神社と言われています。最近、丹後の方が古墳を見にバスで来られました。当社の神の使者は鳥、鹿であります。白鳥の二羽の像をハート型に設置して、皆様の願いが叶いますように幸せを表現しました。

### 物言はぬ皇子

垂仁天皇の皇后狭穗姫の兄が「これで天皇を二刺して下さい。」と皇后に頼み込んだ。しかし皇后も包み切れず、謀叛を申し上げると、直ちに天皇は軍を狭穂彦王の方へ向けられた。皇后はこの時御懐妊中であった。兄の城に止まり兄と運命を共にする決心をした。けれど生まれた皇子は天皇の軍勢にお渡しになった。天皇は、皇后と皇子を殊の外愛されていたので再三連れ出す様計られたが果たせず皇后は悲しい最後を遂げられた。天皇は母后を失はれた皇子に、譽津別命と名付けられ非常に可愛がられたが、何うした事か息子は一言も発せられなかった。天皇はこれを悲しまれて色々と手當をされたが、一向に効目がなかった。處がある日の事、大空を翔ける鳥の姿を見た皇子が、初めて「あ……」と聲を立て、笑はれた。天皇は大變お喜びになって天湯河板誓という者を召し「あの鳥を取って参れ、あの鳥さへあれば皇子は物を云うだろう」と命じた。早速この鳥の跡を追って出雲まで行き、鳥を捕まえて天皇に献上した。天皇は大いに喜び、皇子に見せると、次第に物言う様になったので、天皇は河板誓の功勞を賞し、彼に鳥取造の性を賜ったと言う。

### 境内社

山王権現社 平戸明神社 古野明神社 若宮明神社 四社

# 石神社

## 御祭神

石長姫命  
石姫命  
熊野権現

## 御神徳

健康長寿  
病氣平癒  
家内安全

## 例祭日

十月十九日



2020/08/07 16:14

鎮座地 柏原市太平寺二一九一三  
電話 〇七二一九七二一三三四〇  
HP



令和二年八月七日

## 神社のおすすめ

境内入口に聳える神木のくすのき。樹齢推定八〇〇年。  
社務所横にある智識寺東塔の礎石。



石神社のくす



智識寺東塔の塔心礎（礎石）

## 由緒

当社の創建の時代はわかりませんが、石神社の社名から自然の大きな岩盤などをご神体とした古い神社と考えられます。

奈良時代、太平寺地区は平城京と難波宮とを結ぶ交通の要所であり、河内六大寺の一つの「知識寺」と呼ばれる古代寺院がありました。天平十二年（七四〇）聖武天皇が難波宮行幸の途中にたち寄られ、大盧舎那仏を見て感動し、東大寺大仏造営を発願されたといわれています。当社を氏神とする氏族はわかりませんが、知識寺に関係する神社であったかもしれません。

三代實録によると貞観九年（八六七）二月官社に預かるとあり、又延喜式（九二七）に河内国大県郡十一座と記されており、その内の一社が石神社です。

中世の状況はわかりませんが、江戸時代には太平寺村の氏神として信仰され、熊野権現社と称していました。明治五年（一八七二）村社に列せられ、石神社の名も確定いたしました。

境内には大きな楠があり、幹回り六、四m、高さ十八m以上で樹齢八〇〇年と推定され、大阪府の指定天然記念物となっています。また、知識寺の東塔の礎石（柱穴二二cm）が明治の初めに境内社務所の横に移されています。

# かすがじんじや 春日神社

## 御祭神

武甕槌命  
經津主命  
天児屋根命  
天照皇大神  
中筒男神  
外三柱

## 御神徳

家内安全  
良縁成就  
勝運

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 柏原市田辺一―一六―三四  
電話 〇七二―九七七―三四六一  
HP



## 神社のおすすめ

神社の境内に田邊廃寺の遺跡があり、  
城が文化財に指定されており埋蔵出土物  
を収蔵庫に保管している



田邊廃寺（薬師寺形式）



収蔵庫

## 由緒

柏原市田辺の丘陵中央に春日神社があります。その境内には田邊廃寺の遺跡が残り、境内全域が国の文化財史跡指定を受けています。春日神社の創建年代は不詳ですが七世紀の飛鳥、白鳳期（約六五〇年）の頃と推定されます。その後にも奈良時代にかけて最も栄えた（中臣）藤原鎌足を排出した藤原氏一族に仕えた田辺史（たなべのふひと）氏一族がこの地に勢力を持ち、田辺史大隅は鎌足の資人として活躍した。大隅は先祖を祀る自らの氏寺を創建すると共に、藤原氏の氏神である春日神社を建立し繁栄を極めてきました。その後、平安時代に至り焼失し、現存する社の再建年代も不詳ですが、春日神社のみが再建され、以後改修を繰り返し、現在まで住民の氏神様として存続しています。

### 歴史的背景と現況

他方、田辺寺は薬師寺形式の寺院で、南、中門、金堂、講堂、東、西塔（三重の塔）の伽藍配置を持ち、奈良時代前期に、前後の年代を経て整備された。しかし、平安時代に火災により寺院は廃絶し、現在では「田邊廃寺跡」と呼ばれている。遺跡が春日神社境内に残り収蔵庫に発掘遺跡物である端丸瓦、端平唐草文瓦、須恵器、などを収納している。さらに、河内田辺の地は、古代の難波から大和明日香の都「遠都飛鳥」へ通じる街道の要衝にあり「近都飛鳥」、と呼ばれ田辺氏一族の本貫の地として栄えて来た。

山城国山科にも鎌足に併せて春日神社を建立し鎌足の子である不比等を養育し、近江朝廷陥落時、不比等は九歳で父鎌足の懸命な和睦や戦いを身をもって体得し、以後も、唐を模範とし先進的な大陸文化を学び国作りの特訓を受けた。

不比等は持統女帝の命により、日本の最初の憲法書と言うべき「大宝律令」「日本書紀」「古事記」「養老律令」の編纂に携わり完成をみた。さらに遣唐使の派遣を進め、国際的な、国家（日本国）としての概念を確立した。不比等の子宮子は文武天皇の后となり、同じく「安宿姫」後の「光明皇后」が聖武天皇の后となり権勢を駆使し一世を風靡した。

田辺の春日神社は、時の遷都と近都飛鳥の歴史の変遷との大いなる関連が示唆される。さらに、要人達の英知や魂をも育み、神徳の宣揚の場として、神意の高揚のみならず、感性の昂揚を模索する鎮守の森として存立している。

# かなやまひこじんじゃ 金山彦神社

御祭神

金山彦命

御神徳

例祭日

十月二十五日



鎮座地 柏原市大字青谷一〇二五  
電話 〇七二一九七九一〇六八三  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は延喜式内の神社である。  
社はもと嶽山の嶺上にあつたのを、中古の時代に、今の地に移したものと伝えられる。  
又別説には社の東の寺山の嶺にあつたのを中古今の地に移されたものとも伝えられる。  
本地の産土神で、山王権現と称され又八大金剛童子社とも称されていた。  
明治五年村社に列せられた。

# かなやまひめじんじゃ 金山媛神社

御祭神

金山比売命

御神徳

例祭日

七月二十五日

鎮座地 柏原市大字雁多尾畑四八二八  
電話 〇七二一九七九一〇六八三  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください



## 由緒

当社は延喜式内の神社である。社のもと嶽山の嶺にあつたのを、中古の時代に今の地に移したものと伝えられる。本地一円の産土神で八大金剛童子社と称し、俗に山王とも呼ばれ天王とも称されていた。  
明治五年村社に列せられ、同八年今の社名に改められた。

# ふたみやじんじや 二宮神社

## 御祭神

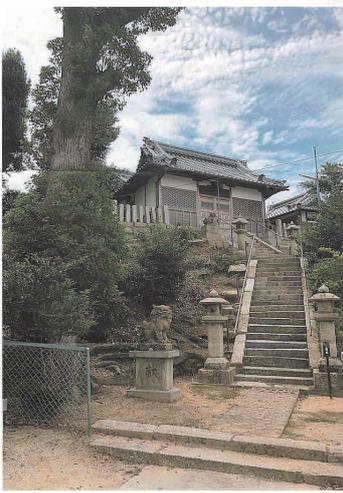
素盞鳴尊  
武甕槌命  
經津主命  
天兒屋根命  
比賣大神

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

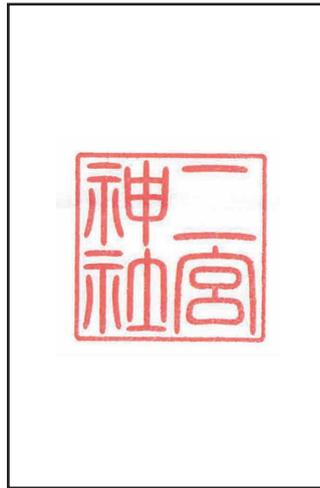
## 例祭日

七月十六日



鎮座地 柏原市安堂町一九一九  
電話 〇七二一九七四一六七五七

H  
P



## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。此の地に杵築神社、春日神社の二社があり、合祀して社名を二宮神社と改める。境内は四三六坪ある。  
昭和十八年に社務所を新築し現宮司を置く、氏地に柏原市役所、市民会館、市営プール等の施設が有り、暫時氏子数も増しつつある。

# 大狛神社

おおこまじんじや

## 御祭神

大山咋神  
木花咲耶姫神

## 御神徳

## 例祭日

十月二十五日



鎮座地 柏原市大字本堂三八八  
電話 〇七二一九七九一〇六八三  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は延喜式内の神社であるが、創建の年月は詳らかではない。本地は古の巨麻郷で、大狛氏の住んでいた所である。御祭神は大狛連の祖神を祀ったものと思われる。本地の産土神で、俗に山王とも称されていた。明治五年村社に列せられた。

# かたやまじんじや 片山神社

## 御祭神

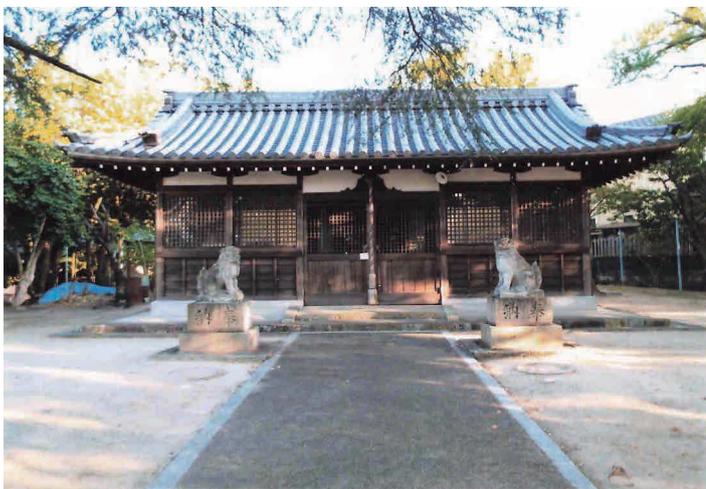
安閑天皇  
蔵王権現

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
良縁成就

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 柏原市片山町一七二  
電話  
H P



## 由緒

近都飛鳥の安都郡資母郷にあたる柏原市玉手山丘陵の北端に片山神社がある。創建年代は不詳であるが、古くは蔵王権現とも称される。

安閑天皇在位五三四年〜五三五年に都を大和に遷し、諸国に屯倉、田部を設けたとあり関連が示唆される。

境内には片山廃寺の遺跡があり藤原系の端丸瓦や瑞花蝶鳥文鏡が出土している。

飛鳥時代に百済系の渡来人及び、後には藤原氏や田邊史一族が共に勢力を持っていた地域である。片山神社正面の階段下に大和川沿いの船着き場があり、大阪の浪速都から船で大和川をさかのぼり片山で降り大和の関屋越で明日香の都へ向かう重要な中継地となっている。

続日本紀に宝亀元年称徳天皇が由義宮へ行幸した際、博田川、又は伯太川（現在の石川）に臨んで宴遊し、付き従った百官等が曲水の詩を献上し翌日には歌垣を行い歌を言祝いだ。玉手山丘陵は金山躑躅が咲き誇り盛んに花見の宴を催された様である。

明治四十二年、誉田神社に合祀されたが、昭和二十一年に当地に御復帰し祭祀される。翌年神社法人となる。

# すくなかわたじんじや 宿奈川田神社

(通称 白坂神社)

## 御祭神

高皇産霊命  
宿奈彦根命  
科長戸辺命

## 御神徳

無病息災  
病氣平癒  
安産守護

## 例祭日

旧六月十四日



①人型と桃の奉納  
②病祓いの術

## 神社のおすすめ

- (一) 病祓いの術  
人形二枚を枕の下に一夜敷いた時、病は遠のく
- (二) 夏祭 湯屋の払い  
桃の枝葉三枚を入れて浴する時、病は遠のく
- (三) 病祓術御守  
御身体に身に付けて下さい

## 御朱印なし

鎮座地 柏原市高井田六六一  
電話 〇九〇一六七五三一五七六四  
HP

## 由緒

人皇十代 崇神天皇六十三年五月鎮座  
大和川の北岸にある式内社。近在の人々は白坂大明神と言い、白坂神社と呼んでいます。  
日向国高千穂の峯に天降り給ひし神、三十二神内として葦原の国に降り給ひし御神系である。神仙医薬の祖神である。  
人皇四十五代聖武天皇天平六年三月に川田の社に御幸のとき当社に詣給ひ、同四十九代光仁天皇も参拝された。宝龜二年二月それ以来、天皇が病氣の時は勅を下して幣帛をくだされた。

川田の原、川田の森の名有り、又その山林を指し竹原という。故に竹原の里、竹原の山竹原の井の名あり天湯川田の神社、宿奈川田の神社と共にこの地に鎮まります。二座の号に川田の二字を含む。川田の原の地名に因と号に俊成の歌に

賤濃女我川田乃原仁津武芹母  
他我太女仁止天神羅須良年

### 病祓いの術

雛形一對を石でできた雛形の下にあるトビラから取り出して持ち帰り病人の枕の下に一夜敷いて寝て、この雛形を持って参拝し前に立て祈願し、現在何才であっても次の言葉を言い祈願して下さい。(男女共) 私は今年十九才と言ひ、氏名を名乗り、私は正直の心を以って祈り奉へ神徳を以って病を此の雛形に遷り給へとお祈り下さい。その後、雛形は石でできた雛形の下ポストに入れて下さい。代参の時も、(男女共) 私は十九才と言ひ、その人の名前を言う、私は正直の後は同じです。

### 夏祭りの湯屋の払い

夏祭の日、霊木である桃の枝葉三枚を入れて浴する時、病は遠のく。枝葉は当日十時から十六時まで当社にて御渡しします。

白坂明神と号する事は、当社の背に竹原山あり、その土色は潔白にして又、山路嶮しく坂が白く見えたのが、白坂明神の始まり。又、紅葉の名所で、柿本人麻呂の歌あり

朝奈朝奈立秋霧乃寒幾鴨  
竹原山濃紅葉曾女介武

当社は桃の木を以って神木とする。桃は陰疫の霊木のため当社明神桃という。

### 境内社

稻荷神社 食物の神を表し、五穀豊穰

# 伯太彦神社

はくたひこじんじや  
(通称 躑躅尾社)

## 御祭神

伯太彦命  
廣國押武金日命

## 御神徳

家内安全  
良縁成就  
厄除開運

## 例祭日

十月十七日



若宮社 薬効神社

## 神社のおすすめ

奉拝  
伯太彦神社  
令和三年元旦

鎮座地 柏原市玉手町七一二  
電話 〇七二一九七七―三四六一  
HP

## 由緒

近都飛鳥の安宿郡資母郷にあたる柏原市玉手山の安福寺に隣接した天皇臺と称する丘陵に伯太彦神社がある。古くは躑躅尾社とも牛頭天皇とも称せられる。創建年代は不詳であるが、平安末期、偕、従五位下、延喜式内の古社にして、文徳天皇、天安二年（八五八）官社に列せられる。

伯太彦命（伯孫）は崇神天皇の王子豊城入彦命の四世大荒田別命の子孫努賀君の子とされる。別紙によれば、同じく

百尊（知聰）「出自漢王之後也」ともあり共に田邊史の祖と示唆され、孫の斯羅が皇極の御代に田邊一族として安宿郡の資母郷に居を構えたとの伝承がある。

飛鳥時代の白鳳から天平期にかけて栄えた藤原氏に仕えた田邊史一族がこの地に勢力を持ち、なかでも、田邊史大隅は（中臣）藤原鎌足の資人として活躍をした。続日本紀に宝亀元年称徳天皇が由義宮へ行幸した際、博多川、伯太川（現在の石川）に臨んで宴遊し、付き従った百官等が曲水の詩を献上し翌日には歌垣を行い歌を言祝いだ。近くの玉手山丘陵は全山躑躅が咲き誇り盛んに花見の宴を催された様である。

明治四十二年、誉田神社へ合祀されたが、昭和二十一年当地に御復帰し若宮殿として並び再祀される。翌年神社法人となる。

# 伯太姫神社

はくたひめじんじや

## 御祭神

伯太姫命  
大年大神  
子守大神

## 御神徳

家内安全  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 柏原市円明町一五―八  
電話 〇七二―九七七一〇六八三  
HP

奉拝

伯太姫神社

令和三年元旦

## 由緒

近都飛鳥の安宿郡資母郷にあたる柏原市の玉手山丘陵の南側山腹に伯太姫神社がある。

古より白山権現とも称せられ、延喜式内の古社にして、平安朝の末期に神位階、従五位下の官社に列せられる。

伯太彦命（伯孫）は崇神天皇の王子豊城入彦命の四世大荒田別命の子孫、努賀君の子とされる。別紙に依れば同じく百尊（知聰）「出自漢王之後也」ともあり共に田邊史の祖先と示唆され、孫の斯羅が皇極の時代に伯太族（田邊一族）として安宿郡の資母郷に居を構えたとの伝承がある。

大日本神祇史資料には「蓋田辺史の先祖伯孫の妻也」とあり、祖神として女神を祀ったもので円明部落の鎮守の社であった。

明治四十年菅田神社に合祀されたが、昭和二十一年当地に御復帰し祭祀される。

# 八幡神社

はちまんじんじや

御祭神

品陀別命

御神徳

例祭日

十月二十五日



鎮座地 柏原市大字峠四九四  
電話 〇七二一九七九一〇六八三

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社の創建年代は詳らかではない。  
もと土生神と称せられていたが、明治五年に今の社名に改められ、村社に列せられた。

みつるぎじんじゃ  
御劔神社  
(通称 天王さん)

御祭神

素盞鳴命  
天兒屋根命  
大国主命

御神徳

家内安全  
厄除開運  
所願成就

例祭日

十月九日



鎮座地 柏原市本郷二丁五一六  
電話 〇七二一九七二一〇〇一六  
HP

御朱印なし

神社のおすすめ

①力だめしの石 ②地車 ③蒲団太鼓

夏季大祭、例祭に蒲団太鼓、地車の曳行あり。また湯立ての神事あり。境内に「力だめしの大石」あり。



由緒

当社は創建年代は詳らかではないが、寺田家所蔵の明治三年十一月神社書上帳、及び明治十年二月村社取調書上帳等の古文書に依れば、往古より此地に鎮座せられ、又社格も村社に列せられていた。

宮座の古文書によれば、当神社の創祀は、藤原時代に五畿内に悪病が流行した為、萬寿二年三月、悪病封じ村内安全祈願の為、京都東山の吉田御殿に請願し、御分霊を給わり祭祀されたという。

御祭神素盞鳴命は、薬師如来或は印度の牛頭天王とも習合され、通称「てんのうさん」と言われる所以である。

明治五年、今町の塩殿神社、上市の春日神社を当社に合祀したが、同十二年に元に復した。逆に明治四十年には国の合祀令により、北条の黒田神社に合祀されたが、昭和二十二年に復帰した。

境内に竹光稻荷大明神、おさん大明神の二社の末社あり。また「ちからだめし」の大石が三個あり。

# わかやまとひこじんじゃ 若倭彦神社

## 御祭神

若倭彦命  
品陀和気命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
所願成就

## 例祭日

十月十五日

鎮座地 柏原市平野二一五―一二二  
電話 〇七二―九七二―〇〇一六  
HP

御朱印なし

## 神社のおすすめ

毎年節分朝、家内安全・厄除け祈願の  
星祭齋行。氏子、崇敬者等参拝多数

例祭日に蒲団太鼓担行



## 由緒

当社は延喜式内の古社である。神祇志料には平野村にあると記す。  
貞観元年八月丙申、正六位上 若倭彦命、若倭姫命 並從五位下を授くとある。延喜の制 二小社に祈年祭並に鉏一口を加え奉りきとある。  
品陀和気命（応神天皇）も祭祀されていることから、別名を「あかぎ八幡」という。また建筒草命も祭祀されているといわれるが、建筒草命は若倭部連の祖神である。  
明治四十一年三月三十一日神社合併の指令を受け、鐸比古鐸比賣神社に合併したが、昭和二十五年十月に再び独立し現在に至っている。  
中秋名月には、観月祭並に湯立神事が、八幡講によって永年齋行されている。  
例祭日には、蒲団太鼓の担行がある。また二月三日の節分には、厄除け、家内安全の祈願祭で賑う。

# わかやまとひめじんじや 若倭姫神社

## 御祭神

若倭姫命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
所願成就

## 例祭日

十月十五日

鎮座地 柏原市山之井町七―四  
電話 〇七二一九七二一〇〇一六  
HP

御朱印なし

## 神社のおすすめ

夏季大祭には蒲団太鼓の担行がある。

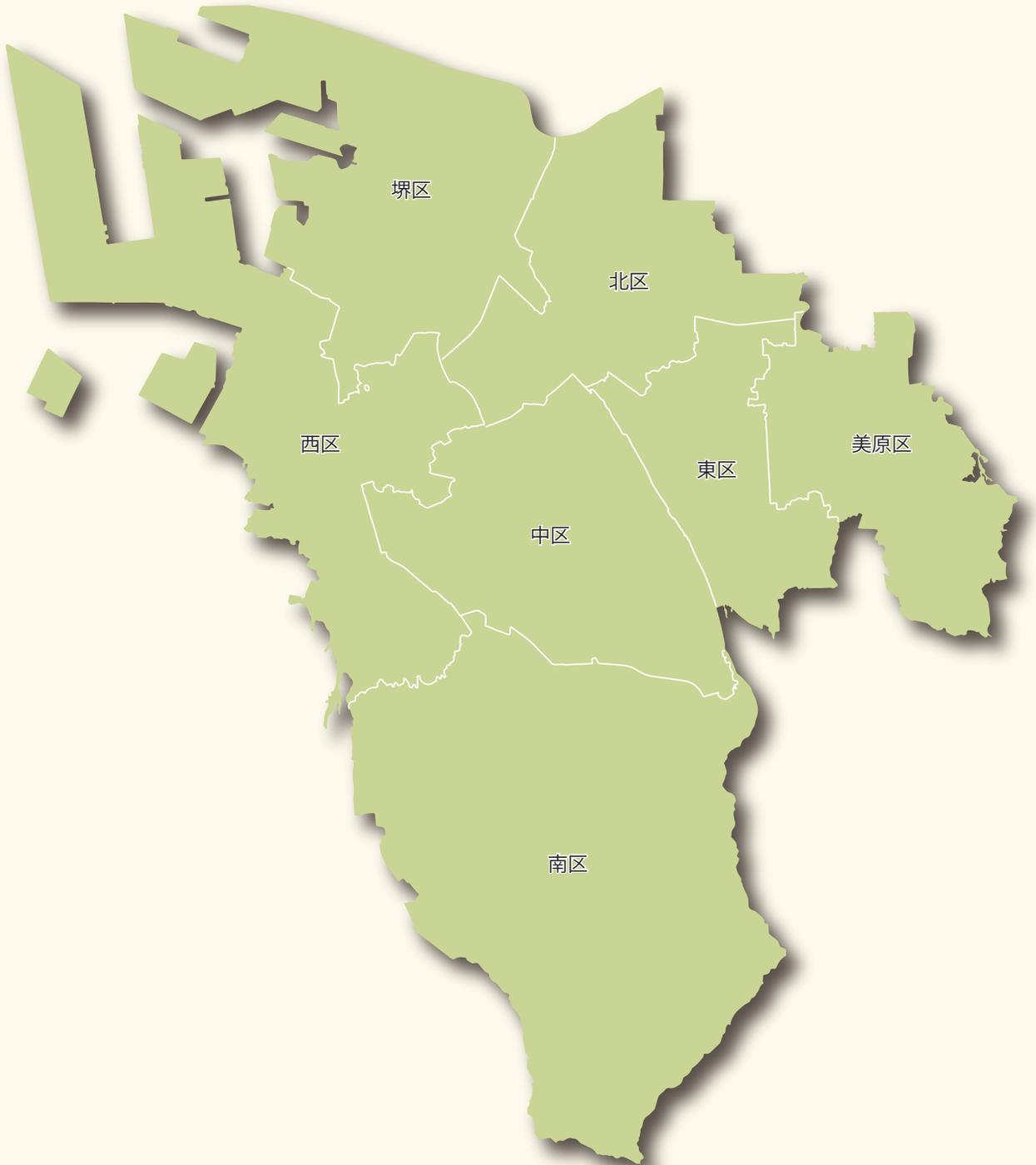


## 由緒

当社の創立年代は詳らかではない。  
延喜式内の古社にして、大日本史及び式内細記に、清和天皇貞観元年八月丙申從五位下を授け、醍醐天皇延喜の制、祈年祭並びに加整一口（鋏一口據一本）とあり、又河内志神社要録には、「今春日八幡（春日白山）と称し、此地の生土神とす」とある。  
境内地に稲荷神社を奉斎す。  
夏季大祭には、蒲団太鼓の担行がある。

# 堺市

▶ 大阪府にもどる



# 堺市 堺区

▶ 堺市にもどる



# 方違神社

ほうちが いじんじや

## 御祭神

方違幸大神  
素盞鳴命  
三筒男大神  
息気長足姫命

八十天万魂神

## 御神徳

方除  
厄除

## 例祭日

五月三十一日



鎮座地 堺市堺区北三国丘町二二二一  
電話 〇七二一二三三二二二六  
HP <http://www.hochigai-jinja.or.jp/>



## 神社のおすすめ



さちかけのすず  
幸雞の鈴



ほんちまき  
本粽

## 由緒

当社の鎮座地の三国丘は、昔は百舌鳥耳原又は石津原と称されていましたが、摂津国住吉郡、河内国丹治比郡、和泉国大鳥郡の三国の境界であった為に、後に三国丘と称されるようになり、三国の境で何処の国にも属さない、方位の無い清らかな地であるという考えから、境内の御土を以って作られた粽（ちまき）は悪い方位を祓うという信仰が広まり、方災除の神として全国に知られています。

崇神天皇の御代、物部大母呂隅足尼（もののおおもろすみのすくね）が勅命によりこの地に素盞鳴命をお祀りになり、神功皇后が九州から難波へと御帰還なされた時、三筒男大神（住吉大神）の御神教により、神武天皇の丹生川上の御齋禱の故事に倣って、この地に親しく天神地祇をお祀りして皇軍の方災除を祈り、忍熊王（おしくまのみこ）が率いる賊兵を平定されました。

次いで三筒男大神を住吉の地へ御鎮座の際、薦（こも）の葉に埴土（はにつち）を包み粽として奉り、方違（かたがえ）の祈禱をされた霊地であり、応神天皇の御代に素盞鳴命、三筒男大神、息気長足姫命（神功皇后）を合祀して、方違宮（かたがえのみや）と称されました。

古くから勅願の神社で明治維新の前までは毎年禁裏（皇室）より御撫物（おなでもの）の奉納があり、当社より神符と薦の葉の粽に真飴を添えて献上していました。

以上のことから古来より方災除の神として知られ、崇敬者は全国に広がり、家の新築やリフォーム工事、転宅、旅行等の場合には当社の神符及び粽を求め、方災除の祈禱を望む方が大変多く現在に至っています。

恒例の祭典では、節分祭が厄除祭として知られ、特に厄年の方が自身の年齢を火焚木（ほたぎ）に記して、御神火に投入し焼却する火焚木神事が有名で、一年の災厄から逃れられると早朝から夕刻まで絶えず参詣者が訪れています。五月三十一日に斎行の粽祭は当社の例祭で一年間に授与する薦の葉の粽を御神前に奉る特殊神事で、祭典に続いて湯神楽神事、御砂持神事を行います。

境内は世界遺産に登録された反正天皇陵に隣接し、神功皇后の御馬が繫がれたと伝わる「御馬繫之松」があります。南へ一〇〇mの「鈴山」は反正天皇陵の陪塚であり、神功皇后が方違の祈禱をされたときに黄金の雞を埋納されたと言われ、この金雞の鳴き声を聞くと幸福が来るという伝承があります。この故事により御社頭では金雞を模った土鈴「幸雞の鈴（さちかけのすず）」を授与しております。

# すがわらじんじや 菅原神社

(通称 堺天神)

## 御祭神

菅原道真公  
天穂日命  
野見宿禰  
事代主命  
少彦名命

## 御神徳

五穀豊穰  
学業成就  
除災招福

## 例祭日

九月十三・十四・十五日



## 神社のおすすめ

大阪府指定有形文化財の楼門には秀吉に仕えた水軍の武將で、天下統一や朝鮮出兵で重要な役割を担った堺の武將・小西行長が朝鮮半島から持ち帰ったとされる「傘松の幹」が保存されています。



※他朱印あり

鎮座地 堺市堺区戎之町東二一―一三八  
電話 〇七二―二三三―二四五〇  
H P <http://www.sakaitenjin.or.jp/>

## 由緒

当社は大小路以北の氏神で、常楽寺天神と称えられ、常楽寺は其の別当であった。道真公の御神体は自作木像の一つと伝えられ、延喜年間に海岸に漂着したのを民家の傍らに奉祀し後に常楽寺の僧徒等が、これを同寺に遷し、長徳三年に神殿に遷座した。同寺の鎮守であった春日明神・山王権現を相殿に合祀されたと伝えられる。

天喜二年後冷泉天皇の宣旨により石燈並に永代灯油料の寄進がなされ、文明一三年甘露寺親長参詣し、輪蔵供養に臨んだと伝わる。天文元年冬北莊附近の失火により、当社は焼失したが、志ある人々の寄進により翌年四月再建された。

天正二年の当社の配置図を見ると本社及び拝殿、大梵天堂、金堂、観音堂等々の他、仁王門及び南北の両門があり、これを以って当時の規模を伺い知る事が出来る。後元和の兵火にあつたが逐次再建につとめ、逃に承応二年四月正遷宮を見るに至った。

元禄二年の堺大絵図を見ると本社、拝殿、本堂、大梵天堂、神楽所や仁王門、他三ヶ所の門の外に、境内、北組総会所等を見る事が出来るが、天正二年の規模に比較する時、その布置の変更の他、規模の著しく縮小された事がわかる。

古来公武庶民の崇敬篤く、豊臣秀吉は天正十四年二二〇石の朱印を寄せ、又徳川幕府も歴代これにならった。特に法楽連歌の会は当時常に行かれていたと伝わっていたと伝えられている。

別当常楽寺は住吉津郷にあり、天台宗に属し仁寿二年慈覚大師の草創で、薬師如来を安置し常楽我浄寺と唱えた。長徳三年菅原大神を奉祀し、後貞享三年に輪王寺宮の令旨を拝し、威徳山清浄院と唱えた。元禄二年には慈松院、吉祥院、松南院、梅松院、普照院、薬王院、教音坊の八支院を教えたが、明治維新の神仏分離の際すべて廃絶された。斯くして当社は独立し明治五年天神社と称したのを菅原神社と改称し、翌年郷社に列した。同四〇年附近の薬祖神社、事代主神社、神明神社、附島神社、熊野神社を夫々当社末社に合祀した。例祭は古来八月三日であったが維新後九月十三・十四・十五日と定め十四日には神輿渡御があつた。しかし今次大戦の為に昭和二十年七月随神門及び末社の金比羅宮を残して建物・宝物が完全に焼失したのは誠に悲しい事である。尚、慶安年間に建立され焼失を免れた随神門は、昭和四一年府の顕彰文化財に指定された。かくの如く一条天皇の御宇現地に社殿御造営より、摂津堺一円の総氏神と崇められ、対宋時代から航海安全、学問成就の神として崇められて来たのである。

# あぐちじんじゃ 開口神社

(通称 大寺さん)

## 御祭神

塩土老翁神  
素盞鳴神  
生国魂神

## 御神徳

交通安全  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

九月十二日



鎮座地 堺市堺区甲斐町東二丁目一―二九  
電話 〇七二―二二二―〇二七一  
HP <https://aguichi.jp/>



奉拝  
令和二年八月十二日

※他朱印あり

## 神社のおすすめ

ご祭神に因む塩守や御祓守があり、安産・厄除のお守りと共に当社の推奨出来るお守り。与謝野晶子出身地として、晶子恋みくじがあり、女性に人気のみくじ。



宝永年間建立と目される当社手水舎である



疫病退散除災を願う皆さんに最適

## 由緒

神功皇后が三韓(朝鮮半島)より帰国され、塩穴松原にて忍熊王の反乱を平定すべく戦勝祈願をされた。その折老漁師が赤目魚(鯛)を献上したことを吉兆の証と喜ばれ、皇后の八重潮路をお守りした塩土老翁の御霊をお祀りせよとの詔をされ、創建されたのが開口神社であります。天平時代、行基により念仏寺が建立され、神仏習合の霊地となりました。その後、天永四年(平安末期)近郷の村々の氏神様を併合した事により、三村宮、又は三村大明神とも称されました。

室町時代には朝廷の祈願所(応永二十二年)、幕府の祈願所になり(応永三十四年)、堺の街と共に隆昌し、街の中心ともなり、念仏寺共々通称を「大寺」と称えられ、今に至るまで続いています。

またご創建以来その御由緒により、堺の湊を護る神様として崇敬されています。

## 宝物

古来勅願所でしたので、公武の崇敬厚く、寄進された宝物類は数多くあります。大寺縁起絵巻(土佐光起画、公家二十五人筆の絵巻物)伏見天皇宸翰御歌集冬百首(粟田口吉光短刀は重要文化財に指定されています。什器類は先の戦災で焼失しましたが、古文書類は数点残っております。開口神社文書として有名で大阪府指定文化財に指定されており、堺の歴史研究には欠かせない史料となっております。又行基作と伝わる薬師如来坐像が令和二年に堺市の指定文化財に指定されました。

## 社紋

当社の社紋は三つ茄で珍しい物です。元は巴紋でしたが、白鳳年間に氏地で一つの蓐に茄子が三つ出来たので是は目出度いと奉納され、それより巴が茄に変わったと伝えられています。

## 境内

神社の正門である西参道には玉を抱えた狛犬と親子の狛犬、戦災をまぬがれた江戸中期建立の手水舎などが在り、唯一戦前の面影が残る区域です。明治時代には堺市役所、府立三国丘高校、泉陽高校、第一幼稚園などが境内に置かれ、堺の発展に重要な役割を果たしました。又堺出身の、与謝野晶子の歌碑、アサヒビル・南海電鉄の創設者の一人の鳥井駒吉の碑、山本梅史の歌碑などの記念碑が多数建立立されています。

ふなまちじんじや  
**船待神社**  
 (通称 堺、湊の天神さん)

**御祭神**

天穂日命  
 瘡神社(少彦名命)  
 三宝荒神・役行者  
 豊倉稻荷社  
 菅原道真

**御神徳**

商売繁盛  
 病氣平癒  
 学業成就

**例祭日**

敬老の日の前の  
 金、土、日曜日



鎮座地 堺市西湊町一―二―一八  
 電話 〇七二―二四二―四二六八  
 H P



**神社のおすすめ**

菅原道真公が太宰府へ下る途中この地に  
 来たり。船を待つ間に、遠い祖先に当たる  
 天穂日命の祠に参拝された時に座られたと  
 される腰掛石がある。



菅原道真公 腰掛石

**由緒**

当社は字西湊にあり、天穂日命、菅原道真を祀り、古くは塩穴天神と呼ばれた。社記に依れば「道真公が左遷される時当湊にて船待し、天神地祇及び其の祖天穂日命を祭祀した所で、後長保三年一月十五日其の後裔従四位下大学頭菅原朝臣為紀が堺に来遊して、祖先の遺跡を検分し、其の筋に顔い出て道真を奉祀し、社名を船待神社と改めた。」と記されている。寛治年中、村民が社殿を再建して村の産土神とし、明治五年村社に列せられ、同四十年一月神饌幣帛料供進社に指定された。同四十年十一月五日字中筋の村社瘡神社(少彦名命)を合祀し現在に至っている。

# いしづじんじや 石津神社

(通称 上石津・戎神社)

## 御祭神

八重事代主神  
大己貴神  
天徳日神  
野見宿禰神  
菅原道真公  
外六柱

## 御神徳

除災招福  
商売繁盛  
学業成就

## 例祭日

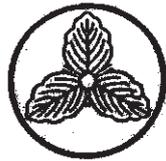
十月五日



鎮座地 堺市堺区石津町一―一五―二  
電話 〇七二―二四一―〇九三五  
HP <http://ishizu-jinja.main.jp/>



## 神社のおすすめ



〔社紋柏葉は、長寿の御神徳を表す〕



「六月臨時柏流之神事アリ  
柏流ハ川瀬ニ出テ水ノ  
平等ニ流ルル所ニ幣ニ  
本上下ニ立テ幣ノ正當  
川上ニ柏葉ヲ流シ幣ノ  
左ヲ吉トシ右ヲ凶トシ  
テ其流ルル葉ノ数ヲ以  
テ吉凶ヲ定ム」  
石津社『柏流微考』より

## 由緒

石津神社は延喜式（西暦九二七年・平安時代）神名帳に見られ、神社に伝わる古文書に「往古、事代主神が此の地に五色の石を携え御降臨され、この地に置き給う、故此処を「石津」と名付く。

第五代孝昭天皇の七年（紀元前四六九年）八月十日の神勅により祭礼を行う（日本最古の戎宮の由縁）以降、月の十日を月次祭として現在に引き継がれています。

第十一代垂仁天皇（紀元前二十九年〜西暦七十年）の御代には、出雲の国に住む野見宿禰が、当麻の蹶速と力競べで功を賞して領地を賜り、後に当宮の神官となる。「相撲」の祖とも言われ、また、天皇崩御の際の殉死の慣わしを「埴輪」によってこれに変える事を、野見宿禰が献言、土師部の祖とされ、後世、菅原姓に引き継がれる。

第十六代仁徳天皇の御代に行幸啓あり、祈年穀祭に毎年官幣使を立て給う。

第三十六代孝徳天皇白雉三年（六五二年）当宮行幸啓の際、御手洗川の御鏡落とし給う、是に依りて御手洗川を「益鏡の小川」と云う。

第四十六代孝謙天皇の勝宝元年（七四九年）行幸啓あり。同五年神主紀伊守を内裏に召し禄を給う。同天平宝元年、紀伊守に藤原朝臣の姓を給ひ、従三位大納言を授く、河内の狭山、野田の二村を神領とせられる。当時の社領は八町四方に及び、殿宇は、厳然として広大類い無く、出雲大社に次ぐ御社なれば、石津大社とも云える所以なり。その後の幾度も兵火により壮大な社殿も烏有に帰し、広大な神領も失われつも、漸次建営せり。

第九十六代後醍醐天皇行幸啓し給ひ、奉幣し給ふ、その上、神官に冠及び沓を賜る。

徳川五代将軍綱吉公より元禄十年（一六九七年）朱印地賜り、河内四郡及び堺の付近は悉く石津の氏子なりき。

第百十五代桜町天皇の寛保三年（一七四三年）神主飛騨守石津連陸野茂基に従六位下に叙せられる。

〔寛保二年壬戌の古文書、卷三・石津大社畧記より〕

たもりじんじゃ  
**田守神社**  
 (通称 三宝西一带総氏神)

御祭神

天照大神  
 豊受大神  
 稻荷社  
 波除大神  
 外四柱

御神徳

五穀豊穰  
 家内安全  
 交通安全

例祭日

十月五日



鎮座地 堺市堺区松屋町二一―一五―一  
 電話 〇七二―二三八―〇二七九  
 H P



令和二年九月一日

● 神社のおすすめ

二月三日節分に午前中は参拝者に無料でぜんざいを召し上がって頂き、夜は二回に分けて境内にて餅まきをします。  
 御幣と言つて大きな木に表に節分厄除祈願と書き裏には氏名生年月日を書き節分祭の時にお祓いをし依頼があった方にお渡ししています。



由緒

当社は本地開発者松屋作右衛門が、延享二年八月二十三日に勧請したと伝えられている。

明治五年村社に列し、大正四年十月神饌幣帛料供進社に指定された。

正月 三ヶ日

除夜の鐘が鳴ってから、元旦は夕方迄総代が交代で本殿にお務めします。  
 二日、三日に各家族には小護摩木を配布します。

節分祭

十時 祭典 各企業に神社特製の護摩木を配布し、引き続き大護摩神事で護摩木を炊き上げします。

十一時 ゼンザイを無料で境内テント内で食べていただきます。  
 夕方 二回に分けて厄除餅まきを行います。

七月二十日過ぎより 夏祭

十月五日 秋祭

十一月 七五三

# つきすじんじゃ 月洲神社 (通称 獅子の宮さん)

## 御祭神

住吉大神  
生国魂大神  
水分大神

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
大願成就

## 例祭日

八月三日



鎮座地 堺市堺区南島町二一―二五―二  
電話 〇七二―二三三―五三四八  
HP <http://www5e.biglobe.ne.jp/~tukisuj/>

奉拝



令和二年八月十日

## 神社のおすすめ

神楽獅子巡行 (八月第一日曜日)



宮入



巡行

## 由緒

当社は往昔この地は塩津、清浦、或は浅香浦又は七道浜と称えた海辺であったが、宝永元年に新たに大和川流域が開かれてより、毎年の様に出水があり、これに伴う流砂が推積して河口附近一帯に洲をつくり、やがて島の如き様相を呈するに至った。享保十三年に河洲丹北郡油上村の土橋弥五郎という人これをみて新田開発を企図し、一世の大事業に着手したが、風波の災害頻々として起り事業容易に進まず、時たま一夜霊夢を得てより元文二年九月に住吉大神、生国魂大神、水分大神の三座を勧請して崇めまつるに及び、さしものこの新田開発の難工事も順調に進み、ここに愈々その神徳の宏大無辺なることを土橋弥五郎という人感銘し、さしもの新田開発の大事業を達成することが出来た御神徳に感謝し、この新田の産土神と仰ぎ奉ったのが当社の起源である。  
明治五年村社に列し本地一円の氏神として崇敬され現在に至る。

# 神明神社

しんめいじんじや  
(通称 堺のお伊勢さん)

## 御祭神

天照大神  
豊受大神  
外十四柱

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
諸願成就

## 例祭日

九月十七日



鎮座地 堺市堺区栄橋町二一―一二一  
電話 〇七二―二三八―六九五五  
HP



## 神社のおすすめ

- ・境内のイチヨウの銀杏を納めた特殊なお守りがある
- ・蘇鉄山登山認定書交付



身体の守護健全 身代わり守



蘇鉄山登山認定書

## 由緒

御祭神は天照大神(あまてらすおおみかみ)・豊受大神(とようけおおみかみ)をはじめ計十六柱が合祀されていて、「堺のお伊勢さん」と言われている。前身の稲荷明神は豊彦稲荷神社として撰社に列せられている。

天保三年(一八三二)には宇迦之御魂神(うかのみたまのみかみ)(稲荷)・住吉大神(すみよしのおおかみ)・金山毘古大神(かなやまびこのおおかみ)を祀る旭神社とされていたが、天保十二年(一八四二)に堺奉行水野若狭守(みずのわかさのみかみ)が、この町の繁栄、発展を祈り、地域の氏神の奉斎を命じて新たに天照大神(あまてらすおおみかみ)・豊受大神(とようけおおみかみ)を主祭神として合祀し、神明社とした。これが神明神社の創建である。翌十三年に社殿が完成し、大祭が盛大に行われた。

その後、社地が狭隘(きょうあい)であったため現在地に移転を決定し、慶応三年(一八六七)に竣工、十七日間遷座奉祝行事を行い、旭神明社、新地神明社とも称された。明治三十五年(一九〇二)には社殿・境内社を修造し面目を一新、同四十二年に神饌幣帛料供進社(しんせんへいはくりょうきょうしんしゃ)に指定された。

太平洋戦争中は出征兵士を見送る家族との別れの場ともなったが、昭和二十年(一九四五)の大空襲で境内建物はほぼ焼失し、終戦後ただちに応急の復旧がはかられたが社地は狭められた。その後五十余年を経て、本格的な戦後復旧として平成九年(一九九七)年に社殿が新築され、境内整備が進められた。

### 蘇鉄山

当社に蘇鉄山山岳会が置かれており、近隣の大浜公園内の一等三角点のある日本一低い山、蘇鉄山の登山認定証を平成十一年(一九九九)から交付している。

たかすじんじや  
**高須神社**  
(通称 高須のお稲荷さん)

御祭神

猿田彦命  
宇食持命  
大宮姫命

御神徳

商売繁盛  
五穀豊穡  
厄除開運

例祭日

三月旧初午



鎮座地 堺市堺区北半町東三一五  
電話 〇七二一二三三一五二六四  
HP



由緒

堺の鉄砲鍛冶芝辻理右衛門が徳川家康の命を受け鑄造した大砲が、大坂夏の陣を勝利に導く引き金になった功績により、元和元年（一六一五年）の堺の町割りに際し二代将軍家忠より新屋敷を拝領した。そこにもともと芝辻家の宅内神であった稲荷大神を勧進した。場所が堺の鬼門に当たることから鬼門除け稲荷神社と称した。  
明治五年村社に列し、明治四十一年六月現在の社名に改称し、四三年までの間に近隣の神社三社を併合した。明治四十一年には神饌幣帛料供進社に指定された。近年に成り高速道路建設や公園营造により境内が大幅に縮小され今に至っている。

# 堺市中区

▶ 堺市にもどる



# 陶荒田神社

すえあらたじんじや  
(通称 陶器大宮)

## 御祭神

高魂命  
別根命  
菅原道真公  
八重事代主命

## 御神徳

## 例祭日

十月第二土曜日

鎮座地 堺市中区上之二一五  
電話 〇七二―二三七―〇四〇一  
H P

御朱印なし



## 由緒

当社は、延喜式神明帖に陶荒田神社二座とあるのが是である。此所で二座と云うのは、姓氏録和泉神別に「荒田直、高魂命五世孫、劍根命之後也」とあり、古くより高魂命、別根命だとし、或いは大村直の祖神魂命と高魂命だとし又陶津耳の祖神を祀っている等々衆説定まらない。神社のある所を字太田と云い、其の神宮寺である大村寺（即ち増福寺）は太田山と号するなどから見れば、太田田根子命に因があるようである。現在は高魂命、別根命、菅原道真公、八重事代主命の四柱を祀る。然し大神神社蔵の「大神分身類社抄」（交永二年大神朝臣家次の著）に「和泉国大鳥郡、陶荒田神社二座、奇日天日方命、活玉依姫命」とあり、祭神を改めるべく願い出た事もあったが認められなかった。然し「陶荒田」の称がある事からすれば、陶氏荒田氏の両祖神を祀ったものである。現在活玉依姫命は境内別社に祀られている。明治四十一年附近の十三社を合祀し現在に至る。旧社格は郷社で別名陶器大宮と云う。神宮寺増福寺は明治初年に廃絶し、現社務所は其の遺構である。

# 野々宮神社

(通称 火の宮)

## 御祭神

素盞鳴命  
火産霊神  
菅原道真公

## 御神徳

学業成就  
鎮火・発火

## 例祭日

十月五日



鎮座地 堺市中区深井清水町三八三九  
電話 〇七二―二七八―二二五七  
HP



## 神社のおすすめ

ご祭神は、鎮火と発火並びに文字の神々です。  
特に火産霊神に因んで火の宮と称され、十二月には火祭りの神事が古くから斎行されています。



## 由緒

当社の創建並びに由緒については不詳です。しかしながら、和泉国大鳥郡深井荘野々宮香林寺の略縁起によると、もと中村（現深井中町）にあった香林寺が、天正年間（西暦一五七三〜一五九一年）の兵火で諸堂悉く灰燼と化したので、当時奥山（現在地）に春日社領として広い野々宮の地に転座したという史実からみて、今から四百年以前には既に創建され、明治四年の神仏分離により現在の姿になったものです。

明治末期になって、深井の村社愛宕神社・菅原神社、久世の村社巖島神社・東山神社・八阪神社・菅原神社、西百舌鳥の村社八幡神社がご本殿に合祀されました。

また、当神社境内には、稻荷神社・春日神社・八幡神社及び巖島神社の四末社があり、伊勢神宮遥拝所も設けられています。

# はちたじんじや 蜂田神社 (通称 鈴の宮)

## 御祭神

天兒屋根命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月五日



鎮座地 堺市中区八田寺町五二四  
電話 〇七二―二七一一―三三五五

H P



## 由緒

当社の創建年月は詳らかではないが古く、和泉国神明帳大鳥郡二十四座の内の延喜式内社である。

社伝によれば、永祿年間以前は、現在地より西一丁の山麓に鎮座されていたが、三好松永等の軍が、家原寺衆徒との斗争の際に不幸にして回祿に帰し、現社地に遷ったと伝えられている。今も旧宮跡がのこっている。

延喜式に既に整鞞の大幣に預り、当国神明帳に正四位上を受けた。代々御祭神の天兒屋根命の後裔、蜂田連が奉斎してきた神社で、もとの大鳥郡内の古社として往古より崇敬されて来た事は、史により明らかである。

明治四十三年三月に旧蜂田郷領内の村社と無格社を合祀して、蜂田神社と称し、旧八田荘内の鎮守社として崇敬され現在に至っている。

当社に関する古文書及び神室等は、中世に真言律宗仏光山西林寺が、当社の別当職となつてより、明治維新におよび廢寺となつたために散逸して現存していない。

# 堺市 東区

▶ 堺市にもどる



# 萩原神社

はぎわらじんじや  
(通称 萩原天神)

## 御祭神

天穂日命  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
開運厄除  
学業成就

## 例祭日

十月十二日



「昭和の日」に行う泣き相撲



萩原天神の木鷲



秋祭りて宮入する地車

## 神社のおすすめ

平成三十年九月の台風二十一号で被災した境内のご神木を使い、神職が奉製した木鷲を毎年二月二十五日に授与している。

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

鎮座地 堺市東区日置荘原寺町七五一  
電話 〇七二―二八五―〇二九五  
HP <http://hagi10.sakura.ne.jp/>

## 由緒

当社周辺は奈良時代の僧行基の開基と伝わる萩原寺が教院の塔頭を有し、古より神仏の聖地として信仰を集めてきた。社伝に依ると、当社は天穂日命、天櫛玉命、素戔嗚尊の三柱を祀り「萩原山日置天神」と称したのが起り。天徳三（九五九）年に菅原道真公を境内地に祀ったのが現在の天神社の創始とされる。その後、南北朝の戦いで一帯は兵火に遭い、焼跡に当社を再建し、萩原山妙覚寺など萩原寺を構成する六寺院を近隣の村に遷したと伝わる。遅くとも江戸初期には「萩原山天満宮」と称され、江戸期を通じて天神信仰の高まりとともに広く崇敬を集めてきた。周辺には古墳時代の窯跡が残り、土師氏との関わりの中で当社の創建を考えることもできる。

戦後間もなくまで条里制の遺構が残るなど、古くから稲作が行われてきた当地日置荘は、古代の太陽祭祀との関連が指摘される日置部という大和政権の部民の居住地として始まった。『日本書紀』には、垂仁天皇皇子の五十瓊敷入彦命が太刀一千口を作った功勞で十種の部民を賜ったと記され、その中に含まれる日置部はこの地に居住した一群を指しているとも推察される。当社の起りりと伝わる「萩原山日置天神」の三柱のうち天櫛玉命は日置部の祖神であり、天候をつかさどる雷神（天神）信仰とともにこの地にあった日神信仰が当社創建の基とも考えられる。また、日置部の末裔とされる日置氏の氏神社でかつて日置荘西村にあった日高神社について、江戸後期の『河内名所図会』は「日祀ノ祠」と記しており、日神信仰の名残を伝えている。因みに当社社殿はほぼ真東に向いている。

中世には、丹南鋳物師集団の拠点の一つとして梵鐘を始め、灯籠、鍋、釜や農具などの鑄造が盛んに行われた。特に梵鐘は東北から九州まで全国の寺に渡り、鎌倉中期以降、この集団の一部が全国に移住し、高い技術を伝えた。朝廷の保護も受け、丞安四（一一七四）年の『吉記』と称す藤原経房の日記には、日置荘の住人が朝廷の蔵人所の灯籠の作手のため河内国司より宮廷造営にかかわる課税を免除されたことが記される。

明治末期、前記の日高神社、高松の八坂神社、丈六の春日神社、天照大御神を御祭神とする原寺の大口神社、原寺の八幡神社、北町の厳島神社、田中町及び北余部の菅原神社、稻倉魂命を御祭神とする草尾の稻倉魂神社など付近の十二社が当社へ合祀され、現在に至る。社殿は平成三年造営。末社として同五年に社殿を新築した恵比須神社を始め大口神社、豊受神社、稻倉魂神社、百蛇大明神があり、同六年には本殿に祀る竈神の奥津彦命、奥津姫命を荒神社に遷座した。同十四年に菅公千百年祭を記念し絵馬殿を新築した。境内林は楠や椎の一群が堺市の保存樹木・樹林に指定されている。

# 堺市 西区

▶ 堺市にもどる



# おとりたいしゃ 大鳥大社

## 御祭神

日本武尊  
大鳥連祖神

## 御神徳

勝運  
厄除  
諸願成就

## 例祭日

八月十三日



鎮座地 堺市西区鳳北町一―一―二  
電話 〇七二―二六二―〇四〇  
HP <https://www.ootoritaisha.jp/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

一日限定の朱印・撰社美波比神社の朱印がございませう。

境内東側には『根(値) 上がりの大楠』と呼ばれる御神木がございませう。樹根が隆起していることから「根(値) がある、価値が上がる、運気が上がる」とされ、古より商売繁盛・財運向上の大楠と伝えられてございませう。



御神木 根上がりの大楠



鳳だんじの祭 美波比神社宮入

## 由緒

### 一、由緒沿革

当社は延長五年(西暦九二七年)に完成した延喜式神名帳所載の、靈驗特に著しいと言われる名神大社であり、和泉国の一之宮であります。歴代皇室のご尊崇きわめて篤く、殊に国家的災難時に神祇官から指定された防災雨祈の御祈願社八十五社の一つで途切れることなく臨時の奉幣に預かりました。又、ご神階も清和天皇貞観三年七月には従三位に叙せられ、のち正一位にご昇階になりました。

### 一、御祭神

○日本武尊(やまとたけるのみこと)

ご祭神日本武尊は日本書紀や古事記に登場する人物で第十二代景行天皇の第二皇子です。その武勇は広く知られていますが、古事記、日本書紀によるとヤマト王権に抵抗する九州南部の熊襲(くまそ)を平定し、帰途も従わぬ者たちを征伐しながら出雲の国をも平定しました。そして、宮へ帰ると休む間もなく東国の平定を命ぜられたので直ぐに赴き、様々な災難に遭いながら何とか帰途つきませう。最後に伊吹山の荒ぶる神を倒すために山に入ったところ神の祟りに遭い病となつてしまひました。病身のまま大和を目指したのですが、都にたどり着くことができず伊勢国能褒野(のぼの)にて身罷りました。そこに陵を造り皆が嘆き悲しんでいると、日本武尊の御霊が白鳥となり陵から飛び立つたのです。最初に舞い降りたのは大和の琴弾原(ことひきのはら)、再び舞い上がり次に降り立つたのが河内国の古市、その後は社伝によると再び天空高く舞い上がり当所に降り立ちました。そこに社を建てお祀りしたのが当社の起源であり今から約一九〇〇年前の話であります。神域は千種の杜(ちぐさのもり)と呼ばれ、白鳥が舞い降りた際、一夜にして樹木が生い茂つたと言われていませう。

○大鳥連祖神(おとりのみむらじのみおやがみ)

もう一柱のご祭神である大鳥連祖神は、此の和泉国に栄えた神別である大中臣と祖先を一にする大鳥氏と言う部族の先祖をお祀りしたもので、平安時代初期に編纂された古代氏族名鑑である「新撰姓氏録」には天児屋根命(あめのこやねのみこと)を祖先とするとされていませう。このように、ご祭神の神徳は文武の神として、累代の武家の崇敬篤く平清盛、重盛父子が熊野参詣の途次当社に祈願し和歌、名馬を奉納したのを始めとして、織田、豊臣、徳川の三武将も社領の寄進、社殿の造営等を再度に亘つて奉仕していませう。また、聖武天皇の御代には僧行基が勅願によりこの地に神宮寺として神鳳寺を建立したが、明治維新の神仏分離令によつて廢寺となりました。

# くさべじんじゃ 日部神社

## 御祭神

道臣命  
彦坐命  
素戔鳴尊  
菅原道真公  
伊弉冉尊  
外一柱

## 御神徳

交通安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月五日



鎮座地 堺市西区草部二六二  
電話 〇七二一二七一一二六四七  
HP

奉拝

日部神社

令和三年七月一日

神社のおすすめ



本殿 国の重要文化財



石燈籠 (重要文化財)

## 由緒

日部(くさべ)神社(福泉支所管内)は、古くは日下部(くさかべ)の祖神、彦坐命(ひこいまずのみこと)を祀ったもの。延喜式神明帳に、「日下部神社」とある。

和泉国の豪族に、日下部首(おびと)がいた。日下部首は、開化天皇の皇子彦坐命の子孫といわれている。日下部首氏は日下部郷(昔の鶴田村・取石村・高石村の範囲と思われる)に住んでいた豪族で、一族にはおとぎ話で有名な浦島太郎もいたという。

日部神社は、彦坐命と道臣命・神武天皇を祀っている。もとは、大字(おおあざ)草部輪の内にあつた。明治四十四年六月当時の鶴田村にあつた八坂神社・菅原神社・熊野神社を合祀(ごうし)して、中世に八坂神社が鎮座していたといわれる地に移された。

日部神社には、国の重要文化財に指定されている本殿と石燈籠がある。

### 本殿

旧八坂神社の本殿。室町時代初期の建造物。本殿は、少し変わった屋根を持っている。ちよつと見ると、妻を正面にした入母屋造(いりもやづくり)のようだが、実は背面後側が入母屋造、正面は切造(きりづまづくり)になっている。昔は、建物すべてが極彩色だった。

### 石燈籠

笠に「和泉国大鳥郡草部上条牛頭天王燈籠也」「正平二十四年(一二三六九)卯月八日」という銘あり。

銘の中に、牛頭天王燈籠也とあるように、八坂神社は、素戔鳴尊(すさのおのみこと)を祀った神社。勢いの強い神で、祈願のため補正儀氏が寄進したものといわれている。

### 神門

神門は桃山時代の四脚門で、堺市指定有形文化財に指定されている。

# 石津太神社

(通称 石津の戎さん)

いわつたじんじや

## 御祭神

蛭子命  
天穂日命  
誉田別命  
八重事代主命  
建御名方富命

## 御神徳

## 例祭日

十二月十四日



鎮座地 堺市西区浜寺石津町中四―二―七  
電話 〇七二―二四―五六四〇  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は延喜式内社で、我が国最古の戎社と称されている。

当社の創建は、第五代孝昭天皇七壬申年八月十日に始めて社を建て、蛭兒命を祭祀したと伝えられている。(後に引用した寺社改帳には孝昭天皇十一丙子年八月十日としてある) 古くは孝徳、孝謙、後醍醐帝の行幸があり奉幣を賜った。歴代朝廷の尊崇篤く、神格は従五位上である。

往昔は境域八町四方あり、七堂伽藍、舞楽殿楼門等があつたが、元和、改元の兵乱等数度の兵火の難に遇い、本殿を残し一字も残らず損亡した。(寛政八年社伝古文書)

豊太閤、木村長門守重成の崇敬も厚く、大阪築城に及んで、難波津裏鬼門鎮護の神として尊信した。

明治六年太政大臣三条実美公の参拝があり、社号を染筆奉納が有り、現在第一の鳥居に掲額してある。

明治五年村社に列した。

諏訪神社、八幡神社を合祀した。

毎年十二月十四日行なわれる「ヤッサイ、ホッサイ祭」は全国的に有名である。

# つくの はちまんじんじゃ 踞尾八幡神社

(通称 勝駒八幡宮)

## 御祭神

誉田別命  
息長足姫之命  
八幡大神

## 御神徳

五穀豊穰  
安産守護  
除災招福

## 例祭日

十月五日



鎮座地 堺市西区津久野町三二〇一―二五  
電話 〇七二―二六二―三七四三  
HP



## 神社のおすすめ

義経が踞尾八幡神社に参詣した際、腰を掛けたと言い伝えられている「義経腰掛け石」が今も残されています。現在も津久野各町地車の彫物に義経をモチーフにしたものが多いためです。

踞尾郷土の記録【神社・佛閣】  
(筆者・北村禎三)より



## 由緒

当社の創建年代は古く、文徳天皇の御代に現社地に社殿を建て、誉田別命（応神天皇）を奉祀したのに始まる。太古は天照皇大神、宇迦之御魂神を奉斎した神祠があったが、文徳天皇の御代に初めて社殿を建て、八幡大神を斎祀し、後世度々改築をして、現拝殿は文化元年の建造によるものである。

当社の神域は神功皇后三韓征伐より御凱旋の際、御駐蹕なされた遺蹟であると伝えられる。古来より文武の神として知られ、源義経公が、文治元年二月八嶋に渡る途中暴風に遇い、主従一行が当地に避難し、当神社に御神鏡を奉納して、海上平安を祈願せられた。その折の義経公自筆の文書も伝えられ、又参詣の時腰をかけた義経腰掛けの石が今尚境内にある。尚義経主従が当地に滞在中は神野庄司左衛門宅に滞泊し、食事は千度講中より差上げて居り、其の時使用の食器の一部と、前記自筆の文書が社宝として伝えられている。文武の神としてだけでなく、厄除、災難除、安産、子安の神として広く世に知られ、殊に御砂持神事及御田植神事等の盛んに行われた事は社記により明らかである。

# 菱木神社

ひじきじんじや

## 御祭神

素盞鳴尊  
菅原道真公  
大年神  
天之穗日命  
天照皇大神  
外一柱

## 御神徳

五穀豊穰  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月五日



鎮座地 堺市西区菱木四―三三五〇―一  
電話 〇七二―二七一一―二六四七  
H P

奉拝

菱木神社

令和二年七月一日

## 由緒

当社の由緒は不詳である。明治五年村社に列し、同四十四年四月二十九日村社春日神社、村社山田神社、村社穂日命神社、無格社巖島神社、無格社大年神社、村社菅原神社、村社天照大神社を合祀し、同年十一月神饌幣帛料供進社に指定された。

# 堺市 南区

▶ 堺市にもどる



# たじはやひめじんじや 多治速比売神社

(通称 荒山の宮)

## 御祭神

多治速比売命  
素盞鳴尊命  
菅原道真公

## 御神徳

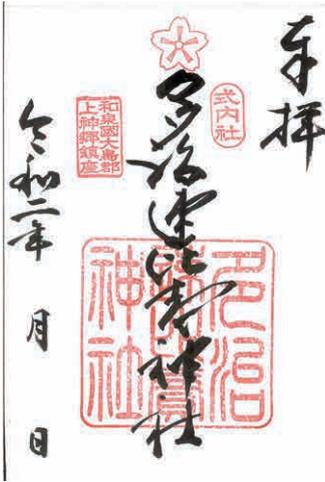
安産守護  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月五日



鎮座地 堺市南区宮山台二一三ー一  
電話 〇七二ー二九七ー〇七二六  
HP <https://tajihayamine.com/>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

近年、パワースポットとしてマスメディアに紹介され祭神である福石神(夫婦石)にまつわる昔ばなしのご利益(縁結び・子授け・金運上昇)を授かるうと訪れる人が多い。

福石社の夫婦石



えんむすび守



縁結び御守り

## 由緒

当神社は和泉国大鳥郡の延喜式内社二十四座のひとつで西暦五百八十年ごろの御創建と伝えられている。明治初年までは総福寺と併存した神宮寺であったが、神仏分離の際、神社のみとなった。現在の本殿は室町時代の建造物(天文八年〜同十年・一五三九年〜一五四一年に再建)で国の重要文化財に指定されている。

主祭神は女神・多治速比売(たじはやひめ)の命(みこと)で厄除・安産・縁結びの神として崇敬が厚く、また本殿に素盞鳴尊(すさのおのみこと)・菅原道真(すがわらみちざね)公も合わせて祀られ、特に道真公は学問の神(天神様)として厚く信仰されている。境内には十三の末社【坂上神社(式内社)・鴨田神社(式内社)・大神(おおみわ)社・住吉社・天照社・八幡社・春日社・熊野社・白山社・弁天社・稻荷社・福石社・水天宮】があり、主祭神と合わせて荒山宮とよばれている。昭和三十八年に泉北ニュータウンの造成計画に伴い、由緒ある当神社のご神威をさらに発揚すべく境内の整備、拝殿・参集殿等の大改修を行い新旧両者の統合された美しい姿が見られるに至った。

当時、社有地の大部分は住宅・公園用地として買収され、社有林からは日本最古の須恵器の窯跡(TK73号窯)が発見され保存されている。神社周辺は堺市の公園として、荒山(こうぜん)公園(こうえん)と名付けられた。そこには「花の名所づくり」の一環として市により梅林が整備され、約一四〇〇本の梅が植樹されている。当神社は荒山公園の中心として緑の森に囲まれ、四季折々の自然に恵まれた景勝の地となっております。年間を通じて参詣者が絶えない。

本殿について

様式は三間社(さんげんしゃ)入母屋造(いりもやづくり)で正面に千鳥(ちどり)破風(はふ)があり大きな向拝(こうはい)があつて、それに軒唐破風(のきからはふ)がついている。向拝柱上部中央の臺股(かえるまた)には「龍・雲・浪」左右の臺股には表面に「牡丹(ぼたん)・唐獅子(からじし)」裏面に「雲・宝珠」が、内法(うちりのり)長押(ながし)正面中央の臺股には「桐」右の臺股には「鯨(しやち)」左の臺股には「山茶花(さざんか)・松・幣(へい)」が、北と南の側面臺股には「鯉・松・滝・浪・雲」がそれぞれ彫られている。

向拝の手鉾(たばさみ)は透(すかし)彫(ぼり)で左右二個あり、向かつて右は右面に「芭蕉(ばしやう)に蟻螂(かまきり)」左面に「水に蓮」向かつて左は右面に「海藻と貝類」左面に「水に花菖蒲(はなしょうぶ)」が彫られている。また、向拝の木鼻は獸頭のような変わった珍しい形をしている。「芭蕉に蟻螂」の彫刻は全国で唯一のものと言われている。

# さくらいじんじゃ 櫻井神社

(通称 上神谷八幡宮)

## 御祭神

誉田別命  
足仲彦命  
息長帯比売命  
外十五柱

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月六日  
(行事は五日に近い日曜日斎行)



鎮座地 堺市南区片蔵六四五  
電話 〇七二―二九七―〇〇四三  
HP



## 神社のおすすめ

秋祭に五穀豊穰を願って奉納される。鬼と天狗を中心に半円形に整列し、鉦や太鼓の囃子でゆったりと踊る。鬼神の背負うヒメコは門口に挿して魔除けにする。



秋祭りのこおどり奉納



絵馬堂のこおどり鬼面

## 由緒

当社の創立は悠久の時代で、社記及び諸文献には、古代当地方に居住の櫻井朝臣の一族が、その祖先武内宿禰を奉斎したことを伝えている。推古天皇五年に八幡宮を合祀されたが、当時河泉地方に勢力を振った源氏諸氏諸族の武神として厚い信仰に依り、社運が次第に隆盛に赴むき、社号も別宮八幡宮又は上神谷八幡宮と称せられるに至った。また延喜の制には、和泉国大島郡二十四座の一として官幣に預った。

中世武家の尊崇厚く、建武四年上神城主上神常儀は社殿を造営し、元龜二年小谷城主小谷甚八郎政種は、三好氏との戦に分取りした陣鐘を奉納し、鐘撞料として御供田を献納した。南北朝時代には、当社氏は南朝に属し、上神・和田・櫻井・木寺の武將は戦勝の祈願をこめ、専ら当社の奉護に尽した。

古来上神郷の総鎮守として一般庶民の信仰厚く、殊に中世神宮寺建立以来、神仏習合の霊場として栄えた。神域は広大で社殿また荘厳を極めたが、天正五年織田信長の紀州根来寺征伐の兵火に罹り、神室記録等を焼失し、社領も没収され、社頭は一時荒廃した。その後藤清正の発願に依り、まず阿弥陀堂が再建され、元禄十五年神門を再建、享保十六年には鐘楼と室蔵が再建されてようやく旧觀に復した。

慶応神仏分離に際し、仏像、仏具、経巻は片蔵の金福寺へ移管し、阿弥陀堂は別所の法華寺へ譲渡した。鐘楼は神興庫に改造して現存している。

明治五年郷社に列し、同四十一年から四十三年にかけて上神谷村内の國神社を含め十社を合併した。昭和十七年府社に昇格された。

国宝拝殿は鎌倉前期の建築で、各部に同時代の手法を表わし、神社拝殿最古の遺構である。また府指定有形文化財神像三体は平安時代の作、同指定の応永十九年の石灯籠は府下有数の古灯である。また古文書類の内「中村結鎮御頭次第」二巻は、正平六年から明治五年まで五百二十年間の宮座記録で、神社を中心とした社会秩序を知る貴重な史料である。

神事舞踊「こおどり」は、古来國神社に伝わる舞踊で、音頭取りの歌に合せ鐘と太鼓の囃子で踊る古典的な郷土芸能で、国選択・府指定無形民俗文化財で毎年十月の例祭に奉納される。

# 美多彌神社

みたみじんじや

## 御祭神

天兒屋根命  
須佐之男命  
外七柱

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月五日



幸せなでいっちゃん



流鏝馬祭り

## 神社のおすすめ

天然記念物に指定される当社の社叢は学術的に貴重な「シリブカガシ（通称いっちゃん）」をはじめとする照葉樹で形成され、その神聖な空間はやすらぎと心の落ち着きを与えてくれます。



鎮座地 堺市南区鴨谷台一丁目四九一  
電話 〇七二―二九七―一一七九  
HP <http://mitami-shrine.com/>

## 由緒

当社は、平安時代前期に編纂された「延喜式神名帳」に記載される古社で、「天兒屋根命（アメノコヤネノミコト）」を「祭神」とし、美木多地区の土産神として、美木多の谷（和田谷）を見渡す丘陵上に鎮座されています。同じ頃成立の「和名抄」にある大島郡十郷の一つ、和田郷に鎮座されることから、古代氏族「民直（タミアタイ）」の創建と伝えられています。民直は、和太連、蜂田連、殿来連、大島連らとともに、天兒屋根命の後裔を称する大中臣氏族で、古代氏族名鑑「新撰姓氏録」「和泉国神別条」によると「民直は天兒屋根命の後裔とされ、民は美多彌（みたみ）と訓を正す」と記されており、社名の由来となっています。またその神奈備は神聖で立派な木々が多く繁っていた事から『王森』と呼ばれ、後醍醐天皇の御代には三万坪にもわたる広大な境内を持ち、社頭輪奐を極めたる神社であったと言われています。

御鎮座地の地名、和田郷（にきたのさと）は『和名抄』（九三五年）に記載されており和田連（にきたのむらじ）氏族が深い関わりを持っています。和田連は天兒屋根命の後裔と記され、平安時代の末期には和田氏の祖先である大中臣助正が河内国矢田部から移り、田畑の開発を進め、助正の子、助綱が和田郷を子々孫々まで相伝するため河内国金剛寺へ寄進し、和田荘として自らが荘官となったと伝わっています。

和田氏は在地の豪族として、嫡子惣領を中心に、庶子・一族、領民を組織して武士団を形成しており、武芸奨励のため鎌倉時代頃から流鏝馬を行っていました。和田家古文書『沙弥性蓮処分状』においても、鎌倉時代の永仁二年（千二百九十四年）にはすでに美多彌神社における流鏝馬（やぶさめ）の神事について記載があり、流鏝馬神事用の田地（武射免田）の支配についても取り決められています。これは単なる軍事訓練ではなく、祭事として行うことにより一族と和田荘の領民の結束を図るといふ色合いも併せ持っていました。

天正五年（千五百七十七年）雑賀衆制圧の兵を起こした織田信長により神社は焼失しますが、文禄元年（千五百九十二年）、和田道讃らによつて「牛頭天王宮」として再興されます。流鏝馬も近世的な宮座仲間に引き継がれていきますがすでに軍事色が消え、邪気を払い五穀豊穰・無病息災を祈る祭事として続けられてきましたが、明治以来の近代化の中で急速に失われてしまいました。

この地域に暮らす住民の郷土愛と連帯感を高め、次世代を担う子どもたちにとつても心の糧となるような、地域環境の整備「ふるさとづくり」が進むことを願って、平成二十六年三月二十九日に流鏝馬祭りが復活。以来、次世代継承者の育成と四年に一度、流鏝馬祭りを斎行しています。

# 堺市 北区

▶ 堺市にもどる



# も ず は ち ま ん ぐ う 百舌鳥八幡宮

## 御祭神

応神天皇  
神功皇后  
仲哀天皇  
住吉大神  
春日大神

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
安産守護

## 例祭日

旧暦八月十五日

鎮座地 堺市北区百舌鳥赤畑町五―七〇六  
電話 〇七二―二五二―一〇八九  
HP <http://www.mozu8.com/>



## 神社のおすすめ

当宮は令和元年にユネスコ世界遺産登録された百舌鳥古墳群の中心に位置し、境内には境内末社として仁徳天皇をお祀りする若宮社が鎮座する。



楠樹



若宮社

## 由緒

所伝によれば、神功皇后が三韓征討の事終えて難波に御帰りになった時、この百舌鳥の地に御心を留められ幾万年の後までもこの処に鎮まって天下泰平に万民を守ろうという御誓願を立てられ、八幡大神の宣託をうけて欽明天皇の時代にこの地を万代（もず）と称し、ここに神社を創建してお祀りされたのが当宮の創始と伝えられています。その後社運次第に隆昌に赴き、朝野の崇敬厚く、王朝時代には社僧四十八ヶ寺、社家三百六十人、神領寺領八百町歩を擁していました。

古い記録としては、現在は滋賀県長浜市の勝福寺にある応安六年在銘の古梵鐘がもとは当宮の什物であり、その銘文中に「近衛天皇の仁平年間（十二世紀中頃）に本社の梵鐘が鑄造された」と記されています。また、山城国石清水八幡宮所蔵の古文書には、後白河天皇の保元三年（一一五八年）に、当社が石清水八幡宮の別宮であり、建治年間には、三百石の年貢米を本宮に納めていたと記されています。

また、恒明親王の王子である二品探勝親王が南北両朝戦乱の世を憂い当宮に参籠されたことから、当時は皇室の御帰信の深かったことが知られ、さらに、前記の梵鐘を奉納したのは当時和泉の領主であった九州の豪族大内氏であり、武家の崇敬も厚かったことがうかがえます。その後、大内氏の和泉に於ける兵乱や、大阪夏の陣の兵火等度重なる災禍を蒙り次第にその壯観を失い、什宝・古文書等も多く散逸しました。しかし、その後もなお当宮は地方信仰の中心として重んぜられ、江戸時代には毎年の例祭に堺町奉行の参向が定められ、また、大阪城代の交替の際には、必ず当社に参拝するのが例とされていました。近くは明治八年大久保利通卿が参拝され、拝殿の額面を揮毫されました。

社殿は江戸時代の建築であり約一万坪の社域には樹木が生い茂り、中でも社前の巨木楠樹は樹齢約八百年で枝葉八方に拡がり、大阪府の天然記念物に指定されています。また、例祭である月見祭は氏子地域の大大鼓九台子供太鼓九台が境内狭しと勇壮に練りまわる堺屈指の太鼓祭りとして知られており、近郊より数万人の出入を得て大きな賑わいを見せます。

# かなおかじんじや 金岡神社

御祭神

伊邪那冉命  
住吉大神  
天兒屋根命  
巨勢金岡  
外

御神徳

例祭日

十月十日



鎮座地 堺市北区金岡町二八六六  
電話 〇七二―二五八―二二二七

H  
P



## 由緒

当社の起源については記録では明らかではないが、伝説によれば光孝天皇仁和年間に居民安全年穀豊熟を祈らんが為、これを創立し住吉大神を祀り、のち素盞鳴命、大山咋命を配祀し更に一条天皇の時に臣勢金岡卿を合祀し、金岡神社と称することとなった。当社は全日本における画聖「臣勢金岡卿」を祀る唯一の神社で、金岡卿は言うまでもなく日本画の大祖である。清和、陽成、宇多、醍醐の四朝に歴仕し大納言に至り宮中に召されて、障子、屏風等に画を描いた。

伝説によると本社の所在地は金岡卿の隠棲の地であって神社の東方約三〇〇〇米の所に金岡淵即ち金岡卿筆洗の池というのがある。河内名所図会にもこの事が載せられてあるが、察するに金岡卿は晩年致仕の後にこの地に隠棲して丹青を樂しみ、風月を友としていたのであろう。臣勢氏素図並に古今著聞集などによると卿の略伝があるが、卿がこの神社の祭神として祀られたのは、一条天皇の御代に勅命に依ったものである事が明らかにせられている。この点から考えて見るに、この地が金岡卿と古い縁故のあった土地であることが疑われない。

大正末期から当社では御祭神である臣勢金岡卿の神慮を慰めるため毎年五月三日午前十時より「画神祭」を行い、式後社務所で席上揮毫会を開催している。

# 華表神社

かひょうじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
誉田別命  
宇賀御魂命

## 御神徳

## 例祭日

十月五日



鎮座地 堺市北区宮本町五七  
電話 〇七二―二五二―〇九二三  
H P

御朱印なし

## 由緒

社記に依れば御祭神素盞鳴命は仲哀天皇九年十二月神功皇后が筑紫に凱旋し、翌年摂津国難波に至った時鎮座、又宇賀御魂命は嵯峨天皇弘仁元年、五穀成就のため沙門空海が勧請し、後醍醐天皇元享元年、山城国男山若宮八幡を勧請、勅願所となり供料三百石を寄進されたと云う。神宮寺（東光山薬師寺）の外、多聞院、東之坊、明王院、威徳院、西之坊、乾坊、無量寿院、等七僧坊もあり栄えたが、織田信長の時供料は没収され以後衰微した。明治維新の折、寺は廢絶した。明治五年村社に列せられ、同四十一年附近の数社を合祀した。

# 堺市 美原区

▶ 堺市にもどる



# 菅生神社

すごうじんじや  
(通称 菅生天満宮)

## 御祭神

天児屋根命  
菅原道真公  
菅田別命  
素盞鳴命  
天照皇太神  
外八柱

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

四月五日



鎮座地 堺市美原区菅生一七八―一  
電話 〇七二―三六一―〇三二三  
HP



## 神社のおすすめ

平成三年より「社殿御造営事業」を始め、三百五十年ぶりに本殿を解体、保存修理を行う。  
合せて新社殿は総檜造り、銅板葺きとして平成二十年五月竣工した。

## 由緒

上古この地は沼地が多く、菅が一带に生えていたので菅生（須加不）と称した。仁徳天皇が難波京からこの地に丹比大道を造営され、反正天皇がこの近くでご誕生になってから多遅比（たじひ）の地名が起り、丹比郡（たじひのおり）と称した。平安期の中に丹比郡が丹南、丹比の二郡に分かれて菅生は丹南郡に属した。鎌倉時代の頃には野田庄菅生郷と称した。新撰姓氏録によると河内の国には、天児屋根命を祖とする中臣氏が多数居住していて、その一族が菅生の地に本拠を構えてから菅生氏と名乗り、豪族としてこの地を支配する外、天平一八年（七四六）菅生朝臣の姓を賜って檢非違使や神琴師になって朝廷に重用された。その菅生朝臣が祖神である天児屋根命を氏神として祭祀したのが菅生神社の創始である。

建武・暦応年間に二度の兵火に罹り、社殿・什宝ごとく焼失したため創立、沿革は明らかではないが、「新抄格勅符抄」によれば大同元年（八〇六）の牒に、天平宝字八年（七六四）に菅生神に河内国で封「一戸」を奉られと見え、「三代実録」には「天安三年（八五九）正月二十七日甲申 従五位下より従五位上に進階した」と記される。さらに醍醐天皇の命により作られた「延喜式」神名帳では式内大社に列し、月次祭、新嘗祭に官幣に預かった。

当社所蔵の北野天神縁起絵巻三巻の奥書によれば、この絵巻は応永三十四年（一四二七）三月誓願寺住職杲盛が願主となり野田庄惣社高松宮に奉納されたもので、絵巻の中には道真公が境内の「菅澤」のほとりにから、忽然と誕生されたという説に基づく描写があり、当時天神信仰が全国的な風潮となっていたのに乗じて、天神を勧請・配祀して菅生天満宮と称するに至った。

ちなみに延宝八年（一六八〇）の菅生天神社縁起には、「河内国丹南郡野田庄菅生宮並高松山天門寺」とあり、野田（堺市東区北野田・南野田）の里人が氏神として崇めたのである。爾来菅生天満宮の神威が俄然宣揚されて、広い地域からの崇敬をあつめるに至る。現在残っている宝物類は、殆んどこの時代のものである。

平成になり、当社の本殿は、堺市内に所在する一間社春日造軒唐破風付檜皮葺として、学術的見地から貴重なものであると認められ、平成十八年四月堺市の指定有形文化財として指定された。

（末社）

菅生えびす神社 菅生稻荷神社 余部神社 大歳神社 琴平神社 八幡神社  
御霊神社 菅生明神社

堺市美原区

# たんびじんじや 丹比神社

(通称 若宮)

## 御祭神

彦火火出見尊之御弟火明命  
多遲比瑞齒別命  
外五柱

## 御神徳

家内安全  
生生躍動

## 例祭日

十月十日



鎮座地 堺市美原区多治井一五七番地  
電話 〇七二一三六一〇六一六  
HP <http://www.tampijinja.com/>



## 神社のおすすめ

第十八代反正天皇ご誕生の地として親しまれ、産湯に使われたという井戸がある。



瑞井の井戸



夜泣石

## 由緒

創建は古く諸説あるが、およそ大和・飛鳥時代と推定されている。

丹比神社・丹比大寺・黒姫山古墳を結ぶ一帯の氏族（丹比連）多治比氏が祖神で火明命を祭祀した。十七代仁徳天皇の御子、若君、十八代反正天皇が当地でご誕生と成り、当時に堀掘えた井戸（瑞井の井戸）で産湯を使い流した淵の周りで沢山の多遅の花が咲いていた。その様子から後に多遲比瑞齒別命として御祭神とした。その後、若君（反正天皇）ご誕生の地となった事から通称若宮と親しまれる様になった。又、幼少の頃には秘話もあり、父、仁徳天皇没後に若君が毎日の様に昼は伏し、夜は泣き崩れていた様子を見て、あまりにもお気の毒であったので、本殿の周りの堀の内側に五輪塔（石を積み重ねた物）を建立された。その後泣き崩れる事は無かったと伝えられている。（夜泣石）

三世多治比真人・多治比古王・嶋多治比等の奈良時代に皇室に忠勤をして幾度も神宝幣帛を捧げられ、平安時代初期に延喜式に式内社と定められ、時を同じくして神木（楠）を本殿の後ろに植樹された。

本殿前から真つ直ぐに伸びる約100mの参道は、戦前までは松並木が立ち並び絵師・小泉斐（あやる1770〜1854）が一八二二年に掛け軸に描いており、陸の天橋立と讃えられ、馬場先と呼ばれた。その後、台風の被害などにより多数倒木し、桜に植え替えられた。桜並木は近年まで桜のトンネルと愛され、桜の名所となっていた。

# ひろくにじんじゃ 廣國神社

## 御祭神

広国押武金日命  
素盞鳴命  
石凝姥命  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
工業繁栄

## 例祭日

十月十日



鎮座地 堺市美原区大保二四八

電話 〇七二一二八五〇二九五

H P <http://hagi10.sakura.ne.jp/hirokuni/hirokuni>

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ



「日本御鑄物師発祥」の石碑  
鑄物生産者や  
地域住民が参加  
して河内丹南鑄  
物師の功績に感  
謝する鍋宮祭を  
毎年秋に執り行  
っている。



黒姫山古墳の石室天井石と伝わる巨石



宮入する秋祭りの地車

## 由緒

当社の創建年代は不詳だが、伝えでは廣國押武金日命（安閑天皇）を祭神として一祠を建立した。鎌倉時代の後醍醐天皇の御代には蔵王堂を建立して蔵王権現を祀り、付近一帯からの崇敬を集めた。安閑天皇は憤怒姿の蔵王権現と同神と説話に記されるように、山岳信仰の神仏として崇められた。当社に祀られていた蔵王権現像は明治の神仏分離で御厨子共に宮元の太井地区に遷されてきたが、数年後に当社に還御される計画。明治末期の合祀令により大保地区の八坂神社（鍋宮大明神含む）及び今井地区の菅原神社が当社に合祀され、現在は三地区の鎮守として崇敬されている。

前記、鑄物師の始祖神三柱（石凝姥命、天兒屋命、猿田彦命）を祀る鍋宮大明神が尊崇されてきたように、当地は河内丹南鑄物師創始の地として知られ、古代より梵鐘、灯笼、鍋釜や農具などが盛んに製造されてきた。『河内鑑名所記』には「河内鍋のはじまりし所なりといひ伝えり」、『河内名所図会』には河内鍋の古跡として「昔、此所にて多くの鍋釜を鑄て諸国に商う」、『河内志』には「鍋 大保村に古昔多出」などと記され、「大保千軒」と言われるほど鑄物師の家が建ち並び繁栄した様子を伝えている。

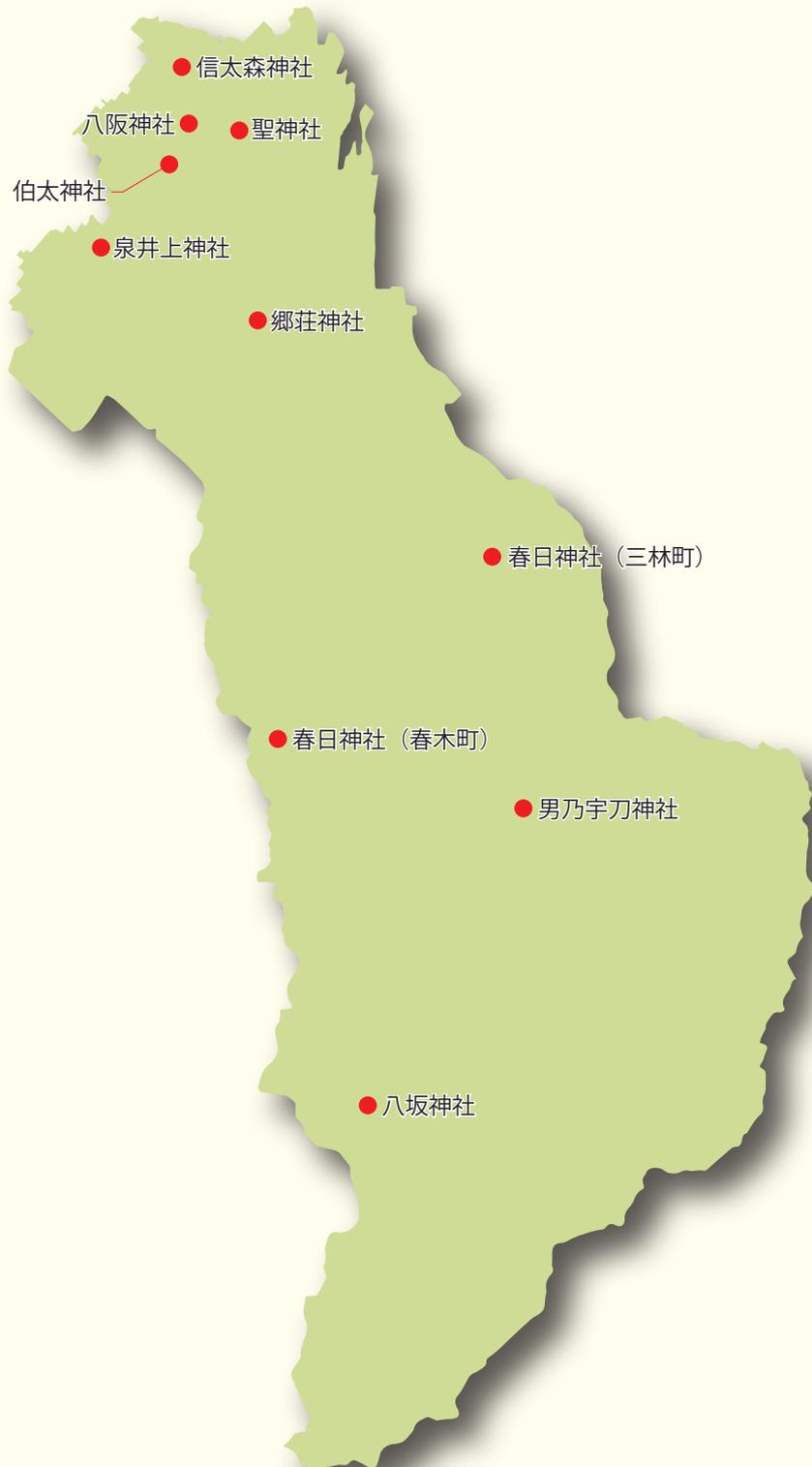
同鑄物師は朝廷より課税免除や全国の自由往来が許されるなどの特権が与えられ、全国的に活動した。十二、三世紀の梵鐘の六割超が同鑄物師集団の手によるものとされている。室町時代には、同鑄物師集団は全国へ移住し、各地で高度な鑄物技術を広めたと伝えられる。江戸期には当地での生産が絶えていたが、鍋宮大明神は当時も存在し崇敬されていたことが村明細帳や絵図に記される。

近年の付近の発掘調査で大きな梵鐘の鑄型を始めとして鑄物に関する遺物が数多く発見されており、こうした歴史が学術的に裏付けられてきた。歴史に名を残す河内丹南鑄物師や鑄物発祥の地を後世に伝えようと、昭和四十四年に「旧跡鍋宮大明神」碑、昭和五十三年には「日本御鑄物師発祥地」碑がそれぞれ多くの有志の力で旧社地と伝えられる場所に建立された。

その他、境内には、末社として役小角との縁が指摘される三十八社があるほか、当社の南約五百メートルに位置する黒姫山古墳の石室の天井石と伝わる方形の巨石が展示されている。

# 和泉市

▶ 大阪府にもどる



# 泉井上神社

いずみいのうえじんじや

## 御祭神

独化天神  
神功皇后

## 御神徳

## 例祭日

十月五日



鎮座地 和泉市府中町六二一三三八  
電話 〇七二五―四四―八一八二  
HP <http://www.izumiinoue-j.org/>



## 由緒

当社の祭神独化天神は、天之御中主神、高巢日神、神産巢日神とも称え、上古より当地に鎮座、国土守護神、又殖産興業の神として神徳を垂れ給う。 霊亀元年和泉五大社、大鳥・穴師・聖・積川・日根の神を合斎、御諸別命も祀って、国元大社或いは和泉大社とも云う。 神功皇后は仲哀天皇の御即位二年四月、新羅への途上当地をお踏みになり、その当時「清水」を喫し給い、更にその処を整美されたので、飛泉滾々として湧出、瑞祥と賞賛され霊泉と云う。 創倉時代その縁をもって、神功皇后、仲哀天皇、応神天皇、從駕神四五柱を合せ奉斎した。 ことに神武御東征を祈り給い、又元正天皇は当社によって、国名を和泉と改められ、国生みの宮と称し、和泉国総鎮守としてその名が著われた。 聖武天皇は天平十四年六月に、和泉国の五大社の兼務を命ぜられ、大祭には国中の神輿を当社に渡御させ、神事を執り行なわれた。 故に五大社は元禄十五年まで、ことに大鳥大社は明治維新まで兼務することとなった。 皇室をはじめ、武将及び一般国中の崇敬が極めて厚く、古来しばしば神異があつたが、その都度勅使の奉幣があつた。 御社領については、霊亀天和泉諸上（現宮司田所の祖）勅命により、珍努県主倭麿の領主を世襲し、祭主職となり、数百町の神田神戸を領有し、社寺を繪覚し、代々勅使代を命ぜられ近郷を領して、中世武職を兼ね、国府城、加守城に居し、更に社領六八〇〇石を保有した。 重要文化財の和泉総社本殿、史跡の和泉清水重要美術品の石造板状塔婆（南朝戦死者の碑）、和泉国衛跡等がある。

# 聖ひじりじんじゃ神社(通称 信太明神)

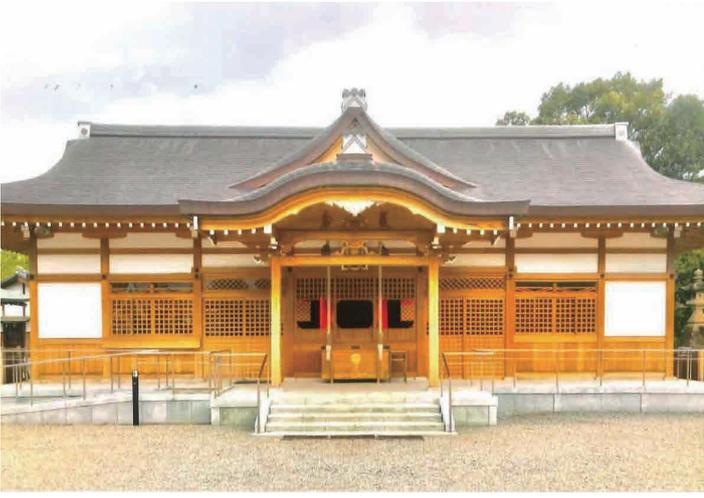
## 御祭神

聖大神  
外五柱

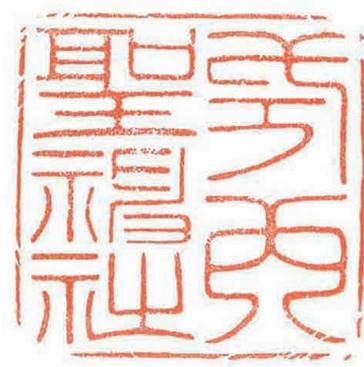
## 御神徳

## 例祭日

五月十日



鎮座地 和泉市王子町九一九  
電話 〇七二五―四一―一五四五  
H P



## 由緒

当社の創建は白鳳三年秋八月十五日で、永く国家鎮護の神として、信太首が斎き祀つたものであり、信太聖神、又は信太明神とも云う。 靈龜二年河内国を分けて、和泉の国を置かれた時、和泉五社大明神の内第三位に列せられた。 天平四年の大早に際し、当国五社を始め、井の八幡宮に奉幣があつて、降雨を祈願された時に、当社に領地若干を寄せられた。 貞観元年五月七日官社に列し、八月丙申従四位下を授けられた。 昌泰元年宇多上皇の御幸があり、御衣を納められた時、菅原道真公が供奉されたと伝えられている。 延喜の制、祈年祭に鉞一口を加え奉られ、後年後白河法皇御宸筆の額一面を奉納された。 慶長九年右大臣豊臣秀頼公が、片桐且元を普請奉行として、本殿を造営され、壮大な権現造りで、構造精微を極めた。 大正十三年四月特別保護建造物（国宝）に指定された。 昭和九年九月の第一次室戸台風は大被害を受け、昭和十二年二月より約十一ヶ月を以って大修理を完了して、現在に至っている。（現在は重要文化財） 境内は往昔七七七、六〇〇坪で、旧信太山台地を有した。 又明治維新前まで、萬松院大蔵寺等の宮寺があり、五重塔、鐘堂等があつたが、神仏分離の際に、寺は廃寺となった。 文明十五年二月二十八日の銘のある、重要美術品に指定された神輿がある。

# 男乃宇刀神社

おのうとじんじや

## 御祭神

彦五瀬命  
神日本磐余彦尊（神武天皇）  
五十瓊敷入彦命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
諸願成就

## 例祭日

十月第二日曜日



御本殿



神輿

## 神社のおすすめ

世界における真実への思いを照らす  
神社であり、本気・とらわれない心・  
前を向く心、そして思いやりの心と実  
行力を育む神社です。



鎮座地 和泉市仏並町一七四〇  
電話 〇七二五九二一〇二四五  
HP

## 由緒

創建年代元慶年間（八七七〜八八五年 平安初期・陽成天皇の代）  
現神社再建年代（一八〇四〜一八一八年 江戸末期・光格天皇の代）

男乃宇刀の男乃は兄乃にて皇兄彦五瀬命を、宇刀は弟にて神日本磐余彦尊即ち人皇第一代神武天皇（在位紀元前六六〇〜紀元前五八五年）を意味している。そして、五十瓊敷入彦命は垂仁天皇の代（紀元前二九〜紀元後七〇年）に横山の地を領せられた縁故がある。いずれも創建時に奉祀された。

本社は、当初は延喜（九〇一〜九二三年）式神名帳に記された男乃宇刀神社二座のうちの一で、御祭神は彦五瀬命と五十瓊敷入彦命であり上之宮と称されてきた。もう一座は、下宮町今の和泉市総合スポーツセンターの地において、御祭神は神武天皇であり下之宮と称されてきた。

由緒として、神日本磐余彦尊は日向国（現宮崎県高千穂）から日本の統一のため兄の彦五瀬命とともに東へ向かい大和を平定しようとした。（神武東征）紀元前六六〇年に橿原宮で即位初代天皇となられるのであるが、生駒の地においての長隨彦との戦いの時には房五瀬命は矢を腕にうたれ重傷を負い立て直しの為退却することとなった。その途中においてこの横山の地に立ち寄り、これを当時この地を治めていた横山彦が奉迎し今の狩山（現榎尾中学校の裏手）に行宮を営んだ、とある。狩山という地名もその時に神日本磐余彦尊が狩りをしたといわれる事からついた地名である。また、彦五瀬命が矢傷を洗われた所は坪井町澤家にある解気井であるといわれている。こうしたかかる深き縁をもつて元慶年間に神社を創建したのであった。

また、明治維新まで境内には「常願寺」という宮寺があり鎌倉初期に宇治川合戦先陣の功賞で横山荘を授けられた佐々木高綱の建立といわれ当寺を菩提所としてのち出家し住職をしたといわれている。

男乃宇刀神社二座ともに文禄年間（一五九二〜一五九六年）に牛頭天王を奉祀する事となり、上之宮座においては新しく八坂神社が建てられ、下之宮座においては御祭神神武天皇を同下宮町宇切坂に遷し奉りて、その後は八坂神社と称し奉るようになった。ただ明治四十五年に還幸し奉りて八坂神社に合祀した。そういう経緯を経た後、昭和二十年九月三日八坂神社下之宮座男乃宇刀神社を当上之宮座男乃宇刀神社に合祀した。そして下之宮座は、旧横山中学校（後に横山高校）の建設のためその敷地を譲り、社殿は堺市の方違神社へ移譲された。（現在は建て替えられている）

秋季例大祭では神幸祭がある。神輿二基を十二町の内の担当町が輪番で横山の地を廻る。

# かすがじんじや 春日神社

(通称 池田春日神社)

## 御祭神

武甕槌命  
經津主命  
天兒屋根命  
比賣大神  
外三十二柱

## 御神徳

家内安全  
勝運隆昇  
災難消除

## 例祭日

十月十日



和泉市



## 神社のおすすめ

一の鳥居からまっすぐ百五十メートルの表参道の両脇や社殿周りには、六世紀から七世紀ころの古墳が点在しています。



鎮座地 和泉市三林町五九一  
電話 〇七二五―五五―〇六二七  
HP <https://kasuga-jinja.org/>

## 由緒

神社の草創期前、古墳時代後期(六・七世紀)に構築された古墳が本殿裏や参道両側に現存しています。これらの古墳群は地元の有力な氏族を祭祀したものと考えられています。その後の奈良時代、神護景雲二年(七六八年)常陸国より武甕槌命・經津主命が大和国の御遷宮のみぎり、近郷の民はこの地に集い頓宮を造営しました。次いで、河内の天兒屋根命、比賣大神を祭祀して江戸期には春日大明神とも称されました。

御鎮座の地は官地にして御林(みはやし)、上林(かみばやし)とも称され、固有の神として氏神、産土の神、鎮守の社となり広く生活の中に伝承されてきました。江戸時代の享保三年六月十九日、神祇官より正一位の神位を授かり、明治に入ってから南池田村、北池田村(七か村)の村社合祀し、池田郷の郷社として多くの氏子崇敬者に敬されるに至ります。

### 光明皇后伝説

当神社の氏地は、光明皇后誕生の地と言われており、光明皇后伝説が今日まで語り継がれています。白い鹿から生まれた子は光明子と名付けられ、横尾山の施福寺参りをしていた藤原不比等が、田植えをしていた光明子が光り輝いて見えたことから、後にこの子を養女として迎え、奈良の都に連れていき、聖武天皇の御妃となりました。今でも田植えをしていた田を「照田光田(てるたひかるた)」といい、都に行く時に母親の白い鹿が見送りに来たという室堂町の坂は、「女鹿坂」と呼ばれています。

昔から当社の氏地は春日大社や藤原氏の勢力が及んでいたといわれており、これが春日神社の創建に大きく関与していると思われる。

### 境内社

明治末期に和泉町から式内社である穂積神社と万町から意賀美神社が末社として合祀されました。

# かすがじんじや 春日神社

## 御祭神

武甕槌命  
経津主命  
天兒屋根命  
比売大神  
惠美須大神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
交通安全

## 例祭日

例大祭十月十日



鎮座地 和泉市春木町六一五番地  
電話 〇七二五―五四―〇三五一  
H P <http://kasugajinja.web.fc2.com/>



## 神社のおすすめ

古来、宗福寺という神宮寺があり、唐から帰朝された空海上人が大同三年に一冬を過ごされた後は、冬堂と称されるようになった。

## 由緒

当社は称徳天皇神護慶雲二年に、鹿島明神を常陸国より大和国三笠山に遷座の途次、当春木庄に暫らく駐輿されたのを機会に、当庄の住人であった藤原氏が、当所に社殿を設けて春日大神を鎮座したのがはじめである。

尚古来には神宮寺も在り、空海上人も籠居したことがある冬堂もあり、当地方最も神威顕著で、建武の朝後醍醐天皇より、正一位四所明神の御勅額を同松尾春日神社に下賜された。

古来より南北松尾庄の総社として、明治四十一年十月各神社合祀され、同四十二年八月神饌幣帛料供進社に指定された。

昭和四十四年十一月御鎮座二二〇〇年祭を執行した。

撰社に若宮八幡神社（品陀別尊）、元物部布留神社、国神社（大国主神）、八雲神社（須佐男神）がある。

# しのだのもりじんじゃ 信太森神社

(通称 葛葉稲荷)

## 御祭神

宇迦之御魂命  
素盞鳴尊  
猿田彦命  
若宮葛乃葉姫  
外二柱

## 御神徳

商売繁盛  
学業成就  
開運招福

## 例祭日

旧暦二月初めの午の日



樹齢二千余年の楠樹（ご神木）



心願成就のきつねさんの絵馬

樹齢二千余年の楠木です。枝ぶりが四方に繁茂しているので千枝（知恵）の楠、また、木の幹が根本より二つに分れているので夫婦楠とも云い伝えられている。木を触り願うと叶うといわれている。

## 神社のおすすめ



鎮座地 和泉市葛ノ葉町一―一―四七  
電話 〇七二五―四五―七三〇六  
HP <http://www.kuzunoharai.net/>

## 由緒

当社の創建の年代は詳らかでないが、泉州志に、中村森田氏の居住に老楠あり、古より世に賞せらるる千枝の楠なり、と当社のこと記されているところから、元禄の頃ではないかと思われる。当社は「恋しくは尋ね来て見よ和泉なる、信太の森のうらみ葛の葉」の一首を以て世に知られている。伝えに、往古撰津国住吉の里に安部保名という巨人がいた。俊児を得んことを当社に祈り、一夜疲れて社頭に眠っていると、夢に白衣緋袴の神女が出現して告げて云うに、「汝が家に偶然美人の尋ね来るあらば留めて妻とすべし、必ず汝が祈願を充すを得んと。翌日の黄昏果して一処女が来つて宿を求めたので、保名は神の託宣せられたのは是れであろうと、留めて夫婦のちぎりをむすんだところ、幾許もなくして懐妊し、月満ちて男子が誕生したので、保名大いに喜んで掌中の珠として愛育するに、百余日を経て妻は障子に前記恋しくばの一首を遺し、白狐と化して姿をかくした。其の子は即ち陰陽博士安部晴明である。爾来当社を葛の葉の社と尊崇し、特に子のない人及び産婦の参拝の多いのは此の故であると。然し古小説史稿に依れば、是れは小説蘆屋道満大内鑑より出た俗説で、大内鑑は簗籠鈔に安倍晴明の母は信太の森の狐とあるを骨子とし、足利時代の小説小幡狐を翻案したもので、且つ楠を葛に転じて作り代えたものであるという。境内は僅に二四〇坪に過ぎないが、森田某の邸宅は挙げて社域である状をなし、殆ど二、〇〇〇坪にもぼる。傍に「姿見の井」という井戸があり、神の美人に化現して姿を映するものと伝う。本殿の外に拝殿、神饌所を存し、末社に楠本神社、巖島神社、白狐社がある。四囲は幽凄を極め、狐塚は其の附近にある。明治五年村社に列し、同四十年一月神饌幣帛料供進社に指定せられ、同四十二年一月十四日字茶の木原の村社菅原神社、家西之軒の同大森神社、大字富秋字堀の内の同菅原神社、大字尾井字雨降の同小竹神社、同大字々大門前の同原作神社、大字上代字策の同八坂神社、大字舞字村の内の同菅原神社、大字上同太立会字水原の水分神社、大字上字十六善神の無格社十六善神社、同大字々東村裏の村社菅原神社、大字王子字王子の同篠田王子社、大正四年六月二十三日大字尾井字天王の同奮府神社を合祀した。

# 八阪神社

やさかじんじや

御祭神

素盞鳴尊

御神徳

例祭日

体育の日



鎮座地 和泉市幸二一四一六  
電話 〇七二五十四一三九五三  
H P



## 由緒

当社の創立は文政三年九月であるが、由緒は詳らかでない。明治五年村社に列し、同四十四年十一月神饌幣帛料供進社に指定された。

明治五年村社に列し、

# 郷莊神社

ごうしょうじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
奇稲田姫命  
大年神  
品陀別命  
菅原道真

## 御神徳

## 例祭日

十月五日



鎮座地 和泉市阪本町五一二  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

天平七年の創立と云われる。当地はもと郷莊大宮、祇園社、又は八阪大明神と称え、領主阪本氏は代々此の地に居城し、産土神として崇敬特に厚く、しばしば祈願のあつた古社であると云う。郷莊の氏神として以来一般の信仰が厚い。

# 伯太神社

はかたじんじや

## 御祭神

伯太比古命  
伯太比咩命  
外九柱

## 御神徳

## 例祭日

十月五日



鎮座地 和泉市伯太町五―二―三  
電話

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社は白鳳二年の創祀と伝え、俗に天神社又は博多神社ともいう。延喜式内社である。又飛地境内社の式内丸笠神社は神功皇后が小竹宮行宮に遷られし時、勅命により国内平定につくされた武将小竹祝丸、天野祝丸の墓二つをつくられ、境内は一大車塚をなしている。ここに御諸別命（和泉国皇大神）をまつる。白河院の祈願所となる。鳥居、影向石、磐境、御車縄等の古跡がある。領主渡辺氏をはじめ一般の崇敬が厚い。白河院の熊野神を祀られた縁により、素盞鳴尊を合斎し社殿を建立せられた。

# 八坂神社

やさかじんじや

## 御祭神

建速須佐之男命  
惠美須大神  
天照皇大神  
大年大神  
大山祇命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
病気平癒

## 例祭日

十月五日



鎮座地 和泉市父鬼町二八〇  
電話

H  
P

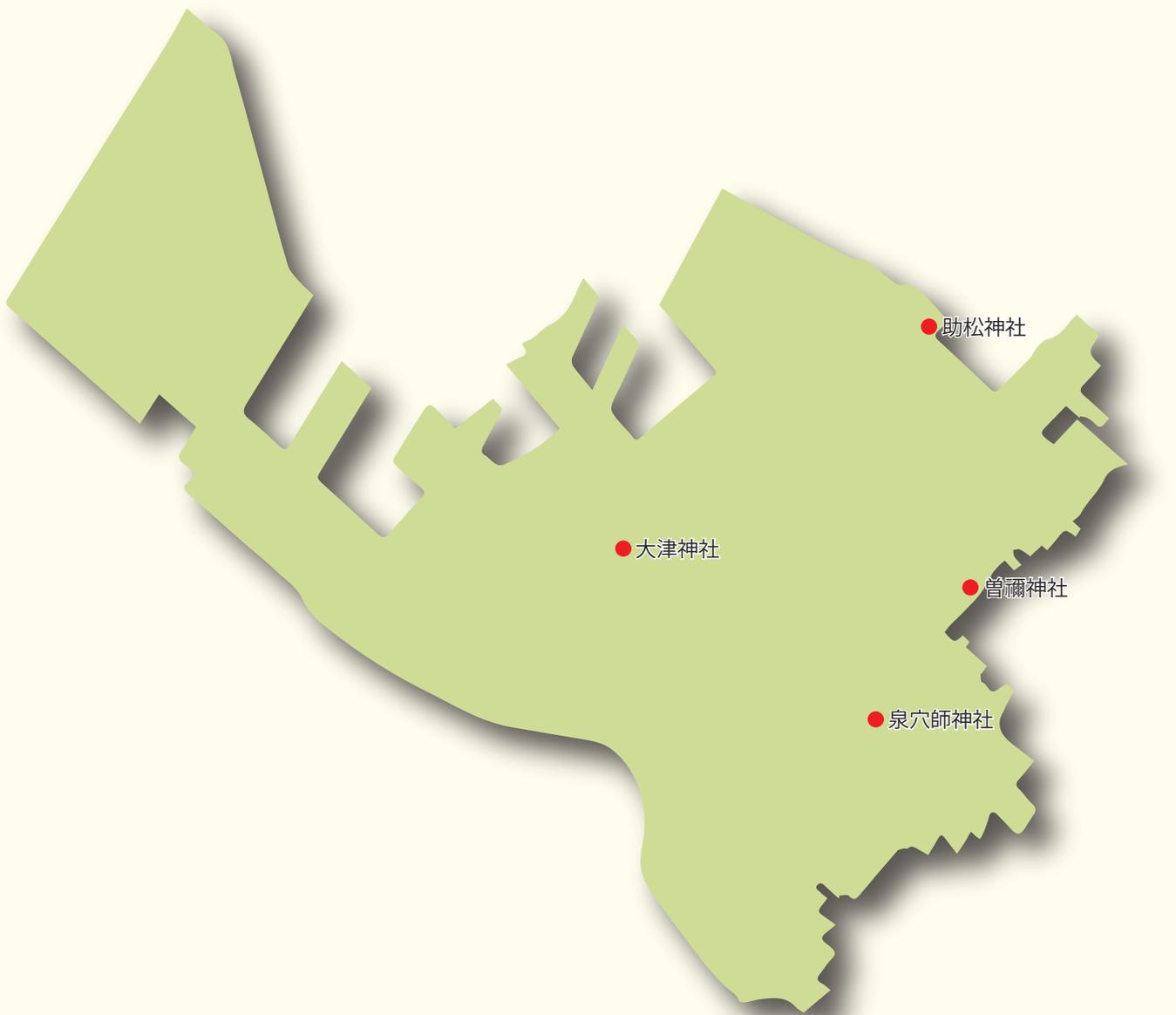
御朱印なし

## 由緒

当社は第四十二代文武天皇大宝二年九月六日奉祀された。元来鎮座地を父鬼と称し、其の昔鬼が住んでいたもので、御武威高き須佐之男命を祈誓し、平和郷を作ろうとして奉斎したと云う。現在も猶一月四日村人座儀によつて鬼払神事、八月十六日に笹踊り行事を行い神意に添い奉る。尚神社所蔵の古文書、正徳三年巳九月の泉州泉郡父鬼村社寺改帳には、氏神は牛頭天皇と申し、往昔より同村堂の上に有り、みだりに竿入れ申さず、慶長十六年片桐市正檢地にも除地とせられた。

# 泉大津市

▶ 大阪府にもどる



# 泉穴師神社

いづみあなしじんじや  
(通称 穴師神社)

## 御神神

天忍穂耳尊  
栲幡千千姫命

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
夫婦円満

## 例祭日

十月五日



本殿



夫婦守

● **神社のおすすめ**  
拝殿前に石鳥居が二基並んで建っています。これは本殿に夫婦二柱の神様を対等にお祀りしているからといわれている。



鎮座地 泉大津市豊中町一―一―  
電話 〇七二五―三三二―二六―一〇  
HP <https://izumi.anasishi-jinja.com>

## 由緒

当社の御鎮座は天武天皇白鳳年間で、延喜式内社であり和泉五社の一つ泉州二ノ宮である。

往古より歴代天皇の当社に対する御崇敬は文献に数々残されており、仁明天皇承和九年十月奉授和泉穴師大明神従五位下（統日本後記）をはじめとして、三代実録に清和天皇貞観七年春二月賜従五位上、同年六月に正五位下、同九年春二月賜従四位下、其の後一級宛を加えられ、聖武天皇天平十四年六月窮民賑恤に神感ありたる故を以て正一位穴師大明神の勅額を賜る。

### 御社殿並び建造物

本殿は慶長七年豊臣秀頼公が片桐且元に命じ大修築され、流造正面千鳥破風付のものを二殿連続したもので、桃山時代の特徴を現し、貴重なる文化財として撰社春日社、撰社住吉社とともに重文に指定されている。中でも撰社住吉社は棟に文永十年の墨書があり府内最古の神社建築といわれている。又、平安時代から鎌倉時代の作とされる御神像が八十三体収蔵されており、内八十体が重要文化財に指定されている。

### 御繪旨並びに奉献の一斑

孝謙天皇（天平勝宝年中）村上天皇（天曆中）崇徳天皇（大治中）御宇鎮疫祈願御歡感の繪旨を賜り、正倉院文書によれば聖武天皇が和泉国五社大明神に社領御下賜の際、千三百石を下賜された。  
武家では元弘元年楠木正成公兵を挙げるに当たり、国家安寧武運長久を祈り石灯籠を奉献され、天正三年十月二十日織田信長より社領安堵の御朱印状を賜る。

### 飯ノ山神事

聖武天皇天平十四年壬午六月京中大いに飯を降らし、又靈夢により橘諸兄公に詔し飯ノ山饗を総社（和泉五社総社）に渡し五社に供し余を窮民に賑恤せしめられました。天正年間まで毎年八月十五日総社五社幸飯ノ山を渡す神事を齎行してまいりましたが、其の後当社のみ古例に倣い社前馬場先の南端に渡御所を設け今に至る迄、神輿渡御飯ノ山を渡す神事を齎行しております。「飯ノ山」とは、白米一斗八升・もち米五升合わせて二斗三升を蒸飯とし、御食鉢と称する地車台にのせ神輿に供奉いたします。撤饌後之を甘酒に醸し、氏子各戸に分けて往昔窮民賑恤の恩賜を祈念すると共に、御食津神の恩を被らしめ給う古式の儀を含めたものであります。

# お お つ じ ん じ ゃ 大津神社

## 御祭神

品陀別命  
息長帯姫命  
事代主命  
天太玉命  
素盞鳴尊  
外十二柱

## 御神徳

病氣平癒  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

十月十日



一刀彫り神名額



厄除け桃方位盤

## 神社のおすすめ



鎮座地 泉大津市若宮町四一―二  
電話 〇七二五―三三二―〇六〇三  
HP <https://otsujinja.com/>

## 由緒

当社は元若宮八幡神社と称したが、明治四十一年一月十五日当町宇多上之町に鎮座の宇多神社と、当町下条出口町に鎮座の神明神社の二社を合祀し、同年同月同日当町宇堀廻に鎮座の事代主神社を境内社として合併し、又同年四月二十九日当町宇多栗戸に鎮座の式内栗神社を境内に移転し、同年八月二十四日大津神社と改称し現在に至る。

若宮八幡神社 阿部朝臣広庭八世の孫三郎忠清が天喜年間源頼義に従い、奥州安部頼時貞任等を追討した功により京都に還り、和泉下条郷を給わり和泉三郎と称するに及び、源頼義が鎌倉に鶴ヶ岡八幡宮を創建した例に倣い、康平七年此地に八幡神社を鎮祭した。事代主神社（戎神社） 天正年間南北朝当時和泉三十六士の中当地の勤王家真鍋、斎藤、藤林三家が摂津西の宮の我神社を勧請したもので、三家は当社を崇敬する事極めて深く、地方人士の信仰も又頗る厚く、時に盛衰はあった様だが、爾来地方民人の崇敬の的となり、威徳赫々境内翔々たるものであった。藤林系図中「大津邑下条の鎮守」とある。

### 栗神社（栗宮）

宝亀七年栗直氏当地に在住、栗氏の祖神天太玉命を祀ったのが栗神社である。延喜式内社和泉郡二十八社の一で、和泉名所図絵和漢三方図絵にあり、四国の阿波、関東の安房とならび穀麻を司る神として奉祀された。

### 神明神社

天正年間根来戦乱の際、淡輪六郎の父淡輪大和守徹斎が、時運非なると悟り一族郎党十八家を率いて当大津に来て隠れた。その時同家の氏神船玉神の霊像を祀った。爾来淡輪家の氏神として崇敬して来たが次第に神徳煌き崇敬者愈々増加して遂に地方一円の神社となる。

宇多神社、菅原神社、春日神社の由緒沿革創建等は不詳である。

# 助松神社

すけまつじんじや

## 御祭神

菅原道真公  
春日大神  
八幡大神  
戎大神  
金比羅大神

## 御神徳

学業成就  
勝運  
家運隆昌  
商売繁盛

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉大津市助松町一―三―一九  
電話 〇七二五―二二―四七〇六  
H P

御朱印なし

## 神社のおすすめ

境内は興味をひくものも多く、大阪府下で最古といわれる「百度石」は元禄七年（一六九四年）のもの。天然記念物の鶏「東天紅」、安産信仰の手水鉢、泉大津市指定保護樹の「クロガネモチの木」などがあります。



## 由緒

当社は創建の年代は不詳であるが、菅原道真公を合祀したのは寛喜年間である。明治五年村社に列せられ、同四十三年村社八幡神社を合祀、大正元年神饌幣帛料供進神社に指定される。境内地は四五九坪有る。

# 曾禰神社

そねじんじや  
(通称 曾根神社)

## 御祭神

饒速日命  
伊香我色雄命  
外十柱

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
諸願成就

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉大津市曾根町一丁目二二  
電話 〇七二五二二一八二八二  
HP



## 神社のおすすめ

例祭の際には六台のだんじりが宮入りし、一列に並列し催し物を披露する。また、池上曾根遺跡の史跡公園が隣接し、参拝の際に史跡公園を散策される方も多い。



宮入の様子



隣接する池上曾根遺跡

## 由緒

当社は延喜式内の古社で、神社明細帳によると天武天皇四年（六七五）に創建され、国内神名帳の神位は従四位上であり社格は村社である。明治四十二年五月十三日に日吉神社、菅原神社、白山神社、二田国津神社を合祀した。さらに同年同月二十日に池上神社、上泉神社を合祀した。曾禰氏の祖神である饒速日命を祀る。鎮座地は曾禰氏の居住地であった所である。曾禰氏は新撰姓氏録によれば、和泉国神別に「曾禰連、神饒速日命六世孫伊香我色雄命の後也」とある。

### 饒速日命について

そもそも饒速日命が文献に登場してくるのは、日本書紀卷第三の序文の神武天皇東征の説話の中に、天孫降臨の話以前に饒速日命が、天磐船に飛び乗ったとある。そして饒速日命は、豪族の長髓彦の妹の三炊屋媛を娶りて可美真手彦という子供を儲ける。しかし、長髓彦は神武天皇の東征に反対し、孔舎衛坂にて戦い神武天皇軍を破る。その後、長髓彦は神武天皇が天孫であることが判ってもその態度を改めず、その様子を見た饒速日命は説得を試みたが出来なかった。それで饒速日命は、もはやこれまでと思い長髓彦を殺し、多数の人を連れて神武天皇に帰順したのである。神武天皇は、この事をいたく褒め喜び、この後饒速日命を頼りにし重職を任せる。

これが古くから天皇に従い、大和朝廷に於いて有力な地位を占めることになる「物部氏そして物部氏族の曾禰連」の先祖である。

なお先代旧事本紀第三天神本紀には饒速日命が十種神寶を奉じ、供奉の三十二神を率いて河内国河上の哮峯に降り、大和国鳥見白庭山に遷り住んだとある。このお供の中に二田物部氏が入っている。

日本書紀天武天皇四年四月の条に「大山中曾禰連韓犬を遣わして、大忌神の廣瀬の河曲に祭らしむ」とあるように、朝廷の中に於いて代々重要な位置を占めていたことが判る。

### 境内地について

曾禰神社の境内地には壹岐守玉井源秀の築きし曾根城があり、没後廃墟となり境内にて古瓦が多く発見された。現在境内の東側には弥生時代の大集落遺跡である「史跡池上曾根遺跡」が広がっている。

# 高石市

▶ 大阪府にもどる



# 高石神社

たかいしじんじや

## 御祭神

少彦名神  
天照皇大御神  
熊野坐三社

## 御神徳

## 例祭日

十月六日



鎮座地 高石市高師浜四一―一九  
電話 〇七二―二六一―一七九五  
H P <http://jinja.d.dooo.jp/index02.htm>



## 由緒

当社の創建の年月は詳らかではないが、延喜式内の神社で小社に列せられた。国内神名帖に、従五位上高石大歳社高石倉立社とあり、今天神と称した。

堀河天皇の御代寛治年間に社殿の再建があった。今の社殿は寛永十二年十一月二十二日に再建されたものである。

和泉名所図絵には、高志の祖王仁を祀ると記されている。或いはもと境内に王仁の一社があったためであろう。

明治五年郷社に列せられた。

境内は四、〇三四坪を有して、本殿、幣殿、拝殿、神饌所、神輿庫、神器庫、参集所、社務所、末社には五社殿及び拝殿を備え、境内外の神域は石垣を周らして整備されていたが、昭和九年九月二十一日に関西地方を襲った室戸台風に遭い被害甚大で、巨木は倒れ、拝殿も倒壊した。昭和十年十月改築復旧造営工事を起工、翌十一年五月十五日に竣工し遷座祭を執行した。

往昔逍遙院三条院が高野参詣の途次、この社に立寄り、高師の浜の松原のした、天神の社の前に輿を立てて、袖の上に松吹く風やあだ波の、高師の浜の名をや立つらん（実隆）と詠じ、又境内には小倉百人一首の祐子内親王家紀伊の詠まれた、音にきく高師の浜の仇浪は かけしや袖のぬれもこそすれ の碑があり、従三位富小路貞直の筆によるものである。

老樟の下に石玉垣を周らした碑があり、表に白河鳳皇熊野権現御拝所と記されている。

# と の き じ ん じ ゃ 等乃伎神社

御祭神

天兒屋根命  
菅原道真公

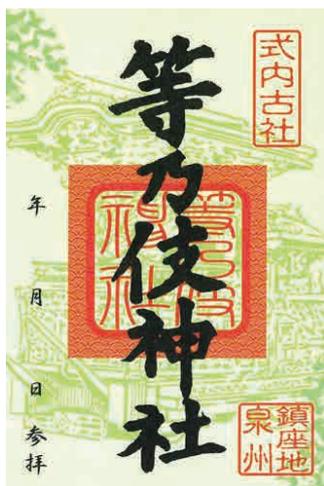
御神徳

例祭日

十月五日



鎮座地 高石市取石二一四一四八  
電話 〇七二一二七一〇五五三  
H P



## 由緒

当社は延喜式内社である。この地は姓氏録和泉国神別に、「殿来達、大中臣之同祖、天兒屋根命之後也」と見え、又統日本紀孝謙天皇天平勝宝四年五月の条に、「庚申、无位中臣殿来連竹田売授外従五位下」と見える殿来氏の居住していた地で、同氏のその祖神を祀ったものであろう。社伝には「孝謙天皇天平勝宝五月、殿来連この宮を営み祖神の霊を河内の枚岡神社より迎えて奉祀す、この歳太政大臣藤原武智麿此処に來りて住せし故に殿来と云う」と、和名抄に「和泉国大鳥郡常陵郷あり、この富木を指せしものならんか」と。この富木の字を用いたのについて一つの伝説がある。「欽明天皇十四年五月河内の泉郡茅渟海中に梵音の震響あり雷声の如し、天皇満辺直をして求めしむ満辺直、詔を奉じて樟木を得て献ず、之を取石池の北に寄す重くして動かず、之を三つに伐る、敏達天皇の時、勅して一を以て吉野放光寺の尊像を造り、一を以て比蘇寺観音を造り、其の一を以て等乃伎社の天兒屋根命の像を造る此木を仰ぎて、富木村と云う」と。この伝説は日本紀と天書と元享釈書とを混和し、且その中に等乃伎を割り込ましたものでらしく信用できない。此等の伝説以外に創建の年月を知る資料がない。明治四十二年附近の五社を合祀した。

# 泉北郡 忠岡町

▶ 大阪府にもどる



# 忠岡神社

ただおかしんじや

## 御祭神

菅原道真公  
素盞鳴命  
武甕槌命  
外六柱

## 御神徳

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉北郡忠岡町忠岡一―二六―三  
電話 〇七二五―三三―三六二八  
H P <http://www.tadaokajinja.jp/>

御朱印なし

## 由緒

当社は其の創立年代は不詳であるが、神社建築様式（唐破葺春日造り）並びに諸般の事情より判定すれば、相当の古社で、元は菅原神社と称し、菅原道真公を祀り、元禄十四年の社寺改帳にも古来よりある処の古社であると記載されている。

当神社は明治五年に村社に列し、明治末期の神社制度の改革に伴い、明治四十二年四月二十六日、八阪神社（素盞鳴命）、春日神社（武甕槌命、経津主命、同比咩命、天児屋根命）、市杵島比売神社（市杵島比売命）、明治四十二年七月十六日、事代主神社（事代主命）を合祀し明治四十二年八月神饌幣帛料供進社に指定せられ、明治四十二年十一月九日、更に天一神社（天御中主命）を合祀し、明治四十三年四月二十六日、現在の忠岡神社に改称された。境内地は七二四坪で、本殿、拝殿、幣殿、社務所、手水舎を存し、末社に事代主神社を祀る。

# 藤井寺市

▶ 大阪府にもどる



# 道明寺天満宮

どうみやうじてんまんぐう

## 御祭神

主神 菅原道真公  
相殿 天徳日命  
覚寿尼公

## 御神徳

学業成就  
厄除開運  
交通安全

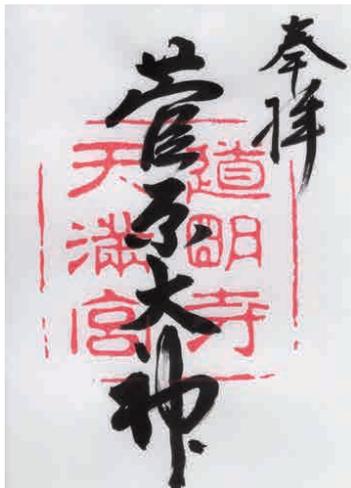
## 例祭日

二月二十五日



## 神社のおすすめ

境内には約八十種八百本の梅、約十種二百本の桜があり、季節の花が迎えてくれます。初めて「はにわ」を創った野見宿禰に因んだ「はにわみくじ」も人気です。



鎮座地 藤井寺市道明寺一―一六―四〇  
電話 〇七二―九五三―二五二五  
HP <https://www.dojingu.tenmangu.com>

## 由緒

垂仁天皇の三十二年（西暦三）、相撲の祖といわれる野見宿禰が、「はにわ」を創って殉死に代えた功績で、「土師」の姓とこの辺り一帯を所領地として賜って以来、遠祖天徳日命をお祀りしたのが土師神社の始まりです。その後仏教が伝来し、推古天皇二年（五九四）、聖徳太子の発願により、土師八嶋が自宅を喜捨し土師寺が建てられました。その土師氏は「菅原」へと改姓し、道真公が現われます。当地には道真公のおぼ様であります覚寿尼公がお住まいになられていたことから、道真公は当地を度々訪問されます。三十六才のときには十一面観音像（現道明寺ご本尊、国宝）を彫られ、四十才のときにはひと夏当地に滞在され、夏水井の水を汲み青白磁円硯により、五部の大乘経を写されました。その経塚から、胚芽が経巻の形をした「もくげんじゅ」が生え、謡曲『道明寺』にも有名になりました。また、宇多上皇の大和河内御巡幸の際にも当地にお伴され「雨中錦を衣て故郷に帰る」と漢詩に詠まれたことから、公はこの地を第二の故郷として慕われていました。

やがて五十七才にして従二位右大臣に進まれましたが、無実の罪で九州大宰権帥として淀川を下られることになり、その舟の中で、「世につれて浪速入江もにこるなり道明らけき寺ぞこひしき」と詠まれ、道明寺への訪問を許されました。そして、この道明寺で覚寿尼公との別れを惜しまれ、八葉鏡にお姿を映されて犀角柄刀子で自像を荒木に刻まれ、「鳴けばこそ別れも憂けれ鶏の音の なからん里の暁もかな」との御歌を残されて西海に赴かれました。公は無実の罪であっても、ひたすら謹慎のまことを尽くされましたが、延喜三年（九〇三）二月二十五日に五十九才で亡くなりました。

その後、天暦元年（九四七）に遺し置かれた木像を北丘にお祀りし、ご遺品をご神宝として安置し天満宮を創建、土師寺を道明寺と改称しました。延慶三年（一三二〇）には西琳寺の僧鑊阿に神託があり八葉鏡に勅封を賜りました。

天正三年（一五七五）当国高屋城の兵乱に、社殿等が焼失しましたが、幸いご神像と宝物等は難を免れ、この年織田信長公より、また天正十一年（一五八三）と文禄三年（一五九四）には豊臣秀吉公より、さらに徳川幕府よりも代々の寄進があり、享保年中に靈元法皇、中御門天皇より女房奉書を賜ってから明治初年まで毎年初穂料が下賜されてきました。

正徳六年（一七一六）の石川の氾濫により、坊舎等は北丘の神社境内に移り、明治五年（一八七二）、神仏分界により、五坊の中、一之室が神職家となり、道明寺は道を隔てて西に移築され、現在に至っています。また、明治十年（一八七七）には明治天皇の行幸の際、行在所となりました。

# 辛國神社

からくにじんじや

## 御祭神

饒速日命  
天児屋根命  
素盞鳴命  
市杵島姫命  
品陀別命

## 御神徳

健康の守護  
知恵の神  
結び、災い除けの守護

## 例祭日

十月十七日



藤井寺市

鎮座地 藤井寺市藤井寺一―一九―一  
電話 〇七二―九五五―二四七三  
HP <http://www.karakunijinja.jp/>



## 由緒

当社は、五世紀後期第二十一代雄略天皇の御代に創建された式内社であります。日本書紀に「雄略天皇十三年春三月、餌香長野邑を物部目大連に賜う」とあり、古代餌香長野邑の地とされるこの藤井寺の地に物部目大連が、その祖神 饒速日命を奉斎したのが当社の始まりです。この後、六世紀後半物部氏宗家の守屋大連の没後、一族の物部辛國連が、氏神として祭祀したことにより、辛國神社と称するようになりました。また、平安時代に入り、六国史の三代実録には「清和天皇貞観九年二月二十六日、河内国志紀郡辛國神を官社に預る」とあり、朝廷の神祇官の神名帳に記載され、平安時代には格式ある官社に列せられています。その後室町時代に、河内守護職の畠山基國氏が、社領二百石を寄進のうえ社頭を整備し、奈良春日大社から天児屋根命を勧請合祀しました。以後、庶民の信仰を集め、江戸時代の古文書や絵図には、岡村氏神・春日大明神と書かれており、江戸時代後期まで「春日大明神」「春日社」と称せられていました。そして時代が明治へと移る頃、復古情勢の中、古来の名称である「辛國神社」に改称され、さらに明治四十一年には旧藤井寺村の村社であった長野神社のご祭神 素盞鳴命を合祀して現在に至っております。

# ともばやしのうじのじんじや 伴林氏神社

## 御祭神

高皇産霊神  
天押日命  
道臣命

## 御神徳

厄除開運  
交通安全  
良縁成就

## 例祭日

十月九日



藤井寺市

鎮座地 藤井寺市林三一六一三〇  
電話 〇七二一九五四一五二二六  
HP <http://tomobayashinji-jinja.jp/>



## 神社のおすすめ

世界遺産の『百舌鳥古市古墳群』の中にあり、当社より十分も歩けば二〜三の古墳を見る事が出来ます。



当社オリジナル御守（宮司の手作り）  
銀杏守・五円守・神木守



当社オリジナル神籤  
大きな万葉御籤

## 由緒

創建は詳らかではないが、三代実録に貞観九年二月二十六日（八百六十七年）志紀郡林氏神が官社に列せられ、同十五年十二月二十日（八百七十三年）天押日命に從五位が授けられている。又延喜式神名帳に伴林氏神社と記されており、延喜式内社である。それよりはるか以前から道臣命の子孫がこの土地に住み、大和朝廷時代の名門として祖先を祀ってきたものと思われる。

その子孫たちは代々守護の責任者として朝廷に仕え七代目の武持は景行天皇から大伴宿祢姓を賜り、金村は平郡氏を撃ち、長徳は蘇我氏を滅ぼして右大臣になっている。時代は更に降って壬申の乱（六百七十二年）では吹負が天武天皇に從って戦功を立て、旅人も九州を鎮定し從二位大納言まで昇進した。その子、家持は歌集「万葉集」の編者として夙に有名である。

国道の時、淳和天皇の贈り名が大伴であったため、大伴宿祢を伴宿祢に改めた。その子の大納言善男が応天門の変（八百六十六年）に敗れ伊豆に流される。その後は一族の力は急速に衰えていった。

その後は、わずかに地元民らが産土神として小さな社殿を建てお祀りしてきた。明治の初めに村社となった。

昭和七年、「軍人勅諭」渙発五十年に「軍人勅諭」の冒頭に『我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率ゐ』と有り、物部氏をお祀りする「物部神社」はあるが、大伴氏をお祀りする神社が見当たらない。そこで歴史学者が調査したところ、現存する大伴氏の祖神をお祀りしている神社は唯一「伴林氏神社」のみであることが判明する。

昭和十五年、紀元二千六百年記念事業で西の靖国神社として整備拡張が行われ、昭和十九年に府社に昇格する。終戦後は伊勢神宮を本宗とする神社本庁の包括となり今日に至っている。

うぶすなじんじゃ  
**産土神社**  
(通称 小山産土神社)

**御祭神**

素盞鳴命  
大物主  
稲田姫

**御神徳**

災い除け

**例祭日**

十月十七日



鎮座地 藤井寺市小山四一七一九  
電話 〇七二一九五五二四七三  
H P

御朱印なし

**由緒**

創建は定かではないが室町時代と思われる。  
現本殿の墓股（カエルマタ・桃山様式）は、全面にわたって華麗な彩色がほどこされておおり、本殿の主要部分は当時の状態をよく残しております。

墓股は藤井寺市内では、最古の物であり神仏習合社の証でもあります。

また、元禄五年『寺社数改帳』に志紀郡小山村の守護神、小山牛頭天王と隣接するお寺、天王山『清圓寺』が記載され、神社神紋、清圓寺仏紋も同じく五瓜に唐花となっており、祀り事は、大正後期まで清圓寺住職により行われておりました。明治維新（神仏判然令）後、明治十二年以降の本殿、御神鏡裏には河内小山坐・進雄（スサノオ）神社鏡と記されております。

その後、昭和十七年寄贈石碑に産土神社（生まれた土地の神）と神社前にありますが、神社庁には、戦後の昭和二十七年頃に産土神社として登録されております。

# 大山咋神社

おおやまぐいじんじや

御祭神

大山咋命

御神徳

家内安全

例祭日

十月九日



鎮座地 藤井寺市船橋町八一三〇  
電話 〇七一九五三一二五二五 (道明寺天満宮)  
H P

御朱印なし

## 由緒

社伝によれば近江国坂本の日吉大社のご分霊を江戸時代に勧請し創健されました。明治四十年九月十九日に黒田神社に合祀されましたが、地域の人の情熱により昭和二十一年六月、元の地に戻り現在に至ります。

# くろだじんじゃ 黒田神社

## 御祭神

天御中主尊  
天照皇大神  
春日四柱神  
外四柱

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
諸願成就

## 例祭日

十月九日



建徳三年の灯籠

鎮座地 藤井寺市北條町一―三  
電話 〇七二一九三九一六七三八  
HP

## 神社のおすすめ



## 由緒

鎮座地は、古来河内国志紀郡北條村馬場と称した。古伝には、神武天皇の御子神八井耳命のかくし廟所といわれ、仁徳天皇の御代に瑞垣を建立し祭祀されたという。

現在の御祭神は、稱徳天皇神護景雲二年に祭祀され、延喜式内の古社である。天御中主大神、天照皇大神、武甕槌神、経津主命、天児屋根命、比咩大神の六柱が祭祀されている。中世より、北條天神或は天王と稱し、また「神名帳考証」には稲霊を祭るとある。主たる御祭神の、天御中主大神は天地創造の神としてご神徳が高く、この神を祭祀する社は機内には少ない。

明治五年村社に列し、柏原地区（旧柏原村、市村新田）北条地区、林地区の産土神である。宝永元年の大和川の付替により、柏原地区からの参拝は大和川を渡らなければならなくなった。

神域は、現在の倍以上の五千坪以上の広さがあつたと伝えられ、梅の名所として「河内鑑名所記」に俳句が残されている。

北條の時	正しきや	梅の花	重良
神の梅	北條九代の	つき木哉	西鶴
梅の絵は	四季天神の	詠かな	浄久
すそくろは	北條の森の	しげり哉	正勝

本殿は、三間向拝の流れ造りで江戸末期の建造であるが、幣殿、拝殿が狭小で老朽化していたため、平成五年に参集殿とともに、新築造営し境内地も整備した。

大和川の付替により、柏原地区からの参拝は三百年来難渋を極めたが、湘和四十四年十月、御分霊を塩殿神社の元の御鎮座地である今町に同市上市の春日神社とともに合祀し、当社の分社として柏原黒田神社を創建した。

建造物として、建徳三年（一三七三）に寄進された石燈籠一基があり平成十九年、藤井寺市指定有形文化財に指定された。

秋の例祭には、北条地区、林地区で神社所有の地車二基、地区所有の地車二基の曳行で賑わう。

末社として天押雲根神社、八幡神社、稲荷神社、恵美須神社の四社がある。

# 國府八幡神社

こうはちまんじんじや

## 御祭神

八幡大神  
春日大神  
住吉大神

## 御神徳

家内安全  
厄除開運

## 例祭日

十月九日



鎮座地 藤井寺市国府一四一五六  
電話 〇七一九五三一二五二五 (道明寺天満宮)  
H P

御朱印なし

## 由緒

江戸時代初期に壺井八幡宮のご分霊を勧請し創健されました。本殿、拝殿を有しています。明治四十年十二月二十三日に黒田神社へ合祀され、地域の人の情熱により昭和二十一年六月二日、元の地に戻り現在に至ります。

# 古室八幡神社

こむろはちまんじんじや

御祭神

八幡大神

御神徳

家内安全  
厄除開運

例祭日

十月九日

鎮座地 藤井寺市古室二一〇一五  
電話 〇七二一九五三一二五二五（道明寺天満宮）  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年月は不詳ですが、恐らく江戸初期に菅田八幡宮のご分霊を勧請し創建されたものと推察されます。

応神天皇皇后仲津姫皇后陵の西側にあり、本殿拝殿を有しています。  
正保四年、元禄八年、享保三年の棟札があります。



さわだはちまんじんじゃ

# 澤田八幡神社

御祭神

八幡大神

御神徳

家内安全  
厄除開運

例祭日

十月九日

鎮座地 藤井寺市沢田四一二一三  
電話 〇七一九五三一二五二五（道明寺天満宮）  
H P

御朱印なし

神社のおすすめ

参道の真ん中に線路が走っています。



## 由緒

江戸時代初期に菅田八幡宮のご分霊を勧請し創健されました。明治五年村社に列し、仲津姫皇后陵の側面に鎮座しています。

# 志貴縣主神社

しきあがたぬしじんじや

## 御祭神

主神 神八井耳命  
相殿 伊勢大神  
春日大神  
住吉大神

## 御神徳

家内安全

## 例祭日

十月九日

鎮座地 藤井寺市惣社一六―二三  
電話 〇七二一九五三一二五二五（道明寺天満宮）  
H P

御朱印なし



## 由緒

延喜式内の古社ですので、平安時代には創建されていますが、創建の年月は不詳です。『新撰姓氏録』河内国別に「志紀県主多朝臣同祖神八井耳命之後也」とあり、同県主等の祖を祀ったものということがわかります。志貴は、之岐、志紀、志幾等々に書かれてあるのも、古の志紀郡の地であって神武天皇皇子神八井耳命より出た志紀県主及びその同族である志紀首、志紀宿禰、志紀朝臣志紀氏人等の住んでいた地です。社は一に春日明神又は惣社明神とも称す。鎮座地も惣社であることから河内国総社に比定されています。

社伝によれば、楠木正成公の祈願所で、当時は大いに隆昌でしたが、楠木氏衰亡と共に社も頽廢しました。中世以後度々兵火に罹り社地又変遷する事もあったようです。明治五年村社に列し、本殿入母屋造、拝殿を有します。

しぎじんじや  
志疑神社  
(通称 今天王)

御祭神

素盞鳴命

御神徳

厄除開運  
病氣平癒  
除災招福

例祭日

十月九日



藤井寺市



天社相殿稻荷大明神



例祭日に地車曳行



神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 藤井寺市大井三一九一六  
電話 〇七二一九七二一〇〇一六  
HP

由緒

当社の創建年代は詳かではないが、延喜式内の古社である。「河内名所図会」に「大井村にあり、延喜式にいで、今天王と称す。此地の産土神なり」とあり、又大阪府誌等にも記載されている。  
明治五年村社に列し、明治四十年十月二十四日黒田神社に合祀されたが、昭和二十一年六月復帰した。  
御祭神は素盞鳴尊であり、強い力をお持ちの神様で、人間にとって災厄をもたらすものを除去する神さまとして、仏教での薬師如来、印度の牛頭天王と習合され、天王様と呼ばれていた。疫病の流行に対し、疫病封じの神様として信仰されてきた。  
神社に隣接して、薬師如来をお祭りする立派な薬師堂があり、河内の信仰の形をあらわしている。  
境内社に「天社相殿稻荷大明神」を祭る。

# 津堂八幡神社

つどうはちまんじんじや

御祭神

品陀別命

御神徳

例祭日

十月十七日

鎮座地 藤井寺市津堂四一  
電話 〇七二一九五五二四七三  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年月は不詳である。  
品陀別命をお祀りする旧社にして明治五年には村社に列す。  
本殿拝殿を有して、境内地は二二六坪である。



# 野中神社

のなかじんじや

## 御祭神

彦国尊命  
素盞鳴命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
開運招福

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 藤井寺市野中一  
電話 〇七二一九五五〇九四五  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は、元丹比の郡野中の郷野中宇足塚と称した所に鎮座し、国史に所載された旧社である。

三代実録清和天皇貞観十七年八月二十八日戊寅『授河内国正六位下野中の神従五位下』とあり亦「本社甚しく衰え神社の形態も絶えたる如くなれど丹南郡野上村の亀池法泉寺の鎮守なりと見え是恐らく野中氏の祖神を祀れる社なるべし」と、新撰姓氏録考證に記されている。

明治五年四月村社に列したが、明治四十年辛国神社に合祀された後、其の跡地に遙拝所を設け神社信仰を継続して来たが、太平洋戦争の終戦後、氏子民の総意に基き復帰して独立した。昭和三十二年三月宗教法人野中神社として認証された。

はじのさとほちまんじんじゃ

# 土師里八幡神社

御祭神

八幡大神

御神徳

家内安全  
厄除開運

例祭日

十月九日

鎮座地 藤井寺市道明寺一八一四  
電話 〇七二一九五三一二五二五（道明寺天満宮）  
H P

御朱印なし



藤井寺市

## 由緒

江戸時代初期に蒼田八幡宮のご分霊を勧請し創健されました。  
明治五年村社に列しました。

# 羽曳野市

▶ 大阪府にもどる



# 誉田八幡宮

こんだはちまんぐう  
(通称 誉田さん)

## 御祭神

應神天皇  
仲哀天皇  
神功皇后  
住吉大神

## 御神徳

厄除開運  
安産守護

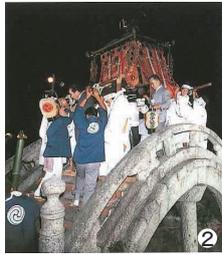
## 例祭日

九月十五日



### ① 夏祭

誉田八幡宮では古くより舞楽が盛んにとり行われ、鎌倉時代から室町時代にかけての舞楽面（重要文化財）15面が残っており、毎年5月8日の夏祭に舞楽が奉納されています。



### ② 秋祭

毎年9月15日に行われる秋の例祭には、神輿が応神天皇量へ渡御する神事が厳粛に行われます。古くには、御陵の後円部頂上まで神輿が渡されましたが、現在では御陵の外堤までになっています。\*現在は新しい橋より渡御しています。

## 神社のおすすめ



鎮座地 羽曳野市誉田三二二八  
電話 〇七二一九五六一〇六三五  
HP

## 由緒

当宮の縁起については「誉田宗席縁起」に詳しく記されていますが、この絵巻は足利義教が当宮へ参拝の際に古い縁起を補遺して、新図をつくり奉納したものであります。

さて縁起は、まず応神天皇御陵の創草の記事からはじまります。天皇が崩御されたことを伝え聞いた人々は、鋤鍬を荷って雲霞のように集って御陵を築いた。これが応神陵である。ところが或る日竜馬が現れて、その歩いた蹄の跡をもって境界とした。次いで誉田八幡宮建立の由来にうつり、欽明天皇の勅願によって御廟前に社殿を建立し、八幡大菩薩を勧請した。そのとき天皇は参籠されたが、夜中に八幡大菩薩が出現し、奇瑞のことがあったので天皇はいよいよ深く信仰になり、この日、二月十五日を吉例とし、歴代天皇は一代に一度は誉田八幡宮に行幸すべきことを定められた。

続いて聖徳太子参籠のこと、弘法大師参籠のこと、行基の参籠、菅原道真の参籠など、創草期における霊現、奇特のことが綴られています。

そして記録的な記事にうつり、後冷泉院のとき社殿を南へ一丁ばかり移転し、新たに社殿を造営されたこと、永承六年後冷泉院の行幸、治暦二年三月二十八日社殿が鳴動し光を発する異変があり、それ以来朝廷では御占の神事が行われることとなったことや、当宮ゆかりの神鳩の故事、社紋の巴紋について述べています。

以上が縁起の詞書のあらましですが、おそらく八幡信仰がさかんになった結果、応神天皇ゆかりの地に社殿が建立されたと考えられます。十一世紀になると、南河内内源氏によって武士団が結成され、一〇五一年前九年の役に源頼義、義家父子は陸奥国に出兵しますが、これと同じ年に「縁起」には誉田社殿の移転改修（現在の位置）と後冷泉院の行幸のことを伝えています。

当時世間では神仏の習合という思想が発達して、神社にはさかんに神宮寺が建てられるようになり、誉田八幡宮にも護国寺という神宮寺が生まれました。やがて源氏の氏神が八幡であるという信仰がひろまると、誉田八幡宮は將軍家をはじめ源氏を名のる武士たちの信仰をうけるようになりました。

源頼朝は建久七年社殿、伽藍を修復し国宝の神輿や神馬、重要文化財の松川菱螺鈿鏡鞍・同鉄蛭巻薙刀などを寄進し、室町幕府六代將軍足利義教は重要文化財「誉田宗席縁起」、同「神功皇后縁起」を寄進したことは、この間の事情を如実に物語っています。

# お お つ じ ん じ ゃ 大津神社

## 御祭神

素盞鳴命  
奇稲田姫命  
天日鷲命  
大山咋命  
菅原道真公

## 御神徳

諸願成就  
厄除開運  
良縁成就

## 例祭日

十月八日



鎮座地 羽曳野市高鷲八十一一二  
電話 〇七二一九五五〇九四五  
HP

延喜式内社  
河内大宮山  
大津神社



令和二年八月八日

## 神社のおすすめ

境内には、七福神の恵比須神を祀る大宮戎社や、弁財天を祀る八角形の弁天宮があり一年を通じて商売繁盛・家内安全・美容健康・財運向上・知恵増進・諸芸上達等を求めて多くの方々が参拝されます。



大宮戎社



弁天宮

## 由緒

当大津神社は、十世紀はじめ、醍醐天皇（八八五〜九三〇）の御代に編纂された『延喜式』（九二七）に「大津神社三座歛靱」と明記されている由緒の古い神社で、「丹下の郷の大宮」と称えられていました。

応神天皇（四〜五世紀はじめ）の御代に、文字をはじめ各種の大陸文化が朝鮮半島を経由して我国に伝来した際、当河内地方は難波の港と大和を結ぶ要路であったことから渡来人が土着し、荒地を開拓し産業を興して、ここに河内文化の繁栄を見るに至りました。

当時、この地方には、百済貴須王（近仇首王）の子孫といわれる「葛井氏・船氏・津氏」の三氏が勢力を張っていました。この三氏のうち津氏一族がこの地をトして「大宮山」と称し、自分達の守護神を奉斎したことが「大津神社」の発祥だろうと云うのが古来からの定説であります。

このように、大津神社は津氏一族の守護神として創祀されましたが、津氏一族が朝廷に召されて大和に移住し、また時代の推移に伴って氏姓制度が衰退していくと、中世以降には、大津神社はこの地方九ヶ村の人々の「氏神」として受け継がれ、「河内の大宮」と称えられました。

その後、仏教の隆盛に伴い、『本地垂迹説』に基づいて「午頭天王社」と称し、境内に宮寺真言宗大宮山南之坊を設けて神仏混淆となり、社僧の支配を受けました。広く世の人々からは、「北宮の午頭さん」と称えられ、親しまれました。

明治維新になると、新しい神社制度が定められ、神仏混淆が厳しく禁じられたため、高鷲・埴生両村の氏神として明治五年五月村社に列格され、「神道大津神社」となりました。

第二次大戦後は、占領政策の神道指令によって国家の管理を離れ、昭和二十一年六月二日、宗教法人令に基づき神社本庁所属の「宗教法人大津神社」として発足、今日では羽曳野市西部・南西部広域の氏神様（産土様・鎮守様）として厚く信仰されています。

# つぼいはちまんぐう 壺井八幡宮

## 御神

応神天皇  
仲哀天皇  
神功皇后

## 御神徳

安産守護  
除災招福  
勝運

## 例祭日

五月十五日、十月十七日



鎮座地 羽曳野市壺井六〇五一二  
電話 〇七二一九五六―二八二四  
H P <http://tuboihatimanguu.jp>



※他朱印あり

## 神社のおすすめ

河内源氏発祥の地として崇敬を集め、境内には樹齢千年の楠が歴史を見守っている。

国指定重要文化財の僧形八幡神像他、源義家公の佩刀「天光丸」や源氏の白旗等多数の御神宝を今に伝えている。



① 天光丸を模した「刀守り」  
② 源氏白旗がなびく「破魔矢」

## 由緒

第七十代後冷泉天皇の永承六年（一〇五一年）奥州に安倍頼時とその子貞任・宗任の反乱が起こり、頼義公に賊を平定するようにとの勅命が下り、頼義公は陸奥守・鎮守府將軍に任ぜられた。出陣に際し、石清水八幡宮に詣で戦勝を祈願し、十二年三ヶ月の苦戦の末、康平五年（一〇六二年）に賊を平定した。凱旋後、誓願の驗ありとして、康平七年（一〇六四年）五月十五日に社殿を建立し、石清水八幡宮の御神霊を遷し祀ったのが、壺井八幡宮である。

正一位の壺井権理社

御祭神 源頼信公・源頼義公・源義綱公・源義光公・源義時公

天仁二年（一一〇九年）正月三日の夜、源義家公の五男左兵衛尉義時公の夢に、父祖三將軍が現れ「我等三者の霊を祭祀すべし。然らば王城を鎮護し、永く源家の守護神たらん。」と告げた。義時公は八幡宮西方に地を選んで社殿を造営、同年八月十八日竣工。頼信公・頼義公・義家公三將軍の荒御霊を奉斎し、壺井宮と称し河内源氏の崇廟とした。世にいう源氏三社（京都・六孫王神社、摂津・多田社、河内・壺井社）の一つである。

河内源氏の由来

寛仁四年（一〇二〇年）多田満仲公の四男、源頼信公は、この地の香呂峰に館を営み、同年九月十日より居住し、河内源氏の祖となる。平忠常の乱を平定後、河内守に任ぜられる。

翌年、長子、頼義公が誕生。河内源氏の二代目となる。

長暦二年（一〇三八年）七月十四日、頼義公の長子・八幡太郎義家公が当地に誕生、続いて次男・加茂次郎義綱公、三男・新羅三郎義光公等が誕生する。この事により、当地は河内源氏の発祥の地となった。

壺井水

前九年の役の際の天喜五年（一〇五七年）六月七日、源頼義公・義家公父子が賊と戦う時、大旱魃にて飲料水が少なくなり、まさに敗北するというときに、大將軍頼義公は、下馬脱甲合掌し干天に祈り「諸軍渴きに堪えかね、まさに敗せん」とす。伏して願わくば軍中に水を得さしめ給え。帰命頂礼八幡大菩薩南無通法救世大士、擁護の手垂れ給え。」と申され、しばらく札拝された後、自ら弓矢をもって岸壁を穿ったところ、そこより清水が湧き出し渴きはたちどころに除かれた。

これにより、諸軍は大いに勢いを得、遂に賊を誅伏することができた。凱旋の際、この清水を壺に入れて持ち帰り、城域内に井戸を掘り底に壺を埋めて壺井水と称した。以後香呂峰の地名は壺井と改められた。

# 白鳥神社

しらとりじんじや

## 御神

日本武尊  
素盞鳴尊  
橘媛尊

## 御神徳

## 例祭日

十月九日



鎮座地 羽曳野市古市一―一―一八  
電話 〇七二一九五六―九七五八  
HP



## 神社のおすすめ



## 由緒

もとは軽里地区の伊岐谷に創建された「伊岐宮（いきのみや）」といわれていた。南北朝や戦国時代の兵火によって焼失し、寛永年間末期（二六四〇年頃）、今の地に白鳥大明神を祀る古市村の産土神勧請（かんじよう、遷座）され、日本武尊と素戔鳴命（すさのおのみこと、須佐之男命）が祀られている。秋にはだんじりが出て大変にぎわう本殿（春日造流破風）、幣殿拝殿社務所を有し、古市六ヶ町の氏神ながら駅頭に位置し、参拝者多き旧社である。

### 白鳥伝説

ヤマトタケルは、第十二代景行天皇の皇子。武勇でその名を知られている。大和朝廷全国統一のために命令を受け西方と東方に出陣、勝利を収めたが、帰途に伊勢の農褒野（のぼの）で没した。ヤマトタケルは白鳥に姿を変え、大和の方へ飛び立った。琴弾原（こといきはら、奈良県御所市付近）に降り立ったあと再び飛び立ち、河内の旧市邑（ふるいちむら、軽里付近）にとどまった。この三か所にはそれぞれ墓が造られ、合わせて白鳥三陵という「日本書記より」。また、古市の白鳥神社の縁起には、「さらに白鳥は舞い上がり、埴生の丘を羽を曳くがごとく飛び立った」と記されている。ここから「羽曳野」の地名がつけられたといわれている。（羽曳野市の文化遺産）

ひよしじんしゃ  
**日吉神社**  
 (通称 山王さん)

御祭神

大山咋命

御神徳

魔除け  
 方災除  
 鬼門除

例祭日

十月十七日



鎮座地 羽曳野市西浦五十三七六  
 電話 〇七二一九五六―一五七八  
 H P



神社のおすすめ



- ① 村の川にあった石  
乗るとけがをすといわれ神社に祀られた
- ② 日吉出世石を撫でて開運を願う
- ③ 足腰のお守り

由緒

羽曳山の一峯字山王にあり。延徳元年六月十九日近江国日吉神社の分霊を勧請す。明治五年村社に列し、同四十一年十二月神饌幣帛料供進社に指定さる。境内地四二六坪、本殿幣殿拜殿を有す。

# 杜本神社

もりもとじんじゃ

## 御祭神

經津主神  
經津主姫神

## 御神徳

天意神託

## 例祭日

十月八日



鎮座地 羽曳野市駒谷六四  
電話 〇七二一九二二一七二一  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は部落の背後にある宮山にある。創立の年代は不詳ではあるが、延喜式内大社に列して式には二座と記してある。祭神を大阪府神社明細帳には事代主命、經津主命となっているが、当社には經津主命、經津姫命となっている。貞觀元年正月二十七日正四位下を授かり、皇室の崇敬深く、しばしば勅使の参向があつて、神事が行なわれた。文徳天皇仁寿三年、内藏寮幣使を遣して祭を行なつた。これが杜本祭の始まりである。社伝によれば經津主命十四世の孫伊波別命石川の東辺に住み、此の地はその祖經津主命の御陵であるので同命を祀り、伊波別命の子孫は代々奉仕して当地に住み、弘仁の頃には矢作忌すと呼ばれていたが、後醍醐天皇は社領を寄進された。天正年中織田信長の高屋城を攻めた時、兵火に会い社殿等焼失し、同十四年秀吉に社領を没収せられて社頭衰微した。もと金剛輪寺があつて、宮はその奉仕する所であつたが、明治後神仏分離によつて、寺は同四年七月廃寺となつた。社は同五年村社に列した。末社に天照皇大神社、菅原神社及び南木神社がある。南木神社は楠正行の父正成の像を自ら刻してここに鎮祭したと伝えられている。

# あすかべじんじゃ 飛鳥戸神社

御祭神

瓊伎王命  
素盞鳴尊

御神徳

例祭日

十月第二日曜

鎮座地 羽曳野市飛鳥一〇二三  
電話 〇七二一九五六―二八二四（壺井八幡宮）  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は延喜式内の神社で、昔の駒ヶ谷村大字飛鳥にあり、式に安宿郡となっているもので、元の古市郡に属し、村の東方字湯山に鎮座して天王宮と称した。其の創建は不詳であるが、姓氏録によると、飛鳥戸造は百濟国主比有王の男瓊伎王から出ているによつて、瓊伎王を祀っているという説もある。三代実録には「清和天皇貞観六年八月十五日河内国無位飛鳥戸神社に正四位下を授けられ、翌二年十月十五日には正四位下飛鳥戸神社を官社に列せられ、更らに陽成天皇元慶四年八月二十九日には飛鳥戸神社に神領と田一町を賜りて春秋祭礼の費に当てられた。これ氏人主税助外従五位下百濟宿福有雄主殿權允正六位上御春朝臣有世等之請によりしがためなり」とある。年記不詳であるが、宮寺もあり常林寺と称した。寺は僧行基の開基にて、聖武天皇の勅願所になり、今は廃寺になっている。明治四十年四月二十日壺井八幡宮の境内に合祀され、大東亜戦争後元の地に鎮まった。



# 蔵之内日吉神社

くらのうちひよしじんじや

御祭神

大山咋命

御神徳

魔除け  
方災除  
鬼門除

例祭日

十月十七日

鎮座地 羽曳野市蔵之内一八〇  
電話  
H P

御朱印なし



## 由緒

当社は滋賀県日吉大社の分霊を勧請する。  
明治五年村社に列し、同四十年十一月十一日羽曳野市西浦の日吉神社に合祀され、境内地五畝十歩及本殿一坪と共に日吉神社の財産となるが、昭和三十七年十月二十日村人の願いにより分離独立した。境内地は一六〇坪ある。

# 野々上八幡神社

のうえはちまんじんじや

## 御祭神

八幡の大神

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
開運招福

## 例祭日

十月八日

鎮座地 羽曳野市野々上六二二  
電話 〇七二一九五五〇九四五  
H P

御朱印なし

## 由緒

当神社は奈良朝から平安初期にかけて野中寺とは宮寺形式となっていた。永和元年南北朝の争乱で社殿付近が野中寺城としての戦場となったため、寺と共に焼失する。

その後江戸期寛文年間に至って覺英律師による野中寺復興の折、寺の鎮守、「八幡宮」として再建される。祭神は「八幡大菩薩」であった。

明治初年の神仏分離令により、野中寺と分離、独立して「村社」となり、その後大津神社に合祀され昭和二十三年当山に復帰される。

昭和五十九年町有財産により社殿・平和の社（末社）が新築され境内が整備された。

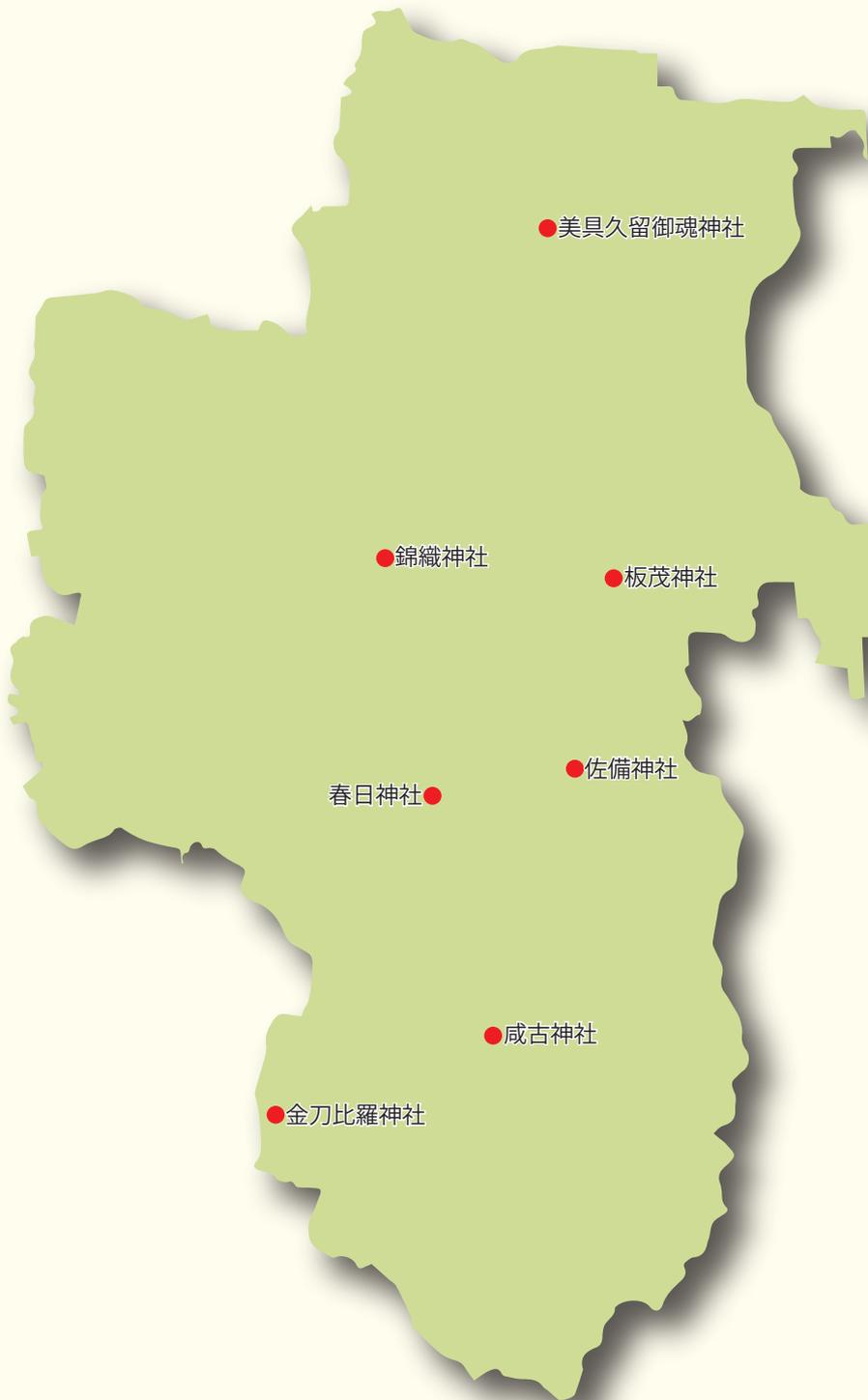
現在設置されている灯笼は宝暦五年、階段付近の敷石等は安政六年、また狛犬は文化八年篤志者また、氏子若中により設置されたものである。

昭和三十二年三月一日宗教法人野々上八幡神社として認承された。



# 富田林市

▶ 大阪府にもどる



# 美具久留御魂神社

(通称 喜志の宮さん)

## 御祭神

美具久留御魂神  
天水分神  
国水分神  
弥都波迺壳神  
須勢理比壳神

## 御神徳

病氣平癒  
良縁成就  
生業守護

## 例祭日

四月十五日



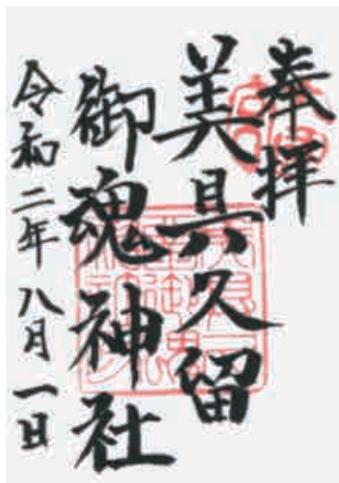
新しい神事由縁の出来事



厄難除おき変え神事風景

## 神社のおすすめ

「厄難除おき変え神事」平成三十年九月四日台風二十一号で大木が倒れ、御神威により、その枝が僅か数cmのお社隙間を通って落ち、お社崩壊を防いだ事由縁とする令和からの新しい神事です。



鎮座地 富田林市宮町三二二〇五三  
電話 〇七二二一三三三〇〇七  
HP <https://www.mi.gukurumi.tama.com>

## 由緒

崇神天皇十年、この地に大蛇が多く出没し農民を悩ました。天皇は「これは大國主神の荒御魂の荒ぶなり。よろしく祀るべし。」と仰せられ祀らしめられた。その後同天皇六十二年、丹波国の氷香戸辺の子小兒に「玉蔭鎮石。出雲人祭、真種之甘美鏡。押羽振、甘美御神、底寶御寶主。山河之水泳御魂。静挂甘美御神、底寶御寶主。」(日本書紀第五卷崇神紀六十年条・出雲国風土記)という神託があった。天皇はそれをお聞きになつて、活目入彦五十狭茅尊(垂仁天皇)を河内国支子に遣わし当社を祀らせ、美具久留御魂大神と御名を称えまつられた。この神託は「出雲大神は大國主命であり、大國主命は山河を泳ぎ渡つてきた和爾神(龍神)であり、水泳御魂大神である」と美具久留御魂大神の御神体を明らかにされたのである。

当社は歴代天皇からの崇敬厚く、文徳天皇の嘉祥三年(八五〇)には神階を従五位上に進められ(社記)、光孝天皇は河内大社の勅額を奉られた(文徳実録)。また延喜式には官幣に列せられ当国二の宮石川郡の総社とも称せられた(社記)。平安朝の頃河原の左大臣源融公が社頭に奉幣された時、祭壇をかすめてほととぎすが鳴き、大官人をして詠嘆措かしめなかつたという(社記)。往昔の神域は靈異ただならぬものであったことを知るのである。

南北朝時代には南朝歴代のご信仰も厚く、また楠木氏は上水分社(建水分神社、千早赤阪村鎮座)と共に当神社を下水分社と称し氏神として信仰したので、戦乱の間にも朝廷は、神社にしばしば参拝されたり、社殿を造営されたりして治世の安泰をお祈りになられた。

平安時代(千年頃)正東山という神宮寺が建てられ、隆盛に向かった。鎌倉末、鎌倉方が赤坂城を攻めた時、焼き払われたが、間もなく再建され天正の頃には十七坊に及び、香をたく煙が漂い、誦経の声が神山にこだまする神仏感応の霊地となっていた。天正十三年(一五八五)豊臣秀吉の根来攻めの兵火を浴び烏有に帰した。以後数十年間は復興されなかつたが万治元年(一六五八)から復興が始まり同三年拝殿の造営を以つて社頭ほぼ元通りの姿を取り戻した。しかし神宮寺は再び建つことはなかつた。明治に入って近郷村社を合祀し、病氣平癒や縁結びの御神徳、またすべての生業の守護神として信仰を集め、今日に至っている。

# にしこおりじんじゃ 錦織神社

(通称 錦織さん)

## 御祭神

品陀別命  
建速素戔鳴命  
菅原道真公  
春日大明神  
火産靈神  
外十柱

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月第二土曜日



本殿軸上半部は極彩色で彩られる



参道二百米の奥に本殿有り

## 神社のおすすめ



鎮座地 富田林市宮甲田町九一四六  
電話 〇七二二一二五二七七〇  
HP

## 由緒

当社の創建年代は詳かではないが、昭和十年国宝本殿修築の際、敷地の土中から古社殿に使用されていたものと推定される、鎌倉時代の古瓦大獅タロ一对、又藤原時代の物と推定される鏡瓦宇瓦が多数出土したことによって、藤原時代以前の創建であることが裏付された。

当地方は古来「錦部郡」と称し、大和朝廷に通ずる要路を占めていたために、浪速、京より水路を主とする交通の要点にもなつて、早くから大陸文化が移入され、「和名抄」に見える余戸郷、百濟郷との称もあり帰化人の郡落をなしていた。又「爾之古里」とも称され、後に錦部郡となつたものであるが、古代において百濟より帰化した諸藩が広く土着して、綾錦織等を朝廷に奉り、文化向上に貢献したことが伺われる。当社の鎮座地は錦部郡の最北端に位置し、郡の咽喉を扼し、社殿は南面して全郡を一望の内に見わたせる要所にある。現社殿は足利義教の勅進で、讃岐守三善貞行の手によって、正平十八年十二月に創建されたもので、室町時代には武門「武将」高僧等の崇敬甚だ厚いものがあつた様で、又社地社宝等の献納も度々であつたと言ひ伝えられて、付近に饗田、灯明田、日待田等の名称の存するのをみても知ることが出来る。然しこれらは中世に離散したものが多く、今残存しているものは、足利義満の母系紀氏国雄が奉納したと言ひ伝えられる、大盤若経百卷掛軸一幅、鎌倉時代の作、身長二尺八寸の多聞天の木像一軀があるのみである。社殿の修築等には当時の表門、高僧の關係しているところからみても、如何に彼等の崇敬の厚いものがあつたかを推察出来るのである。そもそもこの地方は石川源氏、錦織氏一族が在住した郷土であつて、同族等の氏神として、世に尊崇の厚かつたのは勿論、郡氏均しく崇敬の誠を捧げたことが記録に現われている。

明治五年郷社に列し、同四十年神饌幣帛料の供進神社に指定されたのを機会に、旧称錦織神社に復活した。その後昭和八年本社殿が国宝の指定を受け、大修築を行ひ「錦織造」の独特な優美建築の粹を集めて、同十一年に竣工した。古松鬱蒼として古社の面影を残し、雄大美麗な古代建築と相俟つて、賽する人の足をとどめさせるには十分な霊場でもある。境内地は三千九百坪ある。

氏は富田林市(旧川西村、錦織村の全域)である。  
神社は二棟、昭和四十四年六月に重文指定をうける。

# かすがじんじや 春日神社

(通称 彼方春日神社)

## 御祭神

天児屋根命  
金山彦命  
経津主命  
大己貴命

## 御神徳

家内安全  
病氣平癒  
学業成就

## 例祭日

十月第二土曜日



## 神社のおすすめ



鎮座地 富田林市彼方三二九  
電話 〇六一六六二三一三九〇八  
HP

## 由緒

彼方の東方宮山に在り、古文献によれば、今より約一千二百年前、当時、空海師、度々高野山に歩を運ばれる内、この地に来れば、東の方に春日神人現われ、ここに祀るべき旨申され、且つ

彼方や繁木が本に住なして

なほ万代と 守る国民

と歌一首を残して樹頭に蔭れ給いしに、師その神徳を仰いで此処に社を改められ、又この所を彼方の里と申された、と伝えられています。

式内には不詳であります、明治五年村社に列し、同四十一年十二月には、神饌幣帛料供進社に指定されています。

御垣内に鎮まります各社の内、大字伏見堂字古城の村社伏見堂神社(一言主神)、大字嬉字鹽の宮の同菅原神社には、別記の如くであります、白山社については、享和元年刊行された「河内名所図会」に滝溪山明王寺の鎮守として、慶長五年(一六〇〇)庚子九月八日、白山権現を勧請されたとあり、明治初年に当社に遷宮されました。

長年の起伏により、過去の諸行事は引き続きとだえていますが、例年十月の秋祭りに、各氏地区より地車が打揃い、参集して「にわか」等の奉納で賑わいます。

# ことひらじんじや 金刀比羅神社 (通称 金比羅さん)

御祭神

大物主神

御神徳

例祭日

十月十日



神社のおすすめ

鎮座地 富田林市大字嬉五五〇一  
電話 〇七二一三五六八七七  
HP



## 由緒

金刀比羅神社は同町にあり、崇徳天皇・大物主命・市杵島姫命を祀れり。明治五年讃岐國國幣中社金刀比羅宮崇敬者の講社を結びしに創まり、同八年二月遙拜所並に教會所として認可を得、同二十一年五月二十九日東成郡天王寺村字堀越に鎮座ありし巖島神社を此の地に移轉して、之に金刀比羅宮の神靈を合祀し、以て國幣中社金刀比羅宮の境外末社となり、同年十一月今の社名に改めたるに、同三十六年四月以來經濟を別立し單獨の神社行爲ありしを以て同四十年五月二十八日獨立の無格社と認められて大阪府の監理に歸せり。境内は四百四拾參坪を有し、本殿・幣殿・拜殿・神饌所を存す。氏地としてはなきも、崇敬者は大阪市内より堺市・南河内郡・中河内郡・豊能郡、奈良縣下の吉野郡・宇陀郡・高市郡・式上郡、滋賀縣下の彦根町・甲賀郡及び京都市等に亘りて貳萬戸以上に及べり。例祭は十月十日。

# 佐備神社

さびじんじや

## 御祭神

天太玉命  
松尾大神  
春日大神

## 御神徳

諸願成就

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 富田林市佐備四六七  
電話 〇七二一三四一六九九三  
HP <https://sabi-jinja.site/>

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

「獅子の子落とし」のことわざに由来し、這い上がろうとする子獅子、心を鬼にして愛情深く見守る親獅子を表す石像。



石段上の親獅子



鳥居前の子獅子

## 由緒

かつてこの地の周辺は石川郡佐備郷と呼ばれ、忌部氏（いんべうじ）の流れを汲む佐味氏の居住地でした。

佐備神社は文徳天皇の天安二年（八五八年）正月に創建され、延喜式内の神社にして主祭神として忌部氏の祖神とされる天太玉命（あめのふとだまのみこと）をお祀りしております。

明治五年に村社に列し、大正元年に神饌幣帛料供進神社に指定されております。

### 御鎮座・御社殿

御鎮座は天安二年正月（八五八年）

御社殿は化粧棟に「上棟文化五戊辰十」（一八〇八年）とあり、また大棟木に「？造 宮建長八年？四月？棟上」（一二五六年）と記されているが、この棟木は腐敗がひどく？の文字は消滅しており判読が難しい状態でした。しかし、この文字が記されている部分を切直し再び使用して修理することで建立の年代を後世に伝えるような意図があったと思われます。

### 四月 神楽祭

京阪神各地の神社には、色々な形式の「浪速神楽」が伝わっておりますが、佐備神社では「富永流浪速神楽」として約二十八座を伝承しております。

これらの奉納される浪速神楽をまとめて、太々神楽と称し、戦前は神社の御祭礼日に、一日かけて奉奏されておりました。

佐備神社では、この伝統を受け継ぎ、毎年四月に「神楽祭」を行っております。

# 板茂神社

いたもじんじや  
(通称 板持神社)

## 御祭神

素盞鳴命  
応神天皇  
大己貴命  
安閑天皇

## 御神徳

## 例祭日

五月二十日



鎮座地 富田林市西板持町八―七―三九  
電話 〇七二一―七二一―〇五三四  
H P

御朱印なし

## 由緒

由緒不詳。  
明治四十年十一月十三日建水分神社に合祀されたが、氏子間の争いにより、元の地に鎮座された。

# 咸古神社

こんくじんじや  
(通称 咸古さん)

## 御祭神

神八井耳命  
天太玉命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十七日



## 神社のおすすめ

御朱印なし

鎮座地 富田林市竜泉八八六  
電話 〇七二一三三三〇〇七 (美具久留御魂神社)  
HP

## 由緒

佐備川の中流域、嶽山の東南斜面に鎮座する。

創建年月は不明であるが、牛頭山龍泉寺に伝わる弘法大師の同寺再興の伝説を採り、弘仁十四年(八二三)正月の創立として称している。この辺り一帯は古代の「紺口県(こむくのあがた)」でその紺口県主一族がその氏祖である神八井耳命を祀ったとされる。

延喜式神名帳では河内国石川郡所屬の小社となっている。

当地周辺は南北朝時代には南朝方の拠点となつて兵火にさらされ、また戦国期の嶽山合戦や龍泉寺合戦でもたびたび当社は兵火を受けたが、江戸期には嶽山東側中腹にある医王院龍泉寺の鎮守社として存続し、牛頭天王社と称していた。

明治初期の神仏分離によつて龍泉寺と分かれ、式内・咸古神社に比定され、明治五年に村社となり、同四十二年に東条村大字甘南備の村社であつた成古佐備神社を合祀し、天太玉命を相殿に祀つた。

# 河内長野市

▶ 大阪府にもどる



# にしんだいじんじや 西代神社

御祭神

国常立尊

御神徳

例祭日

十月十一日



鎮座地 河内長野市西代町一六一五  
電話 〇七二二一五三一七六二  
H P



## 由緒

創建の年月は不詳であるが南北朝時代に於ては南方諸將の崇敬が篤かつた楠正成の河内七城の一として元弘の昔金胎寺城を構築した時その鎮守として篤く信じ其の子正儀は天野山の行在所に於て後村上天皇を守護する時当社に祈願をこめて篤く信じて其の子正儀は久を念じて天皇も深く尊信せられ吉野行幸の勘当社に御駐章あらせられた江戸時代天和二年八月本多伊予守忠恒はこの地方を領して陣營を置きその子忠統は父の遺領を継承して当社を信仰し正徳年中には神輿矛手洗鉢等々の寄進があつた同正徳五年十月宗源の宣旨を以て正一位の神位を授けられ西代大明神と称し明治の始め社号を西代神社と改める明治四十一年浦野神社西山神社菅原神社が合祀された

# 高向神社

たこうじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
蛭子命  
保食神  
白山姫命  
天兒屋根命  
外一柱

## 御神徳

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 河内長野市高向二九一  
電話 〇七二一―五四―一〇〇七

H  
P

御朱印なし

## 由緒

本地は錦部郡の内、後宇多院御領目録によっても高向庄と呼ばれていた。姓氏録右京皇別に「高向朝臣石川朝臣同祖、武内宿禰六世孫猪子臣之後也」と見え、高向氏の居所であった。推古紀に記載されている隋に留學生として遣はされた高向漢人玄理もまた、この地の漢人であった。阪上系図には、高向漢人、高向村主、高向調史等の人々は阿智王に随いて帰化した所の七姓漢人の一である。当社の創建は不詳であるが、高向氏一族がその祖神を祀った事よりの創建と思われる。村に氏子座と称するものがあり夏秋両度の祭典には、この氏子座の記録によって座席を設け、神酒を拝戴する順序を決定し、その格式嚴重であるが、二百数十年前、代官の養子町井伴吾が、己れの座席の低きを不快とし火を放つて座の記録、社記その他、郷土の得がたい記録文書を灰燼に帰し、ついに伝わらないままに至った。

明治五年に村社に列し、同四十年十一月十二日には武甕槌命、経津主命、天兒屋根命、比咩大神を祭神とする大字日野字坊垣外の無格社春日神社を、同月十八日には前記春日神社と同神を祀れる大字溝の村社春日の宮を合祀した。

# 菅原神社

すがはらじんじや  
(通称 千代田神社)



神社のおすすめ

※他朱印あり



## 御祭神

菅原道真公  
足仲津彦命  
稲田姫命  
相殿天児屋根命  
底筒男命  
外一柱

## 御神徳

## 例祭日

十月十一日

鎮座地 河内長野市市町四六九  
電話 〇七二一五三一七二三  
HP

## 由緒

本地はもと河内国錦部郡に属していた。  
明治五年村社に列し、明治四十年十月十九日稲田姫を祭神とする大字向野字玉貫の村社伊予神社、同月十九日足仲津彦命、息氣足姫命を祭神とする大字市新田の木戸神社（村社）を合祀し、翌四十一年十二月神饌幣帛料の供進社となる。本社境内には皇大神宮及び八幡神社の末社があり、伊予神社本殿を本社境内の末社とし、相殿に祭祀し、大國主命を鎮座する。

ながのじんじゃ  
**長野神社**  
(通称 長野のえべっさん)

**御祭神**

素戔鳴尊  
事代主命  
菅原道真公  
速玉之男力  
外十柱

**御神徳**

家内安全  
疫病除け  
商売繁盛

**例祭日**

十月十一日



河内長野市

鎮座地 河内長野市長野町八一一九  
電話 〇七二二一五二二二〇〇四  
HP



**神社のおすすめ**

毎年一月九日・十日・十一日に行われる十日戎祭は、商売繁盛福徳円満を願う多くの人々で賑わう。

**由緒**

当社の創立年代及沿革は不詳であるが、古来の伝説によれば、昔この長野郷に二十五社の鎮守があり、当社はその一つで、闇夜炬火を点じて牛頭天王をこの木屋堂（神宿）の地に勧請したという。ために今に至るまで秋の大祭には毎年氏子の手により社頭に二メートル大の松火をたて、これを焼いて創始の当時に徳ぶのを神事としている。  
本殿は昭和十六年国宝（現重要文化財）に指定せられ、天文二十年前後の造営といわれる。正徳年間までは木屋堂の宮と称せられ、また牛頭天王宮といわれていたものを、慶応四年に長野神社と改号され現在に及んでいる。  
摂末社に春日宮、熊野宮、高良宮、多賀宮、八幡宮、戎社、天神社がある。

# えぼしがたはちまんじんじゃ 烏帽子形八幡神社

(通称 上田八幡)

## 御祭神

素盞鳴命  
足仲彦命  
神功皇后  
応神天皇

## 御神徳

## 例祭日

十月十日



## 神社のおすすめ



鎮座地 河内長野市喜多町三〇五  
電話 〇七二一六三一〇〇二七  
HP

## 由緒

烏帽子形八幡神社は、河内長野市喜多町西方にある国史跡烏帽子形城跡の東山腹に社殿があり、創建の年月は詳らかではないが、昔烏帽子形山には所謂河内七城の一なる烏帽子形城と言う一支部があつて、楠小二郎が拠つており、その頃此の城の鎮護として創建祭祀したものと伝えられている。神社は、その後久しく荒廃していたが、文明十二年（西暦一四八〇）年室町幕府足利義尚の時代、河内源氏の末裔と言われる石川八郎左衛門尉が、新たに入母屋造りの社殿を建立した。後、室町末期に一度修理されたのみで、荒廃していたものを、楠氏の後裔と言われる甲斐荘喜右衛門正保が、元和三年（西暦一六一七年）徳川秀忠の時代、大阪天王寺の普請奉行を勤めた時、その竣工後、自分の居城の鎮守が甚だ荒廃しているのを嘆き、其の余材を以て引き続き、修繕造営し、元和八年（西暦一六二二年）八月上棟した。尚、この神社の境内には、正保寺、徳寿院と称する天台宗の宮寺があり元は高福寺と呼ばれ、本尊に釈迦と聖観音を祀っていた。この寺は、楠正成の信仰篤く、大般若經の転讀を行い、後村上天皇が賊難を吉野にさけ給う時、特にこの梵鐘を持ち運ばれたと言われる。この梵鐘は「河内国高福寺鐘康永元年（西暦一二四二年）癸午八月楠氏奉獻」の由来が刻まれており、今も奈良県賀名生の堀家に所蔵されている。寛永年中（西暦一六二四年〜一六四二年）より、徳川將軍の命により、徳寿院は観心寺の榎本院、経藏院、五智院、理趣院、心王院、威徳院、真福院の衆中より、僧衆五人宛六人で当社において、天下泰平の祈願の為、正月、五月、九月に永代般若經の転讀を行ったが、この経巻は楠氏一族の寄附により、今は観心寺に所蔵されている。甲斐荘喜右衛門正保の子、正述は当時長崎奉行の職にあり万治二年（西暦一六五九年）四代將軍家綱の時代より三年にわたり八幡神社の境内に位牌堂、経堂、上下の鳥居を建立したが、位牌堂は現存しない。明治初年、神仏分離により宮寺を廃絶し、神社のみ明治五年村社に列し、明治四十年十月十九日大字小塩字宮山の村社八幡神社を合祀し明治四十一年十二月神饌幣帛料供進社の指定を受けた。

本殿は昭和二十五年重要文化財に指定され昭和四十年七月より解体修理し、四十一年九月竣工、文明十二年当時の姿に復元された。建築様式は、桁行三間、梁間二間、入母屋造檜皮葺、身舎は円柱、正側三方に縁をめぐらし、中央に五段の木階をつける。擬宝珠の高欄を備え、側面後端に脇障子をおき、向拜は三間の総向拜で向拜浜床を設ける。内部は、内陣と外陣に分かれる。本殿の建立年代は、棟札、及び、保存修理工事中、棟束の墨書の発見によって文明十二年（一四八〇年）であることが判明した。

末社

恵比須社（島根県美保神社御分霊）祭日一月七日  
白山社、平野社、稻荷社（伏見大社御分霊）

# 川上神社

かわかみじんじや

## 御神神

素盞鳴命  
外八柱

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月第一日曜日



鎮座地 河内長野市鳩原七八九―一  
電話 〇七二二―五二二〇〇四（長野神社）  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

鳩原は往古河内国錦部郡に属し、続日本紀文武天皇三年三月の条に「甲子、河内国献白鳩詔免錦部郡一年租役」と見え、白鳩を献上した所より起ったと云う。当神社は、元鳩原神社と称したが、創建の年月は不詳であるが、平安中期に観心寺第一世（弘法大師の孫弟子）真紹律師が弥勒寺を鳩原に建てて隠棲し、その鎮守社として牛頭天王を勧請したのが創始らしく、現在社頭拝殿より上位の石灯は室町時代以前の形式があり、境内土蔵は弥勒寺の大般若経蔵である。社務所に隣接した部落集会所は元の弥勒寺本堂で、社務所は僧の住坊であった。昔より鳩原、石見川、小深、太井、鬼住、寺元、河合寺の七ヶ村の産土神であったが、観心寺の鎮守として同寺境内に移転し、江戸初期に旧地に復座したが、氏は各村に離れ鳩原のみの産土神となった。

明治五年村社に列し、同四十年十月旧合寺村の村社河合神社（天照皇大神、天児屋根命）旧寺元村の八坂神社（素盞鳴命）及び寺元神社（大国主命）旧小深村の小深神社（素盞鳴命）旧石見川村の御嶽神社（瓊々杵命、木花咲耶姫命）旧太井村の八幡神社（応神天皇）を合祀し、現今の社名に改め、川上村々社とし、同四十一年十二月神饌幣帛料供進社に指定された。境内は二二五坪で、本殿、摂社（二社）（孰れも桧皮葺）拝殿及び土蔵並に社務所を有している。

# 住吉神社

すみよしじんじや

## 御祭神

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
息長足姫命  
武内宿称

## 御神徳

## 例祭日

スポーツの日（令和三年から）



鎮座地 河内長野市小山田四五三  
電話 〇七二一―五二一―五三四五

H  
P



## 由緒

当社は小山田の東南字尾上山の丘陵上に鎮座し、神功皇后三韓征伐のとき、深く表筒男、中筒男、底筒男の三神に御祈願されて、凱旋の後摂政五十二年四月中の卯の日をもって、此地に祀り、その後豊浦神社と称したが、明治の初年今の名称に改められた。本殿は桧皮葺住吉造りにしてその他に、拝殿神饌所、絵馬所、神庫、社務所がある。明治六年郷社に列し、同四十年十二月二十六日大字下里の村社青ヶ原神社、大字天野山字高瀬神社を合祀した。

# あかさかかみのやまじんじや 赤坂上之山神社

(通称 上の宮)

## 御祭神

仲哀天皇  
神功皇后  
應神天皇

## 御神徳

## 例祭日

十月十日



鎮座地 河内長野市三日市町一―二五―二  
電話 〇七二二―五二―六九七五  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年月は不詳であるが、延宝六年九月二十八日養愚和尚が、当社社の下に現存する宮寺興禪寺の初代住職に任せられた記録がありこれと前後して創建せられたものであるか、それ以前より住民達の氏神として祭祀せられたものであるか明らかではない。もと上の宮八幡宮と称して、維新の後、今の社名に改められた。故に三日市の上の宮と称す。

明治五年村社に列し、同四十一年二月六日天見村大字清水字名倉谷口の無格社菅原神社を合祀した。地形は男山八幡宮に似ている。本殿は桧皮葺であったが、明治三十二年五月銅屋根に改造された。末社に菅原神社、高良神社、諏訪神社、琴平神社、稻荷神社、若宮神社がある。

# 加賀田神社

かがたじんじや

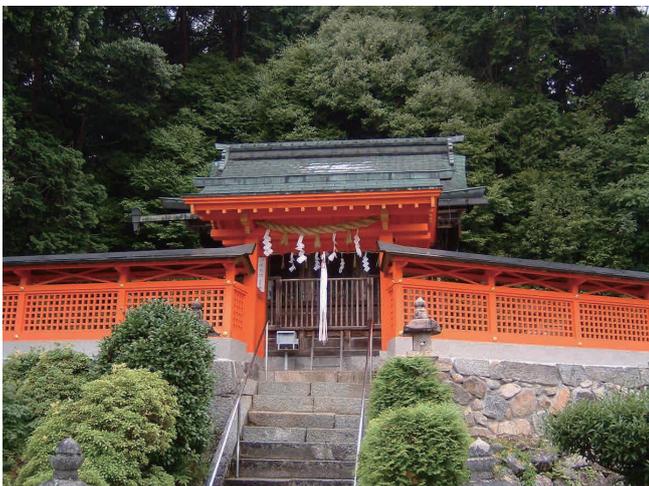
## 御祭神

譽田別命  
足仲彦命  
息長足姫命

## 御神徳

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 河内長野市日野一三五  
電話 〇七二一六四一七五三  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

当社の創建年月は不詳である。単に十一月の卯日に宇佐八幡を勧請したと伝えるのみである。

文明十一年十二月二十六日社殿を再建した。当時は社領多く境内亦広大であったが、文禄三年の検地により没収された。

もと宮寺があつて、慶長四年九月に作成の図面によれば、境内に奥の坊、北の坊、南の坊、宮の坊、薬師堂があつたが、無禄となつたため坊舎は漸次頽廢した。豊臣氏五奉行の一人である増田長盛は当社を崇信し、御供田として前記四坊の跡地を寄進した。

元禄年中に至つて、氏子で堺に住いした谷善右衛門が私費を投じて社殿を改修した。現社殿が是れである。嘉永六年七月十三日夜出火し、拝殿、薬師堂中門、玉垣等焼失した。安政五年八月再興する。

氏子の内勧請当時より家系の絶えていない氏子を座衆と称え、毎年一月八日祓を着け社頭に会し、村内安全祈禱祭を執行する慣習がある。

明治五年村社に列し、同四十一年三月二十七日大字唐久谷字和佐谷の村社和佐神社、大字石仏字上山の同八幡神社、同所同上山神社を合祀する。社後に当る山脚に一尺許の自然石があり婦人の側面向きに座し片袖の半ばを前に上げた形をしていて、里人が崇信し、山の神と呼んでいる。什物として、社に縁起書一卷、鏡一面（村田美濃守藤原宗久作）、神輿一台を蔵している。

# かにいじんじゃ 蟹井神社

(通称 かにいさん)

## 御祭神

神武天皇  
応神天皇  
神功皇后  
菅原道真

## 御神徳

延命長寿  
病氣治癒  
安産子育て守護

## 例祭日

十月第二週土日



鎮座地 河内長野市天見四二八  
電話 〇八〇一五七一〇一六八七〇  
HP <https://kanijinja.jimdofree.com/>



## 奉拝 蟹井神社

令和二年 八月十五日

「祭神神武天皇・応神天皇・神功皇后」菅原道真  
ゆかりの地楠木正成(室津合戦) 藤田幸村(記伊弉志)

## 神社のおすすめ

蟹井神社の、蟹のハサミのごとく、きっぱり悪縁を切りたい。厄除けをしたい。さるかに合戦の蟹のように、子宝に恵まれたいと祈願をされる方も多い。



お守り 各色300円



蟹井神社の神輿渡御

## 由緒

氏地：天見、岩瀬（大阪府河内長野市）

大阪府河内長野市に鎮座する神社。氏地は河内長野市の天見、岩瀬。

秋に「提灯祭」という高提灯を仕立て、祇園囃子を唄いながら参拝する祭礼がある。

古代当地方を開拓した人々が、社を建て産土の神として祀る。

一〇五四年 天喜二年（皇紀一七二七年）八月十九日、中世平安時代、当地方は甲斐の庄といわれ、御冷泉天皇の御代に創建。当時は甲斐神社とされ、神倭磐余彦命外三柱を祀ったとされる。

一三三三年（正慶二年正月五日・皇紀一九九七年）南北朝時代、楠木一族が当社で戦勝祈願され、南朝の武將は当社を崇敬、戦勝祈願の場所とする。北朝の足利氏一族と周辺（出合の辻）において合戦し、紀伊国御家人 井上入道、山井五郎以下五十余人討ち死にする。この戦いは、河内の国、甲斐の庄、「安満見合戦」といわれ、当社も災害を受け、焼失する。また楠木一族が出合尾の塚に寄手塚逆修供養碑を建て供養される。当時は宗廟なる社殿を存していた。

一六七六年（延宝四年）大火に遭い再び社殿焼失する。一六七六年（皇紀二三三六年）当時に蟹井神社と改称されたのではないかと推定される。今の社殿は其の後の再建である。

一八七二年（明治五年）に村社に列せられ、一九〇八年（明治四一年）十一月五日に岩瀬の村社菅原神社・若宮神社・住吉神社・若宮皇女神社・高良神社・八阪神社を合祀し、同四年十二月神饌幣帛料共進社に指定される。

一九四六年（昭和二十一年）宗教法人として神社本庁に所属し現在に至る。

天見は中世「甲斐の庄」と呼ばれ、蟹井神社は当初の甲斐神社の本来の音が訛って変化し、蟹井神社とされたと言われる説と、社域の南、天見川に蟹井の淵という深淵があり、そこからご神体が出現したため由来したとされる説が、社伝に伝えられる。

日本の初代天神神武天皇が、御東征の節紀の川を上り、紀見峠にて賊慮の状況を視察なされた時、今の神社の北側に天見川の巨石、小石を集め磐境として神籬を建て、皇祖天津神を祀り給いて戦勝を祈願されたことから、神武天皇（神倭磐余彦命）外三柱を祀ったとされる。

蟹井神社 境内社六社（元禄五年の記録より）

1) 菅原神社（祭神：菅原道真公） 2) 若宮神社（祭神：大雀命） 3) 住吉神社（祭神：表筒男命、中筒男命、息長帯比賣命） 4) 若宮皇女神社（祭神：長日賣命） 5) 高良神社（祭神：玉多礼命） 6) 八阪神社（祭神：建速須佐男命）

はちまんじんじゃ

# 八幡神社

(通称) 流谷八幡神社 八幡さん

## 御祭神

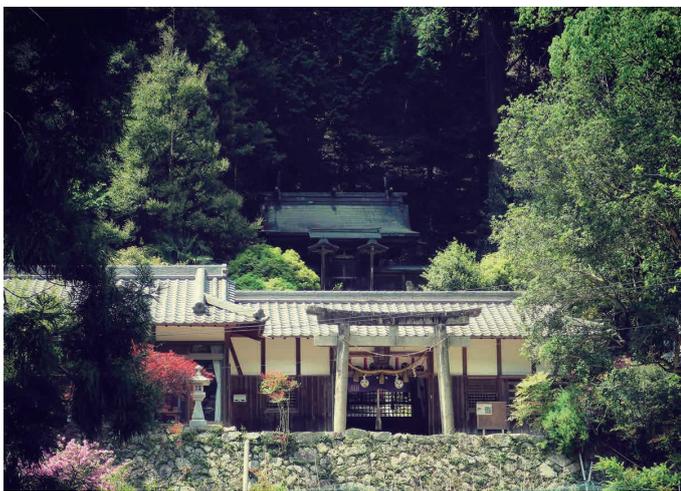
誉田別尊(応神天皇)  
息長足比賣命  
比賣大神

## 御神徳

必勝  
厄除け開運  
安産守護

## 例祭日

十月第二日曜日



河内長野市

鎮座地 河内長野市天見二二一  
電話 〇七二二一五二一三九八一  
HP



## 神社のおすすめ

- ①大阪府の天然記念物に指定されている銀杏の御神木があります。
- ②勧請祭で掛けられた注連縄。長く保てば保つほど豊作と伝わる。



①イチョウ



②勧請杉と勧請縄

## 由緒

### 【創建】

長暦三年(一〇三九)、京都石清水八幡宮の根本神領だった当地(河内国錦織郡甲斐庄山郷流谷)に八幡神が勧請されたことを起源としています。甲斐庄は、宇多天皇の皇子式部卿敦實親王(八九三〜九六七)が康保三年(九六六)以前に石清水八幡宮に親王領を寄進されたことが石清水文書で確認できます。

敦實親王は近江源氏の祖であり、後裔佐々木道誉が北方方恩賞として足利尊氏から甲斐庄地頭職を宛てがわれたのもこの事実を踏まえたとも考えられます。

### 【戦災からの復興】

楠木正成は鎌倉幕府倒幕に兵を挙げました。元弘三年(一三三三)千早城攻防戦の前哨戦として、安満見(天見)合戦の兵火により八幡宮は炎上します。八幡宮再建に当たっては法印賢覚が勧進活動をしたことは湯釜に銘記されています。法印賢覚は八幡宮に隣接した流谷極楽寺に湯室を建て、功德風呂極楽湯の開湯の祖とも言われます(天見温泉の由来)。

### 【古例祭】

### 勧請祭

長暦三年(一〇三九)石清水八幡宮の御神霊が勧請され、神様が御渡りになったという伝承に基づき、例年一月六日におこなわれます。総代が餅わらを持参し、およそ二〇〇尺の注連縄を緋いあげ、えいらくと呼ばれる玉串と御幣を一二箇所祀り、流谷川の勧請杉から対岸の柿の古木に固く結ぶ荘厳にして珍しい神事です。里内では綱打祭と呼び、この注連縄の切れる時期により、その年の豊作の良し悪しが占われると伝えられています。近年は一月六日に近い休日を祭日と定めて神事をおこないます。河内長野市指定民俗文化財に指定されています。

### 探湯祭

神庭を清浄にして、湯釜を拝殿の前に置き、お湯をたぎらせ神米と神酒と塩を加え笹葉でかきまぜます。その熱湯を氏子におかけする神事です。夏越しの禊祓と同様であり、無病息災、家内安全を祈願するものである。神事を終えた後、お湯や笹葉を持ち帰る習慣があり、里内では「湯釜神事」とも言われています。現在神事に用いられる湯釜は昭和九年の作であるが、南北朝時代より伝わる湯釜は当社の宝物のみならず大阪府重要文化財の指定を受けています。近年は七月十二日に近い休日に神事をおこなっています。

# 天神社

## 御祭神

天照皇大神  
伊弉諾命  
伊弉冊命

## 御神徳

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 河内長野市滝畑七三  
電話 〇七二一―二三―三〇〇七  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建年月は不詳である。往時は氏子に小川座、中座、一族座、南座等があつて、祭典の時厳格なる座席と神酒拝戴の順序があつたが今は無い。

明治五年村社に列し、明治以後無格社鎌倉神社、城崎神社、高山神社等を境内に移し本地一円を氏地とした。

現存する祓いに用いる時の湯上げの釜は一斗五升の水を入れられ、其の形態と言ひ紋様と言ひ古雅愛すべきものである。釜の鉢巻きには次の文字を陽刻する。「長禄四年三月八日大梵天王宮御宝前」とあり、金石文としても貴重な資料である。

# 大阪狭山市

▶ 大阪府にもどる



# 狭山神社

（通称 半田の大宮）

## 御祭神

主神 天照大神  
素盞鳴命  
外四柱

## 御神徳

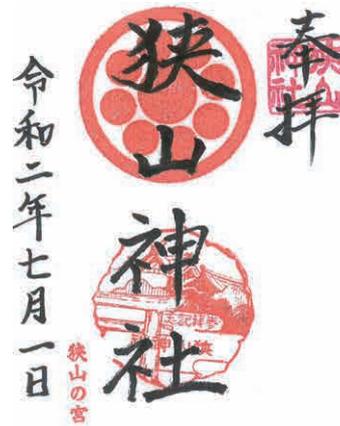
家内安全  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月十日



鎮座地 大阪狭山市半田一丁目二三  
電話 〇七二一三六五〇九〇五  
H P



## 由緒

当社は狭山の郷の鎮守として崇敬され、早くより歴史にあらわれ、式内社として近郷の神社のなかでも社格が高く、狭山池を俯瞰し狭山の住民から朝夕仰がれるのは、おそらく狭山池の築造以前から、現在の狭山付近に住む人々に崇敬せられたのであろう。伝えによると、南北朝動乱のために社殿が焼けたので、室町時代に再建したといわれ、本殿はケヤキ材の住吉造でできている。その当時の記録を見れば、次の様な事が記載されている。

### 植田庄牛頭天王社記

抑当社者人皇十代崇神天皇依願令齋祭賜矣、延喜式所載神名帳狭山之神社是也同天皇御宇令堀河内国狭山池依之百姓大楽也日本書紀ニモ見エタリ蓋狭山者山之名也堀池揚其植土此所因以植田芸也。今乎植田作半田也

所載神名帳植田在狭山神社祭神

牛頭天王社天照皇大神。素盞鳴尊二座末社大歳神岳主社大山祇神植土社植安姫神

足王社大国玉神水本社瀬織津姫岐神（伊弉諾尊枝ヲナケ玉フ是岐神トナル不淨

ヲヨクルノ神也因以社、左右ニアリ

幸神社猿田彦大神一座

所載神名帳

狭山堤之神社稻倉魂神三座

右之社記者当社古老伝記及以河内古風土記也者也

千時明応二癸丑曆六月廿一日

以上は室町時代における狭山神社の祭神である、ここに記された明応二年は、応仁の乱を去る二十余年のちであるが、動乱の不安はなお残っていたであろう。本殿社殿共に室町以後の建築様式を示すのもそのためであろう。現在本殿の外摂社として狭山堤神社、稻荷神社、戎神社の三社と末社八社鎮座されている。この中でも狭山堤神社は、明治の神社の合併のさい狭山神社の境内に合祀され現在におよんでいる。国史上の初見は狭山神社と相前後してあらわれ、狭山堤の神は池の築造に直接功績を遺された印色之入日子命を祭神とし、延喜式に収録されている式内社である。かようにして現在の狭山神社は上述十数社を合わせ町民によって守られている。

さん と じん じゃ  
**三都神社**  
(通称) 熊野三所権現・熊野神社

**御祭神**

伊弉諾尊  
伊弉册尊  
須佐之男尊

**御神徳**

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穰

**例祭日**

十月十一日



三都戎石像

**神社のおすすめ**



鎮座地 大阪狭山市今熊五一六四七  
電話 〇七二一三六五二二四一六  
HP

**由緒**

当社は南河内郡狭山町今熊の西北字金蔵院原にあり、もとは熊野神社と称し、創建は明らかでないが、今の社殿は天文十五年（一五四六年）の再建と伝えられる。社地は往古より除地であり、元禄十三年（一七〇〇年）の反別改帳に「老町歩五十間六十間氏子神三所権現境内、但従往古除之」と見えている。社伝によれば三十六代孝徳天皇（六五〇年頃）頃の創立と考えられるが享禄年間（一五三〇年頃）兵火にかかり、社殿・堂塔・神宝・書類等焼失したが、朝野の崇敬厚かったため、天文十五年九月氏神三体の御尊像始め社殿・社寺の金蔵寺毘沙門堂等を再建して、ほぼ旧に復す。寺僧諦観再建し、その棟札今に残っている。境内に百度石あり、その銘に天文十八年（一五四九年）とあり。明治維新神仏分離の際、金蔵寺は廃絶し、神社のみ残り明治五年村社に列し、同四十一年十二月には神饌幣帛料供進社に指定せられた。

境内は二五三坪あり、春日社・稻荷社戎社の末社あり、明治四十年十二月二十三日大字岩室字宮山の熊野社、同大字字笠塚山の琴平社、大字字愛宕山の愛宕社、大字濁池の殿島社、大字菜葉木字宮谷の八幡社、大字西山字菰池原の琴平社、大字大野字万灯塔の八幡社、大字山本字宮谷の稻荷社を合併して今の社名に改め、三都神社と称するに至った。本村全部を民地となし十月十一日を例祭と定めた。

# 龍神社

(通称 龍宮さん)

御祭神

水波能売命  
天水分神  
国水分神

御神徳

五穀豊穰

例祭日

六月一日



大阪狭山市

鎮座地 大阪狭山市大字岩室二四三九一  
電話 〇七二一三六五〇九〇五  
H P

奉拝

龍神社

令和二年六月一日

## 由緒

当社は狭山池の中に奉祀してある神社である。  
往古、大旱魃に農民が苦悩の上、龍神を勧請し祀ったのが、当社の創始である。嘉永六年五朔日、小池辰巳角の堤上に移し、水勢の防禦のため現在の池の中に築造移転鎮座したものである。  
地元部落の氏神として崇敬して来たが、狭山神社の氏子として二重氏子となった。現在は氏子もなく、狭山池土地改良組合の人々により維持されている。

# 南河内郡 太子町

▶ 大阪府にもどる



# 科長神社

しながじんじや

## 御祭神

級長津彦命  
天兒屋根命  
誉田別命  
級長津姫命  
武甕槌命  
外四柱

## 御神徳

## 例祭日

七月二十七日



南河内郡太子町

鎮座地 南河内郡太子町山田三七七八  
電話 〇七二一九八一〇一三六  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は太子町山田東条にあり、延喜式内の神社である。もと二上山にあつて、二上権現と称したが、四条天皇の暦仁元年此に遷座されたといわれ、俗に八社大明神と呼び、華表には元禄十四年葉室大納言藤原頼孝の筆に成る「八社大明神」の額がある。又二上山峰の古跡には今蛭子祠を鎮座す。

明治五年郷社に列し、同四十年十月十九日、春日の村社素盞鳴尊神社、太子字上城の村社科長岡神社を本殿に合祀した。

鳥居前の御手洗は八精水と称し、これは大和刀劍鍛冶当麻氏支族の、鍛錬の湯に用いたと伝えられている。

末社の一つである土祖神社、一名恵美須神社は息長宿称、高額姫命を合祀す。神功皇后の皇妣で、科長の里の氏神として古くより、現在の地に祀つてあつたが、当社がここに遷座された時末社となつた。又此の地は神功皇后の御降誕の地と称し、皇后の御名になる息長足比売は、ここより出られたと伝えられている。本殿は三間流造、千鳥破風、桧皮葺で拝殿、神楽所、社務所等がある。社宝として神功皇后雛形兜があるが、これは皇后三韓征伐の時、鍛冶をして御所用兜の雛形として鍛えさせた物と伝えられている。

かすがじんじや  
春日神社

御祭神

天兒屋根命  
比咩命  
武甕槌命  
經津主命  
品陀和氣命  
外三柱

御神徳

例祭日

十月十六日



鎮座地 南河内郡太子町春日一六四二  
電話  
H P

御朱印なし

由緒

旧磯長村大字春日の産土神で、明治五年四月村社に列格し、明治四十年十月春日西部落の素盞鳴命社を合祀し今日にいたる。

# 南河内郡 河南町

▶ 大阪府にもどる



# 壹須何神社

いちすかじんじや

## 御祭神

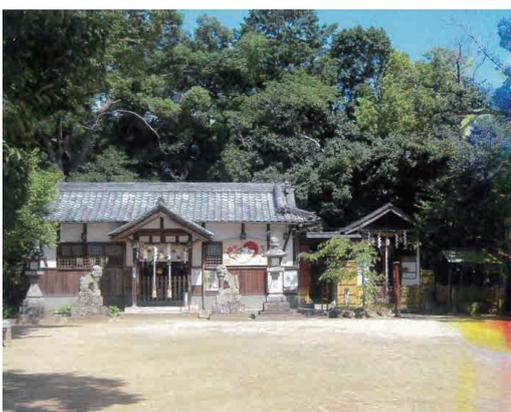
大己貴命  
天照大神  
天兒屋根命  
品陀別命

## 御神徳

家内安全  
病氣平癒  
厄除開運

## 例祭日

十月の第三の土曜日



神社のおすすめ

鎮座地 南河内郡河南町一須賀六二八  
電話 〇六一六六二三一三九〇八  
HP



令和 年 月 日 参拝

## 由緒

本地はもと石川郡に属し、当地方は古くは石川氏の居所であった。当社の起源は詳らかではないが、恐らくは「渡会氏神名張考證」などにも説かれているように、蘇我の本支族がその祖廟として、宗祖石川宿禰を祀ったものと思われる。延喜式内社に列し、一天神とも云う。大日本史神祇志には「今俗云市河明神」とし、河内名所図会は、「一須賀神社は一須賀村にあり延喜式内今天神と称す、当村大ヶ塚村の産土神也、宮寺に一面観音を安置す」とある。これにより宮寺のあった事が窺われるが、盛衰は不明である。天正十七年伊賀守より、境内免許の御証文を下され、後慶長十三年片桐市正の検地の節、宮山の内、開作の地の分御竿入高一石三斗五升六合、先年の旨を以って、右の高免除され、天正十七年豊臣秀吉、其の臣伊藤秀盛をして、当社の祈禱と境内免許の証を下された。その時祈禱のため伊藤秀盛の奉納した湯釜は今も社宝として保存している。

明治五年村社に列し、同四十年九月十九日大字東山字上条の村社菅原神社を、同年十一月二十八日大字南大伴字宮の前の村社降旗神社を合祀した。老樗が境域をおおい、本殿は春日造りで桧皮葺きである。又この地方は楠正成の時代に石川源氏の拠る所であった、この神域もその当時城塞の一部として利用されたようである。

# 磐船大神社

いわふねだいじんじや

(通称 梅の宮)

## 御祭神

饒速日命  
表筒男神  
応神天皇  
天照大神  
中筒男神  
外六柱

## 御神徳

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 南河内郡河南町平石四八四  
電話

H  
P

御朱印なし

## 由緒

創建以来沿革明かでない。  
神代のむかし、饒速日命が諸神と共に、天磐舟に掉してこの峰に天降ったと伝えられ、此の峰を哮ヶ峰と称する。  
その後高貴寺の鎮守となり、慈雲尊者は、岩舟宮及び撰社を合わせ糶宮として、葛城神道の道場とせられた。  
明治初年神仏分離に際し高貴寺と別れ村社に列し今日にいたる。

# 鴨習太神社

かもならいたじんじや

## 御祭神

天照地照彦火明命  
串玉命  
饒速日尊  
高皇産靈尊

## 御神徳

## 例祭日

十月十八日

鎮座地 南河内郡河南町神山五九五  
電話  
H  
P

御朱印なし



## 由緒

当社は中村大字神山の村中、千早街道の西側に鎮座している。河内誌、神祇志料は皆此の地と書かれているが、大日本史神祇志には、神山村とし、異説として「或芸、在平石村河上哮峰」とある。  
当社は延善式内の旧社であるが、創建の年月は不詳である。社域は狭少である。  
明治五年村社に列した。

# 南河内郡 千早赤阪村

▶ 大阪府にもどる



# たけみくまりじんじや 建水分神社

(通称 水分神社)

## 御祭神

天御中主神  
瀬織津比売神  
天水分神  
水波乃売神  
国水分神

## 御神徳

## 例祭日

四月二十五日



鎮座地 南河内郡千早赤阪村水分三五七  
電話 〇七二一七二一〇五三四  
H P

## 御朱印なし

## 由緒

当社は崇神天皇五年の創建で、延喜式神名帳に「河内国石川郡建水分神社」とあり、又三代実録に「貞観五年八月授正五位下、同十六年三月十四日授従四位下、元慶三年九月二十五日授従四位上」とあり、世々皇室の崇敬極めて厚く後醍醐天皇の御代に至つて、建武甲戌年九月楠正成に勅して山下にあつたのを、山腹に移し神殿、拝殿鐘楼等を再営させ、稲田若干を寄進して神供にあて、延元二年四月正一位を授け給うた。社号の額は楠正成の筆と伝えられ、以来金剛山の鎮守である。

摂社楠神社は楠正成を祀る。正成の湊川に戦死するや、後醍醐天皇悼惜限りなく、みずからその像を刻して当社に祀り、以つて公の忠誠を無窮に伝えられんと思われた。後、元禄十年に至つて、近江守源総茂神殿を建営したが、昭和九年の第一次室戸台風により大きな被害を受け公の生誕六〇〇年を記念して昭和十年再建された。

明治五年郷社に列し、同四十年森屋の森谷神社、川野辺の八幡神社、桐山の桐山神社、板持の巖島神社、別井の別井神社、イカノ内の別井神社、中村の中村神社、馬谷の馬谷神社、芹生谷の奥谷神社、寛弘寺の水汲神社、弘川の弘川神社、石見町の立岩神社、白木の白木神社、寺田の八坂神社、河内の河内神社、白木の加納神社、彼方の板茂神社を合祀し、大正二年六月府社に昇格した。

尚本殿は重要文化財に指定され、明治三十六年国庫の補助を得て解体修理をうけ、昭和二十五年に屋根葺替をおこなっている。建物はほぼ西面する三殿からなり、中殿は一間社春日造、左右両殿は二間社流造檜皮葺で、各殿の間には渡廊の形式を取った障壁をつけている。左右両殿は対称的に作られ、彫刻のモチーフを異にする程度で、厳密に同様式にされている。また中殿との間には渡廊を配するが、その反対側では背面隅柱位置に脇障子をつけ、竹の節をのせている。この社殿は和様の伝統的な手法をかなりよく伝えて、高雅な意匠をみるのであるが、すでに向拝の頭貫を唐様風な袖切、欠肩、錫杖彫つきの虹梁形とし、両端に若葉つきの過卷までつけられている。左右殿向拝の中柱を用いないで、大きい開口とするような大担なとりあつかいもみられ、繁雑さは伴わないが、あらゆる技法を巧にあやつっている達者さがかがわれ、渡廊の着想も清新で垢ぬけている。

# きんぷじんじや 金峰神社

## 御祭神

勾大兄廣国押武金日命  
(安閑天皇)

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
開運招福

## 例祭日

十月十七日



鎮座地 南河内郡千早赤阪村大字吉年字高塚一五九  
電話 〇七二一九五五〇九四五  
H P

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

風光明媚な峰に存在するこの古社は、山岳信仰の修験道と関係が深く霊験あらたかな神社として今日まで地域の人々によって大切に守られてきました。

## 由緒

高塚山と呼ばれるこの地は、摂・河・泉を一望でき、四季を通じて風光明媚な峰であると共に、照準観測を行う三角点(二九五、五メートル)でもある。

この地に存する金峰神社の創建年代は不詳であるが、古くより吉年地区の産土様(鎮守様)として奉斎されてきた。

祭神は勾大兄廣国押武金日命(安閑天皇)である。廣国押武金日命は第二十七代天皇として大倭国の勾金橋(まがりのかなはし)にて都をかまえ、九州から関東にかけて屯倉を設置し統治された。

明治維新の際、神社制度に伴い明治五年村社に列格されたが、明治四十年十月七日千早神社に合祀された。

昭和二十五年十二月十五日子民の総意の要望により、旧神社地高塚に社殿を新築し復興したもので、昭和三十一年十一月二十七日宗教法人金峰神社として承認された。

この一帯は、楠木氏の諸城塞のうち高塚山城塞跡でもあり、下赤阪城塞跡とは尾根つづきになっている。

北	下赤阪城跡	生駒山
東	上赤阪城跡	葛城山
南東	千早城跡	金剛山
西北	嶽山城跡	六甲山

を望む。

こぶきやさかじんじや  
小吹八坂神社

御祭神

素盞鳴命

御神徳

例祭日

五月三日

鎮座地 南河内郡千早赤阪村大字小吹一三六一二  
電話 〇七二一七二一〇五三四  
H P

御朱印なし



南河内郡千早赤阪村

由緒

ちはやじんじや  
千早神社  
(通称 楠公さん)

御祭神

楠木正成卿(大楠公)  
楠木正行朝臣(小楠公)  
楠木久子刀自(大楠公夫人)  
大市媛命

御神徳

厄除開運  
除災招福  
必勝合格

例祭日

五月二十五日前後の日曜日



鎮座地 南河内郡千早赤阪村大字千早字城山二二八  
電話 〇七二一九五五〇九四五  
H P www.chihaya-jinja.com



※他朱印あり

神社のおすすめ

楠木正成公が、帝より賜った菊水紋の旗印の下、この千早城で十数万の敵を撃退したという史実に因み、菊水紋の御守を奉製いたしました。  
あなたに大楠公の御加護がありますように。



菊水紋の御守



『非理法權天』の根付けお守

南河内郡千早赤阪村

由緒

当社の創始は、後醍醐天皇が楠木正成の兵庫で力尽きて忠死したのを聞きになって、その死を惜しまれ、延元元年五月に千早城に楠木社を創建され、その霊を祀られたと伝えられている。  
その後、室町時代を経て文禄四年八月に豊臣秀吉の命によって楠木大明神として社殿を再建したと伝えられている。  
明治初年頃、荒廢に帰っていた楠木社を同七年五月に再建。更に同十二年に堺県令税所篤氏が社殿を修築して、社名を千早神社と改称。  
大正十五年、城址の最高所にあった社殿を現在地に移し、造営に着工。昭和十年五月九日に完成。正遷宮を齎行した。昭和十年五月十八日に府社に昇格した。  
大東亜戦争後は村の鎮守社として地域の人々の信仰を集め、現在では、開運招福、必勝合格、運気向上等を願い、多くの人が遠方より訪れている。

# 中津神社

なかつじんじや

## 御祭神

主神 素盞鳴命  
榎稻田姫命  
相殿 天太玉命  
蛭子命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
除災招福

## 例祭日

十月第三日曜日



鎮座地 南河内郡千早赤阪村大字中津原六九一  
電話 〇七二二一五二一〇〇四

H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建は室町時代の永享四年（一四三二）である。明治五年村社に列し、明治四十年七月七日大字千早の千早神社に合祀せられたが、明治四十二年旧地に復社を許された。

大正四年九月十三日大正天皇即位大札に際し神饌幣帛料供進社に指定された。現存の社殿は寛文十三年三月（一六七三）の改築に係り、明神造、桧皮葺であったが、現在銅板葺となる。又神座前の寄木着彩の狗獅子一対は室町時代の彫法を残している。

# 不本見神社

ふもとみじんじや

## 御祭神

天神柱尊  
国神柱尊

## 御神徳

五穀豊穡  
開運招福  
風水害除け

## 例祭日

十月十六日

鎮座地 南河内郡千早赤阪村東阪一・二・九  
電話 〇七二一九五五〇九四五  
HP

## 御朱印なし

## 神社のおすすめ

天神柱命・国神柱命は共に「風の神」であり、悪い風・良い風・逆風追風を司る神であり、風水害除けはもとより、人生行路に必要な順風を与えてくださる靈験あらたかな神として崇拝されている。

## 由緒

当社は不本見山にあり、社名は所在の山名によるものである。

不本見山は人皇七代孝靈天皇の御代、癸酉の歳五月八日に、一夜の間に湧出した宝の山で、人々は夜山と称し不本見山と号した。人皇四十二代文武天皇（在位六九七〜七〇七年）の御代、修験道の始祖役の小角（えんのおづぬ）が葛城山遊化の時、当山峯祀配全然として靈異なるを以って、山神を駆使して一の宝窟を開きこれに天神柱尊を祀り、自から蔵王権現及び金伽羅童子の像を刻んで安置した。

人皇四十五代聖武天皇の御代に、行基も来り大聖不動尊を加え祀り、弁財天女の宝殿を南の嶺袖に構え祀った。

人皇百二十一代明治天皇の御代六年に、神仏分離令により、蔵王権現と金伽羅童子を廃止し、天神柱命・国神柱命を龍田大社より勧請して奉斎した。

なお、湘和二十八年に宗教法人不本見神社として法人登録されている。



# 岸和田市

▶ 大阪府にもどる



# 岸城神社

きしきじんじや  
(通称 岸城さん)

## 御祭神

天照皇大神  
素盞鳴尊  
品陀別命

## 御神徳

良縁成就  
厄除開運  
疫病退散

## 例祭日

九月十五日



岸和田祭



良縁 ちぎりの糸 500円

## 神社のおすすめ

九月敬老の日の前の土日 岸和田祭  
良縁祈願 ちぎりの糸



鎮座地 岸和田市岸城町十一一三十  
電話 〇七二一四二二一〇六八六  
HP <https://www.kishikijinja.jp/>

## 由緒

当社は、五穀豊穡を願い神明社（天照皇大神）を岸和田村の産土大神としてお祀りされたのが始まりで、自來氏子等は宮座を組んで永年厚く祭祀を行って来ました。

その後、慶長年間に小出秀政公が岸和田城築城を機に京都の八坂神社より勧請された牛頭天王社（素盞鳴尊）、かつて当地が石清水八幡宮の莊園であった事によりお祀りされた八幡大菩薩社（品陀別命）を岸和田城の鎮守社として崇め、以来代々城主・当地住民に普く崇められました。

明治期には、社名を「岸城神社」と改称し、氏子地域も広範囲となり人口の増加と共に益々崇敬を集め、当市南部一円の産土神「岸城さん」として、例大祭神賑行事岸和田祭、十日戎大祭等四季の行事に広く親しみと信仰を持たれる御社となつてまいりました。

平成二十三年に当社御鎮座六百五十年を迎えるに当り、記念事業として、平成二十年に御社殿改築造営又境内整備を行い神域を一新し、またその際御本殿に、末社神明社（天照皇大神）を増祀しました。

### ちぎりの御宮について

岸和田城が別称、「千亀利城（ちぎりじょう）」と呼ばれたことから、鎮守神 岸城神社も「千亀利の御宮」と呼ばれ幅広く縁を結ぶ神様として信仰される様になりました。

### 岸和田祭の起源について

岸和田祭に関する最も古い記録は、現在岸和田城（模擬天守閣）を設計した建築家池田谷久吉氏が収集した史料の一つ、「当町檀尻之濫觴五町御城入之先後之一件書付写」文化五年（一八〇八年）という古文書に記されている。「濫觴」とは、「起源」の意味で、だんじりが登場する以前の岸和田祭についても記載されている

古文書には、牛頭天王社の例祭に氏子は神賑行事を行っていなかつたが、城下の町方の一つである北町の茶屋新右衛門が、上方の祭礼（大坂の夏祭と思われる）の賑わいを見聞き感動。町内で相談の上、「今年からは祭の前夜に家々の門前に御神燈を掲げたい」と藩に願い出る。延享二年（一七四五年）六月藩主より許可が下り、牛頭天王社祭礼前夜（現七月十五日夏宮祭）に家々の軒に亀甲印の提灯が立てられる様になった。同年八月八幡大菩薩社祭礼（現九月十五日例大祭）には、藩主から大幟四本と紋入りの小幟二十本、さらに枠入りの太鼓台を賜った。これが、町の人々の岸和田祭神賑行事の始まりと伝わっている。

# 岸和田天神宮

きしわだてんじんぐう

(通称) 沼天神

## 御祭神

速須佐之男命  
菅原道真公

## 御神徳

学業成就  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

九月十五日



鎮座地 岸和田市別所町一―三―一五  
電話 〇七二―四三六―二一八八  
HP <http://www.kishiwadatenjingu.jp>



令和二年七月一日

## 神社のおすすめ

岸和田祭り（敬老の日の前の日曜日）には六台のだんじりが宮入りします。



## 由緒

当社の創建は伝えによると、後村上天皇の正平十七年（一三六二）の頃とされる。泉州沼村（現在の沼、筋海、並松）の村長に沼間将監という人があって極めて孝心が厚く、父親が長らく病床に就き百方手を尽し平癒を願ったがその効験がなかった。そのため、かねてから信仰していた山城の国八坂神社に参り、病父の平癒を祈願すること三日、ついに靈感を得て歓喜して帰郷すると父の病は全快し、平日の元氣な姿に復していた。沼氏は大いに喜び、その御神徳を村の衆に告げ邸内の清城（現在地）に社殿を造営して八坂神社（祭神、速須佐之男命）の御分霊を勧請したのが始まりという。

以後、沼氏代々の鎮守として靈験日毎に増し、村内に水早病疫等、事ある毎に祈願を行い靈験あらたかで、その御神徳が遠近に聞え、崇敬する者も多くなった。

後に天照大神、八幡大神を別社に祀り、沼の天神さんとして親しまれてきた。その後、明徳年間（一三九〇）に至り、山名、大内二氏の争乱等により天正年間（一五七三）に至るまで再三兵火の厄に会い、社殿旧記宝物等一切は焼失した。村民はその荒廢を嘆き、文祿三年（一五九四）に社殿を復興させ御神徳が益々高揚した。慶長年間（一五九六）になり、小出播磨守が岸和田領主になった時、別社を岸和田城内に移しその守護神とした。

天和三年（一六八三）に至って天神宮と称した。表「天神宮」裏面「天和三癸亥年八月祭吉日」と彫られた神号額が現存している。享保年間（一七一六）村民が私祭していた菅原道真公を合祀した。明治四年、神社調査の際、社名が天神宮であることから主祭神を菅原道真公であると誤認して菅原神社と届出した。

明治四十年から四十二年にかけて、近隣八社を合祀し、氏子町も拡大した。昭和五十七年御鎮座六百二十年を機に社殿を御造営し、竣工後名称を旧に復し、岸和田天神宮（通称沼天神）と改称した。

# 弥栄神社

やえいじんじや

## 御祭神

素戔嗚尊

## 御神徳

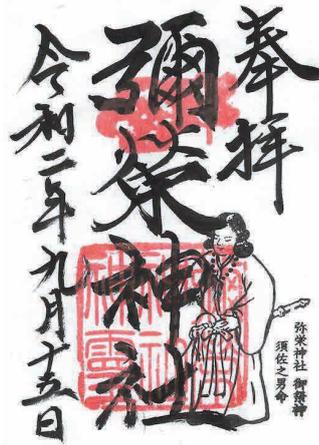
家内安全  
厄除開運

## 例祭日

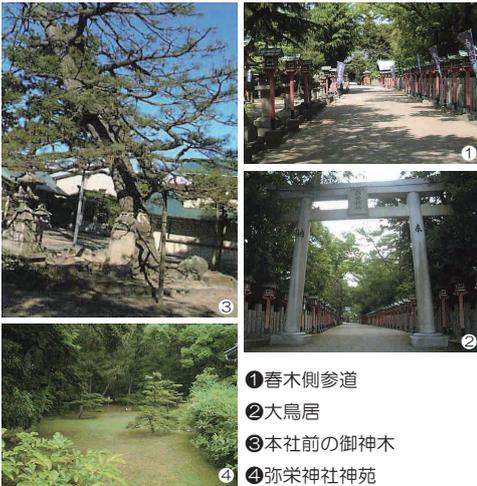
九月十五日



鎮座地 岸和田市八幡町一三一二五  
電話 〇七二一四三七一五一一  
HP <http://www2.sensyu.ne.jp/yaei/>



## 神社のおすすめ



- ①春木側参道
- ②大鳥居
- ③本社前の御神木
- ④弥栄神社神苑

## 由緒

当社は大阪湾のやや南寄りにして、岸和田市の北端に鎮座する。近年に湾岸沖まで埋め立てられるまでは海岸より約七〇〇メートルを隔てたところに位置していた。この通称八幡山と称せられる当社の鎮座地は、往古の砂丘にして防波堤かと推察される。

当社の創立年代は不詳であるが、延喜式外の旧社であり、往時春木の海辺に土着した掃守氏（かもりし）の祖神である、「振魂命」（ふりたまのみこと）を鎮祭したのが始まりであると伝えられる。しかし保元の乱以降数度の乱戦により一度は廢社となるが、各地より移住した人々が再びこの地に小社を興して氏神を「牛神社」（うしがみじんじや）と号して崇敬してきた。天正八年（西暦一五八〇年）に社名を弥栄神社と呼称してよりは徐々に神域を整え、現在に至る。

明治五年村社に列し、同四十年一月神饌幣帛共進社に、翌四十一年に会計法適用社に指定されるにより、順次近郊の社を合祀することとなるが、特に大正四年に磯上弥栄神社を合祀してより以降は、春木・大芝両地区の総氏神として人々の崇敬は一段と篤くなった。

現在の境内地は約一二四〇〇平方メートル（約三七〇〇坪）で、本殿は流れ造りで中殿・拝殿と続き、撰末社九社を奉斎する。社務所・神饌所・集会所を存し、写真室・美容室・和洋各種宴会場等を設けて一大神域を形成している。

# やぎじんじや 夜疑神社

(通称 八木の宮さん)

## 御祭神

布留多摩命  
保食神  
水府神  
伊佐奈美命  
袴幡千千姫命  
外十三柱

## 御神徳

交通安全  
厄除け  
五穀豊穰

## 例祭日

十月五日



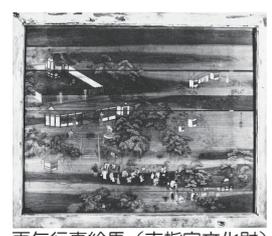
岸和田市

鎮座地 岸和田市中井町二一七一  
電話 〇七二一四四五二二九一  
HP <https://www.yagi-jinja.jp/>



## 神社のおすすめ

宮座（みやざ） 十六人の村長老により組織され、最年長の「一老」は廻り神主となり祭祀を行った。廻り神主の制度は明治期に廃止され「一老」も一年限りで交代となったが、神社祭祀以外の行事は現在も行われている。



雨乞行事絵馬（市指定文化財）



平成 25 年竣工の本殿

## 由緒

当社は弥生遺跡で有名な「天の川」のほとり、天の川低湿地の小高い所に鎮座しており、天の川沿いに池尻・大町・小松里・箕土路・下池田・中井・荒木・吉井などの氏地内の各所で弥生遺跡が出土している。殊に池尻・中井に於いては縄文遺跡も確認されており、時代が下って池尻を中心に古墳群、氏地内全域にわたって条里制の遺構がある。八木の地は肥沃で水利も良く、古くから拓けた所であった。「陽疑」「揚貴」「八木」などと表記されたこともあるが、いずれも「やぎ」と読む。鎮座地の「中井」は『和泉誌』に「旧名中八木」と記されており、当社の北方に夜疑廃寺跡もあることから八木一族居住の本拠が近辺にあったと思われる。

当社の創建は定かでないが、延長五年（九二七年）成立の『延喜式』に「夜疑神社」と記されており、また主祭神の布留多摩命については、弘仁五年（八一四年）成立の『新撰姓氏録』に「八木造。和多罪豊玉彦の兒、布留多摩命の後なり。」とある。これらの傍証から、奈良時代以前にこの地を治めていた八木一族が祖神をお祀りしたのが起源と考えられる。

布留多摩命は『新撰姓氏録』によると神別の地祇族であり安曇族の海神で、其の本拠は筑前粕屋郡安曇郷、この地は「卑弥呼」時代の「奴国」に相当する。

平成二十四年の社殿改築に先立って行われた埋蔵文化財調査では、弥生式土器や古墳時代の須恵器の破片が見つかった。また奈良・平安・鎌倉時代の古瓦も多数出土した事から、約一三〇〇年前には神社としての建物が存在し、それ以前も祭祀が行われる特別な聖域であった事が推察される。明治五年村社に列し当社は中井一村の氏神様であったが、明治四十一〜四十二年に八木郷の各字に祀られた氏神様を当社に合祀して以来、八木郷の総氏神様と成り、明治四十三年神饌幣帛料供進社に指定された。昭和十八年郷社に列す。現在の氏子地域は中井町・吉井町・荒木町・下池田町・箕土路町・西大路町・小松里町・額町・額原町・大町・池尻町と忠岡町北出・忠岡町高月。

境内の雨淵（池）は如何なる旱天にも未だ涸れた事がなく、もし雨水に乏しい事ある時には氏子等が当社に祈りこの淵を浚えば必ず降雨ありと言われている。

# ひょうずじんじゃ 兵主神社

(通称 和泉大宮)

## 御祭神

天照大神  
八幡大神  
菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月十日



鎮座地 岸和田市西之内町一〇九七  
電話 〇七二一四四三一〇九七  
HP <https://hyouzū.jp>



## 神社のおすすめ

例祭にはだんじりの宮入りがある。

## 由緒

当社は、西之内町の北にあり延喜式内の旧社で、俗に「大宮」と称し昔は「掃守郷」の総社として西之内、上松、下松、尾生、包近、藤井別所、沼、野田、春木、加守、額原の一二ヶ村を氏地として、各村より弥宜一人を出し奉祀していたが、天正の兵火以後は各村毎に氏神を勧請したので、当社は西之内のみにて祭祀を行う事となった。しかし早天の折、雨乞を行う時には尚従来の一二ヶ村より庄屋、年寄等が出仕するのを例としていた。従って往時の境内は現在のそれに比べ遙に広く、宇宮城に一の鳥居、大橋に二の鳥居がありこれらにより往時を偲ぶことが出来る。近年まで北掃守村大字春木にあった礼拝塚は、紀州街道を往来する人々の遙拝所であり、塚は華表の基此であると云われている。

明治六年郷社に列し、明治四二年下松字北出の八幡神社、同大字射場の菅原神社、同大字明神の厳島神社、八坂の八幡神社、山下の上の勝尾神社を合祀し、明治四二年一〇月神饌幣帛料供進社に指定される。境内地二、五四一坪。

本殿は桃山時代に再建とされ、三間社流造檜皮葺で、国の重要文化財に指定されている。

また、一五六〇年代まで境内能舞台（現在は焼失）にて奉納されていた能舞において用いられていた「天降の面」と称される能面九面は、岸和田市有形文化財に指定されている。

すがはらじんじゃ  
**菅原神社**

**御祭神**

菅原道真公  
応神天皇

**御神徳**

五穀豊穰  
学業成就  
所願成就

**例祭日**

十月祭礼の日



鎮座地 岸和田市岡山町三九五  
電話 〇七二一四四五一〇七六八  
H P



**由緒**

当社の由緒は詳らかでない。  
明治五年村社に列せられる。境内は一四七坪を有し、本殿拝殿神饌所を存す。末社に八幡神社があつたが、現在は本社に合祀している。氏地は本地一円である。

# つがわじんじゃ 積川神社

## 御祭神

生井神  
栄井神  
綱長井神  
阿須波神  
波比岐神  
外十二柱

## 御神徳

旅行安全  
家内安全  
安産守護

## 例祭日

十月九日



鎮座地 岸和田市積川町三五〇  
電話 〇七二一四七九一〇一三四  
HP

奉拝  
和泉国四之宮

積川神社

令和二年八月十五日

神社のおすすめ



修復された御本殿（重要文化財）



白河上皇筆と伝わる扁額

## 由緒

当社は延喜式内社で、牛滝川と深山川との高低相会した地に位するので積川の称がある。和泉五社の四之宮として、歴代天皇の勅願社として、又武將の崇敬も厚く、氏子地域も牛滝下流の春本に至るまで広範囲に及んでいた。天正の頃まで社領六百石を有していた。創建の年月は詳らかでないが、日本後紀にも積川神社の名が記され、国内神明帳にも「正一位積川社」とあるところから、格式高い神社であったことが想像される。

社域は牛滝街道に接して一段の高所を占め、二五〇〇坪の広さの境内を有し、古木森然たる中に本殿（三間社流造屋根椽皮葺）がある。創建年代は詳らかでないが、慶長七年豊臣秀頼が片桐且元を普請奉行として、大修理を加えて、現在にその様式を伝える桃山建築の優雅広大なもので、特に高欄の彫物の彩色の鮮かなことは美の極致とされている。この本殿は大正三年四月に特別保護建造物（今の重要文化財）に指定されている。

社宝には寛治四年、白河上皇が熊野御幸のとき、八木村大字額原に於て積川神社を遥拝され、芝草を積んで舞台とし、舞楽を奏せられた時に、上皇傍の鳥居に掲げたる扁額の筆蹟拙者を御覧になり、親しく筆を執りて「正一位積川大明神」の八字を大書して、これに代えさせ給うたと伝える扁額を始め、淀殿奉納の神輿、楠正儀の寄進による石灯笼や、神像、古鏡等を社宝として今に伝えている。ご神像、扁額は昭和四十二年に大阪府指定文化財に登録されている。

霊亀二年、河内国から和泉国を分離した時、天孫降臨の順にご祭神を祀る一之宮鳳神社から、穴師神社、聖神社、積川神社、日根神社の和泉五社が設けられた。当社には、四番目に降臨した彦火火出見尊（山幸彦）延喜式神明帳に五座と記されているが、相殿に、天照大靈尊、豊玉姫、火酢芹尊（海幸彦）、火明命の四座。若宮には鶉萱草葺不合尊、武位起命が祀られている。

境内には、八坂社、戎社、大海社、白髪社が在る。

# はぶじんじや 土生神社

## 御祭神

菅原道真公  
武甕槌命  
経津主命  
天兒屋根命  
比咩大神  
品陀別命

## 御神徳

家内安全  
厄除開運  
学業成就

## 例祭日

十月十日



鎮座地 岸和田市土生町七ー八一ー一五  
電話 〇七二一四二六ー七二八七  
HP



## 神社のおすすめ

土生神社発祥と伝わる土生鼓踊り図柄の祈願絵馬授与。  
また一人暮らしも神様と共にの願いのもと独居御守介護御守授与。



土生鼓踊り図柄祈願絵馬



独居御守・介護御守

## 由緒

創建伝承として「堀河天皇の寛治四年（一〇九〇年）正月白河上皇熊野御幸の帰途、隣地の別野村の田中に白蓮三茎咲いているのを御覧になって、同所に熊野神社を祀ろうとして暫く当所に蹕を駐め給うていた際に、本地人民が今の有真香の土生滝の意賀美神社を産土神と仰いでいて、その遠く隔たっているのを憂いて、衆議の上源俊頼卿に依って鎮守の神を祀ろうとして願ひ出たところ、聴許あらせられ天満天神を祀るべしとの御意を下し給うた。依って里人は大いに喜び俊頼卿に従って上洛し、その旨を北野天満宮に伝え、その御分霊と菅原道真公真筆の法華経一巻を受け帰り、同年八月二十一日上皇御駐蹕の所に社殿成つて祀つたのが即ち当社の起源である。」と伝える。しかし和泉国神名帳に従五位下土生社と出ており、実際の創建はもつと古いと考えられている。春日四神はもと境内末社に春日神社として祀られてあつたものである。

明治五年村社に列し、同三十五年字櫛の村社八幡神社（品陀別命）を合祀し、同四〇年一月神饌幣帛供進社に指定され、同年十一月十一日字山下の山下八幡社を合祀した。この合祀した山下八幡社は、岸和田藩主岡部美濃守宣勝が当地隠居所に引き移つて後、土用中虫干しの具足を座敷に飾つてあつたところ首に輪のある山鳩（俗に八幡鳩ともいうもの）二羽来て宵の八幡座に留つたので、武運の吉瑞であるとして喜び、程なくして鳩の飛び立つて留つた所を見届けさせ、その地に社殿を建て八幡神を勧請したものである。社領三町二反一畝二三歩を寄せ、八幡山感応寺を宮寺となし、これに二〇石を寄せて、例年八月十五日放生会を執行してきたのであるが、明治五年神仏の分離によつて寺は廃絶し、社は村社に列してきたものである。合祀にあたり山下八幡社の社殿を移築して神門に転用したと思われる。

境内末社に天照皇大神社（神明神社）、神武天皇社（肇国神社）、熊野神社、高麗神社、厳島神社、牛神社、稲荷神社がある。昭和四十九年社叢（境内林）が岸和田市の天然記念物に指定された。

当社は土生町一町を氏地とする氏神であるが、かつては一農村に過ぎなかつた土生町には現在六千八百世帯居住しており、そのうち約三千世帯が町会に加入する全国有数の大規模町会となっている。また平成二十九年丁R東岸和田駅が高架化されたことをはじめ地域はここ数年間で大きく変化してきている。目に見える変化だけでなく、そこに住む人達の価値観や生活スタイルも大きく変化の中で当社は時代に取り残されるように昔ながらの佇まいで静かにひっそりと存在している。そこに変化していく地域や社会をいつも変えることなく森の中から見守っていたらだいている土地の神様がおられ、また神話の神々は神話の続きを、菅原道真公の御霊はその御生涯の続きを地域の人々に寄り添いながら生きておられる。

# 淡路神社

あわじじんじや

## 御祭神

伊佐奈岐命  
菅原道真公

## 御神徳

五穀豊穰  
学業成就  
諸願成就

## 例祭日

十月祭礼の日



鎮座地 岸和田市摩湯町五七六  
電話 〇七二一四四五一〇七六八  
H P

奉拝



令和二年八月一日

## 由緒

当社は延喜式内の神社であるが、祭神は詳しくない。神明帳考証には大国御魂神とし、神社叢録には近隣の楠本神社の祭神が巨樹の霊であり、当社の祭神を水の霊としている。大日本史も之と同様の説を記しているが疑問である。

或は摩湯の墓に縁由があるのでないかとの説もあり、但し大阪府神社明細帳には伊佐奈岐命、菅原道真を祭神としている。国内神明帳には神位を従五位上とある。

明治五年村社に列し、境内は一六四坪を有し、本殿拝殿を存し、氏地は本地一円である。

因に祭神は摩湯古墳と社名とを関連させて不破内親王とする。

おおさわじんじや  
大沢神社

御祭神

菅原道真  
素盞鳴之命  
市杵島姫命

御神徳

例祭日

十月九日



鎮座地 岸和田市大沢町四三九  
電話  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

由緒

当社は旧大沢村字堂の脇にあり、元菅原神社と称した。創建年代は詳らかでない。明治五年村社に列し、同四年三月二九日字小谷の村社八阪神社、字横谷の厳島神社を合祀して、同年六月八日今の社名に改め、大正元年十一月神饌幣帛供進社に指定せられる。

# おがみじんじや 意賀美神社

御祭神

關淤加美大神

御神徳

五穀豊穰  
祈雨

例祭日

十月九日



鎮座地 岸和田市土生滝町一七  
電話 〇九〇一四四九五―八二七〇  
HP

奉拝

意賀美神社

令和二年七月一日

## 神社のおすすめ

神域を流れる津田川「雨降りの滝」が  
令和二年に日本遺産に認定された。

## 由緒

当社は古来和泉国南郡掃守郷土生滝村同郡阿間河谷庄滝村両所の境に鎮座し關淤加美神を奉祀する。其の創立の年代不詳であるが、年次は遙かに天平年間より以前の事に属し現存する石激盤の鑄刻「天平四年壬申年八月吉日座中」によっても知る事が出来る。

社号は正しく意賀美神社と称し奉るが、霏太神宮とも称し、又神霊を尊んで雨降大明神とも称している。神名帳に南郡従五位上意賀美神社とあり、常に風雨順当五穀豊穰を祈願し、旱天で米穀枯死の害をさけるときは、遠く四方より参拝して雨乞の祈願をするのは今も昔も変わる事がない。本社々記の記録に依れば、聖武天皇天平四年の夏、大旱魃の時祈雨の御勅願があり、その靈験により御綸旨を以って社領を寄進されついで陽成天皇元慶八年六月菅原道真公祈雨の奉幣があり靈験著しく、此の頃より雨降りの明神と称え奉るといふ。

戦国の世も氏子村民の崇敬はかわらず、造営修理能く其の頽廢を防いで今日に至っている。

寛永年中大旱魃の当時、近郷百人ヶ所の当社前に集い祈願し、若し神徳を賜われれば川向いより御社頭まで金属製の橋を架け、以て神恩に報い奉らうと祈願成就を祈っている時、はるかに豪雨沛然として降り来て、村民一同深く神恩の安大さに感泣したとか。然る風雨後架橋成難く、それ以来毎年六日土用の入りの当日近在上り神酒奉幣し、永くその神恩に報賽する事の例を聞き、今日に至るまで祭祀を怠る事がない。

殊に岸和田藩主岡部侯崇敬最も厚く、領内水旱の災厄ある時は自から参拝し数度にわたり田畑山林を寄進する。

天保一八年寅八月坊城前大納言菅原俊明卿の奉納による御神号額一面があり、その崇敬厚い事がわかる。

奉納状之事

花山院右大将家厚卿筆

一、神号額（雨降大明神）一面

右者正二位前大納言俊明卿被為奉納

処執達如件

坊城殿内

山科長門守生直

天保一八年寅八月

かえりみると天平以後朝家武門はもとより庶民に至るまで、しばしば降雨を祈願し報賽として数々の神領、奉幣があり、神域も広大であったが、明治六年上地に際し現在の一、九三一坪を有するのみであるが、津田川の中央に雨降滝があり稀有の神跡である。

# 楠本神社

くすもとじんじや

## 御祭神

菅原道真公  
楠本大神  
春日大神  
往吉大神  
応神天皇

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

十月九日



覆い殿の中に御本殿

## 神社のおすすめ

令和二年八月十五日

奉拝  
楠本神社

鎮座地 岸和田市包近町一四四八  
電話  
HP

## 由緒

当社は延喜式内の神社であるが、祭神は詳らかでない。後世、菅原道真公を付祀され俗に天神と称せられる。古老の伝説に依れば菅原道真公を祀祀したのは、織田信長の時代である。参詣道の畑の中にもとの鳥居があり、付近の捨鳥居と呼ばれ、白河法皇宸筆の額を掲げてあったが、烈風暴雨のため牛滝川に吹き流され、伊勢の白子里に上つて今も同所に存し、その額には白髪大明神と書れているという。旧祭神が詳らかでないため、神名帳考証には船玉神とし、神社叢録には仁徳天皇の段に「免寸河之有西一高樹」と見える。高樹は楠であり、当社はその楠の本にあり、木霊を祀り、今の摩湯町の淡路神社は水霊ではないかと、大日本史もまた之と同様の説を記しているが明らかではない。

神位は国内神名帳に従三位とし、明治五年村社に列し、大正四年十二月二十日、字垣外の村社八幡神社を合祀した。八幡神社は楠正成の祈願所で、正成の寄付した武具菊水旗は宝庫に納め、慶長十年当社焼失の際には特出したがその後兵火に罹らん事を恐れて、河内の天野山に納めたと伝えられている。社頭に繁茂する楠は楠氏の家臣鴨野宇右衛門手植のものである。

ご本殿、覆い殿は平成二十九年に全面改修をした。また、境内の大鳥居は、平成三十年九月の台風で倒壊し、翌年再建にあたり、東面していたものをご本殿と同じ南面の改めた。

# すがはらじんじゃ 菅原神社

## 御祭神

菅原道真公  
外九柱

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
学業成就

## 例祭日

十月十五日



鎮座地 岸和田市稲葉町二六〇〇  
電話  
HP

奉拝

菅原神社

令和二年八月十五日

## 神社のおすすめ

境内末社には若宮社、葛城神社、春日神社、吉野大権言、熊野大権言、弁財天女、愛宕大権言、伊勢大神宮、足神社がある。



境内末社

## 由緒

後土御門天皇の文明九年、稲葉元春が牛滝川の西岸に稲葉城を築き、和泉守となって当国に居住する。稲葉元春は菅公十三世の孫美濃守元真の子であり、城整って後、鎮守の祠宇を城中に興し、菅原大神を京都の北野より勧請して之を鎮祭したのが、文明十年九月九日の事である。

その後、神徳益々新に靈驗顕著になり、庶民これを稲葉天神と称し遠近諸人の信仰厚く明応二年、城主和泉守元春が逝去し、その子、元信が家督を継ぎ大永三年元信逝去し、その子元清が継ぐ。永祿三年、元清は織田信長に従い、今川義元を桶狭間に撃ち、之を斬る功を以って、元清は美濃守となり稲葉城は空虚となる。天正五年、根来雑賀の諸賊大阪の一向衆に応じ、和泉一円賊の押領する所となり、信長は諸将を卒いて之を破る。

この為、神社寺院滅却し荒野となり、村人達稲葉天神を祀る社殿を改築し、稲葉天神社を以って氏神と仰ぎ代々社僧の奉仕する所となっていたが、明治元年、社僧を廃し神職を置き菅原神社と改称する。同五年村社に列し、同四十二年十月二十一日、神饌幣帛料供進社に指定せられ、稲葉町一円の氏神として現在に至っている。

# すがはらじんじゃ 菅原神社

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

五穀豊穰  
学業成就  
所願成就

## 例祭日

十月祭礼の前日



鎮座地 岸和田市今木町四五四  
電話 〇七二一四四五一〇七六八

H  
P



## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。  
明治五年村社に列せられる。境内は五四八坪を有し、本殿拝殿社務所を存す。氏地は本地及び東大路である。

すがはらじんじゃ  
**菅原神社**  
(通称 穂棕 (ほぐら) 神社)

**御祭神**

菅原道真公  
応神天皇

**御神徳**

五穀豊穰  
学業成就

**例祭日**

十月祭礼の日



鎮座地 岸和田市三田町一六九九  
電話 〇七二一四四五一〇七六八  
H P



**由緒**

当社は岸和田市三田町一六九九番地通称オクンドに鎮座し、宇小倉の飛地岡山町の人々はオカンドと称している。祭神を菅原道真公とし社名を菅原神社と云うのは、昔天神又は天神社と云っていたのを後に改めたものである。境内八二一坪を有し、老松が疎生し、本殿と拝殿とが一直線を為しておらず、各方面を異にするのはふしぎである。明治五年村社に列し三田町一円を氏地としている。泉州誌、和泉名所図会は稲棕神社とし、延喜式内の旧社に擬しているが、和泉誌をはじめ神社叢録、神祇料、大日本史の如く他の著書多く泉北郡南池田村大字和田廃穂棕神社を以って、式内のものとしている。たぶん泉州誌は三田の御田に通じるのを以って安田記の茅湧山屯倉の所在地を三田とし、小倉は稲棚に通じ稲棕の義になるのでそう断定したのである。

すがはらじんじゃ  
**菅原神社**  
(通称) 田治米尊社・たじめさん

御祭神

菅原道真公

御神徳

五穀豊穰  
学業成就  
所願成就

例祭日

十月祭礼の前日



鎮座地 岸和田市田治米町六八〇  
電話 〇七二一四四五一〇七六八  
H P



由緒

当社の由緒は詳らかではない。  
明治五年村社に列せられる。境内は八四二坪を有し、本殿拝殿社務所を存す。末社に九頭神社、田治米守の尊社あり氏地は本地一円である。

# すがはらじんじや 菅原神社

(通称) 尾生(おぶ)の宮さん

## 御祭神

菅原道真公

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穡  
学業成就

## 例祭日

十月十日



鎮座地 岸和田市尾生町三二二十九一八  
電話 〇七二一四四三一二〇九  
HP



## 神社のおすすめ

毎年十月の第二日曜日に行われる地車宮入祭では、尾生、福田、中尾生の三台の地車が神門前に勢揃いし神前では神事が行われます。境内はハッピー姿の老若男女達で溢れんばかりになります。

毎年正月には拝殿や鳥居、社務所前などに計五対の神社役員手作りによる大きく立派な門松が飾られます。

## 由緒

当菅原神社は、菅原道真公一神を鎮座し奉る村社なり。一般口碑の伝ふる所、長保元年の創立なり。宝物に古額あり。表に天満宮と題し、裏に長保亡の三字のみ幽に認められき。明治五年十月村社に列し、同四十三年十月会計法適用の神社と為り、同年十一月神饌幣帛料供進の神社に指定せらる乃ち、尾生三百四十九戸の氏神にして南掃守一村の崇敬神社たり。

(注) 旧「菅原神社誌」より抜粋

当社の創立は右の通り長保元年と伝えられており、これは九九九年のことで、道真公が亡くなられた延喜三年から九六年後のことです。時代が下って寛永十二年(一六三五年)に「尾生村天満大自在天神の御形」(板絵)が岸和田藩主松平康映様の家臣石川次郎衛門尉様によって奉納され、また寛政十二年(一八〇〇年)には氏子中から社殿と覆屋の再建を記念して「尾生村の社の天満大自在太政威徳天神の御姿」(掛け軸)が奉納されています。

当社にとって重要な節目となるのがさらに時代が下った明治四十二年、基本財産として氏子中より土地一町七反余及び現金の寄進を受け、久禮嘉市郎を社掌に迎え、神社の沿革をまとめて今後の神社の存続を決めたことです。

その後、明治四十四年に村内各地に点在していた四つの神社を境内末社(牛神社)として合併合祀します。そして平成二十三年に境内社合祀百年祭を斎行したところです。また昭和十三年には南掃守村より山林十筆の寄進を受け神社の基本財産としたところですが、これによって南に佇む神於山の山頂まで当社の氏地となつて、今では岸和田市の自然環境の保全に大きく貢献するところとなっています。

(文責 宮司 西村 茂)

なかむらじんじや

# 中村神社

(通称 山直中神社)

## 御祭神

市杵島姫命  
品陀別命  
菅原道真公  
外四柱

## 御神徳

五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

十月九日



鎮座地 岸和田市山直中町五〇二  
電話  
HP

奉拝

山直中神社

令和二年八月十五日

## 神社のおすすめ

当社には、近隣の神社にはない奉納された沢山の絵馬が残っている。農耕に使われた人に曳かれる馬、戦場で活躍する馬、いろんな馬の他に、中村神社にお参りする姿も描かれたものもある。



江戸時代のお参り風景



農夫と共に歩く馬

## 由緒

当社は平安時代末期の創立とみられ和泉國神明帳には神位従五位上中村神社と記載され、古老の伝承によれば天正の兵乱を避け古文書類は高野山の遍照尊院に預け置いたがその寺も焼失した為創立年代は定かではない。

室町時代に現境内地に京都北野天満宮より菅原天神を勧請し氏神として品陀別命（応神天皇）、市杵島姫命、素戔鳴尊を相殿し明治五年村社に列せられる。

大正四年十一月、天照大神（神明社）、豊受大神（稻荷社）を合祀する。又、当時は山直（やまだい）谷の中央部に位置し古代には和泉國山直郷に含まれ鎌倉時代から室町時代は山直郷中村荘として奈良春日社の社領となり産土神として字春日の地に祀られていた春日社、水分社、日吉社を本殿に合祀し、住吉大神、牛神社、大將軍社、夫婦神、蓮華光寺にあった九頭大明神を、更に昭和三十九年には天満山の八王子社、八大竜王も当境内に移転し祀る。その頃より当社を山直中神社と呼称し、山直中町の氏神として地域住民に厚く崇敬されている。

# 波多神社

はたじんじや

## 御祭神

波多八代宿禰

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十日



鎮座地 岸和田市畑町四二八  
電話 〇七二一四二二一 一四四六  
H P



## 神社のおすすめ

式内社であるため、歴史は古い。地元  
の氏子の皆さんが積極的に御奉仕くださ  
り、守ってくださっている。

## 由緒

当社の御祭神は特選神名帳、大日本地名辞書、神祇宝典等の書物に波多八代宿禰と載っています。当社のある岸和田市畑町は、かつて波多氏の居住地でした。そして波多氏の祖先神をお祀りしたことから名前が「波多神社」となったとされています。そして延喜式内の旧社であり、国内神名帳に「従五位上波太岐社」と記載されているのが当社です。

### 祭日について

一月一日、二月十七日、七月十五日頃、十月十日、十月十七日、十一月二十三日に本殿にて祭典が行われます。なかでも二月十七日、七月十五日頃、十月十日、十一月二十三日に行われる祈年祭、夏祭、例祭、新嘗祭は五穀豊穰を祈念するお祭りで当社の氏地では農業に従事されている方も多いため、五穀豊穰の信仰を寄せられています。

# 東葛城神社

ひがしかつらぎじんじや

御祭神

菅原道真

御神徳

例祭日

十月十日



鎮座地 岸和田市河合町一八九三  
電話  
H P

奉拝

東葛城神社

令和二年八月十五日

神社のおすすめ



覆い屋根に守られたご本殿



松に鶴に人が乗っている彫り物

## 由緒

当社は元々菅原道真公を祀る菅原神社であった。しかし、創建由緒は不詳なるも、御本殿は三間社流造 正面軒唐破風付 檜皮葺きで江戸時代前期慶安の頃の遺構とされ貴重なものである。明治五年村社に列し、大正二年に旧東葛城村内にあった上白原、神於、河合、相川、塔原地区の数十社を合祀して東葛城神社と社名を改めた。

# やしろぎじんじや 矢代寸神社

(通称 八田一ノ宮)

## 御祭神

武内宿弥  
波多人代宿弥  
素盞鳴命  
建御名方命  
市杵島比売命  
武甕槌命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月十日



鎮座地 岸和田市八田町三五七  
電話 〇七二一四二七七八四六〇  
HP

参拜



## 神社のおすすめ

国防の職にある人のみならず国民一人一人が国防の意識を持ちその意識を神様にも守ってもらえるように国防御守を授与。



国防御守

## 由緒

当社は継体天皇元年（五〇七年）創建と伝えられ、当地を開発し居住した波多氏が祖神を祀ったのが始まりとされている。

延喜式内社にして矢代寸神社二座とある。（一座は本社にして一ノ宮と称し、一座は諏訪宮また矢代寸下神社と称し神須屋町にあったが明治四〇年十二月本社に合祀）

寛治四年正月白河上皇熊野御幸の折当社に参拝

江戸時代岸和田藩主代替の際領内の各神社に拝礼するのを例としていたが、後に当社にのみ拝礼するようになった。

近世の一時期祭神不詳となり、京都吉田家に願ひ出て「二宮牛頭天王」の神号を賜る。

明治六年郷社に列せられた。明治四〇年八田、真上、神須屋、極楽寺、流木各村の神社を合祀したが、それ以前も各村より座老を出して宮座を構成する惣社的な存在であった。

現在も氏子五町持ち回りであるその年の当番町を中心に神社の運営が行なわれている。十月の秋祭では氏子五町のだんじり五基がスリル満点のやりまわしを決めて神社境内に勢ぞろいする。祭典の後当番町によって神輿が担がれ諏訪宮跡まで渡御が行なわれる。（平成十九年の御鎮座千五百年祭では氏子各町に臨時御旅所を設け渡御を行なった。）

神社の正面に向き合う里山に捕鳥部萬墓と伝わる大山大塚古墳と義犬塚がある。日本書紀によれば萬は物部守屋の資人で、用明天皇二年丁未の乱において守屋の難波の邸宅を守備したが、主君が討たれたことにより茅渟県有真香邑の妻の家（波多氏）を経由して山中に逃れ追手と戦うも自害。朝廷は萬の死体を八つに切り串刺しにして八つの国にさらせと命じたが、萬が飼っていた白犬が萬の首を啜えて古い墓に収めその上に伏して餓死したという。朝廷は哀れに思い萬と犬の墓を作らせ、萬の墓を代々守ってきた妻の子孫の塚元家では現在も命日に萬を偲ぶ集いを開き来訪者に自家製のくるみ餅をふるまうならわしがある。その朝矢代寸神社宮司により萬の墓前祭が勤められている。神社も代々の先祖が眠る里山（天神山）に向いて建てられていると思われる。

# 山直神社

やまだいじんじゃ

## 御祭神

天照大御神  
速須佐之男命  
彦曾比乃己呂命  
天穗日命  
事勝国勝長狭神  
佐依比売命

## 御神徳

## 例祭日

十月九日



鎮座地 岸和田市内畑町三六一九  
電話 〇七二一四七九一〇二八三  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は延喜式内社で、昔時天穗日命の創立と伝えられる。文武天皇の時、小角五間に七間の神殿を造営。その後聖武天皇の時、行基上人奏上して堂塔社殿を造営。応仁年中兵火に罹り焼失。その後文祿三年二間四面の神殿を再造営する。慶長六年片桐市正検地の際、検分済み屋根葺替修繕をしたが、建造物は従前のまま現存する。

和名抄に山直は也末多倍なりと言う。同じ延喜式内の波多神社と称して牛頭天王を奉祀した神社があったが、年代不詳でこの神社を廃して当社に合祀した。

朝日山長光寺は当社の宮寺であったが、明治維新後神仏分離に依り分れ、明治五年村社に列し、同四十四年奥の坊八百万神社と、宇辻垣内市杵島神社を合祀し現在に至っている。

# 貝塚市

▶ 大阪府にもどる



# 感田神社

かんだじんじや

## 御祭神

天照皇大神  
素戔鳴尊  
菅原道真公

## 御神徳

商売繁盛  
病氣平癒  
安産守護

## 例祭日

七月十九日



鎮座地 貝塚市中町一〇一  
電話 〇七二一四三二一四四六  
HP



## 神社のおすすめ



環濠跡の亀たち

境内の環濠跡に暮らしている亀たちがポンポン水面を叩きながら餌を投げ入れてもらうのを催促する姿を見ることが出来る。(夏季限定)病氣平癒の御神木の楠木がある。



御神木の楠木

## 由緒

創建の詳細は不詳ですが享禄元年(一五二八年)頃に山城国愛宕郡八阪郷の感神院より素戔鳴尊を勧請し氏神と仰いだのが始まりとされています。その後伊勢より天照皇大神、京都より菅原道真公を勧請して同殿にお祀りしました。明治維新前は宗福寺の境内社としてお祀りされていたため、楼門があります。明治維新後は神仏分離により明治五年に郷社となりました。旧社格が彫られた石の柱は感田神社の歴史を伝えるものとして現在も鳥居横に置かれています。

### 境内摂末社について

海幸戎神社を明治四十年に合祀し一月九日・十日・十一日の戎まつりでは吉兆の授与や御神楽の奉納が行われています。(御神楽の奉納は九日・十日です。)また吉兆には福引券が付いており、一年の始まりに参拝の皆様にも多くの福をお授けしています。

一之宮に琴平神社、二之宮に潜戸(くけと)神社、三之宮に神明神社、四之宮に住吉神社、五之宮に春日神社、六之宮に稲荷神社をお祀りしています。一之宮の琴平神社は江戸時代に建てられた姿のまま現存しており、当時の荘厳な彫物を見ることが出来ます。また国の登録有形文化財となっております。二之宮の潜戸神社は御祭神がキサカイヒメ命を始めとする五柱で大国主命のやけどを治したという古事記の伝承から病氣平癒、特に婦人病平癒の神様として信仰を寄せられています。

### 境内について

境内にある堀は貝塚寺内町環濠の唯一現存している堀の一部で貝塚市指定史跡となっています。石垣は江戸時代の積み方の布積み近代の積み方の谷積み両方がみられます。堀の中にある石柱は阪神淡路大震災の際に倒壊し、一部は現在も発見されていません。

### 夏祭りについて

疫病退散を祈願して行われます。宵宮に湯神楽奉納、本宮に神輿の渡御があります。渡御は本宮の朝に本殿で祭典の後、神輿に神様をおうつしして神様に氏子地域を宮司以下神職・氏子総代・氏子の皆さんと共に回っていただき各町ごとに御旅所祭を行います。両日ともに午後六時から神社内にある神楽殿で御神楽奉納が氏子地域では神賑わい行事としてふとん太鼓の練り歩きがあります。

# 阿理莫神社

ありまかじんじや  
(通称 久保神社)

## 御祭神

饒速日命  
外十柱

## 御神徳

五穀豊穰  
病氣平癒  
諸願成就

## 例祭日

九月二十五日



鎮座地 貝塚市久保一六五  
電話 〇七二一四二一三六四九  
HP

奉拝

阿理莫神社

令和二年九月二十五日

## 神社のおすすめ

十月の秋祭には麻生郷の七町の地車が順に宮入し、たいへん勇壮で賑やかである。

## 由緒

阿理莫神社は、延喜式内社に列せられ、継體天皇元年（西暦五〇七年）の創建と伝えられています。

饒速日命の七世孫である物部十根大連の後裔で、代々阿間河荘の豪族であった安幕首が、有真香邑に物部氏の始祖である饒速日命をお祀りし氏神様として崇敬しました。

この地久保は元々、茅渟県有真香邑に属していましたが、新井池築造時に水利の関係で麻生郷に編入したとされ、現在では、有真香区域の大部分は岸和田市に属しています。

明治政府は、神道を国家の宗祀とする方針を進め、官幣社・国幣社・府社・郷社・村社などの社格を定めました。当社は明治六年郷社に列し、同四十年一月二十八日神饌幣帛料供進社に指定されました。政府の一町村一社の原則により、明治四十一年から四十二年にかけて麻生郷の各地に御鎮座した神社は当社に合祀され、麻生郷全域の氏神様となり現在に至ります。

なお合祀された神社のうち、旧麻生河王子神社は、熊野街道九十九王子の一つである麻生河王子をお祀りした王子社であると伝えられています。

### 合祀された御祭神

天照大御神	市杵島姫命
素戔鳴尊	鳴雷大神
大国主命	水分神
大物主命	蛭子命
品陀別命	菅原道真公

# みなみこぎじんじや 南近義神社

## 御祭神

弥都波能売神  
丹生都比売神  
外三十四柱

## 御神徳

農耕  
安産  
諸願成就

## 例祭日

九月二十二日



鎮座地 貝塚市王子一九五  
電話 〇七二一四二三一五二五八  
HP

奉拝  
南近義神社

平成三十年五月一日

## 由緒

当神社はもと丹生神社と称し、伝説によると大和国吉野丹生神社の御分霊を勧請したものであるが詳らかではない。近義郷は弘安の役で敵国降伏の祈請をこめた勲功により、正徳三年二（一二九〇）三月二十七日、院宣を以って丹生高野社（丹生都比売社）に寄進されてより長く高野山領であったので、その御分霊を勧請して産土神（氏神）と崇め奉り、天野明神と呼ばれていた。水、雨、あるいは安産の神として信仰があつく、江戸時代には雨乞いのため、鐘・太鼓を鳴らしながらの千度参りが行われた。

明治五年村社に列し、同四十年十月二十八日王子字馬郡の八幡神社、同字戎の出口神社、同字権現の熊野神社、同字新宮の市杵島神社、同字宮脇の神明神社、同字明楽寺の住吉神社、同字舟戸の春日神社、同字氏神の加茂神社を合祀した。また同年十月三十日同字原宮の市杵島神社、沢字堂の坂の五社神社を合祀し、十一月十六日には王子字貝田社の加支多神社、沢字高林の加茂神社を合祀した。更に翌四十一年九月五日王子字新出の加茂神社を合祀し、翌四十二年五月十八日橋本字小名城神社、同字梅宮の北野神社、同字島ヶ崎の島崎神社、同字野口の藤の木神社、同字出原の神明神社、窪田字東の市杵島神社、同字西の市杵神社、堤字宮の久保の厳島神社、地藏堂字権現の熊野神社、沢の八品神社を合祀するとともに今の社名に改められた。

八品神社は明治四十年十月二十九日、浦田字氏神の五社神社を、翌三十日沢字ウベの熊野神社、同字半戸の道陸神社、同字高林の加茂神社、同字堂の坂の五社神社、同年十一月十一日沢字四柱の菅原神社を合祀したものである。熊野九十九王子のうち、鞍持、近木王子が合祀されている。

なお、合祀社のうち王子字馬郡の八幡神社は『和泉志』にその名が見え、『国内神名帳』には「従五位下馬郡社」とある。また八品神社は、『和泉志』に「櫛代祠在沢村、相伝古者調進、伊勢斎主御櫛于此」と見えるように、櫛の神として崇敬され、『泉州志』にも「近木櫛、藤原明衡新猿楽記載、諸国土産曰和泉櫛、余按、近木郷造櫛者年既尚矣明衡所謂和泉櫛乃是歟」とある。

# いなりじんじゃ 稲荷神社

(通称) 森稲荷神社 森神社

## 御祭神

倉稲魂命  
菅原道真  
市杵島姫命  
春日大神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
学業成就

## 例祭日

十月十五日



## 神社のおすすめ

奉拝  
森稲荷神社  
令和二年九月一日

鎮座地 貝塚市森五二四  
電話 〇七二一四四六一〇八六六  
HP <http://morinari.org/>

## 由緒

当社の創建は、建保六年（一二一八年）とされ、古くから木島谷の総社と呼ばれもとは東方の東山山頂にあったものを十六世紀半ばに、現在の地に移したと伝わるのみである。江戸時代の中盛彬（なかもりしげ）の書物「伽李素免獨語（かりそめのひとりごと）」には「繁盛なりし時の神事の記」として天正七年（一五七九年）九月の記録の中に、「泉州をはじめ摂津・河内・紀州から多くの参詣者を集め、特に初午祭には山超えして参詣者も数知れず、非常な賑わいを見せたと記録されている。」

岸和田藩主岡部氏は貞享四年（一六八七年）に社料として、新田島二反歩を寄進し、祭日には警護の武士数人を出すのが通例であったという。

明治五年（一八七二年）には村社となり、明治四十二年（一九〇九年）三月二十七日に木島村内にあった八社水間の菅原神社、三ツ松の菅原神社、市杵島神社、名越の市杵島神社、菅原神社、春日神社、清見の清見神社、厳島神社が合祀され、明治四十二年（一九〇九年）十月神饌幣帛料供進社に指定された。

境内には合祀された時に移転された神社の石造物が多数残る。本殿は三間社流造で江戸時代中期の建物である。平成三十年に、御創建八百年記念事業として、本殿改修、境内整備を行った。

どろろくじんじゃ  
**道陸神社**  
(通称 だろろくさん)

**御祭神**

原山津見神  
 戸山津見神

**御神徳**

足の健康  
 足の病平癒

**例祭日**

七月三十一日



鎮座地 貝塚市木積三七五八  
 電話 〇七二一四四六一〇四七七  
 H P

御朱印なし

**神社のおすすめ**



**由緒**

由緒は詳らかではないが、「どろろくさん」と呼んで親しまれ、道陸神を祭神とし、足の神として広く信仰されている。もともと戦国時代にこのあたりに勢力をもっていた松浦肥前守(まもる)によって、近くにあった蛇谷城内に祀られていたものが、後に地元木積町畑の人々により現在地へ移されたという。蛇谷城の兵士が、湧き出る清水によって足の傷を治したこと、信仰が始まったと言い伝えられている。この地は和泉葛城山への登山道にあたり、修験者や紀州へ往来する人達で賑わった。現在も言い伝えながら拝殿前の手水鉢には道向の蛇谷山より湧水が注がれている。境内に隣接して蔵王権現のお堂があり、十月に大護摩祭が行われる。末社に稻荷社二社と大黒天が祀られている。

# 西葛城神社

(通称 楠神社)

にし かつらぎ じん じゃ

## 御祭神

素盞鳴命  
大己貴命  
白山比咩命  
菅原道真公  
楠木正成公  
外十八柱

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
子授け祈願

## 例祭日

十月十七日



幹周囲4mの楠の巨木



杉の木の空洞に地藏七体鎮

## 神社のおすすめ

神庭場には楠の巨木、境内参道には「駒つなぎの杉」があり。木の空洞にはお地藏様が七体鎮座しています。何時の頃からか、パワースポットと なっているようです。



鎮座地 貝塚市木積二二七三  
電話 〇七二一四四六一二二六一  
HP <http://www.conet.ne.jp/saikatsujinja/>

## 由緒

和泉葛城山山頂を仰ぐ木積の里、村北の高台に当社は鎮座しております。

この一帯を「西葛城」と呼んでおります。この地区は古くから仙人掌(そまびと)植林等の山仕事をする人の村で、四天王寺建立の木材はこの地区から出したと言われております。当社には、「西葛城神社」と「楠神社」という二つの名称があります。

西葛城神社は、一九一〇年に旧西葛城村の各大字の神社を、木積村にありました「深谷神社」に合祀され、名称も「西葛城神社」と改められました。

深谷神社は、西暦七二六年に創建された「木積観音寺」の鎮守として祀られており西暦一〇一〇年に再建の記録があります。

現在の鎮座地は、元々楠神社の地でありまして、明治の「合祀」のさい、楠大明神社は別格社の為そのままになっておりましたが、本社が一九一七年に台風で損壊したため当時の鎮座地、孝恩寺境内に国宝 釘無堂の隣接地より、旧白山権現社の御社を流用して移築。本殿、相殿として祀られています。

楠神社は、一三六四年に、木積の地にあった「蛇谷城」の城主 松浦氏によって創建されました。松浦氏は、野田城(旧岸和田城)和田新兵衛高家の家老格にあつて和田氏(にぎたし)は楠木正成の甥にあたります。貞治三年の「楠 正成三十年忌」に木積村の片山地区に楠正成を悼み「楠大明神」を創建したと記録されています。

神社の鳥居前の道は、先の蛇谷城、野田城を結ぶ連絡道となっていて、急で狭い道から「城の坂」じよのさか」と呼ばれております。当時、松浦氏には跡継ぎが無く、この「楠大明神」に祈願したところ「男の子」が生まれたとの伝承から、「子授けの神」として知られており、江戸時代には遠く「兵庫」や「新宮」あたりからも参詣者があつたようです。

# 泉佐野市

▶ 大阪府にもどる



# かすがじんじゃ 春日神社

(通称 春日さん)

## 御祭神

健甕槌神  
天兒屋根命  
天押雲根命  
齋主命  
姫大神  
外二十五柱

## 御神徳

商売繁盛  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

海の日



鎮座地 泉佐野市春日町四一―一二  
電話 〇七二―四六四―〇二三五

H  
P

## 御朱印なし

## 由緒

光仁天皇の宝亀年中、坂上苺田麻呂が奈良の春日神を勧請したのが当社の起源である。仁明天皇の承和十四年嵯峨天皇皇太子高岳親王が廃太子の後仏門に帰し、僧となって名を真如と改め、当社の西南に平城寺を建立して当社の宮寺とし、長慶天皇の天授二年坂上正澄が社殿を造営した。

後小松天皇の応永五年社殿鳴動し、翌六年に領主大内義弘が戦に敗れた時に、拝殿、倉庫、平城寺等、悉く兵火にかかり、神殿のみが僅かに災を免れた。

天正十三年までは、祭神五座が各々別殿であったが、同年根来の乱にまた焼失したので、その後、同殿祭祀となった。

明治五年、村社となり、同四十年一月神饌幣帛料供進の指定を受けた。

昔から正月十一日(旧暦)を勧請の日と伝えられ、その日には結陳祭(けんちまつり)が執り行なわれ、氏子の十七才以上の男子は全員参拝して、五尺の的にて射弓の神事がにぎやかに行われた。明治十七年以来この行事は行なわれていないが、「明日は十一日春日の結陳佐野の女衆の衣裳くらべ」という俗謡が今も残っている。

明治四十一年、旧佐野町内の二十九の神社が全部現在の春日神社に合祀された。

現在本殿は三殿に別れ、中央は春日神社で五柱の神を祭り、左は濱出神社で祭神は、事代主命、猿田比古命、健角見命、大山咋命、又右の社殿にはその他の合祀の神々を祀っている。

境内社として、赤手拭稻荷神社があり、祭神は大山祇命、倉稻魂命で、明治四十二年五月に東島取村々社八幡神社の境内神社を移転したものである。

### 覚楚新右衛門と岸和田寺田家

屋号「カクシユウ」代々、諸式問屋を営み、佐野初の清酒醸造をおこなった。

五代庄吉の娘、徳が岸和田の寺田酒造に嫁ぎ、後に寺田財閥を築く寺田甚興茂、元吉の二兄弟をもうけた後、夫と死別。養子を迎えて寺田家を再興するあいだ、甚興茂と元吉は佐野の覚楚家に預けられ、祖父にあたる新右衛門に育てられた。新右衛門は春日神社の宮總代を務め、幼い兄弟に境内掃除などさせ、「敬神、勤労感謝」の精神を教え、実業家としての基礎を築いた。

徳は計八人の子をもうけ、三男利吉は岸和田市長を務めた。岸和田城ほとり「五風荘」は、もと利吉の別荘であった。

寺田財閥は南海電鉄・関西電力・五十一銀行・岸和田紡績などを作る。大正七年、春日神社にしめ掛け石を奉納した。正面右側「幼年享神徳」正面左側「深謝捧萬分」

# かしたじんじや 加支多神社

## 御祭神

誉田別命  
市杵島姫命  
天児屋根命

## 御神徳

文武の神  
女性子供守護  
出世開運

## 例祭日

十月第二日曜日



鎮座地 泉佐野市鶴原一八三四―二  
電話 〇七二一四六二一五〇六  
HP



令和二年十月十日

## 神社のおすすめ

秋の例大祭（十月）には氏子四町のだんじりが奉納されます。また、大阪最南端の弓道場では、正月三日には府下弓友会が参加する加支多八幡新春百射会の競技が執り行われます。



だんじり宮入り



加支多神社 弓道場

## 由緒

加支多神社の「加支多」の名は貝田、すなわち「垣田」の地名に由来します。当社の創建年代は不明ですが、古くは十世紀の『延喜式神名帳』に記載され、十三世紀の『和泉国内神名帳』には「從四位下垣田社」と記される式内社です。和泉六十二座の中の一。『大阪府全志』等によれば、合祀社の一つである旧市杵島神社の社地（字後藤堂）にあり、もと市杵島神社と称しており、その位置については、当社より南へ約三〇〇㊦の字貝田辺りに社域四百四十二坪の広さを有していたと伝えられています。

明治五年に村社、同四十二年に字貝田の村社 加支多神社と合祀され、今の場所へ移転しています。あわせてこの時に村社熊城八幡神社、鶴原の大宮八幡神社、字新家の同八幡神社、字浜田の同浜之神社、字古屋敷の曾我神社等を合祀しています。大正四年には神饌幣帛料供進社に指定されました。

本殿は、中規模の一間社流造で装飾が少ない端正なつくりで低い基壇の上に建てられています。建立年代は再建時の扁額銘から大正十五（一九二六）年頃と考えられます。拝殿、幣殿、神饌所も本殿と同じ頃と考えられます。境内で最も古いものとしては、文化十（一八一三）年の狛犬や文政七（一八二四）年の石灯籠も残されています。

御祭神は三神を祀っています。主祭神は誉田別命、すなわち応神天皇の御神名で通称「八幡さま」と呼ばれ、「文武の神」「安産・子授けの神」「弓矢八幡」と称えられています。市杵島姫命は、別名狭依比売命といい、高天原の天照大神にお仕えした女神で、「女性・子供守護」「婦人の芸事」「作法の神」「財福の神」「音楽の神」「海上交通の神」でもあり、弁財天ともいわれています。

天児屋根命は、高天原の神々の祭祀を司る神で、天照大御神の天の岩戸の際に美しい祝詞を奏上したことで有名です。「祈禱の神」「出世開運の神」とされます。他にも社務所内に大黒殿、境内には戎神社、賽の神、金神社もあります。

十月第二日曜日に五穀豊穰、農・漁業の収穫を感謝した秋の例大祭が行われ、鶴原、鶴原東、貝田、新家四町のだんじりが勇壮に曳行されています。

本殿右側には、大阪最南端に位置する弓道場が昭和五十七年に境内に設置され、大阪府弓道連盟所属の加支多八幡弓友会が日々修練を積んでいます。例年、正月の三日に百射会が催され、大阪府連の弓引きが集います。

# ひねじんじゃ 日根神社

## 御祭神

鷓鴣草葺不合尊  
玉依姫命  
四皇子  
億斯富使主

## 御神徳

子授  
安産  
安眠

## 例祭日

五月五日



鎮座地 泉佐野市日根野六三二  
電話 〇七二一四六七一一六二  
HP <https://hine-jinja.jp/>



## 神社のおすすめ



①枕御守(安眠・子宝) 各700円  
②まくら祭り



「まくら祭り」  
奈良時代から続  
く祭礼。子宝を祈  
願して奉納された  
枕を幟につけて渡  
御した事から「ま  
くら祭り」と呼ば  
れる。近年は  
枕にあやかり  
安眠の御利益  
を求める参拝  
者が多く訪れ  
る。

## 由緒

紀元前六六三年、鷓鴣草葺不合尊（ウガヤフキアヘズノミコト）と玉依姫（タマヨリヒメ）の四皇子の末子、神日本磐余彦尊（カムヤマトイハレビコノミコト）は日本の建国を決意され、河内から大和へ入ろうとしましたが長髓彦（ナガスネヒコ）の激しい抵抗に遭いました。  
磐余彦尊は日の御子である自分が太陽に向かって戦うのが良くないと悟り、広野に根城を構え、日の国を治める天照大神（アマテラスオオカミ）と、根の国を治める素戔嗚尊（スサノオノミコト）をお祀りして戦勝を祈願しました。  
こうして紀伊から大和へ入り、この地を平定された磐余彦尊は初代天皇（神武天皇）となりました。

このとき戦勝を祈願された地は日の神と根の神をお祀りした野原から日根野と呼ばれ、ここに日根神社が祀られました。

創建の時期は不詳ですが、仲哀天皇二年（一九二年）に創祀されたという説もあり、天武天皇が白鳳二年（六七四年）に社殿を造営されたと云われています。

また、奈良時代の靈龜二年（七一六年）に制定された和泉国五大社の一つに数えられ、撰社の比売神社と共に延喜式内社に列します。

### 本殿（春日造・府指定有形文化財）

文和二年（一三五三年）、兵火により焼失するも二年後に再興。天正四年（一五七六年）に豊臣秀吉の根来攻めによって炎上、天正十三年（一五八五年）には社領が没収されましたが、慶長七年（一六〇二年）に豊臣秀頼によって再建されました。

### 国史跡 日根荘遺跡（日本遺産）

鎌倉時代には現在の泉佐野市一帯が九条家の荘園となり、樫井川流域の開発が進みました。日根神社は日根荘の総鎮守として大井闍大明神とも称されるようになりました。

祭神の億斯富使主（オシフミノオミ）は、樫井川流域を開発した日根造（ヒネノミヤツコ）の祖先とされています。

### 祭礼

五月の例大祭「まくら祭り」は、五メートルほどの竹竿に色とりどりの飾り枕をつけた枕幟を背負い、五社音頭を唄いながら巡行する特色ある祭です。（市無形文化財）

七月の「ゆ祭り」は、水の恵みに感謝し五穀豊穡と無病息災を祈願する疫除祭です。参道には夜店が並び、氏子による五社音頭踊りが奉納されます。

### 摂社

比売神社（天照大神・素戔嗚尊・衣通姫）  
溝口大明神とも称され、かつては本殿と向かい合うようにして建てられており、下の御前と呼ばれていました。

末社  
新道宮（菅原道真）、野々宮（丹生都比売神）、野口神社（事代主神）、岡前（崎）神社（素戔嗚尊）、赤之宮（丹生都比売神）  
明治四十一年（一九〇八年）に日根野村の神社は全て日根神社に合祀されました。

# 蟻通神社

ありとおしじんじや

## 御祭神

大国主命  
蟻通明神

## 御神徳

五穀豊穰  
良縁成就  
学業成就

## 例祭日

十月第二日曜



舞殿



地車（だんじり）の宮入



## 神社のおすすめ

江戸時代、岸和田藩主によって寄進された舞殿（国登録有形文化財）にて秋の夕暮れに薪能が開催されています。

## 由緒

蟻通神社は、泉佐野市長滝に鎮座する旧長滝村の氏神鎮守社です。創立年代は、開化天皇の御宇勸請と伝えられ、この地方にも稲作文化が広がり、五穀豊穰・国土開発の神として祀られました。元の境内は、熊野街道（紀州街道）沿いにあり、社域は現在の約5倍（約一万二千坪）あり、広大で古樹鬱蒼とした杜の、泉州の古社でした。往古から雨乞い祈願に靈驗あらたかとして、尊崇を集めました。

平安時代に入り、有名な歌人、紀貫之の「貫之集」記載の「ありとほし」故事により当時の知識人が興味を持たれました。清少納言の随筆「枕草子」に記された社名由来の「難題説話・遺老説話の故事伝承、室町時代には能楽の大成者世阿弥が謡曲「蟻通」を作り、江戸中期には浮世絵師、鈴木春信の見立絵「雨夜の宮詣（見立蟻通）」などの様々な文芸に取り上げられ、蟻通明神としてその名は、広く知られることになりました。

天正年間、織田信長の兵火に罹り、社殿・故事来歴・宝物を焼失します。その後、再建されるも大阪夏の陣によって再び焼失。江戸時代に入り万治三年、岸和田藩主岡部宣勝公（初代）の神社ご造営のご意志により再興を果たしました。歴代の藩主岡部氏の保護篤く、時にご社参され、祈願を為し、数々の神宝・祭具・土地をご寄進されました。同時期に神宮寺宗福院も再建されましたが、明治の神仏分離令により、廃寺となりました。明治五年村社に列し、大正六年郷社となりました。

昭和に入り、第二次世界大戦のさなか、旧陸軍明野飛行学校佐野分教所の建設のため軍部より、周辺の村落、田畑、神社が強制移転を余儀なくされました。神社は、氏子崇敬者の方々の尊いご尽力で、昭和十八年現在の地に遷座しました。戦後、徐々に整備が重ねられ、落ちついた趣のある神社を取り戻しました。

時代が進んだ現代も、氏子崇敬者の方々による宮座（敬老社人）が置かれ、郷土の皆様から「ありとおしさん」「おみやさん」と親しまれ、地域の方々の心のふるさととなっています。

また、和歌・能楽の関係者の方々、歴史愛好家の方々、遠方の方々からも篤い信仰を寄せていただいております。近年は、境内にある舞殿で、「ありとほし薪能」が開催されるようになり、ご観覧の方々に喜んでいただいております。

### ゆかりの和歌

「かきくもり あやめも知らぬ 大空に ありとほしをば おもふべしやは」

紀貫之

# な か み じ ん じ ゃ 奈加美神社

## 御祭神

誉田別命  
比売命  
息長帯姫命  
外十二柱

## 御神徳

厄除開運  
安産守護  
諸願成就

## 例祭日

体育の日の前日



末社・大宮稻荷神社



本殿 大阪府指定有形文化財



成就なす 泉州水なすを用いた授与品

## 神社のおすすめ

令和二年八月八日

※他朱印あり



奉  
拜

鎮座地 泉佐野市中庄八三四  
電話 〇七二一四六二一七〇八〇  
HP <http://www.nakami.org>

## 由緒

奈加美神社の創建は、平安時代にかかるものとされていますが、それを詳らかにするものは残されておりません。

旧社は大宮神社と称されておりました。平松家、藤田家の古文書によれば、宝治二年（一二四八）にはすでに大宮神社は分社をなし、佐野・大武家村に大引欠神社を有していたとあり、その後も分霊分社が続き、室町期文明二年（一四七〇）には、近郷七ヶ村に及ぶ七座七社の惣鎮守社として、村人の崇敬を一手に集め、宏壮深遠な神域をもつ名実とも大宮であつたとされています。「今に大宮様七膳つつすはるや」と、七座の神饌を献ずる習わしは分社の由縁によるもので、明治の神社合祀まで続けられました。湊の教蓮寺古文書に依れば、大宮神社は紀州根来寺の触下にあり社領三千石を有し、大宮大明神、または大宮庵とも称され、神仏習合の時代には真言宗の社僧が祭祀にあつたことが記されています。

天正五年（一五七七）の織田信長の根来攻めの際、当大宮神社も悉く焼き払われ、この戦災後、慶長十五年（一六一〇）八月、ときの代官・新川宮内大輔、沙門松室坊頼真法師等が焼廢した神社の再建にあたり、現在地に社殿が造営されました。

明治四十一年（一九〇八）から翌明治四十二年（一九〇九）にかけて、中庄・上瓦屋・湊の三村の字々の神社が合祀され和協一致の精神による神社の護持発展を願い、三村の奈（中庄）加（上瓦屋）美（湊）の頭仮名文字を綴合せて、万葉仮名の響きも美しく「奈加美神社」と称されることとなりました。

近年では平成五年に本殿及び棟札九枚が大阪府有形文化財の指定を受け、平成二十一年に奈加美神社改称百周年記念事業として、拝殿の改修工事、社務所の新築工事を行い、令和二年に御大典記念事業として、神宮式年遷宮の古材を以って末社大宮稻荷神社の全面改修工事を行いました。

# おがみじんじゃ 意賀美神社

## 御祭神

高麗神  
素盞鳴尊  
大己貴命  
菅原道真  
猿田彦尊

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
交通安全

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉佐野市上之郷四五  
電話 〇七二一四六八一〇五四〇

H P



## 神社のおすすめ



①神社と森 ②足の神様（堂ヶ谷神社）

文化財建造物の保存、修理に必要な檜皮などの資材を安定的に確保するため、「ふるさと文化財の森」として、裏山ではヒノキの植林を行っています。

山頂からは市域を一望することもできます。



②足の神様

## 由緒

延喜式の古社ながら、創建の年月は未詳である。社傳によると、古は社司十軒あり、年長者を推して祭主としたとある。社地はかつて上之郷村字布都の山中にあったが、天正年間に焼失したといふ。末社には、奥神社・大国神社・堂ヶ谷神社がある。その中堂ヶ谷神社は、字堂ヶ谷（現在の滝ノ池近く）にあつて、もと「奥ノ院」と称したが、のちに当社に移転せられたのである。

意賀美神社は、雨を掌る神として崇敬され、明治五年村社となり、同四十年一月神饌幣帛料供進社に列し、同四十一年六月四日字池尻の村社若宮神社・字正法寺の村社彌栄神社と合祀した。さらに大正十四年七月十日郷社に昇格した。

### 社名の由来

平安時代の史料である『延喜式神名帳』古写本の九条家本や金剛寺本には、「意賀美（オガミ）」とありますが、「意賀美（オガミ）」と濁って呼ばれるのが現在の呼称となっています。また、大阪府下には「意賀美（イガミ）」と呼ぶ例もあります。

その後の資料である『大阪府誌』『大阪府全誌』『大阪府史蹟名勝天然記念物』などには境内が上之郷村字上村の武塔山の麓に立地していることから、「武塔天神」とも記されています。

### 社殿

意賀美神社は、泉佐野市平野部の南限の麓を流れる樫井川左岸の高台に境内を構えており、上之郷村の産土神として、そして地域の雨水豊作の神として九条家本「延喜式」の式内社にも含まれる由緒ある古社です。

本殿は一間社春日造、屋根は優美な檜皮葺きで、正面の軒唐破風や木鼻、蛙股などの彫刻は近世初頭のこの泉南地域の建築様式を余すことなく残しています。

建立後、江戸期から昭和期までに何度か修理事業をしていますが、昭和十一年の解体修理工事の際、この社殿が室町時代の嘉吉二年（一四四二年）の建立であり泉佐野市に現存する最古の社殿であることが判明しました。その後、昭和二五年八月二九日に重要文化財の指定を受け現在に至っております。

近年、先の屋根の葺替工事から三十年余りが経過し、屋根の苔の着生や軒先、谷部分の雨水による被害が目立ち始めたため、平成十七年度から文化庁の国庫補助事業として修理事業に着手し、あわせて上拝殿などの整備工事を竣工しました。

# すみよしじんじゃ 住吉神社

(通称 いばら住吉)

## 御祭神

底筒男命  
中筒男命  
表筒男命  
息長帯姫命

## 御神徳

## 例祭日

七月三十一日

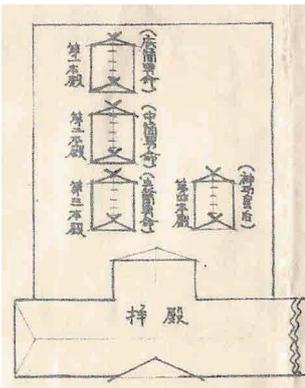


鎮座地 泉佐野市下瓦屋町二一―八  
電話  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ

「住吉造」というのは、妻入式で、切妻の力強い直線をなした屋根に置千木と五本の角堅魚木を備え、周囲に廻廊なく、板玉垣をめぐらし、さらにその外に荒忌垣があり、正面で「住吉鳥居」と称される特有の四角鳥居があります。当社の本殿形式は、このうち、板玉垣と四角



鳥居とを残念ながら備えてはおりません。

## 由緒

当社は、泉佐野市下瓦屋町二一―八に鎮座。井原庄に在るところから、俗に「いばら住吉」と呼ばれ親しまれてきました。

### 御祭神

第一本殿に底筒男命 第三本殿に表筒男命  
第二本殿に中筒男命 第四本殿に息長足姫命（神功皇后）  
をお祀りしています。

底筒男命・中筒男命・表筒男命は、住吉大神と申し上げ、伊弉諾尊が筑紫の日向の橘の小戸の櫂原に禊祓なされたときに生れたまひし神様です。

### 御鎮座

神功皇后は、新羅御遠征に当って、住吉大神の御加護を得て大いに国威を輝かせられ、御凱旋の帰途、この井原庄の海岸に船を寄せられ上陸されたときに、その船に奉斎してあった住吉の大神をこの地にお祀りしたのが当社の起源です。皇后撰政十一年辛卯年の頃で、今から約千七百年ほど前のことでありました。後に皇后をも併せお祀り申し上げ、先の三柱の大神と共に住吉四社大明神と申し上げます。

現在の当住吉神社は、その後、荒廢していたのを、井原庄の高徳の人達が社殿を造営して祭祀したものです。明治五年に村社に列格しています。

なお、総本宮は、摂津一の宮として名高い、元官幣大社の住吉大社です。

### 御神徳

住吉大神は、禊祓の御神格をもって御出現になりましたので、禊祓の神であり、神道で最も重要な「祓」のことを司る神様であります。また、住吉大神は、「吾が和魂をば、宜しく大津の津中倉の長峽に居さしむべし。便ち因りて往来う船を看護さむ」と神功皇后にお告げになった由が、日本書紀に見えており、海上安全、交通安全の守護神であります。また、息長足姫命（神功皇后）は歌神としても、安産の神様としても、武運長久の神様としても昔より信仰厚く、あわせて住吉の大神の広大な御神徳は、あまねく世に知られております。

### 御社殿

御社殿は、第一本殿より第四本殿まで、四殿からなり、第一、第二、第三本殿は縦に並び、第四本殿は第三本殿の横（東側）に並ぶという、他に例をみない独特の住吉社配置であります。各本殿とも、「住吉造」と称せられる神社建築史上最古の特殊の様式によっています。

### 境内社

本殿の西横に、子安社を祭祀している。安産の神様、子授けの神様として厚く崇敬されております。

# 火走神社

ひばしりじんじや

御祭神

軻遇突智神

御神徳

例祭日

十月十日



鎮座地 泉佐野市大木一五三四  
電話 〇七二一四五九一七五一  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は延喜式内の古社である。  
日本総国風土記に「圭田二十九束三畝田推古天皇二年甲寅三月初加神礼」とあるので、少なくとも当時以前の勧請である。

社名は祭事に、男巫の火上を走るものがあるところから、この名がある。

社殿は永正二年九月十四日に御造営の記録がある。現在の社殿は元和八年八月十六日の御造営で、一間社春日造、屋根は桧皮葺、三方に緑をめぐらし、前方に向拝を設け、木部には極彩式で牡丹桜、雲松波などを描き、臺股には天人獅子を彫刻して、桃山美術の精粹を今日まで完全に伝えている。

中古仏教の盛んな頃、当社の側に上宝院滝本坊滝音寺と称した神宮寺があり、犬鳴山七宝滝寺中興の志一上人が兼任して、当社の祭事に奉仕していた。

天正十三年兵戦に罹り、二十ヶ坊が悉く烏有に帰したが、滝本坊だけが災厄を免れ、当社の別当であったが、明治維新の神仏分離により滝本坊は廃寺処分せられ、その境内地は神社境内地に復し、仏像、仏具等は七宝滝寺に移され、堂宇を取りこぼち、庫裏の建物は模様替えをして社務所に充当せられた。

明治五年村社に列し、同四十年一月神饌幣帛料供進社に指定され、大正元年十二月六日郷社に昇格した。

境内は現在七八〇坪余り有る。

# 八幡神社

やはたじんじや

## 御祭神

誉田別命  
氣長足姫命

## 御神徳

厄除開運  
必勝合格  
商売繁盛

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉佐野市南中安松二九二  
電話 〇七二一四六六一〇七六  
HP



## 神社のおすすめ

境内末社市杵島姫社は七福神の弁財天としても知られ、商売繁盛、福の神として崇敬されています。



## 由緒

氣長足姫命三韓より凱旋し、御船を隣地岡本浦にお停めになったとき、偶々暴風雨の為に帆出ることが出来ず、逆に同地に上陸され、誉田別命を奉じてこの地を行宮とされ、風雨の静まるのをお待ちになった。後世これを記念してこの地に当神社を創立したという。

当社は安松の住民中、神社創立の初めより土着している者を以て氏子としたため、他より転住し子孫が連綿として住居していても氏子になれなかったため、今よりおよそ三五〇年前、当時の郷土根来氏は当社より約四丁を距る鏡原と称する地に更に当社の祭神と同一の神である誉田別命を勧請し、一社を創立した。鐘原神社が是れである。爾來祈願祝祭等には必ず両氏が二社に参拝するのを例とした。このような状態で、神祇を崇敬して来たが、尚一層神社崇敬の実を全うせんがため、二社を合併し維持財産を強固にするのが良いと協議一決し、明治四十二年六月二十五日当神社に合祀を行い、明治五年村社に列せられ、明治四十二年十月神饌幣帛料供進神社と指定せられた。

昭和十七年四月当神社付近一帯軍部施設公用地となり、神域一〇七三〇坪の内、旧本殿の後方一四七〇坪も其の区域と編入され、かつ古来より鬱蒼として繁茂し森厳を加えていた古木大木も伐採することとなり、本殿初め境内諸建物を現今の位置に移転し、昭和十七年十月十四日仮殿遷座祭、昭和十八年十月本殿遷座祭、昭和十九年十月十日落成奉告祭を行った。

# 日枝神社

ひえじんじや

## 御祭神

猿田彦命

## 御神徳

家内安全  
五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉佐野市南中樫井四四〇  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の創建の年代及び由緒は共に詳かではない。

# 船岡神社

ふなおかじんじや

## 御祭神

建速須佐男命  
武甕槌命  
豊受姫命

## 御神徳

厄除開運  
武運長久  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉佐野市南中岡本二七六  
電話 〇七二一四六六一〇七六  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

里伝によると、神功皇后が三韓より凱旋の時御船を岡本浦にお停めになったが、偶々暴風雨の為め出帆することが出来ないで、皇子誉田別尊を奉じて上陸されたため、後世この神跡に当神社を創立した。神社附近東南に綱丘と称する小阜あつたが、現在大字岡本の字地となり、又西方に碓山と称する小阜あつたが、目下田地となる。神社の東南に矢の淵と称する小池あつたが、現在は畑地となる。尚文化年間日根野村より同村鎮座日根神社の御旅所なので、船岡山は日根野村の所有であると主張し、訴訟二十ヶ年におよんだが当神社の氏子山下家より船岡神社の所有である確実な記録が出た為め遂に勝訴となった。

# わかみやじんじゃ 若宮神社

## 御祭神

譽田別尊  
応神天皇（第十五代天皇）  
八幡大神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
厄除開運

## 例祭日

体育の日の前日



鎮座地 泉佐野市南中樫井六二七  
電話 〇七二一四六六一二五二五  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

若宮神社の創立・勧請の年代は詳出ないとされているが、うでに若宮神社が存立していたと思われる。

享保五年（一七二〇）村明細帳に「一、若宮 十四間、十一間、五畝四歩」と当時の神社規模が伺われる。よって明治五年（一八七二）「村社」に列せられる。

明治七年三月、樫井村戸長が群役所に提出した書類に添えられた届書には、「若宮神社の川向かいに在ったが、先頃吉川大宮司殿がお越しの時お願いし、樫井村字般若と言う処に引渡し云々」とあり、従前は樫井川の向かいの字「川東」に鎮座してあつたものが、地元住民らの要請によって現在地に移ったものである。

昭和五十四年、時の町会長、東谷福松氏らが中心になって、大阪府教育委員会に神社の「宗教法人」としての扱いを許可申請をおこない、宗教法人若宮神社として再出発した。昭和五十四年九月十五日に報告祭が斎行された。

# かすがじんじや 春日神社

御祭神

天児屋根命

御神徳

例祭日

十月十日



鎮座地 泉佐野市土丸五九  
電話 〇七二一四五九一七五二一  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は国内神名帳所載の神社である。  
明治五年に村社に列した。  
社殿は天正十三年の御造営と云われ、古くより御鎮座あり、部落民の崇敬を得ていたと伝えられている。

# 阪南市

▶ 大阪府にもどる



# 波太神社

はたじんじや

## 御祭神

角凝命  
應神天皇

## 御神徳

家内安全  
安産守護  
厄除開運

## 例祭日

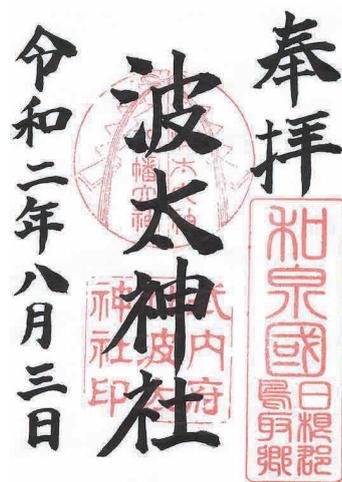
十月十一日



吉野舞

平成二十六年から毎年七月末の土曜日  
夕方五時より伊勢大神楽奉納。

## 神社のおすすめ



鎮座地 阪南市石田一六七  
電話 〇七二一四七二一〇九五  
HP

## 由緒

当社は延喜式内の神社で、鳥取郷の総社である。鳥取氏が南朝に加わったために、天授年中山名氏に滅ぼされ、当社及び波太八幡宮並に宮寺である神光寺も総て劫火に罹って焦土と化した。波多八幡宮は当時下荘村大字貝掛の指出森御し森とき、務古の水門より紀の国に至ろうとして御船を鳥取の玉津浦に繋かれ、武内宿禰皇子を懐にして其の海辺を逍遙された縁に依り、同皇子即ち品陀別命を其の地に祀つたもので、神光寺は貞觀年中南都大安寺行教和尚の其の祖祀船守の墓に詣るため淡輪村に行かんとして、鳥取郷を過ぎるとき、鳥取隼人正の一寺を創立して宮寺となし、同和尚が開山したもので、宝塔、護摩堂、般若堂、東坊、西坊、善門院等があったという。鳥取氏が亡び当社及び波太八幡宮並に神光寺も鳥有と化したので、郷の者宿これを敷じて、永徳年中其の三十六人力をあわせ私財を抛ち、地を南山の麓に下して社殿を再建し、波太八幡宮の祭神を相殿に合祀し、神光寺を再建して、護摩堂、帳合、僧房等旧観に復したのが即ち当所である。然るに天正十三年豊臣秀吉の根来征伐に際し社頭再び兵火に罹り御朱印地書類を初め平重盛奉納の太刀、梶原景時奉納の長刀、其の他旧記什宝等悉く灰燼と化し、神領は没収せられて無縁となったが、慶長四年豊臣秀頼は其の臣片桐東市正且元を奉行として社殿を造営し、神光寺は祀官を扶けて祭祀を動米つたが、明治維新後神仏分離に依り寺は廢絶し、社は同五年郷社に列し、同四十年一月神誕幣帛料供進社に指定された。境内は二、二六〇坪を有し、本殿は石磁上にあり桁行四間、梁間二間半、椽皮葺で三方に高欄を附し、丹碧を彩して頗る古雅なり、即ち前記片桐且元の奉行となって造営したものである。社殿の傍に三社神社があり、一に南殿と呼び中央に神功皇后を祀つて王大神、左に武内宿禰を祀つて若宮、右に天湯河棚命を祀つて今宮と称す。外に山神社、門前社、殿島神社等の末社がある。石磁前にある石燈籠は、片桐且元の奉納したものである。祭祀は往時より木村（今は田島と改む）、山本両氏の掌る所で両氏共に鳥取氏の裔である。

# いなりじんじゃ 稲荷神社 (通称 田山稲荷)

## 御祭神

保食神  
菅原道真  
高麗神

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛

## 例祭日

旧暦二月初午



鎮座地 阪南市箱作二五一  
電話 〇七二一四七六一一三七  
H P

御朱印なし

## 由緒

当社は田山稲荷を以て称せられる。寛保年中宇山田の姥ヶ谷は森林屋尚暗く狐狸多く棲居して、婦女子などは日中でないとい畑に出ることができなかった。耕作は甚だ不便なところで、所有者古田外三郎これを苦悩している折柄、ある夜の夢告に依って、山城国伏見稲荷社の分霊を勧請したものであるという。爾来世人の信仰厚く、信徒は本州の外摂津、河内、紀伊、淡路に亘り、土地はそのため発展した。しかし其の地は狭隘で参拝者に不便なので、明治二十六年六月一日同家の所有である当所に遷座し、同四十年十一月七日南近義村大字王子の村社菅原神社を合祀して村社に列し、同四十三年三月神饌幣帛料供進社に指定され、同四十四年四月二十一日大字山中の無格社貴船神社を合祀した。境内は一九一坪を有し、本殿、幣殿、拝殿、社務所を存し、末社に巖島神社がある。

# 尾崎神社

おぎきじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
豊受大神  
事代主命  
狭依姫命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
除災招福

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 阪南市尾崎二丁八一三  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社はもと八坂神社と称し、俗に浜の宮と云う。由緒は詳らかでない。明治五年村社に列し、同四十二年一月二十日字机の町の村社稻荷神社、字戎の同事代主神社、字北浜の同巖島神社、字海老野の無格社西浜神社を合祀し、同年五月十日今の社名に改められた。

# かじとりじんじゃ 揖取神社

## 御祭神

天御中主命  
八重事主命  
大國主命  
玉依姫命  
高津姫命  
外二柱

## 御神徳

五穀豊穰  
厄除開運

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 大阪府阪南市鳥取七〇六  
電話  
H  
P

御朱印なし

## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。明治五年村社に列し、大正四年八月十三日字戎の村社香脱神社、字平谷の同愛宕神社、字山の谷の同山谷神社、字内畑の無格社蛭子神社を合祀した。境内は五九坪を有し、本殿、拝殿がある。

# 加茂神社

かもじんじや

## 御祭神

玉依姫命  
高龔神

## 御神徳

五穀豊穡  
安産守護

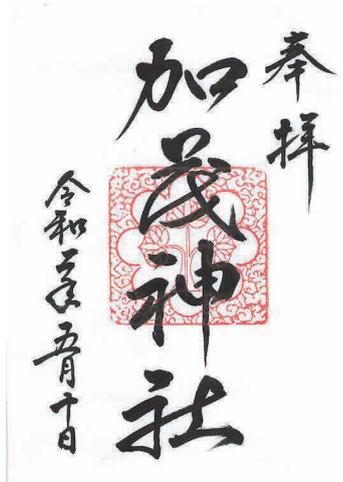
## 例祭日

十月十一日



神社のおすすめ

鎮座地 阪南市箱作一六五五  
電話 〇七二一四七六一一三五  
HP



## 由緒

当社の社記によれば、御祭神の玉依姫命を勧請したのは弘仁四年とあるが、高龔神の勧請年月は不詳である。高龔神は玉依姫命の勧請以前における主神で、同神の社に玉依姫命を合祀したものではないかと伝えられる。

山城国賀茂神社の造営に際し、玉依姫命のご神体を奉安した御霊箱を新たに造り替えたので、その旧箱を賀茂川に流したところ、淀川を経て難波の浦に出、波に浮かんで本地の海岸に漂着した。里人が箱を開いて見ると賀茂神社のご神体が存していたので、之を奉じて加茂神社と崇敬した。この時より本地を箱着里（箱作）と云う。

社殿は嵯峨天皇の弘仁四年に村民協力して平地を繕い良材を集めて造営し、拝殿、廻廊その他付属建物、摂社、末社、神門等の普請が成就したと云う。

その後の沿革は詳らかでないが、郷党中最も旧家に成長した年長者を選んで禰宜とし、禰宜となった者は在任中は殊更不浄に接せず、祭典には素袍烏帽子を着用して神事を勧め、明治の神職の設置があるまで続いた。

本殿は昭和四十五年二月大阪府文化財保護条例による建造物の第一号の指定を受けた。

# 指出森神社

さしでもりじんじゃ

## 御祭神

応神天皇  
國常立命

## 御神徳

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 大阪府阪南市貝掛一四六二  
電話 〇七二一四八三一五〇四一  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は波太神社に奉祀されている八幡社の旧地である。

神功皇后が新羅を征して凱旋し給いしとき、務古の水門より紀の国に至ろうとして、御船を鳥取の玉津浦につながられ、武内宿禰は皇子（品陀別命）を懐にして海辺を逍遙された縁により後にその地に品陀別命（応神天皇）を祀って八幡宮と称したのが当社である。

南北朝のときに鳥取氏が南朝に加わったため波太神社と共に天投年中劫火に罹って焦土と化した。郷の者宿三六人が力をあわせ私財をなげうって、南山の下に波太神社の社殿を造営し、八幡宮の祭神をその相殿に奉祀し、その旧地に小祠を建てて応神天皇を祀ったのが当社である。もと貝掛神社と称し、明治五年村社に列せられ、同四十年十一月十一日に今の社名に改め同四十三年八月二十五日大字舞字湯の谷の村社谷神社（国常立命）を合祀した。

すがはらじんじゃ  
**菅原神社**  
(通称 天神さん)

**御祭神**

菅原道真  
素盞鳴命

**御神徳**

五穀豊穰  
学業成就

**例祭日**

十月十一日



鎮座地 阪南市箱作一六九  
電話 〇七二一四七四一五五四六  
H P



**神社のおすすめ**



**由緒**

当社の創建年代は詳らかでないが、本殿西側の奉献燈籠に延文四年（一三五九年）の年号が刻まれているので、この年代に創建されたものと推定される。明治五年村社に列しられ神饌幣帛料供進社に指定される。境内社に神明神社、熊野神社、巖島神社、池島神社、住吉神社、飯峯神社等がある。境内は一二九七坪を有す。

# 鳥取神社

とっとりじんじゃ

## 御祭神

菅原道真  
磐長姫命  
素盞鳴命  
天忍穗耳命  
後白河天皇  
外五柱

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
厄除開運

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 大阪府阪南市石田一六四  
電話  
H P

奉拝

令和二年 八月三日  
鳥取神社

## 神社のおすすめ

毎年一月九日十日十一日戎祭（昭和五十年より再興）  
二月三日節分祭（平成十九年より斎行）

## 由緒

当社は明治四十一年三月二十六日字十垣外の村社菅原神社、字庵の後の同神明神社、字神谷の同牛神社、大字山中字向井田の同山中神社、同大字々王子原の同馬目王子神社、同大字々八王子山の無格社八王子天神社、大字自然田字玉田の村社玉田神社、同大字々平見の無格社牛神社、大字鳥取中字西原の村社乳守神社、大字下出字反甫の同八坂神社、大字黒田字神明の同神明神社、同大字々カイトの無格社稲荷神社、大字桑畑字奥宮の村社波多神社を合祀し、同四十二年五月十日創立の許可があつて一社を創建したのが即ち当社である。同月二十八日更に大字鳥取中字平野山の村社八幡神社を合祀した。

# きたのじんじゃ 北野神社

## 御祭神

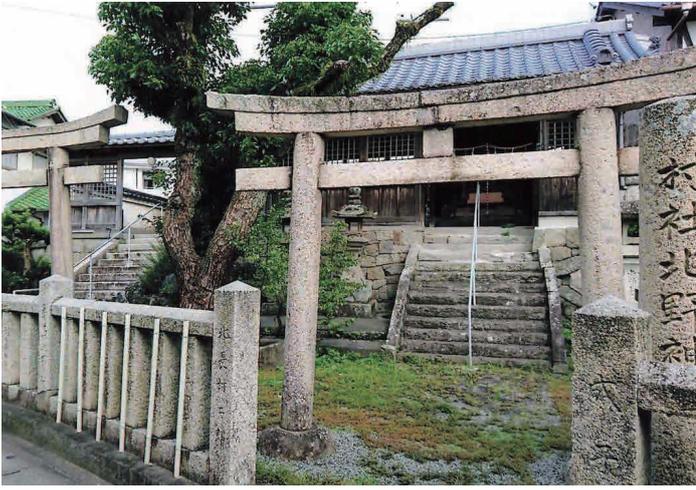
菅原道真公  
事代主命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
学業成就

## 例祭日

十月十一日



鎮座地 阪南市新町二五〇  
電話  
H P

奉拝

令和二年八月三日  
北野神社  
和泉國日根郡

## 由緒

当社の創建の年月は詳らかでないが、書上帳控に見えないところから元禄以後の勧請であろう。明治五年村社に列し、大正四年十二月七日字中岸の村社宇美佐知神社を合祀する。境内は五五坪を有し、本殿、拝殿がある。末社に稻荷神社がある。

# 泉南市

▶ 大阪府にもどる



# 男おの神じん社じゃ

(通称 おたけびの宮)

## 御祭神

彦五瀬命  
神日本磐余彦命

## 御神徳

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉南市男里三一六六一  
電話 〇七二一四八三一三六六  
H P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社は延喜式内社で、本殿には彦五瀬命、神日本磐余彦命、相殿に天兒屋根命、熊野速玉神を祀る。境内一五〇〇平方米、老樹鬱蒼として幽邃の神域をなしている。その北方一キロの処に摂社浜宮がある。本社元宮で境内九、〇〇〇平方米、聖蹟雄水門は即ち此地である。神武天皇御東征の砌皇軍孔舎衛坂で長髓彦と御激戦の時皇兄彦五瀬命が賊の流矢に中つて瘡を負はせられ「吾は日神の御子として日に向ひて戦ふこと良はず、故れ財奴が痛手をなも負ひつる今よりはも行き廻りて日を背負ひてこそ撃ちてめ」と仰せられた。

よつて皇軍は血沼の海即ち今の大阪湾を南進し紀伊に向はせられ、紀元前三年五月この地に着き給うたが、彦五瀬命の御瘡いよいよ重く、お悩みの中にも劍の柄を堅く握られ「概哉、大丈夫にして被傷於慮手、報いずして死なむや」と雄叫び給うた。よつてこの地を雄水門と芸う。命はやがて竈山に神去り給うたが、神武天皇の天業恢弘を輔翼し不滅の御勲功をたてられた。雄水門、既ち今の浜宮の地に、命と神武天皇の御神霊を奉斎したのが当社の御創立で、社伝によれば貞観元年三月今の地に御遷座し奉つたという。

毎年十月十一日の例祭には本社より聖蹟雄水門の地神輿渡御の儀が行われる。昭和七年十一月、畏き辺りより幣帛料を下賜せられた。元の府社である。

# 茅渟神社

ちぬじんじや

## 御祭神

正哉吾勝々速日天之忍穗耳命  
天之菩卑命  
天津日子根命  
活津日子根命  
外四柱

## 御神徳

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉南市町梅井五十一一十九  
電話 〇七二一四八三一五〇四一  
HP



神社のおすすめ



## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。明治五年村社に列し、同四十年一月神饌幣帛料供進社に指定され、同四十二年二月十二日字戒の村社山之井神社、字下の御前の同市杵島神社を合祀した。  
境内は二二八坪を有し本殿、拝殿、神具庫がある。

# いちおかじんじや 一岡神社

(通称 祇園さん)

## 御祭神

建速須佐男命  
稲田姫  
八王子命

## 御神徳

## 例祭日

八月二日



鎮座地 泉南市信達大苗代三七三  
電話 〇七二一四八四一〇六四四  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 神社のおすすめ

境内には昭和六十二年十二月二十五日に國の史跡指定を受けた、海会寺跡があり、奈良の法隆寺と同じ様式の建物があったことがわかっています。また、その時代の遺物の数々が、一岡神社前の古代史博物館に展示されています。

## 由緒

海会宮 信達莊大苗代村の東にあり、海会宮、今祇園と称す。此辺四ヶ村の生土神也。(和泉名所図会卷之四 第三三三頁)……と。  
一岡神社(一丘神社)は字一岡に鎮座し海会宮(海宮宮) 祇園さんとして古くから世人に親しまれてきました。建速須佐之男尊、稲田姫尊、八王子命を主祭神に奉祀し、「和泉国神名帳」に正一位の神階を賜ったことがみえ、神領実在に八十町歩の御寄進を受ける、日根郡内唯一の大社であった事は諸種の文獻に見られ明らかであります。

社伝によれば、二九代欽明天皇の御代(西暦五三九年) 悪疫流行し、勢、日増しに激しく、止まる事知らざるに及び、時の長人一丘神社に平癒祈願させた処、神徳現証、顕著でありましたので、その奇特を仰ぎ山城國に御分霊をもたらして帝都の疫病除け祈願の神と定められ、毎年大祭には当社の御神輿を迎えて祭典を執行する事となりました。即ち毎年六月七日、当社を御發輦し十三日に御着輦、十四日大祭を行い、三日間滞在され、その間帝都の氏子達は御神輿を奉じて各地を御巡行され、一丘神社御供人等は、その間山海の珍味を以て接遇を受け十八日に御發輦還幸の途につき、二十四日当社に還御し、二十五日御供人等供洗川で身を浄め二十八日還幸祭を執行して居りました。三三代推古天皇の御代(西暦五九二年)に厩戸皇子(聖德太子)はこの地に七堂伽藍を建立し、海会寺(海宮寺)と称して、当社も海会宮(海宮宮)と改め、鎮守神として御供田三反歩を供して崇敬されました。後四代聖武天皇の御代(西暦七二四年) 高僧行基は当社の南の方に一大溜池を築造し、海宮宮池と名付けて、この地の灌漑用に供し、同時に神社と寺の修繕を行っております。その壮大華麗であった七堂伽藍も一〇六代正親町天皇の御代(西暦一五七七年) 織田信長の根来寺焼打の途次海宮宮ともども兵火にかり焼失して終いましたが、今も尚方六尺(二辺一八〇cm程)の大礎石、径二尺五寸(直径七〇cm) 以上に及ぶ円柱の礎石が残され、その壮大であった事実が実証されて居ります。現在使われている手洗鉢はその一つであります。其の後一〇七代後陽成天皇の御代(西暦一五九六年) 文祿年間には氏子地を大苗代村、中小路村、北野村、御所村(現在の市場で後明治四十一年分館)と定め、村民、氏子、相寄り、相計り社殿を新築再建し、御神輿も新しく造られ神威益々光輝を放ち近郷近在はもとより遠くの人等にも厄除、疫病平癒、産業隆昌の神と崇敬され、益々隆盛を極めました。社殿再建後も御神輿を奉じて京都への渡御を続けておりましたが、或年難波の津に着かれた時、余りの暑さに御供人等は病に倒れましたので、やむなく人足を雇い京都に至るも、御神輿はそのまま留め帰りましたため、その後中止の止むなきに到り、その道中の御旅所は祇園社となり、八坂神社となつて祀られ現存する所と云われています。

其の後、毎年六月七日、御神輿御發輦の日を初祇園と云つて早朝祭典を行い、京都御安着の日の夕べを涼祭として、近郷近在はもとより遙かな遠方より其の数、万を超す参詣を今尚、見る事は昔を偲ぶに足る盛況であります。又最近年迄供洗川(櫻井川下流友田川)に還御の御神輿の渡御の御神事が続けられておりました事は御記憶に新しいところです。

境内神社として五社が祀られておりますが、特に厩戸皇子神社は聖德太子、即ち馬戸王子命(厩戸皇子)或いは馬留王子)が祀られてあります。第八二代天皇の後鳥羽院熊野御幸記建仁元年(西暦一一〇一年) 十月七日の条に曰く、騎馬競出で先ツ厩戸王子に参る。今筆王子と云ふ」と記されており、昔日より崇敬を集めておりました。社の西方、中小路二〇番地(大阪府史跡指定二一号)から明治の御代に境内に移されたものです。

又、本殿より東の方にちえの神が祀られております。三角形の石の真中に頭の入る凹みがあり、その穴に頭を入れ祈念すれば、無病息災にして知恵がつくと昔から云い伝えられ、大祭の日には列を為すほどに、その崇敬を集めております。又、菅原道真公は厩戸王子神社に配祀され、そのほか神霊あらたかな神々を合祀し、現在の社殿は何回か建替えられましたが今は北野区、中小路区、大苗代区の氏子によつて祀られて居ります。明治五年に村社に列し、境内三三三八坪、境内外六七五〇坪に及び明治四十一年一月に神饌幣帛料供進社の指定を受け、尚一五〇〇坪の御供田を有し境内の森は風致保安林として大阪府の指定を受けております。

# しんだちじんじゃ 信達神社

(通称 権現さん)

## 御祭神

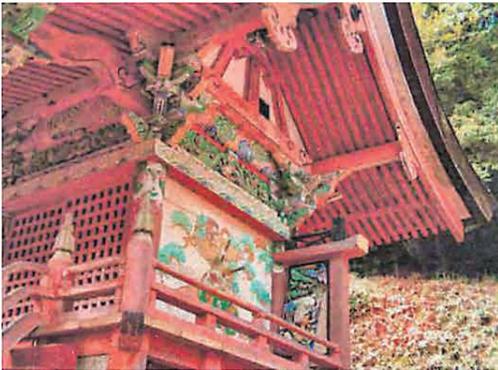
神倭磐毘古命  
神金山彦命  
伊邪那美命

## 御神徳

五穀豊穰  
病氣平癒  
除災招福

## 例祭日

十月第二日曜日



御本殿の極彩色

## 神社のおすすめ



鎮座地 泉南市信達金熊寺七九五  
電話 〇七二一四八三一三六三二  
HP

## 由緒

所伝によれば昔、泉南樽井の海岸に神武天皇（神倭磐毘古命）の尊像があり、里人等が神意と思ひ引き上げ、一度は樽井の地に祀ったが、更に神意を得て現在の地に社殿を建て遷し奉る。此の御鎮座地は神武天皇の東征に際し、男之水門より紀伊釜山に至らせ給う途中しばし休息給いたる尊き高地で、当神社にある神池は御兄五瀬命の矢傷を洗ったとされている。

後、天武天皇白鳳十年、役小角が金峯、熊野の両神を勧請し本殿に合祀したもので金熊大権現と呼ばれ、当時の信達庄十三ヶ村の産土神である。故に御祭神の「金」と「熊」をとり、此の里を金熊寺と称す。天正年間に織田信長、豊臣秀吉の根来征伐の兵火に炎上し、社殿が焼失したが御神体は幸いにして無事であった。

江戸初期正保四年、この地の豪族神主、矢野和泉守家次が東西に奔走し、桁行五間梁行二間の社殿（五間社流造）を建立した。

矢野神主に神教あり「此の地に梅木を植えなば神領益々隆昌ならん」。矢野一族相議して梅木を植林す。此れが現在の金熊寺梅林である。

# 種河神社

たねかわじんじや

## 御祭神

素盞鳴命  
丹生都比売神  
靈神

## 御神徳

## 例祭日

十月十日



神社のおすすめ



種河神

霊山白山神社

令和三年三月三日



鎮座地 泉南市新家一〇七八  
電話 〇七二一四八二一四三五  
HP

## 由緒

天文十四年春、当地に疱瘡が流行し、病勢はなかなか止まらなかったが、当社の祈禱した護札の効力があつたため、衆庶の崇敬は益々厚かつた。

天正年間の騒乱の兵火のため、社房を焼失した。その後、当社所在地の三谷之荘内に種々の争論が起り、永い間解けなかつたが、荘内争論の落ち着いたのを記念して、松樹三本の幹を結び合せて植え付けたところ、生育繁茂して、幹は結合して一幹となり、末は三本に分れて生長した。新家の三本松と呼ばれて近郷の里人に親しまれている。現在も勢い天をつくばかりである。

合祀社に勝手神社、八幡神社、水木神社、八坂神社、白山神社がある。白山神社は境外社で元の所在地笠山は、笠を伏せた形をしていて、近海を通る船の目標であつたと伝えられている。

# りげじんじや 里外神社

(通称 岡田の戎さん)

## 御祭神

素盞鳴命  
大年命  
蛭子命

## 御神徳

家内安全  
商売繁盛  
五穀豊穰

## 例祭日

十月十日



王餘魚淵碑（当神社、境内地内）

## 神社のおすすめ



鎮座地 泉南市岡田三一二五-1  
電話 〇七二一四八三一三三八四  
HP

## 由緒

当社は往古の社名を呉服神社（呉服大明神）と称し、仁徳天皇の御代に、当村の東南に老松古杉の鬱蒼とした森があり、ここに社殿を創建して鎮祭した。人皇十一代垂仁天皇の三十九年、五十瓊敷命を菟砥河上に置いて、倭文部を司どられた（倭文部は機織工であり、菟砥は泉州信達の地である）。五十瓊敷命の墓は同地に在り、これは泉州機織の根元で、当社は倭衣織守護の神として尊崇された。

中古に至って、当村の西方約八丁の所に一本の老松があり、その根元より毎夜靈光を発し、しかもその光は東方に向い、当社の境内に飛んで行くのを見て、村人はこれを怪み、この古松の根元を掘りおこすと、一つの靈劔が出てきた。村人はその靈劔が必ず当社に深い由縁があるものとして尊信して、これを当社に奉献し、御神体として素盞鳴命を祭神として、社名も里外神社と改めた。（靈劔を発見した古松は、今は落雷により枯れ果てて跡かたもない）伝説には、その靈劔は垂仁天皇の御代に作られたものと云い伝えている。

建仁元年十月後鳥院は、紀州熊野に行幸のさい、信達荘にある厩戸の御所に御止宿された時、岡田王余魚の有名人をお聞きになり、当社に御成遊になったので、村人は無上の光栄として悦び、当社境内の王余魚淵に飼育してあるのを捕えて、親しく献上したことが云い伝えられている。

### 通称「岡田の戎さん」について

合祀中の、大浦神社は、元和元年榎井川の戦に淡輪六郎出征の途、当地、吉左衛門の宅に一泊し、予め戦の不利に終るべきを察し、其の守護神として膚を離さざりし蛭子神を預け置きしに、果して戦死を遂げしかば、社殿を建て、其の尊像を祀りしものなりという。蛭子命は商業鎮護交通航海の守護神あり、岡田の戎さんとして、近郷に古来から深い信仰がある。

いなりじんじゃ  
**稲荷神社**  
 (通称 市場稲荷神社)

**御祭神**

豊宇気毘賣大神  
 (豊受姫大神)

**御神徳**

家内安全  
 商売繁盛  
 五穀豊穰

**例祭日**

十月十日



枝垂れ桜と大鳥居

**神社のおすすめ**

境内の枝垂れ桜は満開時の存在感は中々のもの。毎年多くの参拝者がカメラを手に訪れている。



鎮座地 泉南市信達市場一四七一  
 電話 〇七二一四八二一二七八一  
 H P

**由緒**

当社は天仁元年の勧請であるが、中世の沿革は明白でない。明治五年村社に列し、同四十三年九月十二日村社牛神社、宇赤井の同梅宮神社を合祀し、大正六年九月神饌幣帛料供進社に指定された。合祀の梅宮神社は一に赤井神社と称し其の旧地は仏性寺という七堂伽藍の完備した巨刹のあった所で、大門という字地は同寺大門のあった所と伝え、子安地藏尊があつたが、市場の真如寺に移され今はない。境内は九七四坪ある。

# 鹿島神社

かしまじんじや

御祭神

稻倉魂命

御神徳

例祭日

十月十日



鎮座地 泉南市鳴滝二丁目一  
電話 〇七二一四八三二五〇四一

H  
P

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

## 由緒

当社はもと近義村大字脇浜にあつて、明治五年村社に列したが、同四十年九月十二日同大字の村社高竈神社に合祀せられた。同四十一年五月十九日当所に転座して無格の独立社となる。由緒は詳らかでない。境内は二二三坪を有し、本殿、拝殿、神饌所、社務所がある。

# 泉南郡 熊取町

▶ 大阪府にもどる



# おおもりじんじゃ 大森神社

## 御祭神

菅原道真公  
事代主命  
外五十余柱

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
学業成就

## 例祭日

体育の日の前日



右松良 大江山の鬼退治 坂田金時

大宮地区 地車 彫り物

## 神社のおすすめ



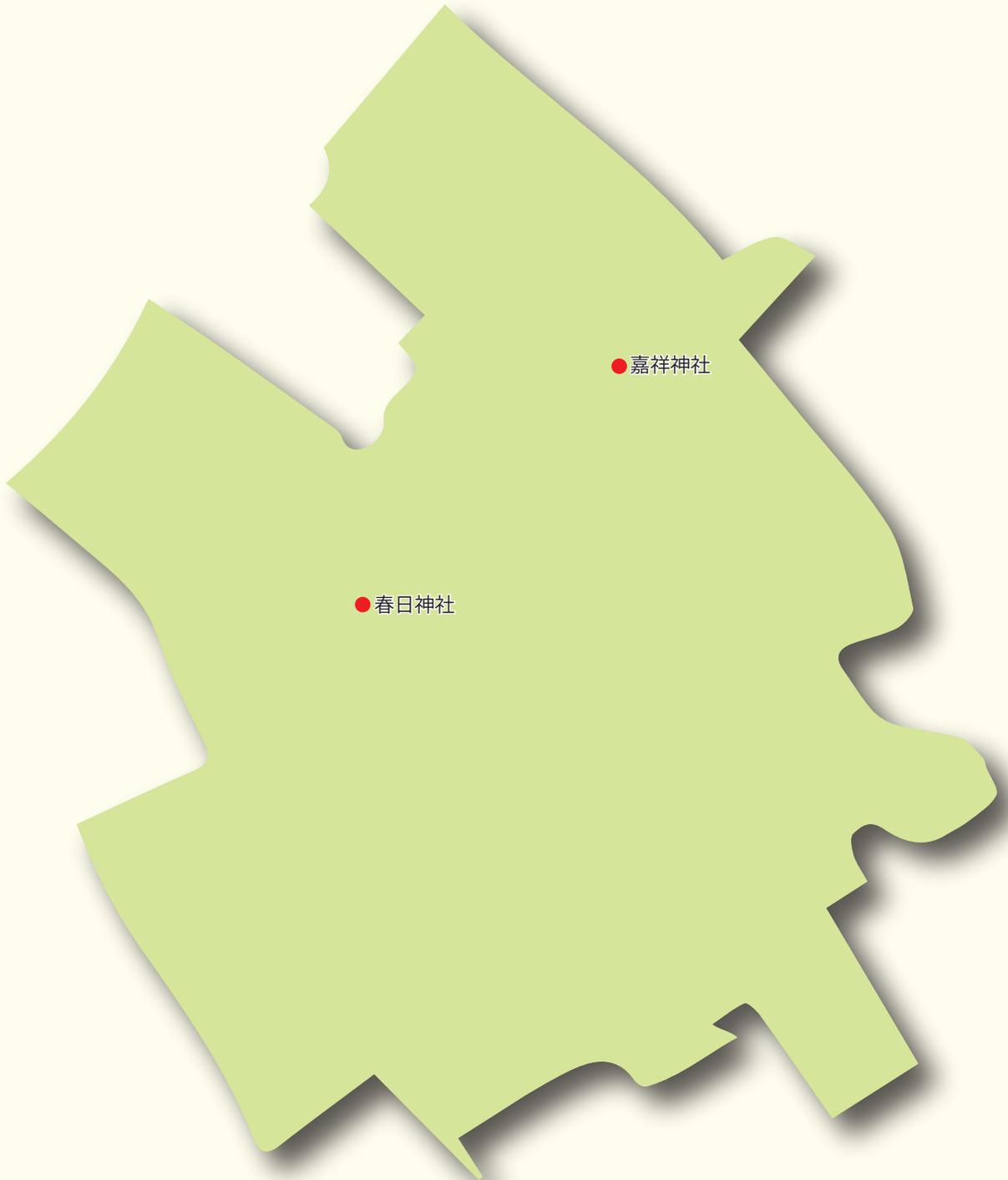
鎮座地 大阪府泉南郡熊取町大宮二一―二一八  
電話 〇七二―四五二―〇九六九  
HP

## 由緒

当社は、事代主命・菅原道真公の外五十余柱をお祀りし、創建の年代は、詳らかではありません。和泉国神名帳の日根郡に記載される「従五位上大社」が当社ではないかといわれています。天正十年（一五八二）根来右京之進藤原盛繁の再建と伝えられています。大字野田字川向イの野田神社、字成合の雨山神社と共に熊取の三社と呼ばれ、天の際には、三社に降雨の祈願をするのを例としました。当社は、「ほわ明神」とも呼ばれ、大祭は「穂輪（波）祭」と俗称され、神輿かつぎは、大声で「ほーわほーわ」と囃しながら、紺屋山を通り、泉佐野の湊まで渡御をしたそうです。「穂輪」とは、「穂波」が訛つたもので、波立つほどに稲が豊かに育つてほしいという願いがこめられた言葉です。神輿の渡御は、大正の末頃中止されました。この神輿は、平成十三年修復、再現されました。正保年間（江戸初期）、熊取の惣社となり、明治六年郷社に列し、明治四十年神饌幣帛料供進社に指定され、神社合併の議あるに及び、村内多数の神社を悉く当社に合祀しました。即ち、字高田の菅原神社、牛神社、金堂神社、牛神社、大将軍神社、大字久保の菅原神社、牛神社、字和田の八坂神社、牛神社、琴平神社、熊野神社、大将軍神社、字大浦の牛神社、八幡神社、福神社、字宮村の福神社、熊野神社、大字小谷字奥出の菅原神社、菅原神社、字神子岡の牛神社、大字小垣内字北山の八坂神社、字山田の春日神社、牛神社、字又谷の幸福神社、大字大久保字西宮の事代主神社、字傍示北川の北川神社、字福神の福神社、字住吉の住吉神社、字坂上の坂上神社、字牛神の牛神社、大字野田字成合の雨山神社、塞之神社、福之神社、菅原神社、成合神社、字谿の住吉神社、字川向イの野田神社、字山の岡の菅原神社、字朝代の東宮神社、塞神社、清原神社、藤原神社、菅原神社、荒神社、福之神社、菅原神社、字大門の威徳神社、字野田の琴平神社、大字五門字若宮の若宮神社、字春日の春日神社、字牛神の牛神社、字愛宕の愛宕神社、大字紺屋字辨財天の菅原神社、字福神の菅原神社、大字七山字坂口の坂口神社です。この合祀のあった日を記念して、例祭日を、六月十二日より九月二十八日にあらため、その後、体育の日となり、体育の日の前日となりました。十月の秋祭りには、町内の十一地区の地車（だんじり）が宮入を宵宮に行い、勇壮に町内を曳行します。宮入り・熊取駅前パレードは、多くの見物客で賑わいます。

# 泉南郡 田尻町

▶ 大阪府にもどる



# かすがじんじや 春日神社

## 御祭神

武甕槌命  
齋王神  
天兒屋根命  
大日靈貴命

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉南郡田尻町吉見九五二  
電話 〇七二一四六五一〇四六五  
H P



## 由緒

当社は、萬歳記（本地の旧家所蔵）に依れば、宝亀年間（奈良時代西暦七七〇〜七八一年）、吉見小佐治が来住して、此の地を開発して一村を為した時、其の祖春日大明神を勧請したものであるという。

明治五年、村社に列し、同四十年十一月十一日、字稲荷の村社稲荷神社（保食神）・字南出の同殿島神社（市杵島姫命）・字毘沙門の無格社多聞天神社（大山祇命）・字東出の同日向神社（太田命）・字北濱出の同事代主神社（八重事代主命）・字大將軍山の同大將軍神社（磐長姫命）及び大字嘉祥寺字村端の同八坂神社（素戔鳴命）を合祀し、同四十二年十月、神饌幣帛料供進社に指定される。往時には北方田尻川の南岸より、旧加太街道の東に沿って南に亘れる一万七千余坪の境内であった。元禄年間（西暦一六八八年〜一七〇四年）に維持が困難になり、領主に嘆願して岡部数馬に再建された時、境内除地の証として石に文を刻して埋め置いたのを、近世発掘したところ、左記の文が記されてあった。其の境内が如何に広がったかを知ることができる。

明治三年四月十四日、領主遠藤但馬守が江州三上より移って陣屋を構えるに及び、境内地の六千坪内外を以て同敷地に充て、陣屋の廃せられるに及び払い下げられて民有地となり、その他の地所も亦漸次民有地に転じたので、境内は減じて今の如く一、三四〇坪となったが、一旦民有地となった陣屋敷地の内約三、六〇〇坪は寄付されて境外社地に復したので、境内外通じて約五千坪の社地となる。末社に若宮神社あり。

（證石文）

泉州日根郡吉見村御境内坪数老萬七千七拾参坪春日大明神御領再改惣廻傍介石数二十九本  
元禄四辛未閏九月十三日彌太郎代伊藤三良右衛門

# 嘉祥神社

かしょうじんじや

## 御祭神

保食神  
海津見大神  
事代主大神  
猿田彦命

## 御神徳

家内安全  
交通安全  
厄除開運

## 例祭日

十月十日



鎮座地 泉南郡田尻町嘉祥寺七六一  
電話 〇七二一四六五十四五一八  
HP



## 由緒

当社の由緒は詳らかでない。嘉祥三年（西暦八五〇年）二月に山城國伏見の稻荷神社の御分霊を奉斎し土地の守護神と仰ぎしものなりと伝わる。元和三年（西暦一六一七年）十二月吉日に寄進された破損した石灯籠あり。

ご本殿一棟が桃山時代の建築美を今に伝える建物として大阪府より有形文化財に指定されている。元禄四年（西暦一六九一年）の寺社境内帳には次のように書いてあった。嘉祥寺村一稻荷大明神社、神主宮年寄十二人の内二人ずつ一代廻り持勧請年号不知社地二百八十七坪、高六斗四升、井垣、拝殿、花表。

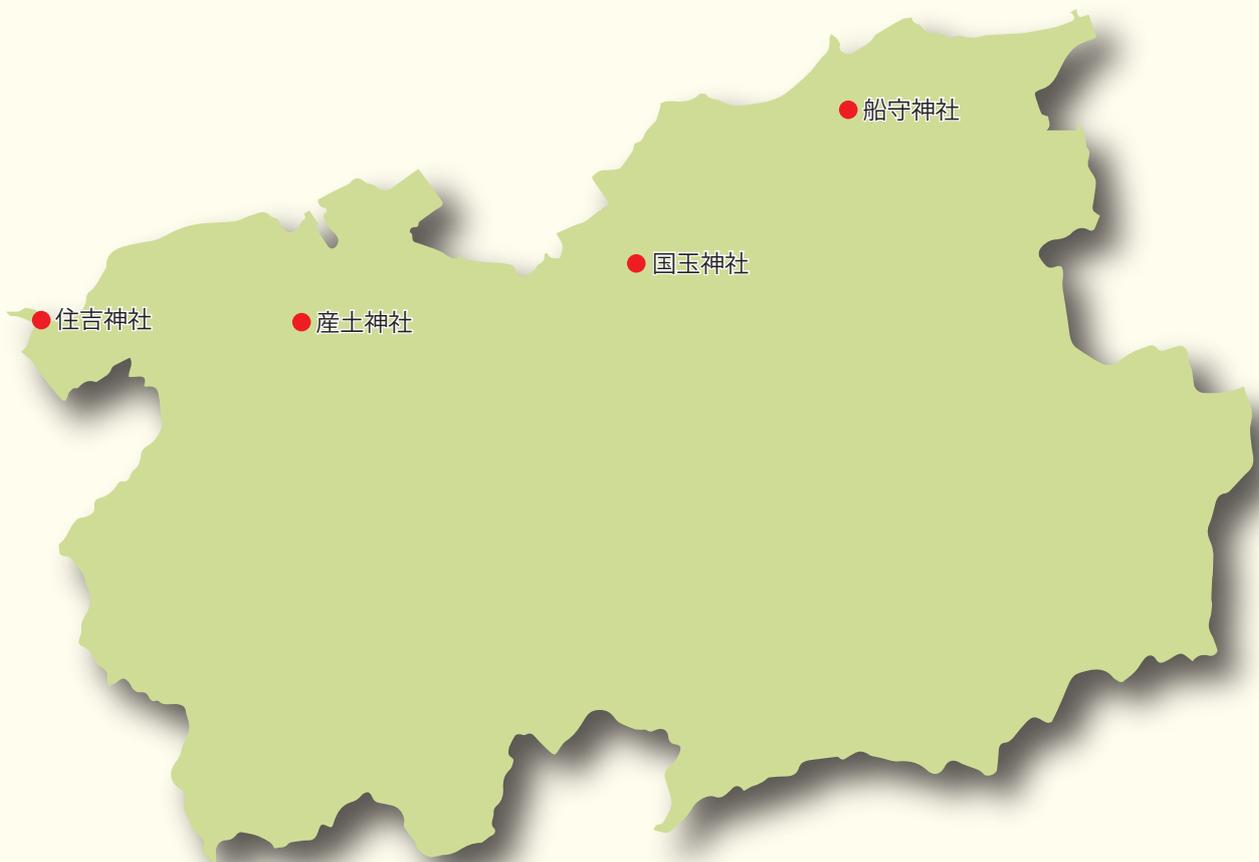
寛保二年（西暦一七四二年）十一月十七日に領主岡部氏より御神宝を奉納される。明和六年（西暦一七六九年）九月六日に領主岡部美濃守より御神宝の奉納あり。

明治五年、村社に列し、明治四十一年八月三日、字西濱の村社海上神社（祭神海津見大神、事代主大神）・字北出の村社海南神社（祭神事代主命）・字岡ノ下の無格社牛神社（祭神猿田彦命）を合祀し、明治四十二年十月、神饌幣帛料供進社に指定される。

境内は三百坪を有し、末社に神明神社（祭神天照皇大神）・住吉神社（祭神志那都比古神、志那都比賣神）が有る。

# 泉南郡 岬町

▶ 大阪府にもどる



# うぶすなじんじゃ 産土神社

(通称 産土さん)

## 御祭神

比売大神  
蔵王権現  
熊野権現

〔衣通姫〕  
〔金山毘古命〕  
〔伊邪那岐命〕

## 御神徳

家内安全  
海上安全

## 例祭日

五月五日



## 神社のおすすめ



鎮座地 泉南郡岬町谷川一四六二  
電話 〇七二一四九五二二九六  
HP

## 由緒

当社は初め、比売大神宮（衣通姫命）と申し上げ、その創建年代は不詳であるが、古くより宮山・青垣山と呼ばれ、神体山として上古より多奈川の信仰の中心対象であったと推定される。

仁寿二年（八五二年・平安時代初期）文徳天皇の勅願により、慈覚大師（円仁）が当社に隣接する天台宗興善寺を建立し、開基のとき当社を鎮守社とした。

熊野権現は、正和元年卯月（一三二二年旧暦二月十日）谷川庄西の浜に漂着されたので、興善寺の比売大神宮の当社に合祀し、谷川五ヶ庄村の産土神と拡大し、その時に西村の守護神吉野蔵王権現も合祀し、両社の大権現と尊崇し、正和三年（一三二四年）に両社の相殿を造営した。

天正八年（一五八〇年正月三日）織田氏の兵火の為、興善寺と共に当社は全焼したが、元禄元年（一六八八年）より三カ年間に興善寺本堂が再建され、当社もこの頃再建された。明治時代に入り、神仏分離令により興善寺と産土神社とに別れたが、それ以前は、興善寺の勢力が強大で、神宮寺としての時代が長く続いた。

当社は明治五年に村社に列せられ、明治十二年神饌幣帛料供進社に指定された。

明治四十一年一月九日の合祀令により、谷川村、字々の小社を産土神社外陣へ奉齋された。境内社の子守社の小祠の両側の瓦製の狛犬は明治三十三年に黒井氏が奉納し、全国でも瓦製の狛犬は珍しく貴重なものである。

## 交通

電車・バス

南海みさき公園又は多奈川駅より「極楽橋」下車 徒歩5分

国道26号線を和歌山方面へ南下

深日中央交差点（ロータリー）右折府道

加太線を加太・小島方面へ極楽橋左折

# くにたまじんじゃ 国玉神社

## 御祭神

大国魂大神  
賀茂別雷大神  
事代主大神

## 御神徳

商売繁盛  
五穀豊穰  
大漁満足

## 例祭日

十月三日



鎮座地 泉南郡岬町深日九二二  
電話 〇七二一四九二一三三七七  
HP



## 神社のおすすめ



心願成就 絵馬

## 由緒

当社の創建年月は詳らかではないが、延喜式内の古社で、国内神名帳に「正五位下国玉神社」と記されている。昔は九頭大明神と称し、境内は三、〇四五坪あり、千歳川が丘麓をめぐり、樹木はうつ査として、近くに深日の浦大阪湾を俯瞰し、遠くは淡路島及び撰淡連峯を煙霞の間に望むことが出来た。

明治六年郷社に列し、同四十一年一月神饌幣帛料供進社に指定された。

明治四十五年五月字浜山の村社加茂神社と共に、末社の八幡神社、若宮八幡戎神社の三社を合祀し、元の当社の本殿を相殿として之にあてて現本殿は元の加茂神社本殿を遷して之にあてたもので、梁行四間、桁行三間の銅葺流れ造りである。

「大国玉神」の額は現在は落頭習して、識別しがたいが、深日村にある古事直解と云う旧記によれば、門巖の書である。

深日庄は、堀河天皇寛治四年より、後柏原天皇大永年間まで、京都加茂神社領であったため浜山の加茂神社の隆昌に反し次第に衰微し、徳川時代になっても立派な本殿も出せず、山林を資に供して、明中十五軒でこれを保存して祭祀していた。

称徳天皇の紀州行幸の際の行宮を定められた処である。

続日本紀に「天平神護元年九月閏十月二十六日唐戊遣行宮於大和河内和泉等国以欲幸紀伊甲申和泉国日根郡深日行宮千時西方暗暝異常風雨紀伊国守小野朝臣小贄従此而還詔賜絶足綿二百屯」と記されている。

撰社に祓戸神社、戎神社があり、末社に大神社、出雲神社、住吉神社、大山祇神社、大鳥神社の五社がある。

末社の五神社は何れも元は一尺四方の板造りの小社で、風雨のため破損荒廃し、拝殿の奥蔭のため、常に祭祀参拝に不自由であるため、昭和四十年七月十日境内東南側に、銅板葺流れ造りの社殿に遷座祭祀する。

# 船守神社

ふなもりじんじや

## 御祭神

紀朝臣船守公  
五十瓊敷入彦命  
紀小弓宿禰公

## 御神徳

## 例祭日

十月十五日



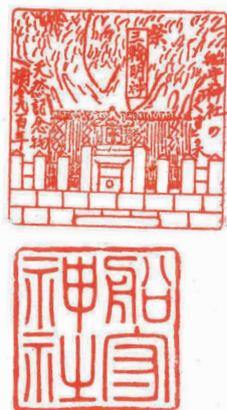
重要文化財 船守神社

泉南郡岬町



## 神社のおすすめ

鎮座地 泉南郡岬町淡輪四四四二  
電話 〇七二一四九四一三三三三  
HP



## 由緒

当社は九一一年醍醐天皇の詔により創建されたと伝えられ、明治五年村社に列し、同四十年一月村社中でも上位の神饌幣帛料供進社に指定せられました。現在の本殿は一六〇九豊臣秀頼の命により片桐且元の再建とされております。例祭は従来陰暦九月九日行われ、神輿が黒崎浜のお旅所に渡御しましたが、暦の改により、今は十月十五日に改められました。

氏は淡輪地区一円にして、古名を田身輪邑と云い紀小弓宿禰公の頃から一紀朝臣船守公の頃まで紀氏の領地であり三柱の御祭神の墳墓の地でもあります。

### 紀朝臣船守公

武内宿禰の子紀角宿禰十世の孫猿取の子といわれ、天平宝字八年（七六四・奈良時代）恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱に功あつて従七位下から従五位下に昇叙せられ、以後近衛少将で紀伊守や土佐守等を兼ね、累進して近衛大将、正三位、大納言にまで進んだが、延暦十一年（七九二）四月二日年六十二で薨じました。桓武天皇は非常に哀惜され、正二位、右大臣を追贈されましたが、お悲しみの余り三日間も政務をご覧にならなかつたと伝えられています。

### 五十瓊敷入彦命

第十一代垂仁天皇の第二皇子で四世紀頃のお方です。天皇が命とその弟の大足彦命に、それぞれ欲しいものは何かと問われると、命は弓矢を望み、大足彦命は皇位を望まれたので、望みの通りにされました。命は二十才位るとき河内の国に派遣されて高石地・茅亭池を造り、諸国に沢山の池や溝を造られました。又、四年後には茅亭の施砥川の川上宮（阪南市に荒砥川がり、上流の玉田山に命を祀る社がありました。）で剣一千口をり、大和の石上神宮に納めぬのち同宮の神宝を司られました。（日本書紀）

古事記の垂仁天皇の巻には、印色入日子命と書き、血沼池・狭山池・日下の高津池を造られたとあります。

### 紀小弓宿禰公

日本書紀によると、雄略天皇の九年三月勅により新羅征討の大將軍に任じられ善戦しましたが彼の地で病死しました。天皇は「大將軍紀小弓宿禰龍の如く握り、虎の如く視て旁く八維を眺、逆節をねほひ討ちて、四海を折衝く。然して則ち身万里に勞きて、命を三階に墜しぬ。宜しく哀務をいたして視喪者を充べし。」との武勇を称えられ大伴室屋に刺し、室屋は、土師連小鳥に命身輪邑（今の淡輪）に葬らせたとあります。又、この事から青龍権現と崇められております。

すみよしじんじゃ  
**住吉神社**  
(通称 小島の住吉さん)

**御祭神**

表筒男命  
中筒男命  
底筒男命  
息長帯姫命

**御神徳**

家内安全  
海上安全

**例祭日**

六月三十日



鎮座地 泉南郡岬町多奈川小島七四〇  
電話 〇七二一四九五一五二九六  
HP

御朱印は直接神社へ  
お問い合わせください

**神社のおすすめ**



**由緒**

当社の創建年代は不詳であるが、海上を守護の住吉四柱神を古くから奉祀している。当社は大阪府最南端に位置する神社で、和歌山県境まで約二〇〇米、和歌山市大川部落まで約八〇〇米の地にある。祭神が海路を守護の神であるため、船舶を用いて業を営む者の尊崇が篤く、当小島は往古より漁業を以って主たる生活をしている。明治五年村社に列し、同四十二年神饌幣帛料供進社に指定された。境内は八四六坪ある。境内社に住吉下之宮、御霊神社、事代主神社琴平神社、天神社、稻荷神社がある。天然記念物の神社境内うばめがし社叢は著名である。

# 大阪府神社名鑑

【編集者】 大阪府神道青年会創立七十周年実行委員会

【発行】 大阪府神道青年会

【発行日】 令和三年五月

本書の内容・写真等の無断転載・複製は  
著作権法上での例外を除き、禁じられています。

